



空三リイト 多に
年

一 雲月読山 中皮経本 中何せう
左 側 二 千 には 変 へ 中 へ ア メ リ カ
寺 土 彦 造 へ 内 住 居
裏
日 人 東 山 所 々 へ 山 内
謙 晃 寮 へ 下 へ 住 居 中

傷 水
口 中 所 へ 住

一八七〇年（明治三年）

十一月十四日 The Society of Brethren に加入する。〔明治六

年十月十六日の項参照〕（浦口文治「外より見たる新島先生」

『同志社時報』第一三二号・大正五年六月一日）

一八七五年（明治八年）

五月二日 聖餐式を挙行中に、新島の部屋に泥棒が入り、十ド

ル相当の品物を盗まれる。（J.H. DeForest's letter to Bre-

thren, May 2, 1875. アメリカン・ボード宣教師文書マイクロ・

フィルム Roll 3. 同志社大学所蔵）

一九〇九年（明治四十二年）

五月七日 新島襄の肖像除幕式がアーモスト大学講堂において

行なわれる。高平小五郎駐米日本大使が出席した。（『同志社

時報』第五十六号・明治四十二年六月二十五日）

馬

ハストン
牙石

白上
牙石

新島襄全集

8

年譜編

新島襄全集編集委員会 編

*The Complete Works
of
Joseph Hardy Neesima*



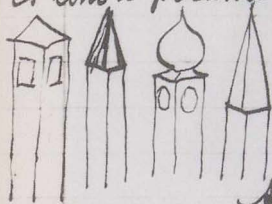
同朋舎



新島 襄(アンドーヴァー神学校時代・31歳頃)

Andermatt. in V. Valley of Gressen.

fr. Chiasso - Gersheim. What I noticed
some change in Church architecture was as
follows. in some old ch. & chapel's roof
is like a pyramid



fr. Chiasso - Biola
just the side of Bellinzona
a extns. Valley is very fine.
a train fr. Lucarno
meets w. ours at Bellinzona.
Before we reached

Biola our trains took

1. winding course 4 times to come up
- 1. higher levels. at Hotel Oberalp

I secured a room for L. 50 francs.

* took meals by la carte. - 2 was
very simple - 2 is far cleaner

1. Station Hotel. Well washed &
well swept. In afternoon

took a trip to Hospenthal 1 1/4 m.

fr. Andermatt. x

Gersheim
= Sards bridge.

Oberalp.

(W) Bagerberg.

Furca pass. & Hospenthal

Muthorn

Winterhorn

S Six Madam

Lugardio

(W) fiblia

S Santand pass.

(E) Basso di San Gethand

Monte Prosa.

Pizzo Centrale or

Tithorn.

(S) Schipsico.

Reuss flows down
along V. road.

1. Road is wide - 1. less ascending - 1. 1/2

zigzag on Hospenthal side. - I took a trip

w. a gentleman Mr. Max Kammerer.

1 1/2 m just S side of pass

I began - breathe hard. I could not go

V. - canals - communicate w. V. Lake
 of Maggiore, Ticino, Adda, Lake of Como
 Po. - V. Manufacturing centre 20 miles
 V. Political. - 2 ho 20000 20 - V.
 highest rank in fine Art since 1859.

Dr. Alex Thompson (37 yrs)
 missionary - V. Jews. - V. to agent
 friend of V. James. - He fully
 returns to V. Jews / returns. He takes
 2 fr. V. following script. texts.

Levitic 6 chap. - Levitic 22 Chap.
 Deut. 28. blessing
 Levitic 26 cursing.
 La. 6: 9 11. 12. Howling.
 V. land desolate
 22. 15. V. Wild ass etc.

Aug. 5th I left Mergo delle Gallie via Har-
 vil and after 5th am. - 5-54 for
 Chiasso. 3 fr. - R. 8 - 8. Reached Chiasso.
 I met Dr. Thompson V.
 I took V. 2 class ticket. & accomplish
 as far as Gethse. V. N. end of V. S.
 gothard Tunnel. (14.50 fr).
 We reached Anglo V. S. end of Tunnel.
 at 1-5 pm. It took us 22 minutes -
 30 str. V. Tunnel. 14.900 Kilometres.
 V. Town of Como is beautifully situated on
 lake. - I noticed number of chimneys V.
 V. beautiful villas scattered on V. green
 hill side. - Through a Tunnel we
 came Chiasso. V. for 2000. -
 2 belongs - Swiss. - I found V.
 officers in state every simple & easy -
 quite different fr. state. -
 at Gethse I took a coach fr.
 V. Hain Oberalp. - Road up in 2 -

松尾因幡系

松尾因幡系

松尾因幡系

松尾因幡系

松尾因幡系

松尾因幡系

松尾因幡系

松尾因幡系

松尾因幡系

松尾因幡系

松尾因幡系

松尾因幡系

松尾因幡系

松尾因幡系

松尾因幡系

松尾因幡系

松尾因幡系

松尾因幡系

松尾因幡系

松尾因幡系

松尾因幡系

松尾因幡系

松尾因幡系

松尾因幡系

松尾因幡系

松尾因幡系

松尾因幡系

新島襄全集 8 ■ 年譜編 ■ 凡例

1 年月日および曜日について

- a 慶応元年一月三十日（一八六五年二月二十五日）までは陰暦、それ以後は陽暦で記した。
- b 陽暦の記述中、必要に応じて（ ）内に陰暦を並記した。
- c 陰暦、陽暦の換算に関しては外務省『近代陰陽暦対照表』（一九七二）を参照した。
- d 新島在世中の七曜表については新島資料その他を参考にして編者が作成した。

2 出典について

- a 出典については巻末に一覧表を付した。

A 『新島襄全集』各巻目次 F 教会資料

B 新島先生遺品庫収蔵目録 G 学校史資料

C 新島襄伝記

H 地方史・公文書資料

D 同志社関係資料

I 新聞・雑誌

E 英文資料

J 一般刊行物

- b 各項の末尾に出典の略称を記した。略称は出典の符号・ページ数の順である。ただし継続刊行物の場合は、必要に応じて、巻数・号数を出典符号の次に記した。例えば（J3-12:45）は一般刊行物三十一号資料一二巻四五ページをさす。

- c 略称のうち全一、全二……全一〇は『新島襄全集』の各巻数を示す。（全1:234）とあるは全集第一巻二三四ページを示す。上・下は新島先生遺品庫収蔵目録の上巻・下巻を示し、数字はその番号を示す。（上456）は目録の上巻四五六号資料をさす。

3 記号について

a 「」で囲んだ語は編者による補語である。

b *は資料または編者による補足説明である。

4 外国語の表記について

外国の人名・地名等は現代のカタカナ表記と外国語を適宜、混用した。外国語を使用する際は英語または原綴とした。

新島襄全集 8 ■ 年譜編 ■ 目次

新島襄の生涯

新島襄の年譜

新島襄の年譜（続）

新島襄の年譜（続）

新島襄の年譜（続）

新島襄の年譜（続）

新島襄の年譜（続）

新島襄の年譜（続）

新島襄の年譜（続）

新島襄の年譜（続）

新島襄の年譜（続）

新島襄の年譜（続）

新島襄の年譜（続）

新島襄の年譜（続）

新島襄の年譜（続）

新島襄の年譜（続）

新島襄の年譜（続）

凡例	i
目次	v
年譜一覽表	ix

新島襄 年譜

第一章 誕生より国外脱出まで	一八四三—一八六四年	1
第二章 アメリカ留学と米欧教育視察	一八六五—一八七四年	31
第三章 同志社創立と教会の設立	一八七五—一八八三年	135
第四章 再び米欧諸国へ	一八八四—一八八五年	277
第五章 東華学校の設立と北海道旅行	一八八六—一八八七年	367
第六章 大学設立のために	一八八八—一八九〇年	421
〈巻末〉 新島襄在世中の七曜表		104
出典資料索引		6
新島家の人々		4

目次

新島襄の名前の変遷

2

慶応	2	丙寅	1866	24	12. 30 受洗
	3	丁卯	1867	25	9. Amherst
明治	1	戊辰	1868	26	(4. 家族、安中へ引揚げ)
	2	己巳	1869	27	
	3	庚午	1870	28	9. Andover
	4	辛未	1871	29	5. 日本政府による留学許可
	5	壬申	1872	30	3. 8 田中と会う 5. 11 渡欧 教育視察
	6	癸酉	1873	31	9. Andover 復学
	7	甲戌	1874	32	9. 24 按手礼 11. 26 横浜へ帰る
	8	乙亥	1875	33	1. 22→6. 末 大阪 7. 京都
	9	丙子	1876	34	1. 3 結婚
	10	丁丑	1877	35	
	11	戊寅	1878	36	
	12	己卯	1879	37	大分・宮崎旅行
	13	庚辰	1880	38	高梁、福岡・熊本旅行
	14	辛巳	1881	39	
	15	壬午	1882	40	吉野、宮津 7. 中仙道・会津若松
	16	癸未	1883	41	岐阜・関東・福井・岡山
	17	甲申	1884	42	4. 6 神戸出帆→欧米旅行
	18	乙酉	1885	43	12. 12 →横浜帰港
	19	丙戌	1886	44	仙台
	20	丁亥	1887	45	札幌
	21	戊子	1888	46	鎌倉・伊香保 12. 14 神戸和楽園
	22	己丑	1889	47	→3. 30 和楽園 10. 12 上京 12. 27 大磯
	23	庚寅	1890	48	1. 23 永眠

年譜一覽表

和 暦	干支	洋暦	年齢	適 要
天保14	癸卯	1843	1	1. 14 巳中刻出生
弘化 1	甲辰	1844	2	
2	乙巳	1845	3	
3	丙午	1846	4	
4	丁未	1847	5	
嘉永 1	戊申	1848	6	
2	己酉	1849	7	
3	庚戌	1850	8	
4	辛亥	1851	9	
5	壬子	1852	10	
6	癸丑	1853	11	
安政 1	甲寅	1854	12	
2	乙卯	1855	13	
3	丙辰	1856	14	蘭学はじめ
4	丁巳	1857	15	8. 田島、長崎へ
5	戊午	1858	16	
6	己未	1859	17	
万延 1	庚申	1860	18	軍艦操練所入学
文久 1	辛酉	1861	19	
2	壬戌	1862	20	操練所退学、甲賀塾へ、快風丸で玉島へ
3	癸亥	1863	21	
元治 1	甲子	1864	22	函館→中国・アメリカ
慶応 1	乙丑	1865	23	7. 20 Boston, 10. 30 Andover

第一章 誕生より国外脱出まで

一八四三～一八六四年

弘化二年（一八四五）三歳

十二月三日

山本八重（のち新島襄夫人）、会津藩士の家に生まれる。父・山本権八、母・さく、兄・覚馬。（D39）
* 八重夫人の出生日は戸籍謄本（昭和二十二年十一月一日除籍抹消）によれば弘化三年九月二十二日となっている、しかしながら八重夫人自身は弘化二年十一月三日を誕生日としてきたし、京都東山若王子山の同志社墓地にある墓碑もそうなっている。

この年、長姉・くわ、松平能登守家来・加賀野加賀右衛門に嫁す。（E1677）

この年、三姉・みよ、弟・七五三太を背負って転び、左脚を痛める。このため生涯、左脚不自由となる。（E1677, E1678）

弘化四年（一八四七）五歳

十一月十五日

袴着初（七五三祝）にぎき新島家の知人より祝い物到来する。（E1682）

十二月十四日

弟・雙六生まれる。（E1677）

弘化五年（一八四八）六歳

二月十四日

習字を始める。（E1677, E1711）

嘉永三年（一八五〇）八歳

十月 遊んでいて過って左のこめかみに怪我をする。（*全10*：26, *D6*：105）

* 額の怪我については時期、原因に諸説あり、決めがたい。

絵を学び始める。（*E1677*, *E1681*）

嘉永四年（一八五一）九歳

十二月十九日 祖母・ます死亡。七十歳。（*E1679*）

この頃、礼儀作法を学ぶ。（*全10*：27）

またこの年、蘭学者の田島順輔が安中藩に召し抱えられる。三人扶持銀三枚。（*H15*：624, 630）

嘉永五年（一八五二）十歳

四月二十九日 山田三川、安中藩に召し抱えられる。国詰め五十石。（*T3566*）

六月六日 雙六、習字を始める（六歳）。（*E1677*）

六月十五日 安中藩家老・尾崎直記、国詰めとなり江戸屋敷より安中へ移る。後任は横井保吉〔源右衛門〕。

(T3566)

十月六日

安中の尾崎直記に手紙を送る。(全3:3)

嘉永六年(一八五三)十一歳

一月

下総太田の安中藩陣屋で催された句会に祖父、父と共に出席、「平生の見るものにせん桜ばな」の句を詠んだといわれる。(C6:27)

* 安中藩は三万石、上州安中のはかに下総(匝瑳・海上・香取三郡内)に領地があった。

この年、馬術を始める。十四歳まで。(全10:31)

この年、次姉・まき、佐竹沓岐守家来・植村鏡之進に嫁す。(上1677)

六月三日

ペリー提督の率いるアメリカ艦隊、浦賀に来航。(197:2)

嘉永七年(安政元年) (一八五四) 十二歳

一月四日

長姉・くわ、夫の加賀野加賀右衛門に死別する。(上1677)

十二月二十五日

(陽暦) J・Mシアーズ Joshua Montgomery Sears 生れぬ。(D21:14)

安政二年（一八五五）十三歳

十月二日 安政大地震。(J97:6)

安政三年（一八五六）十四歳

一月 藩主・板倉勝明の命により田島順輔につき蘭学を始める。新島と共に菅沼総蔵〔錠次郎〕・岡村喜四

郎が学ぶ。(全3:5, 全10:31, GS:89)

四月 幕府、田島順輔を蕃書調所教授手伝に任命する。(G8:19)

八月 箱楯に諸術調所が設けられ、武田斐三郎が教授役に任命される。(J64:87)

この年、長姉・くわ、佐竹老岐守家来・木村三弥と再婚する。(E1677)

安政四年（一八五七）十五歳

二月二日 板倉勝明、中風症により倒れ、数日間人事不省となる。(D17:17)

四月十日 板倉勝明死去。弟・勝殷かつまさが藩主となる。(H1:211)

春、津田仙、手塚律蔵の蘭学塾に入門する。(J74:5)

六月

八月二十三日

九月

十二月十五日

田島順輔、幕府より長崎海軍伝習所に入学（蒸気機関の研究）を命ぜられる。（H15：625）

田島順輔が長崎へ出発するにつき、川崎まで見送る。新島と共に蘭学を学んでいた菅沼貞治郎〔錠次郎〕は田島に同行する。（H15：626, 634）

田島ら長崎に到着する。（J31—12：171）

七五三太、元服する。諱は敬幹、烏帽子親は岡田源七郎〔藩庁への届出は十一月十五日〕。（H1682）

この年、田島の長崎留学によりやむなく手塚律蔵の門に入り蘭学を続けるが、漢学の師・添川廉斎より「爾欲学蘭書勿廢漢学」と言われ、蘭学と漢学を共に行うが成果あがらず、迷った末数ヵ月後、蘭学を廃して漢学に傾注する。（全3：5）

藩の学問所助勤となるのはこの頃か。（全10：31）

またこの頃、父親の民治は七五三太に対し、しきりに学問をやめて、書道教授の手助けをするように言う。（全10：32）

この年、アルファイアス・ハーディ Alpheus Hardy はアメリカン・ボードの評議員と運営委員会委員に選ばれる（一八八六年まで）。またアームスト大学に一千ドルを寄付、即席演説を改善するためハーディ賞（Hardy Prize）を設定する。現在も続けられているという。（D21：14, E27：397）

安政五年（一八五八）十六歳

六月二十日

添川廉斎死去。臨終の際、枕頭にいたのは弟子の吉田賢輔のみという。（T3581）

七月上旬

安中の尾崎直記に手紙を書き、この頃天下大乱の噂を聞く、もし内乱が起れば学問ができなくなり、「今不学恐失時」、父を説得してほしいと懇願する。(43: 4)

七月十八日

尾崎直記死去。(F3566)

九月二十二日

備中松山藩の川田剛、安中藩で漢学を教える。(F3566)

川田塾で三羽明良と交際する。(45: 173, 1952)

* 備中松山藩板倉家は安中藩板倉家の本家にあたる。川田は神田佐久間町の安中藩中屋敷で教えたと思われる。近くの下谷三味線堀に田辺信次郎の塾があり、両者の塾生の間には交流があったという。なお田辺の子、孫次郎、太一は蘭学者として知られており、蘭学生が集まっていたという。この頃の新島の友人には吉田賢輔、尺振八、木村熊二らがいる。(J3: 446)

安政六年(一八五九) 十七歳

一月二十八日

徒組除に召し出され、御広間平を仰せ付けられる。四両二分老人半扶持。(11677, 11682)

「十六歳になると出仕を始めなければならなくなった」。藩主の送迎のほか日誌・記録係に任命されて、一日おきに出仕する。家では父に代わり小さな弟子たちに習字を教える。(41011, 32)

四月一日

オランダ船初めて品川沖に来る。使節は高輪東禅寺に逗留する。(J56: 174)

四月二十五日

父の民治が藩主に従って大阪に赴く。七五三太は藩邸の祐筆を務め、父の書道塾を受け継ぐ。なお、この塾には周辺の武士の子弟のほか、やや後になるが洋書調所(のち開成所)の役人の子弟も習いに

きいころ。(E1711)

この頃、自宅から一マイルほどの所に新しい蘭学の師を見つけ、そこに通う。(全10:33, E1677)

* これは杉田玄端と思われる (E1677, D32:20)。が、実際に蘭学の手ほどきを受けたのは玄端の義理の甥・杉田廉卿ではなからうか。廉卿との交渉は深く、新島が函館とアメリカに滞在中、父親との往復書簡にもしばしば登場する。廉卿は沼津藩水野家の医師・武田簡吾の弟で、杉田成卿の養子となる。(J118:252)

七月一日

田島順輔、業を卒えて江戸に帰るが、旅行中に病を得てこの日死去。三十二歳。(H15:630)

* (J34-1:153) では十月十六日没となっている。

十七、八歳の頃、ひそかにキリスト教に関する中国の書物を読む。(全2:416)

万延元年(一八六〇) 十八歳

閏三月

麻疹流行する。(J56:179)

七月十一日

長姉・くわ死去。三十歳。(E1677, E1679)

十月九日

御供徒士を命ぜられる。(E1677)

十一月

この頃、家老・横井保吉に頼み、勉強のため出仕の務めを軽減してもらう。(全10:34)
藩の許可を得て幕府の軍艦操練所へ入学、一週に三回通って航海術を学ぶ。(全10:15, 35, E1677,

E1681)

この頃、江戸湾内に停泊中のオランダ軍艦を見て、海軍の創設や、外国貿易の必要を感じ、航海術の勉強を志す。(全10:35)

文久元年(一八六一)十九歳

三月十一日

板倉勝股に従い、初めて安中に向かう。(E1682)

十月二十四日

植栗棣弥(のち新島公義)生まれる。(E1677)

十月

横浜港において杉本氏著『航海詳義』を筆写する。(E816)

この年、軍艦操練所世話役を命ぜられる。(E1677)

この頃、軍艦操練所でピラルルの航海書や英字と共に小野友五郎、赤松則良、塚本明毅たちから数学を学ぶ。(I46:114)

この年、第四姉・とき、堀出雲守家来・速水林次に嫁す。(E1677)

この年、A・ハーディ、マサチューセッツ州上院議員「一期」となる。共和党。(D21:15)

文久二年(一八六二)二十歳

一月二十八日

安中藩士・星野閑四郎より高島流西洋砲術を習うこととなり、起請文を提出する。(H1:192)

四月以降、麻疹各地に流行、六月ことに劇甚。(I97:20)

六月七日

会津藩・岸某より借りた Van de Logarithmen を得た。(E823)

この頃、麻疹にかかり、軍艦操練所を三カ月休む。十分回復しないうちにオランダ語の数学書を読み、これがもとで視力衰え、頭痛、不眠などに悩まされる。(全10:16)

八月上旬

閏八月上旬にかけて記したノートに「酔扣無喧歌伏櫪 満腔磊塊自難堪 漠々齋所蔵」と落書きする。(E825)

閏八月一日

Stuurmankunst Navigator に「男児生不起遂志死 不如吸地下泉 文久壬戌閏八月朔」と落書きする。(E824)

九月十七日

「健康すべねぬためか」海軍所で勉強を致し兼ねるので、太田総次郎の家来・甲賀源吾方に自費をもって入塾し、西洋海陸の兵学ならびに測算算術等の修業をしたい旨、民治より藩庁に願い出る。同月十九日、許可される。(E1677, E1681)

九月十九日

備中松山藩(藩主・板倉勝静)が快風丸を購入、アメリカ創売主より横浜で引渡しを受ける。原名 Governor Wallace 木造帆船(スクーター)一八〇トン、長一七間、幅三間二尺。(131-13:356)

九月二十九日

「男児生不遂志不如死入黄泉之下 男児生不遂志不如死吸地下之泉 漠兮何哉蓋漠々知世事也 文久壬戌九月念九 漠々齋主人」とノートに記す。(E825)

十一月一日

甲賀塾において数学を学ぶ。(E817)

十一月十二日

快風丸が玉島〔現在の倉敷市〕に回送されることになり、同船に乗り組み、午後、江戸を出帆、この夜六ツ時頃〔午後六時頃〕浦賀に到着する。杉田廉卿、甲賀源吾、川田剛らから餞別を贈られる。(全3:7, E1682)

十一月十三日 四ツ時「午前十時」頃、浦賀を出帆する。(全3:7)

十一月十四日 午後五時すぎ、快風丸下田に入港する。(全3:7)

十一月十九日 紀州橋杭港に到着。西風強く、数日、出航できず。(全3:7)

十一月二十日 快風丸停泊の位置、北緯三三度三〇分三〇秒、東經一三五度四九分三〇秒。(D39)

十一月二十五日 橋杭を出航、潮岬先端に近い出雲崎まで行くが、西風強く、橋杭へ吹き返される。(全3:7)

十一月二十六日 午前三時すぎ、東風になったので急ぎ出航、紀伊水道に入る。東風ますます強く、淡路島寄り水深八十尋のところに仮泊する。(全3:7)

十一月二十七日 午前六時、大阪湾に入り、河口へ六里のところで無風状態となり、船一寸も進まず、その場所に停泊する。(全3:7)

十一月二十八日 無風。八ツ時「午後二時」やっと河口付近に到着。舩で安治川を遡上、大川へ入り、夕刻、備中松山藩用達の「荒新」に着き一泊。日暮れなので御堂のみ見物。(全3:7)

牛肉を食す。(全10:36)

十一月二十九日 早朝、船に帰り、正午出帆、兵庫沖に至る。(全3:8)

十一月三十日 午前六時、兵庫沖を出帆、淡路島に近付くと西風起こり、やむなく須磨付近に停泊。敦盛塚に詣で、蕎麦を六杯ほど食べる。午後六時頃出帆、午前三時頃小豆島沖を通過する。(全3:8)

十二月一日 晴。潮と風悪く玉島には入港できず、午後二時三十分、下津井「現在の倉敷市」に入港する。住民に船の見物を許したところ、西洋帆船が珍しく三、四百人が甲板にあがる。午後三時より上陸し、港内を見物する。午後四時十二分に揚帆、七時二十分に玉島沖に達するが、港が浅く、水先案内が必要な

ので沖合に停泊する。(全3:8, 全5:3)

十二月二日 玉島沖に停泊。(全5:3)

十二月三日 正午頃より端舟、漁船に曳かれて入港。夜、上陸して名主・柚木庄兵衛方で入浴、早々舟に帰る。

「一兩日は大めしを喰而眠候」(全3:8, 全5:4)

十二月五日 玉島に上陸して市街を見物する。民治に手紙を書き、毎日塩水をかぶり今日様を臥拝している、と記す。(全3:8)

備中松山藩士三名が藩の用件で大阪に向かうこととなり同伴。午後四時ごろ玉島を出航する。この夜、風雪強く難航、明石海峡を抜けてようやく仮眠、午前八時まで眠る。(全5:4)

十二月六日 午前六時すぎ兵庫に入港、上陸する。湊川神社、生田神社、平清盛の墓を廻り、入湯して午後四時すぎ帰船する。(全5:5)

十二月七日 半晴、西風。(全5:5)

十二月八日 半晴、西風。市街、柳原を見物して帰る。(全5:6)

十二月十一日 半晴、東風。朝三時四十五分頃抜錨、和田岬より須磨沖に出るが西風強く、兵庫に引き返す。(全5:7)

十二月十二日 朝三時すぎ揚帆、夕方やっと淡路島を過ぎ、家島付近に達する。(全5:7)

十二月十三日 正午頃小豆島を左に見て通過する。(全5:7)

十二月十四日 正午頃、塩飽島沖に達し、風潮を待って午後三時頃出帆、夕方、玉島沖に着く。(全5:7)

文久三年（一八六三）二十一歳

一月九日 江戸への帰路、橋杭に停泊する。（D39）

一月十四日 快風丸、江戸に帰る。（E1682）

三月十八日 「英吉利文典直訳」の筆写を始める。四月四日写し終わる。（E1841）

* 開成所版「英吉利文典」とは異なる？

四月十九日 Elements of Algebra を筆写する。（E1842）

六月十日 幕府海軍奉行・木村摂津守より御軍艦組出役（当分十五人扶持）について問い合わせがある。安中藩では新島に対し、稽古になることだから行ってもよいが、「御直参之義不相成」と申し渡す。新島はもとより出仕の意志がないので、断る旨を藩に申し出る。（E1677, E1681, E1722）

六月十四日 安中藩留守役・田辺潤之助より木村摂津守用人に宛て「新島七五三太義生来虚弱之处当时眼病相煩…御軍艦組当分出役之義……御勘弁可被下候」と返事をする。（E1722）

七月十五日 民治より英吉利国音辞書一冊、英吉利国文法書一冊の購入費用、二両一分三朱の拝借を藩庁に願ひ出る。（E1722）

七月二十三日 書籍購入費を藩より貸与される。ただし、この年の秋より俸禄から一分宛返済するよう申し渡される。

同年九月十四日より慶応二年四月二十七日にわたり返済される。（E1722）

九月十四日 弟・雙六、下谷御徒町の鷺津貞輔について漢学修業を始める。（E1677）

九月十五日

甲賀塾での修業を一カ年延長につき藩庁に願い出て、九月二十二日付で許可される。(L1722)

この頃、友人「杉田廉卿か」から中国語の本を貸してもらう。その中には漢訳聖書のほかE・C・ブリッジマン(裨治文)の『聯邦志略』や、A・ウィリアムソンの雑誌などが含まれていた。(L10: 15, 37)

* 新島の読んだ『聯邦志略』は裨治文撰述のものか、箕作阮甫訓点のものか不明である。箕作は文久三年六月に病没、本は翌年の元治元年秋に刊行されている。写本によったのか？ なお、新島の「航海日記」の冒頭に『聯邦志略』の一部が筆記されている。(L5: 25, J106: 250)

また、杉田廉卿・吉田賢輔・津田仙らと共に聖書の会を開く。漢訳、蘭訳のキリスト教書を使用した模様。(L1578, E26: 12)

またこの頃、和訳ロビンソン・クルーソーの漂流記を読む。(L10: 37)

* 黒田麴廬の訳と思われるが、新島は蘭学の友人から借りたと書いてあるので、たぶんその頃、幕府外国方で翻訳に従事していた杉田廉卿か、あるいは吉田賢輔(蕃書調所筆記方)か、いずれにしても蕃書調所の所蔵本と思われる。なお京都大学には「安中侯板倉氏蔵本借写」と記された写本が所蔵されているそうである。(J105: 141, J116: 131)

元治元年(一八六四)十一月二歳

二月二十日

「男児志願是功名 一醉紅裙亦有情 余愛揚州狂杜牧 能評花月又談兵 文久四甲子年二月二十日於解西所求之 新篇」の詩を賦す。(F3252)

二月

山本覚馬、会津藩主・松平容保に従って入洛する。(D6: 51)

三月六日

箱楯出張中の外国奉行・柴田日向守に、ロシア領事より息子ワジメルのために日本語教師を推薦してほしい旨依頼がある。「古事記伝とか申す書並びに其他の書も少々は処持仕候……漢字のみにては差支候に付和学も出来ものを頼置候……日本の文法相弁ひ申度……」(H6:88)

三月七日

航海書中の疑問を質するため、川勝塾のある駿河台より中浜万次郎の住む芝新錢座に向かう途中、快風丸乗り組みの加納・柏原ら三人の知人に出会い、数日中に同船が北方交易のため箱楯に向かうことを知る。同行を勧められ、ただちに箱楯に行くことを決意、安中藩の目付役・飯田逸之助に会い、藩主に許可を得ること、両親を説得することを依頼する。飯田から、まず備中松山藩邸へ行って乗船につき相談するよう勧められる。夜、川勝塾へ帰り、身辺の整理をする。(H5:8, H10:16)

* 甲賀塾といい、川勝塾といい、単なる私塾ではなく、幕府の兵書翻訳・取調方ではなかるうか。また、川勝とは川勝広道のことと駿河台袋町に屋敷があり、当時歩兵頭並、のち外国奉行になった人物と思われる。東京谷中霊園に墓碑がある。

三月八日

朝、備中松山藩邸に行き、知人で快風丸乗組員の塩田虎尾に会い、同藩の家老や藩主への斡旋を請う。藩主の許可を得て、安中藩邸に引き返し、飯田逸之助に報告、藩主への周旋を重ねて依頼する。(H5:8)

三月九日

藩庁へ、快風丸に便乗して箱楯へ行き、武田斐三郎の塾〔諸術調所〕に一年間入門し、航海、兵学等を研究したい旨、願う出る。(H5:9, H1722)

藩主の内諾を得て、このことを家族に告げる。川勝塾に帰り、箱楯までの航路や地図等を調べる。(H5:9, H1677, H1681)

三月十日

夜、川勝塾において塾主の川勝〔広道〕、塾友の田中浩造・鈴木熊六・邨尾四郎らと送別の宴を張る。「感算理説」の余白に漢詩「一襲弊袍三尺劍 回頭世事思悠悠 男兒自有蓬桑志 不涉五洲都不休」を書く。(全1:339, E1723)

* 邨尾四郎・鈴木熊六については明治二十二年四月十六日の項を参照。

三月十一日

朝、川勝塾を退塾、師、友人から餞別を受ける。(全5:9)

正午、藩庁より箱桶での修業を許可され、修学費として十五兩を貸与される。(E1722)

新島宅では家族が水盃で送別の宴を張る。祖父の弁治は「行けるなら行って来て見よ花の山」の句を贈る。(全5:9, E1677)

菅沼錠次郎へ手紙を書き、暇乞いに行けないことを詫げる。(全3:9)

夕方七ツ時すぎ〔午後四時頃〕出迎えに来た塩田虎尾と共に木挽町三丁目の備中松山藩中屋敷に向かう。この夜、潮の工合が悪く乗船できず、同藩邸に泊まる。(全5:10)

三月十二日

朝、芝大門より舩に乗り品川沖に停泊中の快風丸に行くが、測〔量〕器を探しに木挽町の藩邸まで引き返す。結局手に入らず、正午頃快風丸に戻り、午後三時半頃、出帆する。(全3:13, 全5:10, E1682)

三月十三日

午後三時四十分、浦賀入港。(全5:10)

三月十四日

南風強く、滞泊。「此日旧知己に再会し縷々の談あり」(全5:10)

三月十六日

十時四十分、浦賀を出港する。(全5:10)

三月十七日

小雨、北風強く、午後三時二十分、総州奥津〔興津〕に落碇。(全3:13, 全5:11)

三月十九日

興津に上陸し入湯、帰船する頃風雨強くなり、やむなく船宿・浦部に一泊する。(全3:13, 全5:11)
 風雨激しく、窓より海を眺めて思い淋しくなり、「武士乃思ひ立田の山紅葉にしきぎさればなと帰る
 べき」の一首を得る。(全5:11)

三月二十二日

興津を出航したが、突風のため遭難しかかる。百里灘付近では逆風のため船が進まず、やむなく砂子
 浦に停泊、この東方一里の勝浦まで行き興津港外での「命拾い」の祝杯をあげる。(全3:14, 全5:11)
 朝八時、砂子浦を出港する。(全3:14, 全5:12)

三月二十六日

三月二十八日

奥州磐前郡中之柵〔いわき市〕に入港、上陸して仙台屋に泊まる。(全3:14, 全5:12)

三月二十九日

早朝より快風丸土官らと平城を見物、烈風雷雨のため平城下の旅館・十一屋清蔵方に投宿する。(全
 3:14, 全5:12)

四月四日

武田斐三郎、蝦夷地巡察中の神速丸に便乗して箱楯より江戸に帰る。七月、開成所教授並となる。

(J64:119)

四月七日

朝六時、快風丸、中之柵を出港、港外に落碇して夜半二時開帆、北進する。(全3:15, 全5:14)

四月十日

正午、金華山沖を通過する。(全3:15, 全5:14)

四月十一日

快晴、朝八時二十分、南部鰺ヶ崎〔宮古市〕に入港、伊勢屋に泊まる。(全3:15, 全5:14)

四月十六日

午前十時、鰺ヶ崎を出港、「此日朝ハ快晴ナリシガ……陰雨濛々として降り……」(全3:11, 14, 全5:
 15)

四月十七日

船、快走。(全3:14, 全5:15)

四月十八日

半晴のち曇、夕刻雨、尻矢崎通過後、風変わり潮流強く、風待ちのため霜風呂に停泊、早々上陸して

温泉に入る。(全5: 11, 17)

* (全3: 14) では十九日となっている。

四月二十日

午前七時二十分再び上陸して温泉につかり、午後三時に帰船、順風に乗り早々に帆を揚げる。(全3: 14, 全5: 17)

四月二十一日

朝六時、箱楯に入港、上陸をして早速武田塾へ行き、入塾の手続きをする。武田は不在〔四月四日の項参照〕長岡藩の菅沼精一郎に万端世話になる。午後、築島近くの大町横丁、讃岐屋に投宿する。箱楯の人口三千余、港内に日本船三、英船三、米船二、普〔プロシヤ〕船二隻が停泊中。(全3: 11, 15, 全5: 17)

四月二十二日

ロシア病院を見物する。「此病院は薬は施し而一切謝礼取不申……」(全3: 12)

四月二十五日

武田塾へ行き、旧友の木村隆吉(佐倉藩)田中茂幸(会津藩)を訪ねる。木村は幕府の船で江戸へ、田中はさる二月船出したまま消息が知れず、空しく宿へ帰る。(全5: 19)

民治と飯田逸之助に手紙を出す。(全3: 11, 13)

四月二十六日

武田塾へ行き、塾頭の菅沼精一郎より塾の状況について聞く。武田は江戸に行つて不在、塾生は四、五人で格別語学のできる人もいないので、西洋人の家に入ることを考える。(全5: 19)

四月二十八日

菅沼および快風丸の士官らと料理屋で会食、菅沼よりロシアの僧官ニコライが日本語教師を求めていることを聞き、紹介を頼む。(全5: 20)

五月三日

菅沼に伴われてニコライを訪う。話がまとまり、翌日荷物を運びこむ約束をする。(全5: 20)

五月四日

快風丸内での会合に加わり、ニコライ方へ行けず。(全5: 20)

五月五日 朝、ニコライの家に立ち寄り、四ツ時〔午前十時〕肝附某を訪ね、牛酪を求めるも入手できず。(H5: 33)

午後六時すぎニコライ方へ移る。ベッド、机など家具つきの十畳ばかりの洋間を与えられ「予を待てること実に至れり尽せりと言ふべし」(H5: 20)

* (H3: 18)では五月十一日となっている。

五月六日 ニコライとの生活始まる。英語を学びたい旨伝えておいたので、ロシア士官ピレルーヒンを紹介される。(H5: 20)

五月七日 病気になった塩田虎尾とロシア病院に行き、ザレスケーより眼の治療を受ける。院内で会津藩の島彰に会い、病院のことを詳しく聞く。(H5: 21)

史書を読みフィニキーについて知る。(H5: 33)

五月八日 この日からニコライと共に古事記を読み始める。

ロシア病院に行き、目薬をさし、水銀剤の丸薬を投与される。

午後、菅沼の友人で神明社の沢辺数馬〔琢磨〕が来訪する。(H5: 22)

五月九日 日曜日、曇。〔陽暦では六月十二日、日曜日〕(H5: 33)

五月十日 ロシア領事館でミスター・スミス、シドロフ大尉、ザレスケー医師、「ゴシケウイチ」領事の息子ワジメルおよび Capt. Trask に会う。

五月十二日 病気で療養中のピレルーヒンは閑暇があり、ニコライの教会で英語を教わることができた。(H5: 33)

ニコライと古事記を読む。翌十三日も。(H5: 34)

五月十五日

快風丸が明日サガレンに向け出港すること、士官の林鉄太郎らと送別の宴を張る。塩田虎尾は病氣療養のため残ることとなる。(全5:23, 34)

五月十六日

快晴、日曜日。快風丸の出帆を見送る。夕方、塩田来る。(全5:24)

五月十七日

教会の休日につき古事記の会読は休み、小林国太郎の部屋に行く。(全5:35)

五月十八日

古事記を読む。(全5:35)

弟・雙六、藩学問所の句読師となる。三両二人扶持。(上1677)

五月十九日

小林友八来訪、算書を二冊借る。□氏へ三両一分二朱貸す。(全5:35)

五月二十日

この日より一日に三回散薬を服用する。(全5:35)

五月二十一日

ロシア語学生・荒井金助来訪。牛酪菓子を買う。値段は二十八匁五分。

この夜、ポルトガル領事死去。(全5:35)

五月二十二日

ポルトガル領事の死を悼んで各国領事館および外国船は半旗を掲げる。日本のみがそれをせず、「同

盟国の礼を知らざると見ゆ」と慨嘆する。(全5:35)

五月二十三日

日曜日、故ポルトガル領事の葬式を見る。(全5:35)

五月二十四日

古事記を読む。「此日——君へ我心中をあかす」イグネシア十二袋受け取る。一日三回服用。(全5:36)

* 「——君」に「こいつは」(全3:16, 741, 全10:41, 42) 参照。

五月二十五日

古事記を読む。塩田に一両貸す。(全5:36)

問屋・浜田屋の便船に託して民治に手紙を出す。「寒暖計五十度或は六十度……朝夕はあはせなり」

(全3:18)

五月二十六日 日本産物誌を少々読む。ウォースボル「？」を買う。(H5:36)

五月二十七日 ニコライとこの日より大伴金道忠孝図会を読む。イギリスが横浜に軍隊を派遣するとの噂を聞く。

(全5:36)

五月二十八日 大伴金道忠孝図会を読む。眼病快方に向かいロシア人医師より目薬を免ぜられる。(H5:36)

五月二十九日 大伴金道忠孝図会を読む。(全5:36)

六月一日 (陽暦七月四日) アメリカ独立記念日にあたり、港内におびただしく祝砲を聞く。(全5:37)

六月七日 ロシア病院ドクター・ザレスケーのネーム・デー。(全5:37)

六月十二日 「箱桶の築島に於ける米利堅人の家ニ而、同国商船の船頭ウイルレム・セーウオルなる者に逢ひ……

十四日の夜九ツ時迄に彼の船に乗込むべき由を約束せり」(全5:72, 全10:9, 42)

* この幹旋をしたのは福士卯之吉「のち福士成豊」で、築島のアレクサンダー・ポーター商会の店員であった。同じ築島のフレデリック J・ウィルキー Frederick J. Wilkie の事務室で会ったものと思われる。(全10:9)
なお新島は福士のことを「富士屋宇之吉」と記している。おそらくは聞き誤りか？

六月十三日 家へ送るため写真を撮る。「魯館ニ於テ写真会有之候」(全3:19, 全5:72)

* この湿板写真は八×六・五センチの大きさであり、のちこの写真をもとに原田直次郎が肖像画(油彩)を描いた。

* 「露国領事『ゴスケウキチ』来るに及び、彼は該国軍艦より写真器械を譲受けて撮影を娯楽となし、医師『ゼレンスケ』も此術を能くしたれば……」(H5:265)

六月十四日

(陽暦七月十七日) この日「二三の信友」と送別会を開く「か」。新島、慷慨のあまり剣を抜いて歌う。「一襲弊袍三尺剣……」「武士の思ひ立田の山紅葉……」(全3:25)

* 「沢辺数馬、富士屋宇之吉の周旋ニ依而此之行を得たり。此二友骨ニ徹し忘るへからず。且菅沼精一郎君も右様の友なり」(全5:38)

塩田虎尾に家族宛の手紙と写真を託す。(全3:19, T635)

* この手紙と写真は、塩田が江戸に帰った際、飯田逸之助を通じて民治に渡される。飯田は塩田より詳細を聞き、事態を了解、「僕元より賢兄が志を知る敢而甚驚怪せすといへとも唯尊老大人、尊大人、尊慈堂ニ対して惧然として跼蹐の思なきを能わす」と感慨を洩らす。(T3138)

この夜四ツ半「午後十一時」すぎ、「一とからげの荷物を負い、大小を懷中にかくし」て密かにニコライの家を出て、富士のもとに行く。彼と共に小舟に乗り、沖合に停泊中のアメリカ船ベルリン号に乗る。同船ではウイリアム T・セイヴォリー船長 William T. Savory が待ち受けていて、ただちに船「長」室付の物置部屋に隠される。(全5:37, 69, 72, 全10:44)

* ベルリン号(W・T・セイヴォリー船長)は木造二本マストのスクナーブリッグ、長さ二十一間半、幅四間二尺、深さ一間半、二〇七トン、長崎のウォルシュ商会の持ち船であった。のち越前藩が買取り富有丸と称したが、その際には砲二門が搭載されていたようである。(全3:21, J31—13:347, J115:479)

* ベルリン号に乗船の際、新島は「いかにせむ嗚呼いかにせんいかにせむ父母のころをいかにとやせん」と詠む。(全5:72)

福士卯之吉は「該船ニ奉供シ足下〔新島〕ノ手ヲ握テ暫時本願ノ達シル迄離別ヲ乞シトキ足下ノ一首『武士乃思立乃山も美す錦乃衣もきさればなど帰るべき』と記す。(T659)

六月十五日

(陽曆七月十八日) 月曜日、快晴 未明、税関の役人の点検を終え、ベルリン号、箱桶を出帆する。

(全3:21, 全5:72)

「昼近くになって船長はカギをあけて甲板の上に呼び出してくれた。船は港から相当遠ざかっており、

六月十八日

あの美しい函館の町はほとんど水平線の彼方に沈んでいた」(40:45)
晴、磐城沖を通過する。(45:38)

六月十九日

半晴、房総半島と相模湾の沖合を通過、伊豆諸島を抜け遠州灘に入る。船内での新島の仕事は、船長室の掃除、船長の給仕と炊事および犬の世話をするのであった。船長より少しずつ英語を習う。

(45:38, 72)

六月二十日

晴、遠州沖を通過。(45:38)

六月二十一日

晴、日曜日、この日遠州沖を経一度ほど走る。「決皆不見山」涙をこらえ、必死になって山々「富士山か」を見ないようにする。家ではしたこともない洗濯——襦袢三枚を洗う。また船長より洋服上下を与えられる。(45:38, 73)

六月二十二日

右舷に紀州を見ながら帆走する。この頃、船長が英語を教えてくれないので、別の人に習う。「一語三四度も教へ呉れしも、真似出来されば怒声を発し、或ハ鼻と頭に手を掛け、口を開きてゴと言へと申せし事も有之候」(45:39)

六月二十三日

晴、東風、日本の海岸を離れ、山影なくなる。船長より「ユウス及びスラウジルス」を与えられる。(45:39)

六月二十四日

晴、東風、一路南西に向かい帆走する。「東顧神州又白雲」。夜、髪を五寸ほど切る。(45:39)

六月二十五日

雨のち晴、船員より聖書を借りて読む。帰郷して両親に巡り合う心地して慰めを得る。(45:40)

六月二十六日

快晴、左舷に琉球列島らしい島影と日本船を見る。(45:40, 73)

六月二十七日

晴、早朝一つの島とその近くで日本船を見る。(45:73)

六月二十九日

晴、風阻、半日油掃除。(H5:40)

六月晦日

晴、風少しあり。海水が茶色く濁り上海に近付いたことを知る。船長よりコウズ(航図? 港図?)

をもらう。夕方七時、揚子江口の扶桑に到着し、停泊する。また、この日、頭髮を切って、その一部を手元に残し、他を海に捨てる。「海水若有靈送髪直到日本省爺嬢他日成業後有如此髪矣」同僚から「汝髪髻于仏郎人」と言われて帽子をもらう。(H5:40, 73)

* この年、六月三十日はなく、二十九日が晦日である。新島はこのことを知らず、日記の中で二日に分けて書いているが、内容は同一趣旨である。以後、日付は陰暦使用期間中、一日ずれる。(H5:35a)を参照。ただし本年譜では新島の日付に従い、必要に応じて注を加える。

七月一日

「二日」朝八時よりタグボートに曳かれて上海に入る。停泊している数百隻の船舶を見る。また蛙の鳴声を聞き「泊舟薄暮揚子江 風景自兼日出分 一夜蛙声頻入夢 猶為故舍旧知聞」の詩を得る。

(全3:25, 全5:41, 73)

七月三日

ボーイのうち広東出身の二少年が下船し、上海の二少年が乗船する。(H5:41)

七月五日

「六日・陽曆八月七日」晴、ソントー。(H5:41)

七月六日

日記に漢詩一篇を記す。「自從辞函楯 空被役洋人 憂国還憂国 憤然不思身」(H5:42)

七月七日

ベルリン号が再び日本へ帰ることを水夫より聞く。(H5:73)

イギリスの船員が来船し、好い船主がいるので、夜、紹介しようと約束する。支度して夜半二時頃まで待つが、同船員は来ず、人の信じがたいことを知る。(H5:73)

新島の友人・原田亀太郎、文久三年の大和天誅組の乱に加わり、この日処刑される。高梁出身、二十

七歳。(D22: 15)

七月八日

水夫不足につき甲板で留守番をする。船底よりあがる臭気に悩まされる。(全5: 42)

七月九日

セイヴォリー船長の紹介により、午後五時、米船ワイルド・ロウヴァー Wild Rover 号に移乗する。船長は H・S・テイラー Capt. Horace S. Taylor 助役はリードおよびフェリーといふ、積み荷は木材であった。(全5: 42, 73)

* ワイルド・ロウヴァー、一八五三年、メイン州ダマリスコッタのオースチン・アンド・ホール造船所で進水する。三本マスト、一一〇〇トン。長さ一八七フィート、幅三六フィート、吃水二二フィート。一八六九年まで A・ハーディの所有であった。一八七一年、ニューヨークのロングアイランド沖で座礁、沈没する。(D21: 13, J 107: 129)

七月十日

格別の仕事なく「実に虎口を脱し漸佳郷に入りし心地なり」。船長より近日中、中国人ボーイに暇を出すので物品管理に注意し、十分清潔にするよう注意される。(全5: 42)

七月十一日

テイラー船長より Joe と名付けられる。(全5: 43, 74)

新島は船長に、いま上海に入港中の船にいる日本横浜鎖港使節団員のうち三人を知っており、その中の一人はとくに親しいので、私はこの船に隠れていなければならないのだ、と話す。(全5: 43, 73)

中国人ボーイより、アメリカへ行くまで下船しない、と聞かされる。(全5: 42)

* 鎖港使節の随員の中には田辺太一、尺振八らがいた。

七月十二日

ワイルド・ロウヴァー号の下流に鎖港使節の乗っている船が見える——と船長より教えられる。船長に長刀を贈る。(全5: 43, 74)

七月十三日

船長より新しい洋服上下二着を与えられる。(全5:43)

* (全5:74)では十二日となっている。

七月十五日

中国人ボーイが解雇され、下船する。船長の態度「頗温和にして我を役するに甚慰懌」(全5:43)

七月十九日

下流に停泊しているシャム船を見て、日本船の少ないことを嘆く。(全5:44)

七月二十日

日本がイギリス船を砲撃し、かつ或るイギリス人を殺傷したので、一カ月後にイギリス軍を派遣する旨を船長より聞き、大いに憂える。しかし日本は敗れても降伏はせず、他年必ず強国になるであろうと考える。(全5:44, 74)

七月二十九日

雨、船に雨水を蓄える。(全5:45)

八月一日

半晴、八朔「江戸時代の武家の祝日」なので和服を着て船員に見せる。(全5:45)

八月五日

(陽曆九月五日) 米英仏蘭四国連合艦隊、下関海峡で萩藩砲台と交戦、八月八日まで続く。(197:24)

八月六日

小雨、午後一時、上海出帆、福州に向かう。ただし小蒸汽船に曳かれ、扶桑付近で停泊する。(全3:23, 全5:45, 74)

八月七日

小雨、午前五時出帆するが、風悪く揚子江口に落碇し、午後二時改めて出帆する。(全5:45)

八月九日

半晴、船長よりバイブルを与えられる。(全5:46)

八月十日

晴、夜八時、勃駄^{ぼだ}に着く。福州まで六里の地点。(全5:46)

* (全5:74)では八月十一日。

八月十一日

日曜日、福州到着 “This is Pagoda anchorage. There is not water enough for ships to go up

八月十三日

to Foo-chow.” また Stupid (愚鈍なる) adv. の字を憶える。(全3: 23, 全5: 46)
晴、暑く華氏八五・五、六度〔摂氏約三〇度〕に上る。(全5: 46)

八月十五日

名月。中国では鶏肉と飯とを月に供えることを知る。「日月星辰は決し而人間の敬拝すべき者にあらす」馬鹿らしいことだ、と思う。パムエロ（香は橙のごとく、味は蜜柑のごとく、大きさは重さ一四斤の弾丸くらいのもの）を食べる。故郷を思い出して一句を得る。「父母はさて如何ありけんけふの月」(全3: 25, 全5: 46, 74)

八月三十日

木材を満載して福州を出帆する。(全5: 48, 74)

九月二日

ソンデー「以後しばらくサンデーごとに日付を丹念に記している」。(全5: 48)

九月十三日

午後三時三十分、上海到着。ベルリン号のセイヴォリー船長が新島の密航を幫助したことを咎められ、長崎で解雇されたことを、テイラー船長より聞く。(全5: 49, 75)

十月十八日

また日本内海の一藩が英仏蘭と交戦し、砲台・市街を焼き払われたことを知る。(全5: 49, 75)
“thursday novanber” [sic] と日記に書く。(全5: 51)

十月二十六日

午前七時、タグボートに曳かれて上海を出航する。上海滞留四十四日。(全5: 51)

十一月一日

「十月二十九日」“1864 November 28th, Monday” 船の位置東経一一一度、北緯二六度四〇分。
(全5: 53)

十一月二日

東経一一〇度、北緯二五度四〇分。(全5: 53)

十一月四日

「[三日] “December” [sic]」東経一一五度四〇分、北緯二二度二六分二七秒。(全5: 53)

十一月五日

「[四日] Dec. 2d Friday 朝八時、香港に到着。停泊中、上陸して市街を見物する。〔阿片戦争後の〕

英国人と中国人の置かれた状況を見て、日本人はその轍を踏まないようにしなければならぬと感じる。(全5:54, 75)

十一月八日 小刀を八元で船長に売る。(全5:54)

十一月十一日 香港で漢訳聖書を購入、表紙の見返しに「支那人尊己国称中華然今其諸港為取奪空受英人之管轄、嗚呼中華之意在于何処乎」と記す。(全5:ロザ5:54)

十一月二十四日 香港に十九日停泊ののち、この日午前六時三十分出帆、米を運搬するためにサイゴンに向かう。(全5:55, 75)

十一月二十七日 [(二十六日) Dec. 24 北緯一二度六分三一秒]。(全5:55)

十一月三十日 ワイルド・ロウヴァー号、サイゴン入港。(全5:55)

十二月五日 [(四日) "January 1st day 1865" 雨なく、気温は華氏八一、二度から八四、五度〔摂氏三〇度近く〕を下す。](全5:56)

十二月七日 サイゴン河右岸にフランスの砲台を見る。(全5:57)

この月、江戸の新島家は安中藩邸内で表門の側、北より二軒目に移転する。(F635)

第二章 アメリカ留学と米欧教育視察

一八六五～一八七四年

慶応元年（一八六五）二十三歳

一月一日 元旦につき「たらちねは如何ありけんけさの春」の句および和歌二首を詠む。（全5：58, 76）

一月十日 サイゴンに上陸し、フランスの軍艦や住宅を見物する。（全5：59）

一月十四日 米を積んでサイゴンを出航、上海に向かう。小犬死す。（全5：59, 76）

一月十五日 船長の許可を得て、眼病のため休んでいた測量を再開する。眼病がやや回復したことによる。（全5：76）

一月十八日 船の位置、東経一一度一六分、北緯八度二五分二七秒七。飼っていた猿が死ぬ。（全5：59）

一月三十日 香港に到着する。（西暦一八六五年二月二十五日）「我是より西洋暦を用ゆ」（全5：77）

本年譜も以後、陽暦（陰暦）とする

三月十日 香港出帆。（全5：77）

三月十五日 マニラ沖に投錨、「此船は麻を積み、本国の名港ボストンに帰るよし」（全5：77）

三月二十五日 再び香港に戻る。（全5：60）

三月二十七日 十時、碇をあげ、少しばかり走って再び港内に落碇する。（全5：60）

三月（二十八日か）この日、香港を出帆してマニラに向かう。（全5：60）

三月三十一日 *Chinese-English Grammar* を読み終わる。（E843）

三月――

香港停泊中、弟の雙六に手紙を書く、箱桶脱出以来のことを述べた後「不日此船将ニ当港を発、米利堅に至らんとす」と記す。なお、この手紙は毛筆と鉛筆で書かれている。(43:21)

また、香港において次の詩を賦す。「男兒決志驅千里 自嘗苦辛豈思家 却笑春風吹雨夜 枕頭尚夢故園花」(43:25)

〔四月――〕

午後一時、マニラ沖に到着する。(45:60)

四月十日

ワイルド・ロウヴァー号、マニラを出帆、帰国の途につく。(45:77)

* マニラ出帆の日を四月一日(410:10, 47) 四月八日(45:60)とも記している。

四月二十一日

クレメント海峡にさしかかる。(45:77)

四月二十二日

赤道通過。華氏八五〇八七度。(45:77)

四月二十三日

雨、船の位置は南緯二度四五分、東経一〇七度一五分にあり、暗礁の多いクレメント海峡「カリマタ

海峡か」を通過する。東にビリトン島、西にバンカ島があり海の難所である。(45:60)

* 船の位置から見て、通過した海峡はバンカ島とビリトン島間のガスパル海峡 (Selat Gaspar) かと思われる。西周助・赤松大三郎ら幕府のオランダ留学生は一八六二年十月この付近で遭難している。(114:70)

四月二十五日

午後三時、スンダ海峡を通過。洋上でジャワ人の小舟より鶏、大蒜などの食料を補給し、インド洋に入る。(45:62, 77)

五月十七日

朝四〜六時雨。雨水を集め、船長と自分の衣服を洗濯する。午後二時半、再び雨。(45:63)

五月十八日

(陰曆四月二十四日) 新島民治より藩庁に七五三太の箱桶留学一カ年延長を願ひ出る。六月五日(五月十二日)許可される。(1722)

五月三十日

船上よりケープタウン近くのテーブル・マウンテンを見る。山容が富士山に似ており、次の和歌を詠む。「我は今雪なき富士を詠めれど父母は雪ある富士を見つらん」(45:63)

* (45:77) では五月三十一日。

六月十三日

この頃、喜望峰を廻り大西洋に入る。南東の貿易風に乗る。(45:65)

六月十八日

南緯一八度、西経四度、時速六、七里で北上し、セント・ヘレナ島沖を通過する。食料・薪水が十分なので同島に立ち寄る必要はなかった。「恨むこと久し英雄^{ナポレオン}の墓を一見せむことを」(45:64, 77)

六月二十四日

十一日前より東南貿易風に乗り、毎日一七〇〜二〇〇カイリ進む。日に日に暖気を増す。(45:64)

六月二十九日

西経三二度五六分、南緯〇度二四分、時速八カイリで北西に進む。これを基準として計算し、午後四時十五分、西経三三度二〇分の位置で赤道を通過することを予測する。(45:65, 78)

七月十日

北緯二二度一二分、西経六〇度〇七分で太陽直下を通過する。気温は華氏八七、八度を上下する。

(45:65)

七月十九日

マサチューセッツ州ロッド岬 Cape Cod, Mass. 沖を通過。漁船より南北戦争が終わったこと、リン

カーン大統領が暗殺されたことを聞く。(45:78)

七月二十日

ワイルド・ロウヴァー号、ボストンに入港。東ボストンのグラランド・ジャンクション埠頭に停泊する。

(45:66, 67, 全10:10)

* (45:78) では七月二十一日入港。

七月二十四日

東ボストンよりフェリーボートでボストン市街に渡り、ワシントン街の本屋でロビンソン・クルーソ

―漂流記を一ドル半〔一元半〕で買う。(45: 67, 78)

入港以来、船長より船番と掃除を命じられる。(45: 67, 78)

七月二十六日 船長に伴われてボストンに行き、衣服一揃と帽子、足袋を買ってもらう。(45: 67)

八月二十四日 ベルリン号のセイヴォー船長がグラランド・ジャンクションに停泊中のワイルド・ロウヴァー号の新

島を訪ねてきて、互いに再会を喜びあう。(45: 68)

グラランド・ジャンクションより別の場所に移る。東ボストンに民家の火事があり、消火の方法が江戸

と違い、機械を使うので興味を覚える。(45: 68, 78)

停泊中、波止場で出会った人たちから、南北戦争以来の物価高で、誰も世話をしてくれる人はいない
だろう、「もう一度海に戻ることにだな」と脅かされて、不安な毎日を送る。(45: 10, 17)

十月十一日 テイラー船長から話を聞いたのであろう、この日、ワイルド・ロウヴァー号の船主アルフィーアス・

ハーディ Alpheus Hardy が船へやってきて、新島に、アメリカへ来た理由、将来の希望等について
聞く。しかし英語が不十分のため、さっぱり意を通じなかった。このためハーディは新島を下船させ、
パーチェス街の海員ホーム Sailors' Home, Purchase St. に三日間泊めて、英語で国外に脱出した理
由を書かせる。(45: 68, 78)

十月十二日 英語の祈禱文を筆記する。(45: 1214)

十月〔十四日か〕 ハーディにいわゆる脱国の理由書を提出する。夕方六時半頃、初めてハーディ家〔4 Joy St., Boston〕

に招かれる。ハーディ家ではジョセフ Joseph と呼ばれるようになる。冬の衣服およびイートンの算
術書を買って与えられる。(45: 68, 79)

新島はハーディが苦境から救出してくれたことに対して、感謝の手紙を書く。(全6:4, 全10:20)

* 明治二十年、ハーディが死去した際、アメリカン・ボードのジャパン・ミッションが決議した弔慰文の中に次の一節がある。

“..... of his constant and ever increasing interest in the work of this mission and especially of the wonderful part which he [A. Hardy] has had in the evangelization of Japan through the adoption and training as his own son, of our beloved brother, Rev. Joseph Hardy Neesima.” [イタリク用者] (E24—a)

十月三十日

ハーディに伴われてアンドーヴァーへ行き、彼が理事をしているフィリップス・アカデミー Phillips Academy に入学することとなる。(全6:4, 全10:20)

十月三十一日

フィリップス・アカデミーに入学、校外のヒドン姉弟の家 Mary E. Hidden and David I. Hidden に下宿する。(全5:334)

慶応二年（一八六六）二十四歳

一月一日

ハーディに手紙を書き、ヒドン姉弟から親切にもらっていること、同居しているフリント夫妻 Ephraim Flint Jr. and Orilla J. Flint から算数・地理・作文を習っているほか、同夫人から毎晩、聖書の解説を聞いていることを伝える。(全6:4)

一月二日

ミス・ヒドンよりハーディに宛て「ジョゼフは紳士です」「私たちはジョゼフを家族の正式の一員に加えました」と手紙を書く。(全10:60)

一月二十日 ハーディに感謝の手紙を書く。(全6:5)

二月二十一日 父の民治に手紙を書き、箱桶脱出よりアンドーヴァーに至る経緯を伝え、写真を同封する。〔アメリカ到着後、父・民治に書かれた現存する手紙の第一信〕(全3:27)

「箱桶よりの略記」をこの日書き終わる。(全5:79)

二月二十三日 福士宛に英文の手紙を送り、聖書を学んでいることを伝える。(全6:5)

二月二十八日 新島民治、家族および飯田逸之助、杉田廉卿に発信。(全3:30)

No. 106 Essex Street, Lawrence, Mass. G Yeaw & Co. に行き写真を撮る。(上2007—58)

三月 写真を写す。(上2007—132)

四月九日 ハーディ夫人 Susan Holmes Hardy, Mrs. A. Hardy に手紙で、送られてきたスプリング・ウエア

の礼を述べ、「ヨハネによる福音書」を日本語に訳していることを知らせる。(全6:7, 全10:65)

四月 J・M・シアーズ Joshua Montgomery Sears より英訳聖書を贈られる。新島は生涯これを座右に

おく。その内扉には「此道や(須臾不可離之道なり)冥途の旅乃導燈可南」と書かれている。(上677, 全2:口絵写真)

* A・ハーディはJ・M・シアーズの後見人であった。

五月九日 「春」について作文を書く。ボストンに上陸しておよそ九カ月後のことである。(C2:76)

五月二十一日 (陰暦四月七日) 幕府、学術修業および貿易のための海外渡航を許可する。(J97:28)

六月十日 (陰暦四月二十七日) 新島民治は去る文久三年七月、英語辞書および文法書購入のため藩庁より借用

した金二両一分三朱をこの日完済する。(上1722)

七月十日

(陰曆五月十八日) 民治より藩庁へ、箱楯で洋学修業中の七五三太は、去る二月ロシア人と共に近海測量に出かけた際、大風雨にあい、いまだ帰帆しない旨を届け出る。翌一八六七年一月三十日(慶応二年十二月二十五日)聞き届けられる。(E1722)

七月二十四日

ハーディ夫人に手紙を書き、今学期の算数が終わったこと、来学期は代数と文法を受けること、眼の病気はあまり良くないこと、休暇中、しばらく勉強をやめて運動すれば良くなるかも知れない、などを知らせる。午後、アカデミーの展覧会に行く。(46:8, 46:10:66)

七月二十五日

この頃、テイラー船長に連れられてアンドーヴァーを出発、同船長の故郷コッド岬のチャタム Chat-ham, Mass. に向かう。A・ハーディの事務所でテイラー船長と待ち合わせ、彼と共にボストン市内の兄弟たちの家に行き、麦藁帽子や靴下を買ってもらい、午後四時半頃車で出発、午後八時すぎハーウィッチに到着、待ちうけていた船長の父親と甥によりさらに八マイルのチャタムまで馬車で送ってもらふ。ここで夏休みを過ごす。(46:8)

〔七月二十九日〕

テイラー船長、その姉親子らとバプテスト教会に行き、子供らと日曜学校に出席する。(46:8)

七月三十日

テイラー船長の兄 J. Taylor の家に招待され、まる一日同家で過ごす。(46:8)

七月三十一日

船長やその姪と一緒にハーウィッチに住む船長の姉の家に行く。(46:8)

九月二日

〔八日?〕ヒドン家の二階に病臥しているミス・ヒドンのおばミス・チャンドラー Abigail Chandler の部屋に行き、彼女と共に神に祈る。ミス・ヒドンは日頃おばが神に祈ったことがないので、それを知って驚く。(46:10)

十月上旬

シェッド夫人よりハーディ夫人に、新島をアンドーヴァー神学校付属教会に入会させてもよいかな否か

十月十九日

を尋ね、彼女が承知したことをフリント夫人に伝える。(46:11)

テイラー船長夫人 Sophia Dodge Taylor, Mrs. H. S. Taylor より手紙を受け取り、船長が再び中国に向け出帆するので、その前に会いたがっている旨を伝える。(46:11)

十月二十日

土曜日、朝の礼拝のちボストンへ向かう。出発前、フリント夫人より汽車の切符、ヒドン氏より一ドルの小遣いをプレゼントされる。(46:11, 46:10:67)

ボストンのチャールズタウンに停泊中の船上でテイラー船長と午後五時十五分すぎまで歓談、その後、市内へ行き、船長よりオーバーコートと素晴らしい帽子を買ってもらい、帰りの切符まで与えられる。(46:11, 46:10:67)

十月二十二日

荷物が着いていることをシアーズより聞く。ハーディ夫人からの荷物で、衣類を送り届けられる。

この日夕刻、ミス・チャンドラー死去。(46:11, 46:10:68)

十月二十七日

ハーディ夫人に手紙を書き、この頃眼も良くなり、夜間に少なくとも一時間半か二時間は勉強ができること、また数週間前からシェッド夫人に神学校付属教会に入るよう勧められており、もしハーディ夫妻が許してくださるなら次の聖餐式 Communion でそれに加わりたいこと、および彼の信仰について述べる。またフリントの指導で前週まで「ローマ人への手紙」を読んでいたが、現在は「コリント人への第一の手紙」を読んでいることをも伝える。(46:11, 12)

十一月

薩摩藩士六名がニューヨークに到着〔十一月四日〕、モンソン・アカデミーに入学する。その中の一人が新島を訪れる。(46:38)

* この薩摩藩士が誰で、(46:38)の書かれた慶応三年三月までの何時、新島を訪ねたのかは不明である。た

たとえば十一月二十日（陰暦十月二十日）仁礼景範と吉原重俊「大原令之助と変名」がニューヨークからポストンへ行き、木藤市助に会って、翌日帰っているが、新島はアンドーヴァーにいるはずである。なお彼らは新島に対し変名を用いている。（J108-1:84）

十二月五日

（陰暦十月二十九日）高野広八一座（足芸人浜碇定吉以下十七人の曲芸師）米欧興行に出発。（J187:14）

十二月二十一日

サイン・ブッカー——「ポストンに於ける名だかきハーディー君の妻の贈るところのものなり」「日本江戸之産安中之浪士新島七五三太源敬幹之姓名書」とあり、五十八名の氏名を記す。（J145）

十二月二十五日

アンドーヴァー神学校付属教会の聖餐式が次の日曜日に行われることをハーディー夫人に知らせる。「多分この週末はともにお忙しいでしょうから、どうかお下さい、そして次の安息日を私と一緒にすごして下さい」とはとても申上げるわけにはいきません」（46:12, 410:69）

十二月三十日

日曜日、新島、アンドーヴァー神学校付属教会において受洗する。（C8:49, E14:6）

* 内村鑑三によれば、新島に洗礼を授けたのはJ・シーリー Prof. J. H. Seelyeであると記している（J82:206）が、これは内村の思い違いであろう。当時は神学校の教授が交代で授洗をする習慣だったようである。

この年、安中藩分限帳によれば新島七五三太の身分は御徒士組除、四両二分外一人半扶持となっていた。（H1:251）

慶応三年（一八六七）二十五歳

一月一日

（慶応二年十一月二十六日）米国パシフィック・メイル社、太平洋定期航路開設。サンフランシスコ——横浜——香港にコロラド号（三七二八トン、乗客二百五十人程度）を就航させる。（J48:163）

一月三十日

（陰暦十二月二十五日）新島七五三太遭難失踪の件、藩庁において聞き届けられる。「依頼斡御扶持被召上」（E1722）

二月二十七日

（陰暦一月二十三日）幕府の軍艦購入使節、小野友五郎らコロラド号で渡米する。友人の尺振八、津田仙ら通訳として加わる。（J11:103）

三月初旬

「日本のテヅマツカヒ、カルワザシ、ボストンへ罷越、二回周日逗留いたし居候」（全3:38）

三月二十九日

新島民治に手紙を書き、アンドーヴァーの地理、気候、学校、下宿、独一真神のことを伝え、日本よりアメリカへ手紙を出すには浜田彦蔵かブラウンに頼めばよい旨を教える。飯田逸之助にも発信する。（全3:38, F3138）

四月十一日

アメリカへ送る手紙は横浜のジョセフ彦か、アメリカ人ブラウンに頼むよう民治に教える。浜田彦蔵宛の英文の依頼状を同封する。（全3:39, 全6:12）

四月十九日

（陰暦三月十九日）小野友五郎らの一行、ニューヨークに到着する。（J11:103）

五月十八日

幕府使節がワシントンに到着したことについて、新島はハーディ夫人に手紙を書き、私は国法を破って外国に逃亡した者だから、彼らに会わずに隠れているほうが良い旨を伝える。また同じ手紙の中で、

六月

植物学の本を買う許可を求め、あわせて先生の勧めで幾何学を始めていること、フリントに毎日半時間勉強を見てもらっていることを伝える。(全6:13)

フィリップス・アカデミーを卒業する。ティラー校長 Samuel Harvey Taylor は「彼はやる(べき)ことを立派にやり通した」と述べる。(全10:58)

七月十八日

(陰暦六月十七日)新島の手紙(「一八六七年三月二十九日付」)が膳所藩士・安食桂二郎(粟津高明)により民治のもとへ届けられる。また同封されていた杉田廉卿宛書簡は雙六により、飯田逸之助宛書簡は民治により、それぞれ届けられる。(T635, T3138)

七月十九日

(陰暦六月十八日)民治および飯田逸之助の書簡が安食桂二郎を通じて七五三太宛に送られる。(T637)

七月二十五日

アンドーヴァーを出発、夏休みを過ごすためノース・チャタムのティラー船長の父親の家に向かう。途中乗り換え駅を間違え、ニュー・ベッドフォードまで行く。その町の教会を訪ね、宿泊を頼むが、そのW・クレイグ牧師 W. Craig は新島から事情を聞いたうえ、その町でいちばん良いホテルへ連れて行き、一泊させてくれる。(全6:15, 全10:72)

七月二十六日

ニュー・ベッドフォードを出発、午後三時すぎケープ・コッドのチャタムに到着する。ここで夏休みを過ごし、毎日午前中はラテン語の勉強、午後は演説の練習と海辺の散歩、夕方はヘンリー・マーチン牧師の回想録を読む。(全6:16, 19)

七月二十八日

日曜日、ティラー船長やその姉妹らとバプテストの教会に行き、日曜学校にも出席する。(全14:3)ノース・チャタムよりミス・ヒドンに手紙を書き、ティラー船長の父親の家に滞在していること、こ

七月三十一日

の二、三日書き物をして眼を悪くしたこと（テイラー船長の義理の兄弟の）ラッセル牧師や日本人の大原（令之助）、ヒドン氏に手紙を出したことを伝える。（46:14）

八月十日

午後、テイラー船長の兄姉、その子供らとヨットを楽しむ。（46:17）

八月十一日

バプテストの教会に行き、ワールン牧師の説教を聞く。彼は十二年程前にチャタム校の小学校で先生をしていた人である。（46:17）

八月十四日

テイラー家の招きでワールン牧師夫妻が来訪し、半日を過ごす。新島も同席したが、話は交わさなかった。（46:17）

八月十五日

ヒドン宛の手紙の中で、次の木曜か金曜日にチャタムを出発してアンドーヴァーに帰ること、眼は少し良くなった旨を伝える。（46:18）

八月二十五日

テイラー家の人々と海辺でハマグリ掘りをする。約一ブッシェル（約三五リットル）も採る。（46:19）

八月二十六日

ハーディ夫人に手紙を書き、チャタムで楽しい夏休みを過ごしていること、モンソン・アカデミーにいる日本人留学生としばしば文通していること、また、明日はテイラー家の人々と森へ行って黒イチゴを摘む予定であると伝える。（46:19）

八月三十一日

ハーディは一通の推薦状を新島に持たせて、この日、午後二時五十分ボストン発の汽車でアーモストに行かせる。夕方六時四十五分に到着、シーリー教授 Julius Hawley Seelye に迎えられる。新島は入寮までの期間、同教授宅に滞在する。（46:20, E14:9）

この推薦状はハーディがE・フリントに依頼して書いてもらった、アーモスト大学のシーリー教授宛

のものであった。その中でフリントは次のように書いている。小説に没頭するごとく神の御言葉に没頭する彼のような人物をこれまでに見たことがないこと、「彼はアンドーヴァーに来る前に回心していたのだと思います」(全10: 79)

* 当時のアーモスト大学総長はW・A・スターンズ William Augustus Stearns [在職一八五四～一八七六年]であり、総長就任の翌一八五五年、かねて懇意だったA・ハーディをアーモスト大学の理事に推薦、ハーディは一八七七年までその地位にあった。(E27: 508)

この結果、新島はアーモスト大学に選科生として入学することとなる。(全10: 81)

九月二日
アーモスト大学での授業始まる。(全6: 20)

九月四日
三角法について一八ページ勉強する。(全6: 21)

九月五日
木曜日、入室予定の大学北寮 North College の部屋を見に行き、同室するはずのリバーモア Albert

Livermore に会う。(全6: 21)

九月八日
この日、タイラー教授 William Seymour Tyler の朝の礼拝に出席する。テキストは「ヨハネによ

る福音書」十四章二節であった。(全6: 21)

ミス・ヒドンに手紙を書き、まだシーリー教授の家にいること、三角法、化学やシュネル教授 Ebenezer S. Snell の哲学の講義を聞いていること、学期初めで忙しいこと等、大学の模様を知らせる。

(全6: 20)

九月二十一日
アーモスト大学北寮第八号室に入る。(全6: 21)

九月
大学の Missionary Band に入る。(全6: 22)

* Missionary Band は異教徒伝道を志すアーモストの学生の組織、一八四六年夏に創立され、一八五九年に

改組された。一八五九年から七四年までに七十一名が加入、その多くが宣教師として海外に出かけた、という。

(全10:391)

十月五日 安中よりの書状届く。「雙六・慶応三年六月十八日付、飯田逸之助・同六月十七日付」日本よりの第

一信である。(全3:40)

十月三十日 フリント夫人に手紙を書き、日本の父親と連絡が取れ、文通が始まったことを伝える。(全6:22)

十一月四日 (陰暦十月九日) 新島雙六、湯島聖堂留学を許され、翌十日入寮。(全16:7)

十一月十日 チャペルで朝トリート博士 Selah Burr Treat 午後ウィーラー牧師 Crosby Howard Wheeler 夜

クラーク博士 Nathaniel George Clark の説教を聞く。(全6:24)

* いずれもアメリカン・ボードの幹部である。

十一月十二日 ミス・ヒドンより受信、この日より一週間ほど風邪を引いて寝込む。(全6:24)

十一月十六日 ハーディ夫人に手紙を書き、冬休みの間、学校の規則で寮を出なければならぬが、どこで過ごせば

良いのかわからないこと、休暇中、勉強したいが、チャンスがあればアルバイトをしたいと書く。またシーリー教授が彼の家で過ごしても良いと言ってくれている、とも書く。(全6:23)

十一月二十二日 ミス・ヒドン宛の手紙に、ヒドン家に招待されたことを感謝し、冬休み中の予定が立っていないこと、

モンソンの日本人に会いに行きたいが、旅費がないこと等を記す。(全6:24)

十一月二十五日 ハーディ夫人から冬休みをハーディ家で過ごすよう手紙を受け取る。それで、アルバイトの丸太伐りを終えたらボストンに向かう予定のところ、モンソンに留学中の二人の薩摩人が訪ねてき、この日午

前中は新島の部屋で過ごす。午後は学内を案内し、夜は彼らのホテルで一緒に「マタイによる福音書」第二十八章を読んで十時すぎまで話し込み、そこに一泊する。彼らは数日滞在する。(46:25, 46:80)

十二月一日

フリント夫人に手紙を書き、ハーディ夫人から冬休みを過ごすよう招かれていること、テイラー船長が帰港したことを伝え、休暇中はボストンに行くことを知らせる。(46:25)

十二月二十四日

母親と雙六に手紙を書く。(43:39, 42)

十二月二十五日

父・民治と飯田逸之助に手紙を書く。民治宛には、一昨年三月に福士卯之吉を経由して送った手紙の行方のこと、ハーディ夫妻のため日本の草花の種を杉田廉卿に頼んで送ってもらいたい旨を記す。

(43:48)

飯田宛には、学校生活の状況を述べ、「……僕は真神の臣にして、我日本の民なる故、真神日本の為に丹心を尽さん事は、僕の急務と言うべし」と記す。(43:52)

十二月三十日

ハーディの事務室で寄宿費の支払いについて相談する。夕方、ジョイ街のハーディ家に行って夫人と会い、一週間滞在するように言われるが、新島はフリント夫人の招待でヒンズデイル Hinsdale, Mass. に行くことを告げる。またハノーバー通りの額縁屋でワイルド・ロウヴァー号の絵の額縁を八十セントで買う。(46:27)

十二月三十一日

ボストンを午前八時五十分に発ち、ヒンズデイルに午後二時四十五分着、フリント家の人々に迎えられる。夜、彼の教会の集まりに出席する。(46:28)

明治元年（一八六八）二十六歳

一月六日 夕方、日曜学校の集会で先生や子供たちが日本語を聞いただったので、新島は日本語で話をしたり、

歌をうたって聞かせる。（全6：28）

一月七日 正午頃ヒンズデイルを発ち、午後四時頃アーモストに着く。シーリー宅で一泊する。（全6：28）

一月八日 寮の部屋の掃除をし、夕方、新しい同室者を駅へ迎えに行く。（全6：28）

一月十日 教科書 *Eaton's chemistry* の扉に新島の署名の Amherst, Jan. 10th/68 と記入する。（E866）

一月十二日 寮の同室者 W・J・ホランド William Jacob Holland は両親宛の手紙に「クラスの一員はノコヤミ

（？）とかいう日本人です。それが正確な名前であるかどうか、自信はありません。ジャパニーという名で通っています。彼は独特の存在です」と書く。（D27：4）

一月 山本覚馬、京都の薩摩藩屋敷に幽閉される。翌二年に解放。（D10：34）

二月二日 Woman's Board of Mission of Boston の最初の集会在ハーディ家で開かれる。（E5：158）

二月二十日 ハーディ夫人より五十ドル送られ、金持ちになったような気になる。（全6：33）

二月二十一日 ハーディ夫人、ミス・ヒドンにそれぞれ手紙を書き、日本の将軍と諸大名の間に戦いが始まったことを伝える。（全6：29）

三月八日 （陰暦二月十五日）新島雙六の総領願を民治より藩庁に差し出す。五月（陰暦四月）に許可される。

三月十二日

民治に手紙を書き、新聞で知った將軍と薩長兩藩の争いは事実なのか、また家族の安否について問う。アーモスト大学の略図とゴリラの写真を同封する。この手紙は横浜経由で中国へ向かうハントに託し、横浜で宣教師バラ J. Ballagh に引き継がれて届けられる。(全3: 55)

三月十三日

横浜に居留する J・バラに手紙を書き、家族宛の手紙の送達の礼と依頼を述べる。またモンソンで学んでいる日本人より、最近手紙を受け取ったことにもふれる。(全6: 31)

三月二十八日

ハーディ夫人に手紙を書き「コートの袖とボタン・ホールがすり切れそうになり、色もあせてきたので手近に教会へ着て行けそうなお古のコートがあれば一着くだやく」と書く。(全6: 32, 全10: 92)

三月三十日

ハーディ夫人に手紙を書き、ここ四、五週間神経が高ぶり、熟睡できないこと、E・ヒッチコック博士 Edward Hitchcock の勧めで足浴したり、散歩したりしていると書く。(全6: 33)

* ヒッチコック博士はアーモスト大学長だった父親と同名。ハーバード大学で M.D. の称号を得、一八六一年よりアーモスト大学で Hygiene and Physical Education 教えた。

四月九日

(陰暦三月十七日) 安中藩江戸詰の家来・家族ら、この日俄に舟便を利用して、在所の安中および下に総に引き揚げる。

四月十五日

* 新島家は、一ッ橋外堀端御手辻番脇より乗船、夕方七時半頃出帆——関宿——舟倉手前の横瀬——本庄——藤岡——安中(十三日目、陰暦三月二十九日着)の経路を取る。(E1677, E1702, F640)

四月二十一日

ヒッチコック博士に手紙を書き、休暇以来風邪を引き、頭痛と寒気がするので、今夕か明朝、カレッジへ行くついでに往診してほしいと頼む。(全6: 33)

(陰暦三月二十九日) 新島家の人々、安中へ到着、妙光院の隠居寺を仮宅とする。(F640)

四月二十四日

民治からの手紙を受け取る。昨秋以来、母が病氣であること、江戸の市民は官軍が攻撃するかも知れないと恐れていること、家族は七五三太の帰国を待ち望んでいることを述べる。(H46:36)

四月二十七日

ハーディ夫人に手紙を書き、シーリー教授宅に引き取られて病氣療養中であること、日本からの手紙を転送してもらったことへの礼を述べる。(H46:36)

四月二十八日

フリント夫人に手紙を出す。(H46:36)

四月二十九日

ミス・ヒドンに手紙を書き、教会執事のJ・テイラー夫人の永眠につき、その家族への弔意を述べる。また先の休暇中に風邪を引き、それ以来シーリー教授宅に引き取られて療養していることを知らせる。(H46:34)

四月

沢辺琢磨ら函館でニコライより受洗。(F23:42)

五月二日

(陰暦四月十日) 新島雙六の総領願聞き届けられる。「七五三太廃嫡」(H46:77)

五月四日

この頃、フリント夫人より病氣は少しずつ良くなり、家の中をゆっくり歩けるようになった旨の手紙を受け取る。(H46:36)

五月七日

健康を回復し、シーリー教授宅から大学の寮へ帰る。(H46:36)

五月十五日

暖かい素晴らしい天気だったので、戸外での運動を楽しみ、甘く新鮮な空気を吸い込む。(H46:36)

五月十七日

校内のチャペルの夕拝に出席。シーモア牧師がアメリカ人宣教師の指導の下で洋学を学ぶ江戸の青年たちの話をし、牧師・宣教師になるよう呼びかける。これに感激した新島は、この夜、テイラー教授の自宅で開かれた Bible Society の集会に参加する。(H46:36)

五月十八日

ミス・ヒドンに手紙を書き、風邪のためほぼ三週間授業を休んだので、遅れを取り戻さなければなら

六月十二日

ないこと、J・テイラー夫人の死亡はハーディ夫人より聞いていたが、ダブ夫人の死亡は知らなかったこと等を伝える。桜の押し花を同封する。(46:37)

新島と同室のホランドは両親宛の手紙の中で次のように書く。「……スマートは彼〔新島〕のことをよく大学で最良のクリスチャンと呼んでいました。新島は清潔さの権化です。彼は英語学習の助けを時折必要としており、四年生の中からルームメイトを探すようにすすめられています。クリスチャンでない男と同室になることをとても恐れているのです。以上のことと、それにぼくは全学でいちばんよい部屋の一つに入ることになるといふ事実を勘案して、新島と同室になることにきめました。……彼はとても賢明な男でし、かつては日本の殿様の宮殿に住んだこともあり、日本のことについて何でも話してもらえます」(D27:5)

六月十五日

ハーディ夫人に手紙を書き、最近、鉱物採集を始めたことを報告し、これまで自分は日本を農業国と考えていたが、いまでは鉱物国だと考えるようになった、と述べる。(46:37)

六月十九日

ノートの余白に身長五フィート五インチ半〔一六四センチ〕、体重一二三ポンド〔五五・七キロ〕と書き込む。(D39)

六月十九日

兵庫・大阪居留地条約締結。(H7:88)

六月

山本覚馬、「管見」を京都府に提出し、学校設立を勧める。(H11)

七月

八月二十一日まで、学友とアーモストよりボストンを経てニューハンプシャー州を北上、ワシントン山に登り、コネチカット河沿いに帰る。(46:39, 46:10:95)

七月二十四日

ニューハンプシャー州のセイレムの近くで大雨に遭う。(46:39)

七月二十六日

レイモンドで安息日を過ごす。夕方の礼拝に招かれ、伝道活動についての意見を述べる。(46:36)
ウイニピゴギー湖 Lake Winnepesaukee に到着、湖畔のオルトン・ベイから蒸汽船でウルフバラへ
渡り、アーモスト大学で一年下の E・A・トムソン Everett A. Thompson の父トムソン牧師の家
で一泊する。(46:38)

七月二十八日

ウルフバラより汽船でワイアース経由、セントター・ハーバーへ行く。午後二時四十五分に到着した
が、濃霧のため景色は良く見えなかった。トムソンがディナーを持って同所まで同行する。昼食後、
馬車で二マイルほど北のレッド・ヒル山麓に行く。(46:38)

七月

ダイアナ・フォールで水浴びをしたため、ジャクソン到着後、体調を崩しジャクソン・ハウスに二日
間逗留する。(46:39)

八月三日

この月、横浜のバラより来信、民治が江戸よりいずれへか転宅したことを伝える。(43:63)
グレン側からワシントン山に登る。霧の中で一泊二日滞在、荘厳な日没を見る。クロフォード側に下
山→キャノン山で Profile of Old Man を見る→フルーム溪谷で仲間と別れる→フランコニ
ア→リスボン(金鉱)→ワレン(銅鉱)(46:39)

八月十五日

午後四時半にワレンを出発、七時を過ぎても歩き通し、やっと森の中に一軒の家を見つけ、納屋に
泊まる。おりからの豪雨で雨漏りがする中、ゴム引きのブランケットにくるまって寝る。(46:40)

八月十六日

朝のうち九マイル歩く。夜明け前に O [Orford] 村に着き、礼拝堂で冷ややかでそっ気ない礼拝と
冷ややかな日曜学校に出席する。午後、対岸の F [Fairlee] の礼拝堂に行く。偶然にも新島の行く
日曜学校の先生であるミス・マッキーン Phebe Fuller McKeen の父親、マッキーン牧師 Silas

McKeen の教会であり、彼の説教を聞く。新島は異教の習慣と様式について述べる。(46:40)

* ミス P・F・マッキーン(一八三一―八〇)はアンドーヴァーのアボット・アカデミー(女学校)教員で、サウス・チャーチの日曜学校の先生。最初の新島の伝記 *A Sketch of the Early Life of Joseph Hardy Neesima* の著者である。この本は一八九〇年に姉の Philena McKeen (アボット・アカデミー校長)によって刊行された。(C8)

八月十六日

この夜、ヴァーモント州ウインザーの青年の家に泊めてもらう。青年の母親は新島のことを新聞で読んで知っており、丁重にもてなす。(46:40)

八月十七日

朝、青年は村まで一マイル半の道を送ってくれる。(46:41)

八月二十一日

五週間四〇〇マイル以上の旅行を終えてアーモストに帰り着く。学校の寮が二十四日まで閉鎖されているので、シーリー教授宅に泊まる。(46:39)

八月二十四日

月曜日、シーリー教授宅より寮に帰る。(46:39)

この夏、旅行の途中、アメリカン・ボード総主事 N・G・クラーク博士の家に泊まり、朝の家庭礼拝の際、日本に宣教師を送るよう訴える。(E6:6, E8:2)

八月二十九日

寮の同室者ホランドはこの日、両親に次のように書き送る。「新しい室友のことでとても喜んでいます。彼は徹底したクリスチャン、そして完全な紳士です……一日中、静かなことハツカネズミの如くであり、ぼくは妨害を受ける心配はまったくありません。毎晩二人でお祈りをしています。〔聖書を〕一章ずつ読み、彼が希望すればぼくにできる範囲で解説を加えることがあります。……彼の画才はまったく注目に値します……ぼくが描いたベツレヘムの島の水彩画を……彼は驚くべき正確さで模写し

ています」(D27:7)

九月一日

横浜のバラを通じ安中の民治に手紙を出す。この春伝えられた父や杉田からの手紙はまだ届いていないこと、新聞で江戸の騒乱を知っていること、夏休みにホワイト・マウンテンズに登ったことを書く。(H3:65)

九月五日

ホランドより両親へ次のような手紙を書く。「新島は『モラヴィアン』紙にぼくが寄稿したシェイカー派についての記事を読んでいるところです。『常識のある人ならシェイカーにはとうていなれっこないね』と彼は言いました。誓って申しますが、彼は第一級の室友です。アーモスト中探したってこんな男は二人といません」(D27:7)

九月九日

ミス・ヒドンに発信、夏休みの旅行について書く。(H6:41)

九月十四日

(陰暦七月二十八日) 雙六、若殿・板倉勝敬の教育係となり、また文武校教頭に任ぜられる。(E1677)

九月十九日

ハーディ夫人に、家具を売って得た十ドルを紛失したことを手紙で報告し、不注意を詫びる。(H6:42)

この日、ホランドは両親宛の手紙に次のように書く。「新島が風邪を引きました。彼は薬局で買ってきた薬を飲んだところです。ぼくの見るところそれはショウガと甘草の根と吐根から調合したしろものです。彼はそれをカップ一ばい分の水に入れて沸騰させ、砂糖を加えて飲みました。……ぼくは吐根のアレルギー……『なかなかいけるよ!』と言って彼は舌つづみを打ちました。何ってことだ!」

(D27:8)

九月二十二日

ハーディ夫人より上着、燕尾服、チョッキ、ズボンを送ってくる。新島は礼状の中でいう「あれを着

十月

るにふさわしい年齢ではありませんし、そんな威厳も備わっていませんから」と。(46:44)
 (陰暦八〜九月) 会津若松城に籠城中の山本八重は藩主・松平容保の前で敵の砲弾(四斤砲)を分解して説明する。(J22-1:46)

十月三日

ホランドは両親に新島の日本脱出の理由を書いて送る。また、この夜、シリアのトムソン牧師が来訪、新島は日本の着物を着て見せる。(D27:9)

十月十七日

試験が終わり、ホランドの描く肖像画のモデルとなる。(D27:10)

十月二十四日

アーモスト大学西方にあるペラムの丘で鉱物の採集をし、アスベストのすぐれた標本を見つける。

(D27:10)

十月二十七日

ハーディ夫妻が来訪、ハーディが大学の理事会に出席している間、夫人が部屋を訪れ、二時間ほど話をする。厚手のウールのシャツ、ソックス等を贈られる。(46:44, D27:11)

十一月八日

ハーディ夫人に手紙で、ダーナの鉱物学の本「J. D. Dana, *System of Mineralogy*」を買ってほしいと頼む。高価な本なので費用を捻出するため「お茶断ち」していると伝える。(46:43)

十一月十四日

この夜、モンソンから Kudo Zuro「工藤十郎、本名・湯池定基」という薩摩人が来訪、十三日(金曜日)まで滞在した。新島は彼をチャペル、ミッシヨナリー・バンド、夕拝などに案内する。彼は新島より一年下である。(46:44)

ホランドより両親への手紙に次のように書く。「……ぼくの部屋で今この瞬間に日本語の会話が進行中。……新島の友人の一人がモンソンからやってきました。二人は日本語で話し続けています。日本語はとてもへんに響きます」(D27:11)

十一月十六日

この日（陰暦十月一日）新島民治は若殿の板倉勝敬に従って江戸藩邸に住む。（43:68）
冬休みに入る。休暇をヒンズデイルのプリント夫妻宅で過ごす。（46:45）
この年、第四姉・とき、越後椎谷に移る。（1677）

明治二年（一八六九）二十七歳

一月一日 フリント夫妻が知人を招きパーティを開く。新島もそれに加わる。フリント牧師より Harschel,

Familiar Lectures on Scientific Subjects を贈られる。(全6:46, D5—463)

一月二日 American Bible Society 終身会員となる。(L1239)

一月七日 ヒンズデイルからの帰途、モンソンの日本人を訪問、この日アーモストに帰る。(全6:45)

一月十六日 (陰暦十二月四日) 江戸の新島民治、鎗屋甚右衛門を通じ一八六七年十二月二十五日付、一八六八年

三月十二日付の新島からの書簡を受け取る。(F640)

ミス・ヒドンに手紙を書く。(全6:45)

一月二十三日 ホランドは家族への手紙に「新島の写真は面白かったでしょうね。彼は『すばらしい奴』です。

遠からず彼に三人娘「彼の妹」の写真を上げたいと思います」(D27:12)

二月十五日 (陰暦一月五日) 横井小楠、キリスト教蔓延の元凶との理由で暗殺される。(J97:39)

兵庫県、外国人土地家賃与規則を公布。(H7:95)

二、三月 (陰暦一月) 新島民治は牛込に住む杉田廉卿を訪ね、七五三太から送ってきた写真を渡すと共に、ア

メリカへ送る草花の種について相談する。(F640)

三月十七日

プリンス・セミナリーのJ・G・スート John G. Smart の求めに応じ日本の状況について話をする。その中でモンソンにいる工藤や Mt. Pleasant School に学ぶ二人の日本人についてもふれ

る。(46:47)

三月二十一日

(陰曆二月九日) 民治より七五三太に発信、家族の近況、激動する日本の状況を伝える。(T640)

四月二十八日

テイラー船長の父親夫婦の金婚式に招かれ、ケープ・コッドに行く途中、ボストンのハーディ家に立ち寄り、夫妻と食事を共にする。(46:50)

ケープ・コッドに一泊し、翌日アーモストに帰る。(46:50)

五月一日

(陰曆三月二十日) 仏教諸宗、連合して耶蘇教禁制を建白。陰曆三月二十三日に再度建白。(H12:75)

五月六日

父からの手紙を受け取り、家族が安中に移ったこと、母の病気が回復したこと、民治は昨年十月以来、東京に戻り、旧藩主の家令をしていることを知る。(46:51)

* (43:68) では五月七日となっている。

ホランドより両親宛の手紙に次のように書く。「今週新島は大喜びしました。一年以上にわたり故国から音信がなかったところに、やっと手紙が来たからです。この間、日本には恐るべき革命が起こりました。多くの変化がもたらされたのです。彼にオランダ語と漢学を教えた先生は、この動乱で官軍「?」の指揮官をつとめました。新島の弟は藩主の息子に漢学を教えています。彼の両親は首都における動乱に巻きこまれないために、江戸を引き払って田舎に移りました。前便では新島のお母さんは重い病気にかかっていましたが、母上はご快復。祖父は八十四歳で存命中」(D27:12)

五月十日

ハーディの友人が日本へ行くので、父宛の手紙を書く。帰国したらアメリカで学んだ本を翻訳したいこと、「聖人の明道を修め我国人をして人間闕可からざるの道を知らしめんと存じ」と述べる。「尺振

八君よりも一書到来」したと書く。(全3: 68)

The Banners of Cross を送ってくれたことに對し、ミス・ヒドンに礼状を出す。(全6: 51)

五月二十七日

ハリス教授の化学ノート「分離術」のノートの冒頭に「千八百六拾九年五月二十七日／新島約瑟」とサインする。約瑟のサインの最初か。(全865)

五月

この頃、ブラウン博士夫妻 Samuel Robbins Brown が新島を訪れ、アーモストで一泊する。彼らは七月一日、日本へ宣教に向かう。(全6: 52)

五月二十一日

父から受信、維新の政変について詳しく教えられる。また一八六九年九月に父からハーディに宛てた礼状の英訳をハーディに送る。(全6: 51)

五月二十三日

(陰曆四月十二日) 新島民治、横浜北方村に住む尺振八に依頼して七五三太宛に手紙を出す。家族のこと、国内の変動について書き、草花の種については津田仙の隣家の植木屋に頼んで集めてもらい、尺に頼んで送ってもらうようにしたことを伝える。(全1709)

五月三十一日頃

新島民治、東京を發ち、安中に向かう。(全641)

六月二日

ミス・ヒドンに手紙を書き、眼も良くなり、日光の強い日でもサングラスなしで外出できること、次の休暇は鉱石採集のためコネチカット州のハッドム、チェスター、マサチューセッツ州のゴシヨンに行き、フリント牧師の家で休暇を過ごす心算であると伝える。(全6: 53)

六月十三日

ホランド、アーモスト大学を卒業。アーモスト高校の校長になるよう要請されていることを、両親に伝える。(全27: 14)

六月十四日

ホランドよりラテン語を習う。(全27: 14)

六月十五日

安中の雙六に手紙を書く。むなしく「光陰を消し候事実に……気毒千万……大人方へ貴殿之洋学修業之相叶候様色々相談申上候」もしそれが叶わなくとも体を鍛え、病気をしないよう留意してほしい、いずれ帰国したら貴殿の希望の叶うように努力したい、と記す。(46:74)

六月十六日

横浜に向かうブラウンに託して民治に手紙を書き、弟の雙六をブラウンの下で習わせてほしいこと、杉田廉卿に写真を届けてほしい、と頼む。(46:75)

六月二十二日

ホランドは両親への手紙の中で「(ポストンから)帰ってからは、絵を描くこと、手紙を書くこと、室友にラテン語を教えることでつぶれました。新島の進歩はめざましいものがあります。ぼくたちはハークネスのラテン語読本を殆ど完了しました。彼はきわめて勤勉です」(D27:15)

六月二十三日

ミス・ヒドンに写真を送ってもらった礼状を書く。(46:53)

六月二十九日

(陰曆五月二十日)薩摩藩の米国留学生、大原令之助・松村淳蔵ら六名、政府留学生として認可され、「老人老ケ月洋銀六百元」を支給される。(126:192, 227)

六月三十日

(陰曆五月二十一日)日本最初の小学校、京都市二七番小学校「柳池校」開校。(173:27)

七月五日

彼はユーモアの感覚が鋭かった。米国独立記念日の翌日のこの日、街頭で「走ってきた子供がいきなりかんしゃく玉を鳴らした。新島はにっこり笑ってわたし「ホランド」の方をむき、『ねえ、ホランド君、あれは残留放電だね』と言った」(D27:23)

* ライデン瓶の放電のあと、かすかに第二次の放電が起こることが時々あるという。独立記念日にアーモストでも火花を打ち上げて祝ったものとみられる。

七月十三日

アメリカン・ボードは日本伝道を年会に提案することを決定、中国に派遣予定のD・C・グリーン

Daniel Crosby Greene の出発を一カ月延期する。(E8:2, F4:14)

この年、アメリカン・ボード中国派遣宣教師 H・ブロジヒット Henry Blodgett が帰国の途中、日本に立ち寄り、実情を調査、ボードに日本への伝道開始を進言する。(E8:2)

* アメリカン・ボード American Board of Commissioners for Foreign Missions (米国外伝道委員会) は、一八一〇年に設立されたアメリカでもっとも古い超教派的な外国伝道組織である。A. B. C. F. M. はその略。

七月十五日

アーモストを朝十時半に発し、ハートフォードに向かう。旧知の D・E・バートレットを訪ね、市立図書館、州議会議事堂に案内される。(H6:54)

七月十六日

ハートフォードからミドルタウンへ行く。ウェスレアン大学の卒業式がメソジスト教会で行われているので、見学に行く。会堂の入口でハダムから来た学友 James Olney Averill に会って、ハダムで会うべき人、新島の欲しがっている鉱物の手に入る場所を教えてもらう。ハダム行き汽船を待つ間に、フェリーボートで対岸のポートランドの砂岩採石場へ行く。恐竜の足跡の化石を沢山見つけたが、事務所の人は一つもくれなかった。午後六時発の船でミドルタウンを発ち、激しい雷雨の中をハダムに到着する。W・B氏の好意で食事と部屋を提供される。(H6:54)

七月二十一日

ハダムを出発、歩いてニューヘイブンに向かう。午後約一七マイル歩いたが、鱒釣りやイチゴ摘みにかなりの時間を費やす。ノース・ギルフォードの農家で一夜を過ごす。(H6:54)

七月二十二日

朝激しい雨だったが、午後晴れあがり、暑くなる。小川でシャツと靴下の洗濯をする。ニューヘイブンに着き、ホテルに泊まる。(H6:54)

七月二十三日

イエール大学の卒業式を中央教会に見に行く。式場で吉田〔伴七郎、本名・種子島敬輔〕大原令之助

〔本名・吉原重俊〕という二人の日本人に会う。鉱物学のコレクションと美術館を訪問する。(H6:56)

七月二十四日

プロヴィデンスからハマイル離れたスミスフィールドの石灰石採石場を訪れ、良い標本を見つける。

プロヴィデンスで一泊する。(H6:56)

七月二十七日

ニューヘイブン(一夜半日)→プロヴィデンス(二夜一日)→ウエスト・ハーウィッチ(三・五日)→チャタムに到着。夏休みの残りを此処で過ごす。(H6:56)

八月十一日

テイラー船長の家族と四マイル離れたオーリンズに行き、イチゴを一四クオーツ摘む。(H6:56)

八月十二日

近所の人々と小舟で一〇マイル沖まで出かけ、タラを六十七匹も釣る。中には一ヤードを超えるものもあった。(H6:56)

九月二日

(陰暦七月二十六日)新島雙六はこの日付の手紙の中で、神田孝平、吉田賢輔、杉田廉卿、松本良純、川田剛らの消息を伝える。川田について「当節は山田文作と改名し、神田小川町上屋敷に住す」また杉田廉卿については「重病にて玄端君沼津え連れ帰り候由」と書く。(F3165)

九月三日

(陰暦七月二十七日)民治、安食「粟津」桂二郎に依頼して七五三太に手紙を出す。(H1709)

九月十二日

(陰暦八月七日)粟津桂二郎の添え状を付した新島の手紙(六月十五日付)が民治の元に届けられる。(H1709)

九月十二日

アーモストの学友たちとワーナー山 Mt. Warner に登り、コネチカット河岸にインディアンの遺跡をやる。(H6:58)

九月十四日

マサチューセッツ州ベルチャータウンのキリスト教集会に出席する。(H1215)

九月二十六日

アーモスト高校の校長になったホランドより両親への手紙に「新島がケーキを片付けるのを手伝ってくれます。……ジョセフ「新島」は愛すべき、善良な男です。もっと健康であってほしいのですが。彼は勉強をしすぎるのです」(D27:15)

十月七日

アメリカン・ボードはS・C・バートレット Samuel C. Bartlettらの委員会の報告に基づき日本伝道の開始を決定。D・C・グリーンが最初の日本派遣宣教師に指名される。(E8:2)

十月

ブラウン牧師夫妻、ミス・キダーは、六日に横浜を出発、新潟に向かう途中、安中の本陣に泊まり、新島弁治、民治親子に会う。(J10:30)

十月二十四日

The American Missionary Society セクレタリーの説教を聞き、感銘を受ける。(全6:58)

十一月一日

(陰暦九月二十八日)新島雙六、昌平坂学問所に入学のため安中を発つ。陰暦十月二十七日入寮する。(E167)

十一月十八日

(陰暦十月十五日)横浜の栗津桂二郎よりこの日付で来信、一八六九年六月十五日付の新島書簡を民治まで取り次いだことを通知し、かつ速やかに帰国して福音を講じ、神の大道を教諭するように希望する。(T642)

十一月二十九日

朝寝過ぎたため午前の汽車に乗り遅れ、午後三時ボストン発の汽車に乗る。夜七時アーモストに着、シーリー教授宅に泊まる。(全6:59)

十一月三十日

D・C・グリーン夫妻、横浜に到着する。(E8:2)

十二月八日

十一月下旬にミス・ヒドンに招待され、滞在したことへの礼状を出す。(全6:59)

十二月十一日

土曜日、H・S・テイラー船長、東ボストン港において岸壁とフェリーボートの間に挟まれて死亡す

る。(全6:61)

十二月十三日

朝、テイラー船長の死亡を知る。電報局で間違いのないことを確かめて、ボストンへ向かう。(全6:61)

61, 全10:107)

十二月二十一日

テイラー船長の遺族に慰めの手紙を書く。(全6:61)

この年、ホランドはアーモスト高校の校長に就任するが、三カ月で辞任し、ウエストボロー高校の校長となる。新島は、ホランドがアーモストを去るまで、彼についてラテン語の勉強を続ける。(D27:15)

明治三年（一八七〇）二十八歳

一月七日

ミス・キダーから手紙が届く。昨年秋、新潟へ向かう途中、安中に立ち寄り新島民治・雙六を訪うたことを伝える。（全3：81，全6：70）

一月二十九日

American Tract Society 終身会員となる。（全1240）

二月六日

フィリップス・アカデミーの旧師W・B・グレイプスを通じて紹介されたH・A・スチムソンに手紙を送り、彼の日曜学校の子供たちのため、日本の宗教や習慣、教育等について説明する。（全6：65）

二月十八日

ミス・キダーの手紙を友人たちに読んでもらうため、ミス・ヒドンに送る。（全6：70）

三月二十五日

ミス・ヒドンに手紙を書き、リユーマチのためここ三週間ばかりシーリー教授宅に厄介になっていること、教授夫人から親身な看護を受けていることを記す。（全6：71）

「三月より悪き風邪及熱病をやみて兎角身体虚弱、已む事を得ず同八月迄廃学致し居候、然し病氣中には『アーモスト』大学之教師ジュリオス・エッチ・シーレと「申」者……自身之家へ引取り厚加養し呉」候。（全3：85）

三月三十一日

D・C・グリーン夫妻、プロジェクト博士の勧めにより、神戸に移り、中山手通六丁目二十二番地に住む。神戸ステーション設置、ジャパン・ミッションのマザー・ステーションとなる。（全8：3）

四月一日

金曜日、病氣はだいぶん回復し、この日より戸外に出て、シーリー宅の庭を歩くまでになる。（全10：109）

四月五日

ハーディ夫人に手紙を書き、病気はだいぶん回復したこと、秋からアンドーヴァー神学校 Andover Theological Seminary へ進学させてくだるとの申し出に、心からの感謝を述べる。(46:72)

四月七日

新島民治・雙六の手紙(明治二年七月二十六日付)が到着する。(43:80)

* (46:72) では四月八日とある。

四月十三日

フリント牧師の住むヒンズデイルに向かう。(46:73)

四月十七日

フリント夫妻が集会に行っている間、同家の留守番をする。朝、*The Early Day of Elisha* を二、

三ページ読み、午後、静かに瞑想にふける。(46:74)

四月十九日

シーリー教授の長女エリザベスに手紙を書く。ヒンズデイル到着のこと、毎日夜九時間眠り、昼寝を
一、二時間していること、体調は良いが、愚かで怠惰な生活を送っている、と伝える。(46:73)

「日々山に登り木の実を拾ひ溪水に魚を釣り、折々には紙筆を尚仕たくし山水の風景を画き……九月
の下旬ニハ元之如く健全ニ相成候」(43:85)

四月二十二日

雙六に手紙を書き、横浜に出て英学を学ぶことを勧める。また、アーモスト大学の学生に所望されて
写した箱桶脱出時の扮装写真を同封する。「杉田君重病の由甚氣之毒千万」「草花の種慥ニ落手仕候」
と書く。(43:80)

* 杉田廉卿(一八四五～一八七〇)は明治三年に沼津で亡くなったようである。二十五歳。(E26:12, 15)

日本の植物種子百個をW・S・クラーク学長のいるマサチューセッツ州立農科大学に寄付するのは、
この頃のことか。(J37:152)

七月十二日

クラス・デーに級友から選ばれて日本語で演説する。(410:398)

七月十四日 アーモスト大学卒業式、Bachelor of Science [B. C.] の称号を得る。(全1: 4, 全10: 398)

七月二十五日

シーリー教授夫妻に手紙を書き、ヒンズデイルに予定通り到着したこと、夫妻のキリスト教的隣人愛に満ちた親切に対し厚く礼を述べる。日本を去ったときよりアーモストを去ったときの方が残念であった、と伝える。(全6: 75)

* 後年、新島が帰国する際、シーリー教授は彼を評して「金をメッキするわけにはいかない」と言ったという。(全10: 82)

八月十日

(陰暦七月十四日) 新島弁治、コレラにより死亡。八十六歳。(上1679)

九月九日

ミス・ヒドンに手紙を書き、この冬以来の病気で遅れた大学での勉強を取り戻すため、夏休み中フrint牧師の家で過ごしたこと、明日、ここを出発してアーモストに帰り、シーリー教授と安息日を過ごすこと、万事うまくゆけば来週火曜日から水曜日にアンドーヴァーに行きたいこと等を記す。フリント夫人は七週間ほど病床にある旨も伝える。(全6: 77)

九月

アンドーヴァー神学校に入学する。(全1: 4, E14: 13)

九月十八日

〔講義開始か〕Historical Study of the Scripture の筆記を始める。(上892)

十月十一日

(陰暦九月十七日) 新島民治、家督を相続する。六十一歳。(上1726, 上1727)

十月二十五日

新島民治、栗津桂二郎を通じてヒンズデイルに滞在中の新島書簡(四月二十二日付)と箱桶脱出時の扮装写真を受け取る。(T643)

十月三十日

ホランドは両親に宛て次のように書く。「木曜日にはジョゼフ新島から手紙がきました。彼はアンドーヴァー神学校に行っています。彼は今日をわずらっています。相当悪化したため、読むことが殆ど

できないほどです。……彼は手紙の中に写真を一枚同封していますが、これはスリッパを送ってくれた妹さんに、ということですよ」(D27:16)

十一月二十四日 ハーディー夫妻から収穫感謝祭に招待される。この頃、ホランドからも招待される。(D27:17)

十一月二十七日 (陰暦閏十月五日) 森有礼、ワシントン駐在少弁務使となり、米利堅交際事務、留学生管轄を命じられる。十二月二十四日(陰暦十一月三日)横浜発、赴任する。(J49-2:833)

十一月二十八日 ホランドより両親に発信「収穫感謝祭も終わりました。新島はウエストボロを訪問するかもしれない、もし来られなければ春にはきっと訪問するから、と書いてきました。彼は来ませんでした。心配していた通り、ハーディー氏の方に行ったのです」(D27:17)

十二月十二日 American Sunday School Union の終身会員になる。(H1241)

十二月二十二日 (陰暦十一月一日) 新島家は、安中藩政庁より家禄現米九石を永世下賜する旨の奉書半切を受け取る。(F643)

十二月二十四日 アーモストのシーリー教授よりこの日付で来信、新島にクリスマス・プレゼントとして時計を送ったことを伝えてくる。(F2317)

十二月二十六日 ハーディー家に招かれ、その家族と共に夕を過ごす。(H6:76)

十二月二十七日 ポストンよりアンドーヴァーに帰る。シーリー教授に宛て、教授夫人から贈られた時計についての礼を述べる。(H6:78)

明治四年（一八七一）二十九歳

冬、リューマチにかかり、数週間何もできない状態が続く。（全10：114）

一月七日（陰暦十一月十七日）新島民治、隠居願いを藩庁に差し出す。（上1677, F643）

一月十日
ハーディ夫人に手紙を書き、自分の病気や痛みを通じ、苦しみ、死にかけている救い主に前以上に共感を覚える、と記す。（全6：79）

一月二十日
この頃、アンドーヴァー近郊のローレンスに行き、日本へ送るため写真を撮影する。（全3：85）

一月二十五日
雙六の手紙（明治三年八月五日付）を受け取り、祖父の弁治が死亡したことを知る。（全3：84）

一月二十九日
ハーディに手紙を出し、祖父が死んだこと、フィリップス・アカデミーのS・H・テイラー校長が急死し、次の火曜日に葬式が行われることを伝える。（全6：79）

一月二十九日（陰暦十二月九日）新島雙六、東京より安中へ帰る途中、本庄付近で吐血する。（上1722）

一月三十一日
S・H・テイラー校長の葬式が行われる。（全6：80）

二月四日（陰暦十二月十四日）雙六、家督を相続、現米九石を襲祿する。（上1677, 上1681, F643）

二月五日
デーヴィッド・I・ヒドンに会う。（全6：80）

二月六日
月曜日、学友の助けを得て旅行の準備をし、午後の二番列車でボストンに向かう。アーモスト時代からの友人 William Henry Hubbard と同行する。ボストンの駅ではハーディ家の轎が待っており、おかげで冷たい風に当たらずにハーディ家にたどり着く。（全6：81）

二月十日

炎症性リユーマチと眼病が悪化したため、ハーディ家に引き取られて療養していることをミス・ヒドンに知らせる。(全6:81, E14:13)

飯田逸之助に手紙を書く。「小生帰国一条如何致して宜き哉 何卒先生之周旋をわずらわし度候」「且其レノミならず小生頗独一真神の……耶蘇福音を攻め候間……何レ帰国之上心力を竭し此道を伝へんとす……何卒先生政府之有司と内々御談判被成小生帰国之義相叶候様御周旋被下候ハ、小生ニ於而万謝之至ニ候」(全3:84)

二月十一日

雙六に手紙を書き、写真数枚を同封する。いまアンドーヴァー神学校に在学、あと二年ほど留学したのち帰国するつもりであること、また「兄之帰朝之義は如何致而宜ろしき哉……政府之許免を受けず夜半に箱楯より出港せし故、其罪国刑を免れざるを得不得」と記す。この手紙は横浜のバラを経て安中の□□屋周助まで送られる。(全3:85)

二月二十二日

(陰曆一月四日) 黒田清隆開拓使次官、留学生山川健次郎ら七名を連れて渡米する。七月二十四日帰国。(G3:5)

二月二十五日

飯田逸之助に発信、再び帰国の方法につき相談する。文末に「小生の亜国に於ての親友中に、亜人と相成り、亜国大統領の保護を得て日本へ帰るべきが宜しきと、若し日本人刑を加へば亜人の大統領より宜しき所置の有之候、右の段如何して宜しきや」と記す。(全3:90)

三月三日

宣教師O・H・ギューリック夫妻 Oramel Hinckley Gulick 神戸に到着する。(E1)

三月十五日

ワシントン駐在少弁務使・森有礼とボストンで会う。森は、新島が帰国の請願をすれば、これを日本政府に取り次いでパスポートを得るように斡旋する、と言う。また、ハーディに対し、新島のために

支出した費用のリストを提出するよう求める。新島はまた日本政府高官のキリスト教に対する見解を聞く。これにより、日本が遠からずプロテスタント宣教師に開放されるだろうとの感触を得る。(H6 : 82)

三月二十一日

(陰暦二月一日) フリント夫人に手紙を書き、森少弁務使に会ったことを述べ、もしハーディが森の申し出に応じた場合、自分は日本政府に束縛されること、自分は神よりの務めを果たすため自由な日本人でいたいのだ、と記す。(H6 : 82)

新島雙六の養子として安中藩植栗義達二男・棟弥(のち公義)を届け出る。(E1677)

この頃、ハーディの紹介で船員チャペル(セイレム・ストリート)とチェルシー病院での船員祈禱会に出席する。(H6 : 83)

三月二十七日

(陰暦二月七日) 新島雙六没、二十五歳。安中妙光院に葬る。(E1677, E1679)

三月二十八日

The glass factory at East Cambridge という英文のメモを作る。(E1111)

三月三十一日

W・J・ホルランドの住むウエストボローを訪ねる。(H6 : 83)

新島はホルランドのところに一泊し、彼の案内で州立感化院や日曜学校など三カ所で話をする。(D27 : 17)

四月一日

午後、ホルランドとウエストボローの Reformed School に行く。監督者が丁寧に案内する。(H6 : 83)

四月二日

日曜学校で教えるため、朝、村人たちと再び Reformed School へ行く。放課後、生徒たちに日本の

風俗、習慣について話をする。(H6 : 83)

四月三日

ホルランドが校長をしているウエストボローの高校を見学、午後は一人で過ごす。(H6 : 83)

四月五日

H・S・テイラー船長未亡人より船長の形見として N. Bowditch, *The New American Practical Navigator* を贈られる。(D5:54)

四月二十一日

(陰暦三月二日) 京都の洋学所、元長州藩邸の勸業場内に移転して、欧学舎と改称。(H11:58)

五月六日

(陰暦三月十七日) 勝海舟「……米国留学、私に行きたる者所置の事等談ず」(J31-19:312)

五月十六日

森有礼に呼ばれてアーモストに行き、彼と二日間過ごす。森より、アメリカ風の学校を日本につくり、それを監督するつもりはないかと尋ねられる。新島は計画には賛成したが、監督になることについては確答しなかった。新島の目的は祖国に福音を伝えることにあったからである。(H6:84)

「森は一人の日本人をマサチューセッツ農科大学に入学させるために出掛けたのである。この時シリ教授は、伯父の L・P・ヒコック博士をはじめとするアーモストの知識人を招じて森弁務使の歓迎会を催し、新島も陪席した」(D27:17)

この頃、森有礼はアメリカ訪問中の黒田清隆に新島の人物につき紹介する「か」。(E1578)

D・C・グリーンと O・H・ギューリックは日本の信教の自由を求める訴えをアメリカン・ボードに送る。(J62:73)

五月十八日

五月二十日

(陰暦四月二日) 森有礼より外務省に宛て、新島七五三太の戸籍を糾し、国外脱出の罪を許して「渡海留学免状」を渡されたい旨を申立てる。その文中で新島につき「当国人民書生中ニテモ却テ彼ヲ標準ト致シ候様子ニ相聞ヘ候」「同人儀脱走ノ節ハ御国内未タ渡海等ノ規則モ一定不致、総躰御一新ノ罪過ハ科ニ因リ御赦免相成候義ニ付……免状御渡相成候儀ハ強テ差支リモ無_レ之哉ト存候」「是迄ノ留學生中ニハ実ニ希有之儀ニ付……政府ヨリ被_レ差出_レ候留學生ト被_レ仰付_レ度」云々。(H16, J34-3:

五月二十六日

新島楳弥、家督を相続する。(E1680)

五月二十八日

ホランド、家族に宛て新島がアーモストで森有礼に会ったことを伝える。(D27:17)

六月十三日

ハーディ夫人に手紙を書く。パスポートを得るために帰朝請願書を書いたけれども、キリスト教の信仰を隠したまま帰国したくないこと、政府からの干渉を避けるために新島の存在を公然と知らせることは望ましくないので、請願書は提出しないことにしたと伝える。また政府の奨学金を得るよりも、ハーディの庇護を受けたいとも書く。(46:84, 410:117)

六月十八日

(陰暦五月一日) 川田剛、渡米する名古屋藩士丹羽昭陽に新島宛書簡を託す。雙六死亡のこと、渡米

六月二十一日

した門人の鳥取藩士池田某、佐賀藩士多久某について依頼、一度帰国してはどうか等を記す。(T644)
 アンドーヴァーからA・ハーディに手紙を送り、休暇中はナイアガラの滝、トレントンの滝、ユチカなどの地域を廻って化石や鉱物を採集したいこと、ユチカ近郊の友人から招待されていることを伝える。また費用の一部は日本について講演することで得られるだろうと記す。(46:86)

六月二十三日

(陰暦五月六日) 大学南校より安中の留守宅に「此度弁務使申立ニ而更ニ留学被仰付候、同人年齢取調勿々可被申出旨御達有之」このため藩庁(東京)を通じ、七月一日(陰暦五月十九日)、外務省に届け出る。(E1678)

アンドーヴァーのエドワード・テイラーより、教え子たちによって編纂されたフィリップス・アカデミーのS・H・テイラー校長の追悼録“A Memorial of Samuel Harvey Taylor”を贈られる。
 (E29)

六月二十九日

神学校の夏期休暇始まる。(H6:85)

六月三十日

(陰暦五月十三日) 安中藩庁の小田稔権大属は外務省より呼び出され、在米の新島七五三太の藩籍、身分等につき脇屋大録より尋ねられる。さらに米国との文通に際して外務省の公便利用の便宜をはかしても良いと言われる。この旨を小田(陰暦五月二十二日)より民治(同二十六日)へ通知する。(E1722)

(E1722)

七月六日

この日、D・C・グリーンの日本語教師・市川栄之助、神戸で逮捕される。(E8:4)

(陰暦五月十九日) 安中藩権大属小田稔を通じ外務省へ新島七五三太の「藩籍を確認し、箱楯で海軍学科修業中、米船に乘組み渡米、アーモスト大学に入学」のことを書面にして提出する。即刻、弁官より小田を呼び出し、新島の米国留学申付状を渡すと共に「留学中入費都而朝廷与被下候旨も為心得御達有之候」と伝える。このことは安中の新島棟弥まで伝達(陰暦六月二十日)される。(E1678)

七月上旬

テイラー船長の兄弟の家のあるレオミンスター Leominster, Mass. の五日間(過)す。教会や日曜学校で日本について話をする。教会での通常の礼拝の席上、人々の前で話をしたのは初めてで、日本の歴史、国民の最近の変化や進歩について話す。夕方の日曜学校での話も子供たちに喜ばれた。(H6:87)

(陰暦五月二十五日) 新島七五三太留学の件につき渡航免状、留学免状を取りまとめ弁官より外務省へ送付する。(H16, J34-3:659)

七月十二日

新島民治、藩庁より呼び出されて次のように伝達される。「倅七五三太義米利堅政府与外務省江倅修業も熟達いたし候趣懸合に相成候付御藩御呼出ニ而御尋之趣ニ而猶又被為命所も可有之之趣有之候段政府与御沙汰之趣且又文通等差出候ハ、同所江差遣候ハ、外務省江御頼相成候趣被申聞候」(E1722)

七月十三日

七月十四日

六、七月

(陰曆五月)

(陰曆五月二十六日) 新島七五三太の留学継続を許可するにつき、その年齢を届け出るよう大学南校より新島楳弥に申し渡す。(陰曆六月十五日、藩庁より楳弥に達せられる)(上1722)

(陰曆五月二十七日) 民治より七五三太に手紙で、藩籍確認についての詳細を知らせる。(F645)

免 状

安中藩貫族

新島七五三太

辛未二十九歳

米国留学免許候事

辛未五月

大 学

[印]

新島七五三太

米国留学申付候事

辛未五月

弁 官

安中藩

新島七五三太

右之者此度海外旅行之義願出候間差許申候就而ハ通行無差支様御免許被下且差掛要用之義ハ相当之御扶助被下候様其筋江依頼いたし候

大日本国外務卿

明治四辛未

沢從三位

清原宜嘉

書判

五月

(全10:口絵写真, 上1722)

七月中旬

アーモストのシーリー教授宅に二日半滞在、大学の卒業式に出席し、楽しむ。(全6:85)

七月十四日

ボストン・オルバニー鉄道会社が掘っているフーサク・トンネル(全長四・七五マイル)を見物する。東側より入り、トンネル内で出会ったボストン港の練習船の先生と一緒に中央シャフトまで行く。(全6:87)

七月十五日

前夜からフーサク山 Hoosac Mountain 山中で一夜を過ごし、早朝食事をして四時半に出発、雄大な景色を見ながら一人で山を下る。日記に三行の英詩を書く。

朝六時前にノース・アダムズに着く。靴工場の中国人たちを訪問、リーダーの Ah Sing 以外は英語を話せないで筆談をする。彼らは中国様式の生活を守っていた。(全6:87~89)

七月十六・七日

ニューヨーク州トロイに滞在、三人の日本人留学生(目賀田種太郎・松本莊一郎・山田要吉)に会う。(全6:89)

七月十八日

オルバニーに四時間滞在し、医科大学、州立地質学室、州庁を見物し、カークランドに向かう。(全6:89)

七月下旬

この頃より八月上旬までカークランドに住むアーモスト大学時代の友人 G・E・サザランド(George Easton Sutherland)の家へ一週間過ごす。ここを根拠地にしてクリントン、ダンスヴィル、オリスカーニー瀑布、ウオーターヴィル、ニューハートフォード、トレントン瀑布を見物する。(全6:89)

八月一日

(陰暦六月十五日) 七五三太米国留学につき年齢取り調べのこと、藩庁より椋弥に伝達される。「七月十三日の項参照」(上1722)

八月三日

夕刻、ニューヨーク州ロックポートに到着、七日まで滞在する。(全6:86)

八月六日

八月

八月十五日

八月十八日

八月二十二日

九月

九月二日

〔陰曆六月二十日〕七五三太の藩籍、渡米事情を外務省に書面で提出したこと、弁官より留学申付状の受け取り、官費支給のこと等が藩庁より楳弥に伝達される。〔七月六日の項参照〕(L1723)

ナイアガラ瀑布を見物する。カナダ側にある瀑布博物館の所有者バーネット Barnett と知り合い、二日滞在、馬車を提供されてさまざまな地点から滝を観察する。また無神論のドイツ人青年と出会い、議論をする。バーネットと滝を背にして写真を撮影する。(全6:90, 全10:口説写真)

ナイアガラの吊橋を発、オンタリオ湖を渡ってカナダ側のいくつかの地点に立ち寄る。(全6:91)
エバンズ・ミルズよりハーディ夫人に手紙を出し、同所のアンドーヴァー神学校学生の家滞在中に滞在中、翌日(十九日)夜、話を頼まれているので、その準備をしなければならないことを伝える。
(全6:86)

森有礼よりこの日付で、留学免許状とパスポートを郵送してくる。(L3155)
旅行から帰ると川田剛が丹羽昭陽に託した手紙が届いていた。弟・雙六の死を簡単に伝え、父親が悲しんでいるので機会を見て帰国してはどうか、という文面であった。

また今学期フィリップス・アカデミーに入学した日本人から、最近江戸から来た日本人がボストン・ハイランドにすることを教えられる。(全6:91)

土曜日、ボストンへ行き、因州侯の大参事池田徳潤に面会、弟の死亡について尋ねるが「一切病気の事相分兼候、然し彼所にて池田の同藩原長政〔のち原六郎〕薩州佐土原の大公子島津忠亮、清水様従五位御嫡子等の御方々へ対顔」し、五日朝〔実際は四日朝〕まで池田のホテルに同宿する。(全3:91)

* (全3:91, 全6:91) によれば四日朝まで滞在中になる。

九月二日 (陰曆七月十八日) 大学を廃し、文部省を創設する。(157:47)

九月三日 池田、テイラー船長夫人と一緒に安息日を過ごす。(46:91)

九月四日 月曜日、ステイツ街にハーディJr.を訪ね、はからずも父からの手紙を渡される。弟の死を伝えたものであった。「残念至極言語ニ難堪え……小子年来之希望空く春雪之如く消行きしは万里同情大人ニ於も御察し可被下候」(43:91, 46:91)

九月五日 民治に手紙を書き、弟の死を悼む。また森有礼の尽力によって留学許可状、旅券の入手を伝える。さらに、いったん乗り出したうえは学業の成るまで帰国する意志のないことを告げる。この手紙は十月三十一日、父親に届く。(43:91, 1722)

九月十七日 ハーディ夫人に手紙を書き、弟が死んだこと、事情を知るためボストンにいる日本人を訪ねたこと、日本政府よりパスポートを送ってきたこと、ニューヨーク州、カナダから地質学の標本を沢山持って帰ったことを伝える。(46:91)

九月二十七日 A・ハーディからパスポートを見せるようにとの手紙を受け取ったこと、来週セイレムで会えると思うので、その際説明したい、と返書を書く。(46:92)

十月一日 (陰曆八月十七日) 新島七五三太および旧鹿兒島藩士野村市助・湯地治右衛門〔定基〕の三名を蝦夷地開拓御用のため至急呼び寄せるよう、文部省で決定。(64:1)

十月七日 (陰曆八月二十三日) 宣教師バラ、新島書簡(一八七〇年四月二十二日、一八七一年二月十一日付)を民治に届ける。(1709)

十月九日 (陰曆八月二十五日) 夜四ツ時(午後十時)すぎ、新島民治に東京より通知が届く。「今般非常之御

十月上旬

詮議ヲ以テ前罪御赦宥相成候間当人親元江前文之御趣意奉体シ早々帰朝スヘキノ書状遣シ呉候様極急御申遣給度候也 開拓使」というもので、民治はその場で書状を認め、飛脚に渡す。(E1722)

アメリカン・ボード第六十二年会がセイレムで開かれ、新島も出席、ハーディおよび宣教師として日本に向かうJ・D・デイヴィス Jerome Dean Davis と初めて会う。この大会で日本に信教の自由を求めるようアメリカ政府に対して決議を行う。(全2: 675, 全6: 92, 94, E12: 117, J62: 76)

十月十四日

(陰暦九月一日) 熊本洋学校開校。L・L・ジェーンズが教育にあたる。(J6: 541)

十月十七日

(陰暦九月四日) 米国留学生新島七五三太・湯地治右衛門・野村市助の三名、開拓使御用につき、至急帰国するよう森弁務使に通知が出される。(J49-2: 841)

十月二十九日

(陰暦九月十六日) 勝海舟「寺島外務大輔へ外国へ私に行候者、所置相談」(J31-19: 35)

十月

山本八重、兄の覚馬を頼って入京する。母・佐久、姪・峰を同伴。(D6: 40)

十一月七日

ハーディ夫人に手紙を書き、目下バーク教授 Edwards Amasa Park の講義を聞き、それに関する本を読んでいることを知らせる。(全6: 94)

十一月三十日

アンドーヴァーよりミス・ヒドンに手紙を書き、次の日曜日〔十二月三日〕セイレムのセイヴォー船長のところへ行くかも知れないので、もしオールド・サウス・チャーチの礼拝に出席しなかった場合、ミッショナリーの集会では話ができなかった旨、スミス牧師に伝えてもらいたい、と頼む。(全6: 94)

十二月一日

J・D・デイヴィス、神戸に到着、グリーン、ギューリックらに迎えられ、彼らの宿舎に入る。(E12: 118)

十二月二十三日

(陰暦十一月十二日) 岩倉特命全権大使らアメリカ号に乗り、横浜を出港する。(J50: 328)

十二月二十四日 友人の Roderick Terry より W. H. Prescott, *History of the Conquest of Mexico*. 三巻を贈られ

る。(D5:71)

この年、ワイルド・ロウヴァー号、ロングアイランド沖で座礁、廃船となる。(410:381)

明治五年（一八七二）三十歳

一月二日

アメリカン・ボード在日宣教師団による第一回宣教師総会が神戸諏訪山下のデイヴィス宅で開かれ
ぬ。(E8:5, J62:94)

一月十五日

(陰暦十二月六日) 岩倉大使、駐日米国公使 C・E・デロング C. E. DeLong からサンフランシスコ
に入港すぬ。(E16:3)

二月十四日

(陰暦一月六日) 新島について「先般御用ニ付帰朝御達相成候処同人儀唯今帰国仕候テハ年来ノ千辛
万苦空敷相成格別ノ実用ニハ相立申間敷、仍テ今兩三年程修業仕度……森少弁務使へ申出同使ヨリ無
余儀相見候趣申来候」そのため今暫く留学を許可し、学費は開拓使より支出すべきか否か、文部省よ
り太政官へ伺い書を差し出す。(H16)

二月十六日

ボストンからフrint 牧師に手紙を送り、岩倉使節団にアメリカの教育制度について説明するためワ
シントンに来るよう、森公使から要請されていること、それで先週以来、そのための勉強をしている
ことを伝える。(全6:95)

二月十九日

勉強を再開するためアンドーヴァー神学校に戻る。(全6:95)

二月二十二日

ミス・ヒドンに手紙を書き、神学校に帰っていること、寒さと悪天候のため、あまり校外に出られな
いこと、また現在の部屋はフィリップス・ホール一階北入口の一号室であり、W・S・ハウランド

William S. Howland と同室であることを知らせぬ。(全6:95)

二月二十五日

〔陰暦一月十七日〕太政官より開拓使に対し、有用の見込みある人物ならば、新島の帰国を延期し、定額金をもって留学させてはどうか、と意見を聞く。(H16)

二月二十六日

〔陰暦一月十八日〕黒田開拓次官より太政官に対し、新島の留学費は大蔵省より出ていたのか、一年間いかほど支給していたのか、問い合わせる。(H16)

二月二十七日

〔陰暦一月十九日〕大蔵省より史官に対し、新島の学費については、かねて文部省より別紙「三月一日の項参照」のように申越している。ほかの留学生は一年一千ドルである。(H16)

二月二十九日

〔陰暦一月二十一日〕岩倉使節団、ワシントンに到着する。(J33-1:424)

三月一日

新島の学費について文部省より大蔵省への説明「別紙か?」——新島は自費留学のところ未五月(一八七一年七月)さらに留学生を仰付けられ、他の生徒と同様に留学費を支給されるので、拝命の月日を申越すよう弁務使へ申達したが、未だ回答が来ないうちに「開拓使より」帰朝を命ぜられたわけである。(H16)

三月二日

ワシントンの日本公使館より電報を受け取り、岩倉使節団に協力するため召喚される。このため、夕方アンドーヴァーよりボストンに行き、ハーディ家に四日(月曜日)まで滞在する。マサチューセツ

州議会の教育局セクレタリーのホワイトに面会するためである。(H6:99)

三月三日

〔陰暦一月二十四日〕新島七五三太を開拓使へ採用するため、帰国命令を出したが、なお二、三年留学したいとの申し出があり、事情調査の結果、「同人願ノ趣無余儀情実」であることがよくわかった旨を黒田開拓次官より太政官に通知する。(H16)

二〜三月

〔陰暦一月〕元安中藩士族新島七五三太米國留学中壬申正月より開拓使管轄となる。ただし自費。

三月四日

(G3:1, G4:41)
ポストンを発し。(全6:99)

三月七日

木曜日、朝、ワシントン到着。いったん日本公使館に入り、森公使に会う。午後、森の個人秘書C・ランレン Charles Lanman に案内されてワシントンから二マイル離れたジョージタウンの宿所に行く。また宿所に近いランマンの家に滞在している日本の女子留学生の津田梅子・吉益亮子に会う。津田梅子は新島の古い学校友達である津田仙の娘であった。彼女らと食事をし、アメリカ式生活様式にこころを話す。(全6:96, 99)

三月八日

朝、アーリントン・ハウスにおいて森の紹介で田中文字部理事官に会い、教育視察に際しての通訳を依頼される。また同室で十二名の在米日本人留学生に会い、彼らの留学生規則取り調べの会合にも加わる。また岩倉全権大使の秘書官・田辺太一に会い、江戸での友人二人の消息を聞く。(全6:96, 125:128)

三月九日

公使館に行き、日本政府留学生の規則取り調べの会合に出席する。森公使、田中理事官と協議の結果、教育調査に協力することになる。新島の主な仕事は日本の普通教育についてのエッセイを書くことであった。(全6:99)

この日より二十三日(陰暦二月一―十五日)までのワシントン滞在中の日当(骨折料、車賃、食料費)十五日分およびアンドーヴァーより出向の旅費、合計八十二ドル四十五セントを文部省より支給される。(上1099)

三月十日

(陰暦二月二日)横浜海岸教会設立。同教会より「美国留学大徳望新島愛兄」に牧師就任を求める招

聘状を出す。(J22-1:251)

三月十五日

晴、田中理事官、その随行員と共に教育局長官のイートン將軍 Gen. John Eaton を訪問する。イートンに案内されて近くの女学校を見学する。午後、大統領秘書のバブコック將軍を訪れ(大統領不在)ホワイト・ハウスを見学する。またアンドーヴァー神学校卒業生のランキン牧師 Jeremiah Eames Rankin を訪問したのち、特許局を見学する。さらに事務所で教育に関する最新の報告書入手する。ハーディ夫妻に手紙を書き、森と田中からアメリカ北部諸学校の視察が終わり次第、ヨーロッパに渡り、諸国の教育制度を調査するので、それに同行するよう求められていること、夫妻にその許可を得たい旨を記す。(A6:101)

三月十七日

日曜日、吹雪のためワシントンのランキン牧師の教会に行けないので、近くのメソジスト教会に行く。また田中理事官とより頻繁に会えるようにするため、ワシントンに移ることにする。(A6:102)

三月十七日

(陰暦二月九日)この日「大使公信」第三号に「三等書記官ノ心得ヲ以文部理事官随行……」の辞令が出る。(J50:172)

* 文部理事官随行差許状(明治五年一月)特命全權使節(A10:口談四冊)

三月十九日

田中らとスミソニアン・インスチテュションを視察する。その後、随員らと別れ、田中の宿所アーリントン・ハウスで彼と昼食をすませ、国民教育について三時間ばかり話し合う。新島はここで、近代国家なり、市民であるためには、単に知性があるのみではなく、道徳上の主義がなければならないこと、キリスト教こそが民を治め、国を高める最良の道である、と語る。(A6:102)

三月二十日

(陰暦二月十二日)新島の学費を開拓使より支給することにつき、黒田次官より森少弁務使に申し入

れをする。(J49:842)

再びハーディ夫妻に手紙を書き、前夜の手紙でヨーロッパ行きのは非につき判断を伺ったが、慎重に考えてみると、それが本当に良いのかどうか、わからなくなった。一度日本政府と関係を持つとだんだん拘束されて、神への義務が十分に果たせなくなるのではないか心配だ、と記す。(H6:104)

三月二十二日

木戸孝允、田中、イートンおよび四人の日本人と共にコロンビア・カレッジ「ジョージ・ワシントン大学の前身」を参観する。午前九時より午後五時まで英語と日本語でしゃべり続ける。午後八時半、使節団の宿所アールinton・ハウスに帰り、木戸、イートンらと夕食を取り、歓談する。(H6:106)

(陰暦二月十四日)曇、木戸は日記に「……今日西島〔新島〕始て面会す同人は七八年前学業に志し脱て至此国当時已に大学校を経此度文部の事にも着実に尽力せり可頼の一友なり」と書く。(J47-2:147)

三月二十三日

この日一日、休息する。ハーディ夫妻より、日本の使節に随行してヨーロッパ視察に行くことに賛成する手紙を受け取り、感謝の返事を書く。(H6:105)

三月二十七日

(陰暦二月十九日)晴、木戸は「田中文部を訪へ西島等と談す」(J47-2:151)

三月二十八日

霧のち晴、ノースロップ父娘 Mr. Birsey Grant Northrop and Miss Harriet E. C. Northrop とその友人ミス・ページに案内されて、船で初代大統領ワシントンの邸宅のあるマウント・バーノンへ行く。一時すぎに百人以上の訪問客と一緒に上陸、バーカー博士夫人 Harriet Parker, Mrs. Peter Parker の用意してくれた昼食をワシントンの家の前で食べる。ワシントンの墓に詣でる。(L1099)

ハーディ夫妻に手紙を書き、田中理事官はアメリカ人の家庭生活を見たがっているので、ボストンに

行った際、泊めてもらえないだろうか、と頼む。また教育者ノースロップと使節団の会見に立ち合つて、その意見をノートに取つたことを記す。さらに木戸副使ともしばしば会つて、教育問題について意見を述べている旨を報告する。(全6:107, 全10:148)

三月三十一日

三月

パーカー博士の家族とメッチャース牧師の教会の礼拝に出席する。(全1099)

旧友の吉田賢輔、尺振八に手紙を書き、さき頃田辺太一に会つたこと、田中文化理事官と渡欧する予定であること、ただし、これは「日用取り」であり、日本政府の役人になつたわけではない、と記す。

(全3:97)

三〜四月

(陰暦二月)この頃、田中文化理事官随行中の諸経費について、次の内示を受ける。

手当(五・五ヵ月)九九〇ドル／賄代(一八〇日分)九〇〇ドル／旅費(米国内およびベルリン

まで)一六六ドル／計一一〇五・五ドル(全1224)

四月一日

民治に発信、田中と共にヨーロッパへ教育視察に向かうことになった旨を知らせる。(全3:98)

田中理事官と共にワシントンを出発、フィラデルフィア、ニューヨークの学校を視察しながらボストンに向かう。旅行中、同じ部屋に泊まり、キリスト教の奨励を続ける。

午後五時、ワシントン発→午後十一時数分前、ペンシルヴェニア州ハリスバーグ着、ボルトン・ホテルに入る。数日間滞在。(全6:108, 全10:150, 全1099)

木戸孝允はこの日(陰暦二月二十四日)の日記に「鍋島公、田中不二、西島七〔五〕三太等当地〔ワシントン〕を発す、西島は余此地に至り始と彼談話彼の厚志篤実当時輕薄淺学之徒漫に開化を唱ふるものと大に異なり、余と彼交自如旧知得其益不少後來可頼之人物也」と記す。(全147-3:153)

四月二日

ペンシルヴェニア州庁に行き、ウィッカーソン教育長にJ・イートン合衆国教育局長官の紹介状を提出する。(E1099)

四月三日

州庁に行き、ウィッカーソン教育長より公立学校制度につき話を聞く。(E1099)

四月四日

朝、再びウィッカーソン教育長を訪問し、ギアリー知事に紹介される。午後二時の汽車でハリスバーグを発ち、午後六時にフィラデルフィアに到着、チェスナット街のワシントン・ホテルに泊まる。

(E1099)

四月五日

男子の孤児用に一八四八年に設立された Girard College を訪問、学内を視察する。午後、アドルフ・ビルにある市教育委員会を訪ねるが、セクレタリーが不在だったので、インデペンデンス・ホールに行き、独立功労者の肖像や展示物を見学し、記念に独立宣言のファクシミリを買う。それより自然科学アカデミー、刑務所を見学する。(E1099, E1508)

四月六日

フィラデルフィア市教育委員会セクレタリーのホリウエルを訪う。午後は同市西部にあるブロックリー養老院を見学、帰路フェアモント公園を通る際、水車と蒸気機関で水を汲み上げているのを見る。(E1099)

四月七日

マーケット街のウィザロー牧師 Witherows の教会の礼拝に出席する。(E1099)

四月八日

フィラデルフィアより民治に手紙を書き、教育制度視察のため「中々帰朝と申事も出来難候」と述べ、両親の保養金として二百両送ることを知らせる。(全3:101)

市教育長スタントン、セクレタリーのホリウエルに案内されて市内の小、中学校を視察する。(E1099)

* 新島の日記に混乱があり、日付に重複が見られる。

四月六日 ニューヨーク到着、St. James で泊まる。

四月七日 オルバニーへ行き、ウィーヴァー教育長 Weaver に会う。

四月八、九日と十日の半日 Deveran House に滞在する。

この頃ペンシルヴェニア州立精神障害者施設（院長 I. N. Kerlin）を見学する。か。（J83—本郷：13）
ボストン・オルバニー線の中からフリント夫妻に手紙を書く。ワシントン出版以来、田中理事官と
同室で、彼にキリスト教を説いていること、田中は漢訳聖書を読んでいることを伝える。（46：108）
深夜、ボストンに到着、トレモント・ハウスに泊まる。（L1099）

四月十一日 田中と共にハーディ家に招かれる。（L1099）

四月十二日 田中と共に National History Room、バンカー・ヒル記念塔を見物する。（L1099）

四月十三日 セントラル・チャーチへ行き、日曜学校を訪ねる。（L1099）

* 四月十四日の誤りか。以後（L1099）の記述は二十四日まで一日ずれる。

四月十四日 田中とハーバード大学を訪問する。（L1099）

四月十五、十六日 フィルブリック Mr. Philbrick の案内で市内の公立学校を視察する。（L1099）

四月十七日 木曜日、ガラス工場を見学する。書店へ行き、ボストンで使用されている教科書を数冊買う。（L1099）

* 木曜日は四月十八日である。

四月十八日

滞在中のハーディ家からミス・ヒドンに手紙を書き、ボストンの学校や公共施設の見学を終えたこと、
ヨーロッパ諸国を廻ることを伝える。

この日、ハーディに案内されてローレンスの製粉工場、ブラッドフォードの女学校、アンドーヴァー

四月十九日

のフィリップス・アカデミー、アボット女学校、神学校を視察する。(全6:108, E1099)
 (陰暦三月十二日) 文部理事官随行に際し三等書記官待遇をすることが太政官より達せられる。(H16, J50:208)

この日、新島はアンドーヴァーに一泊、田中とハーディはボストンへ帰る。(全6:109)

ボストンで書籍購入の予約をする。(E1099)

四月二十日

〔二十一日〕ハーディの所属するサウス・チャーチの礼拝に出席する。(E1099)

午後、田中と再び書店に行く。その後、ウォッシュバーン知事を訪問する。"I called on Mrs. H. S. Taylor 不果。"(E1099)

四月二十一日

書店で支払いを済ませたのち、ボストンを出発、アーモストへ向かう。アーモスト・ホテルに泊まるつもりだったが、シーリー教授がやってきて、自分の家に泊まるように言われる。(全6:109, E1099)

四月二十二日

ボストン〔?〕で田中、新島が東部諸州の旅行に要した「会計相済候」。(E1099)

四月二十四日

シーリー教授、W・S・クラーク「マサチューセッツ農科大学」学長の案内でマウント・ホリヨーク・セミナリー(マウント・ホリヨーク大学の前身、ミス・M・エリス学長)に行く。また州立農科大学に行き、甜菜を見る。(E1099)

四月二十五日

田中と共にアーモスト大学に行く。鉱物・地質キャビネット、体育館を見学する。(E1099)

四月二十六日

スネル教授の Optical tubes の実験を見る。午後、シーリー教授、ヒチコック博士に招かれてノーサンプトン・インスチテュートを訪れる。ここでの教育法は今まで見てきた中でもっとも素晴らしいものだ、と記す。(全6:109, E1099)

四月二十七日

アーモストを出発、午後二時ニューヘイブンに着く。ニューヘイブン・ハウスでしばらく休息する。ノースロップの家を訪ねたが、引越して新しい家が見つからなかったので、翌朝まで待とうと思っていたら、夕方、彼が訪ねてきてイエール大学のノア・ポーター総長の家に案内される。(全6:109, E1099)

四月二十八日

日曜日、午前と午後、カレッジ・チャペルの礼拝に出席、夕方、セミナー・チャペルで神学部学生に話をする。ベーコン教授、フィッシュ教授に会う。(E1099)

四月二十九日

イエール大学、陳列館、歴史・美術館、Sheffield Scientific Schoolを見学する。図書館でジーボルトの『日本の風習』を見る。(全6:110, E1099)

四月三十日

B・G・ノースロップと共に朝八時、ハートフォードに向かう。聾啞施設、高校、ブラウン・スクール、精神病院、ニューブリテンの師範学校、州立感化院、メリデン金メッキ工場を見学する。十時にハートフォードからニューブリテンに行き、州立学校を見学する。そこでナガオカという日本人学生と会う。(全6:110, E1099)

五月一日

水曜日、田中とコネチカット州新知事の就任式に出席、四時間近く Open Carriage に乗り、ペンノドの後、ニューヘイブン州議会に招待されて州の有力者らと会食する。(全6:110, E1099)

五月二日

ニューヘイブンの三つの公立学校を視察する。短時間のうちに沢山のものを見せようとするノースロップの好意の結果、さしもの新島も疲れ果てて、この日の午後、静かに休息する。またポーター総長より教育調査に必要な書物のリストおよび英国で訪問すべき人々への紹介状を渡される。(全6:110, E1099)

五月三日

朝九時四十五分ニューヘイブン発、午後一時ニューヨークに到着、セント・ジェイムズ・ホテルに泊まる。(L1099)

この日付の新島民治宛の手紙に初めて「七五三太事新島約瑟」木戸孝允宛に「新島約瑟」と記す。

木戸孝允に対しては、アーモスト大学のJ・H・シーリー教授がこの夏インドに向かう途中、日本に立ち寄りたいと希望しているので諸有司中の然るべき向きへ添書を頂きたいこと、添書はアーモスト大学に在学中の来原彦太郎(「のち木戸孝正」を通じて渡してほしいことを要請する。(H3:104))

民治に対しては、ここ十日以内に渡欧すること、また前便で伝えた養老金二百円はハーディの出見世民治に対しては、ここ十日以内に渡欧すること、また前便で伝えた養老金二百円はハーディの出見世陸奥宗光県令を訪ね、バラの家まで案内してもらい、バラに頼んで金を受け取るように記す。バラ宛の添書および田中から陸奥宛の添書を同封する。(H3:102)

五月四日

W・T・ブース W. T. Booth に招かれ、朝、田中と共に彼の家に行く。(L1099)

五月五日

シーリー教授の紹介により、ニューヨークではW・T・ブースの家に滞在する。この日、ブースの父親W・A・ブースに案内されて、午前中はスチュアートの店、聖書館、クーパー学院へ、午後はフアイブ・ポインツ、新聞少年宿舍、タイムズ事務所を廻る。夜はまたW・A・ブースの兄のブース博士と一緒に食事をする。(A6:111)

十番街ユニバーシティ・プレイスのロバートR・ブース牧師の教会に出席する。午後、ビーチャーズ日曜学校(ダンキン校長)の記念祭に出席する。(L1099)

五月六日

(陰曆三月二十九日) 木戸、新島の手紙を受け取る。(J47-2:171)

五月八日

(陰曆四月二日) 五番街一八の Primary and Grammar School を訪れる。Grammar School の Upper Hall での礼拝に出る。聖書朗読は W・T・ブース、フラーとブースが話をする。その後初等科へ行き、各クラスの授業参観をする。さらにシティ・カレッジを訪れ、コインのコレクションやポートランド・パウダー「セメント」の製造工程を見学する。午後、クロートン水道に立ち寄り、次にユダヤ教会に行き、内部を見る。コロンビア大学、ルカ病院、YMCA を訪問する。(E1099)

木戸孝允より「田中、新島へ一書を送る」。(J47-2: 173)

五月八日

この日、ギューリック夫妻、第一回京都博覧会見物のため入京する。(E8: 6, J62: 97)

ブラックウェル島の刑務所、救貧院、ランデール島の学校を見学する。(E1099)

五月十一日

土曜日、田中と共に午前八時前、欧州航路のアルジェリア号(三七〇〇トン)に乗船する。十時頃、ジャージー・シティを出帆、イギリスに向かう。(H6: 114, E1099)

五月十二日

日曜日、曇霧、北緯四〇度二七分、西経六七度五三分、走行距離二九五マイル。船内での礼拝に出席する。(E1099)

五月十三日

曇霧、北緯四一度一一分、西経六〇度三七分、進度三三〇マイル。(E1099)

五月十五日

ニューファウンドランド沖を通過した頃から霧は晴れるが、雨となる。(H6: 111)

五月十六日

グリーン、ギューリック、デイヴィスの三人がギューリック宅「京都」で宣教師総会を開き、京都をミッシェン・ステーションとし、ギューリックが同地に滞在すること、それができないときは大阪に移ることを決議する。「ギューリックは七月まで滞在か」(E8: 6, J62: 98)

五月十七日

二十日頃まで強い向かい風のため難航、田中は船室に閉じこもるが、新島は船酔いせず、レキシント

五月二十日

ソのポーター牧師、グッドウィン夫妻、シカゴのE・エリオット教授や英国人らとデッキに出て談笑する。ただし、彼らが男女を問わず酒を飲むことに驚く。(H6: 112)
月曜日、晴、北緯五一度五分、西経一二度二九分、進度三〇〇マイル。夜半クイーンズタウンに寄港、これまでに二七三六マイル航行する。(E1099)

五月二十一日

午後七時、リヴァプール到着、税関吏がワシントン・ホテルまで案内してくれる。一日半滞在。ワシントンよりリヴァプールまで五十日間の費用の計算をする。(E1099)

(陰暦四月十五日) 京都府土手町丸太町下ル東側、九条家河原別邸に新英学校と女紅場を開校する。

山本八重、権舎長兼教導試験となる。(D6: 40, D10: 86, J73: 129)

* (H11) では開校は五月二十日(四月十四日)となつてゐる。

五月二十二日

十一時半、アーサー王子がこの町を出発したが、群衆のため顔を見ることはできなかった。スリッパとオレンジを買い、銀行で両替をする。午後 Sefton Park へ行く。(E1099)

五月二十三日

朝十時半の汽車でリヴァプールを出発、一時間足らずでマンチェスターに到着、クイーンズ・ホテルへ行く。部屋は不快で、喫茶室のウェイターにもうんざりする。午後、マンチェスター大主教ジェイムズ・フレイザー博士(イエール大学のポーター総長の友人)を訪問する。イギリスの教育に関する質問については、翌日来るように言われる。(E1099)

五月二十四日

午前中、フレイザー博士を訪れ、英国教育制度について見解を聞く。午後一時、昼食をご馳走になる。

午後四時二十五分の汽車でマンチェスターを出発する。グラスゴーへ向かう途中、疲れたので、一六

○マイル離れたカーライルに下車、午後九時、ホテルに入る。(E1099)

五月二十五日

朝、田中が疲れて起きられなかったので、一人でカーライルの町を散歩する。丘のうえの古城に立つて景色を見る。午後一時半、カーライル発、午後六時、グラズゴーに着き、クイーンズ・ホテルに入る。(全6:112, E1099)

五月二十六日

日曜日、朝、教会に行き、M・バーンズ牧師の説教を聞く。午後、ホテルに近いジョージ街のジョン・チャーチに行く。夜は“Sinners Friend”を読んで安息日を過ごす。(E1099)

五月二十七日

朝、クライド河沿いに散歩する。午前十時、ジョージ・スクエア六六のM・S・テイトを訪れるが、多忙のため、午後再び訪れる。彼の案内でまず Free Church Normal School を訪ねるが、モリソン牧師に後日来るように言われる。次に Established Church Normal School へ行き見学、さらに New University へ行く。テイトの家族と夕食。(E1099)

五月二十八日

午前九時半、Mr. Leitchs Normal School へ行き、宗教の授業などを見学。午後、テイトを訪ね、彼の友人でエディンバラに住むネルソンとディクソンへの紹介状を受け取る。再び学校を見学する。(E1099)

五月二十九日

F. C. Normal School, Elementary School を見学、午後四時十五分の汽車でエディンバラに行く。(E1099)

五月三十日

午前中ホープ公園のW・ネルソン、H・コルダーウッド教授、ヨーク・プレイスのW・ディクソン、チェスター街のフレーザ教授、ハナ教授を訪問する。午後コルダーウッド教授とエディンバラ大学を訪れ、サー W・ハミルトン、エディンバラ公の胸像、ダグラス・スチュワートの銅像を見る。また

図書館、Philosophical Room, Anatomy Department 等を見学する。(L1099)

五月三十一日

この日、ベリー、ギュリック、デイヴィスの三人は京都府顧問の山本覚馬と会談する。(J62: 98)
エディンバラ・アカデミーを訪ねる。校長はハーベイ博士、副校長はクライド博士、次にブライス博士の Collegiate Institute を訪問する。(L1099)

六月一日

田中と共にキャッスル・ヒルにあるF・チャーチ・ホールの集会に行き、それより城塞に登り、古い大砲、空堀、跳ね橋、ジェームズ四世の誕生地、クイーン・メアリーの居間、王冠、刀剣等を見る。さらにグラスマーケットに行く。(L1099)

この日、川田剛より新島民治に手紙を出し、自分宛の手紙に同封されていた七五三太の手紙を送る。と、七五三太が全権大使のご用を仰せ付けられて結構だ、と述べる。(T3284)

六月二日

日曜日、田中と共に、U・P・チャーチの日曜学校を参観する。午後、子供礼拝に出席する。(L1099)
ロンドンへ来るはずのA・ハーディにエディンバラから手紙を出す。(金6: 112)

六月三日

植物園に行くがバルフォア教授には会えなかった。パーム・ハウスで大きなヤシを見る。(L1099)

六月四日

Mory House, Normal School, 実業学校を見学する。(L1099)

六月五日

朝十時二十五分エディンバラ発、夜八時半ロンドンに到着する。宿を求めて十一時まで馬車で走り廻り、ようやくチャリング・クロスのゴールデン・ホテルに入る。(金6: 113, L1099)

六月六日

ドナルド・マセソンをクイーンズ・ゲートの私宅に訪問する。彼は滞在中の住まいとして個人の家庭に下宿を見つけてくれる。英国到着以来「引き続いて学校をまわっていて、本当に疲れてしまっています。一切のことが私の肩にかかってくるのです。金銭の出納の記録まで」[会計相済 June 6th, 72 at

Golden Hotel」。(全6:113, E1099)

六月七日

モンテ・ニェ街ラッセル・スクエアのスマスを訪ねる。またハーディより聞いていたビショップ・ゲート街のベアリング商会へ行き、ハーディからの手紙を受け取る。ロンドンおよび日本の地図を買う。(全6:113, E1099)

* Baring, Brothers and Co. は金融・為替業者。アメリカン・ボードも、ハーディもこの業者と取引している。

六月八日

ピカデリー六のA・C・バーレルで洋服の採寸をしてもらう。大英博物館へ行く。(E1099)

ハーディ宛に手紙を出し、London Missionary Society のJ・マレンズ博士に会い、函館に宣教師を派遣するよう依頼すると共に、新島の写真を贈呈した」と記す。(全6:113)

六月九日

日曜日、M. Cope と共にダイク牧師の教会へ行く。(E1099)

六月十日

動物園に行く。(E1099)

六月十一日

ピカデリーの Royal Gallery へ行く。また文部省のフォスターを訪問する。Victoria Embankment Stamp Office を見る。パーク夫妻が来訪する。(E1099)

六月十二日

ウエストミンスター寺院、英国議會、ロンドン塔、株式取引所、市長公邸、食肉市場等を見物する。フォスターを訪ね、諸学校への紹介状を受け取る。(E1099)

六月十三日

Gray's Inn Road の Home and Colonial School を訪ねるが「不果見」。地下鉄で五マイル離れたチェルシーに行き、St. Mark's Training School (クムウェル校長)を見学する。午後四時、ペルメル of the United Service Club へ General Alexander C. B. を訪ね、通訳をする。(E1099)

六月十五日

トラファルガー広場の国立美術館へ行き、大画家たちの素晴らしい作品を見、広場ではネルソン提督の記念碑、ジョージ四世およびサー・チャールズ・ネイピアの銅像を見る。聖マーチン教会へ行く。(L1099)

(陰暦五月十日) 新島七五三太、官費留学費辞却につき、黒田開拓次官より森中弁務使に宛て、手形返回落手の通知を出す。(J49: 842)

六月十六日

朝、プレスビテリアン・チャーチに行きダイク牧師の説教を聞き、午後はバーク夫妻と共にウエストミンスター寺院に行き、スタンレー副監督のサムエル記三一九、イギリスの歴史、リチャード三世についての説教を聞く。(全6: 115, L1099)

六月十七日

グレイス・イン・ロードの Home and Colonial School に行き授業を参観。田中はエマ・ボナー夫人より幼稚園関係の書物を一揃い買う。午後、アメリカ合衆国公使ロバート C・シエンクをウエストミンスター・チェンバーに訪ねる。秘書はベンジャミン・モラン。(L1099)

六月十八日

午前中キングス・カレッジを訪ねる。午後コベント・ガーデンのマクミラン書店、Bell and Daldy 書店へ行く。(L1099)

六月十九日

ユニヴァーシティ・カレッジとその付属学校を訪れる。日本人のキクチ「菊池大麓」と会う。ベアリング商会へ行き、四十五ドル受け取る。(L1099)

六月二十日

サウス・ケンジントンの The schools of art and science (コール校長)を訪ねる。晴雨計を買う、五ポンド十シリング。(L1099)

六月二十一日

朝、セント・トーマス病院を見学する。新島民治に手紙を出す。(L1099)

六月二十二日 水晶宮を見物し、文部省から派遣されていた内村良蔵を 57 Wimpole Cavendish Sq. に訪へ。(E1099)

六月二十三日 日曜日、朝、スパージョン牧師、午後、スタントン牧師の説教を聞く。(E1099)

六月二十四日 ペルメル街にマンチェスター大主教フレイザー博士を訪問する。次に Endowed school commissioner であるリトルトン卿を訪問する。(E1099)

六月二十五日 田中と共にハーローに行き、バイロン・ハウスに住む H. M. Inspector of schools のレシヤー・アーノルドを訪問する。(E1099)

六月二十六日 文部大臣をホワイト・ホールに訪問する。その後、一人で火曜日の夜到着したハーディを 40 and 41 Sackville St. Piccadilly に訪ねる。ミス・バッキンガムとモンティ・シアーズを同伴していた。(E1099)

六月二十七日 アレクサンダー將軍に案内されてリージェント公園に近い盲学校および St. Pancras Work Home へ行く。(E1099)

六月二十八日 カーゾン・スクールを訪ね、マシュー・アーノルドによる教育実習生の試験を見学する。またアーノルドより次週の木曜日に St. Mark's National School を訪問するように助言される。(E1099)

六月二十九日 バテルノステル小路のシムプキンを訪い、本を買う。(E1099)

六月三十日 セント・ジェームズ・ホールでリーブズ牧師、ニューマン・ホール牧師の説教を、またコベント・ガーデン劇場近くのクラウン・コートでコーニングの説教を聞く。カンタベリー大主教宛に、田中と共に

七月六日午前十時四十五分に面会したい旨申し入れる。(E1099)

在米の木村熊二より日本の乙骨太郎乙に宛てたこの日付の手紙の中に「新島七五三太君は Theological の級を終えたり、彼は実に Good Christian に而昨今□□新島と相唱へ申候」と記す。(J3: 419)

六月末

この頃、ロンドンで馬場辰猪に会ったと思われる。馬場の写真が同志社に残されている。(D39)

七月一日

プラット博士、モリソン大佐に伴われてカンバーウェル精神病院を訪い、ポール博士ともう一人の若い医師の案内で病院内を見学する。ポール博士の招待により The Terrace Camberwell St. S. E. の果物、アイスクリーム、コーヒー等をご馳走になる。(E1099)

七月二日

Calney Hatch の大きな精神病院を見学し、マーシャル、シェパード両博士から説明を受ける。(E1099)

新島民治はアメリカより送られてきた二百両を受け取るため、安中を發し横浜に向かう。(金3:112)

「米国より元ドルラル貳百枚／横浜ニテ此洋銀百七拾貳枚天保錢三枚／日本札金百六拾五円三分壹朱ト天保錢六枚／ドル壹枚ニ付銀五拾七匁八ト五ノ数」(E1709)

* 民治は七月一日と十五日に七五三太に発信しているの、一日は出發前、十五日は安中帰着後と考えられる。

七月三日

グリニッチ天文台を見学する。(E1099)

七月四日

オールド・ケント・ロードの聲啞院を視察、リード氏的方式による教育を見る。(E1099)

この日、「To visit Komuro,」[小室信夫に会う]。(E1099)

七月五日

ロンドンからニニマイル離れたアールスウッドの Idiot Asylum を見学する。(E1099)

七月六日

銀行へ行き、金を引き出す。(E1099)

七月七日 日曜日、捨て子養育院を見学、そこで説教を聞く。(L1099)

七月八日 ロンドンより二時間ほどのオックスフォードへ向かう。運賃は三人で一ポンド十三シリング十ペンス。

ガイド(料金四シリング)を雇い、多くの著名なコレッジ、図書館、博物館等を見物する。クラレンドン・ホテルで一泊。(L1099)

七月九日 この日もガイドを雇い、ケンブリッジに行き、各コレッジを見学する。夕方の汽車でロイストンまで来てブル・ホテルで一泊する。(L1099)

七月十日 クロイドンまで馬車で行き、その村の牧師ヘンリー・ストーンの経営する学校を訪問する。ストーンより昼食をご馳走になり、隣村の学園祭に招待される。(L1099)

七月十一日 ハーディ夫妻を港まで見送り、それよりシェンク駐英米国公使、モラン秘書を訪問、またクイーンズ・ゲートのD・マセソンを訪問して、それぞれに離英の挨拶をする。(L1099)

七月十二日 ロンドン出発に際してクロスビー・スクエアにあるハドソンに荷物の運搬を依頼「荷物一条相済」。それより Livi-Leone 教授を訪問し、イギリスの学校についての話を聞く。(L1099)

七月十五日 ダイソン・スミス Dyson Smyth に一週に亙りギニー支払う。〔下宿代か〕(L1099)

七月十六日 田中と共にロンドンを発ち、パリに向かう。チャリング・クロス駅発(七時半) → ドーヴァー着(十時) → カレー着(正午) → パリ着(午後六時)。文部省派遣の今村和郎に迎えられて 228

Rue la Rivoli の Hotel Murico に泊まる。宿泊費は一人一日一ナポレオン金貨。穏やかな天候にもかかわらず、田中理事官はドーヴァー海峡で激しい船酔いにかかる。(全6:116, L1099)

* (全6:116, 全10:160) では七月十七日パリ着となっている。

七月十九日

新島に対し次のような辞令が出る。「新島七五三太 右三等書記官心得被免改テ当分御雇被仰付文部理事官付属通弁御用可相勤候事 但御手当ノ儀ハ御用中一日墨銀六弗宛并日々御賄被下候事 特命

全権大副使」(E1283)

七月二十日

パリを出発、ジュネーヴへ向かう。車中「明日は日曜日」と気づき、ソーヌ河畔のマークンに下車、翌日の安息日に備える。田中理事官と今村和郎は旅行を続ける。(全6:116, 全10:161, E1099)

七月二十一日

朝、フランス人のプロテスタント教会へ行く。説教は理解できなかった。会衆はわずか三十人であった。(全6:116, E1099)

七月二十二日

朝六時の汽車でマークンを発ち、午前十一時ジュネーヴに到着、Grand Hotel de la Paix に宿泊中の田中・今村に合流する。(E1099)

七月二十三日

三人でレマン湖の湖上遊覧をする。夜はスイスの歴史、政治形体等を調べる。(E1099)

七月二十四日

文部省を訪問する。ここでは President がまたカントンの Governor をも兼ねている。市役所の人に案内されてアカデミー、公立女学校を訪問する。(E1099)

七月二十五日

三百十フランで「銀」時計を買う。(E1099)

七月二十六日

六十三歳の生徒のいる小学校を訪れる。市内見物。ホテルの料金は一日一ナポレオン。汽車はジュネーヴからベルンまで一等で十七・三五フランである。(E1099)

七月二十七日

午前六時の汽車でジュネーヴを出発、ベルンに向かう。途中、ローザンヌに着いたとき、モンブラン山麓のシャモニー行き汽車が出ることを知り、乗り換えたものかどうか、考えているうちにその汽車は出てしまう。諦めきれず田中らと別れてシャンプローまで行くが、そこでも汽車の連絡が悪く、

七月二十八日
シャモニー行きを諦めて、駅近くの湖の見えるジグネル・ホテルで休息、午後五時四十分の汽車でベルンに向かう。九時に到着、駅員の案内で連邦議事堂近くの Hotel de l'ours に泊まる。(E1099)

七月二十九日
日曜日、朝、イングリッシュ・チャーチに行き、午後はずっとホテルで過ごす。(E1099)
ベルンのベルビュー・ホテルで田中らと合流、一緒に州議事堂、市庁舎へ行き、教育関係者と会う。次いで市立図書館、地質博物館、動物博物館、熊公園に行く。連邦議事堂では写真のコレクションを見る。(E1099)

七月三十日
プレクセル博士 Prächsel に案内されて School of physics を訪れる。次に家畜病院に行き、動物の骨のコレクションを見る。さらに大学付属植物園に行き、教室や標本室等を見る。午後は体育館へ行き、授業を参観する。(E1099)

七月三十一日
午前中、スイス連邦の大統領を訪問する。その後、連邦議事堂および閣僚室 The room of 7 members of government を見学する。午後、郊外を歩き、大統領の住まいを見る。古い農家のような三階建ての家であった。(E1099)

八月一日
朝八時半、汽車でベルンを出発、二時すぎ、チューリヒに着く。(E1099)
八月二日
文部省を訪問、二人の係官に案内されて工芸学校を含む大学を視察する。この大学はチューリヒ州に属しているが、連邦より援助を受けている。(E1099)

八月三日
盲聾学校を見学する。(E1099)

八月四日
田中と今村はベルリンへ出発し、新島は安息日を守るためチューリヒに留まり、朝、イングリッシュ・

チャーチに行く。(E1099)

八月五日

午前十時十分発の汽車でチューリヒを出発する。料金は七十五・九五フラン。コンスタンス湖を横断（船上で昼食）リンダウより再び汽車に乗り、アウグスブルク、ニュールンベルク、バムベルク、ライプチヒを経てベルリンへ向かう。（E1099）

八月六日

ベルリンに午後八時到着、ケーニヒグレッツァー街のアスカニツシェ・ホテルで田中らと合流する。（E1099）

* ハーディ夫妻宛書簡によれば、ベルリン到着は五日夜、セント・ピータースバーグへの出発は六日となっていた。（全6：117）

八月七日

街頭で思いがけなくJ・M・シアーズに会い、ハーディ夫妻の消息を聞く。夜十一時、田中・今村ともう一人ドイツ語を話せる日本人と共にベルリンを出発、ロシアのセント・ピータースバーグに向かう。（全6：117, 全10：162, E1099）

八月八日

午後三時、プロシヤとロシアの国境を越える。（E1099）

八月九日

午後四時、セント・ピータースバーグに着く。その少し前、車窓からスモールマイ教会堂を見る。駅より三十分ほど馬車に乗ってネフスキー大通りのベルビュー・ホテルに入る。（E1099）

八月十日

文部大臣 Minister of Public Instruction を訪問する。（E1099）

八月十一日

日曜日、田中を宿所に残し、随員三人で市内でもっとも立派なカザン大聖堂に行き、詳細に見学、次にイサーキー寺院に行く。午後、アメリカン・イングリッシュ・チャーチへ行き、イギリス人牧師の説教を聞く。（E1099）

田中理事官が、新島の安息日における態度について、他の日本人のヨーロッパ訪問とその動機が違う

ことに気付いてくれて、嬉しく思うが、その反面、今まで以上に重い責任を感じると、ハーディに伝える。(46:118)

八月十二日

一七七〇年にキャサリン二世により建てられた捨て子養育院を訪れる。博物館へ行き、一七九九年にシベリアで発見された有名なマンモスを見る。午後、公立図書館へ行く。キャサリン二世により購入されたボルテールの本があった。(E1099)

八月十三日

エルミタージュ宮殿に行き、多くの絵画、彫刻、貨幣等のコレクションを見る。(E1099)

八月十四日

午後一時、セント・ピータースバーグを発ち、ベルリンに向かう。(E1099)

八月十六日

六時、ベルリン着、ゲオルグ街二六の宿所に入る。(46:119, E1099)

八月十九日

月曜日、早朝ベルリンを出発、七時、フランクフルトに到着しヴェステンド・ホテルに入る。グーテンベルグの記念碑を見ただけで、七時半にブーブリヒへ向け出発、そこからライン下りのアメリカ号に乗船しコブレンツへ向かう。風景の美しさに感嘆する。(E1099)

八月二十日

午後五時ケルン着、気分のすぐれない今村をホテル・ルッシーに残して市内観光に出かける。一時間半の滞在であるが、大聖堂がもつとも心に残るものであった。午後八時、ロッテルダム行き別の船に乗るが、デュッセルドルフで再び乗り換える。ベッドがなかったので床に毛布を敷いて寝る。(E1099)

八月二十一日

夜明け頃、オランダ領に入り、船上より岸の様子を眺める。午後二時十五分、予定より少し早くロッテルダムに着く。汽車の駅まで二人の荷物を運ぶためポーターを雇う。二フロリン銀貨。午後三時三十五分の汽車でロッテルダムを出発、三十分たらずでハーグ着、陸路で先に到着していた今村に迎え

八月二十二日
られる。ニューマーケットのマーチャント・ホテルに泊まる。(E1099)

内務大臣を訪問し、地方視学官M・P・リンドーを紹介される。彼の案内でハーグ最上のパブリック・スクール、幼稚園を見学する。午後は博物館へ行き、日本や中国の古美術品およびオランダの絵画を見る。(E1099)

八月二十三日
リンドー家に招かれ、食事をし馳走になる。その後、彼の案内で Idiot Asylum を見学、その教授法に感心する。(E1099)

八月二十四日
Buitenhof に外務大臣を訪問する。次いで王宮を見物する。(E1099)

八月二十五日
日曜日、プロテスタント教会に行く。かつて蘭学を習ったにもかかわらず、牧師の祈りの言葉も会衆の讃美歌も理解できなかった。(E1099)

八月二十六日
この朝、再びリンドーを訪れ二、三の質問をする。次いで House of Wood に行き、日本や中国の絹織物、タンス、タペストリー等を見る。またそこで何の前触れもなく従者を一人伴って入室してきたオランダ王妃に出会うという機会に恵まれる。午後四時二十四分の汽車でハーグよりライデンに行き博物館と St. Peter Kirk を見物、Brood Straat の Hotel Loon d-or に泊まる。(E1099)

* ライデンで泊まったホテルについて新島は "Hotel Loon d-or on Brood Straat" と書いてゐるが、(J114: 153) によれば、幕末頃ライデンに "Lion d'Or" というホテルがブレーストラート Breestraat にあったという。

八月三十日
(陰暦七月二十七日) J・H・シーリー教授、インドに向かう途中日本に立ち寄り、東京麻布善福寺のアメリカ公使館において新島民治と会う。ライセル、湯浅治郎が立ち会う。(E1709)

九月一日　ハンブルクの English Reformed Church に行き、英国人エドワード牧師の素晴らしい説教を聞く。

(全6:120)

九月二日　ロペンハーゲンに到着する。(全6:120)

九月三日　朝、デンマークの公教育大臣を訪問、午後は市内で開かれている展覧会を見物に行く。夜、ハーディ

夫妻に手紙を書く。(全6:120)

九月八日　日曜日、シーリー教授は横浜のキリスト教徒の集会において演説し、留学中の新島について述べる。

(J66:209)

九月二十日　全プロテスタントの宣教師会議が横浜で開かれる。二十五日まで。(J55-3:657, J62:99)

九月二十九日　新島民治に手紙を書き、欧州各国を巡回し、現在はベルリンに滞在して「学校の規則の取調ニ相懸リ

殊之外多事」であると記す。(全3:107)

秋、再びリューマチに悩まされる。(全10:168)

十月二日　ハーディ夫人にベルリンより手紙を出し、田中に従って日本へ帰るべきか、アメリカへ帰ってアンド

ーヴァーで勉強を終えるべきか、決めかねていること、現在、一日に六時間ずつヨーロッパ各国の学

校規則や報告書の翻訳にあたっていることを伝える。(全6:121)

十月二十日　ハーディ夫人に発信、もし田中に従って日本に帰り、教育制度確立のための仕事に従事するようにな

れば、途中でやめるわけにゆかず、そこから抜け出すには相当の困難が伴うだろう、人生は短いのだから主のために働くつもりなら、そのような事柄にあまり時間を割いてはいけない、神の摂理がもう一度アンドーヴァー神学校へと導き給うよう祈ってほしい、と述べる。(全6:123)

十月

M・L・ブードン夫妻 Marquis Lafayette Gordon 大阪に入り与力町三番に居を定める。(J24:75)

十一月九日

ポストン大火。サマー街から出火、翌日正午まで燃え続ける。(全10:410)

十一月十二日

(陰暦十月十二日)各理事官、随行員に宛てこの年中にヨーロッパでの調査を終え、帰国するように特命全権大使名で通達が出される。新島にも田中文字部大丞、長与文部中教授、近藤少助教連名宛で同文の通達が出される。(J50:212)

十一月二十三日

神戸に Union Church of Christ (初代牧師 D・C・グリーン) できる。煉瓦造りの教会堂で、同志社チャペルの原型とでもいえるべき建物である。(J62:44)

十一月二十五日

市川栄之助、京都二条の監獄で獄死。(E6:8)

十二月三日

(陰暦十一月三日) J・D・デイヴィス、神戸宇治野村に英語教授所を開設する。(J40:34)

* (J98:273) では十二月一日(十一月一日)となっている。

十二月十三日

「または十四日」J・M・シアーズを訪問する。彼は大変音楽に興味を持っている。(全6:124)

十二月十六日

ハーディ夫人に手紙を書き、次のように伝える。(一)田中と一緒に帰国しないと決めたこと (二)アンドーヴァー神学校に復学して、聖職者となり、同胞に福音を伝えたいこと (三)旅行中に蓄えてきた金を将来の教育費用として預かってほしいこと (四)二、三日前シアーズを訪問したこと (五)先便以来、健康がすぐれず、神経がいらいだち、不眠・めまいを伴う頭痛に悩まされていること。(全6:123)

十二月二十日

ベルリンで写真を撮影する。(L2007-134)

十二月二十四日

シアーズと共にクリスマス・イブを過ごす。新島にとってドイツでのクリスマスは初めてのことであり、楽しく過ごす。シアーズより小さな旅行用カバンをプレゼントされる。(全6:124, 全10:175)

十二月二十六日 ベルリンに滞在、『理事功程』中の「独乙国公学校ノ規則第三編」の原稿を書き終わる。(41:531)

この年、アメリカン・ボード、大阪ステーションを開設。(E8:1,7)

明治六年（一八七三）三十一歳

一月一日〔?〕

日本政府が太陰暦を廃して太陽暦を採用、それを祝って北白川宮能久親王はじめベルリン在留の日本人留学生八十人がレストランに集まり、ビールを飲んで新時代を祝う。（全6：125, 全10：175）

一月三日

田中文化理事官、帰国のためベルリンを出発する。（全6：125）

一月五日

日曜日、ベルリンのクラウゼン街にあるヴィルヘルム・グルントナー写真館で写真を撮る。（F3210）

ベルリンにいる日本人留学生の一人「明治七年秋の項参照」が新島を来訪し、聖書の説明をしてほしいこと、新島がいつも行くメソジストの教会へ連れて行ってほしいことを頼む。新島は「ヨハネによる福音書」をテキストに選び、二時間ほど勉強をする。安息日毎に勉強を続けることにする。（全6：125）

一月六日

ハーディ夫妻に手紙を書く。（全6：124）

一月十五日

ハーディ夫妻に手紙を書き、父が日本を訪問したシーリー教授と面会したこと、この三日間リューマチのため外出できなかったこと、医師よりヴィースバーデンに療養に行くように勧められていること、将来の学費として四百八十ドル送ったことを記す。（全6：126）

一月二十六日

新島民治に手紙を出す。「私儀も田中公ニ随行シ日本へ可帰趣を一旦相窮候処、色々と文部事務ニ付鑿索いたし度事出体仕、何分当春之内ニ帰朝難相叶そんし候、何レ春さきに相成候ハ、一先アメリカ迄帰り、其上帰限之事を委く可申上そんし候」と述べると共に、帰国する田中不二暦に土産物を託したこと、また、この手紙と共に日本語訳聖書を送ることを知らせる。（全3：109）

一月二十八日 “Mr. Tanaka has left Paris on the 28th of last January for Japan.” (全6: 128)

* 文部理事官一行来二月五日ヲ以テ当州発程帰朝仕度、此旨御聞届有之度奉存候也

酉正月

文部理事官 田中不二麿

特命全權使節御中

(J50: 216)

一月下旬 文部事務無滞相済す。(全3: 116)

一月 ベルリンにおいて病氣を理由に文部理事官随行を辞す。(E104, D39)

この頃、M・L・ゴードン宣教師、「大阪梅本町の」自宅の隣家を用いて学校を開く、生徒約三十人。
(J62: 150)

二月三日 アメリカン・ボード宣教師総会がグリーン宅で開かれ、宇治野村の自給独立の英語学校をミッション・スクールにすることを決定、建物は別の場所に移転する。(J62: 110)

* この学校は一八七三年十一月十五日〜一八七四年一月の間に廃校か。

二月十二日 少し歩けるようになったので、この日、ベルリンを出発、翌十三日、ウィースバーデンに到着する。

これより約五週間、この地のバーシング・ホテルに滞在して湯治を続ける。(H6: 130)

二月十四日 福士成豊が新島に手紙を送る。新島は函館で江戸の家族宛の手紙を彼に託したが、福士は新島宅を捜し出せず、それを渡せなかったため、その事情を述べたものと思われる。この新島の手紙は明治九年六月九日に福士より返却される。(T659)

二月二十四日 日本政府は切支丹禁制の高札を撤去する。(J57: 55)

三月五日 ハーディ夫人に手紙を書く。三週間前よりウィースバーデンで療養をしているが、病状はあまり変わ

三月十日

っていない。この地の大多数の人々は快楽崇拜者で演劇やダンス・パーティー、仮装舞踏会には多くの人々が出席するが、教会はカラッポである。しかし少数の本物のクリスチャンがいて、彼らと親しくなった。全体的にドイツの新教は政策の問題であるようで、ニューイングランドという自由な土地の新教とはずいぶん違うようだ、と述べる。(全6:126)

婦米の途中ベルリンに立ち寄ったシーリー教授に手紙を出す。一緒にアメリカへ帰りたいが、少なくとももう五週間はここで療養しなければならないこと、昨年五月から今年一月まで田中理事官に随行した仕事が多すぎ、体調をこわしてしまったこと等を記す。(全6:127)

〔三月十七日〕

新島民治からの手紙(明治五年七月一日、十五日付)を受け取る。アメリカから送った金を受け取ったことを知らせ、民治の写真が同封されていた。(全3:112)

三月十八日

民治に手紙を書く。リューマチ療養のためヴィースバーデンに滞在していること、フォン・ツェーメ
ン Frau Marie von Zehmen という老夫人と知り合ひ「二日置毎ニ午飯之御馳走ニ招キ呉レ厚く世
話いたし呉レ且独乙学をも教へ呉れ候」と記す。(全3:112, D39)

三月二十三日

この頃、温泉療養所を去り、ルーテル派のH牧師[Gustav Hauser]の家に下宿する。(全6:128)

三月二十四日

田中不二麿、欧米教育視察を終え、この日帰国する。(T648)

三月三十一日

女性宣教師J・E・ダッドレー、E・タルカット Julia E. Dudley, Eliza Talcott 神々に着任する。

(J99:19)

* 新島はダッドレーをダッドレー氏と、タルカットをトーカーツ女史と呼んでいたようである。

四月六日

ハーディ夫人に近況を伝え、ドイツ語を学びたいので、アメリカに帰るのは六月よりも八月にしたい

と述べる。(全6:109)

四月九日

コンサートを聞きに行く。“Ein deutsches Requiem nach Worten der heiligen Schrift.”を聞く。
(L1477)

四月十五日

デイヴィスの英語学校は五カ月前に発足して以来、生徒七十名を超える。(E12:124)

五月二十二日

D・C・グリーン、太政官宛にキリスト教書の書店の開設につき申請する。(J62:116)

五月二十六日

木戸孝允らウィースバーデンに来訪、新島と再会する。木戸日記によれば、「晴……新島四 太来訪
去年於米国分袖彼は田中文部大丞と渡欧せり爾後不快にて此地に来る品川新島ト両度ハーク其他を散
歩せり」とある。木戸から写真を贈られる。(L2006—56, J47:383)

五月二十七日

木戸「八字出宿ビーフリヒに至り蒸汽船に乗る……新島来送る」(J47:384)

五月二十八日

第四姉・とき、安中に移る。(L1677)

六月十四日

J・M・シアーズはこの日、ハンブルグ発のゲルマニア号で帰米する。(全6:128)

アメリカン・ボードのジャパン・ミッション第一年会が、この日より十六日まで、神戸のベリー宅で
開かれる。議長D・C・グリーン。(E1)

六月二十五日

ミス・ヒドンに手紙を書き、リユーマチ治療のためウィースバーデンに滞在していること、この秋か
らアンドーヴァーに帰って勉強を再開するか、あるいは寒さが健康にこたえるので、New Haven
Seminaryへ行くか考えている旨を知らせる。(全6:130)

七月二十三日

(あるいは二十四日)ウィースバーデンでの療養を終え、ベルリン以来の旧友「明治七年秋の項参照」
を訪ねてホンブルク近郊のフリードリヒスドルフに行く。約三週間滞在する。フランス語を喋るユダ

七月三十日

ノの子孫たちの村で、日曜日の朝はフランス語の礼拝に出席、夕方はメソジストの教会に行く。また毎日のように師範学校、付属小学校を參觀して過ごす。この村の女生徒から日本伝道のため五ターラー十三グロッシェンの寄付を受け、感激する。(全6:132)

オージンゲン Usingen に来る。八月六日付のハーディ夫人宛の手紙によると、毎日セミナーや付属小学校を訪問している旨を記す。(全6:132)

* 新島は Elsing と書いているが、恐らく Usingen の誤りか。

八月三日

民治に手紙を書き、数日前ヴィースバーデンを出発し、現在はオージンゲンに滞在して教育調査に当たっていることを伝え、さらに「殊ニより候へハ米国に一兩月逗留仕、其より当年中ニ日本ニ罷帰り候哉も難計候……」と記す。(全3:116)

八月六日

ハーディ夫人に近況を知らせる手紙を出し、来週ドイツを離れ、パリ、ロンドン経由で帰米する予定と記す。(全6:132)

八月十五日

この頃、パリ到着、約九日間滞在してパリ見物をする。(全6:133)

八月二十六日

ロンドン到着、早速ベアリンク商会を訪ねA・ハーディの手紙を受け取る。彼からアンドーヴァーで学業を続けることを勧められる。(全6:133)

八月二十七日

ハーディに発信、お勧めに従って、アンドーヴァーで勉強を終えてから日本へ帰る気になった、と伝える。(全6:133)

八月二十九日

ミス・ヒドンに手紙で、アンドーヴァーに帰り、勉強を続けることを伝える。(全6:133)

九月二日

朝、リヴァプールに出発、午後、サマリア号に乗船、出帆する。(全6:133)

九月八日

田中不二麿、『理事功程』のうち米国之部二冊を太政官へ提出する。(J50:135)

九月十三日

J・L・テイラー教授 John Lord Taylor よりこの日付で、アンドーヴァー神学校へ帰校を勧める手紙を受け取る。(F2322)

九月十四日

朝、キューナード汽船のサマリア号、ニューヨークに到着する。(L903, E14:17)

九月十七日

アンドーヴァー神学校に復学、新学期の授業開始。(L903)

十月八日

夕方、ミッシュナリーの集会でスミス教授が聖書を朗読し、新島がきわめて感動的な祈禱をする。(E11)

十月十六日

夕方、Society of Inquiry が下級生の教室で催され、新島は日本の教育について演説をする。まずまずの英語できわめて興味深く、感動的な態度で行われた。(E11)

* ".....Society of Inquiry [the continuation of the famous society of 'Brethren'.....]" (E11)

The Society of Inquiry on the Subject of Missions は、一八一一年、アンドーヴァーの学生により設立された、伝道のため異教徒地域の宣教事情を調査する組織である。また The Society of Brethren とは一八〇八年にウィリアムズ大学の学生により組織された異教徒伝道を志す団体で、一八一〇年にアンドーヴァー神学校に移り、六十年間存続した。新島もメンバーの一人だった。(E28:112, 114)

十月二十一日

J・L・テイラー博士を招く。(E11)

この日、田中不二麿、『理事功程』英国之部を太政官に提出する。(J50:135)

十一月二十二日

風邪をひき医者から外出を止められる。(二十六日現在治らず)(A6:134, 135)

十一月二十三日

新島民治に発信、アンドーヴァーで修学中であること「学校ニ帰少くも来年五六月迄ハ修業致さねばならざる次第ニ相成……是又学問の事故且国家之御為故已むを不得次第……」と帰国の遅れることを

告げる。(全3:117)

十一月二十四日 シーリー教授に手紙を書く。風邪をひいてだんだん重くなり、今日は軽いリューマチのせいもあってほとんど一日中ソファーに横になっていた。このぶんでは感謝祭にシーリー宅を訪問する計画は駄目になるかも知れない、と記す。(全6:134)

十一月二十六日 感謝祭。リューマチのため医者より外出を禁止され、シーリー宅へ行けなくなったことを同教授に伝える。(全6:134)

ミス・ヒドンに手紙を出し、感謝祭への招待に礼を述べ、アーモスト、ボストンからも招待を受けたが、風邪のため行けなかったこと、明日十二時半までにヒドン宅に行かなかったなら、体調が悪いためだと思ってほしい、と伝える。(全6:135)

十二月三日 新島民治より手紙(九月二十日、十一月十一日)を受け取る。(全3:119)

十二月七日 J・C・ベリー、神戸の大通りに日曜学校を開き、四十一人の聴衆が集まる。また、この日、D・

C・グリーンは兵庫で説教を始める。(E3-a:184, E8:8)

十二月十六日 大阪のM・L・ゴードン宣教師は、この日、新島に宛て手紙を出し、外国人宣教師による伝道の困難さを述べ、新島に帰国して援助するよう切望する。(T2325)

十二月二十二日 近くの町の教会での神学校学生の礼拝奉仕に加わり、その帰途、汽車の中でC・C・カーペンターやC・アンダーソン牧師に出会う。(E11)

十二月二十五日 開拓使派遣留学生に帰朝命令が出る。(G4:136)

十二月 『理事功程』の和装本十四冊の刊行が始まる。明治八年九月に完了。(J50:141)

明治七年（一八七四）三十二歳

一月一日

アメリカン・ボード在日宣教師団J・C・ベリーら八名は連名で新島に手紙を送り、帰国して協力するように要請する。（F2326）

一月十一日

帰国を促す父親の民治に手紙を書き「米国再帰之上例之ハルデイ君と色々帰朝之義相談仕候処、今年程修業不仕候ては是迄学候処も無ニ相成候次第ニ而不得已事再米国ニ留学仕候」「小子留学中は如何様ニ帰朝之義被仰越候とも小子義一度決定いたし修業不相済内は決し而帰朝不仕候」と決意を示す。

（全3：119）

一月十四日

七五三太誕生日につき安中の新島家では赤飯を炊いて祝う。（E1714）

一月十七日

晴、横浜軽井沢の鶴屋八郎右衛門の知人で旧高松藩富永寛次郎が米国へ留学するにつき、民治は依頼により、新島宛の添書を与える。（E1714）

二月十二日

慶応義塾の分校を京都下立売新町の小学校校取締所構内に置く。四月、授業を開始する。（H11：66）

二月十五日

横浜海岸教会では「在米国新島氏ヲ牧師ニ依頼スル事ニ決シ書面ヲ発ス」（F19：27）

二月二十四日

横浜海岸教会では新島襄への招聘書を、この日、米国郵船に託して送ったが「終ニ其承諾ヲ得ザリシ」（F19：37）

二月

大阪のM・L・ゴードンより手紙を受け取る。〔明治六年十二月十六日の項参照〕（全6：135，全10：182）

二月

ハーディ夫妻に手紙を書く。今晚、アボット女学校の生徒たちが神学生を招いてパーティを開くことになっている。ハンサムな男たちだけが招待され、新島を含む間抜けな連中は除外されたこと、大阪のゴードンからの手紙について記す。(全6:135)

三月四日

夕方、月例の集会が開かれ、日本にいる宣教師の報告が紹介される。(E11)

三月六日

帰国は六月以後になるという新島書簡(一月十一日付)が、この日、千巻屋を通じ安中の父親の元に届けられる。(E1714)

三月十二日

アンドーヴァー神学校の冬の学期がこの日終了、三週間の休暇に入る。(E903)

三月十四日

ボストンに行き、ハーディ夫妻と一週間一緒に過ごす。またテイラー博士夫妻にも会う。(E903)

三月十八日

新島家家禄奉還の願書を戸長まで差し出す。(E1714)

三月十九日

ボストンで石版印刷を見る。(E903)

三月二十二日

ボストンよりアンドーヴァーに帰る。(E903)

ドイツのハッソー夫人 *Frau von Massau* 夫人、ホンクト *Otto Hongma* [?] の改宗を知らせる手紙を受け取る。(E903)

ダンバース・ポートの S・D・テイラー夫人を訪い、そこに四月一日まで滞在する。(E903)

三月二十五日

新島民治は七五三太宛に手紙を書き、安中の舅を通じ横浜のバラに送付方を依頼する。(E1714)

三月

アメリカン・ボードの総主事 N・G・クラーク博士に呼び出される。神戸の D・C・グリーンよりの手紙を見せられ、日本でアメリカン・ボード宣教師として働く意志の有無を聞かれ、それを承諾する。

(全6:136, E903)

四月一日 姉まき、群馬県後閑村庄右衛門〔佐藤種五郎〕に嫁入りする。(E1714)

四月三日 横浜のJ・H・バラより手紙を受け取り、横浜教会が新島を招いていることを知る。(E903)

四月四日 神学校の同級生F・D・ケルジー F. D. Kelsey と安息日を過ごすためマープルヘッドの彼の教会(第三教会)に行く。夜、人々の前で話をする。(E903)

四月九日 新島の書簡(明治六年十一月二十三日付)が津田仙を通じて民治の元へ届く。(E1714)

四月十九日 リンカーンにてリチャードソン牧師、シェッド夫人と共に安息日を過ごす。(E903)

四月二十四日 この日、摂津第一公会(神戸教会)が設立される。仮牧師D・C・グリーン、信徒十一名。(F1:20)
ドイツ、バーデンのポルツハイム Pforzheim に住むG・ハウサーに手紙を書く。(E903)

四月二十九日 新島民治とJ・H・バラより手紙を受け取る。(E903)

四月三十日 日本において宣教事業に献身する決意を記し、アメリカン・ボードのN・G・クラーク総主事にする。さらにもう一通、宣教師志願者のための手引き Manual for Missionary Candidates に従って、自己のキリスト教信仰や略歴、健康状態、家族のこと等十二の質問に答える手紙を出す。(全6:136~138)

四月 アメリカン・ボードの日本ミッシヨンの準会員に任職される。(全10:185)

五月四日 田中不二麿はこの日付の手紙を新島に発信、新島に託されていた手紙は川田剛を通じて民治に送ったこと、また前年九月に民治が来て「黄物之件拝承候聊需要ニ応シ置候」と伝える。(F649)

五月十日 マサチューセッツ州レキシントンのE・G・ポーター牧師の教会において初めて講壇から説教をする。彼が選んだ聖句は「ヨハネによる福音書」第三章十六節であった。(全10:185)

五月十一日 レキシントンよりアンドーヴァーに帰る。(E11)

五月十三日 二月十五日付の新島書簡が民治の元に届く。(E1714)

五月十九日 民治、新島宛の手紙を横浜経由で送る。(E1714)

五月二十二日 *The preaching of Christ in Japan.* の草稿である〔七月二日の項参照〕(E1227)

五月二十四日 大阪〔西区〕^{ほんでん} 本田梅本町十に摂津第二公会(梅本町公会→大阪教会)設立、仮牧師 M・L・ゴードン、

信徒七名。(F13:2)

五月二十七日 J・H・バラに手紙を書き、横浜よりの招きを謝絶する。(E903)

ジャパン・ミッション 第二年会がこの日より三十日まで神戸のベリー宅で開かれる。議長は J・D・

デイヴィス。(E1)

この年会で日本のキリスト教各教派の合同促進を決議する。(F4:39, J55-3:662)

五月二十八日 コングリゲーションナル・クラブの記念集会在ボストンのトレモント・テンプルで催され、新島も出席

して、日本での将来の仕事について短い演説をする。(E903)

His speech is very touching as showing what missions have done — no failure. He spoke of himself — "I stand before you as a monument of grace — what God has done through missions." (E11)

五月

『真の道を知るの近道』刊行される。初版一万部、著者は J・D・デイヴィス。佐治職が日本訳の協力をした。(J62:148)

六月二日

新島に関する証明書がアンドーヴァー神学校教授 J・L・テイラーによって書かれる。(E1228)

六月三日

この夜の [Society of Inquiry?] の月例会は素晴らしいものだった。新島がその生い立ちについて感動的な話をし、フェルプス教授 Prof. Phelps が日本と新島のためにもっとも適切な祈りを捧げた。(E11)

六月十一日

新島をカーペンターのティーに招いて歓談する。新島が祖国日本で伝道していると思わせるような、素晴らしい夕べであった。(E11)

六月十七日

オーブン・バック・シャツの採寸をする。John H. Dean 作成。(E1399)

六月二十三日

説教資格取得候補学生 Licensing students のためアンドーヴァー・アソシエーション The Andover Association の集会が南ローレンスのカーター牧師の教会で催される。出席者がそれぞれ話をしたが、新島のがとくに面白かった。(E11)

六月二十九日

アンドーヴァーより N・G・クラーク博士に手紙を出し、次の金曜日 [七月四日] にボストンに行く予定だが、その際面会して新島の将来のことについて話し合いたいと述べる。(全6:139)

六月三十日

アンドーヴァー・アソシエーションにおいて牧師資格試験を受け、承認される。(E1229)

新島、カーペンターのところへ別れの挨拶に立ち寄る。(E11)

七月二日

アンドーヴァー神学校第六十六回卒業式が午前九時より教会堂で行われ、新島は二十一名の学友と共に卒業 (Special Course) する。席上、彼は九名のうちの一人として演説する。「バルコによる福音書」六章十四・十五節と「ヨハネによる福音書」三章十六節を英語で読んだのち、演説は日本語で行い、大喝采を受ける。題名は The Preaching of Christ in Japan (日本におけるキリストの宣教)。また J・L・テイラー博士は新島を、アンドーヴァー卒業生のうち第一七六番目の宣教師として海外

七月三日
に派遣される、と紹介する。(全6:139, 全10:185, 全1230, E11)
ボストンへ行き、午後、N・G・クラークと会う〔予定〕。(全6:139)

七月六日
夜汽車でヒンズデイルに着く。(E903)

七月十九日
ヒンズデイルの Mountain Reeve Society〔のメンバー〕と牧師館で会う。(E903)

七月二十日
日曜日、フリント牧師の説教を聞く。テキストは「コリント人への第二の手紙」一章十二節「マタイ

による福音書」二十六章六・七節であった。夜、集会で話をする。(E903)

八月七日
アンドーヴァーを六時四十六分に発ち、メイン州ポートランドへ夜十時に着く。そこより汽船に乗る

が、雨降りのうえ、一晚中絶え間ないエンジンの音で眠れない。(全6:139)

八月八日
朝五時前、船のボーイに起こされて朝食を食べる。雨の中、午後三時にバー・ハーバーへ到着、ハー

ディに迎えられて、彼の別荘に近い民宿 Deering House に入る。(全6:139)

八月九日
雨、ハーディと村の教会へ行く。午後はポートランドのホーム・ミッションに関係している船長の話

を聞く。朝の礼拝ののちデーン Mr. Dane に会う、メアリー E・ヒドンからの手紙を渡す。(全6:139)

(139)

八月十日
午前中雨、島の地図とコンパスを頼りに、あまり観光客の行かない場所にドイツ人とちょっとした遠

出をする。深い森を通り抜け、山を登り、沼地や水路を骨折って進む。七、ハマイル歩くとドイツ人

がクタクタになってしまったので、大型の四輪馬車を雇いロマンチックな峡谷を通って家路につく。

(全6:140)

八月十一日
朝、ハーディとヨットに乗り、午後は夫妻と一緒にシェル・ビーチへピクニックに行く。ハーディ夫

人は孫のシェービーとポストンから来た彼女の友人の息子を連れ、海岸でデーン、モリルの家族と合流、海岸で夕飯を食べたのち、夕方七時頃家に戻る。(全6:140)

ハーディ、デーン、モリルらと魚釣りをする。新島は Haddock [タラ] 四匹、Cod [タラ] 一匹を釣る。(全6:140)

八月十二日

朝、釣り仲間と出かけるが、風のためボーキューバイン島に渡れず、一匹も釣らずに帰る。(全6:140)

八月十三日

雨、Dr. Faber's Hymns を読んで過ごす。ハーディ夫人を訪う。(全6:140)

八月十四日

ハーディのヨットでロウアー湾に行き、一日中、海釣りを楽しむ。約八十匹釣るが、ハーディは三〇ポンドもあるタラを釣って得意気であった。ヨットの上での食事は素晴らしかった。(全6:140)

八月十五日

村の教会でドール牧師の説教を聞く。午後、ハーディ夫妻に従ってオッター・クリークの日曜学校に行く。新島はハーディに勧められて集まった大人や子供を前にして神の恩寵と救いについて半時間以上も話をする。(全6:141)

八月十七日

ミス・ヒドンに発信、バー・ハーバーに来てからのことを日記風に書いて報告する。新島は手紙の終わりに、日付を間違えているかもしれない、今日は八月十六日だと思っていたのに十七日だと言われた、と書き添えている。(全6:141)

八月二十七日

報知新聞は「新島某と申日本人は七八年前に箱館を脱しポストンに來り、米人某の助を得大学に入り神学を修業いたし、追々上進此度アンドール地名テオロシカルセメナリイにて成学の許可を得候由に承り申候」と報ず。(上1709)

九月一日

新島約瑟のワシントン行、日本の新聞に掲載される。「倅約瑟義華行相成候趣、新聞ニ出候段」(上

九月十三日

九月十五日

横浜第一長老公会〔のち指路教会〕設立される。(プロテスタント無教派主義は破綻)(H12:89)

新島襄按手礼式の案内状がボストンのマウント・バーノン教会の S. E. Herrick 牧師および教会委員
会、候補者の名前により發送される。(L1232)

九月十八日

田中文部大丞『理事功程』独乙国ノ部を太政官に提出する。(J50:136)

九月二十四日

木曜日、新島、マウント・バーノン教会で按手礼を受ける。

近辺の二十の主要な教会から代表が招かれたほか、アーモスト大学のシーリー教授、アメリカン・ボ
ードのアンダーソン博士、トリート博士、N・G・クラーク博士、アンドーヴァーの J・L・テイラ
ー博士、ボストンのオールド・サウス・チャーチの G・W・ブラグデン牧師が出席した。また記念説
教はシーリー博士が「ヨハネによる福音書」第十二章三十二節により行い、歓迎の握手は E・フリ
ン牧師、激励の辞はボード運営委員会の A・C・トムソン牧師により述べられた。(全10:185, L1232,
E3-3)

九月二十八日

ブリマスに行き、有名な「上陸の岩」とピルグリム・ファーザーズの遺物を見る。この頃より一週間
ほどアンドーヴァー、ダンバーズ、セイレム、マーブルヘッドを廻り、友人たちにお別れの挨拶をす
る。(全6:141)

この日より十月三日までの間にボストンで W・T・シーリー〔通称ウイリー、シーリー教授の子息〕
から親切な手紙を受け取る。(全6:141)

十月三日

東京・横浜・神戸・大阪各公会の代表者が横浜に集まって日本基督公会条例案を討議、公会の合同を

決議する。(F4:38, F28:43, J22-2:11, J55-3:662)

十月四日

日曜日、バーモント州ラットランドで開かれるアメリカン・ボード第六十五年会に赴く途中、マサチューセッツ州クリントンに泊まり、安息日を過ごす。(全6:141)

十月五日

クリントンからシリー教授に手紙を出し、近況と今後の予定を述べる。アメリカを離れる前に会いたいのだが、出発までの時間が大変限られているので、同教授のいる東ハンプトンへ行くのは不可能である。だから今、お別れの挨拶をする、と記す。(全6:141)

十月六日

アメリカン・ボード第六十五年会が、この日午後三時よりラットランドのCongregationalチャーチで開催され、新島も出席する。十月九日(金曜日)午前十一時に閉会する。(全6:141, E2-p. E3-D)

七月七日

ミス・ヒドンに手紙を書き、私への贈り物について希望を言えるなら、ジョンソンのニュー・アトラスがほしい、と書く。(全6:142)

十月八日

夕方、ハーディを訪ね、日本にキリスト教主義の学校を設立するための募金の訴えについて相談する。ハーディより「おぼつかないと思うが、まあ、やってみるか」と言われる。この夜、宿舎に帰り、演説の原稿を練る。(全10:189)

十月九日

新島公義、上野国吾妻郡川戸村の官地および立ち木を私有地として払い下げられる。(上1709)

金曜日、アメリカン・ボード年会の最終日。午前九時より開かれ、恒例のごとく海外伝道に向かう宣教師らが紹介された。新島はハーディより紹介されて挨拶をする。その際、日本にキリスト教主義の学校設立を訴えて五千ドルの寄付金を得る。なお、この基金の会計はハーディが行うよう決議された。

この新島の訴えには P・パーカー、W・D・ドッジ、J・B・ページのような名士をはじめ老農夫、老婦人までが募金に応じた。(全1:34, 74, 92, E3—b, E4)

* このラットランド大会の様子は "*The Missionary Herald*" Nov. 1874, Vol. LXX, No. XI, A. B. C. F. M. 及び "*Rutland Weekly Herald*" Oct. 15th, 1874, に掲載されている。よって後者は (D34:81) に詳しく紹介されている。

* この年、日本に向かう宣教師は J・K・H・デフォレスト夫妻 John. K. H. DeForest, A・H・アダムズ夫妻 Arthur H. Adams と新島であった。

十月十二日

Early History in Japan に ついて記す。(E1114)

十月十三日

この朝、アンドーヴァーのデーンより小包みを受け取る。三通の手紙、金鎖、ジョンソン博士のメモ・アトラス購入のための二十ドル、クッション、ミス・ダウからの美しい写真が入っていた。アンドーヴァーの知人たちからの贈り物であった。午後、さっそくお礼の手紙を書く。この手紙に初めて Joseph H. Nee Sima と署名する。とくにテイラー〔教会〕執事、ヒドン姉弟に宛てた追伸部に "I received an additional name *Hardy* to my previous name." とある。(全6:144)

十月十五日

木曜日、この日より新しい日記帳を用いる。(E1101)

午後三時、ボストンを発ち、午後八時、アーモストに着く。シーリー教授を訪問する。(E1101)

帰国に際しボストンよりワシントン在住のパーカー博士に手紙を出し、ボードの年会において同博士が示してくれた「協力」に感謝する。(D33)

十月十六日

アーモスト大学の W・A・スターンズ総長、E・ヒッチコック博士、神田乃武、上杉勝賢らに別れの挨拶をし、午後五時の汽車でニューヘイブンに向かう。途中、キープ兄妹に会ってハートフォードに

十月十七日

下車する。この町で箕作「佳吉か」に会う。(E1101)

八時の汽車に乗り、九時すぎニューヘイブンに到着、イエール大学のポーター総長宅に入る。シアーズを訪問する。夕方、ハーディ夫妻が来着、宿所のニューヘイブン・ハウスへ会いに行く。(E1101) 日曜日、ポーター総長の家でもてなしを受ける。朝九時にハーディ夫妻と共に「イエール」神学校に行き、学生たちに話をする。夜七時十五分、ヘーベル牧師のカレッジ・ストリート教会において日本に関する演説をする。聴衆が廊下まで溢れる。フィッシャー教授、デイ教授に会う。夜、盲目のハリス氏来訪、日本の盲人施設への就職を依頼される。

十月十八日

ポーター夫人より二十ドル、またヴァン・ノーマンが日本の書物を買いたいということで五百ドル預かる。ファーマントンのハントより、日本人の友人に渡すべき手紙を預かる。ハーディ夫人より餞別五十ドル。シーリー教授より、夫人のため日本の品物を送るようにと、二十五ドル受け取る。

ボードの出納係L・S・ワードより、ボードのサンフランシスコ「駐在員」のE・P・フリントに手紙を渡すよう頼まれる。(E1101, E112)

十月十九日

ハーディ夫妻、ポーター夫妻、ノースロップ教授らに見送られて、ニューヘイブンを出発する。A・ハーディは列車の発車する間ぎわまで新島の乗った車中に留まって、別れを惜しむ。正午頃、ニューヨーク到着、乗り換え時間を利用してW・T・ブースを訪れ、ヒドン姉弟より餞別に贈られたジョンソンの世界地図を受け取る。その後、パール街一三二にハーディの次男、チャールズを訪問する。夕方七時半、ニューヨークを出発、寝台車でバッファローまで行く。(E1101)

十月二十日

午後一時、バッファロー到着、汽車を乗り換えてイリー湖畔をクリーブランドに向かう。クリーブラ

十月二十一日
 ンドで駅に迎えにいらはすのワレン牧師を探すが、会えなかった。(E1101)
 午前八時半シカゴ着。イリー駅からバーリントンへ、さらにクインシイ駅へ乗り換えのワゴンで行き、

二つのトランク、いくつかのバッグも含めて一ドルを払う。近くて手ごろな Massanut Hotel に宿をとる。ステイト街を見物、ラ・サール街のJ・W・ポーターを訪ねるが、不在。午後、C・D・ハモンド大佐をラ・サール街に訪ね、彼の案内で、有名な水道を見学、さらにニュイングランド教会のチェムバレン牧師を訪ね、祈禱会に出席する。クル執事がホテルまで同行してくれる。(E1101)
 この夜、安中では「急ニ荷物参附添山本邑太郎参候付帰朝何時頃候哉と尋候処来月七日と申候島田頼之殿も参候と思候処脇答申候御蘭之趣相当候付度々記」(E1714)

十月二十二日
 朝早く起き、三日間の旅行に必要な品物を買う。Congregational Theological Seminary を見たいと思いい人に聞いたり、馬車で探したりしたが見つからなかった。シカゴからオマハまで寝台の予約をする。三ドル。午前十時シカゴ発、ミシシッピー河を渡り、午後七時バーリントンに到着、二十五分停車しただけで発車する。少し雨が降る。(E1101)

十月二十三日
 この日発行された *The Congregationalist* にシーリー教授は“Narrative a Japanese”と題する一文を寄せ、新島の生い立ちからクリスチャンになるまでの経緯を詳しく紹介する。(C13: 55)
 シカゴを出て以来、天気はあまり良くない。ネブラスカ州との境にあるカウンスル・ブラフスで下車、列車乗換えのためミズリー河を渡る。十時五十分オマハ着。ここでサンフランシスコまでの寝台車の切符を買ったり、手荷物託送の手続きをするのに時間をとられる。さらに旅を続け、プラット河沿いに走る。(E1101)

「安中」薄曇、是水翁、聖天様のおみくじをひく。新島が何時ごろ帰国するかは、来月七、八日ごろにわかる、とおみくじにでる。(E1714)

* 是水とは新島民治の雅号である。

十月二十四日

朝七時三十分に目覚める。汽車はネブラスカを走っており、やがて一〇〇マイルも沿線に添って流れるクリーク沿いのロッジ・ポウル駅に着く。カモシカやプレイリードッグが車窓から見られる。午後一時、シャイアン着、家具店に入り、その主人にJ・D・デイヴィスが説教をしたという大通り左側の教会を教えてもらう。(E1101)

十月二十五日

安息日を守るためワイオミング州グリーン・リバーに下車、この荒涼たる町で一日を過ごす。ハーディに手紙を書き、午後、食堂で知り会った中国人に案内されて、共同生活をしている十二人の中国人に会う。住居は不潔で生活も乱れ、英語はもちろん漢字も知らない状態なので、伝道することをあきらめる。付近の黒人住宅を訪れ、伝道を試みるが、同様の状況で異邦人に対する伝道の困難さを感じる。(全6:145, E1101)

十月二十六日

早朝起床、近くの五、六〇〇フィートの山に登る。頂上付近で化石を採集中、列車が来るのを見つけて大急ぎで下山し、駅に駆けつける。駅前の食堂で偶然、日本伝道に向かうJ・K・H・デフォレスト夫妻と会い、同じ列車でグリーン・リバーを出発、夜九時前にソールト・レイク・シティに着く。この夜はバリー・ハウスに一泊、市街を見物する。(E1101)

十月二十七日

モルモン教会を訪問する。ブリガム・ヤング Brigham Young に面会を求めるが、病気のため不果。教団の十二使徒の一人オーソン・プラット Orson Pratt に紹介され、大会堂、市役所、モルモ

ソ大学を見物する。モルモン教に関する新島の質問のすべてに答えてもらう。ブラットはモルモンの福音を新島が説くように望んだが、新島は新約聖書の中に自分が見いだす福音しか説く意志はない、と答える。午後三時四十分ソールト・レイク・シティを出発、オグデンを経由して西に向かう。(46: 146, 1101)

十月二十八日
Elko, Battle Mountain を経て西進する。車中で中国福州に向かうJ・B・ブレイクリー牧師夫妻 J. B. Blakely と会う。(1101)

十月二十九日
汽車でシェラ・ネバダ山脈を越える。頂上付近で朝食をとる。沿線の積雪は一フィートに余る。ケープ・ホーン駅を経て午後八時、サンフランシスコに到着、ルシアン・ハウスに投宿する。一日二・五〇ドル。ミス・ヒドンに発信、二日後の土曜日に横浜に向かって出帆する予定であると書く。シーリー夫人、ハーディ夫人にも手紙を書く。(46: 145, 1101)

十月三十日
ハーディ夫人にニューヘイブンまで見送りに来てくれたことへの礼状を出す。(46: 148)

デフォレスト、アダムズ両宣教師と両替のため銀行に行く。オークランドに行くつもりだったが、ブレイクリー牧師が病気のため果たせず。(1101)

十月三十一日
土曜日、“We left San Francisco.” 午前十一時、コロラド号に乗船、正午に出帆する。「天気清快氣候温暖みな外衣を用いず」出帆するちょうど一時間前、ハーディから民治に宛てた手紙をスチュワードから渡される。(42: 675, 46: 148, 1101)

秋、日本に帰る前夜、新島は二年前に聖書を勉強するように説得した日本人留學生がキリスト教を信奉したということを聞き、喜び。(46: 131)

* この留学生はフランクフルトで紙幣製造法について研究していたという。(H6: 13) 山崎喜都真か。

十一月一日

日曜日、コロラド号の位置、北緯三六度三四分、西経一二六度〇五分、進度一九二マイル。(E1101)

十一月二日

北緯三五度二九分、西経一三〇度〇三分、進度二〇六マイル。(E1101)

十一月七日

北緯三〇度二七分、東経一四九度四九分、サンフランシスコを出発して一週間たった。(E1101)

十一月十日

「安中」晴、新島民治、九月二十六日付の新島書簡を窺より受け取る。新島が十月三十一日にサンフランシスコを出帆、十一月下旬に浦賀へ着くことを知る。(E1714)

十一月十一日

民治、新島の帰国が近いことを「植栗其外江吹聴」する。(E1714)

十一月十五日

風浪のため船大いに揺れる。この日より三日間船酔いのため船室に閉じこもり、読書しようと努める。

十一月十五日

著しく不快。(E1101)

十一月二十一日

ハーディ夫人に手紙を書き、船中で東京の国立学校で教授になる予定のドイツ人医師 [A. L. A. Wernich か] に、毎日日本語を教えていること、このドイツ人は非常な勉強家で、一日に七時間勉強していると述べる。また、ここ一週間海が荒れて、立派な船乗りを自認している新島さえも船酔いにかかったことを知らせる。(H6: 149)

十一月二十六日

木曜日、午後五時、コロラド号横浜に到着、グリーン、バラ、ルーミス Henry Loomis らに出迎えられる。半時間後に上陸し、ルーミスの家に一泊する。この夜、米英人の祈禱会に招かれる。(H6: 153, E1101)

十一月二十七日

コロラド号の船内で熊本出身の実業家江崎四郎と知り合う。(H2: 675)

十一月二十七日

横浜に三日間滞在する予定を繰り上げ一晚と半日滞在しただけで、この日、東京に出る。「外務省江

帰朝与致御届」(E1678)

安中では中村屋金次郎が民治を訪れ、新島の帰国に際し、荷物運搬、宿泊等の手配を横浜の石炭屋福三郎に依頼するように勧め、手紙を出す。(E1714)

* 植村正久はこの日のこととして次のように記している。ただし曜日(あるいは月日)が違っている。「彼が上陸した翌日は日曜日であつて、朝の九時頃海岸通り谷戸橋畔三十九番へボン診察所に集會せる日本人の礼拝に列つて説教やうの話をした。題は種蒔きの譬であつた」(J55-3: 632)

十一月二十八日

早朝、東京郊外の板橋より人力車三台を借り切り、一路安中に向かう。食事の間小休止するだけで二十時間を走り続け、深夜十二時頃、安中に到着、伝馬町山田屋隣藏方に宿泊する。(全6: 153, 159, E1678, E1681, E1714)

* 新島が安中へ出発した日に就ては、(全6: 153)では東京に出てきたその日の午後と記している。

十一月二十九日

晴、朝八時頃、山田屋より新屋敷の新島家に帰国を知らせる使いを出し、家族や近所の人々に迎えられて家に帰る。父親の民治はその喜びを「一生ノ歡喜此時ニ在リ」と家統記に記す。民治、新島の帰国届けを植栗に依頼する。(全6: 153, 全10: 208, E1677, E1681, E1714)

十一月三十日

親類、知人へ無事帰国の挨拶に廻る。(E1678)

十二月二日

朝八時より星野閏四郎、根岸松齡、新島公義ら親戚・知人ら八人と共に妙義山中ノ嶽を巡り、最近、鉄鉦脈の見つかった甘楽郡小坂村へ行き、一泊する。(全10: 210, E1714)

十二月三日

早朝、宿で人々が無駄話をしているのを聞きかねて、型破りの説教を始める。聴衆の中に一人の酔っ払いがおり、新島の話聞いていたが、その時以来、彼はその生き方をすっかり改めたという。(中略)

10 : 210)

雨、鉄山を見物し、富岡を廻って午後七時ごろ帰宅する。(E1714)

十二月六日

晴、旧藩士清水方において「講釈」をする。(E1714)

十二月九日

高木玄真ら大阪公会の信者に手紙を出す。「大阪公会□御当所へ可来との趣一々承知仕、乍然僕義アメリカ国発足の節ニは神戸へ可参之目的ニ有之候間、何レ神戸へ相越之上、当所の教師輩ニ相談之上其義は決定可仕候」(全3 : 121)

十二月十一日

安中の学校において演説する。(E1714)

十二月十三日

安中の竜昌寺で説教をする。この地域の僧侶や高崎の上級役人の全員が聞きに来る。(全6 : 115, 10 : 210)

十二月十五日

『朝野新聞』第四〇五号は新島の紹介および帰国の記事を『横浜ヘラルド』より抄訳して掲載する。(D19 : 25)

十二月十六日

晴、高崎より官員八名が来訪、安中伝馬町内蔵之助方で面会する。午後二時より彼らと学校に行く。十一屋より臥台を借る。(E1714)

十二月十九日

川田剛に手紙を書き、帰国したことを知らせる。(F65)

十二月二十日

隣村の役人に招かれ、夕食後、八時より十時半まで、その家族にイエス・キリストについて話をする。(全10 : 210)

十二月二十一日

磯部の萩原茂十郎方に招かれ、一泊する。(E1714)

十二月二十二日

ハーディ夫人に手紙を出し、帰国しては、一カ月間に起こったことを報告、また父親の同意を得て、

それまで家にあった日本の神棚、御札など、神に関する諸々の物を焼き捨てたことを知らせる。(46: 154, 46: 209)

川田剛より、この日付で、新島約瑟へ帰国を喜ぶ手紙が来る。(F651)

十二月二十三日
明日、安中を出発すること、東京では牛込若宮町三十三番地・川田剛方に寄留することを新島公義より戸長に届け出る。(L1723)

* 新島に与えられた休暇は二週間であった。"Dr. Treat gave me a permission to stay with my father at least two weeks." (46: 150)

十二月二十四日
晴、安中を出発、人力車で東京に向かう。途中、高崎支庁に立ち寄ったのち、熊谷県庁を訪れ、楢取素彦権令に面会し、同地の小松屋に一泊する。速水林次が同行する。(L1714)

* 「安中基督教会録事」では十二月二十一日出発となっている。(F5: 880)

新島民治はわが子の帰国についてハーディ夫妻に、この日付の礼状を送る。「私はもはや彼を息子と呼ばず、神から送られた人のように扱いたいと在じます。私は日々彼の教えを聞き、家族は真の神を礼拝し始めたところであります」(46: 211)

十二月二十六日
旧師川田剛を訪問する。それより本所の尺振八を訪ねるが不在。(43: 123)

東京石町四丁目島屋甚蔵方に宿泊する。(43: 122)

十二月二十七日
新島公義名で次の届けを戸長に差し出す。

「養伯父同苗約瑟義東京牛込若宮町三十三番地罷在候備中深津県貫族川田剛と申者方江寄留仕候依之
明廿四日出立為仕候此段御届申上候 以上 十二月廿三日」(L1714)

十二月二十八日 文部省に田中不二麿を訪ね、帰国の挨拶をする。兵庫に大学を設立することにつき打診するか？（H

3：123）

十二月三十日

田中を浅草御蔵前旅籠町五の私邸を訪ね、「縷々御談致、其上御馳走ニ相成候、妻君よりも糸の御礼

御丁寧ニ御延被下候」（全3：123）

十二月

日本基督公会の高橋〔安川〕亨、戸田忠厚ら新島に会い、教会、宗派について意見を聞く。（J22—2：5）

また、この頃、横浜海岸教会の信者ら新島に対し書面で、横浜に留まって牧師に就任するよう求める。

（J22—2：5）

十二月

グリーン宅で松山高吉と会い、午餐を共にする。（J40：94）

十二月

安中を去るにあたり、千木良昌庵に信者の心得を書き残す。（C12：231）

この年、京都府は兵庫県に対し、なぜ宣教師の活動を許しているのか、を問い合わせる。（E8：2）

第三章 同志社創立と教会の設立

一八七五～一八八三年

明治八年（一八七五）二十三歳

一月一日

東京より安中の父親に手紙を出す。「大阪表へ発足前種々文部大輔殿と談判致、此度兵庫表ニ於而大
学校可相立目的も有之候間、其事件相成ト不成は未タ難計候得共、先十二七分は成就之事と存候……」

（全3：123）

新島の送った中国訳、日本語訳聖書、安中に到着する。（F5：880）

〔一月三日〕

日曜日、初めて東京の教会で説教をする。この教会はかつてJ・H・シーリー教授が献堂式において
説教をしたところである。礼拝のあと聖餐式が守られた。一人の女性が洗礼を授けられた。（全6：160）

160）

* この教会は築地の東京ユニオン・チャーチのことと思われる。J・H・シーリー来日中の明治五年九月に献
堂式が行われている。

一月六日

千木良昌庵に手紙を出し、かねて依頼されている聖書類につき、すでに買った分は有田某（湯浅治郎
か）に託して安中に送ったこと、残りの分は明日横浜に行った際、買い求めたい旨を書き送る。なお、
この書簡の署名は「新島譲^{ジヨフ} 約瑟之略也^{ジヨフセフ}」となっている。（全3：124）

一月七日

横浜に行き、D・C・グリーンとH・H・レーヴィットに会う。レーヴィットは大阪の宣教師で、病
気で帰国するため横浜に来ていた。（全6：160）

一月九日

新島民治に手紙を出す。この手紙の署名は「新島襄^{シムラ} ジヨフセフの略也」とある。以後の署名はすべ

て「新島襄」である。(全3:126)

聖書その他のキリスト教書を横浜より安中の求道者に送る。(F5:880, H1:795)

一月十日

日曜日、グリーンからこの日説教をするように頼まれる。

また、シーリー教授に手紙を書き、自分は数日中に大阪に行くが、教授から頼まれた品物は帰国するレーヴィットに託して届けたいと思っていること、二十五ドルは日本の二十三・四五円であること、さらにアーモスト大学に在学中の神田乃武に、今週中に彼の父親の神田孝平に会えるだろうと伝言を頼む。横浜からの帰途、暖房のない汽車の入口に座って風邪を引きなおしてしまう。(全6:160)

安中の求道者ら初めて岡村栄懐宅に集まり聖書を会読する。(F5:880)

一月十一日

千木良昌庵に手紙で、依頼されていたキリスト教書の配分先、会計等を報告する。署名は「新島襄^{シマ}」

ジョフセフの略」である。(全3:126)

新島家、秩禄(元現米九石襲禄)を奉還する。(E1680)

一月十七日

この日、横浜において朝二回(一度は日本語で、もう一回は英語で)説教をする。夕方にも別の場所
で二回説教をする。“Now I can use Japanese quite freely and find a great delight in preaching
in my native tongue.”(全6:161)

* 参考——(J55—3:633)

一月二十日

日本の汽船に乗り大阪に向かう。(全6:161)

一月二十二日

船中で伊藤博文と会い、言葉を交わす。夕方、大阪に到着、川口与力町三番(のち本田三番町三二番

か)のM・L・ゴードン宅に入る。(全6:161, J24—19:75)

* M・L・ゴードンは明治十二年から三十二年まで同志社で教えた。当時はゴルドンと呼ばれた。

宣教師団はすでにボードの外国伝道総主事から、キリスト教伝道者の養成学校設立のために集められた資金がある、という通知を受けていた。けれどもキリスト教に対する反対の動きが強いため、そのような学校は、遠い将来のことのように思われていた。(410:214)

一月二十四日? 梅本町公会で初めて説教をする。安息日学校はほんの数日前から始められ、きわめて順調であった。

(46:163)

一月二十五日 神戸のJ・D・デイヴィスが来訪、伝道者のためのトレーニング・スクールが必要であること、その

ような学校がなければ有望な青年を失ってしまうだろうと話し合う。ゴードンと三人で外国人居留地外の大阪市東南部に学校の候補地を見に行く。新島はこのため大阪府知事に会うことを考える。(46:162)

一月下旬 初めて神戸に行き、神田孝平県令に面会、アーモスト大学留学中の神田乃武より託された手紙を渡す。

(46:166)

一月二十七日 在阪の木戸孝允を訪ねる。「新島襄来話学校建築大に教育等へ着手の順序然して当人の意思等を尽せ

り」(J47-3:145)

二月三日 学校設立について木戸孝允を訪うが、不在のため面会できず。(J75:70)

二月四日 木戸より、来客のため本日は訪問できない旨、通知を受ける。(D1:4, J75:70)

二月初旬 この頃、リューマチズム、とくに神経性頭痛、不眠のため悩まされる。(46:164)

二月十二日 この日の木戸日記にいう「……又大阪府に至り渡辺知事に面会す新島襄浪華之中学校を民力を以企つ

る一条に付余甚其志を賀し為に周旋せり磯野小右衛門二萬円を出し浪華中へ遊園を開くの企あり余情今日の情態を見るに未日本内へ遊園を開くを不急依て是等の金も中学校設立の助力となさんと欲し過日磯野に説き、又今日渡辺知事に説けり、其より新島を訪ひ大久保を訪ひ過日来の談余を尽す……」(J47-3:152)

二月十三日 晴また雪、新島、淀屋小路の寓居に木戸を訪う。(J47-3:153)

磯野の寄付のことにつき内海忠勝「大阪府参事」と協議す。(F3202)

二月十五日 内海より、この日付で、磯野が応分の援助をする、との手紙を寄せる。(F3202, D1:4)

二月十九日 雪、木戸は京都の「槇村を訪ふ亦不在山本覚馬を訪ひ暫時相語る」(J47-3:155)

二月二十日 木戸を訪問するが、留守のため、書状を残しておく。(J47-3:156)

二月二十一日 木戸はこの日、新島に返書を出す。木戸の日記には「磯野小右〔衛〕門来訪せし故弥遊園を変して学校え出金いたせし様に説諭せり」と記す。(J47-3:156)

二月二十二日 木戸孝允を、午前十時、大阪土佐堀二丁目筑前橋尾道屋に訪問する。木戸より磯野を説得した話を聞き、満足す。(J47-3:156)

また田中不二麿より、この日付で来信、学校設立につき宣教師を教員として雇うことはできない、聖書講義は修身学とした方がよい等の見解を述べる。また先年、民治に貸した金子は木戸に託して返済のことを了承す。(F3187, D1:5)

三月一日 第四回京都博覧会が京都御所において開かれる。六月八日まで。(H10:58)

三月七日 新島民治に手紙を書き、学校設立は急速には進まないが、大阪では一人で六千円ほど出してくれる人

三月三十日

がいること、十万か十五万円ほど集まれば学校の建築に取りかかりたい、と述べる。また結婚については「……当分妻の義ハ延引ニ可致……小子ハ決シ而顔面の好美を不好唯心の好き者ニシ而学問のある者を望み申候、日本の婦人の如きなき女子と生涯共ニする事ハ一切好ましく不存候」と書く。

(全3: 129)

民治に手紙を出し、さき頃大阪に來た山田重二と三田一郎にはアメリカ人について英語を学ばせ、おいおい算術も教えるつもりであること、さらに十日ほど前、湯浅治郎が訪ねてきたので、金一円を委託したこと、この金で鶏を買い、卵を食べれば良いと書く。(全3: 131)

千木良昌庵に手紙を出す。「悪魔之事御聞尋に相成候処兎角神經ニ而夜々失眠いたし、医師当分可廃学よし呉々も被申候次第……然シ此悪魔之事ハ片紙を以て書き尽し難く、何レ全快之上ハ勿々御尋ニ御答可仕候」(全3: 132)

三月

ハーディ夫妻に手紙を書き、伝道者の「養成所に加えて大学をつくるのでなければ、私たちの仕事はうまくいくはずがないと確信します。私はこの前のボードの集りで、このことをお願いしました。しかし宣教師団はあの資金を養成所だけに使いたがっています……」(全6: 163, 全10: 214)

四月一日

この日、「一囊を帯び一本の杖と一本の傘とを持」って、奈良、滋賀を廻って京都への小旅行に出発する。なるべく徒歩で行き、暗峠を越えて奈良に着く。興福寺の塔に登り、春日神社と鹿を見物し、この夜は奈良に一泊する。(全3: 133)

八時、川口発→ムツムラ医師訪問、高木玄真が、Tutatingiaまで同行→暗峠まで人力車、三里半→一マイル近く歩き→奈良まで人力車→奈良四時着。(全10: 1)

* この小旅行の日程とコースは次の通り、なお、新島民治宛書簡と英文日記では日付けが一日ずれている。

四月一日 大阪——奈良（泊） 四月四日 大津——坂本（泊）

四月二日 奈良——宇治（泊） 四月五日 坂本——京都（滞在）

四月三日 宇治——大津（泊） 四月二十四日 京都——大阪

四月二日

早朝、三笠山頂に登り、手向山、八幡社、東大寺を見物する。奈良（朝八時）——木津（正午）（二十一銭）——午後、宇治の入口、木津新田の一マイル先までの四マイルを人力車——茶畑の中を平等院へ行く。（全3：133, E1101）

四月三日

宇治（朝八時発）——黄檗山——路に迷い三室山へ——炭山——二ノ尾（松田孫左衛門宅で食事）——石山（松田が案内）午後四時着。石山寺を見物——瀬田橋——膳所——大津（午後六時）八丁のタカシマヤに泊まる。旅籠代二朱。（E1101）

四月四日

大津——三井寺——唐崎——坂本（E1101）
安息日につき上坂本の宿で休息する。（全3：133）

四月五日

早朝、上坂本——比叡山（一時間で頂上に至る）中堂・講堂・戒壇を見物——十時すぎ麓まで下りる——十二時に京都三条橋の目貫屋に入る。夜、木屋町三条上ル十二に宿泊中のM・L・ゴードンを訪う。（全3：134, E1101）

四月六日

この日より二十四日まで滞在、知事「楨村正直か」に度々面会、学問をすすめることについて相談、京都府博物館用掛に就任を依頼される。（全3：135）
雨、午後、博覧会を見に行く。御所内を見物する。（E1101）

四月七日

勸業場内の織工所を見学、さらに舎密局、女紅場を見て、祇園へ行き八坂の塔、清水寺、大谷、三三三間堂、新病院等を見物する。(E1101)

* 四月第一水曜日〔四月七日〕東京・横浜公会の代表J・バラ、奥野昌綱と神戸・大阪公会の代表デイヴィス、新島襄が神戸において教派合同につき会見するが、意見の一致を見ず、不調に終わる。(F1:25, F28:45)

四月上旬

榎村正直〔京都府参事〕の紹介で山本覚馬に会い、学校設立について相談する。山本はゴードンから贈られた『天道溯源』について話し、キリスト教による人心の改善を説き、キリスト教による学校の設立を勧める。(全10:216, D10:178)

* 榎村正直は明治八年七月二十日京都府参事より権知事に、同年一月二十二日京都府知事に進み、十四年一月十九日まで在任した。(J27:119)

四月二十四日

大阪に帰り、“仕事”を再開する。(全3:135, 全6:164)

四月二十七日

シリーズ教授に手紙を出して次のように伝える。大阪の知事は宣教師が学校で教えることを許そうとしないので、田中文部大輔に手紙を書き、われわれの学校で宣教師がキリスト教、その他の科学を教えることができるかどうかを尋ねました。田中の答えはこうでした。僧侶は教えても良いが、宣教師はダメだ(Reverend men are allowed to teach but missionaries are not.)と。

キリスト教をまったく禁止しているわけではないが、宣教師が教えることはまだ許されていないし、校長にもなれない。各方面に困難が多すぎるので、カレッジを設立する事はしばらく延期せざるを得ない。デイヴィスが神戸で伝道師の養成学校を始めたなら、そこで教えようと思う。(全6:165)

四月二十八日

京都府博物館用掛を申し付けられる。(H9)

四月

この頃、神戸に行き、デイヴィスに会う。(E1101)

春、新島、大阪において綱島佳吉に会う。(D16:8)

五月一日

この頃、安中の湯浅治郎より手紙が来る。(全3:135)

五月五日

民治に手紙を出し、京都府の博物館用掛に任命されたことを知らせる。また手紙と共に赤ナスビ〔トマト〕の種を送る。(全3:135)

五月七日

大阪より蒸汽船で淀川をさかのぼり、伏見に至り、人力車で京都に入る。十日まで滞在する。(E1101)

五月二十三日

「出エジプト記」二十章十二節について説教稿を書く。(E392)

五月二十五日

新島公義、安中学校を卒業する。(E1077)

五月二十六日

ジャパン・ミッション第三年会が、この日より六月七日まで、神戸のO・H・ギューリック宅で開かれる。議長はW・テイラー Dr. Wallace Taylor 新島が出席か。(全3:136, E1101)

六月五日

五月末より神戸に滞在中のところ、この日、大阪に帰る。(全3:136)

六月七日

蒸汽船で淀川を遡航、京都に着く。「京師ニ於て学校建築之義相計候処豈料らんや何之差違ひもなく京師中指屈り之人物相談ニ及び呉れ、勿々六千坪程の土地を買受へき談判ニ相成り当秋より学校造営ニ相懸るべき企」になる。(全3:136)

六月八日

民治に手紙を書き、京都に六千坪の土地を買い学校を設立することになったので、忙しくて、この夏は安中に帰れないこと、また学校設立にあたり、寄留人では不都合と考えられるので、戸籍を京都に移したく、この旨を区長に依頼してほしいと頼む。(全3:136)

六月十日

新島はデイヴィスと共に再び京都を訪れ、学校用地として京都御所北側にある旧薩摩藩邸跡（開拓社

名義、山本覚馬所有地)五エーカーの土地を五百五十ドルで買い受ける。(E1: 612, E3—d, E12: 142)
十六日まで京都に滞在する。(E1101)

六月十四日

新島公義、熊谷の暢発学校へ入学する。(九年八月退学)(E1677)

六月十七日

学校設立事務のため、夜明け前の三時半に有馬を出発、神戸と大阪を廻り、さらに人力車に乗って夜七時半、京都に着く。(E3: 138)

六月三十日

民治に手紙を書き、学校設立のため多忙であること、戸籍については「寄留ニ而は不都合の事も有之候間、是非ニ住所を変へ士族より平民に相成候共不苦……私義京師之人別ニ入候様仕度候、扱当分の内中京「上京」三十一区四百一番地山本覚馬と「申」者の内ニ同居」しているので、送籍状をそこへ送るように頼む。(E3: 138)

* (E1677)では七月五日に山本覚馬方に寄留となっている。

六月

デイヴィスと共に学校の校地をさがすうち三十三間堂を見物、一千体の仏像を見て「これらの仏像は冬に貧しい生徒たちが暖を取るのにもってこいですね」と冗談をいう。(C4: 177)

この夏、田中文部大輔、京都に新島を訪ね、三日二晩にわたり官途につくことを勧める。新島は固辞、ついに田中は「新島君、君はヤソの奴隷じゃ!」の言葉を残して去る。(E12: 143)

七月四日

七月七日

日曜日、梅本町公会で説教をし、伏見の医師・大村達斎と上代知新に洗礼を授ける。(E6: 166, J71: 38)
有馬からアメリカの友人「A・ハーディカ」宛に手紙を送り、山本覚馬の人物について紹介し、さらに京都の学校を設立するにつき「榎村」副知事が学校の設立を許可したこと、校地を入手したこと、校舎にする建物について交渉中であることを報告する。(E3—d)

七月九日

田中不二麿よりこの日付で来信、京都で学校用地を買収したことを聞いた、学校設立の「願書等此表
〔文部省〕へ相廻候へ、可然取計可申旨委纏領承」と述べる。(F665, D1: 5)

七月十二日

沢辺琢磨、日本ロシア正教司祭となる。日本人としては最初。(J45: 1598)

七月十五日

朝五時に起き、再び民治に送籍を促す手紙を書く。もし京都に籍がなければ「学校ニ而耶蘇教を教候
事之御許も可相願候間、是非京都之籍ニ為らざれば不都合」と記し、また両親と離れて暮らすことは
甚だ不本意なので、いずれ近々良い土地を買いて求めて、暮らしに不都合のないようにしたい、と付け
加える。(全3: 139)

七月二十日

榎村正直、京都府権知事となる。(J27: 119)

* 京都府庁は、明治四年以来、二条城にあった。明治十八年六月に現在の場所(上京区藪之内町)に移された。

七月二十一日

朝五時前に起き、父親に手紙を書く。文中に、一兩日中に嵐山近くの下嵯峨に行き、八、九日滞在、
「桂川へ参りアヒを可釣と楽居候」と記す。(全3: 140)

七月二十二日

新島公義の名で、新島襄の本籍を安中より京都三十一区河原町四百一番地山本覚馬方に移すよう送籍
願を熊谷県「群馬県」に差し出す。(E1235)

七月二十七日

摂津第三公会「三田教会」設立、信者十六名、仮牧師O・H・ギューリック。男子より女子の多い、
初めての教会。(E8: 2)

八月二日

デイヴィスに手紙を書き、政府の文教関係の若手の役人「九鬼隆一か」からキリスト教主義の学校を
開くには、政府の有力者に直接会って信教の自由のため働きかけること、新島が京都市民になること
等の助言を受けたことを伝える。(全6: 166, C4: 57)

八月四日

私塾開業願を書く。届出人は新島襄、山本覚馬連名。(全1:8)

*「同志社」が明治八年のいつ結社されたかは不明である。ただこの開業願の文末の日付は「明治八年八月四日/廿三日出ス」「結社人 新島襄、山本覚馬」とあるので八月四日を結社の日とすべきか? なお明治四十四年の「同志社沿革草按」(D39)には「明治八年八月二十三日新島襄山本覚馬氏ト結社シ米国伝道会社宣教師デビス氏等ノ賛助ヲ得テ同志社ヲ創立スル」と記している。

八月九日

田中不二麿は、この日付で書簡を新島に送る。(一)先頃亡くなったA・ハーディの孫ジョルベ「A・S・ハーディの息子 Sherburne」の写真を受け取ったこと (二)九鬼隆一より新島に面会した際のことを聞いたこと (三)楨村には過般面談したこと、を伝える。(F3182)

八月二十三日

私塾開業、外国人教師雇い入れにつき許可願を京都府に提出する。(全1:3, 6)
夜、府知事「楨村か」宅を訪問、学校開設のことを頼む。府知事は請願書が府庁より政府に送達される前に、新島が自ら東京に向いて請願する方が良いと勧める。(全6:167, C4:58)

八月二十五日

学校設立に関し文部省と折衝するため、この日、二人曳きの人力車で京都を出発する。(全3:140, 全10:217, C4:59)

八月二十七日

京都府は、新島が宣教師を雇い入れて私塾開業を願ひ出したことは、文部省布達に抵触するので、書類を添えて、文部省に指揮を仰ぐ。(D1:38, 64)

九月一日

朝、東京に到着、「文部省の官員に面会し縷々相談仕候処、何レ宣教師雇入西京ニ於而学校を開候事ハ可相叶」との感触を得る。(全3:141)

九月二日

梅本町公会の高木玄真に手紙を出し、学校設立事務のため東京に来ているので、新島不在中、安息日

の説教を高木か神戸の兄弟に応援してもらいたいと頼む。(全3:141)

九月三日

「文部省指令——書面(私学開業存寄書)西教伝教師ヲ私学校教師ニ相雇候儀事実無余儀相聞候ニ付許可相成不苦候事 文部大輔 田中不二麿 印」(D1:38, 67)

九月四日

私塾開業届出のこと「九月四日相済候也」(全1:8)

木戸孝允を訪問、京都に学校を設立することを話す。(J47-3:232)

A BRIEF note from Mr. Greene, dated September 4th, announced that Mr. Neesima had "obtained permission from the Tokio (Yedo) government to open his school in Kioto." Mr. Davis has reported the same fact, saying also that Mr. Neesima has permission to employ missionaries as teachers in the school." (E3-e)

九月五日

木戸孝允を再び訪問する。夜十一時すぎ辞去する。(J47-3:233)

九月七日

東京同人社の中村正直より『天道溯源』訓読和綴本(上中下三冊)を寄贈される。上巻序言欄外に「謹呈新島約瑟先生以表敬礼 明治八年九月七日 中村正直」の献辞がある。(D5:27)

九月十一日

横浜を出帆、神戸へ翌十二日夜十二時半に入港する。(全3:142)

九月十五日

新島公義より初めて手紙を受け取り、その返書を送る。「暢発校ニある三年、其後一両年間教授致シ一切事務も御怠無之候ハ、予方ニ御引受幾重ニも御世話いたし英学教授可仕候」と励ます。(全3:142)

九月

この頃、上京第二十二組新島丸頭町、岩橋元勇の持ち家に移転する。

* 「移転の時期」 新島公義宛(九月十五日付) 書簡の発信地は山本覚馬方であるが、後出の福士成豊書簡(十

月十二日付)の新島の宛先は新島丸町となっている。新島が富士への帰国第一信を出したのは、富士書簡によれば九月二十七日付であるから、移転の時期は九月十五日から二十七日の間と考えられる。松蔭町に移転する明治十一年九月七日までここに住んだわけである。

〔場所〕新島丸頭町四十番地の家は、京都地籍図によれば、新島丸通下切通シ上ルの(地番)一四三ノ一、一四三ノ二であり、現在の鴨沂高校東側の道路のカギ形になった角付近にあたる。

九月二十七日

函館税関に宛て、富士成豊の消息について問い合わせる。(F656)

十月一日

J・D・デイヴィスを英学普通科教師として雇い入れる。月給百円、宿料十円。(D1:87)

十月十一日

眠れないので午前二時過ぎに起きて、家〔校舎か〕を借り手紙を書く。(全6:167)

十月十二日

富士成豊より、この日付で来信、「貴君ハ素ト新島七五三太ト云様ニ無之哉」と尋ねてくる。(F656)

神戸山下通の女学校(のち神戸女学院)の西洋風木造二階建の校舎が完成する。資金はアメリカの伝道会社、日本人有志より出されたが、土地の名義は新島襄、それをJ・D・デイヴィスが賃借する形式を取っていた。(GT:108)

十月十五日

新島、山本八重と婚約する。彼女は京都府立女学校の教員だったが、クリスチャンと婚約したという

ので、たちまち解雇された。(全6:169, 全10:220, D31:36)

デイヴィスの京都居住の許可が下り、学校開設の道が開けたので、前途に希望を持つ。(全6:167)

十月十九日

J・D・デイヴィスとその家族が入京し、京都御苑内の旧柳原前光邸に落ち着く。(C4:60)

* デイヴィスの入京日には諸説がある。十月二十一日(全1:161, D1:283)十月二十三日(E200, D1:86)

十月二十九日

木戸孝允よりこの日付で来信、京都土手町の屋敷を貸すことはできないが、住居にするならば三本木木屋町に貸家があるので、榎村と相談するように、と伝えてくる。(J47-3:253, J75:70)

十月

同志社設立にともない、ジャパン・ミッションの京都ステーションが開設される。(E8:12)

十一月一日

D・W・ラーネット夫妻 Dwight Whitney Learned サンフランシスコを出帆、日本に向かう。(J69:13)

* 明治九年から昭和三年まで同志社で教える。大正八・九年、大学長。

十一月十八日

山本八重、「女紅場権舎長并機織教導試補差免候事」(H8)

十一月十九日

夕方、榎村を私宅に訪うが「多忙」のため面会できず。(J77:491)

十一月二十二日

榎村権知事に呼ばれ、聖書を教科から外すよう要望される。新島は、当分の間、キリスト教を学校ではなく、自宅で教えることにする。(A6:170)

京都府博物館用掛を免ぜられる。(D1:68, H8)

十一月二十三日

ハーディ夫人に手紙を書き、山本八重との婚約を知らせ、彼女の写真を送る。また夏以来、ホテルや知人の家に泊まっていたが、最近、家を借りたこと、安中の両親を迎える家も用意したことを報告する。(A6:189)

D・W・ラーネット夫妻、横浜着。二十六日、神戸に着く。(J69:13)

十一月

上京第二十二区寺町通丸太町上ル松蔭町十八番戸の華族高松保実邸を借り、借家届を出す。明治九年六月までの八カ月間、家賃は一カ月十五円。(J284)

* 家賃一カ月三十五円。(D6:60)

この月、同志社仮規則（同志社社長新島襄、結社人山本覚馬）を作る。(D1:10)

十一月二十八日 J・D・デイヴィス宅で安息日の礼拝を行う。二十六人の日本人が出席する。午後行われた新島の司

式する礼拝にもほぼ同数が集まる。(E3:4)

十一月二十九日

月曜日、官許同志社英学校を開校する。この朝八時、新島丸頭町の新島宅で六名の生徒と共に祈禱したのち、場所を寺町丸太町上ル高松保実邸の仮校舎に移し、開業する。仮校舎で二名加わり、計八名。J・D・デイヴィスは書いてある。「私はその朝、彼の家でなされた新島のやさしい、涙あふれる熱心な祈りを忘れはしない」(C4:63, E12:149)

外国の団体は日本で不動産を所有できないので、新島と山本が同志社を創立し、学校を管理する。

J・D・デイヴィスは最初の「私雇」外国人となる。(E12:142)

十二月三日

京都仏教教団は京都府に宣教師雇い入れの不許可を願う出る。(D1:15)

十二月四日

生徒十二名となる。冬中に四十名に増える。(C4:62)

十二月十四日

新島は榎村権知事と長時間協議をする。榎村は神主や僧侶の動き、薩摩人のことを話し、これ以上あれこれと申請するのは賢明ではなく、今はただ事を起こさぬように、と忠告する。(E12:153)

十二月二十七日

『七一雑報』創刊。(J45:1599)

十二月二十九日

新島、D・W・ラーネッド夫妻と共に朝八時、大阪より蒸汽船に乗り、夕方四時ごろ伏見に着く。徒歩で京都に入り、帰宅する。ラーネッド夫妻はデイヴィス宅に十日間滞在する。(J69:13, 21, 25) 幡茂右衛門へ賃金等三十三円十六銭、七円八十八銭を支払う。(L1719)

同志社生徒、新島襄を中心に加茂河原で体操を行う。世間では「同志社のキリスト教徒が戦のけい古をしている。いまに天草騒動の二の舞をしでかすぞ」と噂し、府の密偵も調査する。(H11:70)

明治九年（一八七六）三十四歳

一月一日 新島はJ・D・デイヴィス、D・W・ラーネッドと三人で比叡山に登る。（J69:26, 104）

一月二日 日曜日、デイヴィス宅で京都で初めての洗礼式と聖餐式が行われ、山本八重が受洗する。（A2:560）

一月三日 新島襄と山本八重の結婚式がデイヴィス宅で挙行される。来会者は山本家の人々、同志社教員、生徒および京都府内の知人約三、四十人。京都で最初の日本人クリスチャンの結婚式であった。（A6:171, E1680, C4:65, J69:26）

一月六日 ハーディ夫妻に結婚の報告をする。（A6:170）

一月七日 同志社創立のこと、山本八重と結婚のことを田中不二麿に知らせる。（F3184）

一月十七日 新島、父の民治に五十円（金百匁）送る。（E1729, E1732）

一月三十日 田中不二麿より同志社仮規則を受け取ったこと、および結婚の祝辞を述べてくる。（F3184, D1:12）
いわゆる熊本バンド花岡山の盟約。（F1691）

一月 ミッシヨナリー・ヘラルド紙は「新島が京都でキリスト教主義の大学となるべき学校の開設のみならず、宣教師を教師として雇う許可をも獲得した」と報ずる。（E3-e）

この月、津田仙は学農社農学校を創設する。（J74:57）

二月七日 熊本ののL・L・ジェーンズ Leroy Lansing Janeのの日付で同志社のデイヴィスに手紙を送り、

熊本洋学校で行っているキリスト教による宗教教育の状況を伝えてくる。（E23, J67:34, J72:185）

二月二十二日 建家の払下げを願うため学校名称・教授学科・場所・設立日・生徒数を京都府へ山本覺馬と連名で報告する。(E285)

二月二十四日 W・テイラー雇い入れ願いを府庁に提出する。(E219)

二月二十七日 J・D・デイヴィス、この日付の手紙をジェーンズより受け取る。さらに三月四日付の書簡も到着、

熊本洋学校生徒のおかれた状況を伝えてくる。(C3:184)

二月二十九日 福士成豊に新島の履歴、写真等を送り、同志社創立のことを伝える。(F659)

J・D・デイヴィスは同志社宛に、許可外の学科を教授しない旨の証書を提出する。(E208)

二月 新島は天津から招かれ、副知事「籠手田安定権令」の許可を得て一連の日曜礼拝を始める。(H10:220)

三月四日 デイヴィスはジェーンズより手紙を受け取り、熊本洋学校の生徒が迫害を受けていることを知る。

(C4:83)

三月十五日 D・W・ラーネッドを同志社教師として雇用する。月給百円、宿料十三円五十銭、期間三年。

またW・テイラーを同志社教師(窮理諸学科)として雇用する。月給百円、宿料十円、期間三年。

(全1:232, E240)

三月十六日 W・テイラーとその家族入京する。(E20-a)

三月二十五日 二学期終了、四月四日まで春休み。(全6:172)

三月 京都府が学校内で公然と聖書を教えることを禁止したことについて、これに不満を持った宣教師の中

には、学校の移転を唱えるものもあった。(C2:163)

三月中旬

大阪でジャパン・ミッションの特別集会を開き、京都を放棄して、宣教師が自由に居住し、自由に聖書を教えらるる土地に学校を移すべきか否か、について半日議論する。投票の結果、一人の反対もなく京都に残ることに決まる。(H10:221)

三月二十七日

ミス・ヒドンに手紙を書く。(H6:172)

四月一日

津田仙よりこの日付で、平菓、梨、イチゴ、アスパラガスなどの苗を送ってくる。平菓苗二十本、梨苗二十本、ストロベリー二種各十本、アスパラガス十本、西洋種物五種。(F658)

四月九日

新島民治夫妻、姉みよら安中を出発、京都に向かう。(L1715, D23:38)

四月二十二日

民治ら東京丸に乗り、午後五時頃、横浜を出帆する。(L1712, D23:38)

四月二十四日

午前七時半、民治ら神戸に到着、午後二時半、大阪浜屋橋大川町大黒屋定助方に入る。(L1712, D23:39)

四月二十五日

民治、下川口与力町九番の宣教師デフォレスト方に山田某を訪ねる。(D23:39)

四月二十六日

新島の家族は大黒屋を出発、船便を利用して午後三時半頃伏見に到着。新島夫妻に迎えられて、新島丸頭町の家に入る。山本家の人々にも会う。(D23:40)

四月

ミス・スタークウエザー Alice Jennette Starkweather 京都に到着、J・D・デイヴィス宅に入る。(E22:45)

* 同志社女学校創立者の一人、明治十年より十六年まで女学校で教えた。

五月三日

新島民治、とみ、みよの寄留届を府知事に届け出る。(L294)

五月二十二日

滋賀県滋賀郡第十区藤尾村村有地の田一町四反七畝二十歩を七百二十三円二十二銭一厘で買い受ける。

(E286)

松井治右衛門に滋賀県の田地の代として三百十円支払う。(十七石一斗八升七合)「もし十八石の米が私のところへ来たら、更に五十円支払わなければならぬ」(E1101)

五月二十四日

三十日までジャパン・ミッションの年会が大阪居留地二六号地で開かれ、同志社の校舎建築費として三千円を支出することが満場一致で承認される。ラットランドで新島の訴えに応じて寄付された基金はミッションによって管理されていた。(全10: 221, C4: 68, E8: 58)

五月二十五日

J・D・デイヴィス、熊本のジェーンズより手紙を受け取る。(C4: 83)

五月

上京第十区相国寺門前の土地五千八百五十五坪が校地として確定する。代価五百円。(全1: 166, 232) この月、D・W・ラーネッドの家族が上京第十一区常盤井殿町六二三番地の生島雅房持ち家〔現在の京都御苑今出川口付近〕に居住するにつき、寄留届を出す。(E225, D1: 109)

六月五日

京都府に学校建築届を出す。また相国寺門前町の土地の地券引き替えの願書を出す。(全1: 302)

六月六日

ハーディに手紙を書き「私たちは役人や僧侶に憎まれています、すでにここに真理の旗をうちたてたのですから、もはや退却することはありません」と述べる。(全6: 175)

六月九日

福土成豊はこの日付で、新島の帰国と同志社創立を祝う手紙を送ってくる。あわせて新島在米中に福土を通じて家族に送った手紙は、維新の混乱に紛れ、新島家の移転先がわからずいまだ届けていないので、この便で返送すること、また福土は目下、北海道地理取り調べに従事していることを知らせる。

(F659)

六月十五日

相国寺門前の校地に同志社最初の校舎の建築を始める。(全1: 232, 302)

六月十九日 朝、大津へ〔伝道に〕行へ。(E1715)

六月二十八日 神戸公会の今村謙吉、三田公会の沢茂吉、前神醇一を同志社の議員に加える。(H1:302)

六月二十九日 曇、夜に入り小雨、新島「大津」江罷越」(E1715)

札幌農学校のW・S・クラークら、この日横浜に上陸、七月三十一日札幌に到着する。(G3:32)

七月七日 相国寺門前の校地の地券を受け取る。相国寺門前一八〇番地ほか御所八幡町一七一番地合地、岡松町

一八四番地、合計五千八百五坪七合。(H1:303)

七月八日 J・D・デイヴィス避暑のため旅行届を府庁に提出する。(D1:89)

七月十四日 「祇園祭?」祭礼につき父と共に山本覚馬を訪問する。(E1715)

七月二十日 J・D・デイヴィスの雇継願書を府庁に出す。明治九年十月一日より十四年九月三十日まで。(H1:303)

303)

七月二十二日 薄曇、校舎二棟の上棟式を行う。(H1:303, E1715)

七月二十四日 大阪に行き、二十六日午前十一時すぎ帰宅する。(E1715)

七月三十日 熊本の新ジューンズは洋学校の生徒十七名に洗礼を授け、聖餐式を行う。(E23)

* この受洗日については諸説あり、受洗した小崎弘道、海老名弾正、宮川経輝らの述べる日は食い違っている。
なお、(E30:208)は、ジューンズが七月三日、同十日、同三十日の三回に分けて洗礼を授けた、と記している。

七月 熊本から上京した金森通倫は京都御苑内のデイヴィス宅を訪れ、次いで新島宅に向かう途中で八重夫人に会い、同夫人に案内されて新島丸頭町の新島宅に行く。(J29-9:197)

八月三日 父親の民治より「敦賀方面旅行中の？」新島に新聞および手紙を送る。(E1715)

八月四日 民治へ手紙と雲丹一曲を送る。(E1715)

八月六日 摂津第四公会(兵庫教会)設立、伝道師・村上俊吉、教会員十六名。(E8:13)

八月七日 「同志社規則」を印刷し、京都府に提出する。(D1:66)

八月八日 J・D・デイヴィスの雇継免状下りる。(全1:232, 303)

八月十九日 敦賀より八時に帰る。(E1715)

* 敦賀行きの間、理由は不明。八月三、四日の記事と関連があると思われる。

九月一日 曇時々小雨、勉強のため嵯峨へ行き、しばらく滞在する。四日午後五時頃帰宅する。(E1715)

九月五日 E・T・ドーン宣教師 Edward T. Doane を雇い入れる。(全1:232)

午後四時すぎ、再び嵯峨へ行く。(E1715)

九月七日 朝、テイラー夫人が来訪、八重夫人に嵯峨まで同行を依頼、午前八時、二人で嵯峨へ向かう。八日帰

宅する。(E1715)

九月十一日 新島、嵯峨より帰宅する。(E1715)

九月十二日 相国寺門前の校舎新築なる。(全1:303)

九月十三日 督促されていた田畑および山林の地租十円を藤尾村戸長・松井治右衛門に支払う。(E298, E1719)

九月十八日 月曜日、午前十時、相国寺前の校地に新校舎(二棟の校舎と一棟の食堂・台所)が建てられ、献堂式

が挙行される。約七十名の生徒・宣教師・来賓の出席する中でドーンとラーネッドが英語で、新島と

山本が日本語で祝辞を述べる。(全1:233, 303, 全6:176, 全10:225, C# 70, E8:58, J69:15, 22)

九月二十日

九月

ハーディ夫妻に手紙を書き、学校新築のこと、山本覚馬の働きについて伝える。(全6:175, C4:70)

「ルカによる福音書」二章二十七・二十八節について説教稿を書く。(上993)

この月、京都地区の宣教師ら他地区の宣教師全員に手紙を送り、新島はすべて宣教師らの忠告と示唆に従って行動している旨を伝える。(全10:223)

この月、京都府より校内で聖書、神学の講義を禁止されていたので、道路を隔てた学校の東側、相国寺門前の豆腐屋の旧屋を四十円で買収、ここを神学、聖書の教室として使った。この建物はその家屋番号から「三十番」と呼ばれる。のち明治二十二年に三十円で売却される。(全1:ロゼ写真, D2:17) 二学期の始まる頃より熊本洋学校の生徒(約三十名)が相次いで来校する。(全1:233)

十月五日

同志社英学校において時間を知らせるため半鐘をならすこととし、時刻表を添えて京都府に届け出る。[半鐘之儀は難聞届]と却下され、板木にするよう申し付けられる。(上278)

アメリカン・ボード第六十七年会(コネチカット州ハートフォード)の席上、A・ハーディが日本の教育事情について演説する。これは再度渡米していた田中不二麿がフィラデルフィアの万国博覧会のために準備していた原稿“An Outline History of Japanese Education.”を読み上げたものである。田中は招待されてその席にいた。(D21:16, E3—8)

十月八日

「ヨハネによる福音書」十九章三十九節、三章一節、七章五十節について説教稿を書く。(上994)

十月十五日

「ヨハネによる福音書」十五章十三節について説教メモを書く。(上995)

ミス・スタークウエザーらJ・D・デイヴィス宅で女子塾を開設する。(D7:118)

十月下旬

金森を頼って入浴した徳富猪一郎を自宅に招き、種々話を聞き、ネルのシャツ二枚を与える。(J76:)

十月

「ルカによる福音書」十一章四十九節について説教稿を書く。(L996)

この月、京都府農牧学校が船井郡須知村に開設される。(G6:5)

十一月二十六日

京都第一公会 Imadegawa Church が常盤井殿町の D・W・ラーネッド宅に設立される。入会者二十名。(全3:145, 全6:178)

十二月三日

京都第二公会 Shin Karasuma Church が新烏丸頭町の新島宅に設立される。教会員二十二名。(全1:305, 全2:559, 全6:178)

十二月六日

W・テイラーの京都府民施療のことにつき尋問され、この日、文書をもって京都府に回答する。(全1:305)

十二月十日

京都第三公会 Takeyamachi Church (のち平安教会) が鴨川の東、東竹屋町の E・T・ドーン宅に開かれる。教会員二十名。この日、堀貞一、堀なみ子ら八名が新島より洗礼を授けられる。(全3:145, F7:3)

十二月十一日

中村正直に手紙を書く。「小生江戸移住之義被仰越……江戸ニ移住いたし事を華等の事ハ決而小生之任ニ非と存居候」と述べたのち、去る九月に同志社学校の校舎を建築し、生徒は約七十名入校、うち五十名が信者であること、また第一、第二、第三公会が相次いで設立され、入会者は六十二名、その他大小説教所が四十四、五カ所あると近況を伝える。(全3:145)

十二月十四日

夜、第二公会の祈禱集会が開かれ、金森通倫を長老に、須田明忠を執事に選ぶ。(全2:560, 590)

十二月十六日

京都三公会の信徒と神戸、大阪、三田、兵庫公会代表が合同で J・D・デイヴィス宅において祈禱会

を開く。新島の説教を聞き、晚餐の聖礼を守る。(E8:17)

十二月二十日 テイラーの京都府下における医術開業願を勸業場医務掛へ提出する。(十年一月十三日却下される)

(全1:305, 上219)

十二月二十一日 日本の祝日に国旗と同志社と記した旗を、また米国人教師に敬意を表するため、同国の祝日に米国旗

を掲げることを、知事に願ひ出る。(十年二月二十日、米国旗掲揚は不許可となる)(全1:305, 上278,

D1:41)

十二月二十三日 冬期休暇に入る。一月四日まで。“We closed our fall term *last Friday*.”〔十二月二十二日〕(全6

:179)

* (全1:305)では休暇の初日は十二月二十一日とある。

十二月二十四日 シーリー教授へ、遅ればせながら、アーモスト大学総長に選出されたことにつき祝辞を述べる。(全6:

177)

十二月二十五日 ミス・ヒドンに発信、近況を述べたあと、「われわれはすでに女学校 Female training school を発

足させました。あまりにも規模が小さく、京都ホームと呼ばれています……来年その校舎を建てたい
と思っています……英学校 Training school の写真を同封します」と記す。(全6:180)

十二月二十六日 バーモント州ダービーに住む J. A. Kaly 牧師に手紙を書き、写真を送ってもらったお礼と京都の教
会および学校の近況を述べ、援助を求める。(全6:181)

明治十年（一八七七）三十五歳

一月

年頭の頃、大津の刑務所にキリスト教の本数冊を送る。その中に『天道溯源』があった。一囚人がそれを読んで興味を持ち、囚人仲間のために日本語に訳す。〔十一月二日の項参照〕（全10：232, E7：134, E8：19）

一月四日

「ローマ人への手紙」十三章十一～十四節について説教稿を記す。（E1194）

一月十日

京都第二公会で初めてレプタ函を作り、信者より献金を集める。（全2：590）

同志社においてデクレメーション「演説会」を始める。（全1：305）

一月十二日

同志社近傍に自費郵便函（ポスト）を設けることは許可できない旨、駅逦寮出張所京都郵便局より通達を受ける。（E308）

一月十三日

京都府雇入外国人明細書の資料とするため、同志社雇入外国人四人の雇期・月給・宿料等につき、京都府学務課より問い合わせがくる。（E309）

一月十四日

テイラーの医療行為願出は不許可となる。（全1：305）

「ヘボン人への手紙」について説教稿を記す。（E997）

一月十五日

この日、熊本洋学校出身の一、二年生によって同心交社が結成される。（J67：119）

一月十六日

テイラーのことについて、東京数寄屋町鳥原邸内の山本元行に手紙を送る。（全1：305）

コーヒーポンドを買う。四十銭。（E934）

一月十九日

大阪新町高島座におけるキリスト教大演説会に臨み、演説をする。(全2: 646)

一月二十日

浪華公会創立式・沢山保羅牧師按手礼式が大阪心斎橋筋高麗橋通角の松村診療所を仮会堂として行われ、新島は「ペテロの第一の手紙」五章四節について説教し、授按者となる。(全2: 590, G2: 15, 18—10a)

一月二十一日

日曜日、創立されたばかりの浪華公会で、沢山を助けて説教を行う。(全2: 646)

一月二十二日

楨村正直、京都府知事となる。(J27: 119)

一月二十七日

「新島は」同志社英学校余科に在学する下村孝太郎の妹二人、ちき・すえのデイヴィス宅への寄留届を出す。(全1: 305)

一月

第二公会において大沢善助の養父・大沢清八に洗礼を授ける。(J80: 30)

安中の友人および北村某より同志社へ七円寄付される。(E32)

二月三日

速水林次「新島の第四姉ときの夫」京都へ貫属替えを望み、民治を通じて新島に相談する。(E173)

二月五日

京都・大阪・神戸間鉄道開業式が行われる。(H13: 66)

二月十六日

渡辺の父親 (from Watanabe father) より同志社へ十円寄付される。(E32)

二月十九日

W. R. Stockings より同志社へ四円五十銭寄付される。(E32)

二月二十日

米国旗を掲揚することは不許可となる。(全1: 305)

二月二十二日

デイヴィスの通行免状紛失につき、仮免状の交付を京都府に願い出る。(全1: 305)

二月二十六日

京都府勸業課より、同志社分校女紅場は設立の主意が異なるので「女学校」と改称すべきであるとの

上申書が出される。(D1: 24)

* 同志社女紅場開業願が府に提出されたのは四月二十三日である。したがって二月に勸業課より上申があったことについては検討を要する。

二月二十八日

田中不二麿より手紙が来る。(全1:306)

三月四日

新島民治・大沢善助の二人に第二公会で洗礼を授ける。(全2:561, 560, 全6:183)

* (E167)では新島民治は十年十月三日にJ・D・デイヴィスより受洗、となっている。七十一歳。

三月八日

デイヴィスとその家族の姓名・年齢書を京都府学務課に提出する。(D1:42)

三月二十七日

京都府に女学校開設について伺ったところ、差し支えなしとの返事を得る。(全1:306)

三月二十九日

田中不二麿にバイブル教授のことについて手紙を出す。(全1:306)

春、新島の俸給額について誤解を生じたが、間もなく間違いとわかる。新島の俸給は五百ドルがアメリカン・ボードの会計から支払われ、残りはハーディから支給することになっていた。新島はそれを五百ドルに切り下げられたと思い込んだのである。(全6:183, 全10:230)

* 新島は、この頃、ボードの基金から年額七百ドル支給されていたようである。明治十二年夏以降、七百五十ドルとなる。(E24-b, E25-b, c)

四月六日

アリス・パーキンス、J・M・ハイブンスより同志社へ一千九百六十三ドル(一千七百九十六円)寄付される。(E932)

四月十二日

中国山東地方の飢餓救援のため、第二公会で三円二十五銭を募り、神戸在留のアメリカ人に託して中国に送る。(全2:561, 591)

この日、東京医学校と東京開成学校が合併し、東京大学と改称される。(G8:411)

四月二十一日

J・D・デイヴィスの仮寓（柳原邸）内に女学校を開設する。（全1：233）

* "The Doshisha Girls School was opened early in February, 1877, in Mr. Davis' home, by Miss Stark-weather and Mrs. Neesima." (E12: 171)

四月二十三日

同志社分校女紅場開業願を京都府に差し出す。（四月二十八日許可）（D1：23）

*（全1：306）では四月二十二日となっている。

四月

女紅場の場所を上京第十一区日ノ御門前六六七、六六八番と届けたが、校舎の建築が遅れるので、当分、京都御苑内柳原邸の一部を仮校舎として、五月一日より開校したい旨、京都府に届け出る。（D1：24）

五月一日

A・J・スタークウエザーを女学校英語教師として雇用する。月給五十円、宿料十円。（E240）

五月八日

E・T・ドーン教師、夫人が病気のため同志社教員を辞して京都を去る。（全1：306）

五月九日

札幌農学校にいたW・S・クラークは、帰国の途次、日本各地を見物、この日、同志社英学校を訪れ、新島やラーネッドらに会う。（全6：186, E3-h）

五月十四日

W・S・クラーク、神戸より札幌の佐藤昌介に手紙を送り、次のように伝える。"This last school was founded by my first Japanese pupil, Rev. J. H. Neesima, and has 65 students most of whom intend to become preachers." (F2820, J60: 270)

五月二十日

熊本への兵災救助のため、第二公会でレプタを集め、五円三十七銭二厘五毛を送る。この日、大阪へ行く。経費三円二十五銭。（全2：561, 591, E933）

五月二十四日

W・S・クラーク、横浜を出帆、帰米する。（F2820）

五月二十六日

木戸孝允、京都で死去、四十四歳。（J52：95）

六月五日

この頃、外国人数員の動向や給与の出処等について京都府監察掛の探索を受ける。(D1:45)

六月九日

安中伝道を希望する同志社生徒平野文のため、湯浅治郎に紹介状を書く。(全3:147)

六月十五日

夏期休暇に入る。(全3:148)

六月十八日

この日より二十二日まで同志社でジャパン・ミッション第五年会が開かれ、新島も他の日本人と共に招待される。なおこの会議で女学校 [Kioto Home] 建設に関する決議が採択される。(全2:591, D40:147)

六月十九日

湯浅治郎に手紙を書き、かねて依頼されていた安中伝道者として海老名弾正を派遣する旨、次のように伝える。「此生徒ハ学校中一二を争ふ程之者ニ有之、別而歴史ニ委しく目頗る耶蘇聖經ニ貫通仕居、小生之罷出候よりも却而御裨益可有之と存し候」(全3:148)

六月二十日

この日と二十一日の両日、京阪神諸公会の代表が同志社に集まり、信徒の親睦会を開く。(J40:183)

六月二十一日

木曜日、前日に続き教会間の交流、布教活動、教会員の加入および伝道会社 (a general missionary society) の組織について協議する。新島が議長を務める。松山高吉・今村謙吉・沢茂吉を昼食に招く。午後二時よりデイヴィス宅で D・C・グリーン of 娘メリー A・グリーン of 洗礼式 (沢山が授洗)、次いで聖餐式を行い、新島と沢山保羅が司式する。(全2:591, F4:81, J40:183)

六月二十二日

安中の根岸松齢に、子息国弥太の同志社入学につき、挨拶の手紙を出す。(全3:149)

六月二十八日

ストーブおよびロッキング・チェアを買い、その代金六円八十九銭、二円三十銭を支払う。(L933)

六月二十九日

御所八幡町の町費四円二十八銭三厘を支払う。(L1719)

六月

『理事功程』の合本洋装本、菊判、本文九七一ページが刊行される。(J50:141)

七月六日

八重夫人同伴で京部を発ち、大阪、和歌山を経て和歌浦へ休暇に赴く。(46:184)

七月九日

和歌浦へ到着、同月二十三日まで漁師の持ち家を借りて海水浴、魚釣りをして休養する。(46:184)

七月十四日

J・W・デイヴィスより同志社に一元八十六銭を寄付される。(493)

七月十八日

アーモスト大学のシーリー総長に手紙を書き、和歌浦に来ていることやその土地の状況について知らせる。(46:184)

* 京都府監察掛の同志社近況上申書に、八月上旬のこととして、次のように記している。本月初旬より新島夫妻は堺県下紀州に赴き「宗門ヲ弘メントセシニ該地人民ハ信仰セス……巡査ノ探索嚴重ニ相成終ニ追払ハレン計リノ景況ナルヲ以テ不得止帰京」する。(D1:47)

七月二十三日

八重夫人と共に和歌山より帰京。(46:184)

七月

人力車で比叡山に行く。この夏、デイヴィス、ラーネッド両宣教師は家族と共に比叡山で避暑のキャンプを始めぬ。(493, D1:90)

八月二日

同志社分校女紅場を女学校と改称する願い出につき、京都府学務課は外務省へ伺い書を提出する。

(D1:25)

八月九日

この頃、人力車で再び比叡山に行く。(494)

八月十九日

「ハブル人への手紙」二章七～十節に就いて説教稿を記す。(498)

八月二十日

この頃、葛野郡(現在の京都市右京区)梅ヶ畑桐尾寺を借り、八重夫人と共に避暑する。(D1:47)

八月二十七日?

桐尾に行つて泊まる。(493)

九月二日

W・S・クラークはアーモスト大学において日本での見聞について講演する。その中で同志社を創立

九月七日

する際の新島の苦勞に言及し、同志社での圖書購入資金として百ドルを贈りたいと訴える。ジェフリー・L・カーティス師が拠金に応じる。(J51:209)

三田公会の新築会堂開業式が行われ、聖餐式の会主を務め、「マルコによる福音書」十二章について説教する。(L934, 18—10b)

九月九日

京都第三公会、鴨東より新町通三条上ルに移転する。(F1:41, F7:9)

九月十一日

外務省は、同志社女紅場の名称変更については無関係である旨、京都府に通知する。(D1:25)

九月十六日

和田正幾、伊勢時雄、山崎為徳の三名、東京メソジスト会のカクラン牧師の薦書を持って第二公会に入会する。(L2:594)

九月二十一日

同志社分校女紅場を同志社女学校と改めることを許可される。(L1:306)

九月二十二日

説教稿「聖餐式の意義」をまとめる。(L1000)

九月

第三寮落成する。(L1:233)

十月三日

日本基督公会と日本長老公会が合同して日本基督一致教会を組織する。(F28:72)

十月四日

同志社校地のある相国寺門前町区入費七、八、九月の三カ月分、四円六十一銭八厘五毛を田中恵村へ納入する。(L1719)

十月六日

新島宅の第二公会において辻橋源助、川辻常の結婚式を行う。(L2:595)

十月十七日

京都の三公会から二名ずつの代表が集まって、伝道会社の規則を作り、大阪・神戸・三田の諸教会に送る。(L2:561)

十月二十日

神戸の多聞教会設立される。(F1:48)

十月二十三日

J・M・シアーズより第二公会堂建設のため一千ドルを寄付される。シアーズは新島の私宅で礼拝が行われていることを知り、新島の「家ノ為ニハ定テ不都合ナルベシト察」して寄付したものである。

(全1:310, F932)

十月二十六日

伝道会社概則案を添え、十一月十七日に相談会を開く旨、大阪教会はじめ各教会に案内状を出す。

(F13:4)

十一月二日

この日付で発行の『七一雑報』(二巻四四号)に、今より六カ月前の話として次の記事が掲載される。「西京に居るゝ新島氏大津辺にて真の近道〔真乃道を知るの近路〕といへる小冊子を人々にあたへられしに其が原となり大津監獄所の一人大いに道を感じ右の小冊子により同獄に居る朋友にも道を説き、真の神のことを話たり、却説或日同所の監獄所より出火し」たが逃亡者は出なかった。

十一月十三日

山崎為徳、米国の兄弟姉妹に手紙を送り、同志社の目的、理想は基督教的高等普通学校もしくは大学にあると述べる。(F1:39)

十一月十七日

伝道会社設立の相談会が第二公会で開かれる。京阪神の各教会より各二名の代表が出席する。(F13:4)

十一月二十日

御所の北側、常盤井殿町二条家の地所四千九百六十九坪九合を堀本利慶を通じて購入する。(全1:233)

“The Kioto brethren have at length secured a fine lot containing 4 acres at a cost of \$630 and I hear have contracted for building to cost \$400.” (E25—a)

十一月二十四日

兵庫教会で行われた村上俊吉の按手礼ならびに牧師就任式に出席し、聖書を朗読し、祝辞を述べる。

(F1:49, J43:83, J81:3)

十一月二十八日 シアーズより新島の私宅建築費として二百ポンド、教会堂建築費として二百ポンドを送られる。(全1:310, 全6:189)

十二月二日 「ヨハネによる福音書」十五章十五・十六節について説教稿を記す。(全1001)

十二月十二日 シアーズに礼状を出す。(全1:310)

十二月十三日 堀本利慶へ同志社所有金より貸与した件について問い合わせがあり、事実と相違ない旨、山本覚馬と連名で地券掛へ回答する。(全1:309)

十二月十四日 H・F・パーメリー、J・ウィルソン Harriet F. Parmelee and Julia Wilson の雇入願を京都府に提出する。(D1:46)

十二月二十三日 ハーディに手紙を送り、山本覚馬は同志社との関係が生じたため、近頃京都府との関係を失ったようだ、と伝える。(全6:187, 全10:235)

十二月二十七日 山本覚馬に対し、京都府より「御用無之当府出仕差免候事」と通告される。(J89)

十二月二十九日 「ヘブル人への手紙」十三章八・十六節について説教稿を記す。(全1002)

十二月 同志社校地のある御所八幡町諸経費明治十年下半期分六円六十一銭七厘五毛を納入する。(全1719)

授業時間表を作成する。(全742)

この年、A・ハーディはアーモスト大学理事を辞任する。在職二十二年。(D21:13)

明治十一年（一八七八）三十六歳

一月一日 中川、内藤、山口、庵原、山本覚馬の各宅へ新年の挨拶に行く。また、父の民治に歳暮として鮭一本を贈る。(E1716)

一月二日 大阪土佐堀の梅花女学校に神戸、大阪、三田、兵庫、京都第一、第二、第三、浪華、多聞の九教会の代表十八名が集まり、新島が議長となって日本基督教伝道会社の創立を決める。さらに同会社の規則、委員等を決め、委員に新島、沢山保羅、今村謙吉の三名が選ばれる。(E7: 137, F1: 50, F2: 4, I8-11a) この日、新島は親睦会に出席する八重、山本佐久、山本峰、伊勢宮を伴って朝六時に出発、三日夜九時に帰宅する。(E1716)

一月七日 初めて同志社の寮長を選ぶ。(全1: 162, 233)

この日、梅花女学校が開校する。(G1: 5)

一月八日 同志社女学校校舎の建築を始める。(D40: 147)

一月九日 J・ウィルソン、H・F・パーメリー両教師の雇入願および寄留免状の下渡願を再び京都府に提出する。(全1: 310, 全3: 152)

一月十日 女学校用地として予定している上京第十一区今出川通寺町西入三丁目常盤井殿町北側の土地四千九百六十九坪九合の地券が堀本利慶に下付され、堀本より新島に渡される。(全1: 310)

一月十一日 昨年「明治十年」の夏、デイヴィス、ラーネッドとその家族が無届、無許可にて比叡山にテントを張

ってキャンプをしたことに對する罰金一円五十錢と始末書を京都府に提出する。(D1: 90)
この頃、大津へ行く。(E934)

一月十四日 安中の根岸より二十五円送りつゝる。(E1716)

一月二十日 日曜日、午後、大津へ出向き、午後八時前に帰宅する。(E1716)

一月二十三日 この日、安中の地図を買う? (E934)

一月二十四日 堀本利慶の名義で購入した常盤井殿町北側の土地に女学校校舎の建築を始める旨、戸長に届け出る。

(全1: 310)

一月二十八日 同志社英学校を開校した旧高松保実邸の地所七百八十五坪の買収を決める。(E1716)

* 正しくは上京第二十二区松蔭町十八番地、買収には浜岡光哲を煩わせたものと考えられる。

安中に赴く海老名弾正に、新島公義宛の一書を託す。「公義に渡されたのは二月五日か」(全3: 151, E1716)

二月二日 午前八時頃より同志社生徒ら六十人と共に吉田山に登り、讚美歌をうたい、祈禱し、熊本花岡山でのことを語り、新島による聖晚餐の礼式ののち、正午ごろ下山する。(E1716, 18-11c)

二月三日 「ヨハネによる福音書」十一章三十五節について説教稿を記す。(E1003)

二月十日 「ヨハネによる福音書」三章三節について説教稿を記す。(E1004)

二月十一日 W・S・クラークはこの日付で新島宛に発信。新島がコウヤマキの種を送ったことへの礼状である。

(F2363)

二月十二日 府庁へ行き、J・ウイルソン、H・F・パーメリーの雇入免状および寄留免状の交付につき督促をす

る。役人は「本省ヨリ未交付セラレサル」ためだと答える。(全3: 153)
曇、吹雪。陰暦一月十四日、新島の誕生日につきばた餅を作り、山本佐久、山本峰、窪田姉、横井宮

らが集まって祝う。(E1716)

二月十七日 「コリント人への第二の手紙」「コロサイ人への手紙」について説教稿を記す。(E1005)

二月十九日 女学校校舎の棟上げが行われる。(D40: 147)

二月二十日 デイヴィス、上京第十七区上長者町烏丸西入元浄華院町五九二番地の新居に移る。(全1: 311, E1716)

二月二十四日 日曜日、午後より大津へ行く。(E1716)

二月二十八日 外務卿寺島宗則に書簡を送り、J・ウイルソン、H・F・パーメリーの雇入免状および寄留免状を早

急に交付してほしい旨要請する。(全1: 311, 全3: 152, E934)

二月 この頃、新島とデイヴィスは毎月、大津今堀町の晩年速成義塾(塾主・高田義甫)^{よしなみ}へ説教に行く。

(I8-11b, J4: 130, J9: 400)

三月三日 「マタイによる福音書」二十一章十七節について説教稿を記す。(E1006)

三月八日 金曜日、午後七時、京都の三公会で百余名が集会を開く。(E1716)

三月十日 「マタイによる福音書」九章十二節、十一章五節について説教稿を記す。(E1007)

三月十一日 京都府学務課より同志社生徒の族籍、年齢等の調査依頼を受ける。(E310)

三月十二日 民治より五十金を預かる。(E1716)

三月十七日 日曜日、晴、一時雪。午後大津へ伝道に行く。午後八時すぎ帰宅する。(E1716)

三月十八日 H・F・パーメリー、J・ウイルソンの京都府下居住を不許可とする外務省の決定(二月十一日付)に

対し、その理由を問う伺書を提出する。「条約面詮議之次第有之不差許儀ニ候」と三月三十日付で返事があつた。(D1:51)

三月十九日

婦人宣教師雇い入れ交渉のため上京する。十二時に出発して神戸に向かう。教会設立のため安中にも赴く予定。(全1:311, E334, E1716)

三月二十日

兵庫丸で神戸を出帆、海が荒れて船酔いし、食事もできず、床に伏す。夜、遠州沖の過半をすぎる。(全5:80)

三月二十一日

午前中天候が悪かったが、午後よくなり、富士山を見る。午後七時半ごろ横浜着。旅館に一泊。安着の旨、京都へ電報を打つ。(全5:80, E1716)

三月二十二日

朝、D・C・グリーンを訪う。午前十時発の汽車で横浜を発ち、文部省に田中不二磨を訪ねるが不在。午後、田中の私邸を訪れるが、「多忙」を理由に会えず。(全5:80)

* 二十二日「京都ニ至ル」(全1:311)は「東京」の誤りであろう。

三月二十三日

朝、津田仙を訪い、津田と共に富田鉄之助を私邸を訪ね、久しぶりに歓談する。また婦人宣教師の雇い入れにつき尽力を依頼する。(全5:81)

へボン辞書(五円三十二銭五厘)ほか二冊の書物を買う。(E334)

三月二十四日

午前、銀座三丁目の原女学校に行き、午後は麻布メソジスト公会に行く。(全5:81)

三月二十六日

富田鉄之助を訪問する。(D31)

* (全5:81)では二十四日の項に入り、「破損」となっている。新島の日記については徳富蘇峰の秘書・草野茂松の筆写による参考資料(D31)が存在し、それには「二十六日」となっている。

三月二十七日

三月二十八日

三月二十九日

三月三十日

三月三十一日

津田仙と共に寺島外務卿を私邸に訪ねたが、病気のため会えず。病気は二、三日治らないものと見通しをつけ、安中に赴くこととし、人力車、馬車を乗り継いで安中に向かう。東京十六区八小区弓町十二「本郷弓町か」の谷藤兵衛方に一泊する。民治に手紙を書く。(全5:81, E934, E1716)
高崎まで馬車、それより人力車に乗り継いで、午後七時に安中に着く。この夜、ただちに便覧社で集会を開く。(全5:81, E934)

午後、林家で伝道の話をする。聴衆七、八十人。夜、受洗試問会を開く。(全5:81, D30)

前日と同様な行事を行う。(全5:81)

午前、祈禱集会、午後、林家にて新島と海老名が説教。夜七時半より公会設立の式を行う。三十名(男十六名、女十四名)に洗礼を授ける。(全5:81)

*「安中基督教会録事」には「三月三十日夜便覧社……ニ於テ建会ノ式ヲ行フ、依テ之ヲ安中基督教会ト称ス」云々。(F5:880)

四月一日

後閑村に行き、副戸長や親類中の者に面会する。午後五時、菅沼家および新島公義の実家植栗家を訪問し、公義の身分について相談、さらに学区取締に面会して公義のことにつき周旋を依頼する。民治に手紙を書く。(全5:83, E1716)

四月二日

上原春朔の家を訪ね、それより更に一里ほど山に入って化石の標本を採取する。

午後、安中を発ち、高崎へ向かう。途中、志村家を訪う。高崎では中山堂の主人を訪ねたが不在、越後屋に泊まる。山本泰治郎他一名が宿へ来訪する。(全5:84, E934)

四月三日

高崎を朝四時出発、午後三時東京に着く。Japanese Dictionary を買ふ。四十一銭。(全5:84, E934)

四月五日
四月九日

靴 (11E) Taylor's History (11E11十五錢) を買ふ。(E934)
Microscope (顕微鏡) を購入、齒の治療に行く。この日、東京を発ち、横浜で一泊。船で神戸に向か
り「な」。(E934)

四月十日

W・テイラーの雇い入れ期間、月給、宿料、雇い主を京都府学務課に報告する。(E219)

四月十一日

夕方、神戸に着へ。(E1716)

四月十二日

午後一時、自宅に帰る。(E1716)

四月十四日

日曜日、第二公会において松尾敬吾、今村慎始、大久保真次郎、木全祝、小崎継憲、小泉芳輔の六名
が受洗し、第二公会に入会する。(E2:562)

* (E2:562) では十七日となつてゐる。

四月十五日

人力車で嵐山へ行く。(E934)

四月二十三日

上京寺町丸太町上ル松蔭町の「買入地所今日より入手したし候事」(E1716)

四月二十五日

速水とき・林次夫妻、京都に寄留する。(E1677, E1678, E1725)

四月二十七日

同志社経営に関する弁明書を寺島宗則外務卿に提出する。その中で次のように記す。

五月一日

「同志社は縦令悉皆米人之寄付金ニ成立タルニモセヨ……米人之左右スル所ニアラス……同志社ハ決
テ米国人ノ同志社ニ非シテ即チ日本帝国内ノ同志社ナル事固ヨリ弁明ヲ待スシテ明ナリ」(E1:9)
時々雨、上京第二十二区松蔭町十八番地の「名義上は」浜岡光恒の所有地を借りて家屋二棟の建築に
着手。この日、隠居所の棟上げをする。建築届を戸長に差し出す。(E288, E1716)
安中の湯浅「治郎」より同志社へ十円寄付される。(E932)

五月四日

W・テイラーが禁止されている投薬行為をしたことにつき、新島は京都府より呼び出されて尋問される。(全1:311, E219)

五月七日

マサチューセッツ州スプリングフィールドに留学中の岡部長^{ながもと}職より、この日付で、堺の旧家臣たちに伝道を依頼する手紙が新島に送られる。(F2369)

五月八日

W・テイラーに投薬行為について糾した結果、テイラーは同行為を正当な権利であると見なしており、説得できない旨、京都府知事に答弁する。(全1:311, E219)

五月九日

W・S・クラークより同志社へ五十円寄付される。(E932)

五月十日

江州神崎郡市ノ部村の広瀬又次に手紙を書き、同人の受洗を喜び、また同志社生徒赤峰瀬一郎に託された寄付(五円)について礼を述べると共に、この金は伝道のために使いたいと記す。(全3:154)

五月十二日

日曜日、午後、小雨の中、八重夫人を伴って大津へ伝道に行く。午後六時すぎ帰宅する。(E1716)

五月十七日

W・テイラーが雇い主の申し入れを聞かないならば、雇用契約を解約しては如何と、京都府より勧告される。(全1:311, E219)

新島家の棟上げを行う。夜に入り小雨。(E1716)

五月十八日

この夜、大風雨。棟上げをした家屋は残らず吹き倒される。(E1716)

五月二十一日

W・テイラーを解約する。(全1:162, 233, 311)

五月二十二日

W・テイラーの辞職に関し、同志社との雇用契約に違反していないが、投薬行為により同志社に迷惑をかけたとして、テイラー自ら辞職を申し出た旨、京都府に答える。(全1:311, E219)

W・テイラー、自宅で八十五円十一銭二厘を紛失し、府知事に届け出る。(全1:311, E219)

六月四日

この朝、改めて私宅の棟上げを行う。(L1716)

六月六日

W・テイラー、京都を去る。(全1:311)

六月七日

テイラーの解約を府庁に届け出、寄留免状を学務課に返却する。(L1716, D1:52)

六月十一日

外国人教師避暑のため、キャンプ地として、比叡山の官地の一部借用を京都府に願ひ出る。借料一坪

一カ月一銭、布教しないことを条件に許可される。(D1:94)

六月十八日

この日より二十五日まで有馬でアメリカン・ボード・ジャパン・ミッションの第六年会が開かれる。

この会で相次ぐ宣教師への妨害に関連して、京都ステーションの存続の問題が協議される。(全1:311, E12:176, 18-11d)

* ジャパン・ミッションの記録によれば、会期は十八～二十六日となっている。

六月十九日

有馬の集会に出席のため、京都を出発、二十六日帰宅する。(L1716)

六月二十五日

年会において日本基督教伝道会社の代表として、同社創立以来の会計報告を行う。この日、同志社生

徒・家永徳吉(十二歳)が病院で死亡、有馬より電報で指示を与える。(全1:311, C3:207)

六月二十六日

午前九時、有馬より帰宅、午後一時より死亡した家永徳吉の葬式を行い、新島夫妻、生徒三十名、信

者五十名で遺骸を見送る。(L1716)

六月二十九日

東京の学農社に就職する中島力三、上野栄三郎に託して津田仙に手紙を送り、ブドウ苗購入のこと、

七月十五日より始まる全国基督教信徒大親睦会には出席しないことなどを伝える。中島・上野の二人は

七月一日、東京に向け出発する。(L1716, F662)

六月

ハリストス正教の司祭ハワエル沢辺、上州巡回の途次、高崎に立ち寄り、男女十二名に洗礼を授ける。

六月

これにより高崎正教会が設立される。(H4: 891)
 「同志社概則」を公表し、生徒募集公告を出す。また「同志社女学校生徒募集公告」を印刷配布する。
 (全1: 11, D1: 117)

七月一日

「マタイによる福音書」について説教稿を記す。(E1008)

七月三日

D・W・ラーネッド、上京常盤井殿町六一三生島方より同町六二二の同志社女学校敷地内への一時転居を府庁へ届け出る。「町名は同じ、今出川通の南側から北側への移転である」(D1: 53)

七月四日

J・D・デイヴィスらの比叡山キャンプを京都府に届け出る。(D1: 53)

七月八日

J・W・デイヴィス、アリス・パークスは同志社へ十四円三十六銭を寄付する。(E382)

七月九日

比叡山キャンプ地狭小のため、官有地五坪の追加借用を願い出る。(D1: 54)

七月十日

「使徒行伝」六章七節についての説教稿を記す。(E1009)

七月十五日

第一回全国基督信徒大親睦会が十七日まで東京築地新栄教会で開かれる。(F1: 51)

七月十九日

曇、小雨。在米の岡部長職の依頼にこたえ、伝道のため岸和田に向かう。(全6: 190, E1716)

七月二十日

岸和田に到着、岡部の旧臣Y〔山岡尹方〕とM〔宮崎八郎平〕に会い、岡部よりの手紙を見せて伝道につき協議する。(全6: 190, F664)

七月二十一日

午後三時より浜町物産(Showsha)において講話を始める。受講者は旧藩士二十名。(全6: 190, I8-11e)

七月二十二日

前日と同じく午後三時よりキリスト教について集会を開く。聴衆約四十人。(I8-11e)

七月二十五日

岸和田の有志に対し、婦人にも説教したい旨を申し出る。(全6: 191)

七月二十六・七日 この両日、夕刻より婦人の集会を催す。聴衆は両回とも百人を超える。(全6:191, 18-11e)

七月二十八日 新島公義、安中を出発して京都に向かう。(E1677)

七月二十九日 午後一時、岸和田より帰宅する。(E1716)

八月二日 新島公義が湯浅吉郎と同道して京都に着く。(E1716)

八月五日 新島夫妻、朝七時すぎ、人力車で比叡山へ出発、一泊して翌六日朝帰宅する。夫人は十二日まで滞在。

(E1716)

八月六日

W・S・クラークよりこの日付で来信、コウヤマキの種が発芽したことを伝えてくる。この木はマサチューセッツ州立大学のロードデンドロン・ガーデンに、現在も二本生育しているという。(F2380,

D25:13)

八月十二日

公義の止宿届を出す。梶尾へ行く。(E1716)

津田仙よりこの日付で来信、長男の元親を、有馬温泉へ湯治に行く高津柏樹に同行させるので、同志社で教育してほしいと、依頼してくる。(F663)

八月十四日

京都より六マイルはなれた郊外「梶尾か」の寺を借り読書と休養の生活を始める。(全6:190, 全10:236)

八月十六日

岡部長職に手紙を書き、依頼に応じて岸和田に伝道したことを知らせる。またハーディにも手紙を書く。(全6:190)

八月十七日

夕方から梶尾へ行く。十八日も同様。(E1716)

八月二十二日

朝から梶尾へ出かけ、二十四日の午後八時すぎ帰宅する。(E1716)

八月二十六日

午前七時より神戸へ出かける。午後六時すぎ帰宅する。(E1716)

八月三十日

夕方、岸和田キャンプより帰京した徳富猪一郎らに七条駅で会う。(J14:38, J67:92)

八月三十一日

岸和田キャンプより帰った大久保真次郎、家永豊吉、徳富猪一郎、木全祝らのグループ、帰校の挨拶のため訪れる。(J14:38, J67:92)

夏、夏期伝道のため学生たちと彦根へ行き、劇場で基督教大演説会を開く。聴衆六、七百人。その中の求道者グループである明十社の会員と八景亭で親睦会を開く。(F9:9)

九月一日

第二公会で説教をする。寺町丸太町上ル松蔭町の新島家は完成、家財道具を運び込む。(E1716, J14:38)

(J14:38)

九月六日

引っ越し準備のため、徳富ら助勢に来る。(J14:38, J67:93)

九月七日

新島家竣工し、新島丸頭町の寓居より移転する。第二公会もまた新居に移る。(全2:563, E1680)

九月八日

日曜日、新宅で初めて礼拝を守り、説教をする。(全2:598)

九月九日

転宅届を公義が京都府へ持参したところ、平民は届けに及ばぬと言われる。(E289, E1716)

九月十五日

日曜日、朝「万国ノ伝道ニ行キ可キ説教ヲ」する。徳富猪一郎もこれを聞く。(J14:38)

九月十六日

同志社女学校、常盤井殿町(二条家跡)に新築した校舎で新学期が始める。なお、この校舎の建築に際しては米国ニューイングランドの婦人たちより三千ドルの寄付を得た。(D1:312, D7:120)

九月二十五日

植木枝盛が山本覚馬を訪問する。(J84:106)

九月二十六日

午後、植木枝盛、同志社を訪問、新島に面会する。植木は大阪で開かれた愛国社再興大会の帰路に立ち寄った。(J42:255, J84:106)

九月二十八日

岡部長職はこの日付の新島宛書簡を発信、岸和田伝道について礼を述べると共に、ハーディに会ったこと、理学を学びたいのでイエール大学付属の理学校に進むつもりである等を伝えてくる。(L664)

九月三十日

デイヴィスら避暑キャンプ地の借地料を京都府に支払う。(D1:35)

九月

第四寮落成する。(全1:162, 233)

十月六日

日曜日、京都三公会の信徒が第一公会に集まって聖晚餐を守る。以後、二カ月毎にこれを守ることが

恒例となる。徳富猪一郎も出席する。(全2:564, J14:39)

十月十三日

第一公会で説教をする。テキストは「ヨハネによる福音書」十九章十五節。(L1010)

十月十八日

夜、雨の中を徳富猪一郎が来訪、午後九時ごろ辞去する。(J14:40)

十月二十七日

日曜日、徳富猪一郎らと「ローマ書」を読む。(J14:40)

十月二十八日

神戸の集会に出席のため、午前六時すぎ人力車で出発する。(L1716)

十月三十日

W・テイラーの後任としてM・L・ゴードンの雇入願および寄留免状下渡願を京都府に提出する。

(全3:157)

十月

同志社規則を定める。(D1:11)

新島家の外観を写真に撮る。(L2007-62)

十一月二日

ゴードン雇入願、京都府より「事故アリ願書差戻サレタリ」(全1:162)

外務大輔森有礼に手紙を書き、ゴードン教師の雇入免状および寄留免状の下げ渡しを早急に許可してほしいと要請する。(全3:156, J49:2-196)

十一月八日

自宅で祈禱会を開き、比較のことについて話す。徳富猪一郎も出席する。(J14:40)

十一月九日

午前六時ごろ夫人同伴で大阪に向かう。(L1716)

十一月十四日

パーメリーより預かっていたトランク一個が盗難にあい、京都府に届け出る。十二月に入り、犯人逮捕によって一部が返る。(L311)

十一月十九日

第二公会の夜の祈禱会において信徒各人が一カ月五錢以上を集め、その総額の三分の一を伝道会社に寄施し、残り三分の二を第二公会の資蓄とすることを決める。(H2:564)

* (J14:41) では十一月十五日となっている。

十一月二十一日

雨。新島夫妻、神戸北長狭通六丁目に新築された神戸教会堂の献堂式に出席のため、朝六時すぎ出発する。新島はJ・L・アッキンソンと共に午後の聖餐式の司式を行い、夜の親睦会では京都第二公会

の現況を述べる。(L1716, 18-11f, g)

十一月二十二日

日本基督教伝道会社第一年会が神戸教会で開かれ、午前中は会議、午後は宣教師・委員らの演説が行われた。新島の祈禱、ギューリックの祝禱で終わる。年会では、(一)社名の決定 (二)各教会より二名の委員を出し議事を決すること (三)年会を毎年十月に開くこと、を決める。また委員として新島、沢山、今村の三名を選³⁴。(F1:50, 18-11g, J63:179)

十一月二十三日

午後六時すぎ神戸より帰宅する。(L1716)

十一月二十四日

新島宅「第二公会か」で金森通倫が話をする。(J14:41)

十一月三十一日

ゴードンの雇入願および寄留免状下渡願を外務省に提出する。(L1:311)

十二月一日

第二公会において男子二名に洗礼を授ける。(18-11h)

W・S・クラークは札幌での教え子である内田靜宛の手紙の中で「西京の新島牧師に手紙を書いて日

十二月二日 本語の宗教冊子を君に送るよう頼んでくだやう」と記す。(J 60: 88)
 新島八重、大阪のミス・グールドイ Mary E. Gouldy と共に岸和田に行き、昼夜二回にわたり説教をする。聴衆七百名。(18—11 i, J 28: 127)

十二月六日 第二公会において親睦会が催され、司会と演説をする。八重夫人は岸和田伝道について話をする。

(18—11 i)

十二月八日 「マルコによる福音書」十二章十五節について説教稿を記す。(E 1011)

十二月十五日 「ヨハネによる福音書」五章二十九節について説教稿を記す。(E 1195)

十二月二十二日 大津へ伝道に赴く。(E 1716)

十二月二十三日 安中の千木良昌庵に手紙を書き、かねて勧められていた肝油を一日一オンスずつ服用しているが「其

功速ニ頭レ数週ヲ不出内大ニ健康ニ相成、即今ハ克ク眠ル事ハ出来、且食事モ以前ヨリ大ニ進ミ、且頭痛ノ患モナク……風邪ニモ罹ラス」と記す。更に安中教会牧師のこと、安中出身の江場かね、浅田たけ、根岸固弥太の近況をも述べる。(全3: 158)

十二月二十九日 「マタイによる福音書」十三章四十五節による説教稿を記す。(E 1012)

十二月三十日 W・S・クラークよりこの日付で来信、ホワイト・パイン、砂糖カエデ、アメリカ・エルム、ブル

ー・ガム、ブリンヂ樹、トチの種を贈ることを伝えてくる。(T 2385)

明治十二年（一八七九）三十七歳

一月七日

M・L・ゴードンの京都居住願、却下される。（D1:54）

一月十二日

大阪の天満教会設立（沢山保羅兼牧）される。新島は午前中、議長として設立準備にあたり、午後の設立式には「基督弟子の足を洗い賜ふこと」と題して説教をする。（F4:102, F18:5）

一月二十八日

D・W・ラーネットの雇継続を京都府に提出する。（全1:312）

一月下旬

新聞記者を希望する徳富猪一郎のため七一雑報社に紹介状を書く。徳富は数日神戸に滞在したのみで、二月一日に帰校する。（J14:64, J67:94）

二月初旬

D・W・ラーネットの居留地外僑居免状の更新につき府庁より異論が出たので、森有礼外務大輔に面会のため、急遽東上する。五日、横浜着か。（全6:196, 全10:243, E938）

* この頃、知事が政府に対し、新島は教育を口実にして学校を始めたが、彼の真の意図はキリスト教の布教にあると報告した、という噂が流れた。政府が同志社の外国人教師への免状の交付を決めたのはこのためではないか、と思われる。（全10:243, E25—d）

二月六日

横浜より東京に出る。（E938）

二月七日

金曜日、午前三時、雪降り積もり、全身凍るごとき寒気の中を安中に向かう。夕方到着。疲労しているが、強いて多くの来客に接する。（C3:206, F5:881）

二月八日

早朝より続々来客、夕刻まで暇なし。夜、一時間ほど、祈禱会を開く。（C3:206, F5:881）

二月九日

日曜日、午前集会を開き、午後説教、かつ晩餐礼を司る。この日、田中貞吉が受洗する。夜に入って祈禱会を開く。甚だ熱心、活気に充ちた集会で二時間を費やす。その後十二時すぎまで便覧舎において千木良昌庵ら数名の信者と共に歓談する。(全3: 161, C3: 206, 18—12a)

二月十日

深夜十二時半、馬車で安中を出発、午後一時半、東京に到着する。(C3: 207, 18—12a) 横浜のD・C・グリーンよりこの日付で来信、Tenda との争いにつき、その経緯、解決への努力にこゝち述べる。(F2387)

夜、京都へ帰るにつき須田某〔津田か〕へ挨拶に立ち寄ったところ、そこで安中の千木良昌庵の突然の訃を聞く。安中教会の和田正幾に一書を送り、千木良の死を悼み、教会員の信仰を励ます。(全3: 160)

二月十一日

中川横太郎よりこの日付で来信、先日訪問しての馳走になったことへの礼状。(F665)

二月十二日

曇、雪少、津田仙と共に勝海舟を訪う。(J31—20: 233)

二月十三日

晴、再び勝海舟を訪問する。(J31—20: 233)

人力車で森有礼を訪う。(L338)

森から学校経営をアメリカン・ボードの資金に依存せず、自己資金で行うなら、外国人教師の雇い入れは自由だ、と言われる。これに対し新島は「外国から如何なる援助も受け取ることを禁止されているのか」と反論する。(全6: 196, 全10: 243, E7: 141)

二月二十一日

この日〔あるいは翌十四日か〕横浜を出帆、帰京する。(L338)

D・W・ラーネットの僑居往來免状が府庁より下付される。(全1: 312)

* (全1: 233) では二月二十二日となっている。

二月二十二日

W・S・クラークよりこの日付で来信、京都農牧学校のジェームス・オースタイン・ウィートの後任としてハサチューセッツ農科大学の Prof. Samuel Taylor Magnard を推薦、新島に斡旋を依頼してくる。(F3388)

三月六日

安中の千木良昌達に弔文を送る。(全3: 161)

三月十五日

同人社の中村正直へ「品行論」を贈られたことへの礼状を出し、あわせて東京女子師範学校の校則を送ってくれるよう、依頼する。(全3: 163)

三月十六日

「マタイによる福音書」五章十三節、「マルコによる福音書」九章五十節について説教稿を書く。

(E1013)

四月十三日

第二公会の上野栄三郎の転会証明(薦書)を書き、上野に渡す。(全6: 192)

「ルカによる福音書」二十四章五節について説教稿を書く。(E1014)

四月十九日

札幌農学校生徒内田澯より同校信徒の状況を伝えてきたのに対し、数週間ぶりに、この日返書を認め「何卒人生のデステイネーションヲ不失コトホド大切ナレハ、一日モ不怠真神ニ使フル事ト人間ニ尽ス所ハ良心ニ反カサル様致度モノナリ」と励ます。(全3: 165)

四月二十四日

田中不二麿に徴兵免除のことにつき問い合わせの書簡を出す。(F3186)

四月二十七日

「マルコによる福音書」四章三十九節について説教稿を書く。(E1015)

四月

新島八重、第二公会の執事となる。また長老山崎為徳にも執事を兼任させる。(全2: 564)

五月一日

滋賀県日野に行き、泊まる。(E338)

五月二日

大津より汽船で彦根に渡る。(L938)

田中不二麿より徴兵免除のことにつき、この日付で返書が来る。文部省直轄学校の生徒との比較方法については、目下、陸軍省と協議中なので確答できないこと、東京大学予備門の学期課目については規則書を同封する、と伝えてくる。(L3186)

五月六日

大津での人力代金二十二銭、草津のモチ代九銭。(L938)

五月十一日

大阪教会において生後二ヵ月半のC・B・デフォレスト Charlotte Burgess DeForest に幼児洗礼を授ける。(I8-12b)

* C・B・デフォレストはのち神戸女学院の第五代院長となる。

五月二十四日

滋賀県八日市に伝道中の須田明忠を訪ねる。(全3:166)

五月二十八日

京都府学務課員が同志社を視察する。新島出校。(D1:55, 124)

五月三十日

京都府知事より外務卿に宛てて、同志社の雇い入れ外国人業務明細書および学務課員による視察報告書を送付する。(D1:55)

六月一日

「詩篇」にこいて説教稿を書へ。(L1196)

西京第二公会の信者、須田明忠・河辺鋤太郎の八日市教会への転会推薦書を同教会の広瀬又次に宛て書へ。(新島公義代筆)(全2:565, L451)

六月二日

M・L・ゴードンの雇入願を京都府に提出する。(全1:312, L220)

六月三日

彦根教会の設立に際し、新島はじめ京阪神諸教会の代表・宣教師ら雨の中、大津より蒸汽船で琵琶湖を横断、午後五時ごろ彦根に到着する。この夜、受洗希望者十二名に対する試問会(議長・新島)が

行われ、四日の朝まで続けられた。(F8:10, 18-12c)

六月四日

彦根教会の設立式が行われ、午前八時より新島司式のもとに洗礼式(十二名受洗)、午後一時より本間重慶の按手礼式、夜は記念説教会が開かれた。参列者はゴードン、ギューリック、テイラー、ペリー、デイヴィス、市原盛宏、金森通倫、海老名弾正、小崎弘道、宮川経輝らであった。(F8:12)

六月五日

前日のメンバーが八日市に移る。午後一時より、八日市教会の設立式および須田明忠の按手礼式が行われる。(18-12c)

六月六日

先頃、京都府の横井忠直学務課長らが同志社校内視察の際、J・D・デイヴィスが聖書を用いて講義していたことにつき、この日府庁に呼び出され、尋問される。(全1:13)

六月七日

J・D・デイヴィスの聖書講義に関して知事宛に弁明書を提出、教科書として使用しないと約束したが、修身学に関しては「不苦ト被仰付候間」差許していたのだ、と弁明する。(全1:13)

六月九日

同志社試験表(六月九日~十二日実施)を府学務課に送達する。(D1:30)

去る七日、府知事に提出したJ・D・デイヴィスの聖書講義に関する弁明書につき、京都府は納得せず、書き改めて提出するよう申し渡される。(全1:14)

六月十二日

同志社英学校余課第一回卒業式が校内第二寮階下の講堂において挙行され、十五名が卒業する。席上、卒業生全員により記念演説が行われたのち、新島校長より送別の辞が述べられ、"Go, go, go in peace, be strong! Mysterious Hand guide you"と教え子たちを励まし、午後五時、式を終える。

(L118, D1:252)

* (D9:70) では式場は岡山文阿弥となっている。

六月十四日
六月十五日

外国人教師の職種、給料、期間、住所等の調査依頼が府庁よりくる。(L312)
府庁より差し戻された「弁明書」を書き替えて再提出する。その中で聖書を教科書として使用したのではなく、生徒の質問に対して止むを得ず聖書中よりキリストの言葉を引用して答えていたのだ、と弁明する。(全1:14)

* (全1:312)では六月十六日となっている。この日提出したのか。

六月十六日

森有礼に手紙を出す。(全1:312)

六月十七日

外国人教師避暑のため比叡山北谷弁慶屋敷跡地の借地願を提出する。(D1:95)

ジャパン・ミッション第七年会が神戸で開かれる。二十六日まで。(E1)

六月十九日

小崎弘道を同伴して西九州方面の旅行に向かう。この日、山城丸に乗り神戸を出帆する。(18-12d,

c)

六月二十一日

大分県佐賀関に到着する。(18-12e)

* 佐賀関——鯛名 六月二十五日——美々津——都農(泊)——高鍋 六月二十六日——広瀬——宮崎(泊)
——城ヶ崎 六月二十七日(泊)——学ノ木——山ノ口——都城——鹿児島福山(泊) 六月二十八日——鹿児島
島のコースをとる。

六月二十二日

佐賀関より船便を利用、下ノ江を経つ二十五日に宮崎県鯛名に着く。(L338, 18-12e)

六月二十四日

新島不在中、府学務課員が同志社を視察する。(D1:126)

六月二十五日

戸・名〔?〕——新丁——美々津——都農(泊)(L338)

六月二十六日

都農——高鍋——広瀬——宮崎(泊)(L338, 18-12e)

六月二十七日

この日、ゴードンの雇い入れ許可される。(全1:312)

〔a〕日向城ヶ崎(現在宮崎市內)に達し、医師・林武一に面会、かつ他の信者にも会い、大いに旅の疲れを慰める。この夜、一カ所で説教をする。聴衆三、四十人。(抄3:166)

滞在中の午前、医師〔林か〕宅で集会を開く。宮崎病院の生徒らが聞きに来る。また、夜の集会には七、八十人が集まり、戸外に立つものもあった。(全3:166)

〔b〕油津へ行く小崎と別れ、宮崎——城ヶ崎——学ノ木(現在の田野町)——山ノ口(休憩)——都城——鹿児島県福山(泊)の行程をたどる。(E388)

六月二十八日

福山より鹿児島湾を横断、対岸の鹿児島に到着する。同市汐見町の野口方に一泊する。石ヅ口通の山下十次郎を訪ねるか？(E388)

六月末

(あるいは七月初め)神戸に上陸、西宮で一泊する。(E388)

* 新島の日向伝道については不分明なところが多い。(E2:5)では「日向国城ヶ崎に於ける信徒の招きに依り出張せしが新島は十余日にして已むを得ざる事故に依り京都に帰り小崎独止りて伝道……」と記されているが、かんじんの新島自身は雑記帳(E388)と雑誌社宛の報告(抄3:166)を除いて記録を残していない。疑問点を整理すれば次の通り。

一、宮崎での滞在日数がはっきりしない。(抄3:166)と(E388)の記述には若干の相違が見られる。また小崎は(18-12e)に「城ヶ崎に居る事三日余は新島先生と相分れ……高鍋と云所に到る」と書いている。

二、鹿児島での新島の行動および帰路の行程は不明である。

三、帰京は六月末か、七月初めとあるが、これと同内容の記述が(抄6:193)に見える。ただし三週間ほどのずれがある。

なお、小崎は(E1:52)の中で、日向伝道を明治十一年のこととしている。

六月

西南戦争に賊軍として参加し、兵庫監獄に収監中だった福岡出身の八木和市・大神範造・安永寿ら刑期満了して出獄、新島の勧めに従って福岡に英学校設立のため奔走する。英学校はできなかったが、これらの人々は、のちに福岡教会設立の母体となる。(F4:160)

七月二十日

午後五時神戸に到着、安息日にあたるため西宮に一泊する。(全6:193, C4:164)

* 六月末の項と同一のことからか。

七月二十一日

朝九時すぎ、京都の自宅に戻る。(全6:193, C4:164)

七月二十二日

神戸の宣教師 D・W・C・ジェンクス DeWitt C. Jencks はボストンの N・G・クラーク総主事に新島の俸給および彼の身辺の危機について手紙を出す。宣教師らは、「この頃、」政府の同志社の資金に対する疑いから」新島が逮捕されるかも知れないと心配していたようである。

“In the estimates you will notice that Mr. Neesima's grant in aid is put at the former figures \$750.00 instead of \$700 as for two years or so past. / There is nothing now in regard to Mr. Neesima's imminent danger of imprisonment, we trust he may make his persecutions turn to as good result.....” (E25—c)

* D・W・C・ジェンクスは一八七七〜八七年の間「The Japan Mission of the American Board」の会誌を担当していた。その後、D・W・ラーネッドが一八八七〜九一年まで後を継ぐ。

九月四日

A・ハーディに手紙を書き、政府の圧力に対抗して教育水準を高めるためには資金が必要であること、もし必要なら説明のためボストンへ行くつもりである、と述べる。

「私はアメリカの裕福な人々に私の主張を開陳いたしました。私は公の乞食となって町から町へと

まわります。私の現状からすれば、舌とペンが使える限りは、私は乞食をやめません。キリストの御為、私の国のために、私は大音声で叫ぶ乞食となります」(全6:199, 全10:245)

九月十四日

朝、徳富猪一郎と相国寺辺を散歩、学校を盛んにするため徳富らの協力を求める。(J67:96)

九月十九日

今治教会設立のため、新島ら京阪神教会の代表、宣教師らオテント丸に乗り込み、今治に到着、夜は仮会堂で祈禱会を開く。(全5:84, F4:108)

九月二十日

今治教会仮会堂においてアッキンソンが議長となり、受洗志願者の信仰推問、伊勢時雄の按手礼試験が行われる。(F4:108)

九月二十一日

今治教会設立式、伊勢時雄牧師按手礼式が行われる。新島は伊勢牧師への按手祈禱と新牧師への勧め、更に引き続き聖餐式の司式を行う。夜は同教会で演説会を催す。(全5:84, F4:109)

夜、説教の最中、京都から電報が届き、姉・みよの吐血、危篤の報を聞く。(全5:84, F4:109)

九月二十四日

新島帰京する。姉はだいたいぶん衰弱していたが、吐血は止まる。(全5:84)

九月二十五日

津田仙よりこの日付で来信、楽善会の高津柏樹、大内青巒を紹介してくる。(F666)

九月二十九日

府学務課、同志社英学校、女学校を視察する。(D1:130)

政府、〈学制〉を廃し〈教育令〉を定める。(J97:81)

九月

運動場完成する。(全1:234)

十月五日

「予ト八重ト共ニ、姉ノ此世ニ久ク存スル事ナラサルヲ告ク」(全5:84)

十月六日

沢野甚七に三十七円を渡して烏丸御所八幡町の土地を買い求める。(全1:312)

十月七日

この夜、姉・みよは枕元に親族を集めて暇乞いをし、各々に信仰を全うするように勧める。(全5:85)

十月八日

日本基督教伝道会社の集会在浪華教会、浪華病院で催される。夜は親睦会。(45:85, 46:201, 62:26)
この日、午前十時より浪華教会で、新島は委員として年度報告をする。午後一時三十分より浪華病院で、新島が議長となり、規則を検討する。(18-12f)

十月十一日

ゴードンの家屋建築のため、第十組学校まで願書を出す。(41:312)

十月十三日

群馬県後閑村に住む第二姉・まきが「病気のため存命望みなし」との知らせが届き、みよは、姉妹ともに手を携え天国に赴かんとする。(45:85)

十月十六日

府庁に修身学読会についての届け出をする。

一、毎週金曜日午後六時より 二、毎日曜日午前九時より 三、同午後三時より、有志相集まり修身学会読ならびに講釈をするというもの。届けは「府庁へ留置ニ相成候」(41:15, 42:565)

十月二十日

同志社の生徒、初めて比叡山麓で兎狩りを催す。(41:234, 313)

十月二十三日

新島みよ没、四十一歳七ヵ月。(41679)

十月二十四日

新島みよを東山黒谷金戒光明寺内に葬る。(14:89)

夜、第二公会の祈禱会が開かれ、新島は仮牧師の職を辞す。後任は選挙の結果、市原盛宏が就任、新島は執事、牧師代理兼書記に選ばれる。新島が同志社社長と仮牧師を兼任することは政府に対して差し支えがあり、また今後、同志社の職務に専念したいというのがその理由である。(42:566)

十月二十七日

ハーディ夫妻に手紙を書き、姉の死について報告する。(46:201)

十月

京都府庁より同志社の授業を視察に来る。新島が案内する。(D1:130)

十一月三日

佐藤まき没、四十六歳、群馬県下磯部村普門寺に葬る。(41679)

十一月五日

アメリカン・ボードより、この日付で来書、オティス・レゲシー基金のうち、外国教育のため設定した分より八千ドルを、毎年同志社に寄付することを通知してくる。(全1:234, 313, 全6:206, 全10:251, E8:24)

* Otis legacy について (全6:207) 参照。

十一月六日

梅花女学校の新築校舎開業式に臨み、女子教育について演説する。(G1:25, 407, 18-12E)

十一月七日

新島は大阪でレーヴィット宣教師と会い、Local special training school について話し合う。レーヴィットの案は同志社から神学校を切り離して、大阪かどこか別の場所に移し、その土地の教会が維持してゆくというものだった。そうすればアメリカン・ボードの負担は軽減されるし、同志社をウイリアムズ大学やアーモスト大学のようなアカデミック・コースにすることができるといったものだった。(全6:204)

十一月八日

日本基督教伝道会社の委員ら、神戸でジャバン・ミッシェンの宣教師レーヴィット、アッキンソン、ゴードンと会い、外国からの援助資金の使用に関して協議する。(全6:203)

十一月十三日

アメリカン・ボードのN・G・クラーク総主事に手紙を書き、レーヴィットと会談したことについて、次のように述べる。

一、神学校を同志社から分離しない 二、現在の正規の神学科に併設して、速成神学科 Special theological class を早急に発足させる 三、宣教師は、神学科に生徒の関心を持たせ、かつ彼らをクリスチャンの影響下におくため、普通科 Academic course の教育より手を引かないこと。(全6:205)

十一月十八日

レーヴィットが大阪に神学校の設立を企てたため、同志社の教員七名（外国人教師を含む）が会議を開き、次のことを決める。

一、同志社ニ於テ普通科ノ外必ラス神学ヲモ教授スヘキ事 一、当時行ル、神学ノ外別ニ速成神学科ヲ設来年三月ヨリ授業ヲ初ムル事 一、外国教員モ縦令神学ヲ教ユルモ決シテ普通科ヨリ手ヲ引カス益該科ニモ尽力スヘキ事（全1: 234, 313）

十一月二十八日

京都府学務課、同志社を視察する。（D1: 134）

十一月二十九日

勝海舟を訪問する。（J31-20: 280）

十一月三十日

ホイットニー家 William C. Whitney の夕拝に出席する。礼拝ののち、カラシ種の寓話について話をする。カラシ種は小さいが大きな力を秘めていること、キリストの教えも世界中、日本中に広がり、大きく成長するだろう、と述べる。（E18: 294）

十二月三日

新島は、海老名弾正の按手礼式に出席のため安中に到着する。（F5: 882）

十二月六日

午後七時より海老名の牧師試験を行う。（F5: 882）

十二月七日

午前九時より海老名の按手礼が安中教会で行われる。新島「死ニ赴クハ安シ、心ノ戦ニ勝ツハ難シ」松山「兄弟への勧め」デフォレスト「牧師への勧め」の説教をし、アッキンソンが按手礼、グリーンが握手をする。（全2: 27, F5: 882, 18-12h）

この日、A・H・アダムズ宣教師が日本へ帰任の途中、船中で病死したとの知らせを受け、グリーンとデフォレストは横浜に向かう。（F5: 882）

十二月八日

松井田に伝道する。（F5: 882）

十二月九日

中宿および前橋に行き、生産会社において説教をする。聴衆二百余人。道を求めるもの多く、数回説教をする。一泊して、翌日出発する。(F5:882)

十二月十一日

J・D・デイヴィス、療養のため中国に旅行する。翌十三年一月五日帰京する。(全1:313)

十二月十三日

東京の新肴町基督教会設立式と小崎弘道の按手礼式が東京京橋新肴町の簿記夜学校の一室において、午前九時半より催され、新島が司式する。(F14:50,18—12h)

* (J32:51)では十二月十二日と記している。

十二月二十七日

アメリカン・ボードより八千ドルの寄付を得たことにつき、この日、ハーディに礼状を出す。(全6:206,全10:251,C4:87)

十二月二十九日

N・G・クラーク宛に、十一月五日付の通知を受け取ったこと、ボードよりの寄付に対し感謝の手紙を出す。(全1:313,全6:207)

十二月三十一日

神田乃武が帰国する。(E31:23)

この年、『天道溯源』の著者W・A・マーチンが京都を訪れ、同志社にも立ち寄る。(F2749)

明治十三年（一八八〇）三十八歳

一月四日

京都の三公会の信者らことごとく第一公会に集まり、聖餐式を行う。新島はD・W・ラーネッドと共に晩餐の司式をする。（全2：567）

一月五日

新肴町教会の小崎弘道に、月給を九円とすることについて手紙を送る。（全3：168）

一月八日

オハイオ州デイトンのE・E・バーニーよりこの日付で来信、Catalpa [アメリカキササゲ] についての印刷物 “Two varieties of Catalpa, Direction for planting” を同封しつつ。（F2394）

一月十二日

H・F・パーメリーの雇入願を出す。二月一日より五年間、月給五十円。（全1：313, E201）

一月十九日

「マタイによる福音書」三章十二節について説教稿「キリストの仕事」を書く。第一公会での説教の準備か。（E1016）

一月二十一日

亀岡在住の一人人に洗礼を授ける。（18—13a）

一月二十三日

丹波行きに九十五銭支出する。（E987）

一月二十九日

同志社の男女両学校、大阪・神戸の女学校のために祈禱会を開く。午後一時より同志社に各級が集まり、二時半より女学校の教室で大集会を開く。新島が司会を務め、聖書を読み、祈禱をし、諸氏の演説を行う。来会者約百三、四十名。（全1：313）

一月三十一日

花岡山の奉教五周年記念会を開く。（D11：112, J6：568）

一月

邦語速成神学科を来る四月五日より開設するにつき、各公会の牧師宛にその細目を通知すると共に、

進学希望者の勧誘を依頼する。なおこの神学科は毎年四、五、六月の三カ月間、開講されるものであった。(全1:16)

この月、京都府学務課の視察を受ける。(D1:136)

二月六日 夜、第二公会で物事に倦むことについて話をする。徳富猪一郎も出席する。(J14:96)

銀座教会(田村直臣牧師)が小崎の牧する新着町教会の二階に移転してくる。このため小崎は同所を立ち退くこととなる。(F21:22)

「右之挙動ハクシリチアンの為スヘキ事カ否ハ目アル者ハ見ルヘキ、心アル者考ベシ」(全3:174)

二月七日 岡山に行き、伝道を扶ける。(全3:173)

同志社女学校の地所売渡証を堀本利慶より受け取る。(全1:314)

二月九日 宮川経輝ら円山世阿弥で宗教演説会を開く。(新島、岡山に行き不在)(J17:43)

二月十日 中川横太郎、J・C・ベリーらと岡山県河辺に行き、十二日まで毎夜、連続説教会を開く。(全3:169)

二月十三日 朝、河辺を出発、倉敷に行き二、三の人物と会う。(全3:169, F17:7)

二月十四日 「基督弟子ノ足ヲアロフ」と題して説教稿を書く。(L1197)

二月十五日 安息日、岡山において説教する。(全3:169, F17:7)

二月十七日 O・ケリー夫妻、木全^{きまた}夫人らと備中松山(高梁)に行き、夜、高梁小学校内裁縫場(女紅場)において、中川横太郎と共に説教をする。聴衆三百人余。(全3:169, F17:7)

二月十七・八日 高梁にて「文明ノ基」と題して演説する。(全1:345)

二月十八日

早朝、運動のため備中松山城に登る。その帰途、渡米前の友人で天誅組に加わり刑死した原田亀太郎の家を訪ね、父親の市十郎に会う。午前中は多くの来訪者と面会、午後はかつて快風丸に同船した旧友・加納格太郎を訪問し、夕方まで緩々と話をし、夕飯をご馳走になって帰る。夜は八時より前日と同じく高梁小学校においてケーリと共に説教をする。聴衆四百人。(全3:10, F17:7)

二月十九日

「矢張多くの人々参り中々少しの暇もなく候」。原田の父親より昼食に招かれ、亀太郎が獄中で父親に遺した文章を写す。それよりベリーの施薬所に行き百人余の病人に説教、更に二百人余の婦人集会に出席して一時間ほど演説する。その後、加納の家を訪れ、風呂に入り、夕方、ぜんざいをご馳走になる。これはかつて快風丸で函館に向かう際「私は酒はイヤ、しることを呉れと申候ハ、別杯之代りニしることを御馳走ニ相成候事ありしを加納様ハ御忘レなく、別るゝ時もしるこなれば、又逢ふ時もしるこみなすべしと而、其タハせんさいの御馳走被下候次第」。夜一時間余り説教をする。ベリー、岡山に帰る。(全3:171)

二月二十日

ケーリ、中川が岡山に帰り、新島一人高梁に残る。松山の近辺に流星ひやうめいそうが落ちたとの風説があったので、午前中、案内人を雇い、一里余もさがして歩く。午後、真宗の信者である宿の主人より「仏ニ極楽あり、耶蘇ニハ魂之行ク所あるや」と聞かれ、夕方まで論争する。夜、改良社の親睦会に出席、柴原宗助、二宮邦次郎らと共に新島も一時間余演説し、夜十時半に散会する。(全3:171)

二月二十二日

岡山で説教をする。夜、土地の「銀行之頭之家」に行き、十時すぎまで話し込む。(全3:171)
W・S・クラークよりこの日付で来信、京都農牧学校の教師として、マサチューセツツ農科大学をこの六月に卒業する Mr. W. M. G. Lee を推薦、京都府への幹旋を依頼しつゝ。(F2396, G6:16)

二月二十三日

岡山の有力者三、四名と共にベリー家の夕食に招かれる。彼らは「余程骨折候得共何分ヤケ石に水の様ニ有之候、彼等ハ此世の事計考へ魂の事ハ少しも心ニ留めず」。夜、中川の家に行き、西某とキリスト教の話をする。備中笠岡の信者・柚ノ木が来訪し、二十五日まで滞在する。(43:171)

二月二十四日

早朝、西某の家を訪れ、「道之為話しを致し候処、大分西様ニハ望みもあり、是より充分ニ耶蘇教を学びたしと被申候」。午前中、中川宅で開かれた婦人集会に出席する。(43:172)

二月二十五日

八重夫人に発信、高梁を訪問し、現在は岡山に滞在中であること、三月三日には四国へ渡り伊予松山まで行くこと等を記し、「成丈ヶ休なく働らき、少しも早く帰京いたし度候、乍去穫り入レ時は最早参候間、実ニ農夫之急かしき秋に御座候」と述べる。(43:169)

小崎弘道に発信、岡山で金森・伊勢とも相談したが「当今伝道に汲々トシテ寸暇ナキトキニ当リ糊口之為不得止事学校ニ出テ教授スルハ余リノ上ナル者ニ非ス」、公債の利子は母と弟の費用に充て「是迄之通少しなりトモ伝道会社ニ扶助金ヲ受ケ伝道ヲ専一ニシテ「ハ」如何」「若シ月々御不足アラハ小生迄之ヲ告賜ヘ小生幾分カ会社ニ関セス主基督之為ニ尽力スヘシ」と述べる。また新肴町教会の立ち退きについてもふれる。(43:173)

二月

岡山よりハーディに手紙を出す。(46:208)

ゴールドンが上京第十一組常盤井殿町六二二より上京第十組御所八幡町東側へ移転したことにつき転居届を出す。(420)

京都府学務課、同志社を視察する。(D1:137)

三月二十一日

徳富猪一郎に手紙を書き、今晚、市原盛宏と会うようだが「其は何之所ニ而御対談ニ相成候哉……集

ナドニ而右之御談はあまりよろしからずと奉存候、同氏あやまり候以上ハ君も男らしく御勘弁あり度」と忠告する。(43:175)

* この頃、学校によって二年生の上級組と下級組のクラス合併が計画され、上級組の不満が高まっていた。それに関連あるか。徳富は上級組の側に立っていた。

三月二十四日 「ヨハネによる福音書」七章十四～十七節について説教稿を書く。(1196)

三月二十九日 D・W・ラーネットの伯母イライザタルカット Eliza Talcott を同家の子供の世話をさせるため

寄留させたい旨、願書を出す。(D1:59)

三月 京都府会が開かれ、山本覚馬が議長となる。(D6:52, D10:190)

京都府学務課の視察を受ける。(D1:138)

四月四日 京都第二公会において「信ずる心ノ遅き愚なる者よ」と題して説教を行う。(42:3)

四月五日 第三学期始まる。新たに開講した邦語速成神学課の生徒が十九人入校する。(41:314)

四月六日 パーメリーの雇入願(一月十二日提出)の免状交付が遅れていることにつき、府庁に催促願を提出する。(1227, D1:109)

同志社の地券が下げ渡され、この日受け取る。(41:314)

四月七日 二年生上級の沢克巳ら九名、学校の方針による同学年下級とのクラス合併に不満を抱き、「御何書」

を提出、「何分の御沙汰有之迄は教場に出席難致候……」と申し入れる。(180)

四月八日 この朝、上級組の生徒を呼び出し、学校の方針を説明、授業に出席するよう説得する。沢克巳ら九名

は再び連署して校長に「嘆願書」を提出する。(181)

スタークウエザーの雇継願（五月一日より五年間）を提出する。（全1：315，E209，E221）
四月九日 「嘆願書」に対し「御歎願之筋難聞届御座候」と回答する。（E381）

四月十一日 新島宅で市原盛宏が聖書を講じ、山崎為徳が演説を行う。（J15：4）

四月十二日 休校「御届」が新島公義名で提出される。（E382）

「教員乃チハ校長、幹事（山崎為徳、森田久万人、市原盛宏）外国宣教師諸君方ハ色々評議ヲ成シ、遂ニ校長ヨリ合併事件手落ち事ヲ、二年生徒一同へ告ゲ」る。（J14：104）

夕食後、二年初級の生徒を自宅に招く。また徳富猪一郎を別に招く。（全3：176）

四月十三日 第二寮階下講堂での朝礼の席上、いわゆる自杖事件が起こる。（D11：112，J14：104，J15：4）

四月十五日 人力車、馬を乗り継いで吉野山を訪れる。帰路は阿田、金剛山、富田林、菅田を経て大阪に向かう。

（E383）

四月十六日 午後七時より新島宅で祈禱会を催し、キリスト教拡張のため同志社生徒が一致すべし云々の説話をす

る。（J15：5）

夕方、徳富猪一郎を自宅に招く。（全3：177）

四月十七日 二年の元上級生徒ら、如意山の頂上に登り、徳富らと共にクラス合併問題についての総括をする。午後五時すぎ帰校する。（J14：105）

四月十九日 新約聖書翻訳完成祝賀会が東京新栄教会におこつて開かれる。（J40：62）

四月二十二日 スタークウエザーの旅行免状交付される。（E229）

四月下旬

新島上京、パーメリー雇い入れにつき井上外務卿に面会、女学校のこと、その管理運営に関し井上と

懇談すると共に、キリスト教抑圧の不可なことを進言する。これを境に事態は好転してゆく。(46: 209)

四月三十日

雨、勝海舟を訪問、経済にきき話をす。(131-20: 305)

四月

京都府学務課が同志社を視察する。(D1: 139)

五月二日

京都の三公会の信徒ら第三公会に集まり、聖晚餐を守る。(42: 568)

五月五日

この日西京へ帰るので漸時面会したい旨を上野景範外務大輔に申入れる。(H17-a)

五月八日

東京基督教徒青年会、発会式。(F21: 541)

五月十九日

A・J・スタークウエザーの外国人居留地外僑寓証票が京都府より下付される。(L230)

* (D1: 760) とは五月二十日。

五月二十四日

徳富猪一郎が退学を申し出る。新島は徳富に「大人とならんと欲せば自大人と思ふ勿れ」と裏書きした写真を渡す。(J76: 121)

五月二十五日

同志社を退学した徳富猪一郎、湯浅吉郎、河辺鎬太郎の三人が東上挨拶のため新島宅を訪れる。十一時に新島宅を出て、新島公義らと共に三条大橋西北隅の「魚万」で食事をする。支払い、新島が「せめて昼飯でも馳走してやれといて」公義に渡した金で済ませる。(42: 568, J14: 118, J76: 82) この日より三十一日まで、ジャバン・ミッシン第八年会が大阪川口の外国人居留地二十四番館で開かれる。議長はR・H・デイヴィス。(E1)

五月二十八・九日

日本基督教伝道会社第三年会が梅花女学校で開かれ、沢山保羅、レーヴィットらが教会自給論を唱える。外国より補助金を受け入れることにつき協議したが、純然たる独立は時期尚早との結論に達した。

(F2:6, G2:33)

五月三十日

新島宅に集会があり、東奥義塾塾長の本多庸一が説教をする。(J15:6)

五月

同志社、京都府学務課の視察を受ける。(D1:140)

六月一日

京都で本多庸一と会う。(J2:158)

六月三日

ミス P・F・マッキーン永眠。四十九歳。〔明治元年八月十六日の項参照〕(D35)

六月四日

神戸教会で松山高吉の按手礼式および就任式が行われ、新島は新牧師への勧めをする。(F1:60, J40

:66)

六月六日

京都第二公会において「安息日之説」について説教を行う。(G2:7)

六月十二日

かねて同志社のクラス合併問題の成り行きを心配していた小崎弘道に手紙を送る。「幹事ノミ之罪ニあらず、皆我輩一統之手抜と申して可なるへし、向後は小生幹事益親密ニ談合シ、私共ニ手抜ノナキ様注意スベシ」「其分は一通り片付候得共、別ニ又不都合を生じ……両三名も退校する事に相成」その生徒らが東京に行ったので「決し而此道を離れざる様……何分テンプレーション多き東京なれば、何卒愛兄之御券顧を不絶勞し度候」と述べる。(G3:178)

六月二十三日

学期末試験始まる。(G3:180)

六月二十五日

第二回卒業式を挙行する。(G3:180)

六月二十八日

同志社、休暇に入る。(L498)

六月二十九日

東京へ帰る津田元親を送って神戸に行き、一泊する。退校した徳富猪一郎、河辺鎬太郎に神戸より発信、「小生ニ於而は些少も君等と隔絶する心は無之……」両兄が「充分ニ鋭を養ひ広く史乘ニ亘り深

く學術を窮メ……二拾四五歳ニ至り候迄は碌磨を事とし、一朝世ニ出る事を為す時は決而世と共に浮沈せず百川を挽回するの鉄氣を以テ我腐敗社会を改良し賜はん事、小生之切ニ君等ニ望む所」と述べら。 (全3: 180)

六月三十日 神戸より岡山へ行き、数日滞在する。(全3: 182)

六月 自杖事件関連の二年生九名、新島が腕をたたいて砕け散った杖の破片と「吉野山花咲く頃の朝な／＼

心にかゝる峰の白雲」の古歌を大書して記念撮影をする。(上83)

女学校規則を広告として発表する。(D1: 99)

京都府学務課の視察を受ける。(D1: 141)

七月一日 近畿・中部・関東地方、豪雨・洪水により水害を受ける。(H14: 173)

七月十三日 第二回全国基督教信徒大親睦会が大阪の梅花女学校において開催され、新島も出席する。十七日まで。

(F13: 8, 18—13b)

七月十四日 大親睦会二日目、午前中、内久宝寺森学校で集会(新島議長)が開かれる。午後は梅花女学校で議事

を開き、夜は同所で説教を行う。(F13: 8, 18—13b)

七月十六日 大親睦会四日目、梅花女学校において集会、新島の祈禱、奥野昌綱の祝禱をもって終わる。(F13: 9)

七月十七日 大親睦会最終日、梅花女学校において集会、新島、西京諸教会の状況を報告する。(18—13c)

七月二十一日 大親睦会に出席した湯浅治郎に徳富猪一郎宛の書簡を託す。「……鉄を養ひ他年飛揚之御用意有之度

……」(全3: 182)

八月一日 徳富猪一郎、この日、三条の萬屋に一泊、新島公義、湯浅吉郎らと会う。(J14: 122)

八月十日

来阪中の徳富猪一郎に発信、「兄ハ第二公会より御退会被成度旨、何分小生ニ於而は了解仕兼候間、帰路道を西京に枉け小生を御尋被下度奉願候」と述べる。(43:184)

八月十二日

京都よりJ・D・デイヴィスに発信、日本におけるミッシェンの仕事は子供の遊びではないので、苦勞が多くても、問題をいまだ少し気楽に考えて、できるだけ休暇をとってほしい、とにかくこの世を一日で改宗させるわけにはいかないのだから……。 (46:210)

八月十三日

プール夫人に手紙を書き、基督教徒大親睦会のこと、二週間前に京都郊外に寺を借りて避暑したこととを告げ、将来有望な十七歳の少年への援助を頼む。(F224)

八月二十六日

北海道元浦河に赤心社創立される。(J19:95)

八月三十日

サンフランシスコにいる赤峰瀬一郎よりアメリカのウイリストン・セミナリー入学についての添書を書き、翌三十一日に同校校長宛に一書を認める。(41:315)

九月二日

今治の川本政之助に、同志社入学を志願する増田雅太郎の学力について問い合わせる。(43:184)

九月十二日

京都第二公会において「初メハ大切、ヨリ終リガ大切」と題して説教を行う。(42:15, J15:7)

九月十四日

上京第二十二組松蔭町「新島家」宅地九百三坪八合四勺を浜岡光哲より二百七十五円で買い取る。

(L1709)

* この松蔭町の地番は一四〇一四、一四〇一五である。明治十四年四月さらに若干買い足す。

九月十九日

京都第一公会において聖晩餐を守るに際し「人自ラ願ミテ後其ノパンヲ食シ、其ノ杯ヲ飲ムベシ……」の説教を行う。(42:10)

大阪へ行く。(L498)

九月二十一日

徳富猪一郎に発信「兄之曾西京を発するや、僕ニ約し而曰、公会へハ必ラス出スベシト、然るに未タ数月をも経過せざるに東京之公教ニモ御出席ナク、加之当会より御退会之事トハ余リ約シテ速ニ約ニ違ふに似たり……如斯一約一諾を易々然として変ずるは大丈夫之大ニ恥ツる所なるへし……」と述べぬ。(全3:186)

同志社女学校の新地券が下付される。(全1:316)

九月二十三日

大阪の集会に出席、このための支出百四銭。(上98, 上940)

九月二十四日

岡山「金森通倫」より来る十月十三日教会を設立するにつき、代表の派遣を求めてくる。京都第二公会は新島を派遣することを決める。徳富猪一郎を第二公会より除名する。(全2:569)

九月二十五日

同志社学術演説会が四条寺町下ル浄教寺で開かれる。「京都府下槇村君の御鼻先きにおいて始めて演説会を開きは此の諸君の力なり、京都府下人民一般の面目といふ可し」(D24:27)

九月二十九日

『七一雑報』の講読費として二年分二円二十四銭を支払う。(上940)

九月三十日

京都府学務課員、同志社を視察する。(D1:143)

九月

小崎弘道がJ・H・シーリー著『途也、真理也、生命也』の翻訳を発行するというので序文の草稿を書く。この本は『宗教要論 全』と題して明治十四年五月に刊行された。(全1:457, 上682)

十月三日

「御意ノ天ニ成ル如ク地ニモ成ラシメヨ」について説教を行う。(場所不詳)(全2:23)

近畿・東海・関東に風水害。(H14:173)

十月十一日

岡山教会設立式に出席のため、夫人同伴で京都を出発、午後五時、神戸より汽船で岡山に向かう。アツキンソン、ケーリ夫人、松山高吉、今村謙吉、江川、二階堂円造、降屋盛基の諸氏が同船する。

(全5:91)

『六合雜誌』創刊される。(J109:27, J110:3)

十月十二日

午前一時、岡山に到着、午前九時集会を開き、会長に松山、書記に伊勢を選ぶ。受洗希望者二十七名の試問が行われる。夜、金森通倫の按手礼試験が行われる。(全5:91)

十月十三日

岡山教会設立式および金森牧師按手礼式が行われる。新島、二十七名に洗礼を授け、新牧師への勧めをする。午後二時より、新島によりガラテア書に関する講義が行われ、金森、村上両牧師の司式により聖晚餐を守る。(F1:61, 18-13d)

十月十六日

洛東雙林寺文阿弥席において同志社学術講演会が開かれる。(J69:481)

十月十七日

岡山陶器所の日曜学校の開校式にベリー、ケーリらと共に出席し、演説をする。高崎五六県令、津田要大書記官、高津輝警部らが出席する。(全5:92)

* (全2:37) では十月十九日。

十月十八日

夜九時、後樂園を出発し、四国行き便船を待つため三番で一泊する。(全5:93)

十月十九日

午前二時、和歌浦丸に乗り岡山を出帆、朝六時半に多度津着、さらに竜丸に乗り換えて昼すぎ十二時半、今治に到着、多くの信徒に迎えられて伊勢時雄方に案内される。また竜丸の船内で神戸のミス・ダッドレーに会う。(全5:93)

十月二十日

夜、会堂で集会を催し、宗教の必要性を説く。聴衆二百名余。(全5:93)

* (18-13e) によれば集会は夜七時半より、聴衆三百余名とある。

十月二十一日

朝、信徒の家を訪問、夜は前日に引き続き演説「霊ノ学問ナカルベカラス」と題して学問と宗教の大

切なこと、安息日学校を設立せざるべからざることを説く。聴衆五百人。(42: 385, 45: 93, 18—13e)

十月二十二日

朝十時半、狹貫丸で今治を出帆、午前二時十分頃、三ツ浜〔松山〕着、船を乗り継いで午後六時十分、山口県上ノ関に着く。潮流激しく、船がゆれる。(45: 93, 18—13e)

十月二十三日

午前三時半、下関に到着、ただちに川崎屋卯八の宿に入る。自宅、池袋、鹿兒島の友野らに手紙を出す。午後は服部章蔵、栗屋正臣、入江和作らの家を訪問する。午後十一時半、光運丸に乗り博多に向かうも北風強く、沖合に仮泊する。(45: 94)

十月二十四日

午前六時半、馬関沖を出発し、午後一時博多に到着する。中島町の甘木屋に投宿し、本町の不破唯次郎の家を訪問する。夜、同所において説教をする。(45: 95)

十月二十五日

午後、内海長広の家で信徒の親睦会を催す。聖書より数節を引用して、神が人間を区別しないことについて話をする。夜に入って散会する。(45: 95)

十月二十六日

博多の下魚町井上宅の隣家で偶像の信じがたいことを説教する。山中茂、久野藤二郎が来訪する。博多川端岡崎屋に宿を移す。(45: 96, 1940)

十月二十七日

朝、山中茂を訪問し、続いて久野藤二郎を訪れる。夜、不破唯次郎より夕食に招かれる。信徒も集まる。(45: 96)

十月二十八日

福岡より人力車で芥屋大門の見物に行く。山中、不破、安永、井上らが同行する。途中、前原で昼食を食べ、共愛会の南川正雄に面会する。そこから二里あまり歩いて芥屋を見物し、梅屋旅館に泊まる。夜、山中茂と一時過ぎまで人種改良論その他について話をする。(45: 96)

京都府庁より同志社を視察に来る。(D1:183)

十月二十九日

午前中、小舟に乗り芥屋の洞窟を見物する。福岡に帰る不破、井上と別れ、神在村の山中の家に招かれて泊まる。(45:97)

十月三十日

早朝、山中の家を出発し、午前十一時、福岡に戻る。午後から夜にかけて不破唯次郎と伝道の相談をする。(45:99)

十月三十一日

早朝より橋本の父および原常太郎来訪。午前、本町の不破方において説教をする。「死ニ赴クハ安シ、心ノ戦ニ勝ツハ難シ」。また博物館を見物して石炭事情を知る。午後、島、山部の兩人が来訪する。夜、本部に行く。熊本より来信。(42:27, 45:99)

十一月一日

早朝、博多を出発、途中、太宰府に回り道をして三木を訪れ、共愛会の事業について尋ねる。それより三木の案内で天満宮、都督府楼趾、観世音寺を見物し、薄暮、久留米に着き三本松の福ドウ屋に投宿する。夕食後、土地の郡長・宗小一郎を訪ね、久留米の地理、人情等を聞く。(45:100)

十一月二日

朝五時、久留米を出発し、南関を経て高瀬〔現在の玉名市〕に至り、松ノ井に一泊する。(45:105, 1940)

〔十一月三日〕

高瀬から木葉、植木を経て午後一時熊本に到着、洗馬三丁目の山城屋に泊まる。途中、田原坂で西南戦争の戦跡を見る。(45:105)

十一月四日

下村孝太郎、坂井庄八らに案内されて水前寺を見物する。(45:107)

十一月五日

坂井に案内されて八代に行き、本丁満嶋屋に泊まる。中西、亀山、上原の父親、魚住、宇野、松尾、箕田ら来訪する。(45:107)

十一月六日

八代の小学校において「学問の説」と題して演説をする。聴衆百余人。少年の出席者多し。夜、亀山宅で集会を開き、耶蘇教の起源を説く。(41:349, 45:107)

* 十月、八代の代陽小学校において演説……。 (F4:163)

十一月七日

夜、再び亀山宅に集会を開き、耶蘇の人となり等を論ずる。(45:107)

十一月八日

学校で「愛人論」と題して演説をする。聴衆百二、三十人。夜、亀山宅で集会、キリストの愛について話をする。(41:429, 45:107)

十一月九日

亀山兄弟、上原、中西、魚住らに誘われて麓山に遊ぶ。山上風寒し。夜、有志五、六人および上原、宇野の母親が来訪する。(45:108)

十一月十日

早朝、八代を出発し、夕方、熊本に帰る。途中、鏡町を経て岡田松生の家に立ち寄るが、彼は長崎に出向いて不在、同家で昼食を馳走になる。(45:108)

十一月十一日

午後十二時すぎ、坂井と共に阿蘇へ向かう。大津の今坂屋に一泊する。(45:108)

十一月十二日

大津を出発し、約石で昼食、夜に入り阿蘇谷に至る。(45:111)

市原盛宏の家を訪ね、彼の父親、宮川の兄・経敏、村田某に会う。のち宮川経輝の家に行く。次いで西町の蔵原惟郭の家を訪問する。阿蘇山四里の道程を越えるには時刻が遅いのと風が激しいことから、

蔵原家に一泊する。(45:111)

十一月十四日

安息日、蔵原家に逗留、夜、学校で演説をする。教員と生徒、父兄ら三、四十人が話を聞く。(45:111)

十一月十五日

蔵原家を出発、蔵原惟郭の兄・惟示これとが阿蘇山頂上付近まで見送る。火口を見物し、夕方、中松村の赤

峰久蔵の家に到着、一泊する。一家族と芹口の両親が来る。(全5:112)

十一月十六日 午後、赤峰の家に近所の人々を集め説教をする。夜、芹口の家に行き、二時間あまり話をする。

(全5:112)

十一月十七日 阿蘇より熊本に帰る。(全5:112)

十一月十九日 不破唯次郎の家に行き、午後、親戚のものに基督の来るべきことと、慰めを得ることを説く。(全5:113)

113)

十一月二十日 熊本唐人町の旅館・伊勢屋において演説の稿を練る。中西純一が来訪する。午後七時より安巳橋通、

伊藤八白方で演説会を開く。坂井の「大和魂」、下村の「人間の位」、新島の「人種改良論」。聴衆は約七十名。(全1:355, 全5:113)

十一月二十一日 前日に引き続き伊藤方において演説会を開く。宗教色が強いためか、聴衆は約五十名に減る。岡田の

「務本論」、新島の「愛国論」、坂井の「真ノ歓楽」、下村の「愛ノ力」。(全5:113)

十一月二十二日 風邪のため出発を延ばす。(全5:113)

十一月二十四日 実学党の嘉悦氏房来訪。熊本県会のこと、県下の産物のこと、実学連のことについて話す。夜、徳富を訪う(不逢)。下村、宮川房之を訪う。(全5:117, J76:160)

十一月二十五日 朝七時半、伊勢屋を出発。人力車で百貫港まで行くが、この日風が烈しく光運丸が長崎から来ないため、末松の支店で一泊する。(全5:117)

十一月二十六日 雨雪混じりの北西風烈しく、光運丸は来らず。(全5:118)

十一月二十七日 この朝も便船来ず、二人の乗客と共に馬車を雇って熊本に引き返し、新二丁目栗屋に泊まる。徳富に

会々。(45:118)

十一月二十八日 安息日、午後、不破宅でアッキンソンの説教が行われる。この夜、徳富が旅館に来訪、十一時すぎまで話をする。(45:118)

十一月二十九日 早朝四時に熊本を出発、陸路を取り南関で昼食、午後六時半、久留米に到着、一泊する。(45:118)

十一月三十日 午後二時、博多中島に到着、甘木屋に宿を取る。四国方面行きの船に乗るつもりだったが、宿のものが出港を教えなかったので、乗り遅れる。(45:118)

京都府学務課、同志社を視察する。(D1:144)

十一月 安息日にこいて書へ。(E331)

十二月一日 船便なく、逗留。(45:118)

十二月二日 夜九時、平穩丸に乗船して十一時出港、未明、馬関に到着する。(45:119)

十二月三日 平穩丸東航し、夜八時頃、三ヶ浜沖合にさしかかった時、エンジンに故障を起こし、一夜漂泊する。(45:119)

十二月四日 夜明け、漁船によって陸上と連絡が取れ、船は帆走して付近の五合島〔与居島〕に停泊、乗客は間屋

の舟で三ヶ浜に上陸、午後一時頃、石崎平八の旅店に入る。(45:119)

京都府学務課、同志社を視察する。(D1:145)

十二月下旬 彦根に伝道する。(43:189)

この年末、英国から帰国した牧野伸顕の歓迎会が京都で催され、新島も出席、牧野と会う。(J11:234)

明治十四年（一八八一）三十九歳

一月一日 父親に小遣い五十銭を渡す。（E1717）

山崎為徳ら六人を招き食事をする。（D11:114）

一月二日 日曜日、疊、第二公会において「キリストの愛は不変」と題して説教をする。速水とき、吉村秀造の二名が同公会において受洗する。（全2:569, E1200, J15:10）

一月三日 この日より九日まで新島宅において、午後六時より祈禱会を催す。（E1717）

一月四日 徳富初子、同猪一郎に年賀状を出し、あわせて前年訪問の際の礼を述べる。とくに猪一郎には熊本において学校を設けることにつき激励する。（全3:188, 189）

一月五日 薄曇、のち晴、女学校の生徒たちを残らず招待する。（E1717）

一月九日 京都第三公会において「キリストの御意ヲ察セヨ」と題して説教を行う。（全2:29）

一月十日 晴のち雪、朝八時すぎ、病氣療養のため家族と帰国するJ・D・デイヴィスを見送って、八重夫人と共に神戸まで行く。（全1:234, E1717）

一月十一日 晴、新島夫妻、午後六時すぎ神戸より帰宅する。（E1717）

一月十二日 晴、安中の後藤竹治郎が帰郷するので『天道溯源』一冊を贈る。（E1717）

病氣で帰国したJ・D・デイヴィスの寄留証票を京都府へ返納する。（D1:98）

一月十四日 安中の植栗より来状（一月九日付）。（E1717）

一月十五日

京都円山雙林寺文阿弥において同志社演説会が開かれ「日曜日と文明の関係」を論じる。聴衆四百人。
(L1717, D11: 114, I8-14a)

一月十九日

榎村正直、元老院議員となる。(J27: 119)

一月二十日

晴、母が蕎麦を食べたいというので十銭出す。(L1717)

一月二十一日

M・L・ゴードンの女子出生(一月二十日)につき府知事に届け出る。(H1: 316)

一月二十三日

日曜日につき集会「礼拝」、別座・森田、山崎、本座・新島。(L1717)

*「本座、別座・脇座」は新島民治の日記に出てくる独特の表現である。その役割は不明である。

一月二十四日

曇、夜雪、浅田タケ、上州より女学校に入学のため上京、午後、新島家に到着する。(L1717)

一月二十七日

同志社女学校において学校のために祈禱会を開く。(H1: 316, L1717)

一月二十九日

花岡山第五回記念会を同志社運動場で催す。男女両校生徒二百名が出席、午後五時すぎ終わる。新島

も出席する。(H1: 316, H3: 191, J15: 11)

一月

A・ハーディに手紙を書き、新任の京都府知事が新島に会いたいと言っていること、その際には京都における教育制度の改革案を出したいこと、私の目的は小学校の先生のために日曜学校を始めたいのです、と伝える。(H6: 176)

英文ノート Holland (阿蘭陀国) にひいて記す。「講義ノートか」(L931)

日本基督教伝道会社神戸集会所が開かれ、伝道者の月手当を五円増額することを決める。(L490)

二月五日

この頃、風邪を引いて「煖室ニ幽居仕居候」(H3: 191)

二月六日

北垣国道が新しい京都府知事として着任する。廻達は二月二十一日。(L1717)

二月七日

* 「四月、横村正直京都ヲ去リ、北垣□君之ニ代リ知事タリ」(全1:234)

熊本のア蘇谷に帰郷中の蔵原惟郭に発信、「当今才子学士乏しきにあらず、唯己を捨身を忘れ真実国を愛するの先導者ニ乏しき也小生之切ニ望む所へ他なし我輩兄弟之此大任ニ当リ此腐敗ニ赴く我悪風俗を挽回し之を改良して之をして真之文化ニ進ましむるにあり」(全3:120)

大阪教会に発信、来る九日の上代知新の按手礼式に出席するつもりでいたところ、「二三日前より少々風邪気味のうえ、持病のリューマチが出たので、宮川経輝を代わりに派遣する旨を通知する。」(全3:192, J71:44)

二月十日

津田仙よりこの日付で手紙が来る。(一)同志社出身の杉田、小崎、和田、上野らは日曜日毎に津田のところで礼拝を行っている (二)上野栄三郎と津田琴の婚約がほぼ整ったこと (三)小崎弘道も津田の縁類の女性と婚約がほぼまとまりかけていること (四)六合雑誌は大当たりであったこと、を知らせてくる。(T669)

二月十三日

京都第一公会において「十人ノ娘、用意ニ怠ル勿レ」と題して説教をする。(全2:32)

二月十四日

中村正直より、この日付で、知人の子息の同志社入学につき問い合わせてくる。十五日付も重ねて来信。(T670)

二月十九日

曇のち晴、同志社学術講演会が円山雙林寺文阿弥において開かれ、新島も「隠君子の出願」と題して演説する。(全1:371, E1717, J15:11)

二月二十七日

日曜日、この日の集会は別座・森田、小崎、本座・新島が務める。(E1717)

二月

Origin of the world. [説教稿か] に関するノートを作る。(E931)

三月五日

エリザベス・T・シーリー Mrs. J.H. Seelye 永眠。新島は七月十一日付でシーリー総長に弔慰の手紙を書く。(全6: 210, E17: 76)

三月十二日

速成神学科入学志願者の勧誘について、依頼状および志願者の心得を各教会の牧師・伝道師に送る。(全1: 19, 全3: 194)

三月十四日

京都府庁の書記官・尾越蕃輔より来信、明後十六日は在宅なので来訪差し支えなし、都合によって尾越の方から伺ってもよい、と伝えてくる。(F1580)

三月十九日

快晴、新島夫妻、両親、公義と同道して人力車に乗り、午前十時頃、円山の堀内写真店に撮影に行く。それより平野屋で昼食をとり、円山温泉から洛中の景色を一望、知恩院、祇園町を見物して帰宅する。彼岸の中日にあたり、人出多し。(E1717)

三月二十五日

英学校定期試験最終日、新島、同志社を視察に来た京都府庁吏員を案内する。(D1: 146)

三月二十七日

日曜日、集会において森田別座、新島本座を務める。(E1717)

三月二十九日

「大阪近辺へ兩三日遊行之由ニ而午前九時頃出立」する。(E1717)

三月三十一日

今村謙吉よりこの日付で「聖書売伝道受取報告」来る。(E506)

三月

J・H・シーリー教授著、小崎弘道訳『宗教要論全』(明治十四年五月刊)に序文を寄せる。〔明治十三年九月の項参照〕(全1: 457)

四月一日

快晴、先日撮影した写真の出来が悪いので、両親は八重夫人に伴われて円山へ撮りなおしに行く。

(E1717)

四月二日

曇のち雨、新島、西宮より昼ごろ帰宅する。夕方より大雨となる。(E1717)

四月三日 京都第二公会において「信仰」と題して説教を行う。この日の集会、脇座を森田・山崎、本座を新島

が務める。(金2:36, E1717)

四月七日 小崎弘道に手紙を書く。小崎の結婚式には「さしたる用向も無之、出京ハ仕兼候、兄之御婚姻之席ニ

出頭難成は遺憾なり」と雖、又不得止次第」と述べる。(金3:197)

四月十日 日本ハリストス正教会安中正教会堂設立。(F5:1103)

四月二十日 上京第二十二組松蔭町「新島家の隣地」の宅地百六十坪(地番一四一一二)を大沢善助より七十円で

買い取る。(E1709)

四月二十四日 晴、集会の脇座を森田、本座を新島が務める。(E1717)

岡山教会において「肉ニ播ケバ肉、霊ニ播ケバ霊」と題して説教を行う。(金2:42)

* この日、新島が京都、岡山のどちらにいたのか不明である。ただし新島がこの時期に岡山に行ったという記録は他に見当たらない。

四月二十七日 「新島民治が」丹波国桑田郡第三組大野村錫倉一番地の山林三町二反五畝を九百三十円で買い取る。

半金は新島襄より出す。(E1709)

四月三十日 明石の川本政之助に五月分の月手当八円を送る。(金3:198)

四月 同志社女学校の生徒に奨学金を与えるため女子教育社を創設、この日より発足する。(D1:316)

京都第二公会において「義人之祈」と題して説教を行う。(金2:44)

五月一日 新島とみ、第二公会においてゴードンより受洗する。同時受洗者は池袋清風、片桐清治、鎌田助ら。

(金2:570, J15:13)

五月六日 新島、第二公会において足立甚三郎、高野重吉の二名に洗礼を授ける。(L492: 569)
 五月九日 晴一時小雨、大沢善助の名義で買い求めた南側の空き地に第二公会堂の新築を始める。〔四月二十日の項参照〕(L1717)

北垣国道知事の着任に伴い、「諸事自由任地主義」となり、規制が緩和されたため、公会堂の建築に取りかかったもの。(L592)

五月十日 ジャパン・ミッション第九年会が神戸外国人居留地五十九番館で開かれる。議長W・W・カーティス。

十六日まで。新島は十二、十三日に出席する。(E1, E2-6)

五月十一日 姉の速水ときが下駄屋を開業するにつき、祝いとして金十円と玄米一俵を贈る。(L1717)

五月十四日 新島、山本覚馬と共に第一回京都教育会(上京川端丸太町迎賓館で開催)に出席する。(H11: 83)

五月十七日 晴、同志社の教員、生徒らによる耶蘇教大説教会が四条北側芝居場において催される。昼十一時より、

夜六時半よりの二回にわたって開かれ、立錫の余地もないほどの大入りとなる。新島も「人間の罪について」の演説をする。聴衆三千人。(L693, L1717, E8: 4, 18-14b, c)

五月十八日 日本基督伝道会社第四年会が新島宅および同志社英学校体操場で開かれる。新島は二十五番議員として出席する。(L491, L1717)

五月十九日 午前八時半より新島宅で小会議、午後は体操場で集会を開く。夜七時半より京都の信徒の依頼により勸奨会を催す。(L1717, 18-14d)

五月二十日 晴、日本基督伝道会社年会最終日、新島、京都区の委員に選ばれる。(L491, F2: 7, 18-14d)

午後五時すぎより伊勢時雄・山本峰の結婚式が新島宅で行われる。D・W・ラーネッド司式、両家の

知人、宣教師、同志社学生らが出席する。(E1717)

午後八時頃、同志社体操場において晩餐会を催し、祈禱を行う。(18-146)

五月二十六日

この朝、伊勢時雄夫妻、今治へ出発する。(E1717)

五月

第一公会(常盤井殿町北側D・W・ラーネッド宅)の会堂、竣工する。(F7:23)

六月一日

この朝、大試験の作文の題が「自重は立志の基」と決まり、鎌田助より新島に伝えられる。(15:14)

六月二日

曇、用談のため大阪に行き、夜十時頃帰宅する。(E1717)

六月三日

第二公会の上棟式が行われる。(E1717)

*「公会」がいつ「教会」と呼称を変更したのか、その時期は明確ではない。京都「第二公会録事」「公会記」を見る限り、明治十二年頃から混用が始まり、十四年まで続く。「第二公会録事」によれば、明治十四年六月以降「公会」の呼称は消え、「教会」と呼んでいる。とくに同録事の十月二十一日の項に「京都第二教会印」とあるからこの時期には「教会」の呼称が確定していたと考えてよい。以後、本年譜もこれに従う。

六月十一日

大阪大説教会が道頓堀の芝居で開かれるので、八重夫人を同伴して朝八時すぎ大阪に赴く。説教会は昼夜二回に分けて催され、新島が「道徳論」につき演説をしたほか、ゴードン、森田久万人、山崎為徳らも出演する。夜九時すぎ帰宅する。(E1717, F1:63)

六月十四日

仏教徒ら、東京交詢社社員らと京都四条金蓮寺においてキリスト教徒を攻撃する演説会を開く。(E1717)

六月十六日

丹波亀岡の堀金太郎に発信、今治教会の開堂式に出席しなければならないので、貴会には行けない、と述べる。(43:199)

六月十八日

土曜日、去る十四日に開かれた交詢社社員らによる排耶演説会に反駁する演説会が円山雙林寺において開催され、新島も出席する。森田、市原、宮川、山崎らが演説、聴衆は室外に溢れ、縁側を踏み抜くほどの大入りであった。帰途、五年生全員および小野英二郎、鎌田助、村上直次郎らを自宅に招いて夕食をふるまう。(E1717, J15: 15)

六月十九日

京都第一教会に三教会信徒が集会し、聖晩餐を守る。新島「人ヲ漁スルノ主意」と題して説教をする。(全2: 50, 571, E1717)

六月二十日

雨のち晴、朝、神戸に行き、夜に入り帰宅する。(E1717)

六月二十一日

女学校の試験終わる。(E1717)

六月二十二日

英学校期末試験が行われ、新島、(室内)体操場において英語および日本語による演説、作文のテストをする。京都府庁の吏員が視察する。(D1: 148)

二十三日も「試験有之」(E1717)

六月二十四日

英学校第二回卒業式が体操場で行われ、鎌田助、村上直次郎、小崎成章ら十八名が卒業。新島が式辞を述べる。(全1: 234, 317, J15: 15)

六月二十八日

亀岡において耶蘇教大説教会が開かれ、新島夫妻、横井みやらが出席する。嵐山まで人力車、それより舟に乗る「?」。新島は「基督教広布論」の演説をする。聴衆千三百名余。(E1717, 18-14e, J68: 66)

六月二十九日

朝、新島夫妻、横井みや丹波より帰る。午前十一時頃帰宅。(E1717)

六月

小崎弘道に発信、関東に手を広げるため速成「神学科」を東京に設けることは必要だとは思いますが、宣

教師らと相談しなければならぬこと、また月手当については桂時亮、岡田松生から手紙をもらい事情がよくわかったので、将来不都合が起こらないようにしたい、と伝える。(43:129)

「六月初メテ京都四条北ノ芝居ニ於テ宗教演説ヲ催ス、是ヲ京師演説ノ初メトス」〔五月十七日の項参照〕(41:234)

七月一日 今治に行くため八重夫人、横井みや、女学校生徒一人を連れ、朝八時すぎ京都を出発、大阪川口に一泊する。(45:119, E1717)

七月二日 早朝、船で大阪を発ち、深夜二時ごろ今治に到着する。(45:119)

七月三日 今治教会新築会堂の開堂式が午前九時より開かれる。新島夫妻、松山高吉、スタークウエザー、アッキンソン、タルカットらが出席、祝辞を述べる。夜の親睦会で六百人の聴衆を前に説教をする。(45:119, F1:65, 18-14f, J40:193)

5:120, 18-14f, J40:193)

七月四日 松山高吉らと共に午後四時今治を出帆、八時頃、三ツ浜に到着、人力車で松山に行く。夫人は今治に滞在する。(45:119, J40:193)

七月五日 松山において午後二時と六時の二回にわたり「自由論」(昼)、「基督伝播論」(夜)の説教を行う。その他の講師は松山、上代、アッキンソン、聴衆は昼七百名、夜千二、三百名。道後温泉に行く。(45:120, 18-14f, J40:193)

5:120, 18-14f, J40:193)

七月六日 道後温泉に行き、午後は来訪者と会う。(45:120, J40:193)

七月七日 午後一時、松山を出発、六時発の新八幡丸で三ツ浜を出航する。今治で八重夫人と合流、大阪に向かう。(45:120, J40:193)

七月八日

午後四時、大阪に到着する。(全5:120)

小崎弘道に発信、小崎の弟、継憲・成章への学資援助の要請につき「小生之世話致候者ハ他ニモ有之……御氣之毒ニ候得共御断」「君ニモ小生を不人情と思召かは不存申候得共、小生ニモ力不及なり」

(全3:202)

七月九日

新島夫妻、今治より午後帰宅する。(全3:203, E1717)

七月十一日

近江八幡で大説教会を開催したいと希望してきた鎌田助に発信、自分も今治から帰ったばかりで、さらに神戸、岸和田へ行く用事があり、宣教師らも滋賀県へ行く免状を持ち合わせておらず、かつ病人も多いので、今回は見合わせるよう勧告する。(全3:203)

岸和田の山岡尹方に発信、今治よりの帰途、岸和田へ立ち寄るつもりだったが、疲労のあまりそのまま帰京したこと、しかし約束なので、来る十三日、神戸に行った帰路、立ち寄りたいと伝える。(全3:205)

川本政之助に発信、去る六月十日に死亡した降屋盛基の後任として明石に留まり、伝道することに賛成する。(全3:204)

シーリー夫人の永眠をアーモストの生徒から聞き、シーリー総長に哀悼の意を表す。(全6:210)

七月十三日

朝八時、神戸へ向かう。松山高吉宅で邦語神学校設立につき松山、伊勢、金森らと相談。夕暮れ神戸を発ち、六甲山を山越えして有馬へ行く。(全5:120, J40:193)

七月十四日

有馬で宮川、浮田、山崎に会い、さらにベリー、デフォレスト、ギュリックらと協議、事整う。

夜、土佐立志社の古沢滋、竹内綱の二人に同地の二階坊で会い、高知に学校を設立するよう依頼を受

ける。また吉田作弥を高知伝道に派遣することを約束する。大阪に帰る。(全5:120, 上498, 上1717, 上140:193)

七月十五日

早朝、難波新地自由軒より人力車を雇い、岸和田へ行く。夜の演説会において「神を拝すべきこと」について話をする。(全5:121)

七月十六日

夜「基督の愛」について演説する。十五、六日の両日、山本清、田中次郎ら十八名の人々に面会する。(全5:121)

七月十八日

雨時々曇、午後二時半前に帰宅する。神戸→有馬→岸和田を廻っての帰宅である。(上1717)

七月二十日

滋賀県伝道中の小崎成章、亀山昇に発信、八日市で大演説会を開くのはとにかく、長浜・彦根に出張することは計算に入れていなかったので、旅費の二割を地元負担にしてもらえないだろうか、八日市の須田明忠や彦根・長浜の信者と相談してほしい、と書き送る。(全3:206)

七月二十一日

この日、岸和田の信徒より伝道への礼状を受け取り、折り返し激励の手紙を出す。(全3:208)
晴、朝八時、父親と共に平等院を見物のため宇治へ行く。親子水入らずの一日を過ごし、夕方五時前に帰宅する。(上1717)

七月二十三日

晴、休暇を過ぎため、朝八時、上嵯峨村常寂寺〔?〕へ出発する。(上1717)

七月二十六日

明石の川本政之助に月手当として八円を送る。これは去る四月三十日に郵送した分が届かず、回送されてきたものを改めて送ったもの。(全3:209)

七月二十八日

午前中降雷雨鳴、午後三時すぎ嵯峨より一時帰宅する。(上1717)

基督教大演説会を丹波亀岡で開催、新島もゴードン、堀金太郎、山崎為徳、湯浅吉郎と共に出演する。聴衆千二百名に上る。(F1:84)

* 聴衆約一千名。(J71:46)

七月二十九日

熊本の下村孝太郎、坂井楨甫に八、九月分の手当四十六円を送り「御地之六ヶ敷事ハ誰も承知之事なれば決而御心痛ハ不及と存候」と激励する。(全3:113)

山崎為徳、肺結核のため京都病院へ入院する。(全1:234)

八月一日

W・T・セイヴォリー「元ベルリン号」船長に帰国後初めて手紙を書く。あるイギリス婦人「イザベラ・バード」が書いた記事によって彼が気を悪くしていることに関し、釈明の手紙を送る。(全6:212) 鎌田助、新島を訪問する。鎌田に結核の兆しのあることを聞き、近江八幡への夏期伝道を中止するよう勧めぬ。(J15:16)

八月十日

八月十二日

嵯峨で休養中不快となり、帰宅していたところ全快につき、朝八時、比叡山のテント村へ行く。(J17:1717)

八月十八日

この朝、第二教会の用件で比叡山より下山、帰宅する。(J17:17)

八月二十二日

山崎為徳重病につき入院中のところ、看護が行き届かないので、この日夕暮れ、新島宅に引き取る。

山崎の看護は生徒が交代であたる。(J17:17)

今治より伊勢時雄が来訪する。(J17:17)

八月二十四日

大阪のテイラー医師、山崎為徳を診察「凌方無之趣被申聞候」(J17:17)

八月二十六日

山崎為徳の父親、午後、水沢より新島宅に着く。九月六日まで滞在。金森通倫、堀貞一「金太郎」来

八月二十七日
土曜日、朝七時すぎ比叡山に向かう。(E1717)

八月二十八日
熊本の徳富猪一郎に発信、「小生モ此五月来脳病ノ為ニ苦メラレ格別気分モ不振候処、又々、山崎兄ノ為ニ種々心配セン故カ何分頭痛致シ困却ニ付、不得止此三四日前ヨリ叡山ノ北谷ニ登リ可養仕居候」と述べる。(全3: 211)

九月二日
比叡山テント村より午後五時すぎ帰宅する。(E1717)

九月六日
この朝、山崎為徳の父親、東京へ帰る。(E1717)

九月十三日
近畿、中部地方に風水害。(H14: 173)

九月十七日
晴、八重夫人、神戸へ行く。(E1717)

海老名弾正、女学校に入学する黒川常を伴い、安中より来る。(E1717)

徳富猪一郎に発信、「御申越之大久保某之為ニ余裕無之候間、不得止事当年ハ御断申上候」と述べる。(全3: 212)

九月十八日
日曜日、まだ会堂開きはしていないが、隠居宅手狭につき、第二教会の礼拝を新会堂で行う。(E1717)

九月十九日
曇時々小雨、八重夫人、山崎為徳の看病のため古木の母親を伴い神戸より帰宅する。山崎為徳の母親来訪する。(E1717)

九月二十三日
金曜日、終日小雨、夜、休暇中地方伝道に出かけていた生徒たちの報告会が開かれる。(E1717)

九月三十日
第二教会の執事に湯浅吉郎、池袋清風、書記に鎌田助を選ぶ。(全2: 572)

九月
福沢諭吉『時事小言』を刊行。その中で「外教の蔓延を防ぐ事」について記す。(J13: 287)

十月一日 朝七時すぎ神戸へ行き、夜に入って帰宅する。(E1717)

十月二日 「第二教会の？」安息日学校の総理に市原盛宏を選び、教員数名を選任して、その教授法を改良する。(全2:571)

十月九日 日曜日、午前九時より組合稽古「？」あり、ゴードンより聖書講義、午後二時過ぎより京都三教会の信徒ら第二教会に集まって晚餐礼を守る。新島、説教をする。(全2:571, E1717)

十月十一日 海老名弾正、安中へ帰るため挨拶に来る。(E1717)

川本政之助に発信、弟「松尾音次郎」の学資につき「少々位なら随分御加勢申而も不苦候得共、唯今手一杯ニ而三円ハ出す事不叶」家の方で都合されたい、と述べる。(全3:214)

十月十四日 午前八時頃、梶尾へ行く。(E1717)

大阪の天満教会において古木虎三郎の按手礼を行うにつき、京都第二教会は新島を代表として派遣することに決める。(全2:571)

十月十五日 雨のち晴、梶尾より正午、帰宅する。(E1717)

十月十九日 四、五日他出「場所不明」のところ、この日帰京する。(全3:215)

大和大滝村の土倉庄三郎、子息を伴って、立憲政党新聞の古沢滋と共に新島宅を訪れ、子息二人の教育を依頼する。その際、古沢は大学の必要を説き、新島も同志社における私立大学の計画を明らかにしたところ、土倉は応分の協力を約束する。(全1:185)

十月二十一日 岸和田の山岡尹方に発信、子息・邦三郎の同志社入学については、現在在学しているバラの学校の添書があれば、両校の友誼を破らないためにも好都合だと知らせる。(全3:215)

十月二十二日

京都第二教会の開堂式を行う。新島宅南隣の上京第二十二組寺町通丸太町上ル一四〇番地に新築落成したもので、市原盛宏の司会により挙行される。まず新島が新築入費報告を行い、ゴードンの祈禱、ラーネッドの祝辞、高松ツネ、片桐清治、木村経夫の祝文、宮川経輝の祝辞、新原俊秀の祝文があり、最後に新島が祝禱を捧げた。その後、一同へ菓子供の供応があり、十一時半ごろ散会した。当日集まった人々は京都三教会の信徒、同志社生徒あわせて約二百余名であった。(全2: 572, E932, E1717)

円山雙林寺文阿弥において同志社学術演説会を催す。(E1717, 18-14g)

十月二十五日

朝、一番列車で神戸へ行き、午後九時ごろ帰宅する。(E1717)

十月二十六日

八日市伝道のため、午後四時ごろ出発する。二、三日滞在の予定。(E1717)

十月二十七日

東京大学に在学中の大西祝に会い、ロシア国高等学校の教科表について調査を依頼する。(T317)

十月二十九日

午前中雨、午後になって帰宅する。大西祝よりこの日付で返事が来る。(E1717, T317)

十一月二日

晴、朝六時、大阪へ行く。天満教会の古木虎三郎の按手礼に出席し、祝辞を述べる。(E1717, 18-14h)

h)

十一月三日

晴、天長節につき休日、夜、第三教会の主催により市内の信徒、同志社の生徒ら上賀茂神社へ親睦の

遊歩をする。新島は、午後一時前、大阪より帰宅し、ただちに上賀茂神社へ行く。(全2: 572, E1717)

十一月八日

朝九時、大阪へ行く。(E1717)

十一月九日

山崎為徳、午前六時二十分永眠。大阪にいる新島に電報を打ち、帰宅を待って午後四時すぎ納棺を行

う。(全2: 494, 572, E1717)

* (全1: 317) では十一月八日死亡、九日葬儀となっている。

十一月十日

山崎為徳の葬儀が京都第二教会において午後二時より行われる。新島が司式、履歴を朗読。式後、新島、同志社教職員・生徒に送られて黒谷（金戒光明寺内）の西雲院に埋葬する。（全2：572, E1717, 18-141）

十一月十五日

山崎為徳の母親帰郷につき、七条停車場まで八重夫人が見送る。（E1717）

十一月十六日

大阪教会の牧師、上代知新の辞任に関する会議に出席、議長となる。協議の結果、辞任を認める。

（18-141）

十一月十七日

土倉庄三郎に宛て子息辰二郎、亀三郎の近況につき報告する。（全4：387）

十一月十九日

土曜日、曇、夜に入り雨、同志社生徒ら兎狩りに行く。（E1717）

十一月二十五日

同志社学術演説会が開かれ、ラーネッド、蔵原らと共に新島も「人種改良論」と題して演説、一夫一婦について主張する。聴衆四百人。「場所不明」（J15：18, J69：801）

第二教会は毎月第四金曜日ごとに講習会を開き、会員の親睦をはかることにする。（全2：573）

十一月二十六日

円山文阿弥において演説会が開かれる。（E1717）

十一月二十七日

第二教会において「真正の快楽」と題して説教を行う。（全2：57）

十一月三十日

京都府学務課員、同志社を視察する。（D1：148）

十一月

第五寮落成する。（全1：164, 168）

十二月二日

朝六時、神戸へ行く。午後十時、帰宅する。（E1717）

十二月三日

土曜日、新島の両親の結婚五十一年を祝い、子供・親戚・知人ら三十人近くが集まり、祝福する。（E1717）

十二月四日 午前中稽古集会、午後二時より新町の第三教会において晩餐式を行う。(E1717)

十二月八日 アメリカでは金婚式は稀なこととしてお祝いをするというので、ラーネッド、ゴードンら宣教師とその家族を招き、ご馳走をする。(E1717)

十二月二十一日 J・C・ベリーに手紙を書く。大村「達斎」医師に関するもの。(E1185)

十二月二十八日 安中の根岸より無尽の金五十円を為替で送ってくる。『民治宛か』(E1717)

十二月二十九日 餅搗き、同志社の教員・生徒らを招く。速水家に歳暮を贈る。(E1717)

十二月 校内に礼拝堂が完成する。木造平屋建。(H1:164)

* 「明治十五年に、最初の公会堂が建築されましたが……」(J69:18)「十五年の春、三十坪の礼拝堂^{サヤスル}が、中央構内の南の方、東より約三分の一の地点に、新築される……」(D11:156)とあるので、十五年春から使用され始めたと思われる。なお、この公会堂はのちに移築されて同志社予備校の教室「現在の大学会館の位置」として使用、さらに解体後、その材木で事務室が建てられた。

明治十五年（一八八二）四十歳

一月五日

日本基督伝道会社臨時議会在神戸で開かれ、新島も出席する。十日まで。決議事項は次の通り、
(一)伝道者の資格を決めること (二)邦語神学校設立のこと (三)著書・出版のこと。

なお、京都第二教会からは市原盛宏が議員として出席した。(全2:573, E494, F2:8)

* 新島は「神戸ニ而……五日より九日迄相懸り、其より直ニ他所ニ趣き……」と記す。(全3:216)

神戸多聞教会において杉浦義一の按手礼式が行われ、新島は牧師への勧めを述べる。(全2:573)

* (F27-16・17:274, I8-15a) 日は一月六日となる。

一月六日

D・C・グリーンの雇用願、寄留願を京都府に提出する。二月六日許可。(D1:80)

* 一月十八日出願。(全1:318)

一月九日

大阪心斎橋通高麗橋南の油屋森田耕造方に一泊する。(全5:122)

一月十日

土倉庄三郎が来阪中と聞いて古沢を訪ね、次いで新町南通二丁目沙場南小泉角兵衛方で土倉の子供、鶴松に会う。土倉が来阪していないこと、近日、上京することを聞き、急遽、彼に面会するため、朝十時、森田と共に吉野大滝村へ向かう。平野・古市・春ヶ野・竹内峠・長尾を経て、同夜は御所に泊まる。(全5:122)

一月十一日

御所より大滝に向かう。途中、大風雪にあう。下市・宮滝・五社峠を経て、午後四時頃、大滝村の土倉の家にたどり着く。中島信行・岡崎高厚らの先客があり、この日は土倉に泊まる。(全5:122)

一月十二日

この夜、土倉に大学設立計画を話し、法学科設置のため五千円寄付の約束を得る。夜、人々を集めて演説をする。この日より三日間連続で「教育の大切な事」「宗教に文明の關係ある事」「日曜日の説」。(全5:123)

一月十三日

ボストンのJ・M・シアーズよりこの日付で来信、建築されたチャペルの内外観の写真を送ってほしいと、ハーディの消息を伝えてくる。(F2409)

一月十五日

宮滝村から下田守孝が訪ねてくる。(全5:124)

一月十六日

大滝村を出発、人力車を乗り継いで宮滝・上市・檜柿本・芦原・土佐・大和高田・国分・平野を経て大阪に帰る。(全5:124)

一月十七日

夜に入り自宅に帰る。(全3:216)

一月十九日

熊本の徳富猪一郎に発信、(一)封筒裏に初めて「京都寺町通丸太町上ル町百四拾番地」の住所印判を使用する(二)「小生之兄に望む所ハ兄之一大国器トナラン事也……兄ヨ勉メヤ、今ヤ男児ノ為スアルノ期ナリ、此期失フベカラス……」と記す(三)帰郷している下村孝太郎を援助するように頼む。(全5:216)

一月二十九日

第二教会において「改新の説」と題して説教を行う。(全2:60)

一月三十一日

滋賀県長浜に行く。大津に行くが便船なく、午後九時まで待つて金亀丸に乗船、深夜一時に長浜に着、船町の中村良造方に宿泊する。(全5:125)

一月一日

錦町の藤井を訪問する。(全5:125)

二月五日

第一教会で聖晚餐礼が行われ、グリーンが司礼、ゴードンが説教をする。この日、新島より受洗した

もの大沢みつら九名、そのうち新原俊秀・岡本磯雄・滝能武太・山中百・原忠美・沢山雄之助・山田安路は第二教会に入る。(42:573)

二月二十五日 浜岡光哲より、この日付の手紙で、共有山地の売却につき相談してくる。(F68)

大阪府下摂津国土室村の長屋景章の招きにより、雉を撃ちに行くが、獲物なし。同家に一泊し、大阪の森田の知人、生田秀太郎・広之助兄弟、その従兄の安田源之助らに会う。(45:125)

三月六日

同志社を退学して帰郷する蔵原惟郭に一書を送る。「君ノ性タル過激ニシテ恰モ烈火噴水ノ如シ、君ニシテ之ニ加フルニ沈思熟慮ヲ以テセサレハ、他日事ヲ為スノ日ニ於テ或ハ大ニ誤ル所アラシカ……大器晩成学ヲ脩スル豈ニ今日ニ限ラン鉄ヲ養ヒ而後再挙スヘシ、再挙ナラスンハ三挙アルベシ、百折不屈ハ男子ノ常豈君ノ義烈ノ志操ヲシテ空ク地ニ落チシムルニ忍ビンヤ、君ヨ行ケ、又再会ノ期アルベシ……」(43:218)

三月七日

海老名弾正よりこの日付で来信、下村孝太郎に関し長崎のスタウトに手紙を送るように頼む。また新島が両親を軽んじていると忠告する。(F69)

三月十八日

大阪島の内教会の設立式と会堂の捧堂式に出席し、聖晩餐の司式をする。仮牧師は上原方立。(F1:68, 18—15b)

三月十九日

島の内教会の新築会堂において午後一時半より説教会が開かれ、新島は説教の後、五人に洗礼を授けらる。(18—15b)

三月二十一日

上京第十組御所八幡町的一条家除地五百四十一坪九合四勺の借用願を出す。四月十二日に許可される。(41:318)

三月三十一日

鎌田助ら神学科生徒代表四名連署して、神学科目につき「二年ヲ以テ修ムルニ容易ナル学課ヲ三年ニ延期スルトハ尤モ疑惑ナキ能ハサル義」「……当今ノ日課ヲ改良シ……二年ニシテ先般^{せんぱん}預定ノ神学科ヲ卒業スルカ或ハ三年ヲ以テ尚ホ一層学力ヲ蓄フルニ足ルノ学課ヲ増加スルカ其ノ一ヲ取」られたい、との願書を提出する。(D1: 286)

四月一日

新島宅で宮川経輝と朽木次子「のち宮川夫人」を引き合わせる。(J71: 48)

四月六日

午後三時五十五分の汽車で大阪に行く。淀屋橋南詰西、北川芳助方に一泊する。(全5: 126, 上942)

四月七日

快晴、早朝テイラー医師を訪ねて診察を受け、前神醇一へ行き三週間分の薬をもらう。午後、神戸へ行き、松山高吉に借りた鉄砲を返すため相生町三丁目の高橋熊七方を訪れたところ、播州高砂沖での遊猟を勧められ、猟友を求めて交渉するが、みな辞退する。(全5: 126)

四月八日

朝、神戸を出発し、三ノ谷の平敦盛の墓に参り、明石で昼食をする。町はずれの池でケリを撃つが当たらず、さらに加古川を経て、午後三時ごろ高砂に着く。(全5: 127, 上942)

四月九日

安息日。

四月十日

小舟を雇ってケリ撃ちをするが、成果なし。(全5: 128)

四月十一日

高砂より正午前の汽船に乗り、午後三時、兵庫に着く。神戸で松山高吉・今村謙吉に会い板垣退助が岐阜で遭難したことを聞き、大阪に立ち寄らず帰京する。(全5: 128)

四月十七日

板垣退助が彦根より貞崇丸で大阪に来ることを聞き、正午、大津石場の播磨屋まで出迎える。午後三時十五分、板垣と大津発の汽車に同乗して京都まで帰る。(全5: 128)

四月十九日

午後三時二十五分に七条駅発、大阪に板垣を見舞う。淀屋橋の北川方に宿泊、夜、善積順藏・藤井某

を訪問する。(全5: 129)

四月二十一日

早朝、古沢滋を訪問し、同志社大学設立の主意書「の執筆?」を依頼する。その後、今橋一丁目の真島方に滞在中の板垣退助を見舞う。板垣に牛乳と鶏卵で飲み物を作り喜ばれる。小室信夫も来て岐阜での板垣遭難のこと、宗教のこと等の話をする。

午前十時、大阪川口より金聖丸という小蒸汽船に乗り明石に向かう。明石港でハシケに乗り移る際、大波のため遭難しかかる。人力車で加古川を経て姫路に着く。富中町の旅館に入る。加古川よりの途中で同志社を病氣中退した向井某に会う。(全5: 129)

四月二十二日

朝六時、姫路を出発、人力車で十一里半を走り、午後三時頃ようやく生野銀山に着く。塗師屋旅館に荷物を預け、銀鉱の見物に行くが、おりから山火事の後始末のため入坑できず、説明のみを聞く。それよりさらに竹田まで足を伸ばして宮津屋柳吉方に投宿する。(全5: 131)

四月二十三日

安息日、戸長の馬場尚太郎の家を訪ね、土地の事情を聞く。馬場精三郎の父親が夜分来訪する。(全5: 133)

四月二十四日

朝六時に竹田を出発し、豊岡を経て城崎湯島に到着、油筒屋西村六右衛門方に一泊する。(全5: 134)

四月二十五日

朝六時、城崎を発ち、久美浜・野中・二箇・大野を経て岩滝に至る。そこから船で宮津に渡り本町通の旅館西川に泊まる。途中、天橋立の景色を楽しみ、天橋義塾についても聞く。中国人馮澤雪卿と同宿する。(全5: 135)

四月二十六日

宮津を発ち福知山に向かう。途中、力石と内宮の間で案内人を雇い、大江山に登り、鬼の窟を見物する。福知山本通りの大勝に一泊する。同所で中島甚右衛門・足立甚三郎に会う。(全5: 139)

高梁教会設立。(F16:6, F17:14)

四月二十七日 峠の悪路に阻まれて亀岡まで行けず、八木に一泊する。(45:140)

四月二十八日 亀岡の村上を訪ねた後、京都に午後三時すぎ到着する。(45:140)

四月三十日 南山義塾の開校式に出席する。(17)

五月三日 第二教会において祈禱会が催され、新島より板垣退助の人物についての感話がある。(J15:21)

五月九日 ジャパン・ミッション第十年会が神戸外国人居留地五十九番館で開かれる。十五日まで。(E1)

五月十二日 同志社の朝礼(チャペル)において新島はフランスと米國、パリとボストンの比較論を述べる。(J15:22)

五月十七日 (第三水曜日) 日本基督伝道会社第五年会が神戸教会で開かれる。委員として前年度の会計報告をす

る。委員に再選される。(L496, F2:8, 18-15c)

五月二十日 大阪でジョセフ・クックの演説会が催され、新島はそれにさき立ちクックの紹介をする。(18-15d)

新潟県与板の三輪振二郎に発信、第二教会開堂式のこと、生徒の信仰の状況について知らせる。「敝社ニ而最早法学医学部を設置スル事ヲ企図セリ乍去資金ノナキニハ困却仕申ナリ」(43:219)

五月二十六日 新京極劇場においてジョセフ・クックの演説会が開かれる。「日本富強之基礎」と題し、キリスト教が国家に必要不可欠なことを述べる。聴衆千五百余人。(43:574)

晩春、A・ハーディに手紙を書く。休養のため中国へ行くよう勧められたが、金銭的に苦しんでいる日本の兄弟のことを考えると行くわけにいかない、と伝える——働き過ぎて、もう読み書きの力がなくなってしまった。キリスト教信者の友人に会わないところへ行って、自分の気持ちを確かめたい、

六月四日

とて書へ。(全6:214, 全10:260)

京都三教会の信徒ら第三教会に集まり、聖晚餐(グリーンの説教、新島の司礼)を守る。永年、新島の聖書指導を受けてきた滋賀県大野村の加村春斎(七十三歳)がこの日受洗を申し出、急遽、新島宅において委員五名による尋問会を開き、即日授洗することに決す。この日、グリーンより受洗したものは加村はか村上直次郎・東正義・白石邑治・速水梅子二十名。(全2:574, 18-19c)

六月七日

大阪基督教徒青年会創立。(初代会長・宮川経輝)(F20:39)

晴、この日より新しい日記帳を使い始める。大村「達斎」と医学校寄付金の相談をする。山中茂より来状。福土成豊より来信、北海道の地図を送ってくる。原田助「鎌田助」はか熊本人一名来訪。備中笠岡の柚木吉郎より伝道者の派遣を要請してくる。(全5:179)

六月八日

朝、同志社において「日本青年教育中古人ノ語録ニ注意スヘク、且教育ノ基礎ヲ立ツルニ誤ルベカラサルヲ論セリ」。同志社規則改正について相談する。(全5:179)

六月九日

午前、綴喜郡の伊東経夫が来訪する。(全5:179)

雨、彦根教会の本間重慶牧師の辞任問題につき会議を開くため、大阪のW・W・カーティスに手紙を送って相談する。彦根にもこのことを通知する。笠岡の柚木吉郎、大阪の森田耕造に返書を出す。神戸の高橋熊七にピストルのことにつき手紙を出す。(全5:179)

六月十日

午後、綱島「佳吉」と黒谷へ行き、伝道の相談をする。夜七時半より女学校で会議を開く。新島はじめ宣教師、女子教員、加藤勇次郎らが出席、規則改正について協議するが、議事紛糾、加藤も辞任を申し出るなど「困却ノ相談トナレリ」(全5:180)

六月十一日

A・ハーディに発信、また「在米の？」赤峰瀬一郎より来信。(45:180)

日曜日、雨、大阪のカーティスより、本間重慶のことにつき、彦根から招待されれば行く旨の返事が来る。ただちに彦根に連絡し、招待状を送るように伝える。(45:180)

和歌山の近藤美より子息の入学について問い合わせがくる。盛岡の堀内政固が教育視察の途次来訪する。新潟のバーム宣教医 Theodore A. Palm [Edinburgh Medical Mission] よりパンフレットを送付してくる。(45:180)

六月十二日

不破彦磨が洋行するにつき意見を求めてきたので、その返事をする。徳富、近藤美にも返書を出す。大阪の古木虎三郎より四条東洞院の売地について知らせてくる。(45:181)

六月十三日

長浜の藤井の子息来訪、午後、同伴して盲啞院に行き、女生徒の入学について尋ねる。(45:181)

六月十四日

朝十時すぎ加藤織太郎の招待で彦根に行く。午後三時すぎ松原(彦根)に到着、上本町伏木方に宿を取り、ただちに本間宅へ行き牧師辞任について事情を聞く。加藤・中島・樋口ら同地の信徒からも意見を聞く。(45:140, 181)

東京の和田正幾より南山義塾の教員就任を断ってくる。(45:181)

六月十五日

高梁の上代知新より京都の盲啞院につき問い合わせてきたので、返書を送る。(45:140, 181)
病床の樋口三郎を見舞う。午後二時すぎ松原より長浜へ行き西村と藤井に会う。本間にもう一度彦根で牧師を続けることを提案、同意を得る。夜の集会で演説する。(45:140, 181)

六月十六日

朝、蒸気船で彦根に帰る。夜、集会を開き、本間の留任を決める。(45:182)

六月十七日

彦根九時三十分→大津十二時三十分→京都三時。J・D・デイヴィスより来信。(45:145, 182)

六月十八日

日曜日、同志社の朝礼で新島は「基督教ト国家ノ関係」について講話をする。(J15:22)
留守中、美作落合の堀俊造の添書を持って木村亦七が来訪する。備中の柴原宗助より手紙が来る。

(全5:182)

六月十九日

松山「高吉か」が来て宇野「作弥」の進退につき相談し、津田仙に問い合わせるよう頼まれる。土倉夫妻、ルーミス来訪。夜、土倉を訪問する。(全5:182)

六月二十日

土倉庄三郎の家族を昼食に招待する。津田、柚木、柴原、加藤寿、須田、カーティスに手紙を出す。
(全5:182)

六月二十二日

午後、グリーンに会い、クック宛の手紙の主意について弁明する。邦語神学校の規則について相談する。
(全5:183)

六月二十三日

彦根の樋口三郎の計報くる。土倉庄三郎離京。(全5:183)

六月二十五日

第二教会において「ヤコブの一生」と題して説教を行う。(全2:67, 全5:183)

六月二十六日

快晴、卒業証書の印刷(女学校八枚、男学校十枚)を新報社に託す。(全5:183)

夜に入り熊本より徳富猪一郎が来訪、泊まる。(全5:183)

宿泊中のある夜半、新島は徳富の枕元に行き、聖書を示して「是非この所を一読して然る後床に就いて貰い度い」と言う。(J76:160)

六月二十九日

同志社女学校第一回卒業式が行われ、五名の卒業生に、一言尚貴千金、万語尚却卑如瓦石と餞の言葉を贈る。(全1:22)

六月三十日

英学校卒業式。(全1:164, 18-15e)

夏、同志社神学生・竹原義久を福井伝道に派遣のため、同地の信徒に対し依頼状を出す。(43:228)
夕方、原田助来訪。大学設立の見込み、政治・思想について八時半頃まで話をする。(115:25)

七月三日

午後七時すぎ、徳富猪一郎、湯浅吉郎、奥亀太郎、保坂七之介、伊勢時雄と共に夕食を済ませ、七条停車場より中仙道〔徒歩〕旅行に出発する。九時頃、大津に着き、松実丸〔徳富は昌宝丸と記す〕に乗り、米原に向かう。(45:145, 114:127)

七月四日

晴、夜明けに米原に上陸→醒ヶ井→柏原(朝食)→不破関→関ヶ原(恵比寿屋で昼食、徳富と湯浅は二時ごろ出発、他の五名は人力車)→赤坂→美江寺(えひ屋泊)(45:145, 114:127)
美江寺→加納→鶴沼→太田(昼食)→大湫(泊)(45:147)

七月六日

大湫→中津川(森孫右衛門方、天皇御泊の部屋で昼食、新島・伊勢乗馬)→妻籠(久保田方泊)(45:148)

七月七日

妻籠(新島・保坂乗馬)→野尻(人力車)→須原(桜屋で昼食)→立町(伊勢人力車)→小野の滝→寝醒の床(蕎麦食い競争、新島八杯)→上松→福島(田中宗兵衛方泊)(45:148)

福島(宿)徳富・湯浅の二人が入浴のため浴室に入ったところ、すでに新島が入っており、二人とも部屋に逃げ帰る。(45:155)

七月八日

木曾福島→藪原→鳥居峠→奈良井→賛川(奥屋で昼食)→本山(馬車一時間半)→塩尻→塩尻峠→下諏訪(亀屋泊)(45:150)

七月九日

日曜日、諏訪湖岸を散策、うなぎの美味なことに満足する。(45:151)
下諏訪(一里ほど歩いて伊勢と共に『荒神』に乗る)→和田(昼食、人力車五台)→長瀬(泊)

七月十日

(全5:151)
 長瀬——田中(馬車)——小諸(馬車)——軽井沢(蕎麦を食う、伊勢と荒神に乗る)——碓氷峠
 →坂本(馬車)——安中に夜八時到着。(全5:152)

八重夫人らに迎えられて湯浅治郎宅に泊まる。同行した徳富らは山田屋に泊まる。新島は旅行中に板垣退助宛の添書を徳富に渡す。八重夫人は伊勢峰、江場かねを同伴して神戸より海路、横浜を経由して安中に先着していた。(全5:152, 1749)

七月十二日

安中滞在中、知人に会う。植栗義達の家をも訪う。(全5:152, 1749)

七月十四日

安中養蚕室(教会)において演説会を開く。新島「文明ヲ組成スルノ四大元素」ほか奥亀太郎、森田寿三郎、渥美貞幹らが弁士、聴衆二百人。(全1:387, 全5:153, F5:885)

七月十五日

原市で演説会を開く。新島「地方教育論」ほか前日のメンバーに杉田勇次郎が加わる。聴衆六、七百人。(全1:408, 全5:153, F5:885)

七月十六日

安息日、安中養蚕室でガラテヤ書四章について説教し、種を播くことについて説く。また杉田勇次郎の説教を聴く。聴衆二百人。(全1:408, 全5:153, F5:885, 18—15f)

早朝、植村新次を連れ、鷲宮の佐藤種五郎宅に行き、前日より来ている中島浅五郎、植栗義達ら親戚立ち会いの下に新次の離縁について相談し、双方合意に達す。(全5:153)

夜、松井田の養蚕所で演説する。弁士は新島、奥、森田、湯浅で、小学校教員も来て傾聴する。聴衆四、五百人。(全5:153, 1942, 1752)

七月十八日

新島夫妻は伊勢時雄夫妻を同道して安中を出発、会津若松に向かう。午前十一時馬車で出発、高崎で

乗り換え、倉賀野、玉村を経て木崎に至り、一泊する。(全3:222, 全5:154, 上1749)

* 伊勢峰が同行したことについてふれていないが、七月十一日、九月四日の項に従い、伊勢「夫妻」とした。

七月十九日

朝五時半出発、木崎→太田(馬車)→佐野(馬車)→栃木(昼食、馬車)→鹿沼(中野屋仲左衛門泊)(全5:154)

七月二十日

鹿沼(人力車)→今市(昼食)→日光着(午後二時頃)、ただちに案内人を頼んで東照宮を見物する。(全5:155)

七月二十一日

八重夫人を駕籠に乗せ、早朝より裏見が滝、相生ノ滝、ミゾレが滝を見て、清滝村から馬返に行き昼食を取る。華厳滝、中禅寺を巡り午後七時すぎ日光の宿に帰る。(全5:157)

七月二十二日

早朝、霧降滝を見物、午後一時、馬車で日光を出発、今市、大沢、徳二郎を経て宇都宮に着く。(全3:222, 全5:158)

七月二十三日

安息日、宇都宮より八日市に伝道中の堀貞一に発信、伝道の状況を聞く。(全3:221, 全5:158)

七月二十四日

宇都宮を人力車で出発、白沢・阿久津・鬼怒川渡河・久保田・氏家・喜連川・佐久山(昼食)・大田原を経て那須野原の鍋掛駅(現在の黒磯町)まで行き、泊まる。(全3:222, 全5:158)

七月二十五日

鍋掛を出発、白河に向かう。途中、黒川が氾濫し、橋が流されたため半日近く川止めとなり、夕暮れやっと白河に到着する。(全3:222)

七月二十六・七日

白河より山越え一日半の行程を馬にゆられ、戊辰の役 of 古戦場を通り、二十七日、会津若松へ到着、七ヶ町の清水屋平次方に宿泊する。(全3:222, 全5:159)

七月二十八日

若松より徳富猪一郎に発信、「木曾街道道中ハ、更ニ憚ル所ナク御忠告申セシニ、足下ニハ別ニ拒ム所

八月一日

モナク幾分カ之ヲ容レ賜ヒシハ生ニ於テ甚喜フ所……足下ノ如キハ春秋尚高ク克ク天賦ニ富タリ……依テ足下ノ年尚壮ナルトキ其ノキヤレクトルヲ養成セン事ヲ望」むと諭す。(43: 222)

伊勢時雄と共に人力車で若松を発ち、山形県関町高湯に向かう。塩川で馬を雇い、熊倉、大塩に至る。温泉に入り、夕食後涼しいうちに峠を越えようと、夜になって出発、深夜、檜原村の大和屋(戸長・柏原孫左衛門)に宿泊する。深夜にもかかわらず湯を沸かし、親切なもてなしを受ける。八重夫人と伊勢峰は会津若松に留まった模様である。(45: 160)

八月二日

檜原を出発、綱木峠を越える際、頂上付近で非常な疲れを覚える。頂上で食事と休息をしたのち峠を下りて綱木に至り、関に向かうが疲労甚だしく、綱木の清水屋与五郎方に泊まる。荷物は綱木の戸長が関に送ってくれる。(45: 161)

八月三日

綱木より歩いて関に行き、そこから牛を雇って高湯に向かう。途中の茶屋で昼食をし、温泉での自炊に備えて砂糖、鮭、麩、インゲン豆等を買い入れる。高湯では伊勢と共に東屋(山形県南置賜郡関村高湯、穴戸屋惣左衛門方)に逗留し、ご飯だけは宿に頼み、あとはすべて自炊する。二十日まで十八日間滞在する。京都に手紙を書く。(45: 161, 209)

八月

高湯滞在中に、新島はA・ハーディより頼まれていた青春時代の手記を執筆する。(410: 260)

八月五日

高湯の泉源を訪ねる。八重夫人に手紙を書く。(45: 162)

八月六日

日曜日、J・D・デイヴィス、上原方立、山中茂、新島公義、小崎弘道に手紙を書く。『大岡政要記』の第五巻を読む。(45: 162)

八月七日

小崎弘道に発信、栗津高明の教会との合併について「随分啄ヲ容るゝの人も可在之候間、牧師連中集

会之節公然と右之事を持出し諸君子之見込を充分ニ御聞被成候而は如何、且兄よりハ充分ニ合併するの理由ヲ吐露シ、人々をし而克く之を了解せしめば後日之喋々を防ぐへしと存候」と忠告する。(43:224)

八月十日

上京第二十二組松蔭町新島家の宅地の名義変更願を差し出す。これにより浜岡光哲、大沢善助より新島襄への名義変更がなされ、この年十月二十三日、地券が渡される。(41709)

八月十四日

湯浅吉郎、奥亀太郎、湯浅隠居、市原盛宏、加藤勇次郎、彦根の中島宗達、甲州の保坂七之介に手紙を出す。(45:167)

八月二十一日

月曜日、高湯を出発、(荷物は運搬人を雇う)新島・伊勢の二人は徒歩で米沢に向かう。米沢の桐町に近い宍戸屋に泊まり、市内を見物する。夜、門東町上ノ町に甘糟三郎、同春を訪問、米沢の風土、人情を聞く。(45:209)

八月二十二日

土地の人、河村徳友の案内で製糸場、上杉謙信の墓を見る。また私立学校の綱島哲を訪問する。宿を立町の赤根屋新助方に移す。(45:218)

八月二十三日

「遊奥記事 福島県下耶麻郡喜多方町ニ於テ記之」(45:206)
人力車で米沢を発ち、関村で伊勢と落ち合う。徒歩で檜原、大塩の峠を越え、日暮れ前大塩の坂本旅館に泊まる。(45:206, 218)

「八月二十四日?」熊倉の手前で若松へ向かう伊勢と別れ、下柴村の宇田成一(会津六郡連合会議長)を訪ね、県令・三

島通庸らによる米沢・若松道路建設計画に伴う暴行事件について聞く。(45:206, 218)

* 宇田成一に会ったのは、新島の記述の順序と地形から見て、八月二十四日と考えるのが妥当である。また宇

田が襲撃されたのは八月十八日である。

九月二日

東京に帰り、山城町の山城軒に投宿、滞在する。(全5:183)

木村熊二、帰国する。(J104:135)

九月四日

伊勢夫妻、日光より来着する。東京YMCAにおいて帰国早々の木村熊二が演説する。(全5:184)

九月七日

東京芝の新桜田町(小崎弘道牧師)において麻布仲之町の日本教会(粟津高明牧師)との合併式が行われ、席上、新島は「教会員への勧め」を行う。合併した教会は小崎を牧師に迎え、東京第一基督教会として発足する。(全2:393, F1:71)

九月八日

津田仙より芝の紅葉館に招待され、伊勢夫妻と共に夕食を、馳走になる。(全5:184)

九月九日

津田と共に勝海舟を訪問する。土倉庄三郎と新島のために揮毫を乞う。「書ハ余程美事ニ出来ス、先生之氣象ヲ見ル〔ニ〕足レリ」(全5:184)

* (J31-20:428) は九月十一日。

九月十日

日曜日、小崎弘道の教会で説教をする。(全5:184)

九月十二日

夜、芝高輪の後藤象二郎宅に板垣退助を訪問、洋行の理由などを聞く。横浜に行き、西村旅館に泊まる。(全5:184)

九月十三日

J・H・バラを訪問。夕方六時、横浜を出帆する。(全5:184)

九月十四日

船は風浪のため難航する。(全5:185)

九月十五日

午前十一時、神戸に入港、西村旅館に休息ののち、午後五時、京都に帰る。(全5:185)

九月十八日

同志社秋期開業。下村孝太郎が同志社教員となる。(全5:185)

九月二十二日

第二教会で夏季地方伝道の報告会が開かれ、新島は岐阜・大垣・宇都宮・白河・会津への伝道の必要ないことを説く。(全2: 575, 1500, 18-154)

九月二十五日

夜、第二教会で森田久万人と重松もと、市原盛宏と江場かねの結婚式が行われ、新島が媒酌を務める。式後、新島宅で茶菓をもてなす。(全2: 576, 18-152)

九月二十五日

伊勢時雄来訪、病にかかる。山田医師が二回来診、大村〔達斎〕も来る。(全5: 185)

九月二十七日

高梁の林善助の子供が京都の盲啞院に入ることとなり、その保証人となる〔十一月入学〕。木村熊二より来信。(全5: 185, 191)

九月二十八日

吉野大滝村の土倉庄三郎に手紙を出し、女学校に入った令嬢は老婦人に託したこと、勝海舟の書二葉を里見に託して送ったことを知らせ、会津土産の蠟燭をあわせて送る。(全3: 225)

九月

神学校に、別課神学科を置く。(D1: 589)

十月一日

安息日学校(第二教会)を再開する。校長・市原盛宏、生徒を十一クラスに分け、各クラスに教師一名がく。(全2: 576)

十月三日

D・C・グリーン、上京第十七組烏丸西入ル元浄華院町五九二より上京第十組烏丸上立売上ル御所八幡町に移る。この日、第十組戸長へ届け出る。(全1: 319)

十月八日

大工・沢野甚七の名義を借りて買収した烏丸御所八幡町の土地〔グリーンンの住所〕につき、沢野がその所有権を主張して地券書替えに応じないため紛糾し、結局、同志社における普請を一度だけ請負わせる条件で地券書替えに応じる。(全1: 319, 全5: 185)

海老名弾正夫妻、今治より来て十一日まで滞在する。(全5: 185)

十月九日

ジャパン・ミッション第十年会が神戸居留地五十九号館で開かれる。十五日まで。(E1)

十月十日

御所八幡町の土地につき、山本時枝の周旋により沢野甚七から土地売渡証を取り、十一日に第十組学校に行き、名義書替えの願書を出す。(全5:186)

「注意 余ニ於テ速ニ地券書換ヲ為シ置カハ何ノ故障ハナキモノヲ荏苒日ヲ送シノ罪此ノ難事ヲ引

キ起スニ至リタレハ向來再ヒ此轍ヲフムベカラス……」(全1:320)

十月十二日

同志社生徒・林拾、コレヲ療養中のところ全快して上京する。(全5:186)

沢野甚七へ地所買得の礼として十円贈る。(全5:186)

十月十三日

御所八幡町地券書替願書を沢野と新島連名で差し出す。(全5:186)

十月十五日

岡山のJ・C・ベリーより来信、医学校設立につき岡山に留まるべきか、京都へ出るべきか、問い合
わせてくる。(全5:187)

十月十六日

浜岡光哲より共有山地券売却金四百五十円を受け取る。(全5:186)

十月十七日

夜、北垣国道知事来訪する。新島不在のため会わず。(全3:226)

十月十八日

北垣知事に手紙を送り、鳥取出身の生徒、林拾の学資援助につき依頼する。夜、北垣知事来訪、事情
を説明した結果、林の学資援助を約束する。(全3:226, 全5:186)

抵当として預かっていた山地券を浜岡に返却、その領収書を受け取る。(全5:186)

聖書会社への建言書に調印のうえ松山高吉に送る。(全5:186)

津田仙より図書費の「助分」として九円八十七銭、また高梁の中村三郎より学資として三十円送って

くる。(全5:186)

十月二十日

林拾への奨学金を北垣国道知事より受け取る。(全5:186)

ベリー来京の是非について大村達斎と協議のうえ、ベリーにこの日返書を送る。(全5:187)

夜、四年生の代表、村井知至・三好文太・新原俊秀の三名が来て、森田久万人の修辞学の教授方につき苦情を述べ、教師を替えるよう申し入れる。(全1:323, 全5:187)

十月二十日

沢野甚七にチャペル入口の改修「拡幅」を請負わせる。(全1:322, D39)

十月二十一日

大阪での第一回宗教演説会が西区新町高島座で開かれ、新島も出席のため午後三時十分、京都を発つ。夜の部において「勇気の説」を演説する。(全1:393, 全5:187, F20:40)

大隈重信、小野梓ら東京専門学校を開校。(J97:93)

十月二十二日

午後、浪華教会の説教会で「初メハ大切、ヨリ終リガ大切」と題して説教を行う。(全2:15, 全5:187, I8-151)

十月二十三日

大阪より帰る。名義変更された新島宅地の地券二通を受け取る。(全5:187)

森田久万人の講義に対する生徒の苦情につき協議のうえ、上原方立・綱島佳吉より「森田ニ談シ、向來全力ヲ尽シ用意ヲ為スヲ勸メタレハ、可ナルベシトノ事ニ致セリ」(全5:187)

十月二十五日

東京の長田時行に発信、岡山のケーリから託された八円を小崎に送ったので、同人から受け取ってほしいこと、またその際、手紙も同封して送るはずだったが、忘れたので、あわせて送る旨を記す。

(全3:227, 全5:188)

丸善洋書店に雑誌代一年分一円四十四銭を払う。不破唯次郎に十一、十二月分「伝道費?」三十円を送る。(全5:188)

十月二十八日

新京極道劇場において同志社学術演説会が催され、新島は「蟻之説」と題して演説する。雨天にもかかわらず満員の盛況だった。(全1:400, J15:28)

十月三十一日

北垣知事より林拾への学資十一、十二月分として十円届けてくる。(全5:188)

森田久万人のレトリックの授業につき、市原盛宏と相談の結果、「下村孝太郎ノ忠告ニヨリ森田氏ヲシテ一層分ラサル所ハ外国教師ニ尋ネ充分ノ用意ヲナシ教業セシメ」ることとして決着する。(全1:323)

十一月一日

上京避病院より林拾の入院費の請求がくる。「先方ヨリ金ノ来ルヲ待ツヘシ」と答えておく。(全5:188)

十一月二日

J・C・ベリーより、病院設立につき相談したいが、夫人の出産間近で京都へ行けないので、岡山に来てほしいと要請してくる。(全5:188, T2419)

十一月三日

同志社生徒百余名、大文字山を越え、大津石山へ遠足する。(全5:188)

十一月七日

宮川経輝来訪する。(全5:188)

「同志社大学設立之主意之骨案」を書き、午前九時この草案を書き終わる。その中で、大学は宗教兼哲学、医学、法学の三学部よりなり、法学部は少なくとも五万円、医学部は九万円、合計十四万円の資金が必要である、と述べる。(全1:24)

十一月八日

公債証書の利子受け取りのため八重夫人を代理人として行かせる。(全5:188)

十一月十一日

西洋形散弾銃による職猟願を上京区長宛に出す。(全5:188)

大阪久宝寺南ニ入中橋筋の喜多玄卓夫妻が来訪、十三日まで滞在する。(全5:190)

十一月十二日 第二教会において「朋友之交義ハ天国ノ写真」と題して説教をする。(全2:78, J15:28)

十一月十三日 狩猟の鑑札を受ける。(全5:190)

熊本の入江種義が来訪、ボストンのA・ハーディ、コック両氏に紹介状を書く。(全5:190)

十一月十四日 故新島みよの墓石ができたので、この日、黒谷の墓所に建てる。(全5:190)

十一月十五日 神戸へ行きD・W・C・ジェンクスに会い、立て替え金を払う。松山高吉を訪い、同志社に医学校を

設立することにつき相談、さらに松山と共に高橋熊吉の家に行き、山田「良斎」の容体を尋ねる。午後七時発の船で岡山に向かう。(全5:199, J40:100)

十一月十六日 午前四時岡山着。人力車でベリー宅に行く。諸宣教師も同氏宅に集まり、医学校設立について協議する。(全5:169)

十一月十八日 ベリーと共に中川の家へ夕食に招かれる。西も来る。(全5:169)

十一月十九日 岡山教会において午後二時半と七時半の二回説教をする。「キリスト真理を証す」「結局に賢くあれ」(全5:169)

十一月二十日 「医学校の？」校則の翻訳に取りかかる。(全5:169)

十一月二十二日 休暇で帰米していたJ・D・デイヴィス一家を出迎えるため八重夫人と共に神戸へ行く。神戸で松山高吉、金森通倫と相談して森本介石を高梁に派遣することを決める。今村より株金の利子三円を受け取る。この夜は「大森之宿」に泊まる。(全5:191)

十一月二十三日 早朝、新島夫妻は船までJ・D・デイヴィスを出迎える。(全5:191)

十一月二十五日 夕方六時前、デイヴィス一家と共に京都に帰る。同志社の生徒ら七条ステーションに出迎える。(全5:191)

I : 164, 235, 325, 全2 : 576, 全5 : 192)

十一月二十六日 第二教会においてJ・D・デイヴィスの婦京歓迎会を開く。市内三教会の信徒および同志社生徒ら三

百人が出席、下村・森田・綱島・新島らが演説をする。(全2 : 576, 全5 : 192, 18—15j)

十一月二十八日 イフレイム・フリント牧師、マサチューセッツ州ヒンズデイルで永眠。五十四歳。(E13)

J・D・デイヴィス、上京元浄華院町五九二に寄寓する旨届け出る。(D1 : 102)

十一月三十日 ゴードン宅で収穫感謝祭の晩餐会が開かれ、新島も出席する。(全5 : 192)

十一月 「同志社学校設立ノ由来」を起草する。(全1 : 33)

十二月二日 同志社の神学生二〜五年生が連署して、朝の集会における外国人教師の邦語演説を英語で行うよう嘆

願する。教員協議の結果、一年生と邦語神学生は英語が通じないため、この嘆願を却下、別に外国人

教師による英語の演説または説教を行うことにする。(全1 : 325)

十二月十日 京都三教会の信徒が第二教会堂に集まり、晩餐礼を守る。グリーンの説教、ゴードンの司礼、ラーネ

ッドによる受洗者十五名。(全2 : 576)

十二月十四日 新島、同志社生徒に「公平無私、板垣退助のこと」について講話をする。(J15 : 29)

十二月二十一日 加藤勇次郎が女性宣教師と意見対立、女学校教員をやめて帰郷するといので、夕食に招く。宮川経

輝も来る。(全1 : 326, 327)

この夜、各寮の寮長を招いて寮内の風紀について聞く。(全1 : 327)

十二月二十二日 神戸の英和女学校第一回卒業式に臨み、演説を行う。(G7 : 72, 18—15k)

十二月二十七日 加藤勇次郎の後任に杉田潮を擬するも辞退する。「此上ハ女校ノ維持法ニツキ如何ナリ行クカ、予ニ

於テ百方手ヲ尽シタレトモ事ナラス、空シク手ヲヒキ自滅ノ途ヲ取ラシムルノミ」(H1:326)
御所八幡町一一〇～一一四の地券が戸長を経て下げ渡される。(H1:326)

十二月三十一日 第二教会において「競走者」と題して説教をする。(H2:90)

十二月 大和の土倉庄三郎を訪問、大学のため三万円の寄付を要請するが、「前約ノ五千ノ外今ハ応シ難シ」

と答えられる。(H1:176)

この年、「同志社大学設立ヲ要スル主意」「同志社大学設立之主意」「同志社大学設立の旨趣」の草稿を書く。(H1:44, 36, 52)

新島、大隈重信を訪問する。「学問の独立をはかるという目的から、東京専門学校を設立の頃で、「新島」氏がはじめて宅に来られたのは、この建築中のときであった」(J85:45)

雑記帳に新島姓の由来らしいものを書く。(L942, L943)

“Condition of Country about 20 yrs. ago.” といふ書へ。(L150)

明治十六年（一八八三）四十一歳

一月五日 園部において「文明ヲ組成スルノ四大元素」と題して演説をする。（全1：387）

* 明治十五年七月十四日、安中での演説と同一のもの。

一月七日 午後、市原盛宏・中村栄助・原田助が来訪、勝海舟の『六然の書』、中村正直の『為善為楽』の扁額を披露する。（115：31）

一月七日 この日より一週間、京都三教会の信徒は第二教会に集まり、万国共同の勸学および祈禱会を催す。

（全2：577）

一月十日 東京で四月末開催予定の全国基督信徒大親睦会に京都三教会の代表として、新島を派遣することに決定。（全2：577）

ペリー来京、午前九時よりグリーン宅で教員と共に医学校につき協議する。午後、雑報社に高木・市岡・中村・加藤・新島らが集まり、法学校のことについて相談する。（全1：329）

一月十六日 夕食後、原田助らのクラス十六名を茶菓に招く。アメリカの大学、政党、教会、田舎の景況について話し、日本の人心一新のためには小学校の改良が必要であると説く。（F15：31）

一月十七日 鹿児島県人・古谷得三が九州巡回をするというので、彼に県運宛の添書を託す。（F952）

一月十八日 大村達斎・市原盛宏・中村栄助を自宅に招き、医学校設立について協議する。（全5：192）

一月十九日 第二教会入会者の質問の方法を変更し、五名の委員に委ねることにする。（全2：577）

一月二十日

J・D・デイヴィスが二人乗りの人力車を買うにつき使用の法規、納税期限等の伺い書を上京区長に出す。(D1:103)

一月二十二日

神戸のジェンクスに発信、円ドルの交換レートについて、ボストンへ荷物を送る好便について、ジェンクスへの借金について問い合わせる。(全6:214)

一月二十三日

河原町商法会議所に大村達斎・伊東熊夫・中村栄助らと会合、次のことを決める。一、医学校設立のため結社すること 一、医学校を維持するため、大村は二万八千円を預金すること 一、奈良病院長・小野俊二に招聘状を出すこと。(全5:192)

一月二十四日

英学校の規則増補を生徒に告知する。(全1:330)

一月二十七日

奈良病院の小野俊二より招聘受諾の返事が来る。(全5:193)

一月二十八日

病死した英学校生徒・木村正吉の葬式を第二教会で行い、新島が告別の説教をする。(J1:85)

一月

同志社大学設立主意書稿を起こす。(全1:175, 185)

二月二日

真瀬盛明の葬式を第二教会で行い、新島が司式、三十分ほどの談話をする。(全5:193)

第二教会の仮牧師・市原盛宏が病氣のため辞任、森田久万人を代理とする。四月十三日まで。(全2:577)

二月五日

新しい英学校規則を守らない生徒の教室への立ち入りを禁ずる。(全1:332)

二月九日

頭痛をおして学校に出、授業のち疲れを覚える。(全5:193)

二月十日

大村達斎より新島・伊東・中村・市原(連名)宛の手紙(九日付)を受け取る。大村が校長をしている洞酌医学校内で紛議百出、医学校維持基金として公債証書で二万五千円を差し出すという約束は履

行できなくなつたこと、したがって新結社が不可能となつたことを述べ、謝罪してくる。(全5:193, L155, D1:291, J35:875)

A・ハーディより一月十日付の Kidder Peabody & Co. の為替証二枚(六百ポンド)を同志社へ寄付金として送ってくる。(全1:239)

二月十一日

小野俊二より奈良病院に辞表を出し、許可あり次第来京すると連絡があり、「大ニ困却ス」(全5:193)この日より第二教会安息日学校の生徒を二つに分け、同志社の生徒は教室で授業を受け、他の一グループは新島宅で集会を持つことになる。安息日学校の生徒は同志社の生徒が多く、一堂に集まって教授すると「衆声喧々不都合不少ヲ以テ」この措置となつた。(全2:577)

二月十二日

伊勢時雄来訪する。(全5:194)

二月十三日

同志社社員として山本寛馬・新島襄のほか、伊勢時雄・松山高吉・中村栄助の三名を加える。この日夕方より社員五名および内外国教員ら新島宅に集まり、社員の資格、義務および社則四カ条について協議する。(全1:164, 235, 全5:194)

* (全1:168) とは二月十二日。

大村達斎の違約により小野俊二に迷惑をかけたので、一年間、小野を雇い、月給五十円を差し出した旨を交渉する。新島より小野に書簡を送る。(全5:194)

金森通倫来訪する。(全5:194)

二月十四日

日本基督教伝道会社委員外国委員、京都で小会議を開く。(全5:194)

二月十五日

社員会が午後二時より山本寛馬宅において開かれる。全員出席。社則四カ条に従い協議する。新島を

従来通り社長とする。(全1:237, 全5:194)

二月十六日

(第一号届書)社員三名の加入を届け出、あわせて今後の届出、願書は社長名義で提出する旨を届け出る。(全1:238)

二月十七日

土曜日、花岡山奉教記念会が同志社公会堂において開かれる。二百七十余名が出席、新島もまた出席して演説する。(J68:76)

二月十八日

安息日、第二教会において金森通倫が説教、J・D・デイヴィスが中村栄助・千葉環・山口健起・新田義言・浅香洋吉の五名に洗礼を授ける。伊勢とラーネッドが晚餐を司式する。(全2:577, 全5:194) 室町通錦小路上ルの漢学塾に石津発三郎を訪問、山科元行の子息を入塾させる相談をする。(全5:195) 土佐立志社の島本楠弥太・原茂樹・蓼原好治が来訪する。(全5:196)

二月十九日

二月二十日

二月二十二日

二月二十三日

二月二十四日

東京より小崎弘道が来訪、新島は『六合雜誌』のため六株出資の約束をする。(全5:196) 頭痛のため来客応接時間を午後三時から五時に限ることを『七一雑報』に広告する。(18-16a) 同志社公会堂に第二教会総員の会議を開き、教会員を数組に分けて、各組ごとに団結を強めて全教会にそれを広げようという市原盛宏の提案を採択し、その方法を議決する。(全2:578)

破石薬献納取次願を「府庁に」出す。(L972)

* 琵琶湖疏水工事と関連がある、と思われる。

二月二十六日

同志社所有地はこれまで新島の個人名義になっていたが、社員の増加に伴い、同志社の名義に書き替えたい旨、京都府へ願い出る。(全1:239)

これまで新島名義となっていた「女学校校地」上京第十一区常盤井殿町五四三―二番地五千五百八十

二月下旬

一坪二合の土地を同志社名義とすることとなり、この日付で地券訂正願を差し出す。(D93)
 テイラーと小野に会うため大阪に行き、喜多の家を訪問、さらに大門町の旅館に本間を訪ね、夕方六時発の汽車で京都に帰る。(45:195)

二月

聖書翻訳に関し井深梶之助ら二十三人が旧約聖書翻訳委員ならびに各外国聖書会社に意見書を提出する。新島もその中に入る。(J92:71)

三月二日

病院に行き、金月水曜の三日間エレキを身体にかけることを頼む。(45:195)

三月五日

京都府庁で北垣知事に会い、破石薬について相談を受ける。(45:196)

* 明治十四年四月、第一次琵琶湖疏水工事測量開始。(H13:74)

明治十四年十一月、京都・宮津間車道建設工事着手。(H13:74)

三月六日

午前、浜岡光哲が来訪、小崎弘道を交え、法学科の募集方法につき協議する。

小崎の依頼により『六合雑誌』のためニューヨーク、パイブル・ハウスのH・C・ヘーデンに手紙を送り、一万ないし五千ドルの融資を受ける相談をする。(45:195)

三月七日

A・ハーディに手紙を書き、社員を三名増員したこと、土地の名義変更のことを報告する。

サンフランシスコのフレンド・ピーボディー社に破石薬の見本を送るよう依頼する。(45:196)

三月九日

A・ハーディに來日を勧める手紙を出す。(45:196)

H・C・ヘーデンに発信、『六合雑誌』への融資を頼む。(45:196)

さき頃、A・ハーディより受け取った六百ポンドの為替証の二重証をW・A・スノーより郵送される。
 (全1:240)

三月十三日

岐阜女学校の教員・宝生豊を招聘するため、午前九時京都を出発し、大津——米原を船、それより人力車で醒ヶ井まで行き、錢屋義六方に泊まる。(全5:170, 196)

* 岐阜行きについては、(a)日抄(全5:170)と(g)日誌(全5:196)の双方に同様の記述がある。旅行期間は十二日または十三日より十七日までであるが、出発日より十五日まで(a)(b)両者の間に日時のずれがある。(b)の記述がよく整理されており、(a)をもとに書きなおしたと思われる。したがって、ここでは(b)に従って再構成した。

三月十四日

午前四時半、醒ヶ井発、岐阜まで十三里半を人力車で走る。午前十一時、岐阜今古町の玉井伊兵衛方に入る。午後、岐阜県庁を訪い、学務課の小川亮に案内されて女子師範学校に行き、授業を参観する。教師の宝生豊に会う。夜、常盤町に本島源左衛門を訪ね、町の模様を聞く。(全5:170, 196)

三月十五日

金華山に登り織田信長の旧居城を見る。この日も小川学務課員の案内で女子師範学校へ行き、宝生に会う。午後、病院を見学「岐阜県医学校規則、同付属病院規則をもらおう？」再び宝生豊に会う。小野俊二の父親をその自宅に訪う。午後四時半、岐阜を出発して大垣に至り、本町玉屋に泊まる。夕食後、旧友の三羽明良を同町俵町日新堂裏に訪ね、懐旧談に花を咲かせる。夜十一時半、宿に帰る。(全5:173, 196, 上154)

三月十六日

雨のため七時半すぎに出発、帰途につく。途中、三羽に会い、芳賀貞軒の家に案内される。その後、関ヶ原を経て人力車を乗り継ぎ、風雪を冒して午後四時、長浜の中村方に到着する。この夜、西村方で集会を開く。十五人集まる。(全5:174, 197)

三月十七日

午前九時二十分、遊電丸で長浜を出帆、午後四時、帰京する。(全5:174, 197)

三月二十日

六百ボンドの証書二通を神戸のジェンクスに送る。〔三月九日の項参照〕(全1:240)

三月二十三日

宝生豊に同志社女学校の教員として赴任する意志の有無を尋ねる。(全1:333)
 警醒社創立株主募集広告に賛成人として名を連ねる。(18—16b)

小崎弘道よりこの日付で来信、今治・岡山・高梁での株募集を終えて神戸に着いたこと、京都での募集に尽力してほしいことを書いてくる。(F680)

「公会之趣意」を印刷するに際し、新島は編集委員の一人に選ばれる。委員——森田・原田・大西・竹原。(全2:578)

三月二十五日

A・ハーディより二月に引き続き、四百ポンドを寄贈される。(全1:240, J40:210)
 夕方より同志社一年生全員を自宅に招待する。(全3:231)

四月末、京都で開催予定の日本基督伝道会社会議に、京都三教会より森田久万人・中村栄助の二名を委員として送り、その事務にあたらせることを決める。(全2:578)

三月二十八日

高梁の留岡幸助が父親による迫害を逃れて上京、新島を訪問する。(全5:197)

三月三十一日

同志社、男女両校とも春休みに入る。(全1:241)

三月

福士成豊来訪する。(F786)

四月二日

新島公義・小野俊二と共に大津へ狩猟に行く。堅田の伊勢屋に一泊する。(全5:197)

四月三日

小舟を雇い湖上の水鳥を撃つ。一羽にあたが、結局逃げられてしまう。(全5:197)

四月四日

D・W・ラーネッド夫人が病気のため、その娘グレースと帰国することになり、女学校のスタークウエザー教師が付き添って帰国することに決まる。(全1:333)

四月六日

外国人教師が同志社社員となって地所を共有している事実はない旨を京都府に届け出る。(全1:242)

四月九日
A・ハーディより寄贈された四百ポンドの第二証書を受け取る。(41: 240)
午後四時より山本寛馬宅において、ベリー計画の看病婦学校の設立につき会議を開く。伊勢時雄も出席する。(43: 231)

四月十三日
大阪教会より来る二十日の宮川経輝按手礼式への招待状が届く。第二教会より新島と市原盛宏を代表として派遣することを決める。(42: 578)

四月十五日
日曜日、ヴァーベック〔フルベッキ G. H. F. Verbeek〕来京し、新島の司会により第二教会で説教を述べ。(15: 34)

四月十六日
第二回在日プロテスタント宣教師大会が大阪川口三十番館で開かれ、百六名(男五十八名、女四十八名)の宣教師が集まる。この大会では、いわゆる教会自給の問題が論じられた。二十一日まで。(E 7: 164, F 1: 72)

四月十七日
新島、宣教師大会に出席、傍聴する。(45: 197, E 10: 208)

四月二十日
宮川経輝の按手礼式が大阪教会において午後七時より行われる。新島は「マタイによる福音書」十六章十六節により「天国の鍵」と題して説教を行う。(42: 578, 45: 197, J 30: 72, J 71: 58)

夜、大阪川口の聖三一教会において内外国人による祈禱および懇親会が催され、感話を述べる。(18—16c)

四月二十五日
日本基督伝道会社の第六年会が第二教会で開かれ、新島は本局委員に選ばれる。また席上、新島は同志社に大学を設立し、法学部を設ける予定であること、医学部の設置はベリーが目下尽力していること、同志社に基金を集める見込みについて演説する。(42: 579, F 1: 73, F 2: 8, 18—16d, J 15: 34)

四月二十七日

第二教会において安藤乙松、阪齊要吉の二名に授洗する。(全2:579)

基督教演説会が道場劇場で開かれる。(全2:579)

四月二十八日

志賀寛兵衛に発信、子弟入学の問い合わせに対し、大学設立計画とは関係なく、九月上旬に新入生を募集する旨を回答する。(全3:232)

四月下旬

「同志社大学校設立旨趣」を印刷、公表する。「裏ノ起草セシ趣意書ヲ浜岡氏ニ託シ之ヲ活版ニ附シ、同志社大学校設立旨趣冊子ヲ作レリ」(全1:66, 175, 185)

四月

「同志社設立の始末」を草す。(全1:72)

五月一日

第三回全国基督教徒大親睦会に出席のため、午後六時頃、東京丸に乗り、神戸を出帆する。金森通倫・上原方立も第二教会代表として同行する。(全2:579, 全5:198, 18-16e, J40:189)

五月三日

午前六時ごろ横浜に着き、弁天通六丁目の旅館和田彦に旅装をとく。朝食後、住吉教会の南小柿洲吾を訪問し、その地の状況を尋ねる。(18-16e, J101:21)

五月四日

安中教会の新築会堂発会式。(F6:319)

この日より十二日まで、ジャパン・ミッション第十一年会が京都のグリーン宅で開かれる。議長J・H・ペター。(E1)

五月五日

「五月中宣教師集会ノトキ石造或ハ煉瓦造ノ講堂ノ入用ナルコトヲ乞フボールトハ之ヲ許シ七千五百円ヲ寄付ス」(全1:236)

同志社に医学校の設立を計画するにあたり、同志社社員連名でJ・C・ベリーに招聘状を送る。これには十四教会の牧師の賛同署名がなされている。(全6:215)

五月八日

第三回全国基督信徒大親睦会が東京の新栄教会、浅草教会、井生村楼を会場として開催される。十二日まで。第一～三日議事、第四日に新島が説教をする。(全2: 579, 全5: 198, L448, F1: 74)

京都府大書記官国重正文、富山県令に転出、後任に内務少書記官尾越蕃輔が任命される。(16)

五月九日

大親睦会第二日、午後、井生村楼において演説会が催され、新島も「伝道論」の演説を行う。(J70: 276)

* 演題は「基督教皇張論」(全2: 396) あるいは「真理ノ証」(全2: 112) 也。

五月十一日

大親睦会第四日、新栄橋教会で行われた礼拝聖餐式において「基督弟子ノ足ヲ洗ヒ賜フ事」の説教をし、四百余名の出席者に多大の感銘を与える。京都の信徒に手紙を書き、親睦会の状況を知らせる。

(全2: 107, 全6: 219, R: 75)

五月十二日

大親睦会最終日、神田旭楼の会合に出席、のち九段坂の写真師・鈴木真一方で出席者一同と共に写真撮影、その後さらに日暮里の禅寺・修性院で「郊遊会」に出席する。

この夜、宮川経輝と共に木村熊二宅に泊まる。植村正久・岩本善治が来訪し「談論移時」(J70: 278,

J79-1: 49)

* 日暮里の専修院で祈禱会。(全5: 198)

五月十三日

雨、下谷会堂を訪れ、宮川経輝は聖書を講じ、新島が演説する。午後も会堂に出る。木村宅に泊まる。(J79-1: 49)

五月十四日

月曜日、晴、木村宅を出発し、津田仙と共に赤坂榎坂の勝海舟を訪問する。同家屋敷内に居住するクラ・ホイットニーにも会う。(E18: 319, J31-21: 21, J79-1: 49)

五月十五日

D・W・ラーネッド夫人病気のため、娘グレースを連れ横浜より帰米、スタークウエザーが同行する。
(全1:333)

五月十六日

日本銀行に富田鉄之助、吉原重俊を訪ね、大学設立につき協力を依頼する。(全3:233)

五月十七日

富田鉄之助に「同志社大学校設立旨趣」を送り東京および大阪の銀行の然るべき人物に紹介してほしいと頼む。(全3:233)

中村正直を訪れ、「同志社大学校設立旨趣」を贈り、協力を依頼する。中村より「荘土因」を贈られる。(全3:234)

五月十八日

馬車で東京を出発、この日は熊谷に一泊する。同地より中村正直に発信、大学設立につき東京府下の然るべき人物への紹介を求める。大久保一翁、山田顕義内務卿へも添書、幹旋を依頼する。(全3:234)

五月十九日

午後、安中に到着する。(全3:234)

五月二十日

安中の新築なった教会堂で蔵原惟郭と共に説教をする。「古キ人新シキ人」聴衆三百余名。夜、原市教会において蔵原と共に説教をする。「十人ノ娘、用意ニ怠ル勿レ」三、四里外より草鞋がけで来るものがあり、聴衆は安中より多いようだった。(全2:32, 119, 全3:236, F6:319)

* 安中教会を旧邸に移転、改築して「碓氷会堂」と名付ける。(H1:797)

五月二十一日

同志社生徒岡本彦八郎(高崎)松本亦太郎(倉ヶ野)の実家を訪問する。この日、武州熊谷駅から西京三教会宛に発信、大親睦会の状況、安中の模様について報告する。(全3:235)

五月二十二日

富田鉄之助よりこの日付で来信、外山修造に面会するのは、日本銀行大阪支店の開業式で多忙のため、その後にした方がよい、と知らせてくる。(F681)

* 本文目付けによる。封筒は二十六日。

五月二十五日

八日市の広瀬熊二に発信、亡兄の遺稿「馬太伝注解訓点」の出版について事務連絡をする。(全3: 238)

五月二十六日

黄竜丸に乗り横浜を出帆、四日市に向かう。(全5: 198)

五月二十九日

四日市に午後三時着、夜九時前に帰宅する。(全3: 239, 全5: 198)

五月三十日

同志社の朝礼(チャペル)において東京よりの帰校報告をし、勝海舟と面談したこと、文部省で教育法を取り調べたが、一つとして満足することがなく、政府は人民の行為に少しも賛成しないこと等の講話をする。(J15: 35)

夜七時半より第二教会において大親睦会の報告会が開かれる。上原・金森・新島の三名が報告、出席者は三百余名。(全2: 580, 全3: 239)

A・ハーディより二百ポンドの証書を送ってくる。(全1: 211)

六月一日

第二教会において祈禱会が開かれたが、かつてない熱心さで、間断なく祈禱が行われる。新島は未信徒である生徒のために祈禱会を開くことを提案し、翌二日夜にも祈禱会を開く。(全2: 580)

六月四日

湯浅治郎よりこの日付で、葬儀に関する太政官布告、教部省通達の抜き書きを送ってくる。(F682) 岡山のベリーより招聘状に対する返書が来る。ベリーは五月七日京都で開かれた宣教師年会にはかり、ほぼ全員の賛成(一人を除く)を得た旨を知らせてくる。(全1: 242, 全5: 198, F24229)

六月九日

東京の長田時行に発信、相談を受けていた築地大学の生徒につき、同志社は「誰レニモ門戸ヲ開キタル学校ナレハ彼来ルヲ乞ハ、敢テ之ヲ拒マス唯今更ニ学資ヲ助クルノ見込ミハ無之候」と回答する。

(全3: 239)

六月十一日

富田鉄之助に発信、法学部設置につき「種々御工夫被下候条感佩之至」また「外山修造氏へ面会之事ニ付態々御申遣被下、是亦奉万謝候」と礼を述べる。(全3:240)

六月十二日

新島・山本覚馬・中村栄助の三名の連名で再びベリーに手紙を送る。(全1:242, 全6:219)

六月十五日

ベアリング商会 Messers Baring Brothers & Co., London の為替証書を神戸のジェンクスに回送する。(全1:243)

六月十六日

第二教会で基督教演説会が開かれ、新原・竹原・原田・市原の五名が演説する。以後毎月一回開く。(全3:580)

六月十八日

夜、第二教会において「悔改」と題して説教を行う。なお、この説教会は二十一日まで四日間続けられ、毎夜二百五十〜三百人が集まった。(全2:122, 580)

六月二十一日

沢山保羅、同志社で説教をする。(全2:47, J28:147)

六月二十三日

夜、この夏、夏期伝道を行うにつき祈禱会と相談会を開く。(全2:580, 12-a)

六月二十四日

女学校英語科第一回卒業式が行われ、高松仙・田代初に卒業証を授与する。(全1:334)

第二教会において、新島は卒業する人々のために説教をし、J・D・デイヴィスの司礼によって晚餐礼を守る。この日、新島より受洗した者は小野英二郎・稲田左膳・福島耕造・広津友吉・堀正義・津田元親の六名。(全2:580, J15:36)

六月二十六日

『七一雑報』廃刊。後継紙は『福音新報』七月三日創刊。(J112:3)

六月二十七日

京都府庁吏員が来校、新島に案内されて校内を視察する。(D1:149)

六月二十八日

京都の教会で「天国の鍵」と題して説教をする。(全2:96)

六月二十九日 同志社の卒業式に際し「宗教ハ万民ノ望ム所也」と題して送別の説教をする。(全2:132, J 15:38)
六月 大学発起人の募集および募金の方法について浜岡光哲に草案の作成を依頼、浜岡は仮草案を作る。(全1:176, 186)

京都よりA・ハーディに手紙を書き、建物建設の資金が必要なこと、医学校、法学部の設立の必要なことを述べる。(T2246)

七月十一日 夜、神戸教会増築工事の落成に際して説教会が開かれ、「伝道」と題して説教をする。(全2:133)

七月十六日 J・イートン John Eaton, U. S. commissioner of education に手紙を送り、日本にキリスト教主義による大学の必要なことを述べる。(全6:220)

杉田勇次郎が渡米するのでA・ハーディに紹介状を書く。(全5:200)

七月十八日 東京の二大新聞に同志社の来学期の広告を掲載するよう、小崎弘道に五円を送って、依頼する。(全1:245)

七月十九日 大阪島ノ内教会の森田寿三郎が商用でボストンへ行くので、A・ハーディ宛の添書を書く。(全5:200)

七月二十日 亀岡の田中源太郎に書簡を送り、大学募金の方法につき概略を述べ、意見を求める。(全3:240)

七月二十三日 D・C・グリーンと煉瓦建校舎「彰栄館」建築につき相談する。(全3:242)

七月二十五日 煉瓦建校舎建築につきグリーンと相談するため、朝五時頃より比叡山北谷のテント村に登る。中村栄助・森田久万人も同伴か。(全3:242)

七月二十七日 外山修造よりこの日付で来信、大学設立の寄付金で公債証書を買ひ、それを日本銀行に預け入れるこ

とを承知、いつでも預かる旨を伝えてくる。(T683)

警醒社創立。(J92: 66)

七月三十日

七月

上京第二十二組小学校会社社に百四十三円六十七銭五厘(利子月五分)を預ける。(±1520)

八月二日

彦根川原町長光寺浜劇場において基督教演説会が開催され、新島は「文明の基礎」と題して演説をする。ほかに堀貞一・辻密太郎らも演説、聴衆八、九百人。(±2: 649, J68: 80)

八月三日

八月四日

午前九時より彦根の八景亭において長浜・彦根の信者ら新島・堀・辻を囲み親睦会を催す。(J68: 86)
京都府御用懸工学士・田辺朔郎(上京第二十七組押堀町熊谷方)、吉田賢輔の紹介状を持って来訪す
る。(±952)

* 田辺朔郎は新島の知人・田辺太一の甥、琵琶湖疏水工事の担当者。また吉田は青年時代からの友人である
[安政五年の項参照]。

八月六日

越前へ向かうため、朝八時五十五分京都発、大津より汽船で長浜に渡り、吉田亭に泊まる。(±5: 228)
常盤井殿町の女学校校地五千五百八十一坪二合の名義変更[新島→同志社]なり、上区役所より地
券が下げ渡される。(±1: 245)

八月七日

「出遊記」を書き始める。表紙裏に「経寒経暑不告其苦

[過飢遇疾其業不退]
逢飢逢疾不退其業]

空海ノ師恵果和尚ノ

碑文中ニアリ空海之文」と記す。(±5: 228)

この日朝六時、長浜を出発、オッタ坂を越え、洞道の西口で思いがけなく松村某に会う。それより汽
車で敦賀に到着、出雲屋で休息ののち、午前十時、金ヶ崎丸(小室信夫所有)に乗り、越前岬を廻っ
て午後四時、坂井港に着く。(±5: 229)

八月八日

〔山中温泉〕泉屋に泊まる。主人の泉次郎三郎は熱心な真宗の信徒である。(全5:231)

『東京毎週新報』創刊。(F1:76)

八月九日

朝、腸カタルにかかる。宿の主人が親切に世話をする。(全5:231)

八月十日

「病未々癒〔ズ〕晩方ニ至リ外行ス」(全5:231)

八月十一日

朝、丹羽〔辰二郎〕、草鹿甲子太郎の二人が来訪する。午後、丸岡街道を散歩する。宿の主人より、客に耶蘇教の話をして宿に迷惑をかけないでほしい、と低頭平伏して頼まれる。草鹿を訪問、理学・宗教について話をする。(全5:231)

八月十二日

安息日、土地の本願寺派の僧侶が泉屋の父親を訪ねて宗教話をするのを聞く。(全5:232)

八月十三日

前日より気温低く、気分も少し良い。読書して過ごす。(全5:233)

八月十七日

早朝、山中を出発して山代・片山津各温泉を経て大聖寺へ行き、草鹿および江沼郡長の滝譲を訪問するが、不在。次いで本町の陶器会社に飛鳥井清を訪ねる。午後四時、再び草鹿を訪い、同氏の伯父久世寿方に一泊する。夕食後、近くの山に登り、市中を眺める。夜、芝原寿・太田北山を訪問する。

(全1:176, 186, 全5:234)

八月十八日

草鹿の案内で、早朝、大聖寺を出発、作見・弓波・動橋を経て那谷へ向かう。那谷寺を見物のち草鹿と別れ、山代で一浴して夜に入り山中に帰る。(全5:236)

八月十九日

安息日、開湯式のため混雑する。滝譲および梅田五月・佐分利政一と面談する。(全5:236)

八月二十二日

朝六時大聖寺を出発、丸岡を経て午後四時に森田に着く。ここで待ち受ける福井の信徒および同志社の竹原義久・三宅荒毅に会い、一緒に福井に行く。福井下錦町の松浦庄之助の家で演説をする。(全

5 : 239)

八月十三日 午後六時より下泉水町の岡部方で大阪より帰った杉田定一に面会、夜九時過ぎまで大学の必要なこと、耶蘇教の大切なことを話し合う。(全1: 176, 186, 全5: 239)

八月二十四日 この日、福井の信徒のため「道理ト信仰ノ関係」について演説する。(全2: 139, 全5: 239)

八月二十五日 帰京のため早朝福井を出発する。三国港まで人力車、同港より敦賀まで船を利用する。敦賀ではすでに汽車はなく、やむなく同所に一泊する。(全5: 239)

八月二十六日 安息日、午前中、金ヶ崎ステーションの松村駅長を訪ね、キリスト教につき話をし、午後の汽車で長浜に向かう。夜、長浜の信徒の集会に出席し、真理を求めるに一日も待つべからざることを述べる。

(全5: 239)

八月二十七日 この日、帰京する。(全3: 243)

八月二十八日 岸和田の山岡尹方に発信、山岡夫人ら六人が受洗したことを喜ぶ。(全3: 242)

九月九日 彦根教会において「基督弟子ノ足ヲ洗ヒ賜フ事」の説教を行う。この日の受洗者二名。(全2: 107)

九月十日 九州・四国・近畿に風水害。(H14: 173)

九月十一日 夕方、大阪教会において宮川経輝と朽木次子の結婚式が行われ、その司会を務める。(J71: 61)

九月十七日 東京学農社の津田仙が京都に立ち寄り、第二教会において新島より紹介され、演説をする。(J15: 40)

九月二十一日 愛宕郡役所より呼び出され、比叡山の官地借用を許可される。(全1: 246)

第二教会の組織を改正するについて、市原盛宏牧師のほか森田・原田・大西・竹原・村井・湯浅を委員に選出する。(全2: 581)

九月二十三日

第二教会において午後二時より岩手・安中・岸和田・福岡等十三カ所の伝道報告会を開く。(42:581)

九月二十八日

井深梶之助に発信、(一)東京一致神学校「英語課ニハ数学ハ東京大学予備門同様ニ御教授被成候哉」

(二)「貴校之神学課ニハ英語ト邦語之御区別アルヤニ伺居候、何卒両課之教科御知」らせいだきたい、と頼む。(43:293)

九月二十九日

夜、第二教会会員の総会を開き、教会規則を議決する。(42:581)

九月

M・L・ゴードンは自宅に信徒数名を招いて下京伝道を始める。(F10:2)

十月一日

この頃より浜岡光哲と協議のうえ、京都府下において二、三十人の発起人を募り、募金の額および方法を定めたのち、近畿各府県に拡大してゆくこととし、まず京都府下の有志家に働きかけて発起人になることを依頼する。(41:176, 186)

田中原太郎に手紙を送り、法律専門校の設立につきその発起人となつてほしいこと、および近日発起人会を開き、発起人の心得、資金募集方法を協議したいことを伝える。(43:245)

十月二日

田中原太郎よりこの日付で返答が来る。依頼された法律専門学校の設立発起人になることを辞退、普通の賛成者の中に入れるよう伝えてくる。(F684)

十月四日

大学設立発起人加名の依頼書を山本覚馬・浜岡光哲・中村栄助との連名で京都府郡区の常置委員宛に送る。(41:186)

田中原太郎に再度書簡を認め、発起人への加入を願う。「万一貴兄ニシテ御辞退アラハ恐ラクハ郡中ニテ誰者人モ承諾スルモノハアルマジ……発起人ヲ募ルノ成否、特ニ貴兄ノ承諾セラル、ト否トニ関スヘク候」(43:246)

十月四日

十月五日

西村「七三郎か」に面会して、大学発起人になることを依頼する。
また、この頃、浜岡光哲の紹介により市田文次郎・内貴甚三郎・能川登と会い、発起人になる承諾を得る。(全1:176, 186)

四・五日の両日、頭痛、胸部に痛みを生じ、読書をやめる。(全3:243)

徳富猪一郎に発信、「大学設立之目算も有之、已ニ京都府下ニ於而、逐々着手、賛成家を募始め、成さゞれば決而止ましと存居候得共、成功之日ハ恐クハ近キニハあらざるへし……」と決意を述べる。

また大江義塾の一書生が援助を求めて上京して来たが「小生ニハ此一兩年ハ約あり不可避之義務を尽し居候間、小生ニハ一寸都合出来兼候」と知らせる。(全3:247)

第二教会の明治十五年度報告会を開く。(全2:531)

十月十日

京都商工会議所の高木文平に会い、発起人になる承諾を得る。(全1:178, 183)

十月十一日

磯野小右衛門に大学設立の話をし、創立前からの経緯もあり、ただちに発起人になる承諾を得る。

(全1:178, 183)

丹波の田中源太郎に会う。大学発起人になるよう頼むが、近年の不景気を理由に時機尚早と断られる。三丹地方の巡回より帰った中村栄助が来訪、田中のことにつき協議した結果、高木文平に相談することと決める。(全1:178, 183)

新築校舎「彰栄館」の定礎式次第決まる。(全1:246)

十月十二日

この朝、高木文平を訪問し、田中源太郎を発起人に加えることを相談する。高木は、田中に一応会ってみるが、「見込ノ違フ所ヨリ」早急に話が運ばないこと、再三頼んで応じなければ、賛成者だけで

發起人となり、募集計画を進めるしか良策がない、と述べる。高木へ行く途中、浜岡光哲に立ち寄り、帰途、市田文次郎を訪う。(全1:178)

新築校舎の請負入札の要領を建築関係者に送付する。(全1:216)

西日本全域に大風雨。(H14:173)

十月十六日

越後与板の三輪振次郎に発信、「女学校ニ御委託ニ相成候女生方御兩人共御丈夫ニ而御勉強被成候間御休慮被下度候」また先日、神戸の二宣教師が新潟へ移ったことも伝える。(全3:248)

十月十七日

煉瓦建校舎の入札を午後二時よりグリーン宅で行う。尾滝菊太郎が落札する。請負高七千五百円、十一月上旬より普請に着手する。(全1:168, 248, 全3:249)

松山高吉来訪、原田助を神戸英和女学校〔現在の神戸女学院〕の教師として招聘することを相談、原田を交えて協議の結果、一カ月だけの約束で原田は承諾する。(J15:41)

十月二十三日

福井の信徒に夏の旅行についての礼状を出す。(全3:250)

十月二十五日

尾滝菊太郎と新築講堂の建築について契約をする。(全1:248)

十月二十六日

旧約聖書翻訳事務に関して全国より常置委員十二名を選ぶこととなり、第二教会より新島・市原・森田の三名をその選挙委員に選ぶ。(全2:582)

十月

伊東熊夫・西村七三郎・安本勝治・西堀徳三郎・下妻庄右衛門・竹鼻仙右衛門ら大学設立の發起人になることを承諾する。(全1:188)

和歌山の中西光三郎より子息の教育を依頼され、新島より大学設立發起人になることを依頼、承諾を得る。(全1:183)

アメリカン・ボード宣教師O・H・ギューリックはエディンバラ医療伝道会の宣教医T・A・バームが引き揚げるにつき、新潟県下の伝道を引き継ぐ。(F1:78)

十一月四日 第二教会において「此ノ人ヲ観ヨ」と題して説教を行う。(42:151, 582)

十一月七日 尾滝菊太郎より工事請負に際して見許金三百五十円を受け取り、この金と契約書をD・W・ラーネツドに預ける。(41:250)

十一月八日 高梁教会の森本介石の按手礼式に出席のため京都を出発、岡山への船中で杉村と倉敷の木村夫人に会い、同道して三番「港」まで行く。(45:200, 240)

十一月九日 岡山の教友と一緒に高梁に行く。(45:240)

十一月十日 午前は野外親睦会、夜は大演説会が催され、新島も弁士の一人として「道理ト信仰ノ関係」につき演説する。聴衆六百人。午前中、森本介石の按手礼式を行う。(45:240)

* 九〜十二日までの新島の記述について(45:200, 240, 46:221)の間に若干の相違が見られる。ここでは和文の日記(45)に従った。なお森本の授按日については「十一月第一日曜〔四日〕」(F16:9)、「九日」(46:221, J40:190)の記事もある。

十一月十一日 高梁教会において午前、祈禱会、午後、聖晚餐が行われる。伊勢時雄が説教をし、ケーリと森本が晩餐を司る。(45:200, 240, 46:221)

十一月十二日 笠岡からきた婦人三名に案内されて伊勢と共に笠岡に向かう。この夜、柚木方において祈禱会を開く。(45:200, 240)

十一月十三日 午後、製糸場において演説する。聴衆百十六人。江浪家で夕食をご馳走になり、その後、説教所にお

いて話をする。聴衆三百人。妨害するものもなく、熱心に聞く。伊勢と共に柚木方に泊まる。(45: 241)

十一月十四日
笠岡より岡山に戻り、十九日まで逗留する。ベリー宅で金森・伊勢・松山らと「諸事を議す」(45: 241, J 40: 190)

* "On the 13th we....returned to Okayama, The people were waiting for us and they were ready to get up public preaching. I was sleepless for many nights, and unable to do any thing." (46: 221)

十一月十五日
夜、劇場において演説会が開かれる。「新島の出欠不明」(J 40: 190)

十一月十九日
J・C・ベリーが一カ月ほど岡山で休養するようにと勧めるのを振り切って、新島は、この夜、帰京する。ベリーは、この夜、ただちにボストンのN・G・クラーク総主事に手紙を出す。新島を来春早々外国で四カ月休養させることはできないだろうか。彼は過去三年を通じて疲労がますます重なっている。彼自身の健康と伝道上の利益を考えても、彼に長期の休養が必要である。長い船旅をしてアメリカか、それよりもむしろ中国で休養を取ることが望ましい、と記す。(E19-a)

十一月二十日
京都に帰る。新島公義は実父の植栗義達が病氣のため神戸より船で安中に帰る。二十四日、植栗義達死去。(45: 201)

十二月四日
公債丙号五百円、二七一が当籤する。(45: 201)

十二月七日
近江八幡に行く。大津よりの船賃三十七銭(上等)、八幡新丁の島田新太郎・高田義甫の二氏に面会する。この夜は宮前の松前屋兵四郎方に泊まる。(45: 241)

十二月八日
八日市に行き、午後、市辺村で説教、島崎吉三郎の妻女に洗礼を授け、聖晚餐を守る。出席者は八名。

十二月九日 夜、村民を集め「ローマ人への手紙」八章三十八節について説教する。(全5:241)
彦根での説教の準備「？」をする。題名は「悔改」「基督教ハ独一真神ノ教ナリ」(全2:122, 163)

十二月十日 午後九時より祈禱会を開く。集まるもの男女各三人。(全5:241)

午前、八日市を出発し彦根に行く。積雪一尺。夜、祈禱会を開き、偽りの神と真神と無神論の結果について説教する。信徒のほか六、七名が出席する。(全5:242)

十二月十一日 午前、午後、聖書の会読あり、夜は晩餐を守る。(全5:242)

十二月十二日 午前、広田宅において祈禱会を開く。中島・加藤、長浜の藤井友三郎のほか婦人六、七名が集まる。

「霊ノ劔」について説教する。(全5:242)

*「衣服ヲ売リテ刀ヲ買ウベシ」(全2:167) 参照。

十二月二十一日 朝九時より神学生の演説、午後一時半より煉瓦建校舎の定礎式を行う。この日、試験終了、冬休みに入る。(全1:250, 全3:252)

十二月二十三日 第二教会において「衣服ヲ売リテ刀ヲ買ウベシ」と題して説教を行う。(全2:167)

十二月二十八日 改正徴兵令発布される。(全1:251)

十二月二十九日 鴨猟のため琵琶湖畔に赴く。(全3:252)

十二月三十日 「安息日故全く銃猟ハ打捨、思を耶穌聖教ニ寄せ静ニ一日ヲ送」る。(全3:252)

十二月三十一日 琵琶湖畔の宿で未明に目覚め、日本の教化を思つて眠れぬまま、外遊後、郷里の高知にある板垣退助に一書を送る。(全3:252)

第四章 再び米欧諸国へ

一八八四～一八八五年

明治十七年（一八八四）四十二歳

一月一日

晴、学生らが数人ずつのグループに別れて年賀のため来訪する。午前中に訪れた池袋清風によれば、応接室の壁面に飯盛山の白虎隊の石版図が掲げられていたという。また池袋の日記によれば「今歳旦ハ年内ヨリ徴兵新令ノ騒ニテ生徒多ク帰郷シ……例年ノ如ク新年懇親会等ノ段ニハアラス」と記されている。（J 93—上：8）

一月

「改正徴兵令発布ニ付校中非常ノ困難ヲ来タシ百五十人ノ内四十人計帰省シ該令ヲ逃ル、ノ策ヲ為スニ取懸レリ」（全1：251）

一月二日

大和郡山に行く。（全5：243）

一月三日

大和郡山教会設立式、成瀬仁蔵牧師按手礼式に出席、新島按手礼祈禱を行う。同夜、演説会が開かれ、新島も加わる。（全2：582, 全5：243）

一月四日

郡山の朝日座で昼夜二回説教会を開く。（全5：243, J 40：190）

一月五日

朝、松山高吉と一緒に大阪に向かう。大阪の荒木屋で松山に蕎麦をふるまう。（J 40：190）

一月六日

午後三時すぎ池袋清風が来訪し、年始一週間の感謝祈禱会を第二教会において、第一、第三教会と合同で行うことを報告する。新島より邦語神学生の使用する教科書を渡す。（J 93—上：17）

一月七日

月曜日、チャペルにおいて第二学期開業式、新島は改正徴兵令にふれ演説する。（全1：251, J 93—上：17）

一月十三日

第二教会において晩餐礼が行われる。午後二時よりゴードンの説教、ラーネッドが教員六名および谷口八兵衛に洗礼を授け、新島が晩餐礼の司式をする。(42:58, 193—194:27)

一月十四日

伊東熊夫より郡部常置委員のうち伊東と丹波の川勝光之助以外は発起人を辞退あるいは未定である旨を知らせてくる。(41:179, 189)

新島不在中に池袋来訪する。(193—194:28)

宣教師来日二十五周年を記念して、夜、京都三教会合同の感謝祈禱会を開く。新島も奨励を行う。また特別の聖霊を祈求するため、この週は毎夜、祈禱会を開くことにする。(42:583)

A・ハーディよりこの日付で新島に手紙が出され、スエズ経由でアメリカへ来るように招待される。

「君は自分の健康にちよつと触れる程度だが、宣教師団はそのことを深刻に考えている」と述べる。

春になると新島はアメリカン・ボードの運営委員会より「必要とされるだけの期間にわたり休暇を取ること」を正式に要請される。(410:365)

一月十五日

N・G・クラークよりこの日付で来信、休養のため渡米されたい、長い船旅が良い。必要な経費は神戸の宣教師ジェンクスが用意する、と記す。(12436)

新島、朝のチャペルにおいて今回の徴兵令改正につき演説、西京巡察に來た官員に徴兵令の不当を訴えたこと、東京へ行って政府に運動することを述べる。またキャンパス内で出会った池袋清風より、寮室の日当たりが悪く、寒いので部屋替えを求められる。(193—194:29)

安中の隣村・郷原の親戚、中島浅五郎よりこの日付で年賀状が来る。(11739)

徴兵令の改正による影響を知るため適齡者および同免除者数を調査する。(41:76)

一月十六日

一月十九日

夜、新島宅において大学設立の仮発起人の相談会を開き、浜岡光哲・高木文平・伊東熊夫・田中源太郎・川勝光之助ら十二名が来会する。協議の結果、(一)「同志社大学校設立旨趣」に法学部設立とあるを文学部設立と改め、その中に歴史・哲学・政事・経済の諸科を含める (二)発起人十七名を定める (三)浜岡光哲の起草した発起人および資金募集の方法を仮案とし、これに各々意見を付して来る三月に大会を開くこと、を決める。また「同志社大学校設立旨趣」に「年々四千円ノ利息」を生ずべき元金とあるを「三千円ノ利息」と改める。(全1:189)

* 池袋の日記(193)、一月二十日の項に、昨夜、太政官と京都府の役人を新島宅に呼んで大学設立について談話、とあるのは、仮発起人会の誤りと思われる。

一月二十日

群馬県九十九村の柏木義円の受洗を聞き、祝詞を送る。(全3:256)

一月二十一日

新島、グリーン宅を訪れ、綱島「佳吉」を交えて第三教会信徒の葬式について打ち合わせをする。

(193—E:38)

一月二十三日

河原林義雄に手紙を出し、専門校創立見込写字版を送り、意見を聞く。(全3:257)

一月二十四日

去る一月十九日の決議に従い、発起人および資金募集の草案を発起人十七名に郵送、意見を求める。

(全1:190)

グリーン宅を訪れる。(193—E:42)

一月二十五日

朝七時半よりチャペルで演説する。「諸種ノ罪中謫偽許卑劣ニシテ当人ヲ怯懦ニナス者ナシ」(193—E:43)

一月二十七日

新島より生徒に対し、来る三十一日の午前、世界学校のための祈禱会、午後、奉教記念会をチャペル

一月二十八日
において行くことを知らせる。(J93—上:43)

一月三十日
中村栄助に発信、専門校創立見込書につき意見があれば届けてほしい、と頼む。(全3:256)

曇、朝、チャペルの時間に生徒に上京の挨拶をする。徴兵猶予の特典を得ること、大学設立につき政府と交渉すること、および上州甘楽教会の設立に立会うためである。(J93—上:46)

京都を午前十時四十五分発、神戸の西村旅館の周旋により、午後五時出帆の高砂丸に乗船する。(全5:243)

一月三十一日
雨降ったりやんだり。紀州、遠州の山々を望んで漢詩を賦す。北風弘浪…… また休言世事多艱…… (全5:243)

二月一日
午前四時横浜に入港、夜明けを待って六時半ごろ上陸する。船内で知り合った大阪備後町井池角の吉田徳三、江戸堀四丁目の黒田善助らと共に本町四丁目の松木屋で休息する。午前十時十五分発の汽車で東京に行き、午後、南伝馬町一丁目の警醒社に小崎弘道・湯浅治郎を訪ねる。神戸の鈴木清に会う。(全5:244)

朝、中村正直を訪ね、徴兵令につき文部卿宛上書の写しを借る。続いて高田専門学校〔東京専門学校→早稲田大学〕に行つて幹事の秀島家良に会い、同校より文部卿に提出した文書の写しを見る。(全5:244)

* 小野梓とも徴兵令特令のことにつき会う。(G10:509)

札幌独立教会の会堂建築費に関する札幌農学校学生とメソヂスト教団との間の事情について知る。(全5:245)

二月三日

安息日、小崎弘道の「東京第一」教会に行き、説教する。説教後、頭痛を覚え、医師の診察を受けたのち、人力車で宿所の京橋山城軒に帰り、臥床する。夜、長谷川某来訪する。(45:266)

二月四日

臥床、大雪の中、津田仙・木村熊二が山城軒の新島を訪問する。雪五、六寸積もる。(45:246, 179-1:66)

二月五日

臥床、小崎弘道・宇賀・中井・井深の諸氏来訪する。(45:246)

二月六日

気分少し良く、入湯する。神田美土代町の三河屋より三回洋食を取る。古沢滋・ホイットニー・内村・湯浅・浮田・津田の諸氏来訪、出版のこと、伝道のことにつき話す。とくに古沢に西郷従道、山県有朋に面会できるよう周旋を依頼する。(45:246)

二月七日

午後、長田時行・安川亨来訪する。「○○○○二氏ノ密ニ○○ニ奏シ、○○教公認ノ事ト、一夫一婦ノ制ヲ立テ賜ハン事ヲ勸メラレタル由」を聞く。夜、条約改正の策について工夫する。(45:249)

二月八日

朝五時半より起きて、条約改正の策を記す。津田仙より連絡があり、午前八時半宿を出て「伊藤博文」公を訪問、徴兵令のこと、キリスト教公認のこと、一夫一婦制のことについて話をする。牧野伸顕に書簡を送る。(41:450, 45:249)

二月九日

早朝、牧野より回答があり、大山陸軍卿はいつでも会うとのこと、早速九時前に大山を訪れ、徴兵給予の特典について陳情するが、朝令暮改はしないとの冷やかな返事に、大いに失望「内閣ノ輩ニ面接スルモ最早セン無キ」ことを悟り、意を決して熱海に向かうこととし、汽車、人力車を乗り継いで小田原まで行き、同地の湊屋で一泊する。(45:251)

二月十日

未明、小田原を出発、泥土の悪路七里の道を歩いて、朝九時半頃、熱海に到着、福島屋に投宿する。

午後五時すぎ「伊藤」公を不二屋別邸に訪ね、十時頃までキリスト教のことについて閑談する。(H
5: 252)

二月十一日
午前中入湯し、京都に手紙を書く。午後、魚見岬、伊豆山神社を巡る。夜九時出帆の汽船豆海丸に乗
り、東京に帰る。(H5: 254)

二月十二日
朝六時品川に上陸、馬車で新橋まで行き、富士見町の〇〇公「西郷従道か」を訪ねるも不在、牧野伸
顕を訪う。午後、教友続々来訪、古沢滋も来て品川弥二郎を紹介すると言う。(H5: 254)
内村鑑三来訪。内村の将来のこと、とくに札幌独立教会のことについて懇談する。新島、多忙にもか
かわらず、翌日午後四時に再び会うことを約束する。(J82: 39)

二月十三日
早朝より品川弥二郎「農商務大輔」を訪問し、徴兵猶予につき〇〇公を説得するよう要望する。
〇〇公「西郷か」を訪問するが来客多く、明後日訪問することを約束して帰る。上二番町に郷純造の
家を訪う。更に文部省に九鬼隆一を訪ねるが、午後訪問するように言われ、午後再び行く。私塾には
徴兵令の特典を与えがたい旨を答えられる。「何ゾ無神経ナル答ゾヤ此ノ面会ハ先ツ無効ト見做サ、
ルヲ得ス 嗚呼」。この夜、築地のリンゼー宅 Thomas Lindsey に移る。(H5: 255)

* T・リンゼー、スコットランド一致教会派の宣教師、「一八八一年来日、明治学院で教える。

昨日に続き内村鑑三に会う。(J70: 386)

二月十四日
牧野伸顕を訪い、智徳並行の教育について語る。午後、牧野が訪れ、兄の大久保利和としなに会うため明十
五日午前十一時半に招待したいと言う。午後リンゼー方に井深梶之助が来る。五時すぎより小崎弘道
をさそい津田仙の家へ行く。そこで思いがけず青江秀に会う。夕食後、祈禱会が開かれ、こもこも祈

り、かつ談話する。この夜、十二時半に就寝。(45: 256)
朝五時半起床、祈る。六時半朝食、富士見町に〇〇公を訪ね、学校の組織、目的について説明し、徴兵猶予について陳情する。〇〇公より文部卿に伝える旨の約束を得る。十一時、郷を訪問、更に十一時半、大久保利和を訪ね、午後一時半まで懇談する。同人より父親・大久保利通の写真を贈られる。

(45: 258, 12006—55)

N・G・クラークはこの日付で新島宛に手紙を出す。贈られた写真のこと、忙しくても健康のために今夏は他所で休養し、秋のアメリカン・ボード第七十五年会 Diamond Anniversary に出席すればよい、その時はA・ハーディの援助でゆっくり休めるだろう、と伝えしる。(F237)

二月十六日 午前、警醒社で開かれた翻訳委員会に出席する。(45: 259)

二月十七日 午前、麻布の教会に出席、岡部長職、青江秀来訪。午後、古木〔文部卿の大木喬任か〕を訪問する。

また小崎弘道と共に青江を訪問、西教史について話す。湯浅治郎・宇野作弥および内村鑑三と渡瀬が築地の宿所に来る。さらに牧野伸顯より来信、メンディストの老牧師が来訪する。(45: 259)

二月十八日 田中不二麿を訪ね、徴兵令の特典について陳情するが、十分な回答を得られず失望する。「無精神」。

津田、黒田の家を訪うも不在につき築地に帰る。午後、津田・長坂来訪。京都に帰る新島を湯浅・小崎・青江の三名がステーションまで見送る。午後五時、尾張丸に乗り横浜を出帆する。(45: 259)

二月二十日 朝七時神戸に上陸、海岸四丁目の安本で休憩する。(45: 260, 193—上: 75)

新島は、この朝、徴兵問題につき上京の結果を生徒に報告、政府の意見、東京私塾の動向を説明したのち「今ヨリハ正良ノ私塾ハ倒レ、有名無実ノ官公立校多ク出デン、好シ我同志社ハ仮令生徒悉ク去

ルモ依然トシテ此相国寺前ニ建置クベシ」と述べる。(J83—上:75)

二月二十四日

日曜日、午後二時より第二教会において「目ヲ挙ゲテ見ヨ」の説教を行う。「其熱心及ヒ当時ノ我日本、我基督教に就テノ事情至レリ尽セリ、聴衆肅然大ニ感ス」(全2:173, J93—上:79)

二月二十六日

中村栄助を夕食に招く。(全3:253)

二月二十七日

土倉庄三郎より数日前に届いた手紙を、この日読み、返書を認める。「同志社女教師より奉呈候処之書簡ニより大ニ御心配被成候よし」、この日、新島は学校に行つて土倉の両嬢に面会「御書面之趣并御双親様之御愛情、其上向來御心配之趣懇々陳述し置候間、向後決而不都合之事ハ有之間敷と奉存候、小生帰宅候事ならば右様之御心配ハ不相懸ものを、小生も留守、外ニ女教師ニハ相談相手之無之処より又御心配之余り右様心急ハしく書簡を呈せし事と被思候」と述べる。(全3:259)

二月二十八日

片岡健吉、同志社在学中の山脇「英信」・足達「通衡」に面会のため、新島を訪ねる。(J10:79)

* 片岡健吉、のち第五代同志社総長(在任一九〇二—〇三年)となる。

二月二十九日

金曜日、午前七時半より公会「チャペル」において演説する。(J93—上:86)

二月

改正徴兵令に対する意見書の草稿を書く。(全1:81—89)

三月五日

日本基督教に關する調査のため東京の小崎弘道に統計表を求める。(D12)

三月七日

井深梶之助に発信、お申し越しの牧師・伝道師・神学者の姓名調査はイービーの日本伝道見込書に賛成しての調査なのか、または大親睦会委員の調査なのか、少々合点の行かぬところがあり、また自分の一存では計り兼ねるので、今一度調査理由を知らせてほしいこと、また自分は近日アメリカに行くので誰か別人に頼んで頂きたい、と記す。(全3:260)

三月八日

糯米するベリーを神戸メリケン波止場に見送る。船中で板垣退助に会い、ベリーを紹介する。(J15: 46)

三月九日

二人の著名な人物(うち一人は板垣か)と宗教問題について話をする。(H6: 223, H10: 266)
A・ハーディに神戸より手紙を書き、アメリカ再訪に関し礼を述べる。(H6: 222)

三月十日

神戸英和女学校の朝礼において、夫人の品位をすすめるにはキリスト教によるのほかなし、との講話をする。(J15: 46)

古沢滋よりこの日付で来信、欧米旅行に際して内外務卿に内談してにおいては如何、とのアドヴァイスを受ける。(F686)

三月十二日

田口卯吉に手紙を送り、『日本開化小史』を求める。(D12)

村上愛宕郡長と比叡山借地について協議する。(D12)

陸軍省の日本地図を買う。(D12)

三月十二日~十七日 同志社にリバイバル起こる。(E12: 209)

三月十二日

森本介石に発信、「前月大阪神ニあり大ニ奔走し又脳をイタミ本日ハ蟄居仕居候」「小生之東上セシハ決し而弊校之為ニ「徴兵猶予の」特典を乞ヒシニあらず、痛く政府之偏派なる所為を駁し、不当ニし而法令を私するを痛論せし所也、一言も同志社之為ニトハ不申、大ニ政府之教育を其掌握内ニ取りプライウエト・オンドンテーキングをソツプレスせらるゝを論弁したる也……勝敗ハ天ニあり、神意ニヨリ神之名ニより敢而為すは小生輩之分也」と記す。(H3: 262)

三月十三日

グリーン宅を訪う。(J93-E: 108)

三月十四日

三月十六日

この夜半三十余名の生徒がチャペルにおいて祈禱会を催す。(F1:78)
同志社のリバイバル、この夜、最高潮に達し、百五十人の生徒が夜通し眠らず神に祈る。この期間中に学校全体が変化し、三十七名が受洗を希望し、十人を除くすべての生徒が自らをクリスチャンと考えた。(E7:171, E12:207)

* (E8:35)では、リバイバルは三月十日に起こった、と書いている。

三月二十日

新島、デイヴィスら学校当局は生徒を礼拝堂に集め、リバイバルの模様を伝えるため一斉に地方伝道に出かけるのは、試験後の休暇中にするよう説得する。これは校内にリバイバルが始まって以来、規則を破って学校を休み、地方伝道に出る学生が増えたので、この説論となったもの。(J93—E:124)
陸奥宗光に手紙を出し、来月七日神戸発のP. & O. 社の汽船で出発する予定であることを告げると共に、先般は大阪で度々参館、また神戸では「ビショップ・ポール^{（ビ）}方迄随行仕、種々御高説を拝聞するを得」たことに「き礼を述べる。(全3:263)

三月二十二日

* ビショップ・プール Bishop Arthur W. Poole (CMS) 1883. 12. 18~1884. 9. 29 在日。

* 陸奥宗光はこの年四月二十六日にフランス船オセアニック号で横浜を出発、渡英した。(J113:369)

夜、片桐清治、村井知至がリバイバルにより異常に興奮した木村経夫を伴い、新島宅に預ける。
(J93—E:136)

田中源太郎よりこの日付で来信、大学設立について市田と相談した結果、(一)有志を募るほか、区長らの勧奨により財産家に呼びかけて十分根回しをすること (二)知事の協力を要請すること (三)今後の会合には新島も必ず出席して運動を推進すること、を希望してくる。(F686)

三月二十三日 新島、第二教会において説教をし、今回のリバイバルにふれ、生ずべき弊害を戒める。(J33-E:137)

三月二十四日 病氣保養と学術研究のため四月七日より欧米を歴訪するにつき、兵庫県庁への添書を作成してほしい旨、京都府へ願ひ出る。(E294, D1:85)

三月二十五日 アメリカン・ボードのN・G・クラーク総主事に、四月七日に神戸を出帆、ホンコンに向かうことを知らせる。(A6:223)

三月二十六日 校庭で池袋清風と会い、今回のリバイバルの模様を欧米に紹介したいので、池袋にその状況を記述するように頼む。(J33-E:140)

三月二十七日 同志社の朝礼において、アメリカへ出発するに際し、生徒らに所感を述べる。京都府より兵庫県庁への添書を受け取る。(D1:85, J15:47)

三月二十八日 洋行免状の発行を兵庫県庁に申請する。(D12)

三月三十日 リバイバルの事実、各人の経験等を聞きたいが、これらの人々が地方伝道に行っているため、その聞き書きをボストンへ郵送するように、池袋に頼む。(J33-E:146)

三月三十一日 東京にいる中村栄助に発信、(一)去る二十二日付の手紙を受け取ったこと (二)先夜、中村の母親が新島を訪れ、東京に滞在中である中村の帰京を促すよう依頼されたこと (三)新島のアメリカ行きは来月六日と決まったこと、を知らせる。(A3:264)

三月 寺町通高辻上ルの堀写真館で写真を撮る。(E2006-48)

四月一日 午後三時半より雨天にもかかわらず商工会議所において専門学校創立につき集会を開く。府下七十余

名の有志者が集まる。田中原太郎の司会によりJ・D・デイヴィス・市原盛宏・新島公義・山本覚馬・新島襄らがこもいも立って演説、基督教道徳に基づく学校の設立について述べる。午後十一時散会す。 (全1: 190, 全3: 265, 全5: 317, D12)

四月二日

前日に続いて同所で相談会を開き、二十二名が出席、綱領・仮則・募集金仮則を決定する。なお、校名は「明治専門学校」と決まる。募金額七万円。 (全1: 191, 全5: 318, D12)

四月三日

新島の欧米旅行を記念して午前十一時より第五寮西側の庭で教員・生徒らと記念写真を撮る。午後七時より第二教会において送別会が催され、同志社の生徒、京都三教会の信徒ら三百人が集まる。J・D・デイヴィス・大西祝・高松彝・伊勢時雄らが送別の演説、新島が挨拶をする。 (全5: 320, D12, I 2-6, J 93-1: 155)

四月四日

朝、沢辺正修が来訪する。田中原太郎・高木文平・浜岡光哲に招かれて中村楼の送別会に八重夫人・山本覚馬と共に出席する。 (全1: 103)

専門学校発起人により理事委員として京都府下の区部理事委員七名、郡部理事委員十四名を選ぶ。 (全1: 192)

留守中の同志社のことにつき伊勢時雄・松山高吉と相談する。 (全5: 320)

留守中は山本覚馬が代理となり、内務は市原盛宏、外務は新島公義が補助する。 (全1: 232) 旅行の準備をする。八重夫人と新島公義がこれを扶ける。夜、非常の頭痛を覚える。 (全5: 320)

四月五日

市原盛宏・森田久万人に明治専門学校設立発起人の代理を委託する。 (全1: 194) 午前九時半、年老いた両親に別れを告げ、八重夫人と共に家を出る。午前十時四十五分、府下の紳士、

四月七日

四月六日

三教会の信徒、同志社生徒ら百余名に見送られて七条ステーションを發つ。池袋は生徒十四名のリ、バ
イバル体験を記した「聖霊降臨記実」を駅頭で新島に手渡す。午後、大阪の西村輔三の家で入歯を求
め、次いで大学援助を依頼のため鰻谷の広瀬宰平を訪う。京都からついてきた新井毫・沢辺正修らと
自由亭で昼食、午後四時半、大阪ステーションに近い清観楼において大阪四教会の牧師・信徒らによ
る送別会に出席する。午後六時二十八分の汽車で神戸に向かう。神戸ではD・W・C・ジェンクス宅
に泊まる。(全5:320, 全10:268, E1103, D12, J93—E:157)

朝、アッキンソン宣教師と共に CMS のビショップ・プールを訪問、英国の知人への紹介状を渡さ
れる。また兵庫県庁「森岡昌純知事」よりパスポートを受け取る。神戸庵町三丁目の北儀左衛門より
お茶を贈られる。アッキンソンからホンコンのC・R・ヘイガー牧師 C. R. Hager 宛の紹介状を、
D・W・C・ジェンクスからはイタリアのプリンディシまでの切符(二九六・二六ドル)と小遣い四
十ポンドを渡される。午後三時、神戸教会で説教をする。午後四時、ハシケに乗り、英国汽船キヴァ
号 Khiva (ハリス船長、二〇一四トン)に乗船する。八重夫人はじめジェンクス・アッキンソン・湯
浅治郎・山路一三・中村栄助・原田助・甲賀ふじらが汽船まで見送る。祈禱して別れる。午後七時、
キヴァ号神戸を出帆、長崎に向かう。船中で英国に向かう田辺次郎一「田辺太一の子」に会う。海上
穏やかで、翌朝まで熟睡する。(全5:321, 全10:184, E1103)

この日より英文日記“Round the World”を書き始める。(E1103)

快晴、朝五時に目覚める。船は今治沖を航行中であつた。神学部学生のために祈る。夕方五時半に下
関通過、六時半には玄界灘にさしかかる。航路穏やかにして船酔いもなく、伝道会社の会計簿を整理

する。宮川経輝・J・D・デイヴィス・田中〔源太郎〕・八重夫人・新島公義・同志社生徒・A・ハーデイらに手紙を書く。(全3: 266, 全5: 322, 全10: 269, E1103, C4: 184)

四月八日

朝五時ごろ目覚める。五年生のために祈る。午前六時半、長崎に到着、朝食後ただちに上陸し、市内を見物する。ボートマンに三十銭で街を案内してもらう。今魚町の江崎栄蔵のべっこう店に行き、素晴らしい細工物を見つけるが金を持っていなかったので、買うのを諦める。外浦町の石田屋に行き、宮川経輝宛に伝道会社帳簿の送付を依頼する。散髪、入湯し、市内を見物する。(全5: 322, E1103) 八重夫人に発信、兩日の航海のこと、仕残した仕事について伝える。公義にも発信。キヴァ号、午後二時に出帆。ロシアの司祭に伴われてオデッサに行く二人の日本人青年が同船している。この日より外遊記を書き始める。(全3: 266, 269, 全5: 322, 全10: 269, E1103, 12-c)

四月九日

北西の風、好天。北緯二九度五八分、東経一二六度六分、二五八・五マイル。四年生のために祈る。午後熟睡する。(全5: 324, E1103)

四月十日

北緯二六度五一分、東経一二一度五二分、二九一マイル。午前中激しい降雨、のち曇。三年生のために祈る。(E1103)

長崎より八日に投函の第一信、この日午後五時半、留守宅に届く。(全3: 266, 269)

新島公義は田中源太郎を訪問し、専門学校の帳簿を委託する。(E1103, D12)

四月十一日
北緯二三度四六分、東経一一八度二一分、二七一マイル、雷あり。二年生のために祈る。(E1103)
第二教会において午後七時より同志社のリバイバルに際し地方伝道に出向いた生徒の報告会が開かれる。席上、新島公義より長崎発信の新島書簡を披露する。

十年空蓄西遊志 今日遂成天外身 巴里芳花倫動月 夢尋相国寺前人

(全3: 274, 全5: 323, E1103, D12, J93—上: 166)

四月十二日

雨、一年生のために祈る。午前十時ホンコン入港。正午頃キヴァ号を下船する。アメリカン・ボード宣教師C・R・ヘイガーを訪ね、ホテルの手配、市内の案内をしてもらう。ホンコン市庁・公園・墓地・アヘン窟・軍隊駐屯地を見物し、聖書販売のJ・R・テイラー、China Mail編集長のPulganにも会う。クイーンズ通のテンペランス・ホールに泊まる。(全3: 270, 全10: 267, E1103, 12—c)

新島公義は新島が長崎より書き送ってきた議員たちに謝辞を述べる。(D12)

四月十三日

日曜日、邦語神学クラスのために祈る。朝、ユニオン・チャーチの礼拝に出席し、J. Colville 牧師の説教を聞く。午後、Chalmers 牧師の中国語の説教を聞く。また船員礼拝にも出席してボルデン監督 Bishop Burdon の説教を聞く。(全3: 271, 全10: 270, E1103)

四月十四日

神学生のために祈る。ホンコンに滞在。八重夫人に発信、長崎出帆以来のことを知らせると共に「私ハ此身ヲ主ニ任せ候間、自身ニも別ニ心配不仕候」と述べる。また、この日はヘイガーと共に「監督ボルデンと申人の方へ訪ヒ行伝道之状況を相尋」ねる。(全3: 270)

ホンコンの日本領事館を訪ねる。町田実一・平部次郎・荒井郁之助の弟がいた。領事より中国の様子を聞く。(全10: 271, E1103)

四月十五日

英船チームズ号に乗り換え、午後四時半、ホンコンを出港する。大型汽船なので少々風波にもゆれず、航海に満足する。(全3: 272, 全5: 325, 全6: 227, E1103)

四月十六日

北緯一八度三〇分、東經一一四度二分、走行距離二三・二マイル、華氏八四度。〔以後二十日まで船の位置と走行距離のみ〕(L1103)

四月二十日

午後十二時半シンガポール着、安息日なので田辺と共に夕食まで P. & O. 波止場を散歩し、街の様子を見る。船が石炭を積み込むので埃と騒音に悩まされる。(全3:273, 全5:325, 全6:227, 全10:250, L1103)

四月二十一日

田辺と馬車でシンガポール市内、植物園を見物する。週刊誌とバインアップルを買う。午前中に帰船、午後四時チームズ号出帆、ペナンに向かう。(全3:273, 275, 全10:272, L1103)

四月二十二日

好天、北緯三度一分、東經一〇〇度四二分、マラッカ沖。(L1103)

田中源太郎・中村栄助・市原盛宏・森田久万人・新島公義ら山本覚馬宅に集まり、田中は明治専門学校の募集草案を、他の者は設立の旨趣を作ることを決める。(全1:194, D12)

四月二十三日

微風、朝七時、マラッカ半島の一小島ペナン着。きびしい暑さのため上陸せず、午後二時半出港する。(全3:276, 全5:325, 全6:228, 全10:272, L1103)

四月二十四日

田中源太郎立案の専門学校の募集仮案が新島公義を通じ市原盛宏に渡される。(D12)
マラッカ沖を航行、好天、暑。腹の具合が悪く薬を飲む。(L1103)

四月二十五日

新島公義は市原・森田と相談し、専門学校設立旨趣を起草することを決める。(D12)
午後スマトラ島沖を航行、同島の西南端にあるブロー・ウエイと呼ばれる緑の小島の美しさに感動する。北緯六度二分、東經九一度二三分、進度二八九マイル。(全6:228, L1103)

四月二十六日

船医に虫下し薬(除サナダ虫)を求めるが、薬なし。昼頃二時間ほどスコール。北緯六度二分、東經

四月二十七日

八六度四四分、進度二一八・一マイル。(全6:228, L1103)

日曜日、英語による礼拝が首席スチュワードによって行われるが、出席者はわずか。

A・ハーディ夫妻に手紙を書く。夕食時にある高級船員から、宣教師が乗っていると必ず嵐に出合うので船員たちは宣教師を恐れている、と聞かされ、気を悪くする。中国の内陸に派遣されている女性宣教師と知り合う。激しい降雨、北緯五度五三分、東経八一度三九分、二九八マイル。(全6:228, L10:273, L1103)

ホンコンへ安着の報、留守宅に届く。(D12)

リバイバル後、受洗志願者三十余名のうち二十七名に第二教会への入会を許す。(全2:585)

四月二十八日

好天、朝、スリランカの山頂が見えてくる。ヤシの茂った海岸を見る。暗くなる前に a point of galle を通過する。ロンボまで六十マイルの地点である。(L1103)

専門学校の理事委員ら山本覚馬宅に集まり、同校の規則を制定し、かつ新島公義に同校設立の旨趣草案の作成と五月二十日までの本部事務を託することを決める。(全1:194, D12)

四月二十九日

早朝、ロンボ入港、カイザー・ハインド号 Kaiser Hind に乗り換えたのち、田辺次郎一と馬車で Lakefew House に幽閉されているエジプト独立運動の志士アラビ・パシャ Arabi Pasha を訪ね、歓談する。彼より Ahmed Arabi と書いた自筆の名刺を贈られる。(全3:278, 全5:325, 全10:274, L1103, L1492)

四月三十日

ロンボの新聞によれば気温が華氏九四・九五度に上るとのこと、再び上陸することを諦める。午後三時、カイザー・ハインド号、ロンボを出港する。(全3:279, L1103)

五月一日

海上穏やか、北緯八度一三分、東経七〇度四七分、三〇四マイル。(E1103)

『同志社英学校設立始末』が新島公義の手により出版公表される。(A1:90, 252)

五月五日

早朝アデンに着く。天然痘流行のため上陸できず、石炭と水を補給したのみで、午前九時出港、紅海に入る。午後、海の難所“涙の門”を通過、六隻の船が沈んでいるのを見る。気温は華氏七五〜七九度、かなり涼しい。(A3:279, A5:326, A10:276, E1103)

五月八日

午前八時、十三の島を通過、風もよく、空も晴れている。(E1103)

新島公義による「明治専門学校設立旨趣」が脱稿、市原盛宏・森田久万人に送られる。(D12)

五月八日

この日より十日まで紅海を航行、シナイ山その他聖書に縁のある地名を聞き、「感慨転々胸ニ充来」ぬ。(A3:280)

五月九日

コロンボより紅海に至るまでのことを記し、八重夫人に送る。(A3:278)

五月十一日

デッキで日曜日の礼拝をする。昼食後、気分が悪くなる。熱は摂氏三八〜四〇度、恐ろしい夢を見、汗をかく。“不注意と愚かさ”のため夜まで医者に診てもらえなかった。医者にキニーネをもらう。

(E1103)

五月十二日

朝になると熱は退いていたが、体が弱り、何も食べることができなかった。夜になってパンとスープを取る。スエズに近付いたので荷物をまとめて、鍵を田辺に預ける。(E1103)

五月十三日

朝八時すぎスエズに到着、カイザー・ハインド号より下船し、鉄道で地中海沿岸のアレクサンドリアに向かう。夜十時、汽船スレイト号に乗船、すぐ部屋に入り、食事を取る。この夜はよく眠れる。

(A3:281, A10:276, E1103)

五月十四日

船上よりアレキサンドリアの市街を見る。スレイト号はあらゆる面で快適であった。午前十一時に出帆する。(全3: 281, 全5: 326, E1103)

五月十五日

「明治専門学校設立旨趣」を創立規則と共に新報社に送り、印刷する。(全1: 194, D12) クレタ島通過。(E1103)

五月十六日

ギリシア半島沖通過。(E1103)

五月十七日

山本覚馬・新島襄連名で「明治専門学校設立旨趣」を印刷、市田文次郎・田中源太郎・中村栄助ら理事委員に送ると共に、広く賛同者に配布する。(全1: 195, 全10: 257, D12)

八時ごろイタリア東岸のブリンディジに到着、午後三時の汽車でフォッジアを経由してナポリに向かう。沿線にブドウ畑とオリーブ畑を見る。(全3: 281, 全5: 326, 全10: 276, E674, E1103)

専門学校理事委員および増田充積・城多虎雄ら山本覚馬宅に集まり、義捐金取り扱い手続きを協議する。(全1: 194)

五月十八日

日曜日、朝七時ナポリ到着、サン・エルモ城から程遠くない高台にあるホテルに宿を取り、マルチーノ広場のスコットランド長老派教会(T・ジョンストン・アーヴィング牧師)の礼拝に出席する。午後はホテルで休息する。同牧師が宿所までちょっと来訪する。(全5: 326, E1103)

五月十九日

アメリカのフィラデルフィアから観光に来ていたウィリス夫妻 I. C. Willis の一家とベスピアス火山に登る。登山ケーブルに乗り、ガイドを雇って壮大な景色を楽しむ。(E1103)

五月二十日

ポンペイの遺跡を見物、写真を買ひ込む。(全3: 282, E1103)

五月二十一日

明治専門学校第一回賛成者七十一名の報告をする。『京都滋賀新報』は二十九日の紙上に広告掲載を

する。(全1:194)

五月二十二・三日 同志社の生徒ら大宮通寄場(今出川上ル二、三丁)において、両夜にわたり説教会を開く。僧侶ら

の妨害より始まり、やがてマキ、石礫を投ずる迫害となり、負傷者を出す。(F688, J 93—E: 224)

五月二十三日 ナポリを発ち、午後二時五十分ローマに到着、大きなバスに乗り、ウイリス夫妻に教えられていたナ

ツィオナーレ通一八一のマダム・フォン・クリューガー Madam von Krüger の家〔民宿か〕に行き、
十二日間滞在する。この日は疲れていたもので、どこへも行かずに休息する。(全3: 282, E674, E1103)

五月二十四日 バルベリーニ広場のJ・ゴードン・グレイ牧師を訪ねてアーヴィング牧師の手紙を渡し、さらにメル

セーデ通 Via della Mercede の日本公使館にアサノ〔浅野長勲か〕を訪う。アサノに公教育大臣への
紹介を依頼し、午後一時までの待ち時間をピンチョ Pincio で過ごす。午後はコロッセオ、フォ
ロ・ロマーノ、チェザーレ宮殿等を見物する。(E1103)

* 浅野公使は一八八三年五月離任、帰国している。

五月二十五日 日曜日、朝十一時、ポポロ門外にあるスコットランド長老派教会の礼拝に出席、J・G・グレイ牧師

が説教をする。夕方はナツィオナーレ通のワルデンシヤン教会の礼拝に出席する。(E1103)

五月二十六・七日 発熱。(E1103)

五月二十七日 新島公義、神戸のジュンクスを通じボストンへ荷物を送る。(D12)

五月二十八日 有名な Beatrice Cence を見にバルベリーニ広場へ行く。グレイ牧師宅を訪問、お茶をふるまわれる。
(E1103)

五月二十九日 朝、ヴァチカンの聖ペテロ大聖堂を見物、ラファエロの絵に感動する。午後、城外の聖パウロ大聖堂

五月三十日

五月三十一日

を見物する。(全6:229, 全10:277, E1103)

システイーナ礼拝堂を見物、またヴァチカンの彫像のギャラリーを見る。(E1103)

ペテロが幽閉されていたというマメルティヌスの牢獄を見る。そこに「初代法王といわれる」ペテロの彫刻があり、信者たちが相次いで像の右足の爪先にキスをしている。新島は「進みて法王に見^{まみ}へばやと思ひしも、法王を見るにハ何人に限らず跪き以て礼拝せずんば能はずと聞けば、余が膝も亦強情にして跪く能はずと冷^{にがはらひ}笑して立去れり……」その後、カンピドリオ広場のマルクス・アウレリウス帝騎馬像、市庁舎、カピトリノー博物館等を見物する。(全3:287, E1103)

* ペテロの像を前にして、新島はたんに偶像崇拜に対する嫌惡の情を示したものと思うが、これが後に、現実の法王に謁見のチャンスがあったが云々の伝説となる。

六月一日

グレイ牧師の礼拝に出席する。彼と共にエマニュエル二世記念堂を見物する。(E1103)

留守宅にセイロン島より発信の第三信(四月二十八日投函)が到着し、この日、第二教会で朗読される。(D12)

六月二日

グレイ牧師に伴われて公教育大臣を執務室に訪れ、やうにギドー・バイジ博士 Prof. Dr. Guido Baigi, Biblioteca della Vittorio Emanuele に会う。いくつかの質問をしたが、丁寧^{ていねい}に答えてくれる。グレイ牧師宅でお茶をご馳走になる。午後、馬車でアップピア街道に行き、サン・カリストゥスのカタコンベ^{カタコンベ} Arch of Dreus, カラカラ浴場を見物する。あちこちに遺跡があり、美しい景色に感嘆する。天候も良く、暖かい一日だった。(E1103)

六月三日

朝、テイラー博士を訪問するが、一時半のディナーに来るように言われる。それでG・バイジ博士を

再び訪ね、教育関係者への紹介状を書いてもらう。

- (1) The Rector of Univ. of Rome 宛 (2) The Director of the Collegio Romano [現在の Lyceum] 宛 (3) The Librarian Dr. Ottavio Grampini 宛 (4) 女子高校宛 (5) The Director of the Primary Education in Rome, Campidoglio 宛 (6) フィンツェの Prof. Carlo Puini 宛 (7) Prof. Emilio Teza 宛。

コレジオ・ローマーノの院長を訪ね、教室を見学、次いで同図書館へ行き、オッタビオ・グランビーニ博士に会い、話を聞く。大学では学長不在のため秘書に会うが、イタリア語なので全く通じない。テイラー博士と昼食ののち、彼の息子を伴って学長のところへ行き、通訳をしてもらう。次に彼と女学校に行くが、遅過ぎた。実に多忙な、ハードな一日だった。(L1103)

* この日の記述はハーディ夫人宛書簡(「二八八四年五月二十九日付」(全6:229, 全10:277))と一部重複する。
* フィンツェの Dr. C. Puini 宛(全6:230)では Dr. Piccini となっている。

六月四日

早起きをしてフォン・クリューガー氏と一緒にサン・ピエトロ・イン・ビンコリ教会、サン・ジョバンニ・イン・ラテラーノ教会、スカラ・サンタ教会、サンタ・マリア・マジョーレ教会を見物する。ローマの写真を買う。グレイ牧師とマダム・フォン・クリューガーに別れを告げ、午前十時三十五分発の汽車でフィンツェに向かう。午後六時三十分着、すぐに No.8 Lungarno della Grazia のマダム・シミ Madam Sini の家に行く。そこでナポリで別れたウイリス夫妻の一家と再会する。(L1103)

六月五日

聖書・伝道書印刷所のウイリス所長 Rev. James B. Wills を 51 Via Serravalle に訪ねる。ピッティ宮殿内のパラティーナ美術館に行き、メディチ家の収集した絵画を見物する。さらに東洋学者

六月六日

のプイニ博士 C. Pini を訪問中。日本の蔵書も多く、礼記や日本語の仏典を訳している人物である。(E674, E1103)

* フィレンツェに六日間滞在。

大学へ行き、もう一人の東洋学者セベリニ博士 Dr. Severini を訪問する。プイニ博士より年上で、日本の竹取物語を訳している人物である。病気のため十分に話を聞けなかった。次にフィレンツェ大学神学部校舎の裏手に住むレーベル博士 Dr. Revel を訪ねる。彼は同校のヘブライ語、ギリシア語の教師であり、彼から学校の制度・教科について詳しく聞く。この学校はイタリア西北部のワルデンシャン溪谷トレペリチェに予備学校 Preparatory school を持っているという。鉱物学の教授を訪ね、研究施設を見学する。家族に発信。(全3:281, E1103)

ジャパン・シッション第十二年会が、この日より十四日まで大阪川口三十番居留地会議所において開かれる。七日(二日目)の午前、日本基督教伝道会社委員の松山、宮川、市原は教会の組織計画 Plan for Church Association について報告し、同日午後の会議において討議された。

“Plan for Church Association

1. It shall be for fellowship and mutual help.
2. A Com. of five were elected to make draft of rules etc. etc.
Com. Matsuyama, Ise, Ichihara, Kozaki, Miyagawa.
3. This Com. shall ascertain the opinion of the churches on the three following points: and report at the next Annual Meeting.

(a) Name of Organization (b) Rule of Organization (c) Creed of Organization" (E24—e)

* これはたぶん組合教会の結成への最初の動きと思われるが、後考を待ちたい。

六月七日

午前中ウフィッチ美術館で過ごす。午後はベッキオ宮殿へ行き、サボナローラの火刑の場所を見る。夜はフーラー氏 H. G. Fuller が来訪、マダム・シンの家で過ごす。(E1103)

六月八日

十一時、マクドガル牧師 John McDougall の礼拝に出る。組織神学者のジモラット教授 Prof. Gymorat を訪問する。夜はマクドガル牧師の快適な家で過ごす。(E1103)

六月九日

再び大学に行き、前回見られなかった鉱物学、地質学のキャビネットを見学する。サン・マルコ修道院に行き、そこで J・キャンベル氏 Jimmy Campbell と知り合い、院内を案内してもらう。サボナローラの遺品や個室、また素晴らしいフレスコ画などを見る。キャンベル氏に昼食をご馳走になる。ウイリス夫妻一家がヴェネツィアに向け出発する。(E1103)

六月十日

朝、フーラー氏に案内されて Via Cavour 通の眼科医 Dr. Pardo に行くが、不在。午後再びそこに行き、目の診察を受ける。左目は普通、右目は十四番と処方され、Via Cernetani 通の眼鏡屋へ行き、十五番の眼鏡を買い、十一日に十六番を買う。大聖堂、鐘楼、洗礼堂、水道橋、ベッキオ橋を見る。マクドガル牧師の家で三晩過ごす。フーラー氏も新島のためにケンブリッジの友人に手紙を書いてくれる。夜、フーラー氏に伴われてサボナローラの伝記の著者ヴィラーリ博士 P. Villari に会う。新島の質問に対して丁寧な答えてくれる。(E1103)

大阪島之内教会において上原方立の按手礼が行われる。(全2:386)

六月上旬

新井毫、「明治専門学校設立旨趣」百部を携えて、伊賀上野・名古屋・静岡で遊説する。(全1:195)

六月十一日

朝、フーラー氏を訪ね、一緒に食事をする。前日のヴィラーリ博士との会見ノートのコピーを渡され、大いに満足する。フィレンツェ十時四十分発→二時三十五分ピサ着。駅の近くの Hotel de Mine-hova に入る。東洋学者のテザ博士 E. Teza を訪ねる。(E1103)

六月十二日

ガリレオ誕生の家を見、ピサの斜塔に登る。「北ハアピニー山を望み、西ハ地中海を見下ろし、其風景実ニ筆紙ニ尽し難く候」。マーケット、大学を見物。それより汽車で六時間半かかってジェノヴァに向かう。ピサ発十一時二十五分、ジェノヴァ着五時四十分。サンタ・マリア・イン・カリグナノのいちばん高いところから市街を一望する。Hotel de Landres に一泊。(全3:285, E674, E1103)

六月十三日

コロンブスの銅像を見る。ジェノヴァを朝十時十五分発、一〇三マイル走って夕方五時十分にトリノに着く。駅に近い Hotel de Suisse に泊まる。(全3:286, 全5:327, E1103)

六月十四日

メイユ牧師とウォーカー牧師 H. Meille, Robert Warker を訪ねる。(E1103)

六月十五日

朝、メイユ牧師のフランス語のプロテスタント礼拝に出席する。夜はウォーカー牧師とアシスタントのマッテア氏が説教した。二十人ほどの粗末な身なりの人々が出席、ほとんどが女性であった。(全3:286, 全6:230, E1103)

六月十六日

トリノで開催中の大博覧会を見に行く。(全3:286, 290, E1103)

六月十七日

エジプト博物館に行く。アメリカ領事ザイク氏 Albert S. D. Zeyk を 35 Corso Oporto に訪ねる。(全6:231, 全10:280, E1103)

六月十八日

再び博物館へ行く。メイユ牧師を訪ねる。ハーディ夫人に手紙を書く。(全3:290, 全6:229, E1103)

六月十九日

午前中にレンナ教授 Michele Lessona を Piazza Carignano に訪問、午後もう一度訪ねる。彼は

The Director of the National Host Room and also *secundellat.* of the town である。彼から英語を話せるトーレ博士 A. A. Torre (Corso Vittorio Emanuele 74) を紹介される。(L1103)

新島はこの日付の入った単語帳を残しており、英語・イタリア語の Torino, Piemonte などの文字が見える。(L890)

六月二十日

トーレ博士の案内で Via Po 通から遠くない市中に点在するトリノ大学の諸施設や St. John's Hospital を見学する。トーレ博士の使っている世界で最高レベルの顕微鏡等を見、五時間もかけて親切に学内を案内される。お礼としてホンコンで買った中国のバスケットを贈る。(L6:230, L1103)

* トーレ博士に紹介されたこと、および大学・病院を見学したことは六月十八日付のハーディ夫人宛書簡 (L6:330) にも書かれているが、ここでは日記に従った。

六月二十一日

早起きして Supergo に登る。朝早いためケーブルカーが動かず、歩いて登る。頂上に一時間とどまる。美しい教会があり、眺めも素晴らしく、遥かに広がるワルデンシヤン溪谷のパノラマをスケッチする。汽車とケーブルカーを利用して帰る。

午後三時半トリノを出発、アメリカ領事より休養地として勧められていたトレ・ペリチェ Torre Pellice に向かう。同六時二十分に到着、Hotel Iours Torre Pellice に入る。経営者は英語の話せる陽気な男である。一日六フラン。トレ・ペリチェはトリノの西南にあたり、大学と女学校があり、住民はプロテスタントを信仰している。(L5:328, L6:231, L1103)

第一国立銀行京都支店と明治専門学校〔創立事務所〕との間で預金に関し契約を結ぶ。(D12) 選挙の日で、朝、トランベットの音を聞く。プロテスタント教会へ行く。午後から激しい降雨、雷、

六月二十二日

華氏七〇度〔摂氏二一・二度〕。(E1103)

六月二十三日

月曜日、雨、華氏六六度。前夜は三時半まで眠れなかった。トロン教授 Prof. Tron とシャルボニエール氏 John Daniel Charbonnet を訪ねる。(E1103)

六月二十四日

雨が降る。雨上りは山の緑が美しく、素晴らしい眺めである。(E1103)

スエズよりの第四信、留守宅に届く。(D12)

六月二十五日

シャルボニエール夫人の経営する “Villa Molard” へ行き、下宿の期間を決める。ホテルより一フランク安い。同夫人は下宿人を置いており、夫のシャルボニエール氏はワルデンシャン大学の講師で、ジュネーブへ行って留守だった。(朝食) 卵、コーヒーマイルク (ディナー) 肉 (夕食) 冷肉、紅茶。(E1103)

Hotel Continental, Milan に滞在中の H・G・フラー氏より、この日付で来信、ロンドンに行ったらキャンベル氏を訪問するように勧め、彼のことを詳しく紹介してくる。(F2440)

同志社女学校卒業式。池袋清風は自分および友人の信仰経歴と去る三月のリバイバル履歴を清書して一冊(一一六葉)にまとめ、J・D・デイヴィスに持参し、新島に送るように頼む。(全1:334, 193—上:267)

六月二十六日

木曜日、午後、シャルボニエール夫人の家に移る。八月一日まで滞在。町から四分の三マイル離れて、ブドウ畑やトウモロコシ畑に囲まれた小高くて良い場所にあり、後ろは栗林になってる。(E1103)

* 新島はこの周辺のことをしばしば La Tour と呼んでゐるが、これが Torre Pellice の別称なのか、宿所周辺の小字名なのか、あるいは建物の名称なのか不明である。ここでは新島の呼び方に従う。

同志社英学校卒業式、正科十名。それぞれ英、邦語で卒業演説をする。(全1:262, J93—E:269)
六月二十七日
ワルデンシャン・カレッジの Promotion day の行事が四時から行われる。九年の学習を終えた生徒はさらにフィレンツェの神学校へ進むという。新島は同志社の神学生・五年生・八重夫人に手紙を書く。(E1103)

同志社神学科卒業式、十三名卒業。式場で新島の手紙(スエズ発、五月九日付)が読まれる。(全3:278, J93—E:273)

* 普通・神学両科卒業生に宛てた六月二十七日付の新島の手紙(全3:286)はこの年八月二十日前後に到着したものである。

六月二十八日
若者や白髪の教授たち百人以上と Angregna Hills へポクニックに行く。午後五時出発、午後八時ごろ帰る。現地ではトロン教授がお祈りをし、講話をする。(E1103)

六月二十九日
日曜学校に出席する。子供のクラスと大人のクラスがある。トロン教授が説明する。しかしシステムは良くない。会員は二百人で、そのうち八十人の子供のクラスがある。(E1103)

六月三十日
同宿のテルファー英国海軍大佐夫妻 Capt. and Mrs. J. Beecham Telfer シャルボニエールの子供たちと Vandeline 山と Castellezzo 山に近く丘へ遠足に出かけ、楽しこ一日を過ごす。

八重夫人に発信、十日前よりフランス国境近くのワルデンシャン溪谷のトレ・ペリチェに来て、休養していることを知らせる。(全3:290, E1103, J93—E:94)

七月一日
トレ・ペリチェよりボストンの A・ハーディに発信、医学校を設けるためアメリカで募金したいこと、すでに J・C・ペリー博士と連名で要請した通りであると書く。ローマのテイラー博士、トリノ

のH・メイユおよびR・ウオーカー牧師、ヴィースバーデンのH・シュナイダーに手紙を出す。(H
6: 231, 全10: 280, E1103)

この日、新島襄代理・新島公義、山本覚馬、証人・浜岡光哲の三名の調印をもって、第一国立銀行京都支店と「募金取り扱いの」条約書を取り交わす。(H1: 194)

七月二・三日
手紙を書く。(E1103)

七月四日
ラ・ツール La Tour のプロテスタント病院を訪ねる。畑のブドウ、コーン、ジャガイモの栽培方法に興味を持つ。(E1103)

七月五日
昼食後、Fenes Trello へ行き、午後六時二十分ラ・ツールに帰ってくる。テルファー夫人が駅まで出迎える。(E1103)

七月六日
日曜日、徴兵される青年が酒を飲んで、大騒ぎしている。アメリカのフrint夫人に発信する「か」。(E1103)

七月七日
ほとんど一日中雨。(E1103)

七月八日
中村栄助が新島公義を訪問、宗教上のことにつき田中・浜岡を交えて相談したい旨を述べる。「是れ特に井上外務卿と北垣知事より示談せられたる事を以てなり」(D12)

七月八・九日
すこしフランス語を学び始める。(E1103)

七月九日
College of the valley を訪問、トロノ教授の案内で構内を見学する。女学校の新しい建物も見学する。(E1103)

七月十日
テルファー大佐夫妻が発発する。夫妻より仏英辞典をもらう。(E1103)

七月十一日

スコットランドの婦人二人 Misses Slande が来る。ベリー博士、八重夫人、ミス・タルカット、京都ミッシュンに手紙を書く。(E1103)

七月十二日

ミス・ヒドンに発信する「か」。(E1103)

七月十三日

日曜日、ロンドンのベアリング商会 Baring Brother & Co. より五十ポンドの小切手を受け取る。

(E1103)

松山高吉、伊勢時雄に発信、トレ・ペリチュに滞在中のこと、ブリュッセル経由でニューヨークへ向かう予定であることを伝える。(E1103)

七月十四日

ベアリング商会へ五十ポンドの領収書を送り、そのことをA・ハーディにも知らせる。伊勢、松山、

小崎、ジェンクスに手紙を書く。(E1103)

七月十五日

若い人々とプラン Plans というところへ遠足に行く。(E1103)

七月十六日

祈禱会、いつものように素っ気ないものだった。(E1103)

七月十七日

ここ五、六日、室内は華氏八〇〜八五度である。暑く、不快で息苦しい。(E1103)

七月十八日

加藤弘之東京大学総理、折田彦市大阪中学校長が同志社を視察する。下村孝太郎と新島公義が校内を

案内する。(E1103)

七月十九日

ミス・シャンドに Babbia まじ馬車ドライブに連れて行ってもらう。有名な牧場の Seboard まじ走

る。(E1103)

七月二十日

安息日、新島の計画している未来の医学校のため、ミス・シャンドが二ポンドを寄付する。(E1103)

七月二十一日

パリから来たアッピア牧師 Mr. Appia に、仲間と一緒にローラ Rora を越えたところまで行こうと

誘われる。朝十時半出発、途中で昼食を取り、ローラの教会のモレル氏 *Barthine Morel* にレボア *レボア* *Revoirs* でコーヒーをご馳走になる。夜、悪寒を感じる。彼の山小屋で泊まるが、ラバで送ったはずの厚いコートとショールが届いていなかったので、乾草を被って寝る。(全5:328, E1103)

ナポリよりの第六信、留守宅に届く。(D12)

七月二十二日

朝四時に起き、散歩する。昼食の後、発熱、日当たりの良いベッドで休み、午後四時帰途につく。途中で歩けなくなり、ローラのモレル夫人方に泊まる。(E1103)

七月二十三日

財布をなくしたことに気付きアッピア牧師に借りて宿代を支払う。二人の道連れとロバで出発、午前十時にラ・ツールに帰る。午後より再び発熱。財布は前夜寝た乾草の中から出てきた。発見者の少女にお礼をする。(E1103)

新島公義・中村栄助の二人は北垣知事の私宅に呼ばれ、同志社の生徒が仏僧と争乱のないように注意される。(D12)

七月二十四日

ペラ医師 *Dr. Vela* の診察を受け、二時間おきにキニーネを飲み、やっと人心地がつく。この頃、いくつかの随想を書き、この日は「人物批評の法」を手帳に記す。(E1103, C4:154)

七月二十五日

すこし具合が良くなる。(E1103)

七月二十六日

他の人々と一緒に食事ができるようになる。(E1103)

七月二十七日

八重夫人に発信、「日本の兄弟より一通の書もなく……教師方よりも亦何の音信もなし、さすがに長く外国にも遊び堪忍強き襄之身もかく久しく家郷の音信なき時は随分……心配申候」と記す。(全3:294, E1103)

七月二十八日

二十五〜二十七日の三晩、睡眠薬を飲んで寝る——bad rest! 二十一日に泊まった山小屋のスケッチとその説明を書く。父、夫人、新島公義、市原盛宏に手紙を出す。(E1103)

七月二十九日

大西洋航路の船会社 Inman Line Co. に手紙を書く。A・ハーディより来信。(E1103)

七月三十日

田辺次郎「Inman Line Co. に各発信。シャルボニエール夫人は子供を連れて夫に会いにスイスへ行く。(E1103)

七月三十一日

Angregna Hill ゴズネット牧師 Pastor Bennet に招かれる。彼の息子の案内で、むかし迫害された人々が隠れていた洞窟を見に行く。ベネット牧師の家に帰ると、そこでゲッツロフ氏 Oscar Goetslolf (ミラノのD・シュリノ牧師 Rev. Mr. D. Turino の義理の息子) に会った。すぐに彼の家に招かれ、夕食をご馳走になる。地方行政や税制の話聞く。(E1103)

八月一日

午前五時五十五分の汽車でラ・ツール(トレ・ペリチ)を出発、再びトリノの Hotel de Suisse に泊まる。マダム・シャルボニエールに百七十フラン余を郵便為替で送り、メイユ牧師を訪ねて、彼女宛の小包みを託す。(全3:296, E1103)

八月二日

トリノ午前六時十分発、ミラノ十一時四十八分着。大聖堂近への Albergo delle Galle に宿を取る。Angregna で会ったO・ゲッツロフ氏の義父ツェリノ牧師を 51 Via Torino に訪ねる。そこで三十七年間ユダヤ人に宣教しているウーファー氏 Carlo Ufer コンスタンチノーブルのバイブル・ハウスのレッド・マネージャーであるトムソン博士 Alex. Thompson および新島がイタリア徴兵法を翻訳するように頼んだベルゴリオ教授 Cesare Bergoglio に会う。(E1103)

八月三日

午前中、ワルド派教会の礼拝に出席し、午後はその教会の日曜学校を見学する。静かに休息。ツェリ

八月四日

ノ夫人に昼食をご馳走になる。(L1103)

G・H・フラーと共に大聖堂を見学する。そこでA・トムソン博士に出会う。建物や美術品の素晴らしいさに感嘆する。この日、曇っていたためアルプス山脈は見えなかったが、町の様子は良くわかる。フラー氏とコンチネンタル・ホテルで朝食を済ませたのち、フラー、キャンベル両氏の案内でサント・マリア・デレ・グラツィエ教会 S. Maria delle Grazie へ行き、ダ・ビンチの「最後の晩餐」を見る。次にブレラ絵画館 Brera picture gallery 等へ行き、フラー氏と別れる。シュリノ夫人に昼食と夕食をご馳走になる。ヴィットリオ・エマヌエル回廊 Galleria Vittorio Emanuele へ行く。レストランでは人々が朝からビールを飲み、女性が夫と来ているのを見て、ショックを受ける。

(L1103)

新島の第七報、留守宅に届く。(D12)

八月五日
早朝、ミラノを出発、汽車でスイスに向かう。

Milano → via Havigil → Chiasso (Lake Como) へいり、A・トムソン博士と会って、Göschenen まで同車する → Lugano → Bellinzona → Airolo (south end of the tunnel) → St. Gotthard tunnel (14.9km, 22分) → Göschenen (下車) 新島、馬車でアンダーマット Andermatt のホテル・オーバーアルプ Hotel Oberalp に行き、そこで泊まる。(L1103)

午後、アンダーマットから一マイル四分の一ほどのホスピタル Hospental へ向かう。山すそを廻ったホスピタル側はジグザグの道であったが、新島はアイロロに向かうドイツ人カメララー氏 Max Kammerer と一緒に「サンゴタールへの道を」登る。峠の手前一・五マイルのところ呼吸困難とな

り、進めなくなった。ドイツ人と別れて休み休み峠にたどり着く。しかし、状況はますます悪くなるので峠のホテル *Hotel du Mont Prosa* に投宿、医者が居ないので、ブランドーをひとさじ飲んだり、カラシの軟膏を胸と首に塗ったりして応急の処置をする。惨めな状態の中でスケッチ用の画用紙二枚に英文の遺書を書く。万一の場合ミラノのツェリノ牧師およびボストンの A・ハーディに通知するよう頼んだものである。夕方より小康を得て眠る。(全5:328, 全10:291, E1103, E1236)

* 英文日記 (E1103) と (全10) の記述には若干の違いがある。

行先を我墓なりと思ふ身も故郷こひし入相の鐘

入相の鐘の音なにの心あるや問ふ人もなし深山路のたび

入相の空にあはれを添へるなり遠山寺の声々

(E1103)

八月七日

具合は少し良くなったが、歩けないので、アイロロから馬車を呼び、アンダーマットへ帰る。十二キロ、二十フラン。午後一時頃、アンダーマットに着き、この日はずっと休養をする。フルカ峠 *Fulca Pass* まで駅馬車で行きたかったが、再び心臓発作を起こすといけなかったので、諦める。(全10:292, E1103)

八月八日

医者に診てもらうためルツェルンへ向け出発する。

Andermatt (8:45 a. m.) → Göschenen → Flüelen → Lake of Lucerne (Victoria 号) 横断 → Lucerne (1:25 a. m.) *Gasthof zum Weissen Kreuz* 泊。(全6:233, E1103)

八月九日

午前中ストッカー博士に診察してもらう。心臓はあまり健全な状態ではないので、あまり歩かず、二、三日静養するように言われる。“He gave me something—sleep and rest.” 町を歩いていて偶然マ

八月十日

八月十一日

ダム・ヘールフリガー Madam Kost Haelfinger の経営するペンションを見つける。一日ハフランと安く、小ぎれいで、食事も良く、静かで、今まででいちばん良いところである。午後移る。(L1103)

バーゼルのミッション・ハウスおよびシャルボニエール夫人に発信。(L1103)

サンゴタール峠で起こった去る六日以来的の出来事について手記を書く。(全6:232, 全10:291)

静かな安息日である。雪を被った山々や眼下に広がる緑の湖が美しく、慰められる。(L1103)

具合は少し良いが、医師に診てもらうまでは静かにしている。午後、ストッカー博士が往診に来て、心臓の診察をする。三時間おきに飲む薬をくれ、十五日まではあまり動かないように言われる。

“I feel myself simply weak.” チーズの作り方、スイスの気温、建物についての説明を書く。(L1103)

明治専門学校についての相談会が開かれ、(一)新島帰国まで新島公義が仮責任者となる (二)毎月二十一日を理事委員の会合日と定め、浜岡・中村は毎月一日、新島宅に集まることを定める。(全1:195, D12)

八月十三日

ルツェルンより新島公義および父に手紙を書く。

そびえたつ亜爾辺やまの頂きに をしくもかなと残る月影 (全3:296)

八月十六日

心臓のうえあたりに膏薬をはる。具合が良い。(L1103)

八重夫人に発信、文中、St. Gotthard をサンゴタールとフランス読みで書く。(全3:299)

八月十七日

朝、ストッカー博士の診察を受ける。J・シャルボニエールから来信。ルツェルン滞在中、スイスの高等教育についての資料を集める。(全6:233, 全10:294, L1103)

八月十九日

午前中、ストックカー博士を訪ねる。心臓の左部が悪いので、たとえ鉄道でも長旅はしないほうが良いと言われる。静かにしておれば短期間で治るが、そうでなければ長びくだろう。五日分の水薬をもらう。(E1103)

八月二十日

ルッセルン湖の北岸にあるリギ山(五九〇ハフィート)に登る。「山之上に蒸汽船と波止場あり、其より直に蒸氣車に乗り候故ニ何之苦もなく一時間余りにて山の頂上迄登申候」(全3:300, E1103)この日付の『福音新報』に新島が京都第二教会で行った説教「衣服ヲ売りテ刀ヲ買フベシ」の要旨が掲載される。第八信、留守宅に届けられる。(全2:167, D12)

八月二十一日

ルッセルンを出発、チューリヒに行く。駅の近くのホテル・ナチォナールに泊まる。高すぎる。「日本よりの手紙あるやと郵便局に相尋ね候に一通も無く数千里も隣の如くに思ふ裏も如此出発以来故郷の便を聞かざるには甚閉口仕候」。チューリヒでは大学と幼稚園を見学する。(全3:301, E1103)

八月二十二日

チューリヒを出発、夜八時頃バーゼルに到着、Barfüsser platz の Hotel Schiff に泊まる。安くて良いホテルである。ミッション・ハウスで泊まるよう招かれる。(E1103)

八月二十三日

この朝、ミッション・ハウスに日本からの手紙を受け取りに行く。日本よりは一通もなく、米英国より三通の手紙を受け取る。「旅行先に而故郷之書面なき程さみしき事はあるまじ……」この「宣教師を送るの局……は私の思ひ候より広大なる者にして……此局に客部屋あれば其処に泊まる可しと局長より勧められ候故」早速ここに移る。(全3:302, E1103)

* このミッション・ハウスはバーゼル外国伝道協会本部のことで、「ドイツのプロテスタントによって經營され、宣教師を西アフリカ、インド、中国等に送っていた。多くの宣教師の家族がここに住んでいて、子供たち

のための学校まで設けられていたが、ヘルマン・ヘッセの父ヨハネス・ヘッセはその学校の先生をしていて…
…ヘルマン・ヘッセは当時七歳で小学校の二年生ぐらいだった(1898)(C)

八月二十八日 バーゼルからドイツのマイニンツに行き、Pfalzer Hotel に泊まる。(L1103)

八月二十九日 この日より三十一日まで旧知のハインリヒ・シュナイダー Heinrich Schneider, Schreiner 32 Nero Street の家に滞在する。(L1103)

九月一日 ボン滞在、Rhineck Hotel 三日*(L1103)

九月三日 D・C・グリーンとN・G・クラークに発信、とくにクラーク宛の書中、J・ヘッセ牧師が宜しくとのこと、ボンでは大学を見ただけであること、この朝、ブリュッセルからロッテルダムへ向かい、今月中にニューヨーク行ききの船に乗るつもりであること、イタリアでスコットランド人のミス・シャンドより二ポンド、マイニンツに近いモスバッハで、ある家族から京都の医学校のために四十一マルク四十ペニーの寄付を受け取ったことを記す。(全6:234)

九月四・五日 ブリュッセルに至り、Hotel 4 Nations Station de Nord に泊まる。(L1103)

九月六日 ロッテルダムのワイマール・ホテル Weimar Hotel 泊。ハーディ、フィッシュに手紙を書く。(L1103)

九月七日 ロンドン着、Saracen's Head Inn, Northumberland Alley, Fewchurch Str. に泊まる。領事館で新

島公義からの手紙を受け取る。(全6:235, L1103)

九月九日 新島公義に発信、十八日にリヴァプールからニューヨークに出発することを知らせる。(全6:235)

九月十日 新島の第十信、留守宅に届く。第十学期の入学試験を開始する。(全2:254, D12)

九月十二日

トレ・ペリチュで知り合ったテルファー大佐を Oaklay Str., Chelsea に訪問する。(L1103)

九月十四日

新島公義に発信、二、三日前、International Health Exhibition に行ったこと(そこで手島精一・

永井久一郎に会う) Metropolitan Tabernacle の Spurgeon 牧師の説教を聞いたこと、領事館でデイヴィス、ゴードン、森田、ミス・フーパーからの手紙と同志社設立始末書を受け取ったこと、十八日にイギリスを出発し、二十五、六日にニューヨーク着の予定と述べる。(全6:235, L1103)

大山代理公使、陸奥宗光に会う「か」。(L1103)

九月十五日

彰栄館開場式、同志社第十学期を開業。(全1:255)

この日より十八日まで、京都府全域に風水害。(H14:173)

九月十八日

新島、Inman Line の City of Berlin 号でリヴァプールを出航する。(全5:329, L674)

九月二十八日

十日の船旅を終え、ニューヨーク港到着。すんなり税関を通る。係官に二分のドル渡す。三十一番街のシャーマン・ハウス Sherman House (一・二五ドル)で泊まることにするが、ベッドが悪く、眠れないので、夜十一時にニューヘイブン線駅前のホテルに移る。この日より新しい英文の日記を付け始める。(全3:303, L673, L674, L1106)

九月二十九日

一、二の友人を訪ね、午後三時の汽車でニューヘイブンに向かう。夕方六時半到着、ヒルサイド・アベニューにあるイェール大学のポーター総長を訪い、家族らに暖かく迎えられる。その夜、ポーター総長がすっかり疲れるまで(夜十時まで)京都の学校のこと、キリスト教教育について話をする。

ブリュッセル駐在アメリカ公使より、この日付で、問い合わせに対する回答として、ブリュッセル大学の課程表、その他の文書を送ってくる。(全3:303, L673, L674, L1106, F2444)

九月三十日

イエール大学の学生祈禱会に出席する。同大学の Divinity school に同志社創立当時の学生、中島力造が留学していることを知り、面会。彼の部屋に行き、二時間ほど歓談する。(L673, L1106)

午前十一時半、ニューヘイブンを出発、午後四時半、ボストンに到着する。車窓から十年ぶりに市街を見て、言葉に言い尽くせないほどの喜びと感激を覚える。(L673, L1106)

A・ハーディ夫妻は「新島が休養のために来米したのだから」と諸方よりの招待を断り、休息できるように配慮する。(全3:303)

九月

この月、同志社老練講が始まる。〔明治十八年一月十二日の項参照〕(L239)

十月一日

七日まで A・ハーディ家で過ごす。(L1106)

十月二日

ミス・ヒドンに手紙を出す。(全6:236)

十月七日

オハイオ州コロンバスで開かれるアメリカン・ボード第七十五年会に出席するため、A・ハーディと共に行く。ボストンのオールバニー駅で同大会に出席するボードの人々に会う。その中の一人エリス氏 Mr. Ellis は新島に寝台車券をプレゼントする。(全10:295, L673, L1106)

十月八日

正午、コロンバス到着。午後より大会が開かれ、出席する。(L673, L1106)

十月九日

大会で、この日、クラーク博士「自活について」オルデン博士「キリスト教の献金について」の報告をする。司会は M・ホプキンス総裁 Mark Hopkins アナーバー大学のエンジェル学長に会う。彼はホテルへ新島を訪ねてきた。ホテルと汽車の中では A・C・トムソン博士、バー氏 Mr. Burr に親切にしてもらう。(L673, L1106)

十月十日

年会の夕方の会合で五、六分間演説をする。「平素之志願ヲ陳セントセシニ豈凶ラン身体非常ニ疲労

ヲ生シ、又……友人ノ勸メモアリタルニヨリ少々日本ノ情況ノミヲ陳シテ止メリ」(43:309)

州立盲院に O・ケリーの姉サラ・スミード夫人 Sarah Smead を訪問する。ミス [D・H] パーメリ、ミス E・タルカット、カーチス氏にも会う。(410:295, E673, E1106)

十月十一日

大会が終了し、午前十一時半コロンバス出発、翌十二日午後四時半ボストンに帰る。(43:304, E673)

十月十二日

アメリカン・ボードに提出する覚書を書き始める。大会に出席して非常に疲れる。(E673, E1106)

十月十五日

大阪島之内教会の上原方立牧師、永眠、二十四歳。(F1:85)

十月十七日

夕方、トレモント聖堂でムーディー牧師の宗教集会が開かれ、新島も出席する。超満員。ムーディーは新島のために祈るよう提案するが、新島は "and not for me only but for the thirty-seven million in Japan." と言う。(E11)

十月二十七日

神学科の村井知至・竹内(安部)磯雄の二人、神学科教授 D・C・グリーンに不満をいただき、抗議のため退学する。(J83-F:197)

* (J1:118) ではストライキの責任をとって九月二十六日に退学、とある。

十月二十九日

アメリカン・ボード運営委員会 Prudential Committee of A. B. C. F. M. に提出すべき覚書を書き終える。その後、マサチューセッツ州ダンバースポートにソフィア・D・テイラー未亡人を訪問し、二晩泊まる。(43:304, 45:333, 46:236, 410:295, 305, E1133)

十月三十日

ミス・ヒドンに発信、近況を述べ、アンドーヴァーへ行くことを知らせる。(46:236)

十月三十一日

正午、ダンバースポートを出発し、アンドーヴァーに向かう。アンドーヴァーでシーリー、パーク両教授に挨拶をし、ヒドン姉弟に迎え入れられる。日記と八重夫人宛の手紙の中に次のように記す。

十月

「折シモ此日ハ十月三十一日ニシテ、調度廿年前十月三十一日、初テアンドワ神学校「フィリップス・アカデミー」ニ入学シタル日ニシテ、寔ニ記念日トモ申スベキ日ナリ」二十年の後今日同じ処同じ家ニ而筆を把り此文を認むる私の心中如何計りか感謝の心を以て満たされ、此教ならぬ私に如此も深き恵みを示し賜はりしか何卒御察し可被下候」(全3:306, 全5:334, 全6:237)

日本政府は、墓地、埋葬取締規則を定め、自葬の禁を解く。「葬式も自由になりし由信者方には大喜びなるべし」(全3:307)

“The funeral ceremony is permitted to be performed either at temples or at private houses by the edict issued on the 4th of October.” (全6:238)

十一月一日

「今朝目覚め戸を明け候へば不計も雪ふり、二十年前之昔屢々雪の中を歩み学校に通ひし事を想起し何となく心に喜び感じ申候、これは当年の初雪にて……二寸程も積もり殊に美事なる景色」と八重夫人に書き送る。二、三の教授を訪問する。(全3:306, L1106)

十一月二日

朝、サウス・チャーチの礼拝に出席する。レイロー牧師 Rev. Rairo が説教をする。聖餐式にも出席する。ハリス教授の赤ん坊が洗礼を受け、六人の若者が聖餐に加わる。パーク教授と昼食を、スミス教授 Prof. Smyth と夕食をする。(L673, L1106)

J・テイラー教授、ミス・ヒドンの近所のE・テイラー氏、アボット氏、フラッグ夫人、グールド夫人を訪ねる。午後、ドナルド氏を訪う。(L1106)

夕方ボストンに帰る。共和党の大統領候補者のブレイン氏 Mr. James G. Blaine のための選挙パレードが行われる。(L673, L1106)

十一月十一日

Capeland Tremont St. でオリラ J・フリント夫人に会う。午後、West Roxbury に N・G・クラーク博士を訪ね、アメリカン・ボードの運営委員会に宛てた覚書 "A scheme of the speedy Evangelization of Japan" を提出する。(L1106, L1133)

十一月十三日

コネチカット州ストラトフォードの J・S・アイヴズ牧師 Joel Stone Ives 宛に同志社への寄付依頼状を書く。幼稚園を見学する。アンドーヴァーのピーター・スミス夫妻が来訪する。スミス夫人は同志社の教授 M・L・ゴードンの姉にあたる。(L673, L1106)

* J・S・アイヴズはアーモスト大学での新島の同級生。

十一月十四日

ハノーバーへ行く準備をするが、夕方からリューマチが出る。二週間余り病床につく。膝関節の病氣と診断され、医師の勧告もあり、ボードのクラーク博士よりニューヨーク州のクリフトン・スプリングスに温泉療養に行くよう勧められる。(L673, L1106)

十一月十八日

クラーク博士にボストンより手紙を書き、十一日に渡した覚書に付け加えたいことを記す。また日本から届いたばかりのニュースを知らせる。(L66: 237)

十一月二十三日

中村栄助夫人がチフスで死去のことを知り、この日、弔状を送る。(L63: 308)

十一月二十五日

N・G・クラークに発信。(L6: 239)

十一月二十八日

デニー博士 Dr. Denny の来診を受ける。膝の関節がうまくはね返らない「？」病氣であることがわかる。同病のクラーク博士と一緒にニューヨーク州のクリフトン・スプリングスへ行くように勧められる。デニー博士がその場所を問い合わせる手紙をフォスター博士に出してくれる。(L1106)

十一月

徴兵令発布以来、同志社の生徒のほとんど三分の一（在籍百六十八名中、四十余名）が帰省する。

十二月四日

(全1: 163)
A・ハーディに見送られて、N・G・クラークと共にボストンのオールバニー駅を出発、クリフトン・スプリングスに向かう。(L673, L1106)

十二月五日

シラキウス駅で朝六時より四時間ほど連絡の汽車を待ち合す。この間を利用して製塩工場を見学する。長老派神学校のあるウォバーン、アマチュア天文学者ブルックスの住むフェルプスを通じて、午後一時、クリフトン・スプリングスに到着、サナトリウムに入る。ここで二月二十七日まで(N・G・クラークは一月八日まで)滞在して、温泉療養をする。(L673, L1106)

十二月十日

伊勢時雄より来信——小崎の新聞が経営困難のため苦境に立っていること、東京の宣教師からもアメリカン・ボードからも資金援助を得られなかったことを記し、在米中の新島に、ボードと交渉して援助を得られるようにしてほしいと要請してくる。(全6: 232)

* 当時、小崎は警醒社の経営困難および同社より発行する『東京毎週新報』のち『基督教新聞』の運営につき、苦境にあった。

十二月十二日

伊勢書簡を英訳し、自分の手紙に添えてアメリカン・ボードのジャドソン・スミス博士 Judson Smith, Corresponding secretary of Am. Bd. に送る。その中で新島は小崎の新聞について説明し、援助を与えるように要請する。(全6: 241)

十二月十五日

A・ハーディに手紙を出す。(全6: 244)

十二月十六日

アメリカン・ボード運営委員会は Swett Legacy の一部五万ドルをジャパン・ミッション、とくに同志社へ贈ることを決議する。「右金子ハ今之同志社を盛大ニするの策なりユニウオシテイーの為ニ

「非らず」(全3: 320, E673, E1106)

* この運営委員会の開催日について(全3: 318, 319)では十七日となっている。

この日、森田・下村・市原に発信、キリスト教主義の大学設立に関する彼らの手紙をN・G・クラークに送ったことを伝える。(全3: 309)

小崎に発信、徴兵猶予を得る方法、小崎の教会堂建設について記す。(全3: 312)

松山・小崎に発信、警醒社への援助につき書へ。(全3: 315)

十二月十七日

松山・伊勢に発信。(F695)

この日より十九日まで同志社冬期試験。(全1: 255)

十二月十八日

ボストンのアメリカン・ボードの委員会より同志社に五万ドル寄付することを決議した旨の通知を受け取る。(全3: 319)

小崎・松山に二通発信、警醒社への援助については「未タニ不決」であることを知らせる。(全3: 319, 全3: 321)

十二月十九日

N・G・クラークを通じ、ジャドソン・スミスの手紙(十八日付)に答えるため、小崎の問題を二枚のイラストと説明文により示す。(全6: 245)

小崎の新聞と日本の伝道に関し、小崎・伊勢・松山に書簡を出す。(E673, E1106)

十二月二十三日
ジャパン・ミッションの特別会が大阪で開かれ、次の特別会計をアメリカン・ボード運営委員会に要請することを決議する。

(一)同志社の寮舎二棟の建築・備品費として四千ドル (二)煉瓦造り書籍館 Library building 建築費と

して一万ドル (㊦)チャペルを食堂に改造する費用として八百ドル (四煉瓦造りチャペルの建築・備品費として五千五百ドル (㊦)同志社校地買収費として二千ドル。(E24-d)

十二月二十五日 夜、サナトリウムにおいて、日本について演説し、日本伝道のため二十ドルの寄付が集まる。(L673.

L1106)

十二月二十九日 小崎に十一月二十二日の手紙に対する返事を書く。(L6:246)

明治十八年（一八八五）四十三歳

一月五日

第十学期春期始業。（全1：255）

一月八日

N・G・クラーク博士がボストンへ帰るに際し、日本東北部——仙台・若松・米沢への伝道について提案をし、同意を得る。駅まで見送る。別れ際に同博士よりキスをされる。サナトリウムで少女や湯治客から“Your good friend has gone home this afternoon. You must miss him very much.”と慰められる。（全6：247, E673, L1106）

一月九日

クラークに発信、午後サナトリウムの同じ階の別の部屋に移る。（全6：248）

一月十日

クラークに宛て東北日本伝道に関し、地図を添え、派遣すべき地名と伝道者名を挙げた長文の手紙を送る。（全6：248, E673, L1106）

一月十二日

森田久万人よりこの日付で来簡、日韓の政治問題、僧侶の妨害運動、教育令の改正など日本の状況を伝えてくる。また同志社の様子を述べ、教育環境の整備、とくに書籍の確保を訴える。（F692）市原盛宏よりこの日付で来信、手狭になった第二教会堂の増築に関し意見を述べる。

(一)現在の会堂を増築するより、シアーズの寄付金のはか、有志家よりも募集し、京都市内の中心部に大会堂を新築しては如何 (二)第二教会の学生・教員らを学校教会として独立させては如何 (三)学生の増加に伴い従来の礼拝堂が狭隘となり、四、五百人入る新会堂の建設を望む意見が多い (四)新会堂は京都の中心に建築し、説教も演説もできる東京の明治会堂のようなものとしたい。

さらに布銭講も、現在、二千余株となり、その半額で四、五人の生徒を扶助している旨を報告する。
(F693)

N・G・クラークに発信。(金6:250, E673, E1106)

一月十三日
M・L・ゴードン宣教師および伝道会社に書簡を送り、仙台地方の伝道活動を拡大するため、宣教師六、七名と東京の長谷川・柘植・長田らで、すぐに福島・若松・米沢を巡回して伝道するよう勧告する。(E673, E1106)

京都第三教会で綱島佳吉の按手礼式が行われる。(F692, F7:25)

一月十四日
四条教会「のち京都教会」設立、仮牧師・竹原義久。(F7:26)

一月十五日
朝、クラークより手紙を受け取る。The foreign Committee と伝道会社委員に宛て日本の伝道策につきクラークと五週間にわたって話し合ったことを伝える。(金6:251)

一月二十日
クラークに十五日の手紙に対する返事を書き送る。(金6:254)

市原盛宏に発信、東北伝道を仙台まで拡張すること、九州・広島・高知伝道について伝道者の派遣を具体的に指示、勧告する。(E673, E1106)

浜岡・高木・田中各氏に引き続き同志社に関心を寄せてくれるよう手紙を書く。(E673, E1106)

一月二十二日
市原盛宏に発信、京都第二教会建設費用の概算を通知するように頼む。(E673, E1106)

一月二十三日
クラークよりこの日付で来信、健康についての助言、不眠のうえ一時間も話をするのは良くない、絶対に休養するよう忠告してくれる。(F2458)

J・D・デイヴィスに発信、第二教会建設費のこと、J・C・ベリーの医学校について述べ、さらに

彼に金森と共に札幌・浦河へ伝道に行くことを勧める。(E1106)

一月二十五日

夕拝で Mr. Gulich(?) がスペイン伝道について説教する。グオルト博士、ボードウェル博士 Dr. Gualt, Mr. Bodwell は新島に対し、なお一カ月滞在を延期するよう勧める。(E673, E1106)

一月二十六日

東京に住むタムラ氏の知人というライス夫人 Mrs. Rice に会う。(E673, E1106)

一月二十八日

クラークに発信、その中に京都の医学校に関し J・D・デイヴィスから送られてきた手紙を同封する。京都からの手紙では医学校をわれわれだけで運営していこうと考えているようだが、これは他と協力していこうとするベリー博士の案に反しているようだ。新島はベリー案に賛成である、と述べる。

(全6: 256)

一月三十日

ボストンの友人「A・ハーディ」よりなお一カ月滞在の許可を得たので、当分、クリフトン・スプリングスに滞在することになる。伊勢時雄に発信、伝道についての長い手紙を書く。(E673, E1106)

二月一日

この日、八重夫人の病気を心配して手紙を書く。「費用は如何計り相懸候とも不苦、テラ様に御相談充分御療治被成候様……」「何卒夫之志と且其望をも御察し……如何人に厭はるゝも人に咀はるゝも、又そしらるゝも常に心を豊かに持ち、祈りを常に為し、己を愛する者の為に祈るのみならず己の敵の為に熱心に祈り……」(全3: 328)

二月三日

この頃より頭痛再発、まったく読書をやめる。(全3: 331, C4: 104)

二月四日

気温華氏マイナス一四度。N・G・クラークより来信(一月二十八日の返事)。(E673, E1106)

二月上旬

「生近來脳病ヨロシカラス、脳中熱湯ノ沸カ如シ、夜々ノ眠リ不充分ニシテ二月上旬以来全ク読書ヲ

廃シ居候」(全3: 342)

二月十一日

クリフトン・スプリングスより蔵原惟郭（ボストン、元良勇次郎方気付）に英文の手紙を書く。その中で六日よりひどい頭痛に悩まされていること、治ったら蔵原が学校に入るチャンスを得られるようムーディ Dwight L. Moody に手紙を書くこと、また、次にニューヘイブンへ行ったとき、ポーター総長に会うつもりであることを記す。（全6：257）

先週以来、食欲減退し、去る金曜日より頭痛を起こし、日本を出発した当時の病状とほとんど同じ激しい憂鬱症に陥る。（L673, E1106）

二月十四日

トーマス L・ギューリックを通じてマサチューセッツ州ノースフィールドの D・ムーディに手紙を送り、蔵原惟郭の Mt. Hermon Boys' School への入学斡旋を依頼する。（L673, E1106）

二月十五日

ミス・プロクターとアイヴズ夫人 Miss Proctor and Mrs. Charles Ives から二つのバスケット「見舞品か」を受け取る。昨日の昼から食堂へ食事に出ることになっているが、食欲はほとんどない。今朝もまだ調子は悪いが、ひどい状態は終わっている。（E1106）

ボストンへはもう二週間も手紙を出していない。この朝、空は晴れ、空気も良く、美しい冬の朝である。（E1106）

二月十九日

蔵原惟郭の手紙を受け取る。（全3：330）

二月二十日

蔵原に発信、依頼された入学のことにつきムーディに宛て「代筆を以懸合置申候、何レ近日何トカ回答可有之と存候」と書く。オーバーン・セミナリーに留学中の田村直臣がクリフトン・スプリングスに来訪する。（全3：331）

留守宅、J・D・デヴィス、D・C・グリーン、望月（興三郎か）、三・四年生、市原盛宏、森田

久万人らより来信。クラーク博士は夫人、子息チャールズと共にノース・カロライナの Kittrell

Davis Hotel へ行へ。(L673, L1106)

二月二十二日

ニューヘイブンのアイヴズ夫人より日本伝道のため五百ドルの寄付を受ける。(L673)

二月二十七日

朝九時、クリフトン・スプリングスを出発、オーバーン Auburn, N. Y. に行き、セミナーにいる田村直臣を訪れる。またホブキンス、ハンチントン、ウエルチ博士らに会う。午後六時、オーバーンを発ち、シラキュースで夜行列車に乗り換える。(L1106)

二月二十八日

朝九時、パーマー経由、アーモストに到着。ただちにシーリー総長宅へ行き、ここに滞在することになる。総長の子供たちの成長したのに驚く。W. Whittle (St. George Hotel, Evansville, Ind.) よりこの日付で、蔵原の入学依頼に対する返事が来る。(L673, L1106, F2465)

三月一日

この月最初の安息日、アーモスト大学の礼拝に出席してシーリー総長の説教を聞く。午後には聖餐式に出席する。小谷野敬三という日本人留学生が訪ねてくる。彼は現在最上級生であり、この秋、イェール大学神学部に入學するという。(L673, L1106)

三月二日

もと札幌農学校教頭 W・S・クラークを訪問する。(L673)

両親へ年賀状の返事を書く。「咲き初めて鶯の来る時をまじ」(全3:331)

* 両親は旧暦正月に年賀状を書いたものと思われる。

三月三日

アーモスト在学中一年下だったモース教授 Anson D. Morse の茶話会に招かれる。(L673, L1106)

三月五日

シーリー総長は新島の要請を受け入れ、ギリシア・ラテン語および数学を習得した学生で、新島の推薦状を有する者は六名まで多少の学費をも補助してアーモスト大学に入學を許可する旨約束する。同

総長の勧めにより、目および身体検査を受けたのち、十二時十五分アーモストを出発、午後四時五十分ボストンに到着する。A・ハーディ夫妻はつつがなし。(L673, L1106)

* (L1106) では推薦入学十二名。

三月九日

小崎に手紙を書き、『基督教新聞』[この年一月二十八日『東京毎週新報』より改題]に対するアメリカン・ボードよりの援助の遅延の事情、同新聞の他教派との共同経営の問題、東京に新会堂を建設する問題について意見を述べる。文末に「脳病未癒、又神経殊ニ敏ニシテ筆ヲ把ル能ハス『手ブル々々ト振ルヘ文字ヲ書ニ困難ナリ』」と記す。(L33: 334, L1106)

三月十日

小崎より来信、徴兵令により生ずる困難を免れるためには、同志社に歩兵操練科を設け、同科卒業生には徴兵令第二章第十二条の特典を蒙らせては如何、との森文部大臣よりの言葉を伝える。(F696)

三月上旬

田中源太郎・浜岡光哲・中村栄助・新島公義らが中外電報社に集まり、募金の方法について相談する。本部の主任となるべき人物がいいため、新島の帰国を待って面目を一新することとし、まず専門学校義捐金通帳二百部を作ってその配布を中村栄助に依頼する。(L1: 196)

三月十七日

ボストンより五マイルほど離れたドーチェスターに行き、バイカー夫人 Mrs. Walter Baker 邸に滞在、休養する。バイカー夫人から聖書を記念に贈られる。同家にはミス・フォードという婦人も滞在中であった。(L33: 340, L673, L929, L1106)

三月十八日

小崎に発信、『基督教新聞』に対するアメリカン・ボードの援助は在日宣教師らの賛助を得て掛け合うことが必要である、教会建築については「ボードよりハ先回五百ドル貴会建築之為寄付すべしよし可決せられ」たので不足のところは、これまた宣教師と相談するように書き送る。(L33: 340)

三月二十一日

ベイカー夫人と Horticultural Hall's flower exhibition に行へ。(E673, E1106)

ボストン大学の元良勇次郎がドーチェスターまで訪ねてくる。(46: 259)

松山高吉よりこの日付で来信、日本の近況を知らせると共に同志社で教師を養成すべきこと、そのためには宇野作弥か、それが駄目なら浮田和民を留学させては如何と進言してくる。(F697)

三月二十二日

安息日、ドーチェスター教会の礼拝に出席、バックカード牧師の説教を聞く。(E673, E1106)

小谷野敬三に手紙を書く。"I was quite alarmed when I heard of Pres. Seelye's serious illness though I was conscious that the Lord would spare him for us still longer." (46: 258)

京都の宣教師 (Colleagues) に手紙を書き、同志社に関する知らせ「^二」を聞き、大いに心痛していることを告げる。(46: 259, C4: 165)

* いわゆる女学校の十八年事件のことか。宣教師と日本人教師の間で対立があり、女学校宣教師の一斉辞任に発展する。六月十七日の項参照。

三月二十三日

朝、バックカード牧師が来訪、また E・G・ポーター牧師が夕方まで留まる。(E673, E1106)

三月二十四日

午後、バックカード牧師の家を訪れ、伝道の話をする。同牧師は数年前イリノイ州エバンストンの第一教会の牧師であった頃、宣教師のグリーンはその教会員、沢山保羅はそこで同牧師より受洗したことを聞く。ベイカー夫人より日に三回葉を授与される。(E673, E1103)

ジャパン・ミッション特別会が大阪で開かれ、改めて同志社の書籍館建築費一万二千ドル、チャペル建築費五千五百ドル(いずれも煉瓦造り)の特別支出をボードに要請することを決める。また医学校については他と協力して (on a union basis) 京都に設立すること、J・C・ベリーを岡山より京都

三月二十五日

に異動させることを承認する。(E24:12)

クラーク博士に会うためボストンへ行く。A・ハーディ夫人と食事をする。午後ブルックス牧師 Philip Brooks を訪問する。日本に渡航する一婦人に会う。(E673, E1106)

京都の宣教師に発信、「今や米国伝道会社は哲学教授としてアンアール大学の一卒業生を送りて我神学科を改良し以て有為の青年の志望を満たさしめんとす……」「近日ケンタッキー州ルイスヴィルの一貴女に談じて……学生補助の爲め六十ドルの寄付金を得んとす」と書き送る。(H6:259, C3:232) 同志社、この日より春期試験を行う。(E1:256)

三月下旬

ボストンより京都の同僚たち (Colleagues) に手紙を書き、その中で二月三日以来、読書も、書くことも諦めざるを得ない状態であり、なお、ひどい頭痛に悩まされていること、しかしリューマチの方は大したことはなく、また気を落としたりもしていないことを述べる。(H6:260)

この年春、「抑一致組合両会聯合談判ノ起リハ……十八年ノ春ノ比、東京ニアル一致組合ノ錚々タル人々ヨリ両会ノ合併ヲ主唱シ其ノ考察ヲ発セラレタリト、是レカ即チ両教会ノ合併ノ相談ノ初マリニシテ……」(E2:512)

四月二日

松山高吉よりこの日付で来信、再び浮田の留学を援助するように勧め、小崎の洋行は伝道上大切な時期なので洋行よりも東京伝道に力を注ぐよう、彼に勧めてもらいたい旨を書いてくる。(E700)

四月三日

山本覚馬受洗の報を聞き、八重夫人に手紙を送る。「洗礼御望みのよし珍重……日本を出しよりは程喜ばしき新聞へ未だ承り不申候……御兄様にも其節受洗□□、京都府下の人々に大関係をも生ず事」にならう、と述べる。(E3:243)

四月四日

* 山本寛馬は明治十八年五月十七日、宣教師グリーンから第二教会において受洗。

来る五月七日京都において開かれる予定の第四回日本基督教徒大親睦会に宛て、この日付で祝辞を送る。(全3:343)

四月五日

復活祭、シアーズと共に三一教会の礼拝に出席する。ブルックス牧師の説教を聞き、朝日のとき光明を望み見るように感じた、とベイカー夫人に語る。(L673, L1106)

* シアーズも、ブルックス牧師も聖公会に属していた。

この日、伊勢・小崎・不破・デヴィス・八重夫人より手紙を受け取る。とくに不破唯次郎が十二円の収入で熱心に教会活動をしていることをベイカー夫人に語る。(L673, L1106)

四月七日

朝食時、ベイカー夫人より不破の教会へ百ドル寄付の申し込みを受ける。"They raised money for that purpose". (L1106)

* 朝食の際、ベイカー夫人より不破の教会のため百ドル、新島のため二百ドルの寄付を得る。(L673)

* 「……当時米国にあった新嶋氏の尽力によって彼地の有志者から参百余円の資金が贈り届けられた。斯くて明治十八年……敷地を福岡呉服町二十一番地に購入して建築に取掛かり、同年六月五日に竣工した」(F4:161)

三月十七日より約三週間滞在していたW・ベイカー夫人宅を出発、同夫人に馬車で送られ、ドーチェスターからボストンのA・ハーディのもとに帰る。滞在中、ベイカー夫人のさまざまな国に対する興味を聞いたり、夫人の仕事ぶりを見たり、また天気の良い日は馬車で出かけたり、家族のようなものなしを受ける。また、ハミリン博士 Dr. Hamlin に会い、話を聞く。(L1106)

N・G・クラークに発信、同志社女学校での意見対立に関連していくつかの提案をし、女学校の拡張

の問題、宣教師と日本人伝道者、宣教師と日本人教師、小崎の出版物へ援助のこと、九州・東北伝道等九カ条にわたり新島の意見を述べる。(46: 260)

アーモストに住むマサチューセッツ農科大学のW・S・クラーク元総長へ、札幌の仕事について手紙を書く。写真を田村「直臣」とシーリー総長に送る。(E1106)

四月十日

O・J・フリント夫人がジョイ街四のハーディ家に新島を訪問する。彼女に日本の壺と茶托を贈る。

(E1106)

四月十一日

アメリカン・ボード事務局においてJ・C・ベリーのこの日付の手紙を受け取る。それによれば日本宣教団は各派キリスト教団連合による医学校設立に反対していると告げていた。(E191-D)

四月十二日

朝、オールド・サウス・チャーチに行き、ゴードン牧師の都市伝道に関する説教を聞く。セント・ポール教会に行き、ロートニー博士の説教を聞く。聴衆二十名足らず。(E673, E1106)

四月十三日

月曜日、午前十一時ボストン発、ニューヨークに午後六時に着く。十番街西三十九丁目のブース氏方Mrs. B. Booth and Mr. Frederick A. Boothに泊まる。同家ロ克蘭という近日ベルシャ伝道に赴く婦人に会い、同地方の布教状況について聞く。(E673, E1106)

四月十四日

荷物の状況を調べるため四番街の聖書館およびリヴァーモアJ. R. Rivernoreを訪ねた結果、神戸の宣教師ジェンクスの作った送り状が不完全で、皿ハダース、銅製ティー・セット三組を紛失していることがわかる。(E1106)

この日、アレクサンダー博士のプレスビテリアンの教会でWomen Boardが結成された十三周年記念祝会が開かれ、新島は同教会の婦人たちに短い挨拶をする。彼女らは東京の一婦人とタイ国の婦人

四月十五日

に援助を送っていた。(全6: 264)
滞在中の支払いをすべて済ませる。(E673, E1106)
センター街のプレスビテリアン・ボードにマイケル博士 Dr. Michael とエリンワード博士 Frank F. Elinward を訪ね、小崎より送ってきた「基督教新聞? の経営に関する」覚書を渡す。エリンワードは大変好意的であり、4th Avenue と 11th street のメソジスト・セクションへ行くよう教えられる。その後 Union Theological Seminary と Presbyterian Hospital を見学、W・テイラー博士と午後、一時間ほど同志社への寄付等について話をする。アレクサンダー博士の教会の祈禱会に出る。(全6: 265, E673, E1106)

四月十六日

新潟にいる宣教師 R・H・デイヴィスの家を訪問するため午前九時ニューヨークを発ち、汽車、フェリーを乗り継ぎ、フィラデルフィア、ウイルミントンを経由して、夕方六時十分、デラウェア州ミルフォードに到着、父親の T・J・デイヴィスに駅まで出迎えられる。次週の土曜日まで滞在の予定。(全6: 264, E673, E1106)

* この T・J・デイヴィスは同志社にいる J・D・デイヴィスの第三弟にあたる。

四月十八日

マサチューセッツ州ダンバースポートの S・F・テイラー Sophia F. Taylor よりこの日付で来信、フォレスト・ヒルへ魚釣りに同行するにあたり、落ち合う場所と時間について、ボストンの新島宛に知らせてくる。(F2470)

四月十九日

ミルフォードのプレスビテリアン・チャーチで約三百人の聴衆を前に演説する。(全6: 264)

四月二十日

同志社女学校における宣教師と日本人教師との対立の問題に関し、ミルフォードより J・D・デイヴ

四月二十一日

イスに手紙を書き、その中で「私の目的は両派を和解させることでした。けれども私の試みは京都でひどく誤解されたのだと思います……私は両派をあまりにも早く和解させようと躍起になりすぎたのです」と記す。(全6:263)

ミルフォードよりN・G・クラークに発信、近況と今後の予定を知らせる。またその中にJ・D・デイヴィスからの手紙を同封し、「一部の在日宣教師の見解に対し」*"It is very strange for a few Japanese to get up a notion to make their Church a purely native Church. It is already native church."*と意見を述べる。またボストンへの帰路、コネチカット州ストラトフォードにも立ち寄り、ジャパン・ミッションのため演説をし、同志社に鐘を寄贈してほしいと訴えるつもりであると書く。煉瓦工場を見学する。(全6:264, E673, E1106)

四月二十二日

果物乾燥場を見学する。(E673, E1106)

四月二十三日

デイヴィスと共にミルフォードのトーマス宅を訪問、夕方帰宅する。(E673)

小崎よりこの日付で来信、警醒社および教会堂建設に対するアメリカン・ボードの援助、一致教会との関係について問い合わせ、かつ報告を送ってくる。(F701)

四月二十四日

夕方、メソジスト教会において演説する。満員。集められた献金八ドル五セントを新島の経費として、またデイヴィス夫妻より十ドルを旅費として贈られる。(E673, E1106)

四月二十五日

朝九時半、デイヴィス宅を出発、夕方四時半、ワシントンに着く。馬車で同志社のミスF・フーパーの両親の家に行く。大きなカバンを速達で送り、一泊する。(E673, E1106)

四月二十六日

日曜日、フーパーと共にニューマン博士の教会に行く。夜、教会で話をするように頼まれたが、気分

四月二十七日
がすぐれないので辞退する。(L673, L1106)

フーパーの案内により、馬車でワシントン市街を見物する。九鬼隆一駐米公使を訪ねて歓談、昼食を共にする。午後、P・パーカー博士を訪問、久しぶりの再会を喜ぶ。同家に泊まるよう招かれる。

(L673, L1106)

四月二十八日
カーリー・パットン Carlie Patton の案内で合衆国議会、スミソニアン・インスティテュションを見学する。(L1106)

* パーカー夫人の案内で合衆国議会、政庁を見物する。(L673)

四月二十九日
この日はミス・メアリー・パットンの案内で造幣局を見学する。午後、ホワイト・ハウスの東応接室でクリーヴラント大統領と会い、握手をする。多くの人々が彼を待っていた。(L1106)

四月三十日
ハワード大学(W・W・パットン学長)を見物する。アーモストのロビンソン氏に会う。イートン將軍に会い、教育に関して話を聞く。フーパー夫妻らに誘われて馬車でワシントン市街から一マイル離れたソルジャース・ホーム Soldiers' Home へ行く。図書館、読書室、病院のある快適なところである。(L673, L1106)

五月二日
ルイ・シンサバー氏 Louis W. Sinsabaugh を訪問、ワシントン最大の煉瓦工場を見学する。午後P・パーカー博士を訪ね、二日半逗留する。新島は、かつてラットランドの年会で一千ドルの寄付を得たことに對し、その好意を謝して礼を述べ、同志社英学校の進歩と日本伝道の状況について説明する。八十一歳の老翁が感涙を浮かべて話を聞くのを見て「如此迄も日本の為を思へ日本の為に心配せられ、又日本の為に感涙を流がす人あるや石と……暫く物言ふ事も出来やうし……」(L673: 364 L673: 364)

L1106)

五月三日

日曜日、ニューマン牧師の教会に行く。牧師急病のためコンダリゲーションナル・ユニオンの牧師が代わって説教をする。パーカーの家に泊まる。(全3: 345, L673, L1106)

五月四日

パーカー博士の子息の案内で、午前中、スミソニアン・インスチテューションに行き、魚その他の標本を見る。同所のメイスン教授 Prof. Maision と話をしてさまざまなアドバイスを受ける。海軍観測所へ行き、スキナー教授 A. N. Skinner に所内を案内してもらう。さらにジョージタウンにチャールズ・ランタン Charles Lanman を訪ねる。(L673, L1106)

五月五日

パーカー家を去り、ボルチモアに行く。中央駅前の粗末なホテルに泊まり、夕方、市内を見物する。(L673, L1106)

五月六日

A・ハーディの紹介状を持ち、ジョンズ・ホプキンス大学にギルマン総長 D. C. Gilman を訪問する。トーマス博士、キング氏、政治学部学生の後藤〔佐藤昌介か〕、太田稲造と共に昼食に招待される。太田稲造〔のち新渡戸稲造〕の案内で学内を見学する。(全6: 266, L673, L1106)

五月七日

雨、ギルマン総長と小さなチャペルでの礼拝に出席する。大学の物理・科学・生物等の教室および施設を見学する。大学の生物教室から Potomac Armies 再結成のパレードを見物する。同校を去る前、太田より、友人の内村鑑三が困っているので援助してほしいと頼まれる。後藤〔佐藤〕が駅まで見送る。夕方、フィラデルフィア着、駅前通りのホテルに入る。内村宛に電報を打つ。内村へは太田より二日前に新島のことを知らせていたようである。(全6: 266, L673, L1106)

第四回全国基督教徒大親睦会が、この日より十三日まで京都鴨川畔において催される。同志社休業。

(全1: 256)

五月八日

早朝、内村鑑三がエルウインより来訪する。二人で聖書を読み、かつ祈り、内村は罪の告白をし、祖国において伝道に従事すべきことを約束する。午後、フィラデルフィア近郊オーバールックのグリーンヒル農園に住むモリス夫妻を訪問する。内村はエルウインに帰る。(E673, E1106, J70: 547)

五月九日

大親睦会第二日目、在米の新島の手紙〔四月四日付〕が新島公義によって朗読される。(J71: 70)
朝、市内見物に出かけ、思いがけずアーモスト大学で一年下だったE・S・フィッツに会う。彼の案内でバプテスト教会、市創立一〇〇年記念祭の行われている公園へ行き、さらにペンシルベニア大学、フランクリンの墓等を見物する。午後、ニューヨークに行き、レキシントン・アベニューのJ・C・ベリー博士を訪問、十三日まで滞在して看病婦学校、病院設立計画について相談する。(E673, E1106)
朝、ブルックリンの教会に出席、R・S・ストア博士の説教を聞く。午後はまたW・M・テイラーの話を聞く。同博士と短時間話をする。その後、セントラル・パークに行き、動物園、美術館等を巡る。(E673, E1106, F101)

五月十日

五月十二日

N・G・クラークにニューヨークより発信、旅行中のことを報告すると共に、京都の病院と看病婦学校の事にふれ、次のように述べる。“Dr. Berry read to me your most interesting note to him. It seems that you are making grand aggressive work in Japan. Oh! I have been longing to see this day.” (全6: 266)

五月十三日

ニューヨークから小崎に発信、プレスビテリアン、メソジストの総主事に会って小崎の新聞の援助について相談したこと、彼らはそれに賛意を表するが、在日宣教師の意見を聞かなければ答えられない

こと、東京の宣教師に「基督教」新聞について興味をいだかせ、それぞれのホーム・ボードに援助するよう求めさせることが最上の方法である。またアメリカン・ボードとしてはいくつかのボードと分担して援助する方がはるかに良いと考えているようだ、と記す。その他、小崎の教会、東北地方の教勢について述べる。(全6:267)

テイラー博士の家に滞在する。(F通1)

五月十四日

ゴードン宣教師の友人のエディー夫人を訪問、ここに一泊する。(E673, E1106)

五月十五日

金曜日、朝、ウイン夫人を訪問、午後、ベーレンド牧師を訪ね、祈禱会に出席、十五分ばかり感話をする。フィラデルフィアの有名な実業家ポンド氏を訪ね、書籍館のため百ドルの寄付を受ける。

ポンドの家に泊まる。(E673, E1106, F通1)

五月十六日

ポンド家を発ち、コネチカット州ストラトフォードのJ・S・アイヴズ牧師のもとに行く。(E673, E1106, F通1)

五月十七日

日曜日、朝、アイヴズ牧師の教会で説教をする。“A hard church to speak.” (E673, E1106, F通1)

五月十八日

山本寛馬、第二教会において受洗する。(全3:829)

アイヴズ牧師の案内でブリッジポートに住むアモスト時代のクラスメート、H・A・ディブンポート牧師 H. A. Davenport を訪ねる。彼の執事の一人 S・C・ホートンが興味を持っている弾薬工場を見学に行く。(E673, E1106)

五月十九日

アイヴズ牧師とハートフォードへ行き、州庁に近いメモリアル・ホールで催されるコングリゲーション・クラブ(所長ウォーカー博士)の集会に出席する。会の始まる前に州庁とそこにある図書館

を見学する。新島も日本での伝道について約十分話をする。イエール大学のポーター総長のもともてなしを受ける。(E673, L1106)

五月二十日

大津における集会——馬場新三・林田騰九郎・高田義甫が会主となり、大津魚清楼に滋賀県の常置委員、諮問委員、大津商工会議所の有力者二十八名を招待、市原盛宏・新島公義らこどもも立って明治専門学校への賛助を求める。(A1:196)

五月二十一日

午後、旧約聖書改訂の集会に出る。ローウェル出身の牧師やクレイ教授ら数人が意見を述べる。

ポーター総長の案内でイエール神学校の図書館を見る。総長宅に泊まる。(E673, L1106)

五月二十二日

金曜日、アーモストへ行き、シーリー総長を訪問する。彼に日本のコイン——小判、一分金を贈る。

二十五日(月曜日)まで滞在する。A・ハーディ夫妻は数日間バーハーバーへ行っている。ミス・カミングが来て、泊まる。彼女は不破唯次郎の教会に五ドル寄付する。(E673, L1106)

* 五月二十二日ボストンへ帰る。(L1107)

五月二十六日

ボストンのA・ハーディ家よりワシントンのバーカーに手紙を書き、先日訪問したことへの礼を述べた。(D33)

同志社の教員に手紙を書き、同志社の教員養成と日本伝道の強化についての計画を述べる。(A6:268)

五月二十七日

ダンバースポートのS・F・テイラーよりボストンの新島宛にこの日付で来信、先日フォレスト・ヒルへ魚釣りに同行するため待っていたが、待ちぼうけを食ったこと、できれば来週の日曜日(六月五日)に同行したい、と伝えてくる。(T2476)

五月二十九日

ボストンよりN・G・クラークに、小崎の「新聞」に対する最終決定を早く知らせてくれるよう頼む。もしボードが小崎の新聞を援助することに決まれば、「Yea」ダメならば「No」と電報を打つことになっている、と書く。(全6:270)

五月三十日

蔵原惟郭に手紙を書き、彼の進学先につきメイン州バンガー神学校 Bangor Theological Seminary とシカゴ神学校に働きかけていることを伝え、「小弟昔時労働せし事一年ヨ、又人之糞汁迄モ洗ヒシ事アリ、是等之事ハ今日ニトリ小弟ヲ益する殊ニ甚ダシ……人勞シテ初メテ黄金ノ貴キヲ知……労働ハ兄ノ本国ヲ発スル時ノ覚悟ニアラスヤ、坐シテ人ノ助ケヲ受ルヨリモ勞シテ自ラヲ助クノ貴キニ如カス……」と励ます。(全3:347)

五月三十一日

五月下旬

日曜日、雨、トレモント街にあるクーニー博士のエピスコパル教会へ行く。(L673, L1106, F210) ボストンよりメアリー・モリスに発信、ウォーダー教授 Prof. Warder の日本行きについて尋ね、日本を良くするためには優秀な教師、とくに日本人の働き手が必要であり、それはトレーニング・スクールで育ちつつあること、またそのためにモリス夫人の教会に (一) 少なくとも一、二名の第一級の政治学のクリスチャン教師を同志社に送ること (二) 少数の優秀な日本人学生がジョンズ・ホプキンス大学のようなところで勉強して、有能な教師になれるよう、援助してほしいと訴える。(F2288) ペンシルベニア州エルウインの内村鑑三よりこの日付で来信。(J82:162)

六月一日

六月二日

六月三日

大津で疏水工事起工式。〔六月二日京都で起工式〕(H13:82) 小崎の「新聞」についてN・G・クラークよりこの日付の返事が来る。(F2280)

* ジャパン・ミッション年会の記録(六月十二・十七日、神戸)によれば、警醒社への援助として八百ドルが

特別支出される、と報告されている。(E24-8)

六月五日

昼食後、A・ハーディ夫妻とオーバンデール Auburndale のエドワード・ハーディの家を訪ねる。

エドワード氏は不在だったが、レン夫人、カーター夫妻、ストロング博士、ミード夫人に会う。お茶の後、礼拝堂へ行く。カーチス氏の前置きが長く、新島は少しだけ話をする。A・ハーディ夫妻と九時の汽車でボストンに帰る。バーンズ氏に貸してあった日本地図を紛失したため、十ドルを受け取る。その金を蔵原惟郭に送り、窮状を救う。(E673, E1106, F151)

六月六日

C・グッドウィン夫妻を訪問するため、ポーター牧師と共に六時二十五分前にボストンを出発する。

(F151)

六月七日

グッドウィンと共にレキシントンで過ごす。(F151)

福岡教会設立、牧師・不破唯次郎。(F1:87)

六月八日

グッドウィンの馬車でコンコードまで行く。(F151)

六月十日

ボストンよりN・G・クラークに発信、小崎の新聞への援助決定について礼を述べる。また午前中にブルックリンのミス・V・クラークソンを訪ねるつもりである、と書く。(E6:270)

六月十一日

セイレム・サウス・チャーチで演説、近隣の牧師たちも来て聴衆はいっぱいである。女性が主であった。約四十五分話してから質疑応答する。ウースター、ポイントナ街のホームーJ・フラー博士に招待される。(E1106, F151)

六月十二日

朝、スチムソン牧師の教会で話をするが、聴衆にちゃんと聞いてもらえなかった。カーター博士が進行係であった。夜、フラー博士と共にフェルプス博士の教会へ行き、彼の演説の後、十五分ばかり話

六月十四日

六月十五日

六月十七日

をする。スチムソンの教会よりもはるかに話しやすかった。(F. 11)

ウースターでスチムソン、フェルプス博士と共に過ごす。(F. 11)

月曜日、フラー博士に案内されてウィックカム氏、ミーン氏、フェルプス博士に会う。(F. 11)

オルデン博士とボストンを九時に出発、午後二時半にメイン州ルイストン Lewiston 到着、ハウ G. H. Howe の家に迎えられる。集会はステイト・コンフェレンスで行われ、二百二十五の教会の代表が集まった。ハウの家でバンゴ―神学校のルイス H・スターンズ教授夫妻に会い、蔵原惟郭のことにつき相談、満足のいく答えを得る。(F. 11)

ジャパン・ミッション第十三年会が十二日より十七日まで神戸で開かれ、同志社女学校の経営に関して次のことを決議する。(一)同志社女学校の宣教師教員の辞任を承認する (二)京都ステーションが女学校停止 (The suspension of the school) について同志社と協議することを認める (三)ミッションとしては女子の高等教育の学校を持つことが望ましいので、それを神戸に設置する。(E. 4-8)

* 以後、女学校は日本人の手によって経営されることになる。

マウント・ホリヨーク女学院より手紙が来る。ハイム夫人 Mrs. Heim が病気のため新島の来訪を延期してほしいと考えている旨を、テイラー氏より知らせてくる。それで七月四日に行くと電報を打つ。ボートランドに行くつもりだったが、ハウ夫人に二十二日まで引き留められる。(F. 11)

ラットランドで同室だったドニービル Dennyville のポーター E・ペイス P. E. Vase とルイストン・ステイト・コンフェレンスで会う。ハウ夫人の教会の会員ペンネル氏の案内で水道設備を見学する。(F. 11)

六月二十一日 内村鑑三よりこの日付の手紙を受け取る。(J82:173)

六月二十二日 ルイストンを午前十一時五分発、午後一時、ポートランドに着く。C・H・ダニエルズ牧師に出迎え

られる。荷物を船に積み込んでから彼の家に行く。ミス・キング、ミス・ペイカー、ミラー氏、カー
ルーサー博士らの知人に会う。ダニエルズの家で北日本伝道の地図を書く。ダニエルズがボストンま
での船の切符を買ってくれる。彼の教会を見る。船は八時二十五分ポートランドを出発、美しい月夜
である。(F761)

六月二十三日 朝六時ボストン着、午後三時に同地を出発し、スプリングフィールド経由でホリヨークに到着、四マ

イルばかり離れたサウス・ハドレーに一泊する。(F761)

マウント・ホリヨーク・カレッジのチャペルで若い女性たちに話をする。気分が悪くなり、アーモス
ト大学のシーリー総長とヒッチコック博士にアーモストまで連れ帰ってもらう。(F761)

六月二十五日 シーリー総長宅でジェイムズ夫妻と会う。(F761)

六月二十七日 この日付で内村より来信。(J82:179)

六月二十八日 アーモスト大学の卒業式に出席してシーリー総長の説教を聞く。またハートフォードのウォーカー博
士の話も聞く。(F761)

六月二十九日 京都の山本覚馬よりこの日付で来信、このほど受洗したことを伝えてくる。(F765)

六月三十日 アーモストのリユニオンの日に十九人がモース教授の家に集まる。(F761)

六月 京都で開かれた第四回基督教徒大親睦会の議長・大儀見元一郎より挨拶状が送られる。新島の祝辞に

対する答礼である。(F766)

七月一日 学位授与式 (Commencement) と昼食会、演説をする。(F: 261)

七月二日 グリーン〔?〕総長と W・S・クラーク元総長を「マサチューセッツ州立農科大学に」訪問する。

(下: 261)

* Pres. Green と James C. Greenough のつか。とすれば彼は一八八三〜八六年の間、President of the Massachusetts Agricultural College だった。

七月三日

この朝、蔵原より手紙が届き、これに返事を書く。その中にバンゴー神学校の教員より求められているので「君平素満腔之宿志を陳し」新島まで送るように伝える。(H: 33: 349)

アーモストを去り、ドーチェスターのベイカー夫人のもとに行く。(F: 261)

七月四日

ベイカー夫人と昼食、テイラー夫人のところへ行く。ドーチェスターから小崎に発信、高知・東北伝道について書く。(全: 271, 下: 261)

七月五日

日曜日、午前、ウィング牧師、午後、バプテストのコール牧師の礼拝に出る。(F: 261)

七月五・六日

内村よりこの日付の手紙が来る。(J: 82: 180)

七月六日

ナハント・ビーチ Nahant Beach へ小旅行。(下: 261)

七月七日

セイレムに行き、W・T・セイヴォリー船長に会い、クラブ・ハウスでラングメイド氏と三人で昼食をする。ボストンへ行き、不破唯次郎に本を送る。ダンバースポートへ行く。(H: 33: 335, 下: 261)

七月八日

午前十時二十七分の汽車でダンバースポートを発つ。ピーボディで鉄道事故に出会う。エバート A・トムソン「アーモスト大学 71 組」に会うため、ノース・ウォーバーン North Woburn へ行く。エマ・ファウルには会いそこねたが、マーシャル・ドットとアンダーソン牧師に会う。ディーコン・ゲ

ーシ Deacon Gage の店に泊まる。(下通1)

七月九日

午前十一時十五分リンカーン着、リチャードソン牧師の教会で話をする。フリント夫人が進行役。リチャードソン牧師とアダムズ牧師が出席する。(下通1)

七月十日

カーリー・フリント Carlie Flint の案内で共同墓地や貯水池を見る。ウェストン夫妻の家でお茶を飲む。(下通1)

七月十一日

土曜日、安息日を静かに過ごすためマサチューセッツ州オーバーンデールに行き、十四日の昼まで滞在する。(下通1)

七月十三日

昼すぎボストンのミッション・ハウスに立ち寄り、ただちに医者家に行く。二時半すぎ帰る。蔵原より来書。(全3:352)

熊本在住の下村孝太郎よりこの日付で来信、留学に際し旅費および家族への援助を受け、感謝していること、アメリカではウースターの専門学校へ入るつもりであることを伝えてくる。(下通1)

七月十四日

正午ごろオーバーンデールを出発、「ボストンで」蔵原に会う。その後、汽船でボストンを出発、メイン州バーハーバーに向かう。マサチューセッツ州ブルックラインのミス・フラーに会う。(全3:352, 下通1)

七月十五日

バーハーバー到着、A・ハーディの斡旋によりホテル・ニューポート・ハウスに泊まる。十日ほど滞在する。バックingham博士の一家に会う。この日付の内村書簡を受け取る。大儀見元一郎より聖書翻訳事業につき委員の交替を通知してくる。(全3:353, 全6:280, 下通1, 下通1, J82:183)

七月十六・七日

バックingham博士と帆走する。(下通1)

七月十八日

バックingham博士と帆走、スプリングフィールド周辺の教育やキリスト教について聞く。ブラウン夫人よりセントラル・チャーチの日曜学校の名前で六十ドルを寄付され、同志社の男子生徒に与えられる。日曜学校宛に領収書を送る。また、かつてジョンズ・ホプキンス大学の教授であり、現在イギリスのケンブリッジ大学の教授であるハリス教授より太田稻造を通じて、京都で最初の大学へと十ドルを受け取る。(下通1)

七月二十一日

同志社で使用するためコネチカット州イースト・ハンプトンのベヴァン氏によって鋳造されたベルが寄贈されたことについて、J・S・アイヴズ牧師に礼状を書く。ベルは二、三週間前にボストンのミッション・ハウスのハッチンス氏のところに送られていた。(全6: 272)

七月二十三日

祈禱会に出席する。十八日に受け取った内村の手紙に返事を書く。(下通260, 下通1)

バーハーバー湾を一つ隔てた対岸のウエスト・ゴールズバラ West Gouldsboro へ移る。(全6: 273, 下通1)

七月二十四日

スミス夫人がA・ハーディのヨット *Lanthe* 号で新島への荷物を届けてくれる。彼女は土曜日「二十五日」まで滞在する。(下通1)

七月二十六日

日曜日、A・ハーディ夫妻と三人で礼拝に出席、二週間に一度来るノートンの説教を聞く。日曜学校が無いことを聞き、それを作ってはどうか、と提案する。(全6: 273, 下通1)

七月二十七日

ディケンズの小説 *David Copperfield* を読み始める。(下通1)

蔵原に発信、神学校へ送るべき彼の文章を紛失したので、もう一度書いて送るよう頼む。また執筆に際しての注意を書き添え、入学するためには英語を読み、書き、喋れなければならないと書く。(全

3: 353)

七月二十八日

ウエスト・ゴールズバラよりA・ハーディ夫妻に発信。波止場に釣りに行く。ヒラメ (Flounder) 四尾。(全6: 273)

松山高吉からこの日付「消印は七月二十日」で来信、近況を知らせてくる。(F712)

七月二十九日

ウエスト・ゴールズバラよりN・G・クラークに発信、毎日釣りをしていること、朝A・ハーディ夫妻がヨットで日本からの手紙を持ってきてくれたこと等を書く。魚釣り——ヒラメ九尾。(全6: 273, 下巻1)

七月三十日

波止場で釣り——ヒラメ八尾。クラークに発信、ジャパン・ミッションが仙台にいるO・H・ギューリックを九州に送ろうとしていることに反対、九州へは若い人を派遣すべきだとの意見を述べる。

(全6: 275, 下巻1)

サウス・ゴールズバラからバーハーバーへ汽船で行く。往復各二十五セント。(下巻1)

七月三十一日

N・G・クラークよりこの日付で来信、ギューリックが仙台から福岡に移りたいと希望していることについて、委員会と自分の意見を述べてくる。(F2493)

八月三日

月曜日、華氏六二〜六五度。クラークの手紙を受信。トーマスJ・デイヴィスより八月五日にポストンのステイト・ホテルに泊まる旨の通知を受ける。C・H・カーペンターの Self Support についての本を読む。またジョセフ・ジョンソンの Self-Effort on Health も読む。午後、ボートを漕ぐ。流れも風も逆。(下巻1)

八月四日

A・ハーディが嵐の中クラークの手紙を持ってくる。(下巻1)

同志社の学生・林拾が退学処分を受けたことを聞き、一詩を賦して同氏に贈る。

遠在米州余豈忘 恐為聖会盟兄弟 家信偶到報君事 概歎溢為敢滴涕

余不問韻字之正非如何滿腔之痛見煩湧 為一片之詩之章只要同氏之了察耳 (E1103)

八月七日

内村に宛て六日に受け取った手紙の返事を書く。アーモストでの道が開けるようシーリー総長に手紙を送るつもりだと述べる。(A6:277)

L・M・メイスンという人物がポストンより来て、日本でオルガンの製造を計画し、音楽学校を設立したいとの相談をもちかける。彼の希望により午後四時、ゴールドズバラ発の汽船でバーハーバーまでA・ハーディに会いに行く。途中、絶え間のない音楽談義で悩まされる。ハーディ家で一泊。(A3:356, F241)

八月八日

朝、ウエスト・ゴールドズバラに帰る。(A3:356, F241)

八月九日

シーリー総長に手紙を書き、内村の入学と奨学金の支給について懇請する。(F2264)

八月十日

八重夫人に発信、林拾・緒方正脩ら数名の退学生について問い糾す。(A3:355)

八月十一日

内村よりこの日付で来信。(J82:190)

八月十二日

メイン州ポートランドのJ・S・シーウォール教授 John S. Sewall からの日付で蔵原のひとへにき来信。(F2496)

八月十三日

高野重吉よりの手紙(七月二十五日付)を受け取る。(E1106)

八月十四日

シーリー総長より内村を受け入れる旨の手紙を受け取る。(F241)

蔵原惟郭のバンゴー神学校入学についてシーウォール教授に手紙を書く。(A6:281)

八月十五日 A・ハーディに発信、カーペンターの Self Support について感想を述べる。(F2491)
シーウォール教授より返事があり、蔵原の入学に関して他からも言ってきたいるが「新島氏よりの推薦次第による」というので、さっそく推薦文を書いて送る。(43:360)

八月十六日 内村よりこの日付の書簡が来る。「先生ヨ、弟先生ニ報ユルニ言ナシ術ナシ、只後日弟ノ力アラン限り先生ノ主、弟ノ主ナル基督ニ事ヘンノミ……」(J82:194)

八月二十二日 内村よりこの日付で来信。(J82:196)

八月二十四日 J・S・シーウォールよりこの日付で蔵原の受け入れについて手紙が来る。内村よりこの日付の手紙が来る。(F2499, J82:198)

八月二十五日 蔵原に発信、シーウォールよりの手紙を同封して送ること、二十五ドルの金策についてはアメリカン・ボードのクラーク先生に頼んでいるから、同氏のところへ行くように伝える。(43:359)

八月二十九日 クラーク宛に、蔵原に二十五ドル貸してやってほしいと頼む。(46:279)
A・ハーディに少年時代のことを記した文章を贈る。これは後に *My Younger Days* として知られるようになる。(410:21, F2491)

八月三十一日 内村よりこの日付で来信。(J82:201)

九月七日 シーリー総長に内村入学についての礼状を出す。(F2491)

九月九日 内村よりこの日付で来信、九月七日アーモストに到着したことを知らせてくる。新島の住所 A. W. Hills, Esq. West Gouldsborough, Main. (J82:202)

九月十日 A・ハーディ家でパーティが開かれ、二十三人が集まる。ミス・ヒドンに発信、近況を知らせる。

(全6:280, F.通1)

九月十一日

P・ヒルとサウス・ゴールズバラへ行く。スミス夫人と荷物を運び、チャタムへ鉄道便で送る。ウェスト・ゴールズバラでA・ハーディの別荘 Mr. Hardy's House からの風景をインクでスケッチする。一枚はハーディ夫人のため、一枚は自分のために。(F.通1)

九月十二日

バーハーバー十時発→ハンコック・ポイント十一時半→バンゴー着。同市マーケット・プレイスのマーチャント・ハウスに泊まる。蔵原に会う。(F.通1)

九月十三日

日曜日、フィールド博士の教会に行き、素晴らしい説教を聞く。ホイールライト博士 Dr. Wheelwright にフィールド博士を紹介してもらう。シーウォール教授の家に招待される。(F.通1)

九月十四日

ペイン教授を訪問、フィールド博士と昼食、スターンズ教授の家で夕食。スターンズ夫人はシーウォール教授の姉である。(F.通1)

九月十五日

デニオ教授 Prof. Denio と昼食、汽車でポートランドへ。C・H・ダニエルズ牧師の祈禱会に出席、十分間話をする。(F.通1)

九月十六日

パーシー氏の案内で市内見物、午後ダニエルズ牧師と共にバンキン・ミラー氏、ハロック牧師を訪ねる。駅へJ・C・ベリーを迎えに行く。夕食の後、汽船トレモント号に乗る。快適で静かな夜である。

(F.通1)

九月十七日

ボストン到着、アトランチック街で朝食をとり、コングリゲイショナル・ハウスへ行き、さらにドーチェスターのベイカー夫人の家に行く。風邪をひき、そのまま二十一日まで同家に滞在する。

(F.通1)

九月二十一日

風邪は良くなってきたが、ひきなおさないよう、ベイカー夫人の馬車で駅まで送られる。アンドーヴァーに行き、フィリップス・アカデミーのセシル F・P・バンクロフト校長に迎えられる。(F1481)
「バンクロフト氏ノ家ニ招カレ、殆ト三週間ノ時日ヲアンドワ邑ニ消費スルノ機ヲ得タリ。予曰ラク、コノ機失フベカラス、仙台校を創設スルノ策ヲ立ツル宜シク此秋ニアルベシト……」(全5: 275)

九月二十二日

ミス教授にチャベルで話をするように頼まれる。(F1491)

九月二十四日

ベリー博士とノース・アンドーヴァーのホレース・デーヴィッドの家に行く。ミス・マッキーンやキムボール・ペティ氏に会う。プロスペクト・ヒルでパーク教授に会い、馬車に乗せてもらう。(F1491)

* ミス・マッキーン Miss Philena McKeen はアボット・アカデミーの校長。新島の最初の伝記を書いた Miss Phebe Fuller McKeen の姉にあたる。

九月二十七日

神学校チャベルで話をする。(F1106, F1491)

九月二十八日

ミス教授、ミス・ドワイトと馬車に乗る。お茶に呼ばれる。(F1491)

九月二十九日

アメリカン・ボード運営委員会に提出すべき“Appeal for a Christian University in Japan.”を書き終える。(F1117)

朝、アンドーヴァーの最高の地点に登る。蔵原惟郭よりバンゴーで勉強している旨伝えてくる。その手紙に対し新島は「縷々御申越之趣骨髓ニ貫徹ス敢テ勿々ニ看過セス飽マテモ小生ノ分ヲ尽所アラントス」と返事する。(全3: 361)

九月三十日

アンドーヴァー神学校教会における祈禱会および Society of Inquiry の集会において、東北地方の伝道計画を述べる。この演説がきっかけとなって、学生による Japan Circle が組織され、日本の教

十月一日

育と伝道のため十二、四名の伝道希望者を出す。(L1671, L1106, F1011)
 スミス教授に招かれ、クラーク博士の教育に関する著述を読みに行く。夕方、ハリス教授とお茶を飲む。カーラー・コール氏を訪問する。(F1011)

十月二日

神学校学生・女学校生徒らと共にスミス教授に招かれる。(F1011)

十月三日

土曜日、Elder Taylor と政治の仕組み、選挙について話をする。(F1011)

十月四日

神学校のチャペルで話をする。満員で良い聴衆だった。(L1106, F1011)

十月五日

スミス教授にノース・アンドーヴァーまで馬車に乗せてもらう。新神学の話をする。スミス夫人、ミス・ドワイト同伴。(F1011)

十月六日

A・ハーディ氏、オルデン氏と共にボストンへ、ボードの運営委員会を傍聴に行く。夕方 Female Seminary 「アンドーヴァーのアボット・アカデミーか」に行き、夕食をする。祈禱と短い話がなされる。故ミス・フィービー・F・マッキーンの写真をもらう。(F1011)

十月七日

ハリス教授にトリイ、シュライデン氏らとお茶に招かれる。祈禱会において再び話をする。地図を見せ、伝道に人物の必要なことを訴える。学生によって真剣な祈りが捧げられる。タッカー教授の外国伝道について良い話を聞く。(F1011)

十月八日

Society of Inquiry の集会が開かれる。議長はストッダード Mr. Stoddard 三十分の祈りののち西部開拓者の仕事についていくつかの話があり、タッカー教授も伝道について話をする。トリイ氏もし必要なら自分が日本に行くことを申し出、バンクロフト校長のもとに新島を訪ね、決意を述べる。集会の後、ストッダードの部屋に有志が集まり、日本伝道について話し合う。そして日本伝道のため

十月九日

何人かを派遣することに賛成する。(下註1)

朝、祈禱会、ヘミンウェイ氏に集会の結果を聞く。トリイとも会う。ミス・ヒドンを訪ねる。セイラム街にストッダードを訪問する。神学校の彼の部屋へも行くが、留守。ウォレン Warren の部屋へ行く。カルトン、ヘミンウェイの三人で祈っていたので、新島も加わって祈る。(下註1)

五日から九日までアンドーヴァー神学校の学生たちと個人的に話をするに多くの時間を割く。

(L1106)

この日、蔵原に発信、「我輩ハ生涯先師タラス無知之後弟ナリ」というフィリップス・アカデミーのパンクロフト校長の言葉を引き、「此の語最モ生ノ意ニ適ス生同志社ヲ創立セシ以来、不幸ニシテ先生ト称セラル、是レ生ノ曾テ先生ト称セラル、ヲ好マサレ共亦止ムヲ得サル所アリ、生自今ハ断然無智ノ後弟タルヘシ……」。蔵原に新島の古着を送る。一着は一八七二年にロンドンで、もう一着は一八七三年にドイツで作ったもので「帰朝後之ヲ着ケテ尚今日ニ至」ったものである。(L1106:364)

十月十日

朝八時にパンクロフト校長宅を出発、ダートマス大学のアーサー・シャバーン・ハーディ教授に会うためニューハンプシャー州ハノーバーに向かう。午後三時、ハーディ教授を訪う。校内を見学する。

(下註1)

スミス博士夫妻、ミス・スミス、ミス・ベイス、ミス・スーザンと共にリチャードソン教授に招待される。(L1106, 下註1)

* Prof. Arthur Sherburne Hardy 及 Alpheus Hardy の二男、*Life and Letters of Joseph Hardy Neesima* の著者である。『新島襄全集』第十巻は同書を翻記したものである。

十月十一日

日曜日、大きな教会でリード博士の説教を聞く。夜、日本伝道について話をする。ラブ、ベティ教授およびバートレット総長と会う。(E1106, F101)

十月十二日

ハノーバーを六時半に出発、夕方アンドーヴァーに着き、ミス・ヒドン宅に泊まる。タッカー教授と何人かの学生を訪ねる。(F101)

十月十三日

朝十時二十分、ボストンに帰る。(F101)

アメリカン・ボード第七十六年会がボストンで開かれる。十六日まで。(A3:366, E1106, F101)

十月十四日

ストウ博士の演説を聞く。日本よりの手紙を読む。(F101)

十月十五日

渡米した下村孝太郎、フラー博士と共に来訪する。(F101)

十月十六日

新島の帰国が近いということで、内村鑑三がお別れの挨拶に来る。(F101)

十月十七日

小崎が東北伝道に出かけたことを、下村より聞き、ボストンより小崎に手紙を書く。「兼而前々より

奥州ニ一英学校を起こすの策あり……何れ之地か宜しきや」と尋ねる。(A3:365)

十月十八日

日曜日、ゴードン氏の説教を聞く。バンゴの蔵原惟郭に発信、近く帰国することを知らせる。(A3:366, F101)

6:281, F101)

十月十九日

書籍を荷造りする。ヘリック博士 Dr. Herrick のパーティに出る。(F101)

十月二十日

アメリカン・ボード運営委員会の会合に行く。オルデン、スミス両博士「ともにボードの主事」に会

う。"Appeal for a Christian University in Japan"を渡す。(F101)

十月二十一日

ウェスレー女子大学を訪問、日本の伝道について話をする。女子学生中二十名が「日本ニ御入用ならは出張すべしと申者も有之候」。同校で半日を過ごす。サンフランシスコのフリンツ氏、シカゴのハン

フリー博士、ニューヨークのテイラー博士、アーモストのシーリー総長に手紙を書く。(全3:367, 369, 下通1)

十月二十二日

ボストンよりシーリー総長に今までの感謝とお別れの手紙を書く。文中、二十九日から三十日にポストンを出発すること、十一月十九日発のシティー・オブ・ニューヨーク号でサンフランシスコを出帆することを知らせ、内村についての礼を述べる。また“Appeal for a Christian University in Japan”が印刷されることになったので、推薦文を書いてほしいと、その第一稿を送る。このアピールはアメリカン・ボードのN・G・クラーク博士、アーモスト大学のシーリー総長およびウイリアムス大学のホプキンス総長らの推薦文を付して、教育者間に私的に回覧されるため印刷されることとなった。

(全6:282, 全10:295)

* シーリー総長宛の手紙で“*This is my first writing. My second copy is in the hand of the Prudential Committee of the American Board. Please return this copy with your endorsement.....*”と記しつづける。第一稿、第二稿は次の通り。

第一稿“*Appeal for the Christian Work in Japan.*”

第二稿“*Appeal for a Christian University in Japan.*” 1885. 9. 29

印刷物“*An Appeal for Advanced Christian Education in Japan.*” 1885. 10. 29 (L1116~1118)

書類一束を紛失したためウェスレー駅長に問い合わせの手紙を書く。C・H・パウンド氏、ミス・マッキンおよびアンドーヴァーのドレイパー氏に発信。(下通1)

この夜はアンドーヴァーで過ごす。スミス教授とお茶を飲む。Society of Inquiryの集会、スミス氏の講義が行われる。ストッダード氏の部屋で送別のパーティを開く。新島の祈禱でパーティを終わる。

ミッション・ハウスで泊まる。(F2514)

アーモストのシーリー総長は大学の夜の祈禱集会で新島および彼の日本での働きについて学生に話を
する。(J82:212)

十月二十三日

朝早くテリー氏を訪ねる。ヒドン姉弟とコーヒーを飲む。神学校にバンクロフト校長とW・F・ドレイパー氏を訪問、日本語の本を寄贈する。汽車の中で、不破唯次郎の教会を援助するため二十ドルを寄付してくれた、アンドーヴァーのG・W・M・ダヴ夫人に会う。夜、ヘンリック博士の教会で話を
する。(F2515, F2516)

シーリー総長の娘エリザベスよりこの日付で来信、八重夫人への品物を託したいこと、帰国前に会いたいこと等。(F2517)

James Vick Seedsman よりこの日付で、新島の種子に関する問い合わせに対し、返事が来る。(F2518)

十月二十四日

土曜日、A・ハーディ夫人と一緒にマーケットへ行き、野菜の種などを買う。パーモント州の元知事のページ氏がこの朝、死亡する。一八七四年のアメリカン・ボード年会で五千ドル寄付の口火を切った一人である。金曜日〔十月三十日か〕に彼の写真を受け取る。(F2519)

十月二十五日

ニュートンのブルックライン教会(トーマス博士)へ行く。J・M・デイヴィスより彼の教会で話をするように頼まれる。彼よりたくさんのインディアン写真をもらう。(F2520)

十月二十七日

ボストンよりミス・エリザベス・シーリーに、前日届けられた八重夫人への贈り物〔彼女手作りのバッグ〕に対する礼状を書く。(F2521)

N・G・クラーク博士を訪問、アンドーヴァーの学生で日本伝道を希望する者のことを聞く。同家を辞してオーバーンデールへ行くつもりで停車場に急ぐ途中、鼓動が不規則になり、予定を中止、ボストンの宿所に帰る。(全6: 283)

十月二十八日

外出せず一日静養、N・G・クラークに手紙を書く。(一)日本行きを考えているアンドーヴァーの学生のこと (二)東北地方に開設する学校のため四、五千ドルを必要とすること (三)O・H・ギューリックを東北へ派遣すること、および日本各地への宣教師の配置について。(全6: 283)
内村よりこの日付で来信。(J82: 211)

十月二十九日

“An Appeal for Advanced Christian Education in Japan”を印刷して、配布する。(全2: 676, 全6: 282, L1118)

ヒドン姉弟に手紙を書く。父と妻へのお土産の礼を述べ、明日ボストンを出発して帰国することを知らせる。(全6: 286)

十月三十日

ボストン・ジャーナル Boston Journal のコピーをバーゼルのヨハンネス・ヘッセ夫人に送る。(下通1)

帰国のためボストンを出発、ニューヘイブンに向かう。ポーター総長宅に一泊する。(全3: 368, L667, 下通1)

十一月一日

午前、イエール神学校生徒に日本伝道の状況につき演説する。午後、ニューヨークに入り、W・M・テイラー博士の家に泊まる。(全3: 368, 下通1)

十一月二日

午後、マックリード牧師の案内でブルックリンに行き、クインシー街二二二にW・T・セイヴォリー

船長を訪ねる。(F. 21)

十一月三日

ポンド夫人、ベーレン博士、エディー夫妻を訪問する。エディー夫妻より同志社のゴードン博士への荷物を託される。(F. 21)

十一月四日

水曜日、ニューヨークの Women Board の集会に出席し、東北伝道について語り、一つの女学校を設けたいと希望を述べる。セイヴォリー船長の家でお茶を飲み、船長にニューヨークの案内をしてもらう。キンケード氏に会うため The Bibel House に行く。YMCA のスイフト、P・A・ワイティング氏に会う。メーシー百貨店で買物をし、テイラー博士の家でお別れのお茶を飲む。テイラー夫人が馬車を用意してくれる。寝台車二百ドル。午後六時、ニューヨーク中央駅を出発する。(F. 3: 368, F. 21)

十一月五日

午前七時すぎナイアガラ着、デトロイトを経て午後三時アンナーバー到着、ホテルのフランクリン・ハウスに行く。エンジェル氏が雨中ホテルへ来訪する。ドッジ教授、ライダー教授 Prof. Dodge, Prof. Ryder も来る。夜、ケディー氏 Mr. Cady 宅で日本風のパーティーが開かれる。ケディー氏の父、兄弟、九名の日本人が集まった。(F. 21)

十一月六日

S・J・ハンフリー博士に宛て、午後九時シカゴに着く旨、電報を打ち。二十八番街二〇六の H・M・スカッター博士の家に行く。L・L・ジョーンズ夫人—A noble woman—と三人の子供に会う。(F. 21)

Seedman [「ニューヨークの種苗商」] よりこの日付・シカゴ気付で、問い合わせに対する返事が来る。(F. 2534)

十一月七日

ジェーンズ夫人と本屋へ行く。二三・五九ドル。息子のスカッター氏が秘書をしている The Missionary Medical Association を訪ねる。スカッター家の人々は皆で讃美歌をうたい、聖句を読み、無駄のない祈りをする。ドレイカーズ博士、ワード氏、ダニエルズ氏、ベイカー夫人、A・ハーディ夫人に手紙を書く。(F. 56)

十一月八日

日曜日、昼の祈禱会と夕方の祈禱会に出る。午前十一時、日曜学校に行き五分間話をする。スカッター博士の教会では彼の長い説教の後で四、五分話をする。(F. 56)

十一月九日

牧師の集会に行き、歓迎される。ハンフリー博士に紹介され、約半時間話をしたのち、質疑応答する。十二時すぎ終わる。H・スミス博士の案内でアーマー氏の家畜場、シカゴ神学校に行く。神学生の前で約三十分話をする。教授らに紹介され、学生たちと握手する。スミス氏とレストランで夕食をとり、ケーブルカーで帰る。ジェーンズ氏がランチ・バスケットを用意しておいてくれる。皆に別れを告げ、ロックアイランド駅より寝台車で出発する。夜、ミシシッピー河を渡る。(F. 56)

十一月十日

A・ハーディ夫人よりこの日付で来信、新島の手紙に対する感謝、喜び、孫たちのこと、ハノーバー訪問のこと、新島の思い出の記を朗読したこと等。(F. 2535)

朝七時に朝食、午前九時半、アイオア州ブルックリンからサンフランシスコに電報を打つ。午後一時半、デモイン通過、六時五十五分カウンスル・ブルックスに到着、寝台券を買い、荷物の再チェックを受け、一時間待った後、ユニオン・パシフィックに乗り換え、ミズリー河を渡り、オマハに着く。

(F. 56)

十一月十一日

午後二時、ノース・プラット North Platte 着、午後八時シャイアン着、夕食。(F. 56)

十一月十二日

ロック・スプリングス經由、十一時十五分前グリーン・リバー着、朝食をとる。午後六時半オグデン着、一時間停車の間に食事をする。(F. 21)

十一月十三日

七時半エルコ Elko 着。線路の両側には草も木もない。山が間近に迫っており、天気も好く、景色は素晴らしい。エルコを過ぎたあたりの左手に温泉が見える。(F. 22)

十一月十四日

午前七時、カリフォルニア州サクラメントに到着。十四・十八日の朝までフィッシャー氏の家に滞在する。(F. 23)

十一月十八日

水曜日、夜七時半、バロウ博士の教会で三十分以上話をする。雨のために出席者は少数。そのあとロバート氏に案内されて The Gospel Society Meeting に行く。(F. 24)

サンフランシスコに行き、モンゴメリー通りのラス・ハウス Russ House に一泊する。同じ通りの

E・P・フリント氏の家より一ブロック離れた場所である。一泊二ドル。(F. 25)

十一月十九日

朝、同志社卒業生で同地に住む森田寿三郎が来て、荷造りや買物を手伝ってくれる。またレモンを買ってくれる。フリント氏に案内されてガン・ショップ、金物屋、馬具屋へ行く。また小谷野の友人ベ

ンチレイ Benchley のところへも行く。またミス・ガニソンの父親にも会う。馬車で港へ行く。三

谷・達手・森田・フィッシャー夫妻・タルカットらが見送りに来る。大野という税関吏に横浜の税関

長宛の手紙を預かる。タルカットより頭痛薬として "Coffea" (すいかずら) とレモン二個をもらう。

午後二時半、シティ・オブ・ニューヨーク号、サンフランシスコを出港する。(45: 202, L1106,

F. 26)

* Miss Effie B. Gunnison 一八八五年十月来日、神戸・松山で伝道、教育にあたる。

十一月二十日 半曇、二四〇マイル、海が荒れ、一日中断食。受け付けるより、出す方が多い。(F. 11)

十一月二十一日 半曇、方角 s 六五 w、二二〇マイル。この日も海が荒れ、まったくの絶望感に沈む。テイラー博士の説教を思い出し、力づけられて立ち上がり、服を着て部屋を出、食事をする。(F. 11)

十一月二十二日 半曇、方角 s 六五 w、二二〇マイル四分の三。(F. 11)

十一月二十三日 半曇、二一三マイル。(F. 11)

十一月二十四日 半晴、北緯二九度四四分三四秒、東経一四二度四二分、方角 s 六三 w、二五五マイル。インドに向かうクーパー氏、ミス・コールと読書する。サンフランシスコを出て以来、絶えず揺られているが、土曜日(二十一日)以来、一度も食事を欠かしていない。(F. 11)

十一月二十五日 晴、北緯二九度四四分一九秒、東経一七四度二六分、コース西二四六マイル四分の三。未知の分野である「rais」などを読み始める。二二ページ。この日、船の揺れはましだった。(F. 11)

十一月二十六日 晴、北緯二九度五三分三七秒、東経一五二度八分一五秒、方角 s 八八 w、二四五マイル半。南西の風、船は以前より安定してきた。(F. 11)

十一月二十八日 半晴、北緯三〇度五三分三五秒、東経一六〇度一六分、方角 n 八九 w、一九三マイル。海は荒れ、デッキは水浸しである。向かい風。

儘ならむ世にありしなは大神に 御旨の儘にと伏し拝むなり

この夜は夫を亡くしたプリント夫人を思い起こす日である。(F. 11)

十一月二十九日 日曜日、リプライ牧師 Rev. Reilye による礼拝が行われる。船員たちは皆午前四時から休んでいる。空気は新鮮で、風は北風である。揺れがひどく、ほとんどデッキを歩くことができない。半晴、北緯

三〇度二分、東経一六三度五五分一五秒、方角n五九w、一九〇マイル。(F. 311)
 十一月三十日 半晴、北緯二九度五八分、東経一六九度三分三〇秒、方角n五九w、二六六マイル。北風。船員は皆休んでいる。(F. 312)

十一月 サンフランシスコ出帆前、熊本出身の一書生に会い、徳富猪一郎の消息を聞き、漢詩を作る。

男児誤勿為公人 世事勿々繁纏身 耐恣大江々上友 閑窓日々養精神 (43: 311)

十二月一日 晴、北緯三〇度一分三〇秒、東経一七三度五九分一五秒、方角n八七w、二五六マイル。一〇ノット半。海は静かである。昼食後、東南の良い風が吹く。(F. 313)

十二月二日 この日より十一日まで船の位置、進度について一覽表を作る。記事なし。(F. 314)

十二月十二日 シティ・オブ・ニューヨーク号、横浜に入港。ただちに米国人コー、ハル、コールらと上陸、神奈川ステーションまで出迎えた小崎・松山・山崎の三人に会い、共に東京に向かう。松山宅に一泊する。

(43: 370, 371, 45: 202, 260, 410: 325)

十二月十三日 麻布教会へ行く。九鬼・草間・湯浅・植村・栗元その他に面会する。(45: 260)

十二月十四日 晴、上野の正俊亭で午前十一時半より帰国歓迎会「精進料理」が催され、十三人が出席する。大儀

見・木村の二氏も来る。(45: 260, J100: 102)

夜、富田鉄之助を訪問、東北伝道策を述べ、仙台と福島のうちいずれに学校を設立すべきかを尋ねる。

これに対し富田は仙台に設立すべきことを勧め、応分の協力を約束する。富田の日記に「夜新島襄外国ヨリ帰り来り明日西京ニ帰ル由ニテ来話ス 仙台ニ一学校ヲ建ソコトヲ企テ右ヲ相談セラル」(J100: 250)

中村正直に手紙で帰国の挨拶をする。(全3:370)

十二月十五日 午後四時、横浜出帆の新潟丸に乗り神戸に向かう。土佐の片岡健吉・山中(伝道師)と同船する。

(154:85)

十二月十七日 午前七時、神戸入港。八重夫人・中村栄助らの出迎えを受けて上陸し、午後四時半、京都に帰る。七

条ステーションに市民・教職員・生徒ら四百七十人余が出迎える。「二十一ヶ月ぶりニ而家人朋友ニ接シ、四山之風色を目撃し候ハ、何ニとなく心嬉しく存、深天恩之大なるを感じ申し候」(全3:371, 全5:202, 全6:287, J15:54)

群馬県原市の半田宇平次より明治専門学校へ七百円寄付する旨の電報が届く。(F715)

十二月十八日

午前九時半より同志社礼拝堂、書籍館の定礎式、続いて午後一時半より同志社創立十周年祝会が運動場において催され、北垣知事・中井滋賀県知事ら五、六百人が出席する。席上、半田氏の寄付が発表される。夜七時半、帰国歓迎会が運動場において開かれ、新島はそれぞれに出席して挨拶および欧米での見聞について演説する。(全1:105, 258, 全3:371, 全5:261, J15:55, J69:23)

* 同志社礼拝堂は昭和三十八年七月一日、書籍館(現在の有終館)は昭和五十四年五月二十一日に、それぞれ国の重要文化財に指定された。

十二月十九日

同志社アルムニ会が設立される。この日午前九時より京都第二教会に卒業生有志二十二名が集まり、卒業生の親睦団体を作る。(E374~376)

十二月二十日

京都四条教会で朝十時より説教をし、七名の者に洗礼を授け、聖餐式を行う。(F11:73)

十二月二十二日

神戸英和女学校創立十周年祝会に出席、祝辞を述べる。(J15:56)

内閣制度確立。(J97:104)

十二月二十三日 A・ハーディ夫人、半田宇平次にそれぞれ礼状を出す。(全3:372, 全6:287)

十二月二十五日 アーモストのシーリー総長に滞米中の礼状を出す。(全6:287)

十二月二十六日 明石の川本政之助に発信、姫路の浸礼教会との伝道協力につき、先方が協力を望むならば「一致協力之意を表せられてハ如何」と述べる。また「米国ニ而小生募集候金少々有之候間、貴兄へハ其内金五円御入用之書籍料として呈し度候」と記す。(全3:373)

十二月上旬 M・L・ゴードン、病気のため帰米。一八八七年九月再来日。(全1:257)

十二月 J・C・ベリー、アメリカより帰任し、入京する。(全1:257)

第五章

東華学校の設立と北海道旅行

一八八六～一八八七年

明治十九年（一八八六）四十四歳

一月四日

冬期始業。（全5：261）

一月十二日

原市の半田宇平次に発信、明治専門学校への寄付金七百円を湯浅治郎を通じて渡されたことへの礼状および新島の写真一葉を同封して送る。（全3：378）

一月十三日

富田鉄之助よりこの日付で来信、仙台に学校を設立することは地元の人々も大賛成で、お申越しの通り土地を用意し、学校建築費として二千元募集するようにしたい。なお学校創立賛同者の一人「松倉恂」が上京しているので、二十日頃までに上京してほしいと要請してくる。（F718, J90：256）

一月十四日

小崎弘道よりこの日付で来信、同志社の神学教授に招聘されることにつき、邦語神学校ならとにかく、「英語」神学科の教授は辞退する、と言ってくる。（F719）

この頃、A・ハーディから手紙と共に三十ポンドを受け取る。“I understood through Mrs. Hardy that both of you were intending to give us \$100 as your parting gift to us. But it is more than that.”（全6：292）

一月十八日

D・C・グリーンの東行「東京移転か」について松山・湯浅・小崎・海老名に発信、「成程グリーン氏ニハ一昨年来随分書生ニ対シ一二之不都合ナキニシモアラサレトモ、氏之声価ハ近来ニ至弥顕ハレ、同志社ヲ大学ニナス等之事ニ付テハ日本教員之見ル所デハ先ツ一人ノグリーン氏アルノミ」「同氏ヲシテ去ラシムルハ同志社ニトリ非常之困難ヲ覚申候」（全3：379）

一月二十日

仙台の学校設立につき協議のため、正午、神戸を出帆、上京する。(全3:381, 全5:202, 全6:286, 292)

一月二十一日

富田鉄之助を訪問し、仙台に共立英語学校を開設することについて相談する。(J90:250)

半田宇平次よりこの日付で来信、新島の礼状への返礼。(F720)

一月二十二日

小崎弘道を訪問、しかし小崎が多忙のため十分面会できなかった。(全3:842)

一月二十三日

夜、富田鉄之助と共に森文部大臣を訪問し、仙台の学校創立について意見を聞き、賛成を得る。(J90:250)

一月二十四日

日曜日、午前、小崎の「東京第一」教会で説教をする。(全3:842)

一月二十五日

仙台の学校設立について富田と一応相談がまとまる。夜、小崎が富田宅の新島を訪れ、十二時頃まで話をする。新島、安中へ出発する。(全3:842, J90:250)

在米の下村孝太郎よりこの日付で、以前約束の月々五円を留守宅に送ってほしい旨を求めてくる。

(F721)

一月二十六日

午後、安中へ着く。教会で一時間余話をする。次いで原市へ行き、病床の半田宇平次を見舞う。閑談して夕食を、馳走になり、夜に入って安中に帰る。(全6:283)

N・G・クラークに発信、仙台に学校を開設するため、現在、東京に来て富田鉄之助と交渉中であることを述べ、交渉の結果と自分の意見を箇条書きにして詳細に記す。またニューヨークのW・M・テイラー博士の教会より牧師の書籍購入費にあてるため百四十三ドルの寄付を得たことにつき礼を述べ。(全6:288)

歩兵操練科設置願を文部省へ、同進達願を京都府庁に提出するより市原盛玄に命ずる。(全3:381)

一月二十七日

前橋の海老名弾正を訪問し、午後、新築された教会堂 Meeting house でパブリック・ミーティングが開かれ、話をする。午後四時二十分、海老名と共に高崎へ、七時半から一時間ほど説教をし、更に旅行の話を一時間ほどする。十一時に宿へ帰る。(全6:294)

一月二十八日

高崎から午後一時四十五分発の汽車に乗り、五時半、東京に着く。(全6:294)

* 一月二十九日「……新島安中より帰り一泊ス」(J90:250)

一月二十九日

夜八時すぎ海老名弾正と共に小崎弘道宅を訪問、すでに相会していた伊勢時雄・湯浅治郎・松山高吉と共に伊勢の東京への転任、小崎の同志社教授就任について相談する。(全3:842)

A・ハーディに発信、三十ポンド送付されたことへのお礼および安中・原市・前橋を巡回していること、テイラー博士よりの寄付のこと等の近況について書く。(全6:292)

一月三十日

N・G・クラークに発信、東北伝道について知らせ、重ねて仙台に二、三人の宣教師を送るように頼む。(全6:295)

一月下旬

歩兵操練科設置願を京都府を通じ文部省へ提出する。(全1:258)
東京より「仙台への宣教師の派遣について」アンドーヴァーのジャパン・サークルに手紙を出す。(全6:293, F2302)

二月一日

一昨夜よりリューマチのため日本橋本石町四丁目の旅館に病臥する。午前、小崎弘道・松山高吉および伊勢時雄が来訪する。午後、伊勢と小崎が再び来る。(全3:842)

二月三日

東京を発ち、横浜に向かう。(全3:384)

二月四日

横浜より北垣京都府知事に手紙を書き、さき頃お目にかかった際、歩兵操練科設置のことにつき、一

緒に森文相を訪問すると言ったけれども、急用のため去月二十日俄に出京し、森文相に会ったこと、本日出帆の近江丸に乗り帰京するところである旨、事情を説明する。(全3:384)

二月六日
富田よりこの日付で来信、松倉が仙台へ帰って有志に報告し、賛成を得たこと、仮規則も考えておいてほしいこと、同じく仙台に学校設立を計画している押川方義の方も然るべくと伝えてくる。(F722)

二月八日
教員会議で小崎弘道を教員として招聘することに決定する。(全3:385)

二月九日
小崎弘道に招聘状を送る。松山・小崎・湯浅に発信、「グリーン氏ハ固ク一致ノ説ヲトリ、新聞モ一

致、仙台ノ学校モ一致シ双方ヨリ教員若干ヲ出シ、之ヲ維持スヘシ云々被申候、生等ハ大不同意ナリ、其調和ヲ取ル却テ六ヶ數カルベシ」「中和説ハ乃チ止働説ナリ」(全3:386, 387)

原田助・村井知至が来訪。夜、新島宅で同志社校友会の委員会を開く。原田泊まる。(J15:57)

二月十日
米沢の中学校教師・山崎新太郎より米国人教師一名の周旋を依頼してくる。(F724)

二月十一日
大阪で宣教師会が開かれ、二つの重要案件が討議される。一つは仙台への伝道拡張、他は同志社女学

校 Kioto Home の増築、拡大の問題であった。とくに仙台伝道については「米国本局迄仙台へ三人之宣教師可相遣旨申遣スコトニ相決候」(全3:388, 全6:296)

* 宣教師会の開催日について、松山・湯浅・小崎宛書簡(全3:388)は「昨十一日大阪ニ於テ」、N・G・ク
ラーク宛(全6:296)では「at Osaka last Saturday」[十三日]となつてゐる。

大阪川口の聖三一教会において臨時祈禱会が開かれ、新島が奨励を行う。また、この機会に信徒有志らの主催する帰国歓迎会(午後二〜四時)が中之島常安橋北詰の西洋楼で開かれ、新島は欧米漫遊談を語る。(F20:45, G2-4:108)

二月十二日

東京の松山高吉・小崎弘道・湯浅治郎に発信、意見を述べる。

(一)仙台の学校につき宣教師らはグリーン、デフォレストを東京に派遣して一致教会の宣教師と交渉するようであるが、一致会教師の反対論に対し一步も退かないよう、また「中和一致ノ学校ハ之ヲ所スルニ随分面倒ナ」ことを両宣教師に説得してほしいこと。

(二)「近来相起両会一致ノ説ハ……一杯ノ羹ノ為ニ我自由ノ主義ヲ売ラサル様充分御勘考有之」「……教会ノ主義ニテ事甚簡易ナリ、会議ニ権力ヲ有セシムルハ不知々々自治ノ精神ヲ絶ツヘシ、慎シマサルベケンヤ」(43:388)

富田鉄之助に発信、大阪の宣教師会での仙台学校に関する協議結果について報告する。(1725)

二月十六日

看病婦学校校地として烏丸通紅屋之北にある地所買収につき協議のため、午後四時ごろ五条大橋東の中村栄助宅を訪問する。(43:390)

二月十七日

N・G・クラークに発信、十三日の宣教師会のこと、米沢から外国人教師を求められていること、女学校にミス・クラークソンのほか、もう一人必要であること等を述べる。(46:296)

仙台の学校につき富田鉄之助よりこの日付で来信、上京した松平正直宮城県知事と森文相が会ったこと、富田も知事に会って大略説明したこと、「押川氏え必らず御出会之上十分御相談被下候様切望」と状況を知らせてくる。(1725, J 90:257)

二月二十一日

第二教会で説教をする。この日より新島公義の日曜学校を引き継ぐ。中村栄助が来訪し夕方まで話し合う。(43:391)

三重県津へ初めて伝道に出た新島公義に対し手紙を送り、「何卒謙遜ト堪忍ト勉強ト活ケル信仰ト人

ヲ區別セサル博愛等を以て主之御旗ニ随ひ……」「御出發後内モ甚さみしく相成、八重もけんか相手を失たる只今ハ夫婦差向ヒニテ少しく徒然ニ思ひ候」と述べる。(43:390)

* この新島公義宛書簡は二十日付となっているが、内容は日曜日(二十一日)のことであり、例によって新島の思い違いと考えられる。

二月二十二日

ポンド氏、ブラウン夫人、デイヴィス氏、ベイカー夫人、ダウ氏 Mr. Pond, Mrs. H. T. Browne, Mr. J. W. Davis, Mrs. Baker, Mr. Dove からの寄付金百二十五ドル(百五十円)はすでに受け取り、六十円を残して教師・生徒・教会を援助するために支出する。(43:392)

二月二十三日

同志社招聘にに応じていた小崎弘道が態度を改めたことにつき、手紙を送り「一応事を決して之を変交するハ小生輩兄之為ニ取ラサル所ナルモ又何ニカ深き御情実ノアル事ナランカ……何卒今回ハ決着之所断然ト御申越被下度候」と糾す。(43:392)

二月二十五日

看病婦学校校地としてベリー申し入れの地所買収に関し、中村栄助に照会の手紙を出す。(43:394)

二月二十八日

富田鉄之助は、この日午後、星岡茶寮に森文部大臣、松平宮城県知事を招き、鈴木大亮と共に仙台学校の設立につき懇談する。(40:250)

三月一日

帝国大学令公布。(49:121)

三月二日

午後七時、烏丸一条下ル、ケイディ宣教師宅から出火、留守のため全焼する。(41:259)

米沢の山崎新太郎よりこの日付で来信、外国人教師招聘に関するトラブルにつき、校内の事情を説明してゆく。(47:27)

三月三日

去る二月七日の半田宇平次の死去に関し、原市の半田平次郎宛に弔文を送る。また故宇平次翁よりの

寄付金七百円の領収書を同封する。(43:394)

富田鉄之助よりこの日付で来信、攻玉社に在学中の伊達直知の同志社入学につき依頼してくる。(43:728)

三月五日

富田に宛て発信、仙台でホーイ W. E. Hoy が有志家を募り、土地を買い入れ、校舎を建築している模様であると知らせる。(F730)

三月七日

一生徒より新島に宛て「校内苦情の風説」が送られ、グリーン教師と五年生の確執はじめ生徒の学校当局および教員に対する不満・苦情が述べられる。(F729, D1:645)

富田よりこの日付で返信、ホーイとは如何なる人物かを糾し、あくまで申し合わせた通り初志貫徹をはかりたい、と述べてくる。(F730)

三月八日

川本政之助に発信、約束していた書籍購入費五ドルは、神戸の宣教師ジェンクスに預けている金より支払うので、書物を購入したなら新島まで連絡するように書き送る。(43:396)

三月九日

W・S・クラーク永眠。(E7:72)

三月十日

五年生の花畑健起・広津友吉・広瀬孝次郎・池内徳孝・増野悦興・中川虎一郎・斉藤知行・坂齋要吉・山中百ら九名、英学教師グリーンンの言動に不満を抱き、連署血判、退学する。(41:259)

三月十七日

小崎弘道よりこの日付で来信、米沢に外国人教師を招聘する件、および木村熊二の明治女学校にアメリカン・ボードの女教師を雇い入れる件につき相談してくる。(F735)

三月

この頃、押川方義が神戸に立ち寄った機会に京都より出向いて彼を訪問し、仙台の学校計画について懇談する。押川は「仙台ニ諸方ヨリ着手スルヨリモ、一方ニテ着手スルナラバ、他ノ人ハ他所ニ着手

スルカ伝道上」経済上得策であると述べる。(445: 278)

またその翌日、神戸に向かう伊勢時雄に押川宛の手紙を託し、仙台学校のことは富田ら仙台有志家との約束もあり、新島の考えのみで進退を決することはできない旨を伝える。(445: 278)

四条教会において説教する。大津の入会者五名に対して洗礼を授ける。(F11: 73, 109)

富田に発信、神戸で押川と会い、意見を交換したことを伝える。(F740)

三月二十二日
大阪の宮川経輝を訪う。(J71: 78)

富田よりこの日付で来信、仙台のホーイおよび彼の設立する学校について調べたことを通知してくる。

(F736)

山崎新太郎よりこの日付で来信、雇い入れを依頼した米国人教師につき、アメリカよりの旅費支出はできない旨を伝えてくる。(F737)

三月二十五日
富田鉄之助より再びこの日付で来信、ホーイ、押川らに具体的な動きはないようだ伝えてくる。

(F738)

同志社で預かっている土倉辰二郎の漢学教師石井忠敏が新島宅に來訪、辰二郎は同志社より毎日通塾しているが、十分指導できないので、本科入学前は自分の塾で預かりたいと申し入れる。同志社幹事とも協議の結果、夏休みまで石井に委託することになる。(443: 400)

富田鉄之助よりこの日付で来信、仙台の学校につき米国より返事が来ないうちは軽率に公表できないのは致し方ないとしても、仙台側としては一時も早く計画を発表して有志家を募りたいと考えている。米国よりの賛同を得次第、できるだけ早く仙台へ行って計画を進めてほしい。そのため創立趣意書、

学校教則等を考えておいてほしい、と記す。(F740)

松山高吉よりこの日付で来信、星野〔光多〕・湯浅治郎・小崎弘道らと東北伝道について相談したところ、前橋の加藤勇次郎を同志社に移し、その後任に不破唯次郎を、森本〔介石〕を警醒社にあてるところ、浮田和民は将来同志社に必要な人物なので留学の斡旋を重ねて要請してくる。(F739)

三月二十八日

土倉庄三郎に手紙を書き、子息の辰二郎を漢学教師石井忠敏に預けることにつき了承を求め、聞くところによれば中尾某に子息辰二郎と亀三郎を委託している模様だが、「尊下ヨリ御文通之ナキ上ハ小生ニ於而決而承知不仕……」(全3:400)

三月

日本基督一致教会と日本組合教会の有志者により両教会合併の話し合いが進められ、日本基督教会設立趣意書草案を作成、両教派に属する諸教会に送る。発起人は一致教会の大儀見元一郎・安川亨・井深堀之助・植村正久。組合教会の松山高吉・湯浅治郎・小崎弘道ら。(F4:207, J5:64)

ペリーより処方箋を送られる。(全5:202)

四月二日

同志社受験予備校概則できる。これは同志社の受験に失敗した生徒たちのため、五年生の池内徳孝・岸本能武太・増野悦興・中川虎一郎・松尾首次郎らが中心となって計画したものである。(D1:298) 松山高吉に発信、湯浅吉郎の預金の始末については湯浅治郎まで伝えていること、右の金子は湯浅吉郎の依頼により新島名義で某社に預けていたところ、その会社が倒産して金は一切戻らず、甚だ困却している旨を伝える。(全3:401)

四月三日

富田よりこの日付で来信、押川についての懸念は無用のこと、宗派の争いのように見えては良くないので、やはり先だって「内談致置候主趣ヲ以創設ノ要領ヲ発表着手順序ヲ計画致度所存」であるから、

四月五日

早急に出京し、場合によっては仙台に行つてほしい、「創設ニ際シ区々タル小議論相生候共更ニ關係不致成効ヲ以テ論定ムルト御決心被下度」(F741, J90:258)

中村栄助を招き看病婦学校の寄付金について計算、説明を受ける。夜に入つて中村帰る。(F744)

松山高吉・伊勢時雄よりこの日付で来信、仙台学校のこと、東京・東北伝道のこと、不破唯次郎を前橋に招くこと、浮田を同志社に用いること、明治女学校への援助を考慮するよう伝えてくる。(F743)

J・D・デイヴィス一家、夫人病氣のため神戸より帰国する。(H1:260)

四月六日

N・G・クラークに発信、仙台への教員派遣を早く決めてほしいこと、同志社女学校の寮舎増築への援助のこと、J・D・デイヴィスの代わりとしてバックナー E. B. Backley を頼んでほしいことを述べる。(H6:269)

四月七日

中村栄助よりこの日付で来信、看病婦学校寄付金計算の補足について連絡してくる。(F744)

四月九日

J・D・デイヴィスの妻ソフィア、伊豆沖を航行中の船より海に落ち死亡する。(H1:260)

四月十二日

松山高吉よりこの日付で来信、専門学校設立について島田三郎など一度援助を依頼した人々に引き続き交渉すべきこと、また陸奥宗光に働きかけて助力を乞うては如何と言ってくる。(F745)

四月十二日

同志社において「モーセノ一生涯」につき説教を行う。(H2:223)

四月十二日

富田よりこの日付で早々の出京を促してくる。(F746)

山崎新太郎よりこの日付で来信、米人教師の雇入れにつき、校内の事情、雇用に際しての条件を詳しく報じてくる。(F747)

四月十六日

看病婦学校設立につき神戸の川本泰年・原田助に創立委員となつて募金に協力するよう依頼する。

(全3: 402)

四月二十一日

日本基督伝道会社第九年会が京都第二教会において開かれる。二十四日まで。新島も第二教会代表として出席する。

(一)この年会で「日本組合基督教会」を組織する。加入教会三十一、牧師・伝道師四十名、信徒数三千四百六十五名。

(二)二十一、二十三日の二回にわたり開かれた懇談会において一致・組合両教会の合併につき協議が行われる。(F1: 91, F24: 363)

* The name Kumiai first formally recognized by the churches at their annual meeting this year. (E 8: 5)

四月二十七日

浜岡光哲に京都看病婦学校旨趣書草案を送り、加筆改良を依頼、改めるべきところがなければ、浜岡の「商報会社か」活版局で印刷するように依頼する。(全3: 403)

岡山の金森通倫に同志社への招聘状を書く。(全3: 404)

北垣国道知事の母堂死去に際し弔状を送る。(全3: 405)

* 浜岡光哲は山本覚馬に師事、明治十二年より商報会社を経営、『中外電報』『日出新聞』を刊行していた。

四月二十八日

シーリー総長に発信、卒業した教え子のうち適当な人物を米沢の学校に派遣してほしいこと、その雇用条件について書く。もし派遣されなければ同校はメソジスト教団の手に落ちるだろう。われわれは今、仙台にミッション・スクールの設立を計画し、同地を強力な伝道のセンターにしたいと思っている。会津若松・福島にはすでに伝道者を派遣して活動を始めている、と記す。(全6: 300)

四月二十九日

福井県小浜の柁川武一・松山まつのからの伝道者派遣要請に対し、この日「目下伝道其人ニ乏しく候得は直ニ派遣致候訳ニハ立到兼候へ共、折ありて御方角へ派出之序も有之候ハ、為立寄可申候」と返書を出す。(43: 406)

四月三十日

金森通倫を同志社に招くことになり、この日、招聘状を手渡す。(41: 260)

四月

同志社の教員不足につき、春期に限り伊勢時雄が神学科の授業をすることに決まる。(41: 260)

アメリカン・ボードより新島に、仙台行つて学校計画を進めるよう、電報が来る。(45: 278)

五月四日

中島末治と山崎春野との結婚式が行われる。新島出席か。(43: 408)

五月五日

三重県津に伝道中の新島公義に発信、「御老人様ニハ逐々御快氣ニ被趣候……八重ハ近来身体余リ健ならず兎角病かちニ而心配申候、私も伝道会社集会以来余リ上出来ならず……看病婦学校并附属病院創立之企有之非常ニ多忙……」と近況を報ずる。(43: 407)

五月八日

浮田和民に同志社への招聘状を送る。(43: 408)

五月十日

この日の富田鉄之助日記に「新嶋(西京)来書、米人宣教師出京云々ニ付同道出京セヨト電信指立ル」(190: 251)

五月十一日

富田宛に、十四日に出京する旨電報を打つ。(190: 251)

五月十四日

東上のため神戸に向かう。途中、大阪に下車、宮川経輝を訪れ、看病婦学校のことを依頼する。神戸では安藤嘉左衛門方に立ち寄り、専崎に滞在中の内大臣三条実美公を訪問、看病婦学校設立についての賛助を請い、同志社創立の始末書等を贈呈する。午後六時、高砂丸に乗り神戸を出帆する。(45: 262, 274, 279)

高松の増野悦興に手紙を書き、「近来非常ニ多事、又近々東上之企も有之……何れ帰宅之上又々お伺申上候」と述べる。(全3:409)

五月十五日

濃霧のため船進まず伊豆沖において後戻りする。(全5:262)

五月十六日

日曜日、午前十一時横浜に上陸、本丁五丁目の津久井屋に泊まる。稲垣を訪ねるも不在。(全5:262)

五月十七日

一番の汽車で上京、ただちに富田鉄之助宅に入る。小崎弘道・湯浅治郎・松山高吉らの来るのを待つて仙台学校のことにつき相談する。(全5:262)

午後、場所を松山宅に移し、押川方義と会い、協議するが「事定マラズ」。夕方、富田方で仙台の田代進四郎・藤沢幾之助に面会する。(全262, 279)

* 押川との会合の場所を(全5:279)では十八日小崎の家としている。また(全5:262)において田代・藤沢と会った日を十六日夕としているが、十七日のことと思われる。

五月十八日

午後、デフォレストと山城軒で会う。彼は新島に「一致ノ得策ナルヲ通論」する。午後三時、インブリー宅にノックス・井深・押川・松山らと集まり、仙台の学校について意見を交換する。(全5:262)

五月十九日

午前、森文相を訪問、松平宮城県知事への紹介状を依頼、また徴兵猶予に関連して操練科の設置について糾す。その際、森より「向來有害ト認ムレハ……政事宗教ノ色ツケ教育ハ差止ムルモ知レス」と言われる。午前十一時、南小田原町に押川を訪ね、仙台学校につき意見を交換、一度仙台を視察のうち「其ノ上ニテ余ノ所ハ定ム」。十二時、毎日新聞社に島田三郎を訪ね、専門学校募金の方法、看病婦学校旨趣書の掲載等について依頼する。伊藤総理大臣の秘書官伊東巳代治に会う「か」。午後一時、内藤魯一を訪い、福島において面会すべき人々の紹介を請う。いったん富田宅に帰る。

午後三時、三十間堀一丁目宮城屋に行き、富田はじめ横尾東作・鈴木大亮・佐和正・大槻文彦ら仙台出身者と共に大槻の起草した仙台英学校の旨趣書について協議する。夜、松山高吉を訪う。(Hs: 263, J90: 251)

五月二十日

朝七時前、富田宅を出発、会津若松に向かう。まず上野発の汽車で宇都宮まで、それより馬車に乗り換え阿久津・氏家・矢板を経て三島に至る。会津若松への新道を探したが不明、更に高久まで足を伸ばし道を聞くも不明、結局そこで一泊する。(Hs: 265)

五月二十一日

朝四時前起床、五時半馬車で出発、白河・郡山に至り海老屋で昼食ののち、人力車で猪苗代湖畔の山潟に着き、鹿兒島屋に入る。(Hs: 266)

五月二十二日

朝八時、汽船で猪苗代湖を渡り、午前中に会津若松に到着する。長田時行・中村航造が来訪する。この夜、求道者の尋問会を開き、男女十二名に洗礼を授けることにする。(Hs: 268)

五月二十三日

午後二時より洗礼式を挙行、夜は上一ノ町において演説会を開く。二百五、六十人が入場、戸外にも溢れる。(Hs: 270)

五月二十四日

富田鉄之助は仙台の英学校設立の依頼書を松平正直および松倉恂・黒川剛に郵送する。(J90: 252) 喜多方の安瀬政藏来訪する。また海老名某が来て教育や信仰について話をする。午後二時より前日受洗した人々と共に記念写真を撮る。午後四時、中村航造・長田時行を伴い喜多方に行き、夜、そこで説教会を開く。来聴者百余名。(Hs: 270)

五月二十五日

早朝、喜多方を二人曳人力車で出発、米沢に向かう。新道ではあるが道險しく洞門より塩地平まで歩く。塩地平で心臓に異常をきたし、今津屋という旅店に午後四時より七時まで休息、夜十一時すぎ米

五月二十六日 沢に到着、銅屋丁かなぐ屋（高橋六左衛門）に投宿する。（全5：283）
山崎新太郎が新島の宿に来訪する。午後二時すぎより中学校に行き、綱島哲校長および教員に会う。

学校幹部より松岬館に招待される。夜、基督教教育、女子教育について話（「時ノ休徴ヲ知レ」か）をし、十時すぎ宿所に帰る。（全2：187、全5：284）

五月二十七日 朝八時出発、山崎・丸山孝一郎の二名が滝の沢まで四里の道程を見送る。栗子山の洞門を経て福島に至り、一泊する。（全5：285）

五月二十九日 新島、馬車で仙台に入る。松倉恂が派遣した出迎えの人々と会えず、六時、国分丁の針生久助方に泊まる。松倉に到着したことを知らせる。仙台教会の管田勇太郎牧師ほか二名が来訪する。（全5：271、280）

五月三十日 朝、松倉恂来訪。午後、松倉の案内で宿所を清水小路の清奇園（山家豊三郎方）に移す。黒川剛・但木良次・十文字信介・岩淵簾・松倉恂らが来訪、共に夕食をする。（全5：272、280）

五月三十一日 仙台の押川方義の教会において「愛トハ何ソヤ」と題して説教を行う。（全2：178）
松倉の案内で松平正直県令をその自宅に訪問する。登庁前にもかかわらず丁寧に対応される。さらに

学務課長の芳賀真咲および十文字信介・松倉らと学校設立予定地四千二百坪を視察する。午後、松平県令が清奇園に来訪、「学校大体ノ談判相済ム」。午後四時、秋山来訪。四時半、十文字信介の家を訪ねる。同家に黒川剛郡長も滞在しており、共に夕食の馳走にあずかる。夜に入り松倉も同家に来訪、十時すぎまで獵銃の話等をして歓談する。（全5：272、281）

六月一日 松平県令、登庁前に清奇園の新島を訪う。九時より十一時まで黒川・芳賀・十文字を交え学校設立に

ついで協議する。この時、押川方義が来訪するが、要談中のこととして面会を断る。夕方、デフォレストが来訪する。京都より「父肺病早く帰宅せよ」と電報が来る。(全5: 272, 281)

朝デフォレストと共に宣教師ホーイを訪問、一致して学校設立にあたるよう勧告し、押川にも伝えるよう依頼して辞去する。午後五時、松平県令よりデフォレストと共に挹翠館に招かれ、夕食をする。席上、県令の尽力により有志者から五千円の寄付が披露される。京都より、父の病気は少し良い、との通知が来る。夜、松倉と話をし、翌朝出発の準備をする。(全5: 272, 282)

朝五時、仙台を出発、帰途につく。二人曳人力車で二十七里を駆け、福島二本松に至る。(全5: 273, 282)

六月四日
二本松を人力車で五時に出発、郡山・須賀川を経て正午に白河に着く。昼食後更に車を乗り継いで喜連川まで行き、一泊する。夜、雨が降る。(全5: 273)

同志社教会が設立される。(全2: 651)

六月五日
人力車に先曳きをつけ朝四時出発、道悪く、六里半の道程に三時間かかって宇都宮に着く。ここで仙台の学校に五千円の寄付を得たことを病床の父親に電報で知らせ、八時二十五分の汽車で東京に向かう。昼すぎ東京に到着、ただちに富田宅に入る。仙台視察の報告をし、外国人と仙台委員との協定九カ条を示して協議する。午後、湯浅・小崎・松山の三名が来る。夜、華族の伊達宗敦を訪い、子息・伊達直知の教育について相談する。(全5: 273, 282, J 90: 252)

六月六日
快晴、朝、新橋ステーションを出発し、横浜の津久井の周旋により大和丸に乗船、十二時に出帆する。(全5: 274)

六月七日

海上穩やか。(全5: 274)

十文字信介より富田鉄之助宛に学校設立のことは好都合に運んでいる旨を連絡する。(J90: 252)

六月八日

新島、帰京する。(全5: 274)

六月九日

富田より仙台の学校の内規草按を松倉・十文字に送る。(J90: 252)

六月十一日

看病婦学校の設立に関し、前日、J・C・ベリーが森本「後凋か」と議論したことを聞き、新島は、この日、森本に会い、「われわれはただ単にキリスト教を広めるためにのみ、この学校を設立するのではない、むしろ、われわれは人類のためにこの仕事をするにあたって、キリスト教から勇気を受けるのである」と言う。(E19-c)

* 森本についてベリーは次のように書いてゐる。Mr. Morimoto, the Shomuchō (general business manager) and scarcely second in importance to the Prefect.

富田より仙台学校の内規草按を新島に送る。(J90: 252)

看病婦学校旨趣書が上梓され、京都府下亀岡の村上太五平にそれを送ると共に来六月限りの見込みで募金を依頼する。(全3: 409)

六月十四日

富田よりこの日付で手紙が来る。(J90: 252)

六月十六日

「同志社ニ於テ公然神学科設置之事ニ付一書ヲ出シ文部大臣森有礼君之内意ヲ尋ヌ」(全1: 261, F732)

六月十七日

N・G・クラークに発信、仙台学校の進捗状況、仙台へ行く宣教師の人選等について書く。(全6: 302)

六月十八日

同志社医学校創立に関し Edinburgh Medical Missionary Society より来信。(E156)

六月十九日

同志社受験予備校の試験が旧礼拝堂において行われ、新島は岡本巍・加藤勇次郎らと試験委員となる。

(全5:264)

六月二十日

京都第二教会において「時ノ休徴ヲ知レ」と題して説教を行う。(全2:181)

六月二十三日

同志社に神学科を設置することにつき、文部大臣秘書の木場貞長より来信、私立学校において教授する学科は弊害の生じない限り他の学科と同様に扱う旨の返事をしてくる。(T752)

六月二十四日

原忠美・滝能武太・岡本磯雄・松尾音次郎・松波仁一郎を夕食に招待する。(D13)
体操科を教科の中に編入することを生徒に通告する。(全1:262)

六月二十五日

英学校卒業式および新築チャペルの捧堂式を行う。普通科卒業生は松波仁一郎・松尾音次郎の二名。
新島、捧堂の祈禱をする。大坪格、上下京区長、常置委員らの来賓が出席する。(全3:410, E8:5)

六月二十八日

N・G・クラークに発信、今起こっている教会合併問題については、長老派が代議制(Representative system)組合派が自治制(Self governing system)と教会政治が異なっているのび、合併は不可能と考えていること、
“The union may be desirable, but not absolutely necessary.”と述べる。

退学した九人の生徒とグリーンズの確執のこと、E・バックレーを是非教師に迎えたいこと、ベイカー夫人よりの三百ドル、ポストンやウースターの友人からの寄付金四十五ドルは神戸のジェンクスより受け取ったこと、さらにクラークが蔵原に貸していた二十五ドル(三十円)を同志社の基金に入れてよいのか、と尋ねる。ベリー博士は看病婦学校の仕事で多忙である、と記す。(全6:303, L932)

六月二十九日

在米の下村孝太郎に手紙を送り、その文末に
“We graduate only two youngmen. The rest ten failed to do so……”と記す。(全3:412)

六月

二人乗人力車の廃車届を上京区長に出す。(L279)

七月三日

看病婦学校設立資金募集のため大阪へ行くについて、建野大阪府知事宛の紹介状を北垣知事に依頼する。(全3: 413)

七月四日

建野知事宛の紹介状を北垣知事より受け取る。(全3: 413)

松波仁一郎に発信、写真を受け取ったこと、自分のも送ることを記し、“I hope you will work out

your way boldly, manly and sucessfully.”と励ます。(全6: 305)

七月五日

大阪に行く。(全3: 413)

七月六日

大阪より神戸に行き、夕方、川本泰年を訪れる。看病婦学校設立資金募集につき川本および木村(強か)・小磯吉人を交えて相談する。同家に一泊する。(全3: 414)

阪神出張の経費三円二十七銭+七十銭+六十銭。(上337)

七月七日

〔八日か〕牧野伸顕大書記官に手紙を出す。(全3: 414)

七月十一日

園部の発蒙塾を訪問する。同伴者は神学生・園部重賢。丹波教会において午後一時より二大典礼を守り、説教をする。また午後七時より未信徒のため説教をする。(F4: 266)

七月十二日

富田鉄之助よりこの日付で来信、仙台学校の副校長として市原盛宏を任命することを了承する。ただし創業の際なので一、二年間は新島が直接指揮を執らなければ好結果を得られないこと、また市原を三年後に二年間留学させることを、設立準備中の現段階で言うのは得策ではないと述べる。(T755)

七月十三日

神学〔専門〕科(英語科ならびに邦語科)設置について願書を出す。(全1: 264)

七月十五日

神戸に行き、海岸通の安藤嘉左衛門方に一泊する。(全3: 415)

七月十六日

富田に会うため午後六時の船で上京する。出帆前、新島公義に学校のことにつきこと細かな指示を与

えぬ。(全3: 415)

七月二十二日

長浜の堀貞一より、同地よりの看病婦学校寄付金として十人分六円三十銭をこの日付で送ってくる。

(F756)

七月二十六日

仙台に行く。往復共に海路を利用。八月六日に帰京する。(全5: 204, 286)

山崎新太郎よりこの日付で来信、学校の経営方針が変わり、校長も更迭される模様であること、したがって米国人教師の雇い入れは微妙になってきたことを知らせてくる。(F757)

七月

バイカー夫人よりの寄付金のうち、九十ドルを金森通倫その他に贈る。(L332)

夏、京都府全域に旱魃。(H14: 173)

八月一日

東京第一教会は赤坂霊南坂に新会堂を建設、この日献堂式を行う。(F1: 95, F14: 717)

ジャパン・ミッション第十四年会が比叡山テント村で開かれる。一〜十日、二十五〜二十八日まで。

議長D・W・ラーネッド。(E1)

八月六日

仙台より帰京する。(全5: 204, 286)

同志社学校が準官立の資格を得ることについて、この日朝、松山高吉・中村栄助より北垣知事に陳情する。府庁で即日協議した結果、文部省に願書を差し出すことを決定した旨、北垣知事より通知される。(F758)

八月九日

八重夫人を同伴して海水浴のため、神戸の近郊、東垂水村の滝ノ茶屋(松下万亀方)に行き、二十八日まで二十日間滞在する。(全3: 417, 全5: 204, 286)

八重夫人は後にこの頃のことを「少しく泳げば動気甚だ強くなり、其時より度々動気の異変を覚え心

八月十日 配し居れり。然し心臓病なることは知らざりき」と記す。(D14:33)

徳富猪一郎が熊本より上京の途次、神戸に立ち寄ったことを知り、八月中の連絡先等を記し、東京の宿所に送る。(全3:417)

八月十四日 富田鉄之助よりこの日付で来信、仙台の学校用地として清水小路九番地に五千坪が確定したことを通知しつくる。(F759)

八月二十日 富田よりこの日付で来信、十月頃、仮開校の予定で、学則を設け、生徒を募集したいことを伝えてくる。(F760)

八月二十二日 明石教会において「信仰」と題して説教を行う。(全2:183)

八月二十四日 垂水の寓居に原田助が来訪、一緒に海水浴をする。原田、一泊する。(J15:57)

八月二十五日 原田と海岸を散歩する。午後四時頃、原田は神戸に帰る。(J15:57)

八月二十八日 垂水より帰京する。(全3:419)

九月二日 新潟伝道に関し小崎に発信、「新潟引揚之一点ハ小生甚不同意、今手を引カハ向來再ヒ該地ニ着手スルハ随分困難ナルベシ……夫レ事ヲ創メ些少之困難ニテ落胆シ輕輕敷モ之ヲ引揚クルハ小供ノ遊戲ノ如シ……」(全3:420)

九月三日 岡山の人、加藤寿を書記に雇い入れる。(全1:266)

九月六日 歩兵操練科設置願および神学科設置願について回答を求める催促書を出す。(全1:266)

九月八日 同志社医学校創立に関し Edinburgh Medical Missionary Society より来信。(L156)

九月十日 大阪で清水泰次郎に会い、同志社へ招聘(英語教授)する。翌十一日、招聘に応じる旨の電報が届く。

(全1: 266)

九月十一日

神学生園田重賢・小北寅之介の入学に際し、京都四条教会より新島に対し保証書を送る。(F11: 819)

九月十三日

同志社、第十二学期の第一期を開業する。(全1: 266)

* (全5: 301) では九月十六日開校、一年生入校百四名となつてゐる。

九月

市原盛宏、宮城英学校の校長代理として赴任のため辞表を提出する。(全1: 266)

九月十七日

市原盛宏の送別会を午後七時より新チャペルで催す。仙台のJ・K・H・デフォレストに発信、市原が明日出発することを知らせる。(全1: 267, 全6: 306)

九月十八日

市原、京都を出発、九月二十五日に海路、仙台に到着。(F766, D8)

九月二十日

大日本私立衛生会京都支会が開かれ、席上、J・C・ベリーと新島は看病婦学校設立の目的について演説する。(全1: 110, 115)

九月

この頃、「ベネー氏ハデビス氏方ニ而診察相初候……」(全3: 421)

十月一日

同志社教会、新島を仮牧師とする。(D8)

十月四日

ペイカー夫人よりの寄付金のうち二十五ドルを福岡教会に贈る。(L932)

旧友の尺振八よりこの日付で来信、近況を伝えると共に、療養のため熱海に向かう旨を伝えてくる。

〔この年十一月二十八日没、四十七歳〕(F769)

十月七日

群馬県の新市教会設立につき宮口二郎・半田平次郎・上原春朔より案内状を送られる。この日¹¹校用多忙¹²のため出席できない旨の返書を送る。(全3: 422)

十月八日

新島、同志社教会の仮牧師就任を承諾する。(D8, F4: 285)

十月九日

十月十一日

十月十二日

十月十七日

十月二十四日

十月二十六日

十月二十九日

富田よりこの日付で来信、仙台の学校は十日より開業、生徒は約百名と報じてくる。(F770)
 花畑ら九名の退学生に関する新島の問い合わせに対し、大阪の辻密太郎よりこの日付で来信、(一)京阪
 神在住の六名が神戸で相談した結果、三名だけが今月中旬に帰校する (二)ただちに帰校できない者も
 反対論者ではないので、帰校した者と同一に取り扱われない、と事情を伝えてくる。(F771)
 宮城英学校開校する。生徒百十八名。(F770, E8: 89)

* 開校日について (F770) は十日 (J90: 253) では九月十一日となっている。

牧野伸顕よりこの日付で来簡、弟の就学について相談したいので代理人を派遣したい旨申し入れてく
 る。(F772)

古沢滋より持ち込まれた新聞経営の話につき、この日、資本も人もないので「不得止此度之旗揚ハ暫
 ク見合せ」と返事する。(全3: 424)

英船ノルマントン号、紀州沖で沈没する。(全1: 410)

上京中の北垣知事に発信、知事の尽力により近く神学専門科の許可を得られることにつき礼を述べる。
 また先日、ロンドンのモルトンという人物より私立医学学校につき問い合わせたが、それに関連し
 てスコットランドの医学会社より、同志社が土地と建物を提供すれば、同会より医師を派遣すると申
 し入れてきたこと、これにつき知事と相談して態度を決めたい、と伝える。(全3: 425)
 長浜教会において「真ノ力」と題して説教をする。(全2: 192, 全3: 426, F773)

* (14-3) では彦根の長栄座とある。

モラー教授に小崎成章の紹介状を書く。(全6: 306)

十月三十日

去る九月二十日の大日本私立衛生会京都支会におけるJ・C・ベリーの演説を印刷、配布し、広く看病婦学校設立の賛助を求める。この日、千冊分の代価として十円八十銭を支払う。(E387, D1:122)

十月三十一日

同志社教会において「御国ヲ来ラセ賜ヘ」と題して説教をする。(全2:195)

十月

京都祇園座において「ノルマントン号事件について」演説する。(全1:414)

十一月三日

父親に菊の花二種を贈る。(E1721)

大阪基督教青年会館が大阪西区土佐堀二丁目十二番地に竣工する。この日、捧堂式が行われ、新島も出席する。(D8, F20:47)

十一月十五日

神戸、多聞教会の山田良斎に発信、貴会十年期祝会に招待されたけれども、脳氣よろしからず、出席できないと返事をする。(全3:428)

十一月十六日

京都府知事に「神学専門科設置御願」を提出する。これまで英語本科卒業のうえ志願者に限り余科の名義で教えてきた神学科を二分し、英語神学科と邦語神学科に改めるについて、この願書の提出となった。(全1:21, 268)

* 七月十三日の神学科設置願を再提出したものである。

書籍館の上棟式を行う。(全1:268)

十一月二十一日

上京・下京区長および外国人教師を招待して懇談会を開く。(全3:429)

同志社教会において「爾寛我」と題して説教を行う。(全2:201)

十一月三十日

シリーズ総長に高崎五六東京府知事の子息安彦の紹介状を書く。高崎知事は岡山県知事の頃以来の知人であり、子息は東京第一教会の教会員である。(全6:306)

十二月四日

仙台の市原盛宏よりこの日付で来信、(一)来る六日より英学の夜学会を会員七十名で開設する (二)一兩日中に校舎の上棟式を挙げる (三)開校式にはぜひ来仙してほしい、と記す。(F775)

十二月五日

同志社教会において「我已勝世矣」と題して説教を行う。(全2:209)

十二月六日

日本キリスト教婦人矯風会創立。(F29:35)

十二月上旬

熊本大江義塾の生徒ら十余名、上京の途中、京都に立ち寄り、新島を訪問する。(全3:430)

十二月十一日

この頃、二、三日心臓の具合悪く、休息する。(全3:431)

十二月十二日

同志社教会十年紀祝日準備委員に選ばれる。新島のほか、森田久万人・安部磯雄・岸本能武太・原忠美・望月興三郎・山路一三が当選する。(D8)

明治専門学校設立に関し浜岡光哲・伊東熊夫・川勝光之助・河原林義雄・中村栄助ら京都倶楽部に集会する。(全1:196)

十二月十三日

新島宅で看病婦学校委員会を開く。(全3:431)

十二月十四日

明治専門学校創立および将来の計画につき集会を開くこととし、新島、京都府会議員らに案内状を出す。(全1:196)

十二月十五日

京都商工会議所に郡部有志者二十六名が集会を開き、新島公義が十七年五月以来の事業の概要を述べ、新島は明治専門学校の将来について協力を訴える。熟議懇談の結果、京都府下の各郡において「毎年金五拾円宛、即ち毎年金貳千円宛」各自が分担して募集することを決定する。(全1:196)

十二月十七日

同志社所有地の上京第十七組上長者町通元浄華院町五八二番地〔看病婦学校予定地〕内を通る藍染川の水が涸れて汚泥が沈澱し、飲料用井戸水を汚染するため、同じく同志社所有地上京第十七組烏丸通

龍前町六〇〇、六〇一番地の東に溝を新設し、悪水を抜くことについて知事宛に願書を提出する。

(E280)

十二月二十日

神学専門科の設置を認可される。(D39)

徳富猪一郎に発信、「先日大坂新報社員……拙宅ニ参られ……貴君を聘し新聞を一切御委託申度旨被申、且小生より一応之御勸を申上呉よと懇々依頼ニ被及候」ことを伝える。(43: 422)

福井の岡部広よりこの日付で来信、同地に仮称、英語専門学校を設立するにつき、米国人教師一名を推薦するよう依頼してくる。(F776)

十二月二十六日

同志社教会において「無クテナラヌモノアリ」につき説教を行う。(42: 215)

十二月二十八日

午後二時すぎ森有礼文部大臣が来校、礼拝堂において演説する。(41: 269)

この年、ベイカー夫人の寄付金三百ドル「六月二十八日の項参照」の中から熊本に雑誌代として二・五ドル、同じく熊本に十ドル、不破唯次郎に百ドル (for his work in Fukuoka) を贈る。(E32)

明治二十年（一八八七）四十五歳

一月一日 従来の個別の年賀訪問をやめて、一同、校内に集まり、年賀式を行う。午後六時より食堂において新年宴会を開く。（全1：269, 14—b）

一月二日 同志社教会において「祈ヲ聞キ賜フ神ヨ、人々挙ゲテ来ラン」と題して説教を行う。（全2：232, D8）
一月三日 彦根の西尾文楨・中島宗達より看病婦学校寄付金として三十名分十二円八十二銭を、この日付で届けつく。（F777）

一月四日 旧礼拝堂の祈禱会が満員につき、翌五日より会場を新礼拝堂に移す。（D8）

一月七日 来日中のミューラー G. Muller が同志社を訪れ、午後四時より礼拝堂（チャペル）で演説をする。
同志社教会で祈禱会后、四年の洗礼志願者を試験する。（全1：270, D8）

一月八日 午前十時より孤児院創設の父ジョージ・ミューラーの説教が行われる。一回にわたる説教の題名は「信仰」「神ト共ニ歩」にあらわす。（全1：270, 461）

一月九日 「吾信ズ吾不信ヲ助ケ賜ヘ」と題して「同志社教会において」説教を行う。（全2：238）

J・C・ベリー来訪、地代として立て替えた三百五十円の返却を求める。（全3：436）

一月十日 京都滞在中の井上馨外務大臣に専門学校の賛成を得るため、随行している古沢滋に働きかけてほしい旨、中村栄助に依頼する。「小生も病氣ニ無之候ハ、是非大臣之旅館迄相尋御面会仕度候得共、未タ充分力ナク……」（全3：436）

一月十二日 安中の湯浅茂よに発信、親戚の植村よねが借りていた旅費・金子について礼を述べ、返済する。(中

3: 437)

一月十三日 夜、井深梶之助が来訪、教会一致について意見を交換する。新島のほか宮川・伊勢・金森・森田・浮

田・加藤らが同席する。午後十時帰る。(J22-1: 498)

一月十四日 雨、井深梶之助を昼食に招待する。午後二時、礼拝堂において同志社教会十年記念会が催され、新島

奨励、おりから来京中の井深が演説、四時すぎ終わって、井深と共に京都倶楽部で洋食をとり、それ

より井深を山本覚馬宅に案内する。更に四条通京極道場芝居に行く。井深演説する。(全1: 271, D8, J

15: 60, J22-1: 499)

一月十五日 同志社大演説会が朝八時より十時すぎまで礼拝堂で催される。(全1: 271)

一月十八日 前橋教会の不破唯次郎に神戸の宣教師ジェンクスを通じ二十五ドルを送金する。この金はボストンの

ベイカー夫人より不破の前任地である福岡伝道扶助金として寄付されていたものの一部である。(上

932, L944)

一月二十日 木曜日、浪華教会十年期祝会に出席、午後二時より土佐堀の青年会館で「天父基督ヲ十字架ニ添テ世

ニ賜ヘリ」と題して説教をし、矢野静哉・早野竹蔵ら十名に授洗する。なお、この日午後一時半より

病床にある沢山保羅牧師の解職式が行われた。(全2: 243, F12: 158)

一月二十一日 岸和田へ行く。一泊し、二十二日に帰宅する。(全3: 440)

一月二十五日 奈良片原町で伝道している新島公義に手紙を書き、家族の近況を伝える。「伊勢ニハ土曜日ノ朝ニ男

子出産、御峰様ニハ甚大病ナリ、故ニ八重此兩夜程ハ看病ニ参居候、老大人ニハ御氣分宜しく被為在

候得共、御母様ニハ例之通臥床被遊候、予モ昨夜より心臓之加減宜しからず本日ハ一日休息致居候」
(全3: 440)

一月二十六日

天皇京都行幸につき同志社の全校生徒、七条ステーションに奉迎する。「知事ノ周旋ニよりステーション之近傍ニ宜しき場合^(加)取除キ、何カ大文字ニテ同志社生徒云々之札ヲ建候よし……予ハ如斯迄も府庁にて御周旋ハあるまじと存居候に存外之上出来御一笑可有之候」(全3: 440)

一月二十七日

伊勢峰永眠。(全3: 441)

午後を休課にして万国学校の隆盛を祈るため祈禱会を開く。(全1: 272)

福井の岡部広よりこの日付で来信、福井に私立専門学校を設立したいので外国人教師を斡旋してほしい旨「私立専門学校設立移文」を同封して依頼してくる。(F778)

一月二十八日

伊勢峰の葬式を同志社礼拝堂で午後二時より執行、新島が告別説教をする。

午後七時十五分より同所において奉教記念会を挙行する。(全1: 272, 全2: 252)

一月三十日

新島民治、この日午前四時永眠。八十一歳。(全3: 445, 上1677, D8)

二月一日

雨のち晴、新島民治の葬式が同志社礼拝堂において午後一時半より行われ、洛東南禅寺天授庵に葬る。

司式・森田久万人。(全1: 272, 上1677, D8, J71: 88)

二月二日

伊勢峰、新島民治の永眠が重なり、「種々之混雑不一方、昨夕迄諸事相片付申候処本日ハ何ニカ大驟雨之后之如クニ思ハレ居候」と徳富猪一郎に一書を送り、そのため依頼されていた『将来之日本』への序文の執筆は再版には間に合わない旨を記す。また「近來民友社御創立之よし……何卒兄之前途此之字義ヲ飽までも御貫徹、民之友たられん事小生之切望して止まざる所ニ御座候」と述べる。(全3:

442)

二月六日 新島民治の墓地の整備を中村栄助に頼む。(全3: 444)

二月七日 看病婦学校理事委員の会合を新島宅で夜七時より開く。(全3: 444)

二月八日 私立学校表を戸長役場へ提出する。(全1: 272)

二月十五日 徳富猪一郎、『国民之友』を創刊。「この頃、新島先生は発刊祝にとて、人の背ほどの高さの更科そば

を届けてきた」という。(J 17: 57, J 76: 223)

二月十六日 予備校の普請のため八十二円を支出する。(E 932)

米人スタンフォード、英人E・バックナー Arthur W. Stanford and Edmund Buckley に京都居留
認め。(D 39)

二月十九日 午前十一時すぎ、伊藤博文内閣総理大臣夫妻、北垣知事の案内で同志社を参観、とくに女学校では讃

美歌をうたい、ことのほか喜ばれる。この日、男子校は鞍馬山周辺で猪狩りを行い、猪二頭を得る。

夜は教員一同、生徒に招かれ、猪肉の馳走にあずかる。(全1: 273, 全3: 447)

勝海舟、この日、新島に書簡を送る。(J 31-21: 207)

二月二十日 天皇、京都御出発につき同志社生徒、ステーションまで奉送する。(全3: 447)

同志社教会において「ナイン少年ノ復活」と題して説教をする。(全2: 255)

二月二十五日 北垣知事の子息・確の英学につき家庭教師を推薦する。この日、校用で東上する。(全3: 448)

徳富猪一郎に手紙を送り、『国民之友』創刊号を送られたことに礼を述べ、「小生モ君ト同主義ニシテ
長ク国民之友ト相成度存候」と記す。また『将来之日本』の序文については第三版には間に合わせた

いと述べる。(全3:449)

三月一日

同志社社員相談会を午後四時より山本覚馬宅において開く。議題は予備校および看病婦学校に関することである。(全3:450)

三月二日

岩神昂が天方道義という人物を伴って来訪する。(全5:287)

東京へ出発する。用件は次の通り、(一)同志社を官立校同等と認められる手段 (二)京都府下に医学校設立に関し文部省に談判の簡条 (三)銃器を廉価にて払下の手続きについて。(全3:450)

三月三日

神戸より薩摩丸に乗り、横浜に向かう。伴直之助・石井某および森有礼一行が同船する。(全5:287) 夜十一時半、横浜着。(全5:287)

三月四日

横浜に上陸、ガーデン山一二に住むヴィール夫人 A. Vile, American Women's Union Mission 方に行く。宣教師ルーミス、バラを訪問する。稲垣〔信か〕を訪うも不在。来る十日、海岸教会十五年期〔祝会〕を挙行することを聞く。(全5:287)

W・T・セイヴォリー船長に横浜より発信、日本の金貨を二枚、病気のため帰国する梅花女学校の宣教師ミス F・A・ガードナーに託して送ることを通知する。(全6:307)

三月五日

東京の山城軒に行くが満員のため、湯浅治郎方へ行く。文部省に折田彦市を訪ね、徴兵免除について相談する。司法省に三好退蔵を訪問する。午後、徳富猪一郎に会う。吉野の鍵田某来訪、また山中茂・河波荒次郎が来訪する。東京専門学校に二十名ほどの求道者がいるので大隈〔英麿か〕に面会するよう頼まれる。(全5:288)

三月六日

安息日、赤坂の東京第一教会において説教をする。小崎百々代・服部初枝・好枝の三婦人に授洗する。

木山某来訪、木全と面会。夜、麻布市兵衛町に富田鉄之助を訪う。(全5:288)

同志社教会は新島と松浦政泰の二名に安息日学校の学則を編成させる。(D8)

三月七日
富田を訪問、一緒に森文部大臣を訪問する。米国公使館に行きW・N・ホイットニーに会う。新井毫に会う。島田三郎を訪い、更に芝兼房町金虎館に土倉庄三郎を訪う。夜、再び富田を訪問する。(全5:288, 190:265)

三月八日
アメリカより帰任したJ・D・デイヴィスに会うため横浜に行くが、すでに神戸行きの船が出帆していたので、東京に引き返して早稲田の大隈を訪問する。(全5:288)

* J・D・デイヴィス、十日帰京。(全1:274)

三月九日
朝八時、高木兼寛を訪問するが、不逢。新井毫を訪ねて午後まで話し込む。(全5:288)

三月十日
富田鉄之助の招待を受け、上野精養軒に行く。松平正直・遠藤敬止の二人に面会、八時半ごろ帰る。(全5:289)

三月上旬
在京中、小室信介・沢辺正脩の蔵書を同志社に譲り受けることにつき、土倉庄三郎・新井毫および自由黨員と交渉する。(全3:455)

三月十一日
早朝、伊藤博文総理大臣を訪問、専門学校設立のため百円寄付の約束を得る。また伊藤夫人に看病婦学校について援助を依頼する。朝九時半、裏霞ヶ関に青木周蔵を訪い、宗教・教育問題につき正午まで話し合う。岡山の渡辺隆、宣教師雇い入れにつき来訪する。(全5:289)

三月十二日
伊達家の家扶・柴田隆、伊達直知のことにつき来訪する。三枝光太郎に面会する。(全5:290)
東京出発、正午横浜を出港する。伴直之助から借用の書類を横浜の和田彦に託して返却する。(全3:

453)

三月十四日 「十三日正午迄ハ風波荒ラク甚困却仕候、着船モ大ニ後レ」十四日朝六時半神戸に着く。(453:453)

* (453:452) には「昨朝六時過キ神戸ニ来着」(十四日付)とある。

三月十五日 東京より帰宅する。(453:454)

三月十六日 同志社教会仮牧師の辞表を提出する。校務多忙および心臓病の療養のため。(453:601)

三月十八日 『同志社文学雑誌』発行願を提出する。届出人・浮田和民、毎月第四土曜日発行。四月八日認可される。なお、この雑誌は明治二十年十一月二十五日『同志社文学会雑誌』と改題、十二月五日認可された。(D39)

三月十九日 新島公義に発信、東京出張のことを述べる。「八重も近頃ハ大分急ハしく候、婦人中の交際繁しく相

成申候 ○私も益多事ニ相成候間、教会牧師之職分ハ相断申候」(453:456)

三月二十二日 上京第十七組上長者町の溝渠変換願を出す「十九年十二月十七日の項参照」。四月一日認可、四月二十五日竣工する。(D39)

三月二十三日 宮中顧問官元田永孚、随行数名と共に来校する。(451:275)

三月二十五日 J・D・デイヴィスの寄留届を提出する。もとの住居が看病婦学校の校地となったため上京第十一組常盤井殿町五四三に移る。(D39)

三月二十七日 沢山保羅永眠の電報を亀山昇より受け取る。(453:456)

三月二十八日 沢山保羅の葬儀に際し追悼説教を承諾する旨、亀山に伝える。(453:456)

三月二十九日 沢山保羅の葬式が大阪土佐堀青年会館で午後二時より行われ、新島、告別説教と祈禱を行う。(453:456)

261, F12: 166, G2: 69)

三月

この頃の同志社生徒数二百五十人以上、予備校生百人以上。(全6:307)

春、新島はA・ハーディ夫妻に菊を三十本余贈ったが、その中の一種は「アルフォス・ハヂー」別の一種は「ニイジマ」と名付けられて珍重されていることを新聞紙上で報告する。(E1604, 14—c)

四月一日

「偷閑梅花之消息を問ハント欲シ、今朝俄ニ思立而木津ニ来ル、三時過キナリ、是ヨリ笠置ニ参リ可成ハ夜行シテモ月瀬ニ参リ一泊」大和月ヶ瀬の騎鶴楼に午後九時に投宿。(全3:457)

四月二日

午前八時宿を發ち、帰路、小倉に立ち寄り一泊する。(全3:457)

* 京都婦人慈善會發會式がこの日午後二時より京都俱樂部において開かれ、新島夫妻も出席する。(13)

四月上旬

久世郡宇治の菱木信興の周旋により小倉校に出張し、同地方の有志家七、八十名に対し専門学校設立の必要を述べる。聴衆ら大いに教育の大切であることを感じ、賛意を表す。(全1:197)

四月五日

岡部広よりこの日付で来信、福井の私立専門学校の設立は費用の点で遺憾ながら衆心の一致を得ない状況である、と報じてくる。(F780)

四月七日

二百六十円五十二銭五厘 This money I find in my hand. 「看病婦学校設立資金か」(E331)

同志社助教・安部磯雄、岡山基督教会仮牧師の招聘に応じる。(全1:278)

四月十日

金森通倫、同志社教会仮牧師となる。(D8)

四月十二日

同志社を中退して尾道に住む大久保真次郎より来信、信仰の復活を告げ、新島に許しを求めてくる。

(F781)

四月十三日

J・C・ベリー、S・C・バックレー、L・A・J・リチャーズに看病婦学校について手紙を書く。

〔案文のみ〕(全6:308)

* Sara C. Buckley (M. D.), Linda A. J. Richards は共に看病婦学校の教員。

四月十四・五日 この頃より病氣となり、五月上旬になってようやく筆を取り得るほどになる。(全3:459)

四月十六日 気管支炎にかかる。二十一日になっても治らない。(E19—d)

四月十七日

「朝脈数百二三十もあり。直にベレー氏を迎え来りて診察を願いたりしが、此度は余程大病なりとの事……十七・八・九日に咳嗽非常に出で、血痰も出」る。(D14:33)

四月下旬

宇治の菱木よりの要請で、久世郡寺田校において専門学校の集会を開くことになるが、新島病氣のため、代理として新島公義を派遣、二回の集会で五十余名の賛成者を得る。(全1:197)

四月

ベイカー夫人の寄付金のうち十ドルを不韋唯次郎に、一円を Yasuye に奨学金として贈る。(E32) 尾道の太久保真次郎に十五円「七・八・九月分伝道費か」を送る。(E32)

この頃、J・C・ベリー宅の新築工事が上京第十一組染殿町「京都御苑東、梨木神社の北」で進められる。(D39)

J・T・モートンに京都の医学校について手紙を書く。すでに五千円の寄付が集まり、準備が進んでいること、東京で森文部大臣に相談したことを述べ、医学校に教授を派遣してほしいと書く。(全6:309)

五月四日

日本組合基督教会第二回総会・日本基督伝道会社第十年会が東京第一基督教会で開かれ、日本基督一致教会との合併を促進する動議が原田助より提案、可決され、五名の委員を選出する。〔新島は病氣のため欠席〕(E8:6, F4:208)

五月九日

邦語神学科を別課神学科と改称することを京都府に届け出る。(全1:281)

札幌の富士成豊に手紙を送り、この夏、避暑のため北海道に行きたいが、気温および適当な借家はあるだろうか、と問い合わせる。(443:459)

五月十日

再び富士成豊に発信、夏の霧の有無について問い合わせる。(443:460)

J・C・ベリーはアメリカン・ボードのN・G・クラークに宛てた手紙の中で、気管支炎にかかっていた新島は肺炎となり、この三週間を通じて肺結核の兆候を示していること、そのため、今夏、空気の乾燥している札幌へ行くよう勧めたことを知らせる。(E19—e)

五月十一日

N・G・クラークに発信、(一)三月三十日付の手紙を受け取ったこと (二)この三週間身体具合が悪いこと (三)東京へ行って徴兵令の不公平を訴え、同志社の生徒も兵役免除になるよう訴えたこと (四)京都に国立の大学ができること (五)女学校の存続、看病婦学校・医学校設立等のため五万ドル必要なので、オーテス基金か、スウェット基金をもらいたいこと (六)その五万ドルが同志社の基金となればより一層の安定性と尊敬を得るであろうし、徴兵適齢に達した学生を引き留めることができよう。私はそのような学生が同志社を去り、国立大学に行ってしまうのを心配するのだ。そうなれば福音を教えた意味がなくなってしまう、と訴える。(446:311)

五月十一・二日

基督教演説会が横浜の港座で開かれ、原田・宮川・金森・本間・綱島・本多庸一・コルレルらが演説をする。聴衆三千人。(E23:33)

五月十四日

富田鉄之助よりこの日付で来信、仙台の学校名は東華学校と改めたこと、開校式は六月に行うことを知らせてくる。(F783)

五月十六日

同志社生徒らにより始められた予備校を学校が引き継いで経営することになり、予備校設立之主意書

を發行する。(全1: 121, 281)
 五月十七日
 アメリカン・ボード運営委員会の議決により五万ドルの基金の利息として年間二千五百ドルを下らない収入が同志社に保証されることとなった。(全10: 327)

* この通知は七月三十日ごろ新島のもとに届けられる。(全6: 313, 全10: 328)

関西貿易会社(三条麩屋町)が浜岡光哲らにより設立される。(H10: 82)

五月十八日
 奈良へ行く、二十六日帰京する。(全1: 281)

五月十九日
 尾道の久久保真次郎よりこの日付で来信、もう一度同志社に入って神学を学び、将来は伝道に従事したい、と伝えてくる。また音羽夫人より、夫・真次郎が再び信仰を回復したことについて感謝を述べらる。(F784, F785)

五月二十一日
 福士成豊よりこの日付で来信、問い合わせていた札幌の気象について回答してくる。(F786)

五月二十二日
 大久保よりこの日付で、いわゆる「尾道教会」の状況について報告してくる。(F787)

五月二十六日
 奈良伝道中の新島公義を訪ね、この日帰京する。奈良滞在中、古梅園を訪う。(全1: 281, 全3: 461)

大阪の聖書会社を通じて尾道の久久保真次郎に聖書を送る。(全3: 462)

五月二十九日
 大久保に発信、(一)尾道に伝道師を派遣することは伊勢時雄と相談する (二)大久保が同志社に再入学することは伊勢・金森より聞いていることを記し、「貴兄之再ビ天父之恩恵を蒙りし事ハ、実ニ小生等之深く天父ニ謝す所……邦家之為ニ尽さんとなれば先自己之改革を要する也、先人心之改革を要する也、人心之改革なくして物質上之改革なんする者ぞ」と述べる。(全3: 463)

松平正直宮城県知事よりこの日付で来信、宮城英学校は東華義会と改称、規則も決定し、学校新築落

五月

成式執行の時より実施すること、落成式にはぜひ臨席されたいと伝えてくる。(F789)
この年一月に來校したG・ミューラーの演説に感激した生徒らが彼の演説集の刊行を計画、新島は求められてその序文を書く。(全1:461)

ペイカー夫人の奨学金として Yasuye 1円、Hashikano 六十五銭、Suzuki 二円三十八銭、Imaizumi 1円、Ukai 二円五十銭、Fukai 二円三十銭、Shimomura 五・六・七・八月分十円十四銭、Okubo 五・六月分二円、Shirai 一円五十銭を渡す。(L932)

六月八日

Philip's Theory of Preaching, Beacher's Yale Lectures 等の洋書を發注(八円八十一銭?)する。(L932)

六月

専門学校の協力者である浜岡光哲が洋行するので、後事を山添直次郎に託することとし、新島を京都倶楽部に招いて山添を紹介し、浜岡の不在中、明治専門学校のことは山添と田中源太郎に相談するよう申し入れる。(全1:198)

六月十一日

仙台東華学校の開業式に出席し、あわせて北海道に避暑のため八重夫人を同伴して一番の汽車で京都を出發、この日午前中に神戸より近江丸に乗船して横浜に向かう。留守番を同志社生徒の鈴木彦馬・深井英五に頼む。(全1:283, 全3:466, 全5:291)

* 新島の北海道旅行については、この年のA・ハーディから新島への指定寄付二百ドルの中から百二十五ドルが、アメリカン・ボードを通じて支出されたようである。(E24—f, E32)

六月十二日

午後六時、横浜に到着、弁天通の和田彦に投宿する。原六郎在宅の有無を問い合わせ、明朝來訪せよとの返事を得る。(全3:465, 466, 全5:292)

六月十三日

朝、原六郎を訪問、北垣知事の添書を差出し、同志社予備校建築費の寄付を依頼、千円の約束を得る。八重夫人は旧主会津公を訪ねるため、東京に先発する。新島は九時四十五分横浜を出発、上野ステーションで夫人と落ち合い、十二時二十分発の汽車に乗る。夜にかかるのを避けて黒磯に一泊する。宿で心臓に激動を覚える。(全3: 470, 全5: 282)

六月十四日

黒磯より人力車で福島に行き、綱島に会う。福島で一泊。(全3: 468)

六月十五日

夕方六時、豪雨の中を仙台に入り、国分町の針生久助方に泊まる。(全3: 466, 468, 全5: 283)

六月十六日

宮城県書記官・和達孚嘉が来訪し、榴ヶ岡の「梅林」に移るようにとの知事の伝言を受け、同所に移る。デフォレスト来訪する。(全5: 283)

六月十七日

東華学校の開校式が午後一時半より挙行され、演説をする。夕方六時、挹翠館に市中の名士を招待し、祝賀晩餐会を催す。(全1: 283, 全3: 468, 全5: 283, E7: 186)

六月十九日

仙台の旅宿より同志社五年生松浦政泰・白木正蔵・山路一三・望月興三郎らの卒業を祝い餞の言葉を贈る。「進メ進メ好男児決シテ退歩ノ策ヲ為ス勿レ、諸君ヨ今日我カ日本ノ改良ハ裏諸君ニ望ムニアラ「ス」シテ将タ何人ニカ之ヲ望マン……」(全3: 468)

新島夫妻・富田鉄之助・遠藤敬止・佐藤三ノ助・同常三郎の諸氏と共に松島を見物する。(全3: 470, 471, 全5: 283)

六月二十一日

『群馬新報』はこの日付の第五十一号紙上で、人気投票の結果、新島は「篤行家」として五十四点で最高点を得たことを報ずる。(H3: 750)

六月二十二日

東華学校の委員会が県庁で開かれ、負債七百円の償却について協議する。松平知事より二百五十円、

北岡より百円等、委員が応分の寄付をすることにより解決する。(H5:293)

六月二十三日 午後二時より同志社女学校の卒業式、四名卒業する。(H1:293)

六月二十四日 同志社神学科卒業式(午前九時)、同志社英語普通科卒業式(午後二時)。北垣知事その他来賓が出席する。(H1:293)

土倉庄三郎に発信、原六郎より予備校校舎建築費の寄付を得たことを伝え、その用材の手配を頼む。(H3:470)

六月二十六日 東華学校委員、教員らにより挹翠館に招かれる。知事・書記・区長夫人も出席する。(H5:294)

六月二十七日 仙台、大町の教会で晚餐および洗礼式が行われ、出席する。七名受洗。(H5:294)

六月二十九日 東華学校の臨時会議を開き、講堂新築について相談、遠藤・佐藤・中島・中村ら六人の人々が負担することと決まる。(H5:294)

六月三十日 午後、東華学校の人々に見送られて仙台を出発、塩釜の太田屋に一泊する。(H5:294)

六月 京都第三教会は第一教会と合併して、平安教会と改称する。(F7:30, 315)

Ukai 11円五十銭、Miss Hashikano 五十銭、Shirai 1円五十銭を渡す。〔バィカー夫人奨学金か〕(L932)

七月一日 午前八時、蒸汽船に乗り荻ノ浜に渡る。陸軍の将校三名と同室、また宣教師M・R・ゲインズの家族、

佐久間陸軍中将も同船する。大森において休息するが、取り扱いよろしからず。(H5:294)

七月二日 未明、開帆する。田中兔毛ら同行する。(H3:472, H5:294)

長浜教会および長浜の林撲・堤泰吉より看病婦学校創立費寄付として合計六円六十銭を受け取る。

(E931)

七月三日

午前六時前函館に到着、当時有名な旅館朴中村茂七方に入る。メソジストの松本〔総吾〕牧師、岡野〔敬胤・同教会勸士〕、野田〔鷹雄・函館税関長〕、北原〔鉦太郎・函館製氷所社員〕、井上の諸氏、一致教会伝道師の鵜飼正為・栗太寿吉・相馬理三郎〔西浜町・米穀商〕らが相次いで来訪する。八重夫人を伴い、かつて海外へ密出国した波止場を訪ね、往時を追懐する。函館に四日間滞在する。(全3: 472, 全5: 295)

八重夫人によれば、その際、ポーター商会の主人A・P・ポーターにも会ったとのことである。(D36: 27)

七月四日

米国独立記念日というので、午後、ゲインズの家族が泊まっているC・W・グリーン宅の午飯に招かれる。午後三時半、花火をし、ドレイパー方で茶菓をい馳走になる。(全5: 295)

* C.W. Green of Methodist Episcopal Church の宣教師、家は元町五三、臥牛山麓の遺愛女学校内にあった。
ゆづ。〔G. F.〕Draper は同女学校の宣教師館に住んでいた。

七月五日

午前より田中〔兎毛〕と湯ノ川温泉に遊ぶ。林屋において昼食をする。(全5: 295)

七月六日

午前、田子ノ浦丸に乗り函館を出航、小樽に向かう。(全3: 472, 全5: 295)

七月七日

午前九時、小樽に入港、森谷方に上陸する。汽車で札幌に行き、午後二時半到着する。ステーションに出迎えた福士成豊・大島正健らと再会、ただちに福士の家に行き、旅装をとく。札幌では福士が持ち家の一軒をあげ、新島夫妻の使用に供する。〔此夜深更ニ至迄氏ト閑談セリ〕(全3: 472, 全5: 295)
大島正健・小寺某らが来訪、札幌の教会のことについて相談する。(全5: 296)

七月八日

七月九日

札幌農学校仮校長兼幹事の佐藤昌介が来訪する。佐藤とは明治十八年、ジョーンズ・ホプキンズ大学で会ったとき以来の知人である。

七月十日

福士が翌朝より沿海巡回に出かけるため、この夜十一時まで閑談する。(全5:296)

南三条、西四、五丁目の「札幌独立」教会に出席、大島正健の説教を聞く。新島も奨励を行い、神の摂理の奇妙にして常に人意の外に出ることを述べる。(全5:297)

七月十一日

* 札幌独立教会は教会堂を南三条西六丁目に建立し、明治十八年八月八日に献堂式をあげた。(全5:38)

魚釣りに行く。一匹も釣れず。宮川経輝に手紙を書き、札幌で大島正健に会った際、地方伝道にあたるべき人物を求めていることを聞き、適当な人物をさがすよう依頼する。「此事ハ組合会如何ニ関スルニアラス、只可然加勢人を一人此地ニ周旋スルニ止マルノミ」と述べ、馬場種太郎は如何と記す。

(全3:473, 全5:297)

七月十二日

金森通倫に発信、馬場に札幌へ行くよう勧めてほしいことを記し、「此孤立セル教会ニハ飽マデモンバセーヲ頭ハシ……我党内ヨリ一人働キ手ヲサクリフアイスルハ至当ノ事ナリト信ジ候」と述べる。

(全3:474)

七月十三日

橘仁の妻女以津来訪する。(全5:297)

七月十四日

札幌農学校に行き、佐藤昌介の案内で演武場・教室・博物館・天文台等を見学する。八重夫人は同郷人の内藤兼備夫人おユキさんを訪問する。(全5:298)

七月二十三日

同志社病院、京都看病婦学校設立願を社長代理・中村栄助名で京都府知事に提出する。(全1:287, D1

: 404)

* (全1:287) では七月二十日となっている。

七月二十六日 A・ハーディの危篤電報が「ハーディ家より」新島宛に発信される。(T2575)

七月二十七日 上京第十組上立売東町三八に予備校の寮舎新築にとりかかる。(全1:287)

七月二十八日 新島夫妻、大島正健と共に市来知の講義所を訪う。また同地にある空知集治監で二回にわたり伝道講話をする。(J12:138, J16:91, J117:224)

七月三十日 この日、A・ハーディ危篤の電報を受け取り、同夫人に見舞いの手紙を書く。A・ハーディからアメリカン・ボード運営委員会の決議について知らされ、喜んでいたばかりのことであった。(全6:313, 全10:328)

七月三十一日 朝九時ごろ司法次官・三好退蔵が同志社に来校し、校内を視察のち、礼拝堂において生徒に演説する。また看病婦学校にも立ち寄る。(全1:287)

八月一日 ベリーに発信、モートンよりの手紙を同封し、それに対する意見を述べ、中村栄助・山本寛馬と外国人のメンバーが相談して返事を書くように頼む。A・ハーディの病気についてもふれる。(全6:313)

八月三日 同志社病院の設立認可される。(全1:287)

同志社予備校設置願を府知事宛に提出する。(八月三十日認可)(全1:288)

八月四日 予備校校舎の建築費募集については北垣知事の協力が大きかったので、新島および新築委員の名で礼状を出す。(全1:288)

八月七日 A・ハーディ Alpheus Hardy 敗血症のためボストンの自宅で死去、七十一歳十カ月。(D21:18)

この日より十六日までおよび二十日、ジャパン・ミッション第十五年会が比叡山テント村で開かれる。

議長O・ケリー。(E1)

八月十一日 A・ハーディ死去の電報(シアーズ発信)京都に届へ。(全5:299, D21:18)

京都看病婦学校の設立、認可される。(全1:287, D1:407)

八月十二日 新島公義、A・ハーディ死去の電報を札幌の新島に発信。(T2576)

八月十三日 朝、A・ハーディ死去の電報に接する。「嗚呼氏ハ予カ日本伝道上ニ比ノ良友又予カ米国ノ父トモ称

セシ人ナリ……」悲しみのあまり、その夜より寝込む。(全5:299, D14:33)

“The death of Mr. Hardy was a very heavy blow upon my head as well as to my heart. A slightly improved health of mine was put back worse again.” (全6:326)

* ジャパン・ミッションが決議した弔慰文については一八六五年十月〔十四日〕の項を参照。

八月十九日

午後三時ごろ新潟県から茨城県にかけて、本州を横断する地域で皆既日食がある。この日食観測のためアメリカ隊も来日し、福島県白河にいた。その隊員の中にアーモスト時代の旧友W・J・ホランドがいた。(D27:18, J57:203)

八月二十二日

石狩郡当別村を騎馬通行中、乗馬が足を痛め、同村の柳内義之進の家に一泊する。(全3:476)

八月二十三日

柳内宅を出発、帰路につくが、風雨の原野を篠津まで行き、更に江別に到着、そこから午後の汽車で札幌に帰る。(全3:474)

八月二十四日

A・ハーディ死去の知らせを聞いたのち、初めてハーディ夫人に慰めの手紙を書く。(全6:315)

八月二十五日

スミス女学校(現在の北星学園)の開業式が札幌北一条西六丁目のセーラーC・スミス Sarah C. Smith 女史宅に新築された教室で行われ、新島も招待されて出席、佐藤昌介・宣教師ミラと共に説

教をする。(11-a, b)

八月二十七日 大島正健ら二、三人の者と定山溪へ行き、二十九日まで滞在する。(43: 477)

八月三十日 同志社予備校の設立、認可される。校長・加藤勇次郎。(41: 288, D1: 589)

八月 英和女学校「神戸女学院」寮舎増築費寄付募集についての原稿を書く。(4710)

九月四日 雨、A・ハーディが亡くなって五度目の安息日、ハーディ夫人に慰めの手紙を書く。(46: 315)

九月五日 明治専門学校の遊説のため、病氣の新島の代理として中村栄助・浮田和民・新島公義を派遣、亀岡・

園部・綾部・福知山・宮津・舞鶴・峰山等を巡回させる。(41: 197, 4932)

九月八日 彰栄館の大時計が到着し、J・D・デイヴィスが組み立てる。(41: 290)

九月十一日 安藤精軒より看病婦学校創立費として五円を受け取る。(4931)

九月十三日 この日夕方より北海道の道央・道南地域に暴風雨来襲、このため小樽Ⅱ函館間の定期航路欠航する。

(11-c)

九月十六日 M・L・ゴードン、アメリカより帰る。(41: 293)

九月十七日 新島夫妻、暴風雨の通過を待ち、田子の浦丸に乗船、函館に到着する。(11-d, e)

九月十八日 函館の美以美教会、一致教会において説教する。(14-d)

南部「岩手県」に伝道している中山忠恕に会い、片桐清治の伝道状況を聞く。(43: 479)

九月十九日 水沢に伝道中の片桐清治に発信、中山忠恕より片桐の仕事を聞いたこと、一ノ関より伝道の依頼があったそうだが、好機を失わないようにしてほしいと激励する。(43: 479)

九月二十日 新島夫妻、この朝、高砂丸に乗って函館を出航、荻ノ浜に向かう。桜木保(樺戸集治監副典獄)大越

勝次郎（空知集治監長）および旧知の小室信夫らも同船する。（11—e）

萩ノ浜ではこの日、塩釜まで連絡船が出ないので仙台に行くことをやめ、ただちに横浜に向かう。
（全3：478, 482）

*（14—d）では十九日函館出航となっている。

九月二十三日 夜、湯浅治郎方に泊まる。しばらく滞在する。（全3：450, 全5：299）

九月二十四日 同志社の外柵を石柱に改造する。（全1：293）

十月一日 五時前神戸着、夜十一時、京都に帰る。（全3：480）

十月六日 アーモストの旧友W・J・ホランドがこの日、京都に新島を訪問する。日食観測のち富士山にも登山、各地を廻ったのち来訪したもの。新島の案内で京都を見物する。（D27：21）

午後五時より新島宅で看病婦学校の決算を行う。（全3：481）

十月七日 四国・近畿・東海道に暴風雨。（H14：173）

京都看病婦学校の名称につき、午後四時より山本覚馬宅において会合を開く。ペリーより同志社——と名称変更を提案してきたことに對し、新島より意見を述べたものと思われる。（全3：483）

十月上旬

大島正健に手紙を書き、馬場種太郎を札幌に派遣したことを通知すると共に、大島に早急に按手札を受けることを勧め、「此自由主義ノ教会ヲ立ツルニハ昔時ヨリ為ニ血ヲ流スモノ多ク、以謂ル血ヲ以テ買ハレタル自由ナレハ、差小ノ理由一時ノ法便ノ為ニ之ヲ安ス売リシ賜フ勿レ」と述べる。（全3：484）

十月十六日

夜、新島、本郷金助町教会で伊勢時雄・田口卯吉と会う。木村熊二も来る。（J79—1：105）

十月二十日 多聞教会の記念会に出席し、帰路、宮川経輝と同車する。(J71:91)

十月二十一日 朝、与謝郡の陶郡長と面談する。(全3:485)

十月二十五日 札幌独立教会は東京の諸教会や宣教師に大島正健に対する按手礼を依頼し、新島が斡旋の労をとる。

(J55-1:571)

十月二十七日 N・G・クラークに発信、徴兵令による生徒減少や京都にできる官立大学に対抗するために、前便で

書いたように五万ドル必要である、と重ねて頼む。また一致教会との合併について、組合派の自由が失われるかもしれない、との危惧を述べる。“I love our free principle dearly. I do not wish to sell it cheaply. I will fight for it.”(全6:316)

十月二十八日 ボストンのオールド・サウス・チャーチにおいてA・ハーディの追悼礼拝が行われる。(D21:18)

十月 J・C・ベリーの演説を印刷して、配布する。(全3:486)

ベーカー夫人より再び四百ドル寄付される。(L932)

十一月一日 田中源太郎ら京都電灯会社を設立する。明治二十二年七月二十七日開業。(H10:82)

十一月三日 徳富猪一郎よりこの日付で来信、(一)今回の教会合併は基督教前途のため憂うべき事件なので、新島の方針に従って応分の協力をしたい、(二)同志社の徴兵免除のことにつき陸奥宗光に意見を述べておいたこと、を伝えてくる。(F793)

十一月六日 山本久栄との恋愛に破れた徳富健次郎のことにつき兄の猪一郎に手紙を出し、「此ノ火事ハ私ノ手ニテ取消申度候」と述べ、かたがた教会合併問題にふれ、「我党ヨリ一致論ヲ吐キ出シタルモノハ非常ノ馬鹿モノト云テ苦シカラス、真ニ自由ノ貴キヲ知ラサルモノナリ」と痛論する。また「君ニハ政治

上ノ平民主義ヲ取ルモノニシテ僕ハ宗教上ノ平民主義ヲ取ルモノナレハツマリ平民主義ノ旅連レナリ
……」と記す。(43:486)

十一月九日

岡山行き途次、神戸より中村栄助に宛て、植村正久・奥野昌綱が来阪しているので、十五日の開業式に招待するように指示する。(43:489)

十一月十二日

岡山・尾道より、この日、帰京する。(43:489)

十一月十五日

京都看病婦学校・同志社病院の開校・開院式および同志社書籍館の開館式が同志社チャペルで行われる。五百五十人が招待され、三千人が建物を見物した。(D1:407, E8:168)

Manjū [c.] にペイカー夫人の寄付金の中から十一円を渡す。(F932)

十一月十六日

朝三時半ごろ起床、N・G・クラークに手紙を書く。故A・ハーディ氏の友人たちが、日本にハーディ記念学校を作ろうと考えていることをグリーンより聞いた。しかし同志社と別の学校を作るよりもむしろハーディ記念基金として同志社に贈られる方が妥当であり、有り難い。同志社は現在、校舎その他の建築等で資金が必要であり、近々できる官立大学に対抗してキリスト教主義を貫かなければならない。少なくとも十万ドルのその基金でA・ハーディ記念ホールを作るか、手狭になったチャペルを増築してハーディ記念チャペルを作るつもりである。同志社の現状をハーディの友人たちに伝え、同志社を助けるように頼んでほしい。またハーディ夫人にこの手紙を見せ、夫人からも友人たちに言っしてほしい。(46:318)

十一月十八日

新島公義に発信、二十日の安息日にハーディ記念説教を行うので聞きに来るように伝える。(43:490)

十一月十九日

徳富よりこの日付で来信、徴兵免除につき陸奥宗光に頼み、青木周蔵より桂陸軍次官に談判してもら

った旨を伝えてくる。(F194)

十一月二十日 日曜日、A・ハーディ追悼記念説教を同志社チャペルで行う。同志社の教職員・全校生徒が聞く。

(全2: 408, 上683)

十一月二十一日 富士成豊に発信、本年末頃来京すると聞き「実に楽しみ御来遊を屈指奉待候」と書く。(全3: 491)

札幌の土地購入に関する橋仁よりの問い合わせに對し、六十五円くらいなら買ってもよい、と返事する。(全3: 492)

十一月二十二日 徳富猪一郎に発信、近頃米国にA・ハーディを記念して日本に学校を創立する計画があること、新島

はこれに反対し、その基金は同志社に寄付するよう申し入れたこと、場合によっては「小生米国ニ出懸候哉とも思居候」と述べ、また「小生一致論ハ益々不同意、我カ自由ヲ存スルニ非サレハ寧ロ分裂スルニ如カス、差少之情実之為我カ子孫百年之自由ヲ売却スヘカラス……」と記し、一枚のポンチ画を送る。(全3: 493)

十一月二十三日 ハーディ夫人に発信、アンドーヴァーから起こったハーディの友人たちの日本での学校設立案について、同志社と別に設立すべきではなく、その資金を同志社に寄付するよう友人たちに伝えてほしいと頼む。また、そのため渡米の是非について尋ねる。(F2279)

J・M・シアーズに発信、A・ハーディ記念の学校のことを記し、ハーディの名は当然同志社と共にあるべきであると力説、前便でハーディ夫人、N・G・クラークに、更にこの便でハーディ夫人に手紙を出したので、それも見てほしいと書く。(F2280)

十一月二十七日 松山高吉の平安教会牧師就任式が行われ、宮川経輝が新島宅に泊まる。教会合併問題について新島は

十二月二日

松山高吉の平安教会牧師就任式が行われ、宮川経輝が新島宅に泊まる。教会合併問題について新島は

慎重な態度を示す。(J 40: 83, J 71: 92)

十二月五日

夕方五時半頃より中村栄助・白藤某を招き「先夜御話シ申候事に付き」協議する。(43: 496)

十二月六日

専門学校の集会について伊東熊夫と相談、府会の終わらないうちに一度小集会を開くことにする。

(43: 498)

十二月七日

朝、浜岡光哲と会い、本年の府会の解散しないうちに集会を開くこととし、浜岡より府会議員らに相談することになる。中村栄助にも伝える。(43: 498)

十二月九日

小崎弘道に発信、教会員は自己の属する教派・組織について何も知らないこと、教会合併の前にコングリゲーションナル会の組織・来歴を教え、合併による利害得失を周知させる必要があること、そのためにデタトルのハンドブック・オブ・コングリゲーションリズムを翻訳、出版したいと思うが、その仕事を引き受けてもらえないか、と打診する。(43: 499)

十二月十日

小崎・湯浅(連名)に発信、同志社社員を増員するにつき、その内諾を求める。この日より不快、床に就く。(11日現在臥床)(43: 502, 503)

十二月十一日

綱島「佳吉」に図書購入費として九円八十銭送る。また 4 sets of Commentaries of Dr. Shaft 等の書物を送り、その費用四十一円三十銭を支払う。(43: 503)

十二月十二日

但馬の大江頼之助より詩歌二葉を送ってきたのに対し、新島も詩をもって答える。(43: 503)

十二月十四日

ベイカー夫人の寄付金から三円を大久保真次郎に贈る。(43: 503)

湯浅初子に弟の徳富健次郎のことにつき知らせる。(43: 503)

十二月十五日

東京の小室信夫より書籍類を長持ち四荷寄付され、この日、荷物が着く。(41: 295)

十二月十七日

同志社在学中の徳富健次郎、十六日夜、新島に詫び状を残して京都を出走する。新島はこの日その手紙を受け取り、再び湯浅初子に手紙を送り、健次郎の九州行きを報ずる。(全3: 503, J36: 202, J78: 18)

十二月三十一日 増野悦興に写真を送る。(全3: 505)

十二月

同志社の財務管理権がこの年末でジャパン・ミッションから社員会に移管された。(E8: 5, J69: 19) 府会出席のため在京している郡部議員をそれぞれの止宿先に訪ね、専門学校につき、これまでの尽力に感謝すると共に、今後の協力を依頼する。(全1: 198)

去る九月、中村栄助・浮田和民・新島公義の三名を明治専門学校遊説のために派遣した際、親切な取り扱いを受けた人々、とくに郡長・府会議員に新島より礼状を出す。(全1: 198)

バイカー夫人の寄付金百五十ドル(百九十五円)のうち、六十五円をミス・リチャーズに、その他は不破・金森・網島・同志社の生徒・熊本英学校等の援助のため支出する。(E932)

バイカー夫人奨学金のうち Yasuye に七・八月分二円、Suzuki に九・十月分六円五十二銭五厘、Imazumi に同く六円、Fukai に三円五十二銭五厘、Shirai に三円、Hashikano に二円、Yasuye

に二円、Okubo に七・十月分四円、Shinomura に九・十一月分十円十四銭、金森に六円を渡す。(E932)

キリスト教系女学校、欧化主義の波に乗り各地に設立される。(J97: 113)

第六章 大学設立のために

一八八八〜一八九〇年

明治二十一年（一八八八）四十六歳

一月一日

朝、同志社に行く途中、御苑内申ヶ辻付近で動悸起こり、目が眩み、一步も進めなくなる。しばらく立ち止まって休息ののち同志社に行き、新年の挨拶をして再び気分が悪くなり、夫人の乗ってきた人力車で帰宅、ベリーの診察を受ける。病状悪く、高声で話すことを禁じられる。また、この動悸は一向に治らず、永眠に至るまで全癒せず。（D14:33）

一月二日

内藤兼備よりこの日付で来信、札幌に適当な売地がある旨を知らせてくる。（F800）

一月三日

西群馬教会の松本勘十郎よりこの日付で来信、星野光多牧師が下谷教会に転出するので、その後任の推薦を依頼してくる。（F801）

一月六日

成瀬仁蔵よりこの日付で来信、新潟教会の内紛について伝え、女学校と地方伝道から手を引いて勉強一筋と決心したが、なお紛糾しているので、できるなら新潟へ来てほしい旨要請してくる。（F802）
徳富猪一郎に手紙を送り、彼の弟の「健次郎君ニハ小生等之御忠告ヲ一切耳朵ニ入レ賜ハス、九州さして御越之由」を伝える。（全3:509）

一月九日

中島末治よりこの日付で来信、北越学館の様子について知らせ、東北伝道の希望を述べる。（F803）
前橋の不破唯次郎、新島より送られた十二円五十九銭をこの日受け取る。（F805）
社員会を山本覚馬宅に開き、新島・山本覚馬・松山高吉・中村栄助が出席、社員を増員し、新たに小崎弘道・湯浅治郎・宮川経輝・大沢善助を社員に加えることに決する。（四氏承諾する）

山本・中村・松山・伊勢・新島連名で湯浅治郎に対し、同志社社員就任依頼状を送る。(43: 510, D 1: 1251, J 40: 107, J 71: 93)

福士成豊よりこの日付で来信、お雇い外国人メイク Charles S. Meik の国内旅行に同伴して、途中、京都に立ち寄りたい旨、旅行予定を知らせてくる。(F804)

不破唯次郎よりこの日付で来信、新年挨拶と送金受領の連絡。(F805)

J・D・デイヴィスに発信、長崎のオルトマンよりの手紙を同封し、ミウラへの態度を明日の教授会で決めるよう頼む。オルトマンの手紙によると長崎ミッションはミウラに対して過敏になっているので、こちらからミウラに何もしない方がよいのではないかと意見を述べる。(46: 320)

河原林義雄に発信、来る十四日に招待されたが、病気のため外出できず、代わりに金森を派遣したい、出向日は二十、二十一日頃が都合が良いことを返事する。(43: 511)

新島宅に逗留していた河井環、同志社予備校に入學し、入寮のため引き払う。「小生も此兩三日ハ少々宜しき方なり、然し多事兎角人々カ相談ニ来ラレ、或ハ文通等在之、病人ニハ少シ手あまし候」(43: 512)

河井環の父親・河井淡よりこの日付で礼状が来る。(F1560)

この日、大島正健の按手礼試験が東京で行われる。しかし他教会牧師等の勧告により組合教会がその責任を持つことになったことを、小崎弘道より知らせてくる。(F806)

同志社全校生徒ら猪狩りを行う。(43: 511)

京都府相楽郡上狛村の上狛小学校において柳沢三郎らの肝入りで専門学校の会を開く。新島病気につ

き森田久万人・加藤勇次郎を派遣する。(全1:198, 全3:512)
大沢善助、社員就任を承諾する。(F811)

不破唯次郎より、高崎教会が組合教会へ加入することに賛成してくる。(F808)

橘仁より、依頼されていた土地は手に入らない、と知らせてくる。(F813)

一月十七日

小崎弘道よりこの日付で来信、(一)大島正健の挨拶礼がこの日行われたこと
ことを了承する。ただし二十一日の社員会には在京社員三名とも欠席すること、二月上旬、神戸で開
かれる教会合併委員会には三名とも出席するので、詳細はその際に述べる、と伝えてくる。(F814)
不敵よりこの日付で、高崎教会の組合教会入会式への出席を要請してくる。(F815)

一月二十日

河原林義雄・野尻岩次郎の斡旋により北桑田郡周山村で専門学校募金の集会が開かれる。新島の代理
として新島公義・中村栄助が出席、同志社の現況、私立大学の概要、新島の教育論について演説する。
(全1:199)

一月二十二日

富士成豊、メイクを伴い来訪する。また、この日夕食後、同志社五年生を自宅に招待する。(全3:515)

一月二十三日

富士・メイクら琵琶湖疏水工事を視察する。(全3:515)

一月二十四日

午後一時より山本覚馬宅で社員会を開き、寄付、出納につき協議、大沢善助を出納責任者とする。

(全3:515, D1:1251)

岡部広よりこの日付で来信、福井の学校に外国人教師を招聘するにつき、三月、県知事が京都に行っ
た際に相談したい旨を伝えてくる。(F821)

一月二十八日

教会合併に関し小崎弘道に左のごとく意見を送る。(一)一致のスケジュールに意見を加えたかったが、

わずか一、二時間しか見ることができなかった。いづれ教会へ降ろされたときに意見を述べる (二)ア

メリカン・ボードのクラークよりの来状ではオーガニック・ユニオンは甚だ不同意であること (三)自治の精神を失うことには不賛成。わが自由を失っても合併する必要はない。(全3:517)

朝、英学校賄い方のことについて社員会を開き、中村・松山・デイヴィス・森田らと協議する。賄い方で生じた赤字は生徒より取り立てないこと、賄い方の監督は今後社員が引き受けることを決める。

(全3:516, D1:1252)

一月三十一日

コネチカット州ニュー・ロンドンの実業家J・N・ハリス Jonathan N. Harris から理化学学校設立の資金が寄付される、とのニュースが、この日、N・G・クラークからD・W・ラーネッドに送られる。

(E15:133)

朝、白藤某を区長宅に案内、紹介する。〔家売買の話か〕(全3:519)

二月二日

北海道日高、赤心社の沢茂吉よりこの日付で来信、かねて頼んでいた伝道兼聖書販売の件、東京築地の英国聖書会社より依頼状が来たので、この月より従事させることを知らせてくる。(F826)

二月三日

中村紅造よりこの日付で若松中学設立の書類を送ってくる。意見を聞きたいとのこと。(F828)

二月六日

不破唯次郎よりこの日付で、再度、高崎教会の組合教会入会式への出席を請い、その際、上毛伝道について相談したいと言ってくる。(F830)

札幌農学校の川上八三郎より卒業論文の資料にしたいので同志社創立の始末書を一部送ってほしいと言ってくる。(F831)

二月七日

保安条令(明治二十年十二月二十六日)により東京を追放になった新井毫よりこの日付で来信、上州

二月十日

に帰っていること、小室・沢辺記念文庫について説明したいことがあるので、この月、新島が上京した際、横浜で会いたいと伝えてくる。(F832)

高松葬を看病婦学校および病院の書記会計に採用したいというベリーの提案に対し、中村栄助に意見を聞く。(全3:521)

二月十二日

午前九時より新島宅で社員会を開く。(一)内外より十萬円の寄付を集めること (二)寄付募集のため新島を渡米させること、補佐役を一人付き添わせること (三)「白藤氏ノ創設セントスル病院ヲ同志社ニ属セシムルコトヲ許スコト」(D1:1253)

福士よりこの日付で来信、京都より長崎までの旅行の様子を詳しく記し、明日、東京へ帰る、と伝える。(F835)

二月十八日

相楽郡上狛村篤志者の招きで新島公義が奈良より出席して演説、篤志者は専門学校への寄付を即決する。また一月以来、新島はしばしば田中源太郎を訪い、京都府下の賛成者の募集について相談する。

(全1:193)

二月十九日

同志社の前途につき森田久万人・浮田和民・加藤勇次郎を呼び、夕方より協議する。(全3:522)

二月二十日

大阪で土倉庄三郎と会い、募金のため渡米することについて援助を求める。土倉はこれを承諾、専門学校寄付金のうち三千円を渡してくれることとなる。(全1:199)

二月二十一日

午前、小西の手代、三木正起に会う。(全1:199)

二月二十二日

三木正起が宿所の土佐堀二丁目岡本屋に来訪、一、二の有志者に面会するよう勧めるので、先約の大川町淀屋橋南詰東入の大塚磨を宮川経輝と共に訪れ、同志社への援助を頼んだのち、三木宅で西区幸

町通の田中城太郎、鳥取出身の寺島武太郎に会う。両氏とも応分の尽力を約束する。(全1: 199)

二月二十四日

二月二十五日

同志社の英語神学生一名、普通科五年生二名が校則違反のため一週間の禁足処分を受ける。(全1: 296)
原六郎と土倉富子の結婚式が北垣知事の媒酌により、京都中村楼において行われ、新島がその司式を
する。(全3: 530, 全10: 331, 19—a)

二月二十七日

中村栄助に手紙を送り、「白藤より末タ弥自己之名義(同志社ノ名義ニヨラス)ニ而病院を被設候哉、
末タ確答無之候、然し先日申置候様ニ相成候外、別ニ良工夫ハ無之事と奉存候」(全3: 522)
社員加入届を新島代理・加藤寿名義で府庁に差し出す。新たに社員となったのは小崎弘道・宮川経
輝・湯浅治郎・大沢善助の四名。(全1: 298, D37)

山本覚馬宅で午後七時より社員会が開かれ、新島も出席する。(一)新島の渡米に際して金森が同行する

(二)渡米費用は土倉庄三郎より借用する、等を決定する。(D1: 1233)

本郷金助町講義所の伊勢時雄より来信、新島渡米に際して随行者は、自分より金森が適當であると言
ふ。(F840)

二月二十九日

月興三郎らが嘆願書を提出する。(F842, F843)

二月

組合会両会聯合相談委員に対し教会合併問題についての意見を述べる。その中で「此ノ一挙我カ将来
ノ教会ノ進歩如何ニ大關係を有スヘキ」ものであるとし、五項目を挙げて合併に反対、「今回ノ聯合
ニヨリ他日各会カ自治ノ權利ヲ剝脱滅殺セラレ此ノ自由ヲ屈ケ此ノ義旗ヲ捲クニ至ラハ小弟ハ他ノ方
向ヲ取ル能ハス只此ハ自由此ノ義旗ト去就ヲ共ニセンハミ」と記す。(全3: 523)

三月一日

この月、大隈重信を訪問する。(J61:18)
岡崎高厚を訪問して専門学校の募金について一層の尽力を依頼する。(全1:199)
伊東熊夫に手紙を送り、綴喜・紀伊二郡の専門学校の集会を開くよう要請する。

新島公義に発信、「御老母ニも替る事不被在候八重ハ少々疲労セリ小生ハ少し宜しき方なり又々米国行之企を起し居候、是レハ同志社本校之為ニも資本ヲ募ルノ目的ナリ」(全3:529)

三月二日

徳富猪一郎に発信、資料を送るから「専門校必要之点充分御論シ被下度候」と依頼する。(全3:530)
夜、金森・浮田が来訪する。「新島宅で教員会が」(T827)

三月三日

この日発行された『国民之友』第十七号に「福沢諭吉君と新島襄君」が掲載される。(15-a)
午後五時より山本覚馬宅で社員会を開く。(一)新島の病気を心配するベリーはじめ諸宣教師の申し入れを受け、新島の渡米を中止する (二)社友を募り、年々寄付金を募集すること、また従来の一銭講を拡大して専門学校義捐金募集に尽力すること。(D1:1254)

金森は高崎教会加入式への出席と高等中学調査のため上京の途中、山城丸の船中より新島宛に発信、宣教師はボードから五万ドルを得ることで満足しているようだが、高等中学校を設置するには十五ないし二十万ドルは必要であり、それが得られないなら大金を出して渡米する必要はない、と述べる。

(T827)

デイヴィスとラーネッド連名でN・G・クラークにアメリカおよび日本での募金計画について手紙を書へ。(全6:321)

松平容大の校則違反処分につき別科神学生三十三名より嘆願書が出される。(上85)

三月四日

徳富に発信、明治専門学校の記事の大略を送ったこと、明治専門学校設立旨趣、同志社設立の始末等は今回、金森に持参させたこと、山本と新島が発起人になっているけれども、京都府下の有志者も同様に心配していることを記し、「今回ハタツテ貴兄之御心配ヲ勞シ吾人平素之大望ヲ貫徹致度候間、畢生ノ御尽力ト雄文ヲ以テ天下志士之心ヲ御動カシ被下度奉祈候」と述べる。(43:531)

N・G・クラークに発信、確固たるキリスト教主義の大学を作り、また学生を引き止めておくには(入学時百名の生徒が卒業時には十―十五名になる)より優秀な教師を雇い、より高い教育レベルにしなければいけない。同志社は兵役免除もなく、良い生徒は現在の教育レベルに満足していないので、このままでは明年一月京都にできる帝国大学に対抗できない。良い教師、高い教育のためには資金が必要であるが、国内では多くを望めないで、二名の代表をアメリカに派遣し、寄付を募ることが社員会で承認された。これにつき返事をいただきたい。返事が到着次第、代表を派遣し、健康が許せば新島がその一人になる、と述べる。(46:322)

三池集治監佐藤某、同志社女学校に入学する娘を連れて、この日、来訪する。(F1616)
大阪の三木正起より、この日付で、書類五十部を受け取った旨の連絡が来る。(F847)

三月五日

京都よりハーディ夫人に発信、教会の近況や先週行われた原六郎の結婚式の様子などについて書く。

(46:326)

J・C・ベリーよりこの日付で来信、皆の言うことを聞いて向こう三カ月休み、療養してほしい、と書いてくる。(F2600)

三月六日

原田助来訪、イェール大学に留学することを報告する。(J15:62)

三月七日

高崎教会、組合教会に加入する。(T840)

徳富猪一郎に発信、大学募金に關し、七万円募集は十七年頃のことであり、現在では少なくとも十万円を募集しなければならない、と記す。更に「小生一月以来心臓之加減宜シカラス、ベレー医師ハ予之米国行ハ予自殺ノ策ナリト被申相拒ミ呉レ候得共今回生死ニ関ハラス是非一撃ヲ試ミ度存居候、何レ出發ハ六月中カ七月早々タルヘシト存候」と記す。(H3:533)

大阪に行く。(H3:534)

原六郎よりこの日付で来信、在京中の礼を述べ、スタンダード夫人に送った品物の代価を問い合わせる。(T849)

三月八日

土倉庄三郎と神戸に行き、布引の川崎正蔵の別荘に滞在中の井上馨に面会、専門学校への協力を依頼する。井上より四月に京都へ行くので、その際ゆっくり面談するとの約束を得る。(H1:200)

新島より米国行きを決心を聞いた徳富からこの日付で来信、大学募金のため井上馨・陸奥宗光・青木周蔵・大隈重信らの有力者の協力が必要であること、とくに和歌山に帰省中の陸奥は「我邦ノチャンホーレン其人ナレバ」一度面会して依頼するように勧める。(T850)

三月九日

神戸より夕方帰宅する。(H3:534)

三月十日

中村栄助に発信、「小生ハテローロノ命ニヨリ当分二ヶ月程ハアマリ外出不相成候」と記す。(H3:534)

『東雲新聞』は「当地の同志社ハ近々の内高等中学校相当の位置に進めらるゝとのことなり又た明治専門学校ハ来る二十三年一月を以て創立するやの噂あり」と報ずる。(I9-b)

三月十一日

金森よりこの日付で来信、東京の五大新聞を招いて懇親会を開き、同志社将来の目的および専門校について応援を依頼しては如何と、徳富より勧められていること、開催の是非について新島の意見を伺う。(T853)

三月十三日

夕方、中村栄助を招き、専門学校集会につき相談する。(全3:535)

三月十四日

ロンドンのモートンに、同志社への寄付を要請する。(全5:204)

三月十六日

『国民之友』第十八号時事欄に「私立大学」のタイトルで新島の明治専門学校設立計画を紹介する。(15-b)

三月十九日

金森、在京五大新聞(毎日・報知・朝野・時事・日報)の記者に面会し、同志社の拡張、大学の設立について協力を依頼する。(T854)

ハーディ夫人、バイカー夫人より各手紙を受け取る。ハーディ夫人よりは故ハーディ氏の「遺志ノwillノ贈物」を、バイカー夫人よりは日本伝道のため三百ドルを送る旨通知される。なお、バイカー夫人の寄付金はハーディ夫人を通じて送られる。(全5:205)

陸奥宗光が和歌山・伊勢旅行の帰りに京都に立ち寄り、新島を訪問する。陸奥に大学のことを話して賛成を求め、尽力を願ったところ、五百円の寄付を約束する。(全1:200)

* 徳富宛書簡中に「過日陸奥氏京都迄態々参リ吳殆半日間話シ吳候、其節幸ニ専門校募集之義折入而相頼申候処承諾致シ吳候様、且井上伯京都ニ来ラハ再会ノ上熱談スヘキ旨被申候」とある。(全3:54)

京都区部の理事委員を京都「仮」倶楽部に召集して専門学校募金の方法につき相談する。現在の委員になお数名の委員を加え、各自手分けして広く区内の財産家に働きかけることを計画する。(全1:200)

三月二十日

三月二十一日

この夜、東京の有力新聞・雑誌の代表者十一名（日報・報知・朝野・毎日・時事・公論・教育報知・教育時論・学海ノ指針・国民之友）を富士見軒に招待して懇親会を開く。同志社側より金森・小崎らが出席。金森より同志社の現状、将来の目的等を演説、専門学校設立についての協力を求める。（抄

1 : 200, F860, F862)

富士よりこの日付で来信、この日東京を發つて札幌に帰ること。（F858）

三月二十二日

徳富よりこの日付で来信、昨夜の金森の演説の大意および同志社設立の始末、専門学校設立の趣意の概略を、『国民之友』の付録（四月六日号）として刊行しては如何と勧める。（F863）

宮川経輝よりこの日付で、四月三日に大阪教会新会堂の奉堂式を行うので、説教をしてほしいと要請しつゝくる。（F861）

三月二十三日

新島・山本連名で北垣知事・竹村藤兵衛下京区长・杉浦利貞上京区长ら十七名に、去る三月二十日集会の決議による案内状を出し、来る二十七日午後四時、京都倶楽部において明治専門学校について協議したい旨を通知する。（全1 : 207）

市街地において牛豚の飼育を禁止する内務省の布達に対し、牛乳を必要とする外国人宣教師のため、牛小屋を検査のうゑ乳牛飼育を許可してほしい旨、新島より府庁に願ひ出る。〔後日不許可〕（上281, 上282）

三月二十四日

徳富より、大学設立運動を「プロウキンシアルニあらすしてナショナルニ致度」校名も「明治専門学校ノ名ヨリモ一層明快ニ同志社大学と致候方可然……同志社ノ名天下ニ高ク之ヲ以テ大学ニ冠スル万

人ノ満足スル所と存候」とこの日付の手紙で述べてくる。(F864)

朝野新聞が明治専門学校の募金につき記事を掲載する。ただし募金額は七万円と書く。(43:541)

不破唯次郎よりこの日付で「福岡教会の」大神範造の永眠を知らせてくる。(F863)

三月二十五日
北垣知事に一書を送り、今夕もう一度面会して、専門学校のことにつき一、二追加して相談したいこと、あわせて英学校の由来一通を届けるので、読んでほしいと伝える。(43:542)

徳富に発信、先日東京五大新聞・雑誌社代表の会合、および『国民之友』付録記事につき礼を述べ、更に過日、陸奥宗光が来訪した際、専門校への援助を依頼したことを知らせる。(43:543)

三月二十六日
北垣知事来訪、明日の集会につき相談する。新島より尾越・森本両書記官の出席をも希望、北垣より兩人に勧めてもらう。(43:546)

石黒福井県知事よりこの日付で、かねて依頼していた中学校の外国人教師の雇入れは、渡辺洪基の紹介で採用したことを通知してくる。(F865)

三月二十七日
北垣知事に手紙を書き、重ねて専門学校のため尽力を依頼する。「本日御配慮ニ可預専門校寄付金約束高ハ九千二百六拾円五拾銭ニシテ入金ハ僅ニ壹千二百九拾七円五拾銭ノミニ有之、前途甚悠々之歎ナキ能ハサルモ、此レモ亦信仰ノ仕事ニ有之決而落胆ハ不仕……」と述べる。(43:546)

京都仮倶楽部において明治専門学校の相談会を開く。出席者十九名、午後六時頃より協議を始め、次のことを決める。(一)出席者全員が理事委員となり、募金に尽力すること (二)理事委員は分担して賛成家を募り、かつ両区長は次回の集会までに府下有志者、財産家の姓名を調べること (三)京都府区部に
おいて三万円を募集すること (四)次回は四月五日午後六時に集まること。また、この集会で新島の米

国での募金計画が発表される。更に北垣知事より三百円寄付することが表明せられ、寄付金募集簿に記載される。(全1:208, 全3:540)

熊本の高老名弾正に手紙を送り「貴兄御企之私学校皇張ノ為……五十円」を送る。(全3:545)

三月二十八日

北垣知事より中村栄助を通じ専門校寄付金三百円を渡される。(全1:212)

三月二十九日

徳富猪一郎に発信、陸奥宗光に彼が米国に赴任する前に「東京ニ於テ井上伯と協議ノ上専門校ノ為ニ五万円ノ工風致シ呉ト折入テ」頼んでおいたので、徳富からも十分、陸奥に働きかけてほしいと頼む。

(全3:547)

綴喜郡の喜多川孝経・奥繁三郎・田宮勇・伊東熊夫の四氏にそれぞれ依頼状を出し、専門学校のため集会を開くよう頼む。〔三十・三十一日付で発信か〕(全1:212, 全3:548, F867)

春、愛媛県卯之町の末光頼太郎・末光平十郎・清水伴三郎・清水徳太郎・古谷久綱ら東京遊学を志し、上京の途次、京都東洞院の湯浅旅館に一泊、旅館の主人より同志社のことを聞き新島に面会、東京遊学を断念して、同志社に入学する。(J8:30, J103:39)

* (H2:842)では明治十九年三月のこととしてゐる。

四月二日

徳富猪一郎よりこの日付で来信、大学設立につき新島に代わって陸奥宗光に協力を求めることを承諾する。更に「東京到る処同志社大学の評判アリ……一刻寸時モ速ニ御上京」して運動するように勧める。また徳富は金森にも発信、「同志社の評判到ル所ニアリ」「一呼吸ツカス……折角生シタル蒸気ヲ冷し度ナキ事」と思うので早々に新島を上京させるよう促す。(F868)

四月三日

徳富、陸奥との会談の結果を電報で知らせてくる。(F870)

京都府下有志者に五日に開かれる明治専門学校集会の案内状を出す。(43:59)

四月四日

徳富猪一郎より、陸奥宗光との会談が上首尾に運んだことについて、その詳細をこの日付で知らせてく。(1870)

四月五日

明治専門学校開設に関し京都倶楽部において午後六時より会合を開く。参会者十七名。(一)三年間で三万円募集すること (二)納金は第一、第百十一、商工銀行の三銀行において取り扱うこと (三)寄付金高は五百円より十円まで十三段階に分けること 四七人の調査委員を選び、その調査に基づき大会を開くこと、を定める。(41:215)

四月六日

北垣知事に面会し、大会開催について相談する。(41:217)

『国民之友』第十九号が刊行され、論説「人民の手に依りて成立する大学」および付録特別寄書に金森通倫「同志社の規模及其目的」が掲載される。(15-c)

四月七日

奈良伝道中の新島公義よりこの日付で来信、新島が大学募金のため渡米することは「蓋シ生死ニモ関係スベキ乎……命ヲ失ハネバ専門大学ハ出来ヌモノカ、又命ヲ失ハバ果シテ廿三年ニ出来ベキカサ程ニ急速ニスベキモノカ……今ハ太平洋ニ命ヲ投ズルノ秋ニ非ズ」とアメリカ行きに反対してくる。

(1872)

明治専門学校調査委員が、午後、織殿に集まり、京都府下の寄付を勧誘すべき人々の姓名・人員を調べる。北垣知事もこの会に出席、激励する。なお、大集会の日時は十二日午後三時とし、場所は知恩院山内の大広間を借り受けることにする。(41:217)

この朝、富田鉄之助は井上顧問官を訪問して新島の学校について内話する。(190:266)

四月八日

四月九日

知恩院で明治専門学校の集会を開くことにつき、午後六時より河原町三条上ル京都倶楽部において委員の相談会を開き、役割分担、特別招待者などを決める。(全1: 217, 全3: 551)

午前十時、知恩院借用の相談がまとまった旨、内實甚三郎より連絡がある。(全1: 221)

新井毫よりこの日付で来信、専門学校に対する援助、記念文庫および自分にまつわる風聞などについて記す。(F873)

四月十日

医師十五名を理事委員に加える。大沢敬之に理事委員を委嘱する。また郡部常置委員五名および大会開催を知らない有志者十名に特別招待状を出す。(全1: 222)

望月興三郎より、知恩院で配布する予定の印刷物は当日でないとできないので、直接会場へ届けたい、と伝えてくる。(F874)

四月十一日

同志社教員に手紙を送り「此度之教員会ニハ何卒副校長二名 外人名、内国人名 御投票之御心組ニ而御出席被下度候、又明十二日午後一時ヲ期し知恩院山内 大坐敷ナリ ニ於而大集会ヲ催し専門校之為ニ相計可申候間御臨席被下度奉希望也」(全3: 554)

浄土宗信徒数十名が知恩院へ行き、キリスト教大學を設立するための集会に場所を貸すことに反対し、執事にその取り消しを要求する。彼らはまた寺町四条下ル浄教寺で会合を開いていた各宗管長らにも訴える。知恩院側は「……如何にも明日席を貸すは不都合なり然れども府知事の依頼止を得ず且既に明日の集会に付ては先方にも夫々準備を為したるなれば今に及んで俄に之を断れば必ず先方にも狼狽する事ならん仏門の徳義に対しても忍びざる訳なり……」と説得する。また僧侶・信徒代表らは北垣知事の私邸に行き、今回の貸席が知事の紹介によるものか否かを詰問し、怨み言を述べて帰る。(全

四月十二日

1: 224)

明治専門学校設立につき、午後三時より知恩院において大集会を催す。理事委員・北垣知事・府會議員・両区長・府内有志家ら六百五十人が出席する。新島はこの席で「私立大学ヲ設立スルノ旨意、京都府民ニ告ク」と題して演説し、広く協力を求める。浮田和民・金森通倫も旨趣を分担して演説、北垣知事も賛成の演説を行い、午後五時半散会する。

新島は演説中、明治十七年以来、大学資金として七万円を要すると言ってきたが、今は少なくとも十万円以上を要する、と述べる。(全1: 123, 227, 全5: 415, 15—d)

四月十三日

夜、京都倶楽部において明治専門学校設立の相談会を開く。理事委員に就任を承諾した人々が数十人に上り、事務上かえって不都合なので、高木文平・内貴甚三郎・青山長祐・大沢敬之・中井三郎兵衛・吉川吉兵衛・雨森菊太郎の七名を理事委員とし、専任理事と協議して事務を分担することに決める。(全1: 227)

四月十四日

中外電報社の雨森菊太郎に書面で明治専門学校への賛助を求める。(全3: 556)

J・C・ペリーよりこの日付で来信、乗馬などの軽い運動をした方が良いと勧めてくる。(F2605)

四月十六日

京都を出発、神戸より相模丸に乗り、横浜に向かう。(全1: 228, 全5: 299, 415)

四月十七日

夜八時半、横浜着、和田彦に入る。(全5: 299)

中村栄助に発信、二十二日に綴喜郡田辺で専門学校の集会を開く予定であるが、前日の土曜日より何人かを派遣するように依頼する。(全3: 558)

徳富に宛て横浜に到着したこと、明朝上京することを知らせる。(全3: 558)

四月十八日

早朝、原六郎に発信、一番の汽車で上京し湯浅治郎・陸奥宗光・富田鉄之助を順次訪問、九時すぎ再び陸奥を訪ね、ただちに「井上馨」伯爵邸を訪問、挨拶する。それより湯浅宅へ行き、徳富らに面会、その夜は榎坂の徳富方に泊まる。(全5:299)

中村栄助に発信、「昨日海上ニ而相認候書中ニ専任理事之集会并晚餐等之事申上候得共……無理ニ集会を開くに及ハす、尤必要なる時を見テ御催し被下……」と伝える。(全3:559)

『東雲新聞』七十四号紙上に明治専門学校についての論説が出る。「吾人が私立学校ヲ幫助スル所以ノモノハ……政府偏傾ノ教育ハ遂ニ日本社会ノ智徳ヲ全備スルニ足ラズ且ツ教育ノ事ハ政府ノ党派心畏懼心ニ一任スル事能ハザル」ためである。しかし明治専門学校が「基督教弘通ノ一手段」となりはしないかについての杞憂を表明する。「明治専門学校ノ寄付金ハ……広ク世間ノ有志者ニ募集スルモノナレバ……基督教ノ道場トナサズ各種ノ主義ヲ此ノ専門校中ニ格闘セシメ」るべきである、と論ずる。(19-c)

四月十九日

湯浅の幹旋により麻布仲之町二十番地の栗津^{りづ}寿方^{こと}の二階を借り受け、止宿する。(全5:300)

四月二十日

ベルツの診断を受けるため森有礼を訪問、紹介を頼む。(全5:300)

四月二十一日

陸奥宗光を訪問、そこで児玉仲児・長坂長輔・後藤象二郎ら政界人に会う。陸奥に朝日新聞の村山竜平との面会の幹旋を頼む。(全5:300)

四月二十二日

橋本綱常陸軍軍医「総監」の診察を受ける。「診甚悪シ、胃ニ水氣多シ、診ノ悪キ割ニ身体ノ挙動ハアシカラス、甚解シ難キ理由ナリ」(全5:300)

午後二時、鳥居坂の井上伯爵邸で明治専門学校設立に関する会合が開かれ、井上はじめ青木周蔵・陸

奥宗光・沖守固・野村靖・渋沢栄一・原六郎・益田孝らが出席する。質疑応答を続けるうち、新島は脳貧血を起こして席を退き、橋本軍医の手当てを受けたのち、馬車で粟津方に帰る。富田鉄之助が見舞いに来る。(全3: 585, 全5: 300, 415, D26: 2, 22, 24, J 23: 90, J 90: 266)

金森と新島公義は綴喜郡新村で開かれた懇親会に出席し、明治専門学校について演説する。奥繁三郎・喜多川孝経の両名は種々尽力し、募金も引き受ける。賛成者が多数出る。(全1: 228)

四月二十三日

ベルツ、難波一両医師の来診を受ける。夜、難波医師の弟子長岡徳之丞が来て手当てをする。なお難波医師は、以後五月四日まで、毎日来診する。(全3: 586, 全5: 301)

富田鉄之助が見舞いに来る。同氏、夜再び見舞いに来るが、会わずに帰る。夕方より快方に向かう。(J 90: 266)

四月二十四日

病気療養中につき徳富を井上邸に訪問させ、先日の会合の模様を伺わせる。これに対し井上より三万円の寄付を引き受ける旨の伝言を伝える。(全5: 302)

四月二十五日

この日一日の尿を採取し、芝区西ノ久保巴町の難波医師に届ける。(全5: 302)

四月二十六日

京都の夫人および中村栄助より来信、それに対する返書を出す。(全5: 302)

四月二十八日

午前中に井上・益田、午後に陸奥がそれぞれ見舞いに訪れる。内務参事官長田銈太郎が子息の入学のことについて来訪する。また東華学校の市原盛宏が上京してくる。(全5: 302)

四月二十九日

午前、橋本軍医が来診。「胃ヨロシカラス」午後、富田鉄之助・市原盛宏の二人が東華学校のことにつき相談に来る。

京都の夫人・中村栄助・金森通倫・松山高吉より来信。(全5: 303, J 90: 266)

四月三十日

四月

五月一日

五月二日

五月三日

中村栄助に手紙を書く。(一)二十三日付の手紙を受け取ったこと (二)陸奥・井上の周旋により募金に好結果が期待できること (三)病氣は橋本軍医とベルツの診断を受けていること (四)北垣知事にもこの日手紙を出したこと (五)伏見通のこと、女学校改革のことは任せる、と伝える。(H3: 567)

また金森通倫にも、生徒指導に「御工風有之度」と書き、末筆に「療養中ソバは一切行はれず大閉口なり、府下に於て同志社の信用甚よろしく」と記す。(H4: 363)

北垣国道・八重夫人・中村栄助・金森通倫・原六郎に発信。市原盛宏、仙台に帰る。原六郎・富子夫妻は陸奥宗光を訪ねて新島の宿を聞くが、病氣療養中と聞き、来訪せず。(H5: 304)

明治専門学校の寄付金は明治十七年六月よりこの月に至るまでで約一万円に達する。(H1: 133)

沢沢栄一・益田孝・青木周蔵の三氏に礼状を出す。白木「麻生」正蔵・丹羽清次郎が来訪する。(H5: 304)

沖守固に礼状を出す。不破唯次郎・清子夫妻が来訪、昼食を共にする。夕方、人見一太郎が来る。

(全5: 304)

沢沢栄一よりこの日付で来信、陸奥宗光・井上馨の依頼により明治専門学校設立については応分の援助をする覚悟である旨を伝える。(F3179)

井上馨が名古屋に出張することを伝え聞き、同地の有志家に「智徳併行之教育主義并ニ該校設置之必要なる事等程宜く御談置被下、小生出張之端緒を御開らき置被下候へ、」好都合、と書き送る。ただし書簡は井上出發後届けられる。(全3: 563)

陸奥宗光の紹介により大阪朝日新聞社長の村山竜平が来訪する。夕方より小崎・伊勢・湯浅・徳富の

五月四日

四名が来て伝道上の相談をする。(445:305)
辻新次文部次官より工科大学で開かれる大日本教育総会に招待される。(445:304)

五月六日

徳富と共に陸奥宗光を訪問、駐米公使として赴任する陸奥の送別会を鹿鳴館で開くことにつき承諾を得る。この日より看護婦・井上石女を雇う。(445:305)

五月八日

三好退蔵よりこの日付で来信、学校資金云々について委細承知した旨を連絡してくる。(F800)
土倉庄三郎の娘の結婚問題につき、この日一書を送り、「校長之身として右結婚之世話ハ余リ宜しからずと申上候得共、少々考ふる所あり……」として結婚問題について意見を述べる。(443:564)

午後、麻布仲之町粟津方より、ベルツの診察を受けるのに好都合な、東京大学に近い駒込西片町十番地の木村熊二方に移転する。その際、民友社の人見一太郎はじめ丹羽・白木・兼頭和策らの世話にな
る。(443:568, 445:305)

五月九日

徳富に手紙を送り、陸奥宗光を訪問する途中、駒込西片町の木村熊二方に立ち寄るよう伝える。また
栃木県佐野の旧友・多田新に同志社の目的を掲載した『国民之友』を送るよう依頼する。(443:566)
ベルツの診察を受ける。「別ニ悪し〔き〕方ニ無之先ツ当分休養すへしと被申候、夜間も随分安眠候」
(443:567, 445:305)

徳富よりこの日付で来信、渡米する陸奥宗光の送別会を十八日午後六時より鹿鳴館で行うことが決ま
った旨を報告してくる。招待者は陸奥のほか井上馨・渋沢栄一・野村靖・青木周蔵・三好退蔵の諸氏、
同志社側より新島・徳富・湯浅・小崎・伊勢の予定。なお文中に「新島先生ハテンポランス主義ノ人
ナレハ若シ陸奥君ニして酒杯を把ル事ナクして相済ハ無此上大幸ト申置候右ハ氣ノ毒ノ様ニテ有之候

五月十日

しも尋常ノ宴会ニて無之我党清浄派ノ事ナレハ遠慮ナク申入置候」といふ。(全5:305、T881)
 半晴、徳富に手紙を書き、陸奥宗光送別会のことを一任する。また「別紙大隈公エ之書面御足勞奉仰上候」と記す。(全3:567)

人力車により上野付近に外出する。夕方、後藤・藤枝・白木・丹羽・兼頭・伊勢の六名が来訪する。
 (全5:305)

五月十一日

雨、朝、星野光多が西片町の仮寓に来訪。「上毛全体ニ関スル伝道教育上ノ事ヨリ西群馬教会公認ノ事ヲ謀ル」(J21:187)

土倉庄三郎に手紙を書き自分の病氣は「早ヤ心臟病ニ相違無之、早晚小生ハ此之病之為ニ斃るへきハ覚悟せねばならざる由……生熟考するに寧ロ戦地ニ在而一步も退かざるは平素戦士之心得たるべし」と述べ、次のごとく記す。

(一)同志社の将来につき社則を固くし校資を積み、専門校設立の後継者も用意していること。

(二)心に残るのは夫人のことであり、このためマッチ用材を植林して「家妻万一之用ニ供し置」きたい
 177。(全3:568)

五月十二日

晴風、白木・丹羽が芍薬の花を持って見舞いに来る。植木園「小石川植物園か」まで七、八丁の距離を一緒に散歩する。井上権之助・岩沢光耀・富田鉄之助が来訪する。(全5:306)

五月十三日

新島公義に発信、病状と募金について述べ、「今回着京後益関東之伝道ニ注意し両毛を連合スルノ策を吐露し、又新潟県下伝道皇張之計画を為したり」と記す。(全3:571)

徳富に一書を送り、鹿鳴館で催される「送別宴ニ酒を省クノ事ハ已ニ陸奥君迄一書を呈し謝し置候」

と書へ。(全3: 573)

新島公義・徳富猪一郎宛書簡中に次の漢詩を記す。

借大籌期掃邦土 十年計画未休神 一朝臥病天恩沢 枉使吾成閑散身

また 今人若流水 古哲去難帰 古今道一轍 須期再会時 (全3: 571, 573)

大隈外相より、明十五日午後四時ごろ来訪するように、徳富を通じて通知される。新島より折り返し、承知の旨を徳富に返事する。必要なら大隈にその旨を知らせてほしいと頼む。(全3: 575, F882)

森為国が見舞いに来る。北村芳太郎(福島的第一銀行支配人)のことについて渋沢栄一に書簡を送る。

綱島佳吉来京する。(全5: 307)

五月十五日 本郷の木村熊二方より麻布の栗津方に戻る。午後、大隈を訪問する。(全3: 575, 586, 全5: 307)

夜、眠ること三、四時間に過ぎず、この状態は十八日まで続く。(全5: 309)

五月十六日 大隈に書簡を送り、大学募金への協力を依頼、「大隈伯ニハ大分思ヒキリタル書面差シ出シ置キ申候」

(全3: 575)

芝二本榎の木村熊二に手紙を送り、西片町(木村持家)滞在中の礼を述べる。(全5: 307)

土倉庄三郎に手紙を書き、「先日……余り必死を窮たる兵士之如き口上を申上候間」心配しすぎはないかと今一応の心境を述べ、「身ハ矢張戦場ニ置き而して戦場ニ仮設したる病院ニ置き遙ニ砲声を聞居ながら休息加養致すべく候間、余り小生之為御心配ニ過ぎざる様奉希望」と記す。(全3: 576)

去る十六日に帰国した内村鑑三に「一書ヲ遣ス」。午後、徳富・人見と共に水戸出身の朝比奈知泉が来訪する。(全5: 307, J 82: 291)

五月十八日

* 内村は十七、八日、新島を訪問したようである。内村は「I met Neeima once. He is still quite weak.」と六月十九日付でアーモストのシーリー総長に宛て手紙を書いてゐる。(J82:283)

午後五時、陸奥宗光の送別宴を鹿鳴館において催す。夜、陸奥を訪問するが、陸奥疲労のため面会できつた。(F3158)

この日発行の『国民之友』第二十三号に「私立大学ヲ設立スルノ旨意、京都府民ニ告ク」が掲載される。(全3:577, 全5:308)

五月十九日

昨夜の会合費用を徳富に届け、この日は朝食後「再と寝ニ就クヘシ……若し目醒候ハ、一応拝晤を得度……人力車を差上御送迎仕候」と記す。(全3:577)

陸奥より、昨晚面会できなかったことを謝し、明二十日拝眉したい旨、この日通知してゐる。(F3158) 横浜に行き、原六郎に洋菓子贈る。(全5:308)

五月二十日

徳富来訪、渡米する陸奥宗光を見送るため、共にオシアニク号に行く。(全3:580, 全5:308) 原六郎を訪問、「テフエンヲ喰ス」。夜、瀬川・留岡・吉岡の三人と会う。(全5:308)

五月二十一日

午前、横浜を出発、藤沢を経て鎌倉に行き三ツ橋与八方に投宿する。夜、呼吸困難となり眠れず。渋沢栄一に発信。(全3:586, 全5:308)

中村栄助に発信、十九日に井上馨が京都に向かったことを新聞で読み、この機を逃さず京都・大阪募金に就いて働きかけるよう要請する。(全3:578)

徳富に発信、募金に関する事項および東京滞在中の医師・宿所等の謝礼について細目を知らせる。(全3:580)

五月二十二日

富田鉄之助の鎌倉での滞在先を訪ねる。同所で「病ノ容易ナラサルニヨリ、妻君ニハ予ヲ止メ……医師ヲ招キ診察セシム、容体甚宜シカラス」富田夫妻の看護を受けて一泊する。十五日頃より不眠続きのところ、この夜は八時間眠る。二十四日朝まで同所で手厚い配慮を受けて休養する。(45:308)

一致教会の臨時大会が東京築地新栄教会で開かれ、「日本基督教会憲法並細則附録」を可決、各個教会に配布する。(J5:67, J22-2:19, 26)

五月二十三日

終日雨降る。病状は少し回復するが、なお富田の世話になり休養する。(45:309)

日本組合教会第三回総会が二十五日まで大阪教会で開かれる。「日本基督教会憲法並細則附録」について報告が行われ、六カ月後に臨時総会を開いて議決することを決定。(F4:211)

森田思軒は徳富に手紙を送り、その文中にいう。「新島先輩の寄書を奉読して深く感じ申候。其感ぜる故を自ら求むるに、寄書の精神唯だ一の赤誠に出でたるに由ると考候」(J59-1:213)

五月二十四日

晴、午後、海浜院に入院する。西洋風の居心地のよい部屋で気に入る。この夜熟睡する。この日より

「漫遊記」を書き始める。(45:386)

金森通倫より手紙が来る。アメリカン・ボードより五万ドルの寄付および新島の渡米の差し止めを知して来た旨を知らせる。(41:134, 43:382)

日本基督伝道会社創立十年紀の祝会が大阪青年会館で開かれる。(F2:11)

徳富に発信、(一)海浜院に入院したこと、おりよく富田の家族も鎌倉滞在中で好都合であること (二)金森から米国より五万ドルの寄付を知らせてきたこと、米国行きはとりあえず中止すること (三)渋沢栄一に本日書簡を送り、同志社のことは徳富と交渉してほしいと頼んでおいたので、「程よく御吹込置

被下」と記す。(全3: 583)

富田の知らせを受け、徳富が看護婦・井上石女を伴って海浜院に来る。これは入院した新島の看護をする者がいないことを心配した富田の配慮による。徳富に大隈・青木・渋沢に面会するよう頼む。

(全3: 584, 全5: 336)

この日、井上馨、同志社に来校、男子校・女子校・看病婦学校を一巡のうえ、礼拝堂において演説する。(D3: 24)

五月二十六日
海浜院に入院中、たびたび富田の寄寓先へ遊びに行き、富田の家族も海浜院へ見舞いに来る。(全5: 337)

五月二十七日
三木正起よりこの日付で来信、面会謝絶のところ特に面会したいと言ってくる。(T883)
鎌倉光明寺宝蔵を見物する。(全5: 337)

五月二十八日
この日、八重夫人は新島が病氣と聞き心配、問い合わせの手紙を出す。(全3: 585)
雨、北垣知事を通じて井上馨に手紙を送り、大阪方面の募金の援助を依頼する。徳富より来簡。新島、

アメリカよりの来状写しを徳富に送る。(全3: 583, 584, 全5: 337)

杉山重義に手紙を送り、庄内に創立される学校に就任するのは、結論を急がず、十分に先方の事情を調べてからにするよう忠告する。(全3: 584)

群馬県碓氷郡土塩村^{はしお}の上原権太郎よりこの日付で来信、明治専門学校につき知恩院で行った新島の演説を新聞で読んで感激、五十円の寄付を申し入れてくる。(T885)

滋賀県草津の高田恒之助、同志社在学中のところ、病氣のためこの二十六日死亡、遺言により同人の

五月二十九日

蔵書を売却して得た金十円を明治専門学校設立資金として、遺族高田義甫より寄贈してくる。(F884)
午後、富田の家族が帰京する。この日より胃にエレキをかける。杉山・市原・斉藤・田中に手紙を出す。(全5:338)

五月三十日

八重夫人に手紙を出す。(全3:585)
午前と午後、散歩する。中村・加藤・内村より来書。三ッ橋に勘定(八十三銭八厘、一円渡す)する。(全5:338)

五月三十一日

八重夫人に手紙を書き、上京以来の経過を伝え、鎌倉の海浜院で療養していることを伝える。それに関連して、あまり大げさに心配して重病との評判がたつと専門学校賛成者が減少するので、なるべく内々しておくように注意する。さらに井上伯にはひとかたならぬ世話になったので、大阪か東京にある井上伯にお礼に参上かたがた、鎌倉に来ては如何と勧める。(全3:585, 587)

青木周蔵に手紙を送る。徳富より渋沢栄一に面会のことにつき来状、中島力造・下村孝太郎・内村鑑三・八重夫人より手紙が来る。午後、八幡宮前まで十五、六丁散歩、人力車で帰る。(全5:338)

六月一日

半晴、この一兩日十四、五丁くらい運動する。八重夫人・ラーネッド・富永冬樹より来信、八重夫人・富田・徳富・和田彦に発信。(全3:587, 全5:339)

六月二日

晴、同志社五年生より病氣見舞いの手紙が来る。富永・渋沢・加藤に発信。(全3:589, 全5:339)

六月三日

安息日、徳富に発信、井上・大隈両伯の所在を聞き、東京大会の日程について相談する。「大会之期ハイツ比ニすへきや此ノ九日比ニしてハ如何……小生も少々宜しく候間、何時なり共帰京可仕候」東京より看病人岩上エン子、島謹来院する。(全3:588, 全5:339)

六月四日

同志社五年生に発信、病気は「逐日宜しき方に赴き一日に大概五十匁位の重量を増加」していること、近日、東京において「専門校之為一大会を可開計画ニ候、何分其後ニ至ラされば帰宅之都合ニ参兼候」しかし「諸君御卒業式ニ出頭するを以而非常之楽しみト予想仕居候」と述べる。(463:589)

在米の下村孝太郎に発信、近況を述べ、アメリカン・ボードより五万ドルの寄付を受けたが、アメリカに行くことは反対されたこと、しかし五万ドルでは兵役免除はできても同志社を第一級の学校にするには遥かに不足しているので、アメリカン・ボードとは別にデイヴィスと相談しながらアメリカで募金をしてほしいと記す。(466:329)

徳富・渋沢より手紙が来る。金森より教科改正につき来状、電報で返事を送る。同意、ヤレ。(465:339)

六月五日

八重夫人が五日に神戸を出帆することを電報で知らせてくる。(井上伯も五日神戸出帆の由)中村・湯浅・和田彦より手紙が来る。(465:339)

六月六日

小町村戸長役場へ行き、無縁塚より掘り出された古器、人形、馬類を見物し、これを模写する。午後、扇ヶ谷村の三ッ橋栄輔を訪ね、刀剣についての話を聞く。(465:340, 4782)

内村鑑三、北越学館就任約定書に署名する。(453:29)

六月八日

八重夫人、鎌倉の海浜院に来る。夫人は新島が「足には軽ろき草履を穿き、一手は杖、他手は看護婦の肩に寄り、静かに歩み居りし」姿を見て断腸の思いをする。以後、滞在中、朝夕、八重夫人と共に海辺または八幡宮、大仏辺までゆるゆると散歩をするのを常とする。(463:590, D14:33)

同志社社員会は英学校を同志社学院と改称することを決定。(D1:1254)

六月十日 青木周蔵が見舞いに来る。(全5:341)

六月十一日 梅雨の中、新島夫妻は鎌倉より東京に帰る。勝見正蔵医師に謝礼五円を贈る。(薬代は別)(全3:591, 全5:341, 全6:333)

六月十二日 宣教師デフォレストが新島を訪ねて麻布仲之町栗津方に来る。(全5:342)

六月十三日 小崎弘道・湯浅治郎が来て専門学校の「東京」大会開催の下相談をする。(全5:342)

六月十四日 小崎は青木周蔵を訪問し、専門学校の大会について相談する。(全5:342)

六月十五日 中村栄助に発信、(一)大隈伯、矢野文雄らの接待について謝礼と要望 (二)事務職員の更迭について (三)同志社設立の始末、同志社の規則書、同統計表の送付を依頼、「専門校旨趣書」ハ少々改正シ出版スル積ナリ」(募集金額を七万→十万円に改正か)(全3:591)

群馬県碓氷郡土塩村の上原権太郎に専門学校への寄付につき礼状を出す。(全3:593)

八重夫人、津田仙の六女・清子の葬式に参列する。(全5:342)

杉田玄端より『健全学』『梅里余稿』『遺稿』の三冊を贈られる。(全5:342)

三好退蔵に手紙を送る。(全5:342)

六月十六日 金森通倫・中村栄助に手紙を送る。(全5:342)

六月十八日 朝、北垣知事来訪する。十一時、井上馨も来訪、関西の状況につき二時頃まで相談する。(全5:343)

六月二十日 朝、大学病院に行く。専門学校のことにつき森有礼文部大臣に会い、賛同を得る。また歩兵科の設置については資金のほか、商議員の権限等を定めることが必要であるとの助言を受ける。(全5:343)

六月二十一日 旧安中藩、添川廉斎の子・鉉之助が来訪する。(全3:594)

北垣知事を訪い、渋沢栄一を訪ねるも会えず。また井上馨を訪問する。金森通倫に帰京できないことを通知する。(45:343)

三好退蔵より来信、一会を催して賛成者を募ってはどうか、それについて岩崎小次郎に連絡しているので相談してほしい、と伝えてくる。(F888)

六月二十二日

三好退蔵・五年生・中島末治に手紙を書く。新島夫妻、富田鉄之助の昼食に招待される。北垣知事・徳富を訪問する。添川鉉之助を夕食に招待する。(43:594, 45:343)

六月二十三日

N・G・クラークに発信、アメリカン・ボードからの寄付の受け入れにつき、先週、森文相や外務省の役人らと相談したことを知らせる。文末にH・T・ブラウン夫人より二人の生徒のため六十ドルの奨学金がワード氏の手を経て送られてくるはずになっているので、彼に言っしてほしいと頼む。(46:332)

青木周蔵・内村鑑三が来訪する。内村とは北越学館のことにつき相談、加藤勝弥・小谷野敬三に手紙を送ることにする。(45:342)

六月二十四日

井上馨と大隈重信に面会して専門学校の募金について相談する。大隈重信が旅行より帰ったのち知人を招いて小会合を開くことにする。(45:344)

六月二十五日

橋本綱常軍医に会い病状について詳しく説明を受ける。新潟の加藤に手紙を送る。(45:344)
長岡喜八(「この頃、同志社書記となる」)に同志社統計表を受け取ったことを知らせる。アンドーヴァー神学校在学中の小谷野敬三に発信、さき頃帰国した内村鑑三が新潟の北越学館に赴任したこと、ただし内村は秋田のような人の着手していない場所に行きたいと言っているので、小谷野が帰国したら、

六月二十六日

内村の後任として新潟で働いてもらいたい、と要望する。(全3:595)

同志社各校卒業式始まる。とくに看病婦学校の第一回卒業式では四名が卒業、大阪鎮台より陸軍軍隊を招き、式の間演奏させた、という。(D1:409, D37:23)

在米の陸奥宗光に発信、アメリカン・ボードより五万ドルの寄付を得たことを報告する。クラーク、ホルマン、ポルタの三氏に発信する。(全3:599, 全5:344)

六月二十七日

渋沢栄一・古沢滋に手紙を出す。津田を見舞い、木村熊二を訪問する。八重夫人と共に泉岳寺へ行き、赤穂義士の墓に詣でる。実相寺に立ち寄る。(全5:345)

六月二十八日

同志社通則草案四十二カ条できる。徳富猪一郎・湯浅治郎に起草を依頼していたもので、井上馨・森有礼・青木周蔵・野村靖・小崎弘道らに送る。(全5:345, D1:1816)

富田に預けていた百円を受け取る。新潟の中島末治に手紙を書く。(全5:345)

六月二十九日

井上馨に上梓した同志社通則草案を送り、意見を聞く。(全3:600)

午後、ベルツの診察を受ける。「回復ハ期スベカラス」(全5:345)

ベルツへ行った留守中、古沢滋が来訪、「井上伯へバルマル・ガゼット記者相招キ候ニ付、徳富君迄御案内致し度、就而は同君御差支え有無一応御聞合御報知被下度……」とカードを残して帰る。(全3:601)

「此ノ夕、フエイントエウエーションタリ」(全5:346)

六月三十日

午前、第一銀行において渋沢栄一に会う。夕方、富田鉄之助が来訪する。(全5:346)

七月一日

朝、井上馨に書状を出す。はなはだ懇切な返事を受け取る。午後、榎坂の「東京第一」教会堂におい

七月二日

て晚餐式に列する。徳富が来訪する。中村栄助より手紙が二通来る。(45:349)
八重夫人、ひそかに難波医師に呼ばれ、新島の病状を聞く。新島の「心臓病ハ全治ヲ期スベカラス」と聞き、「八重ノ愁嘆一片ナラス、大ニ予ノ心ヲ痛メシメタリ」(45:346, D14:33)

J・D・デイヴィスに手紙を送り、「予ノ覚悟ノ事ヲ述ヘ」米国ドーチェスターのベイカー夫人には日頃の好意を謝し、あらかじめ暇乞いの手紙を送る。また「今日ヨリ逢フ所ノ朋友ハ仮令暇乞ノ辞ヲ陳ヘサルモ、或ハ此ノ遭逢ハ最後ノモノニアサルナキヤノ思ヒナキ能ハス……」と日記に書く。

(45:349)

七月三日

難波一・益田孝・中村栄助・市原盛宏に手紙を出す。同志社通則草案を沖神奈川県知事・原六郎・三好退蔵・益田孝に送る。(45:348)

三好退蔵よりこの日付で来信、病氣療養のため他所に行っていたので、募金の集会には出席できない、岩崎小次郎に頼んでおくので、彼に相談するよう伝えてくる。(T392)

七月四日

アメリカ合衆国独立記念日に際してA・ハーディ夫人に手紙を送り、心臓病が悪化して回復の見込みがないこと、いつ突然の死が訪れるかわからないので、あらかじめ夫人に対して、これまで受けた恩義について感謝とお別れの挨拶を書き記す。(45:348, 46:333)

沖知事・ラーネッド・奈須義質に手紙を送る。(45:348)

七月六日

大隈重信に手紙を送り、面会を求める。富田鉄之助より毎日、スープと牛肉または香魚を贈られ、深く感動する。(45:348)

七月八日

高鍋教会設立式と増野悦興の按手礼が行われる。(T398)

七月九日

ベルツの診察を受け、夏の保養地について相談する。「海ハトカク病人ヲシテ心経高キヲ覚エシム、食物サエアレハ高燥ノ地ヲ以テ最上トス」と言われる。また八重夫人の脂肪を減ずる方法を聞く。

大隈重信に書簡を送る。(全5: 348)

七月十日

徳富猪一郎に発信、井上馨を訪問する前に立ち寄ってほしいと伝える。(全3: 605)

大隈重信に手紙を書き、明治専門学校の設立については井上馨も賛成していること「元来両伯ニハ政事上或ハ多少御意見ノ隔意スル所有之ヤハ存シ不申候得共、民間ノ教育事業御賛成ノ一点ニ至リテハ毫モ隔意セラル、所ハ有之間敷ト了察……依テ願クハ此上ハ両伯トモ各別途ニ計ラセ賜ハズ、寧ロ御談合ノ上」有志家をお招きくださるよう要望する。なお井上・大隈がすでに新島の希望のごとく話を進めていることを井上より知らされ、この日午後、再び大隈に書簡を送り、重複を謝する。また書簡中に「御存シノ通小生ノ如キハ已ニ一身ヲ宗教ト教育トニ委候故、当時公然ト政事上ニ奔走セサルハ深ク理由之有之候訳ニシテ……将来ノ青年ヲ薰陶シ新日本構造ノ良材ヲ培養セント計ル」とも書く。

(全3: 602, 604, 全5: 350)

J・D・デイヴィスはミス F・フーパーと再婚する。(E12: 210)

七月十二日

井上馨・青木周蔵を訪問する。休養するように勧められる。益田孝・丘襄二を訪うも不在。午後、内村鑑三が来る。また加藤「勇次郎」・岡田「松生か」・不破唯次郎・森田久万人らが来訪する。(全5: 350)

七月十三日

長田徳太郎・松尾音次郎に手紙を出す。(全5: 350)

七月十四日

市原盛宏が仙台より上京する。(全5: 350)

七月十五日

井上馨より、十九日午後六時から大隈重信邸において専門学校の集会を開く、と通知してくる。ゴードン、ラーネッド、デイヴィスより手紙が来る。(全5:360)

七月十九日

磐梯山噴火、山体破裂。死者四百四十四人。東京の十五新聞社共同で義捐金を募集。(J97:114)

大隈外相官邸で明治専門学校設立についての小集会を開く。この朝、井上馨が新島を訪れ、午後四時ごろ馬車で迎えに来ることを告げる。午後六時、井上と同道して大隈邸に行く。同志社より新島のか湯浅治郎・徳富猪一郎・加藤勇次郎、来賓は青木周蔵・渋沢栄一・原六郎・平沼專造・岩崎弥之助・岩崎久弥・益田孝・大倉喜八郎・田中平八らが出席した。協議の結果、合計三万一千円の寄付申し込みを得る。夜十一時帰宅、非常の喜びにて神に感謝して十二時に就寝する。(全1:134, 全5:361, J23:91, J61:8, J95-中:479)

* 金額ごっこい(J23, J95)は三万二千元、(全5:351, J61)では三万一千元となっている。

七月二十日

銀座三丁目の高山紀齋に行き、入れ歯を求める。三井の丘襄二が来て時計売却のことを相談する。夜、土倉庄三郎が来訪する。(全5:353)

七月二十一日

井上馨を訪問、これまでの礼を述べる。大隈重信・青木周蔵を訪うも不在。森有礼を訪ね、徴兵猶予を得る方法、手続き、および大学の設置学科について相談する。午後、福井の岡部広が来訪する。

(全5:353)

『中外物価新報』『東京日々新聞』はいの日付で大隈重信邸での三万円募金について報ずる。(J61:28)

新島公義に発信、「私も少々快候得共未タ長旅行ハ医者より許不申、当夏ハ伊香保へ参可申候」なお

八重夫人は二十五日発でいったん帰宅の予定と伝える。(43:606)
早朝より井上馨を訪ね、森文相と協議の内容を詳しく述べる。

七月二十三日
この夜、矢野文雄・朝比奈知泉を芝公園内三縁亭に招き、徳富・伊勢・小崎らも同席して歓談する。
(45:355, T895)

七月二十四日
伊香保で静養のため、この朝、汽車で前橋に向かう。十二時十九分到着、同志社生徒三上真吾の案内により桑町の住吉屋国太郎方に入る。当時、磯部に出向いている新井毫にハガキを送る(翌日来訪)。後藤源九郎医師の来診を受ける。高崎の藤巻、前橋の関口源七郎のほか高津仲次郎・関農夫雄・関口長一郎らが来訪する。また不破唯次郎夫妻もしばしば訪れ、食物等を持参する。(45:355)
湯浅治郎が来訪、辞去後、同人に手紙を送り、徳富の社員加入について相談する。(43:606)

前橋滞在中、杉田潮「安中教会牧師」に会い、下野地方伝道につき協議する。新島案では、中山光五郎をして佐野と板木に着手せしめたいこと、これはすでに小崎・伊勢・湯浅も賛成していること、伝道費が不足ならば新島が少々援助してもよいと述べる。「小生之志願ハ上毛下毛を聯合セシメ度事也」(43:611)

七月二十五日
矢野文雄、この日付で徳富を通じ新島に手紙を送る。(159-1:249)
後藤医師の世話で駕籠を用意し、朝八時に前橋を出発、渋川を経て夕方五時前、伊香保の木暮武太夫方に到着する。新井・関・住吉屋老人・三上・鶴田らが付き添った。森本佳吉医師の来診を仰ぐ。新井毫の父親・佐助「乙瓢と号す」が同宿に滞在しており、挨拶をする。(45:356)

* 伊香保行きの日について『上毛新聞』(H3:953)は二十五日、(43:607)では二十六日とある。ただし両

日とも雨。

七月二十八日 大雨、井上馨・大隈重信に手紙を出す。(全5:356)

七月二十九日 ジャパン・ミッシン第十六年会が比叡山で開かれる。八月四日まで。(E1)

七月二十九日 大雨、森田久万人に手紙を出す。(全5:357)

七月三十日 午後より大雨、徳富・矢野から手紙が来る。(全5:357)

七月三十一日 曇、伊香保に来ていた三好退蔵が発する。彼に十円用立てる。仙台の岩瀬が来る。(全5:357)

八月一日 陸奥宗光へ東京募金の結果三万一千円の約束ができたことを報告する。永岡喜八ほか京都へ数通手紙を出す。(全5:359)

新井乙瓢と共に俳句を詠む。

仰き見し雲もここではあしの下 (全3:609)

八月三日 三好退蔵より書留が来る。伊香保到着以来、森本医師より四回来診を受ける。松本勘十郎に手紙を出

す。(全3:610, 全5:359)

八月四日 半晴、八重夫人・森田久万人より来信、杉田潮に佐野・栃木伝道について手紙を送る。ユゴーの『レ・

ミゼラブル』を読み終わる。ロクロ細工を見物に行った際、俄雨に遭い、店内に雨宿りしたところ、机上に『日本人』『国民之友』を見かける。(全3:611, 全5:359)

八月五日 晴のち曇、気分大分よくなる。杉山重義へ下毛伝道につき手紙を送り、杉田潮と相談するように伝える。(全5:359)

八月六日 伊香保滞在中の新井乙瓢が家族と共に帰宅する。午後、新井・関および民友社の福田和五郎らの斡旋

により、木暮武太夫方より三、四丁離れた千明三郎の別荘に移る。

滝の音も夕立と聞昼寝かな (全3: 614, 全5: 356, 357, 360)

八月七日

伊香保到着以来初めて好天に恵まれる。新井佐助親子に手紙を書へ。(全3: 614, 616)

夕方、原忠美・中山光五郎・上原権太郎・坂田忠五郎が来訪する。

水自涓々山自碧 自然風趣自然閑 脱却俗塵与煩熱 忽疑身尚在人間 (全5: 360, 361)

八月八日

夕方、沼田の伝道師・高橋優が来訪する。(全5: 361)

八月九日

徳富・小崎・栗津・八重夫人(二通)に発信、元良「勇次郎」来る。夕方、八重夫人より横浜到着を知らせてくる。徳富に別にハガキを送り、十三日ごろ八重夫人が東京「京都か」より伊香保に向かうので、唐宋詩醇を持たせてほしいと依頼する。「小生も隙ナルニハ大困却」(全3: 616, 全5: 361)

八月十日

手紙を出すべき人物を列挙する。多田新・伏見通に手紙を出す。(全5: 361)

八月十一日

下村孝太郎に手紙を送る。募金状況を説明ののち、同志社の前途につき「今一年否二年ナリ」トモ御留学ナサレ……我カ校ニ於テサイヨンスノ振ハサルヲ痛嘆シ候間、貴兄ニシテ……其ノ方ヲ負担シ賜ハ、必ラス我校ノ面目ヲ一新スルニ至ラン……今ノ本校ヲシテ充分コルレジノ位置ニ進メ度」
「先々ノ事ハ御負担被下候様」に切望する。(全3: 621)

北越学館のことにつき内村鑑三より来信、ただちに返書を出す。加藤勝弥に内村について手紙を出す。大久保真次郎・上野栄三郎に発信、八重夫人にハガキと電報を打つ。夜九時ごろ土倉・新井が来訪、一時間ほど話をする。(全5: 362)

八月十二日

土倉三郎が夕方五時ごろ来訪、夕食をはさんで夜九時ごろまで閑談する。(全5: 362)

八月十三日

A・ハーディ氏の永眠を聞いて一周年に際し、ハーディ夫人に手紙を送る。休養のため伊香保に来て
いること、ユゴアの『レ・ミゼラブル』『九十二年』や『フランクリン自伝』を読んでいることを記
し、野百合の花一片を押し花にして同封する。(全5:362, 全6:334)

八重夫人、京都を出発して伊香保に向かう。(全3:616, 622)

八月十四・五日

安中の杉田・森本・橋本、高崎の藤巻・相良が見舞いに来る。鶏五羽を贈られる。(全5:363)

八月十五日

ポーター・鈴木・津田次郎に手紙を出す。新島公義およびロンドンのモートンより手紙が来る。(全
5:362)

八月十六日

八重夫人が松尾・松本の案内で伊香保に着く。伊勢・湯浅・小崎・金谷に発信、多田新より手紙が来
る。(全5:363)

中村栄助に山本覚馬への返書を兼ね手紙を出す。(一)金森通倫を社員に加えることは賛成、東京の伊勢
には伝えておいた (二)専門学校のこととは諸事、大沢と分担して進めてほしい (三)徴兵猶予を得るには
準官立学校にならねばいけないのか、誰かに問い合わせてほしい。(全3:623)

八月十七日

高津仲次郎ら前橋の青年六、七名が、榛名山登山からの帰途、立ち寄る。(全5:363)

この夜、新井毫が来訪、前年末の保安条令の処分に関連し、身の振り方を相談するか。(全3:639)

八月十八日

同志社のことにつき伊勢・松山に発信、夕方、山中百と青柳新米が来訪する。(全5:363)

八月十九日

勝海舟、新島に宛て本城安太郎の紹介状を書く。(全897)

徳富猪一郎を通じ、陸奥宗光よりの書簡(七月二十三日付)を受け取る。“The Christian Intelli-
gencer”(1888. 7. 11) 切り抜きと共に「馬場辰猪ナル者当国の耶蘇教会ヲ煽動シ」ているので米国

八月下旬

八月二十日

人がその影響を受けないようにする方策につき、新島に糾してくる。(F3156)
群馬県「九十九村」国衙の新島公義の母親が伊香保に来て三週間ほど滞在する。(全3:633)
広津友信より依頼されていた原六郎宛の紹介状について発信、自分「新島」が書くよりも、原と親しい北垣知事に頼む方が良いと伝える。(全3:625)

木暮武太夫・福田和五郎が来訪する。(全5:363)

在上毛同志社生徒親睦会が、この日、安中湯沢の山田屋において開かれる。(H3:383)

八月二十一日

富田鉄之助と新井乙瓢に発信、新井には俳句の添削を乞う。(全3:626, 全5:364)

八月二十二日

かねて土倉庄三郎に依頼中のマッチ軸木用材の植林費用三百円につき、便宜のため同志社に在学中の子弟の教育費の預かり証を送るので、引き替えに八重夫人宛に上記三百円の受取証を送ってほしいと頼む。(全3:627)

上野栄三郎に手紙を出し、反物の税金として十八円送る。A・ハーディ夫人、N・G・クラークおよび下村孝太郎・茂木平三郎・堀正蔵より手紙が来る。茂木・堀には返書を出す。小板橋京三郎ら上州の学生数名が来訪する。(全5:364)

朝、松尾音次郎より来書、彼に高崎教会で働くことを勧める返書を書く。(全6:335)

八月二十五日

中村栄助・金森通倫に発信。杉田定一より来信、返事を出す。(全5:365)

八月二十六日

内村竹・須田明忠が来訪する。(全5:365)

八月二十七日

内村竹のことにつき内村鑑三に手紙を出す。ベイカー夫人に発信。朝、J・D・デイヴィスと不破唯次郎が来る。深沢より鶏二羽を贈られる。松本亦太郎の夫人病死の訃報くる。増野悦興よりこの日付

で来信、高鍋教会設立と増野の受按を知らせてくる。(全5:365, T398)
 八月二十八日 小崎弘道より来信。小崎に京都市行きをやめ、北越、下毛地方の巡回を勧める手紙を出す。本城安太郎が勝海舟の添書を持ち面会を求めてくるが、謝絶する。(全5:365)

岩崎「弥之助」が伊香保に来ていてというので書状で面会を求める。風邪が治ったのち、先方より来訪するとの返事がある。(全5:366)

八月三十日 大風雨、北垣知事・渋沢栄一・益田孝および京都の専門学校専任委員に発信する。(全5:366)

八月三十一日 松本亦太郎・岡本彦八郎が来訪する。(全5:366)

八月 米国コネチカット州ニューロンドンのJ・N・ハリスより理化学校教室建設のため一万ドルの寄付申し込みを受ける。(全3:648, 全4:125)

九月一日 本城安太郎が勝海舟の添書を持って来訪、九州の高島炭坑に伝道したいと希望する。本城の人柄、信仰が不明なため、いったん小崎弘道の教会へ預けることとし、この日添書を与え、小崎のところへ行かせる。(全3:628)

九月三日 伊香保滞在中の岩崎弥之助が来訪する。その際、本城安太郎の希望を伝えて相談し、承諾を得る。(全3:629, 全5:366)

同志社社員会のため湯浅治郎・伊勢時雄が京都へ行く。(D1:1256)

九月四日 本城安太郎に発信、高島炭坑伝道につき岩崎と相談の結果を知らせ、伝道にあたっての注意を細々と書き送る。(全3:629)

九月五日 内村鑑三より手紙が来る。「お竹之言葉ト大ニ齟齬セリ」内村竹に発信、新潟の内村より返事をもらっ

たが「双方之御申分互ヒニ齟齬する所有之」今後この問題から一切手を引くことを伝える。(43: 632, 45: 366, 153: 252)

同志社社員会が開かれ、次のことを決定する。

- (一)新島が病氣中、金森通倫を社長代理とする
- (二)同志社通則三十六カ条を議定する
- (三)常議員会則を議定し、常議員を選出する
- (四)予備校・女学校・看病婦学校を同志社直轄とする
- (五)各校に主幹を置き、英学校は森田久万人・J・D・デイヴィス、予備校は加藤勇次郎、女学校は浮田和民に依頼する
- (六)徳富猪一郎を社員とする。(D1: 1256)

九月六日

原市の半田平次郎・桜井幹・上原春朔が来訪する。(43: 637, 45: 366)

九月七日

伊香保滞在中の岩崎弥之助より来信、明日帰京すること、本城の手紙を読んだので返却する旨を伝える。(F312)

九月八日

徳富猪一郎に発信、「御申越之建白……弥建白ニ被及候時ニハ拙名も御加入なし被下度候」また「樫村^(こ)を申東京之名医も来伊……診察を乞候」と記す。徳富の依頼により同志社入学を希望する津軽承叙子爵の子息のため、森田久万人宛に添書を書く。(43: 632, 634)

* ここにいう「建白」は基督教公許の建白書と思われるが、確認に至らない。

九月十日

北越学館開校式、内村教頭就任式挙行。(153: 252)

九月十四日

夜、新島公義と河井某女との婚約の報届く。「今回之佳報……我等甚満足喜欣」(43: 635)

九月十五日

午前十時、伊香保を出発、新島は山駕籠で、八重夫人は人力車で山を下り、前橋桑町の住吉屋に二泊する。須田一平が来護する。(45: 368)

九月十六日

八重夫人は午前より安中へ行く。(43: 635, 45: 368)

前橋の青年会より十数人が来訪し教会合併のことにつき意見を交わす。このほか新島の下山を聞いて来訪者が相繼ぐ。(45: 638)

九月十七日

不破唯次郎の家へ行き、半日を過ごす。深沢の家で馳走になる。後藤源九郎医師は下山以来、毎日診察に来る。八重夫人は新島公義の実家、国衙へ行く。(43: 635, 45: 374)

九月十八日

前橋の教友に見送られて二番列車で東京に向かう。午後三時前到着、粟津夫人・鶴田三郎・小崎弘道らが出迎える。(45: 374)

金森通倫よりこの日付で来信、(一)金森が社員会で社長代理に決まったこと、および就任に際しての決意を述べる (二)新島在京中に上京し、有力者に紹介してほしいこと (三)米国より五万ドルの保証書が届いたこと、を報告してくる。(F302)

九月十九日

湯浅治郎が来訪、社員会の報告をする。(一)大学の名称は同志社とすること (二)徳富を社員とすること (三)金森通倫を社長代理とすること(即日、金森に電報をよって依頼する)(45: 374)

九月二十日

奈良の河井家と新島公義にそれぞれ手紙を出す。(43: 635)

九月二十二日

井上馨よりこの日付で来信、明後二十二日午前十時頃なら面会できる、と通知してくる。(F303)

九月二十四日

午前十時ごろ井上馨を訪問、昼食を馳走になる。(45: 375)

古沢滋を訪問する。(45: 375)
かねて後閑村の上原春朔を通じ、安中近郊の磯部村にある楢取家の別荘を借り受けることにつき、帰京して家族・友人と相談した結果、此処に二、三カ月、彼処に三カ月と移り住むよりも、むしろ便宜

の良い土地を選んで養生する方が良いと思われるので、せっかくの骨折りながら、今回は辞退する旨を通知する。(全3:637)

九月二十五日

神田小川町の山竜堂病院に入院し、樫村清徳博士の治療を受ける。(全5:375)

新島公義に発信、結納の件は新島夫妻が来月早々京都へ帰ってからにしたいので、その旨、先方へも連絡するように伝える。(全3:638)

九月二十六日

土倉庄三郎、新島を山竜堂病院に見舞う。(全3:638)

九月二十七日

明治専門学校の名称を同志社大学と改めることにつき、京都の有力者の間に賛成者が多く、別段心配するほどのことはない、と金森通倫よりこの日付の手紙で知らせてくる。また北垣知事より大阪の高島鞆之助中将、神戸の内海忠勝知事宛の添書を与えられたことも報告する。(全5:306)

徳富、新島を見舞う。徳富に後藤象二郎のもとへ行き、専門学校への援助を求めるよう依頼する。(全3:640)

小崎弘道と同伴して岩崎を訪問、本城安太郎のことを相談する。(全5:375)

新井毫より来信、これに対し新島より、先日相談「保安条令による追放解除か」を決して無頓着に聞き逃しているわけではないことを伝え、軽々に去就を決しないように忠告をする。(全3:639)

キリスト教教義弁明に関する建白書が政府へ提出された、という。新聞紙上でも論評される。(171:97)

* この建白書の提出日については二十八日、二十九日の異説がある。

九月二十八日

後藤象二郎宛の書簡を徳富に託す。(全3:640)

九月二十九日

この朝、山竜堂病院を退院する。土倉庄三郎が病院へ見舞いに来る。齒科の高木紀齋へ行き、奥齒二枚を埋める。午後、寄寓先の麻布仲之町の粟津方へ帰る。新原俊秀および京都の藤原・安田が来訪する。夜に入り徳富が来る。「極秘密ノ件ヲ托ス」(全5:375)

九月三十日

森文相に手紙を送り、徴兵猶予の特典を与えるよう要請する。徳富猪一郎・湯浅治郎の二人が森に会う。(全5:376)

「井上伯ニモ此事ヲ預リ知り、今回失敗セバ再び願ヒ出ツヘキ旨ヲ陳セリ。但シ其ノ前ニ切迫ノ事アルヲ以通セシカハ」井上馨が来訪する。ただし新島不在のため会えず。土倉庄三郎を通じて仔細を通知する。(全5:376)

後藤象二郎に専門学校の募金につき再び手紙を書く。(全5:376)

十月一日

富田鉄之助宅において不破唯次郎・杉田潮・杉山重義・奈須義質・人見一太郎・竹越与三郎らと教会、教会合併について打ち合わせをする。木挽町の和田彦二郎が来訪する。(全5:376)

新井毫に発信、保安条令により処罰された新井の赦免につき、井上馨に頼んでいることを知らせる。

(全3:641)

十月三日

一致・組合両教会合併問題に関する意見を記し、自由・共和・自治・平民主義の組合教会と中央集権・貴族主義的・寡人政府主義の一致教会の合併が困難なことを述べる。(全2:499, 502)

東京第一教会において組合教会関東部会が開かれ、番町・前橋・安中・原市・北甘楽各教会と共に合併反対の態度を固める。(F14:19)

十月四日

朝、徳富に会う。夕方、番町教会の三好退蔵に日吉町の共存同衆館で会い、教会合併に関する新島の

十月五日

意見を説明、大いに共和・平等主義を鼓吹し、関東コンフェデレーションを結成するため番町教会より火の手をあげるよう勧める。(H3: 643, H5: 377)
徳富に一書を送り、教会合併問題で三好退蔵と会ったことを告げ、末尾に「今回ハ実ニ吾人執ル所ノ主義ノ戦争ナリ」と記す。(H3: 643)

三好退蔵から、今夕七時より集会を開くので憲法草案を持参して出席されたい、との案内状を受け取り出席、三好のほか和田垣謙三・森為国に会う。(H3: 644)

十月六日

「〇〇、〇〇〇ノ二氏ニ面会ス 甚重要ノ事件ナリ」。金森通倫が東京に来る。(H5: 377)
井上馨宛に、明朝、金森通倫と共に伺いたいと問い合わせる。渋沢栄一・益田孝へ八日に金森を訪問させた旨を通知する。(H3: 645, H5: 377)

十月七日

番町教会の青年四名が来訪、教会合併につき懇談する。(H3: 646)
奈須義質よりこの日付で来簡、自由共和の教会政治を守る決意を認めてくる。(F909)

前橋の永井元に手紙を書き、教会合併について記す。(F913)
下村房よりこの日付で送金に対する礼状が来る。(F1598)

十月八日

高木文平・田辺朔郎の二人、米国電気事業調査「琵琶湖疏水工事関連か」のため渡米する。(H13: 88)
金森通倫を伴い井上馨を訪問する。「来年迄ニハ一万円ノ寄付ヲ負担スヘシト約シ呉レタリ」。次いで大隈重信を訪ね、新聞記者が同志社の大学設立に賛成の記事を書くように尽力を依頼する。(H5: 377)
人見一太郎より、熊本へ帰郷の途中、この日付で桑名・大垣・長浜地区の教会の動きについて報告しつゝくる。(F911)

十月九日

十月十日

岩崎弥之助を訪問する。金森通倫は後藤象二郎を訪うも会えず。(445:378)

十月十一日

東京抛金者の集金の手順について打ち合わせたいので、明十二日に金森通倫を派遣されたい、と渋沢栄一よりの書簡に接する。(161:22)

渡米する高木文平にシーリー教授宛の添書を渡す。新井登一郎来訪する。(445:378)

金森通倫を伴って青木周蔵を訪問、ドイツに留学生を送ることについて相談する。勝海舟に手紙で面会を申し入れる。(445:378)

人見一太郎よりこの日付で教会合併に関する同志社学生状況を報告してくる。また永井元よりこの日付で来信、教会合併についての新島書簡に意見を述べ、自分も合併反対の理由を長文の書面に認めつつ。(7912, 7913)

十月十二日

勝海舟を訪問、午後五時より九時まで長時間に及ぶ。基督教公許のこと、本城安太郎のことについて意見を聞く。海舟より『亡友帖』を贈られる。また大学の募金については「応分之寄付もなすべく又周旋も致すべき旨」の承諾を得る。(443:646, 445:378, 131-21:287)

十月十三日

下村孝太郎に発信、下村のアメリカ滞在の期間、募金および大学の近況につき書く。(446:336)同志社アッピール(「同志社大学設立の旨意」)の執筆を徳富猪一郎に依頼することとし、そのマテリアルの要点を書く。午後三時半頃来る予定の金森が来ないので、一人で大略を書き終わる。

運動のため外出中に来訪した金森にその資料を渡し、取り落としの分を書き加えるように依頼する。なお徳富に対し「過刻差上候分之外別ニ少々差加」えた資料を送付する。(443:646, 647)

人見一太郎よりこの日付で来信、大阪・神戸の教会合併に関する状況を報じ、いずれも教会憲法の研

十月十四日

究が不足であると告げてくる。(F944)

東京第一教会の臨時総会が開かれ、合併会議をあくまで延期させるための建議が可決される。(F14: 149)

十月十五日

大隈重信に書簡を送り、明朝、金森通倫を訪問させるので、面会してほしいと依頼する。(43: 650)
N・G・クラークに発信、五万ドルの寄付をいただいて感謝しているが、なお“I hope the Board will ever continue to help our Collegiate Course. If possible, I PRAY DO NOT CUT SHORT YOUR ANNUAL GRANT.” (46: 337)

十月十六日

榎本武揚逋信大臣を訪問する。大学設立につき大いに賛成、ほかにも周旋すると励まされる。樗村医師の診察を受ける。ベルツの診断と比較して所見を聞く。田口卯吉を訪問。対陵館滞在中の中村栄助・高木文平・田辺朔郎を訪ねるが不在。(45: 380)

井上馨に書簡を送り、同志社大学設立につき広告・募金することに関し、諸大新聞はほぼ承知してくれたが、先日頼んでおいた日々新聞はどうなっているかを伺い、もしまだならば金森まで添書をいただきたいと依頼する。(43: 651)

十月十七日

富田鉄之助方で竹越与三郎と面会する。向島有富温泉において同志社同窓会が開かれるが、出席せず。人見より第三信を受け取る。(45: 380)

松本勘十郎よりこの日付で来信、高崎教会員の過半数は延期説であること、教会憲法については疑義もあり、不破唯次郎・杉田潮からよく聞くつもりである等を知らせてくる。(F914)
彦根教会の新会堂拝堂式が行われる。(F940)

十月十八日

渡沢栄一に大学寄付金取りまとめにつき委任状を渡す。この夜「再ヒゼンソク相発半夜一騒キ致し候」(全3: 652, 全5: 381)

教会合併に関するいわゆる「ギュリック意見書」が発表される。(上475)

* S. L. Gulick, O. H. Gulick, *Questions concerning the proposed Union.* —(1) Oct. 18, 1888 (2) Oct. 24, 1888 (3) Oct. 27, 1888 (4) Oct. 29, 1888 (5) Oct. 29, 1888 (6) Nov. 2, 1888 (7) Nov. 3, 1888.

十月十九日

宮川経輝よりこの日付で来信、望月興三郎を梅花女学校に招くことを伝えてくる。(上915)

徳富に発信、湯浅治郎が上毛へ教会合併の遊説に出かけるようだが、明日、明後日中に高崎へ出発せぬように仕掛けてもらえないだろうか、と頼む。「上毛ハ已ニ捺印相済候得共、只高崎ノミ未定ナリ……此日曜日迄ニハ不破・杉山ノ両氏カ全ク彼ノ地ヲ平定スル事ハ必定ナリ」と述べる。(全3: 652) 三好退蔵・不破唯次郎・杉山重義に手紙を出す。各社の新聞記者を三縁亭に招き、大学募集につき協力を依頼する。「時事」は手数料を取り付録を出すという。朝比奈知泉は病氣欠席。(全5: 381, 上59-1: 19)

十月二十日

群馬県富岡の奈須義質に発信、杉田・杉山・不破と相談して「原市并ニ高崎辺ニハ早く湯浅氏ノ出向ハサル内ニ充分延期説ヲ固フセシメ」るよう檄を飛ばす。(全3: 654)

中島力造に「ジョージ・ア・マシオース」の件につき返書を出す。(全5: 381)

井上馨が関西に向かうので、金森通倫を随行させる。(全5: 381)

新潟の加藤勝弥に発信、「内村氏ニハ甚不都合の挙動ヲ為シオリ候由」「内村氏ニシテドウシテモ委員ノ命ヲ奉セサルハ……解約ニ及フベキモ実ニ止ムヲ得サル事ナリ」と書き送る。(全3: 653)

また内村よりこの日付で来信。"It is now almost two months since I came here. I have fought so many battles since that time that the two months look like two long years. I am still fighting the same old battle,—that of genuine independence from the mission, and missionaries..." (J 82 : 302)

十月二十一日

大隈重信に手紙を送る。明日、東京を出発して京都へ帰ること、ついでには在京中ひとかたならぬ御眷顧を蒙ったことに對し、お礼を申し述べたいが、数日前より風邪気味で外出を慎んでいること、本日は雨天なので「乍遺憾参趣之礼を相欠候」と記す。(全3 : 657)

三好退蔵夫妻が来訪する。(全5 : 382)

十月二十二日

徳富・小崎・岩沢・佐川および富田の書生らに見送られて、朝八時四十五分の汽車で東京を發つ。伊勢時雄が横浜まで見送る。(全5 : 382)

上州の不破・杉田・杉山・奈須・大谷らに横浜より発信、高崎の「教会合併」延期同意を喜ぶと共に、次の手順として憲法講究会を作り、組合教会の歴史、経験、組織を会員に知らしめ、一致教会との相違を明確にし「各会研究の結果尤我カ自由主義ノ組織ニ叶ヒ、尤適切ナルアンティユニオン論ト認ムルモノ丈ケヲ抜粹シ一小冊子ト為シ、極価安スニ上梓」配布すべきであると記す。(全3 : 658)

十月二十三日

晴、新造の西京丸に乗り、横浜を出帆する。船内で川田剛に逢う。川田より漢詩一編を贈られる。

(全3 : 657, 全5 : 382)

人見一太郎よりこの日付で熊本の教会事情を伝えてくる。(TF 917)

十月二十四日

午後一時すぎ神戸に安着、川田と共に安藤嘉左衛門方に泊まる。(全3 : 661, 全5 : 383)

十月二十五日

朝八時の列車で帰京する。森田久万人・鈴木彦馬・永岡喜八らが迎える。下村孝太郎、A・ハーディ夫人より来信。(425:383)

この頃、神戸で静養するため借家を探す。川本泰年よりこの日付で、山本通四丁目四番屋敷に手頃な家があり、この朝、八重夫人も外観を下見したことを報告してくる。(7918)

渋沢栄一よりこの日付で来信、大学寄付金は申し入れの通り来月十五日頃に国立第一銀行へ取りまとめ、総計三万一千円のうち二万五千元は公債証書買い入れ、残金六千元は同銀行へ利付預金するよう取り計らうことを伝えてくる。(761:22)

十月二十六日

徳富猪一郎よりこの日付で来信、「アップビルモ既ニ一度ハ印版ニ取り候右ハ明朝校正ノ上印行シタルモノヲ御目ニ懸ク可シ」と報告してくる。(7920)

十月二十七日

望月興三郎より来信、いったん浜岡のもとで実業に従事する決心をしたが、宮川からの誘いで教育に従事することにした経緯を報告してくる。(7921)

十月二十九日

徳富よりこの日付で来信、「別紙「アップビルのことか」金森兄ノ方ニモ相廻し候得共序ヲ以て差出申上候御一読ヲ乞ふ」(7925)

ベリーの診察を受け、「十一月中ハ神戸之氣候ハ暖和ニ過キ小生健康ニよろしからず、却而西京之少し冷気を帯たる空氣カ小生ニ助けと可相成」と言われる。(423:663)

新島公義に発信、来月一日に堺で開かれる組合会の集会に關し「右ニ付小生ノ兼ノ持論之要点相記し御送り申候間……御同意ナラハ貴君ノ御説トナシテ会場ニ吐露スベシ」と述べる。(423:661, 665)

嶋田信太郎より近江八幡の講義所を八月十日に開設し、授洗者の数も十五名以上なりつつある、と連

絡して行く。(F924)

十月三十日

新島公義に発信、昨日に引き続き組合教会教役者集会に関する追加意見を述べる。(43:604)

かねて借家さがしを依頼していた神戸の阿部政恒に発信、十一月中は京都に留まり、十二月になって神戸に行くつもりなので、借家の件、どうすれば良いか尋ねる。(43:603)

十月

米国の一友人より「本年十月ニ至リ更ニ一万円ノ寄付ヲ受クルノ見込ヲ得タリ」(43:609)

番町教会は教会合併の延期説に決す。(43:647)

秋、米国YMCAのウィッシュャード Luther D. Wishard がスイフト John T. Swift と共に同志社を訪れ、数週間滞在して福音伝道を行う。(E12:212)

十一月一日

医師に生徒との面会を禁じられていたが、夕方、ひそかに波多野培根を招く。「我カ学校并教会ノ前途ニ付心中大ニ憂フル所アリ候間、一応、貴君ニ御面談申度候……」。同様に夕食後、柏木義円をひそかに招待、教会合併についての苦衷を訴え、もし教会合併が実現したなら同志社を去って北海道に退く、と述べたという。(43:667, 46:338, J65:83)

古荘三郎よりこの日付で来信、教会合併問題で上毛および東京諸教会代表として関西諸教会と意見交換のため、神戸に来ている旨を伝えてくる。(F929)

中島末治よりこの日付で来信、内村と相容れないため北越学館を辞職したこと、彼を巡りトラブルが続いていることを報じる。今後は美術の方面に進み、クリスチャン・アートを興したいと記す。(F930)

十一月二日

古荘三郎よりこの日付で来信、堺で催された京阪神諸教会牧師会の様子を伝えてくる。(F931)

十一月三日

古荘より手紙で今度の会議で憲法の修正もないまま一致する危険性もあり、同志社だけでも自由主義をとるように山中・松尾へ依頼してほしいと述べる。(F933)

借家のことにつき神戸の阿部政恒に手紙を出し、あわせて神戸より乗船する古荘宛に東京より来た手紙を手渡すように依頼する。(全3: 668)

十一月四日

「一致・組合両教会合併問題に関する稿」を記す。(全2: 503)

同志社生徒・藤原直信より、新島が病気のため面会できないので、新島の写真を求めてくる。(F934) 徳富に発信、「一々御礼ハ申尽し不申候得共、今回は同志社之アッピールニ付き非常なる貴兄之御助力を蒙り千万奉鳴謝候」と記す。札幌の藤村信吉が来訪する。(全3: 669, 全5: 383)

十一月五日

梅花女学校新築校舎が土佐堀裏町二五に竣工し、その落成式に出席する。(J71: 97)

十一月六日

「一致・組合両教会合併問題に関する稿」を記す。(全2: 504)

小崎弘道に発信、内村鑑三の同志社招聘の可能性について意見を交換する。(全3: 670)

井深梶之助よりこの日付で来信、教会合併に対し賛否明確にするよう促してくる。(F936)

人見一太郎よりこの日付で来信、熊本講義所は合併延期に決したこと、福岡・高鍋・八代・都城に檄を飛ばす手筈になったこと、宮川が熊本に来る前に「延期」を結了するはず、と伝えてくる。(F935)

十一月七日

「同志社大学設立の旨意」を東京、京阪神、愛媛の有力新聞・雑誌に発表、国民の協力を訴え、あわせて各新聞・雑誌に募金取り扱いの広告を掲載する。(全1: 130)

また「同志社設立の始末」(表紙は「同志社設立始末」)も同時に印刷されたものと思われる。(全1: 口絵写真, 75)

* 「同志社大学設立の旨意」を新島は書簡中しばしば「旨趣書」と呼んでいる。同書は「同志社設立の始末」と共に広く全国に配布された。「大学設立の旨意」「設立の始末」とも略称する。

須田明忠に発信、先般依頼された書物は直接書店に注文し、代価を通知するようにしてほしいこと、また「上毛ニ而承り候ニ、貴兄之御説教ハ余リ長カスギルトノ評アル由……必ラス時計ニテ御計りアリ……四十分ヲ出サル様」と忠告する。(43:671)

十一月九日
茂里多寿三郎よりこの日付で来信、下阪の際に藤田・久原の両氏に紹介する旨を伝えてくる。(43:680)
堀貞一よりこの日付で来信、近江八幡伝道の報告、彦根教会の新会堂奉堂式のこと、長浜と彦根を兼牧では十分な働きができないので、長浜教会に辞表を出した、と報告してくる。(43:690)

古荘三郎よりこの日付で来信、関西地方の諸教会では牧師と教会員との間で意見が違っていると思われること、愛媛県地方は延期説に決まりつつあり、臨時総会に代表を送らないようだ、と報じてくる。

(43:699)

十一月十日

N・G・クラークに発信、新島は教会合併に不賛成であり、その理由を次のように述べる。

(一)組合派の教会は合併が必要だとは思っていない。合併は両教会の少数の指導的な牧師や宣教師によって推進され、一般の牧師や宣教師を駆りたてていること (二)新島はコングレゲーションリズムは民主的で、最上の制度だと思っていること (三)もし合併が実現すれば長老派色の強い教会憲法によって、組合派の高尚で自由な性質が失われてしまうこと (四)両派とも心の底では互いに他方の宗派を併呑したいという野心をいだいているので、合併したら内輪もめが起るかも知れないことを挙げ、この問題につきクラークおよびアメリカン・ボードに次のような質問をする。

十一月十一日

(a) 合併憲法に組合派の要素が見いだせるのか。

(b) 組合派が長老派に併呑されても、われわれの伝道・教育活動を従来通り援助してくれるだろうか。

(c) 教会合併によりアメリカの会衆派教会がボードへの寄付を拒絶するならば、ボードより日本への援助は中止を余儀なくされるだろう。われわれの伝道と教育、同志社はどうすればよいのか。

(d) ボードは合併後も組合派の福音活動を援助し続けるだろうか。合併賛成派と反対派のどちらに共鳴し、援助するだろうか。もし合併派を支持するのであれば Anti-Union Party として東京二教会、

上州六教会が A Congregational Confederation を形成するかも知れないし、同志社教会もそれに加わるかも知れない。(全6:339)

"A Plea for the Doshisha University" を印刷する。(L1122)

小崎弘道・竹越与三郎に発信、「昨日別紙之サーフ^(a)レット米国より到来候間、不取敢御覧ニ共し度候……併合之前ニ当リ我カ組合教会各員カ与論ヲ定ムルト共ニ、米国教会之与論如何ヲ熟知スルモ甚必要之事ト存し御一覽ニ呈し候間」教会に回覧するか、新聞に掲載するか「我カ教会員ニ之ヲ知ラシムルハ必要ト存候」と記す。(全3:672)

原六郎の寄付金取り扱いにつき井上馨に手紙を出す。(全5:416)

『福岡日々新聞』紙上に「同志社大学設立の旨意」と賛成の社説を掲載、十六日まで連載される。

(全5:416)

織田純一郎宛の添状を付し、永岡喜八を大学寄付金の収金に伺わせる。同志社生徒・藤原直信に写真を送る。(全3:673, F943)

竹越与三郎よりこの日付で来信、教会合併につき番町教会としては組合教会の相談会に代表を派遣するが、「延期」を主張させる。また大会には出席しない旨を伝えてくる。(F942)

十一月十二日

新島は井深の勧めに応じ、この日付で教会合併に対する意見を記して送付する。(全3:674)

藤原直信より礼状が来る。(F943)

十一月十三日

渋沢栄一に募金取り扱いに関し、手数を謝する書簡を出す。原六郎にも一書を出す。(全5:416)

明治女学校教員の木村祐吉よりこの日付で来信、大学設立運動に奔走している新島が肺結核であると聞いた教え子に託されて、手紙とドイツ渡りの妙薬を送ってくる。(F947)

十一月十四日

教会合併に関する草稿で来る。(全2:506)

神戸の阿部政恒に手紙で、借家さがしを依頼する。(全3:677)

『東雲新聞』に「同志社私立大学設立ノ計画」の論説が掲載される。(J44:286)

この日付で三通来信する。(一)古荘三郎より、今度の会議「組合教会臨時総会か」に多人数出席して延期を主張すべきか、あるいは欠席すべきか、意見を問う。(F945)

(二)堀貞一より、大学設立について演説会を催すに当り、その許可と演説の資料を求めてくる。(F946)

(三)和田吉人より、知人の子弟が入学を希望しているが、学資が不十分なので良い工夫はないものか尋ねてくる。(F948)

十一月十五日

徳富猪一郎が来校、チャペルで大学設立につき演説をする。新島も聴衆に交じってそれを聞く。(全3:678)

演説会の結果、約五百人の在学生全員が明治二十二年一月より十二月まで毎月献金をすることを申し

十一月十六日

合わせる。献金は各級に委員を挙げて任意の金額が月々納められた。(J88:10)
 長浜の堀貞一に「同志社大学設立の旨意」「同志社設立の始末」を送り、大学募金を依頼する。(ゆ3: 676)

原六郎よりこの日付で来信、大学創立寄付金について、今回は利子金のみを出すこと、寄付金は渋沢栄一を通さず、直接、新島に送るようにしたい、と伝えてくる。(F900)

『東雲新聞』に「又同志社私立大学ノ設」の論説(十五、十六日)が掲載される。(J44: 289)

「同志社大学設立の旨意」および「同志社大学義捐金募集取扱広告」がこの日発行の『国民之友』第三十四号に掲載される。この「旨意」および「広告」は報知新聞・毎日新聞・朝野新聞・東京電報・東京朝日新聞・東京経済雑誌・東京輿論新誌・基督教新聞・公論新報・改新新聞・絵入朝野新聞・女学雑誌・大阪毎日新聞・大阪朝日新聞・東雲新聞・神戸又新日報・京都中外電報・日出新聞等にも掲載される。(D1: 220, 15-e)

同志社チャペルにおいて大学募金に関する演説会が開かれ、賄い方の木下某はこれを聞いて感激、自分の持ち物売って三円五十銭を作ったほか、同志社出入りの魚屋・八百屋・米屋より寄付を集め、三十円六十五銭を京都の日出新聞社に寄託する。(ゆ5: 417)

植木枝盛が徳富の案内で、午後、同志社に来訪、校内を一巡のち、チャペルで全校生徒に対し演説をする。新島・金森も臨席する。(ゆ3: 678, 918, J84: 307)

田中平八・平沼専造・大倉喜八郎・益田孝らに募金協力の礼状を出す。(ゆ5: 416)

竹越与三郎よりこの日付で来信、教会合併につき伊勢・小崎に呼ばれて池本と共に会ったこと、関西

の会議に出席するよう説得されたけれども、拒絶したこと等関東の状況について報告する。(F953)

長野の清水袈裟雄よりこの日付で来信、『国民之友』に掲載された金森通倫の「同志社の目的およびその現状」を読んで同志社進学の希望を述べてくる。(F953)

十一月十七日

『東雲新聞』紙上に大学設立に関する社説を掲載したことに対し、中江兆民に礼状を出す。また長崎県知事・日下義雄に手紙を送り、大学募金のことを依頼する。(A5: 416)

この夜、京都三条小橋の萬屋旅館に宿泊中の徳富猪一郎を招き、人見一太郎・金森通倫も交え夕食をする。(A3: 679, F955)

十一月十八日

東京第一教会全員協議会(百八十人出席)が開かれ、一週間後に予定されている組合教会臨時総会に向けて合同会議延期請願書を作成する。(F14: 149)

十一月十九日

勝海舟に「同志社設立の始末」「同志社大学設立の旨意」数部を送り、知人への奨励を頼む。神戸江陽社の鹿島秀麿に礼状を送る。(A5: 416)

徳富来京に際し、松山高吉・大沢善助に萬屋まで挨拶に出向くよう勧める。(A3: 680)

加藤勝弥よりこの日付で来信、北越学館の紛糾につき、内村も宣教師も双方に辞めさせる名目がないことを述べ、その苦衷を洩らす。(F957)

十一月二十日

シカゴ滞在中の原田助よりこの日付で来信、日本の教会合併問題につきシカゴおよびサンフランシスコのコングリゲーション派の人々の中には不同意を唱える人々がいることを報ずる。(F956)

十一月二十一日

札幌の馬場種太郎よりこの日付で来信、大学募金について北海道毎日新聞社や空知教会にも賛助者がいること、市来知の看守長・原田正之助より義捐金に代わり家伝の太刀二振を託されたこと等を知ら

せしめる。(Faerl)

十一月二十二日

大隈重信に奈良県の北畠治房への紹介を求める手紙を書き、徳富に持参させる。後藤象二郎・榎本武揚に大学募金の依頼状を出し、民友社より「大学設立の旨意」「設立の始末」を送らせる。大阪毎日新聞の柴四郎に一書を送り、大学募金につき金森通倫を派遣して依頼させる。宮崎県諸縣郡の人々より百円を二十三年三月までに納める約束をし、その証書を送ってくる。同志社大学賛成の論説を掲載した雑誌『青年思海』を贈られる。(全3: 681, 全5: 417)

三好退蔵よりこの日付で来信、池本吉治を派遣したので指示を与えてほしいこと、ベルリンへ行くことになり、十二月初旬にアメリカ経由で出発することを伝えてくる。(T 362)

十一月二十三日

組合教会臨時総会が大阪教会新会堂において「二十八日まで」開かれる。新島は病気のため欠席するが、この朝、「昨夜已来少々安眠ノ出来カネ候所ヨリ」宮川・海老名・小崎・伊勢・金森・湯浅ら(連名)に書簡を送る。

(一)「憲法草案之外ニ聯合ヲ成就セシメントスル所ノ委員ノ如キモノ」があるようだが、各教会員に十分準備もできず、意見も出ないうちに、あやまって無理に聯合を奨励して、後々、苦情の出ないよう軽率の挙動をとらないようにすべきである。

(二)アメリカン・ボードは聯合に反対の意向であり、「兄等ハアメリカンボード之当分之扶助ト好意トヲ捨テテモ一致会ト聯合スルノ理由ヲ御覽アルカ御答被下度候、此ノ上ハ兄等ノ与論如何ヨリモ、小生ハ諸教会ノ与論如何ニ注目可仕候」

と述べる。結局、この大会では合併「延期説全勝利を占めたり、又次之総会ハ来年五月神戸ニ於テ開

会ノ事モ決定セリ」(全3: 684, 687, 全6: 345, F25: 205, J22-2: 20)

* 一致教会臨時大会は十一月二十三～二十五日、大阪青年会館で開かれ、憲法草案を満場一致で採択する。
(J22-2: 19)

大学賛成の論説掲載につき福岡日々新聞社と『青年思海』に礼状を送る。池本吉治来訪する。(全3: 688, 全5: 417)

十一月二十四日
朝、北垣知事を訪問、原六郎の約束した寄付金につき協議、知事が上京の際、井上馨とも相談して然るべき方法を講ずるよう頼む。また、このことにつき徳富に発信、他の人々が原と同様の申し出をするに困るので、井上と相談して「実物之握シ候様」にしてほしいと頼む。(全3: 687)

組合教会臨時総会の懇談会においてラーネッド、ゴードン、デフォレスト、ペティー、オルチンが合併に賛成の演説を行う。これに対し代表者らはS・L・ギュリックやデイヴィスにも電報を打ち、総会に出席して彼らの意見を表明するように求める。(全6: 347, F25: 212)

十一月二十五日
海老名弾正よりこの日付で来信、教会合併につき宮川は「如何ニシテモ延期セネハナルマイルト被申候」伊勢は「一致主張家ナレトモ無訳無理ニ一致スルトノ謂ニアラズドコ迄モ自由主義ハ取り被居候」と伝えてくる。(F973)

池本吉治よりこの日付で、組合総会および懇談会の模様を伝えてくる。(F974)

十一月二十六日
組合教会臨時総会の懇談会において合併反対のC・A・クラーク、S・L・ギュリック、J・D・デイヴィス各宣教師の意見が表明された。また新島の意見を聞くために安部磯雄・杉山重義の二人が京都に派遣される。(全6: 347, F979, F25: 222)

海老名弾正・伊勢時雄に発信、今回の臨時総会で述べるべき意見はすでに委員宛に書面で開陳しておいたので、他の人々に示してもらってもよい、と述べる。(全3: 689)

十一月二十七日

組合教会臨時総会第五日目、午前九時十七分より懇談会が大阪教会において開かれ、席上、安部磯雄より教会合併に対する新島の意見を紹介する。(全6: 280, F25: 233)

三好退蔵に「同志社設立の始末」および「同志社大学設立の旨意」を送るよう徳富に依頼する。(全3: 691)

新井毫に発信、保安処分による東京退去の期間につき、多少不満はあっても「余り激セサル様……貴重ナル時間ヲ矢張何事カ有益ニ消費スル事ハ好マシ」と述べる。(全3: 689)

三好退蔵・野村靖・板垣退助・桂太郎に送る手紙を書く。(全5: 420)

本城安太郎よりこの日付で来信、高島炭坑に会堂を新築するよう岩崎弥之助に陳情したので、岩崎から相談があれば賛成してほしい旨伝えてくる。(F382)

十一月二十八日

教会合併に関する意見を記す。(全2: 506)

J・H・デフォレストに発信、教会合併に対する新島の見解を記す。(全6: 342)

市原盛宏に託し仙台の松平正直・和達嘉孚に手紙を送る。児玉仲児に手紙を送り、和歌山県下の募金につき尽力を依頼する。また大阪の三木正起・田中城太郎・寺島武太郎にも手紙を出す。(全5: 421)

横浜の平沼専造より二千五百円を第一銀行に振り込んだ旨の通知を受け取る。(全5: 421)

十一月二十九日

金森通倫よりこの日付で来信、同志社大学の性格につき、たんにコングリゲーション派の機関とするのではなく、無宗派の学校として一派一党に片寄らず、広く天下の有志者の望みを繋ぐようにした

いとの意見を述べてくる。(F386)

神戸の阿部政恒よりこの日付で来信、横田・塚本兩名の尽力で諏訪山付近に借家が二軒見つかったこと、その場所・条件等を知らせてくる。(F385)

十一月三十日

下村孝太郎に発信、同志社大学の性格について次のように述べる。

(一)アメリカン・ボードから援助を受けている限り、われわれはコングリゲーションナルの学校と言われるだろう。しかし、われわれはさまざまな宗派から広く生徒を受け入れる、いわばノンセクタリアンの大学にしたいと思っている。われわれの本来の目的はクリスチャンの大学を作ることである。

(二)大学設立の運動については、新聞社の多くが好意的であり、彼らの手によって二十万部の「同志社大学設立の旨意」が国中に配布され、われわれは地方有志者に手紙を出して協力を呼びかけている。(全6: 343)

山口県会議長・吉富簡一に手紙を送り、別に「旨意」「始末」を各新聞社に各七十部宛送る。また長野県前山村の早川権弥にも大学賛成を懇望して一書を送る。(全5: 421)

京都上京第二十五組毘沙門町の立川達吉より大学のため十円の寄付を受け、即日礼状を出す。(全3: 691, 全5: 421)

「自由自治之基」と墨書する。(上759)

十二月一日

教会合併に関するギュエリック意見を印刷、配布することにつき、各教会、牧師、代議員に回状を発

す。(全3: 696)

十二月一・二日

松山の『予讀新報』が「同志社大学設立の旨意」を掲載する。(全5: 423)

十二月二日

十二月三日

大島正健に発信、大学募金につき協力を依頼、あわせて教会合併問題につき、去る十一月大阪で開かれた一致・組合各臨時会の状況を説明する。(全3:700)

押川方義に手紙を送り、教会合併についての見解を述べる。すなわち自分が沈黙しているのは「合併論者ハ一組ニナリ他ト計ラス」「此ノ重要ナル事件ニ関シ一言モ小生ニ相談ニ及ハサリシナリ」「小生ハ……教会政治ニ至リテハディモクラチックプリ[ン]シプルヲ甘受、欣奉スルモノニ有之候テ、此ノプリシプルカ小生ノスタンダードポイントオフヴィウ……ニ有之候ハ、教会政治ハ之ヲ以テ基礎トナシ度候、故ニ合併憲法中ニモ成ルベクハチョーチ・オートノミヲ確認セラレ……今部会聯会總會ノ方ニ附托シタル権ヲ減省シ度キモノナリ」と記し、もしそれに留意しなければ、組合会中に合併反対論者が続々輩出するだろうと述べる。(全3:703)

新井毫が保安条令による東京退去を警視庁より特赦された旨、群馬県庁より通報される。このことを新井より電報で知らされ、新島は折り返し祝電を打つ。(F1013)

予讃新報社よりこの日付で来信、「同志社大学設立の旨意」を掲載したこと、寄付金員はまとまり次第送ることを通知してくる。(F992)

十二月四日

十二月五日

本城安太郎よりこの日付で、再び高島炭坑に会堂を建設することにつき頼んでくる。(F991)

在米の下村孝太郎に同志社への募金運動を委託する。(全5:421)

徳富に発信、大学募金のため金森通倫は大阪・兵庫・岡山県会で演説したこと、近々、和歌山・奈良・滋賀・三重・愛知・岐阜に出張を計画していることを記し、徳富に新潟・秋田両県会の有力者に働きかけてほしいこと、神奈川・静岡・山梨にも運動したいと述べる。(全3:707)

牧野伸頭に「同志社大学設立の旨意」を添えて大学募金への協力を求める手紙を出す。(H16—b)
 神戸五州社の村上定に手紙を送り、徳島県下での募金遊説を依頼する。奈良県下の募金について大隈重信に手紙を出す。(全5: 421)

村上俊吉よりこの日付で来信、ギューリック意見の印刷に賛成する。(F1994)

十二月六日
 前日に続いて徳富に発信、大学募金につき各県ごとの状況を一覧表にして送り、静岡以東の各県会への運動を依頼する。(全3: 709, 全5: 422)

十二月七日
 群馬県前橋の医師・後藤源九郎に発信、この夏滞在中の礼を述べ、かたがた健康状態につき「当時ハ(此三四日間)六七時間モ続キテ夜眠出来候間少々肉付キ申、心臓ノ動脈モ段々規則定ル様ト相成リ、近來日日一時間ハ乗馬致シ候モ別ニ障モ無之……」と記す。(全3: 712, 全5: 422)

徳富に発信、大学賛成依頼書(印刷物)と共に前日の各県の状況の追加として茨城・青森両県の分を送り、後藤伯にも「東北地方へハ充分力ヲ添ヘ呉レ候様」説得を依頼する。(全3: 713)

大学募金につき奈良の田中専達警察部長および河井淡、群馬の新井毫・後藤源九郎、松山の予讃新報を通じて石原信樹県会副議長に、福井県会の永岡定右衛門議長・岡部広副議長に書簡を送る。(全5: 422)
 京都警察官一同より百円の寄付を受ける。(全5: 423)

十二月八日
 植木枝盛に発信、大学設立運動への協力を依頼する。(F1028)

新潟・茨城県議会議員へ大学募金の依頼書を送るについて、重複しないよう徳富に葉書を出す。(全3: 714)

東京帝国大学の渡辺洪基よりこの日付で、大学募金には応じられない旨を伝えてくる。(F1000)

十二月十日

新島の写真を井上・伊藤・大隈・青木・榎本・勝・後藤・渋沢・益田・大倉・田中・平沼・原・岩崎・土倉の十五氏および矢野文雄に送る。(全5:424)

長崎県知事・日下義雄に託し、同県会議長・三波三九郎に書簡を送る。愛知県の内藤魯一・三枝充太郎に募金依頼書を送る。(全5:423)

愛知・和歌山両県の県会開催日を電報で問い合わせる。(全5:423)

後藤象二郎より、大学のため金百円を寄付し、第一銀行に振り込んだことを伝えてくる。徳富にもこのことを伝える。(全5:423)

長崎県知事の日下義雄よりこの日付で来信、妹の入学についての謝辞と大学募金賛成を伝えてくる。

(F1003)

西群馬教会執事よりこの日付で、ギューリックの憲法修正案を印刷、配布してほしい旨を申し込んでくる。(F1004)

N・G・クラークに発信、教会合併に関する新島の見解を述べ、組合教会総会の模様を詳細に報告する。(全6:345)

十二月十一日

宮崎県知事の岩山敬義に託して同県会宛の書簡を送る。(全5:424)

札幌の大島正健よりリングを贈られる。(全3:718)

不破唯次郎よりこの日付で来信、ギューリック意見の出版に賛成してくる。(F1006)

伊勢時雄よりこの日付で来信、東京に千人を収容する大教会を建てたいこと、ついでには建築費一万円をアメリカで募集したいので、有力者への紹介状を書いてほしいと頼んでくる。(F1005)

十二月十二日

朝、八重夫人と共に財部羌の馬車に同乗して七条駅に行き、十時四十分発の汽車で神戸に向かう。途中、大阪に立ち寄り、宮川輝輝に和歌山県会への出張を依頼するが、宮川は喉の病気のため二、三日返答を延ばす。大阪を午後二時二十五分発、神戸に向かう。神戸ではダッドレー、ハウ女史の家に泊まる。(全3: 717, 全5: 424)

岩崎弥之助が同志社に来訪するも、新島は神戸に行つて会えず。森田・金谷・加藤寿らに案内されて校内を見学する。(F1019)

十二月十三日

岡山の立石岐・河本茂四郎に寄付金二十円の礼状を出す。(全3: 716)

市原盛宏より教会合併問題につきこの日付で来信、次のごとく述べる。

(一)教会合併を先生に相談しなかったのは、先生の病気を心配したからである (二)ギュリックのみならずゴードン、ラーネッドらの意見もあわせて印刷するのが公明正大な態度というべきである (三)教会合併について先生の処置を見ると、その深意を理解しがたいところがある。このままでは教会内部に波瀾を生じ、先進と後進の間に軋轢を生ずる恐れがある。(F1011)

十二月十四日

午後、神戸英和女学校裏手の諏訪山和楽園の借家に移る。(全3: 717)

J・C・ペリーはN・G・クラークへの報告中で、新島は弱った肺と慢性的喘息の療養のため、冬の間、神戸に滞在中であること、彼への財政援助のため二百ドルの支出を要請する。(E19-1)

名古屋出張中の金森通倫より十三、四日付で手紙が来る。(全5: 424)

十二月十六日

新井毫よりこの日付で来信、“東京退去”を去る三日特赦されたことを報告、これは新島の尽力によるものであると礼を述べる。(F1013)

十二月十七日

札幌の馬場種太郎に手紙を送り、教会合併につき「我組合会中錚々タル先導者ト称スヘキ人物ハ多分ハ一致論者ニ有之候得共、若手ハ然ラス……」「我カ会ノ錚々タルモノガ組合教会ノ組織如何ヲ打忘レ、僅々ノ手ヲ以テ無理ニ一致ヲ促カサント計リシヲ痛ク駭撃……」「合併ノ議ハ来年五月ノ總會迄延引ニ相成候」と書く。(43:718)

海老名弾正に発信、熊本の神山充家・大迫真之、宮之城の手塚某の三名が東京よりの帰途、諏訪山の新島を訪れたこと、海老名の経営する熊本英学校の委員として神山を加えることを勧める。(43:722) 奈須義質よりこの日付でギュリック意見の印刷に賛成して。 (F1016)

下村の母親よりこの日付で、送金に対する礼状が来る。(F1017)

十二月十九日

岩崎弥之助よりこの日付で手紙が来る。去る十二日に京都へ行き同志社を見学したこと、本城の会堂建設の申し出は時期尚早であり、他の宗教との関係も考慮する必要があるので、本城から問い合わせがあればその旨返事してほしいと伝えてくる。(F3145)

十二月二十一日

植木枝盛よりこの日付で来信、新島より送られた大学設立に関する書類は県会議員らに渡した。同志の者は大学設立に賛成はするが、十余年来、資力を投げうち国事に奔走してきたので、十分な義捐金が集まるか否か予測しがたい。先頃、『土陽新聞』に大学設立の旨意書を転載したこともあるので、同社に義捐金の取次をするよう話しておく、と書いてくる。(F1028)

宮川経輝よりこの日付で来信、伊勢宛の手紙を同封し、新島より送ってほしいと頼んでくる。その内容は教会建設の募金より大学募金が優先するので伊勢の米国行きをやめるように、というもの。(F1027)

新潟の加藤勝弥より「教頭ノミ頼ム」との電報が来る。新島より「内村ドウシタ、クワシキ手紙ヨコヤ」と発信する。(F1025)

十二月二十二日 愛媛県の「大野侗吉^{トウキチ}」一百円ノ寄附ス、来年四月迄」(45:426)

十二月二十三日 大阪の高島鞆之助中将より、来る一月八日に二府四県の主立った人物を招く計画があるので、金森通倫に出席するよう、申し入れてくる。(45:426)

宮川経輝の添書を持って大塚「磨か」に面会、神戸での募金について相談する。午後五時より十時に至る。(45:426)

十二月二十四日 在米の下村孝太郎に発信、一米国人より寄付された一万五千ドルでサイエンス・ホールを建設すること、ブラウン夫人より一年前、同志社へ送られたはずの奨学金が未着であること、同志社通則の印刷物を送ること等を記す。(46:349)

十二月二十五日 金森通倫より、財政難のおり年末年始の進物取り交わしは廃止したい旨、この日付で相談してくる。(F1030)

十二月二十六日 福井の大宮貞之助ら六人が同志社分校設立伺書を提出する。(F1031)

十二月二十八日 海老名弾正に発信、ギューリック意見の印刷についての廻状に回答を求める。書中にいう「何カアル委員連中ニハ……小生ノ廻文ヲ周旋セン事ニ不同意ヲ唱フルモノアリ……小生モ大ニ我カ親愛スル兄弟中ヨリモミス・オンドルストードセラレ已ニ大坂辺ニハ小生ヲ指シテ頑固ノセクタリヤンナドト評スル輩も有之よし、小生ハ元来合併反対論者ニアラス、只今ノ如キ仕方ニ痛ク反対シタルナリ、人ノオビ「ニ」ヨソヲ差止メテ吐カシメザルノ手段ヲ旋スガ如キ未熟未練千万ノ所置ニ大不同意ヲ唱フル

ナリ、小生ノ望ム所ハ合併前ニ充分種々ハオビニヨソヲ呈出シ、充分ニ商量シ前後左右ヲ顧ミテ然シテ後方針ヲ定ムルニアリ、或ル人ハ小生ヲ措シテ狹隘ナルセクタリアント申スル由ナルガ、小生ノ取ル所ハ自治自由平等主義ナリ」と。(全3:726)

小崎弘道にも発信、ギューリック意見の印刷に関し、ギューリックが「一応聯合委員ニ示し候処、其手ニオキ中々何ノ沙汰もセサル由……委員ガギューリック氏ノ所為ヲ右様可否スルノ權ハナキ事ト存候、今ノ委員ハ憲法修正丈ケノ委員ナリ、然ルヲ誤テ他人ノ言論自由ヲ妨ゲントスルカ如キハ權外ノ所為ト云ハサルベカラス」[正例]「教会中種々ノ意見ヲ抱カシメ熟議闊論セシムル事ハ、合併前至当ノ事ト存候ハ、厭投シテ他人ノロヲ閉ツルカ如キハ甚不当千万……」と述べる。(全3:726)

十二月二十九日
在米中の中村栄助よりこの日付で来信、下村孝太郎がロックフェラーと会って大学寄付につき交渉をしたこと、その他の有志家にも会うとのこと、陸奥宗光が五百円寄付する旨、徳富に連絡済みであることを伝えてくる。(T1033)

十二月三十日
新潟の加藤勝弥より“Send immediately strongest possible President also one translation teacher ……”の電報が来る。(T2651)

* 十二月、内村鑑三は北越学館を辞任し、帰京する。(J53:253)

この月、北垣知事より二百円寄付される。(全3:724)

明治二十二年（一八八九）四十七歳

一月一日

井上馨・大隈重信ら大学賛成者、近辺の知事および各新聞社に年賀状と同志社校舎の写真を送る。近
県の県会議員・大学賛成者に年賀状を出す。（全5：427）

柳河に帰郷している広津友吉より、この日付で来信、帰校を中止して個人の資格により福岡県下で大
学募金運動を行っていること、森信夫・風斗実らの尽力により福岡日々新聞社と特約を結び、義捐者
の姓名・金額を紙上に掲載するよう手配したこと、また三池郡県会議員の野田卯太郎に相談し、三池
鉱山局の小林秀和・団琢磨、同集治監の神原富文らに義捐を依頼していることを報告してくる。（一
1937）

加藤勝弥より来簡、北越学館の紛糾も一応結着がつき、内村が辞職したので、その後任を派遣しては
しう旨、依頼してくる。（T1039）

一月二日

奈須義質よりこの日付で来信、九州行きと神学校入学について相談してくる。（T1041）

一月三日

神戸滞在中の宮内省図書頭・九鬼隆一に募金依頼の手紙を出す。（全5：427）

一月四日

板垣退助より一日付の返書を受け取る。山田平左衛門とはかり募金に尽力する旨を伝えてくる。神戸、
伊勢勝の支配人・千谷桑吉より五十円寄付される。（全5：428）

大久保七熊の英語再試験につき、「寮長？」の「松尾音次郎に手紙を書き、学校主監と相談して再試験
を実施させるようにし、大久保にも受験するよう説得してほしい、と頼む。（全4：6）

一月五日

加藤勝弥より電報で、内村の後任に浮田和民を派遣してほしいと要請してくる。(F1042)
 大阪の菊池侃二よりこの日付で来信、大学募金は郡部が思うように運ばず、賛成者を報告するに至らない、と伝えてくる。(F1044)

熊本本の阿部充家より来信、同県下の大学賛成家十一人を推薦してくる。(45:428)

倉敷の小松原慶太郎より、木山を通じ寄付したことを通知してくる。(45:429)

サンフランシスコ在住の山中茂は、帰国する高木文平に託して、書簡および南洋と北氷洋の貝殻・化石・動物の大角等を同志社博物館のために送る。(F1558)

一月六日

中山甚之助よりこの日付で、新年挨拶と共に松平容大の近況を知らせてくる。(F1046)

一月七日

板垣退助に発信。福島県喜多方の土屋重郎に募金協力を依頼する手紙を出す。広津友吉より福岡県三池郡の有志家六名、京都日出新聞の遠山憲員より伊予八幡浜の有志家二名を紹介してくる。(45:429, 430)

一月九日

富田鉄之助よりこの日付で来信、市原盛宏の留学について相談してみるが、東華学校にとってはこの二、三年が最も大切な時期なので、いま市原が去ることには不同意が多い旨を伝えてくる。(F1052)
 予備校の生徒・安永稔よりこの日付で来信、大学募金につき西宮の五十田勇次郎を勧めてくる。(F1057)

一月十日

不破清子「不破唯次郎夫人」永眠。(F1053, 1055)
 西宮の五十田勇次郎に同地方の募金協力を依頼する。(45:430)
 中山光五郎よりこの日付で、栃木・佐野地方の伝道につき詳しく報告してくる。(F1060)

一月十一日

加藤勝弥より再び、浮田の派遣を要請する電報が来る。(F1065)

伊勢時雄よりこの日付で来信、教会堂建設費募金のため来月渡米するので添書を求めてくる。(F1064)

一月十三日

横浜の中島信行に募金協力を依頼したのに対し、この日付で、応分の助力をする旨の書簡を受け取る。

(全5:430, F3159)

押川方義よりこの日付で来信、教会合併問題に関し、渡航前に意見を伺いたいので、今週中か来週はじめに訪問したい、と都合を尋ねてくる。(F1067)

一月十六日

徳富よりこの日付で来信、熊本伝道のこと、奈須義質を奥亀太郎の代わりに派遣することにつき相談しつくる。(F1069)

一月十七日

奈良在住の新島公義よりこの日付で来信、新島・金森連名の年賀状に対する奈良県官の反応——寄付催促のこと——につき意見を述べる。(全5:431, F1070)

浮田和民よりこの日付で来信、女学校において、(一)塾舎内のことはホワイト、和久山が (二)庶務財政は大沢が (三)全体の規則・処置はすべて教員会議で決定している。したがって大沢に「越権の処置」は生じ得ないこと、いま突然に金森を女学校教員会議に出席させることは外人女教師に不愉快な感じを与えるだろう、と伝えてくる。(F1071)

一月十九日

明道館の目賀田栄・脇種熊ら祇園座で「破邪顯正論」を講演し、同志社大学設立の精神を批判、聴衆約五千人におよび、祇園座新築以来の群衆で賑わう。(H12:122)

一月二十二日

新井毫よりこの日付で来信、関西に來ていること、および小室・沢辺両氏の記念文庫については来月中旬までに片付けたい、と記す。(F1076)

大学の寄付金三十円三十ヵ月賦を申し込む人があり、その取り扱いについて村上定より問い合わせる。(F1078)

この日の『東雲新聞』は昨年の出来事として、新島が「同志社大学設立の旨意」を発表し、募金活動を進めている、と報ずる。(131c)

一月二十三日
寺町鞍馬口下ルの旧彦根藩邸六千三百坪を坪当り二十三銭で買収するにつき、金森通倫より了解を求めしめる。(F1079)

* 現在の上御霊神社東側の地域(寺町通まで)にあたる。

一月二十四日
小崎弘道よりこの日付で来信、北越学館の後任人選が困難であること、増野悦興あるいは在米中の小谷野敬三は如何と相談してくる。(F1083)

一月二十五日
寺町鞍馬口下ル旧彦根藩屋敷跡地六千三百坪を一千三百八十円で買収したこと、費用は岩崎弥之助よりの寄付金をあてたことを大沢善助より、この日付で、報告してくる。(F1084)

J・D・デイヴィス、D・W・ラーネッドの「組合・一致合併問題に就いての意見」*Statement on Union* が印刷されて教会内に配布される。(E484)

広津友信「友吉改め」より大学募金協力者として福岡の福陵新報社主・頭山蒨、主筆・川村淳および柳河の風斗実・森信夫を通知してくる。(全5:431)

一月二十六日
本城安太郎よりこの日付で来信、高島炭坑で起きた暴動も自分の尽力で鎮静した旨を伝えてくる。

(F1085)

一月二十七日
群馬県富岡の甘楽教会の河波荒次郎より、奈須義質の後任として伝道にあたることとなったと挨拶し

てくる。(F1086)

一月二十八日

伊勢時雄の渡米につき手紙を出す。押川方義が来訪する。(全4:26)

午後七時より新築された神戸教会において大学のため演説会を開く。宮川経輝・金森通倫が演説、オルチンが歌をうたう。この夜、鈴木清より百円の寄付申し込みを得る。(全5:431, J71:100)

一月二十九日

丹波船井郡の有志家より同郡内で千円を募金するため「奮発」している模様を聞く。(全4:28)

大学予定地として寺町頭の旧彦根藩屋敷六千三百二十七坪を一千三百八十円で買収、さらに続いて六百坪を六十三円五十銭で買収したとの報告を大沢善助より受け取る。(全5:431)

徳富に手紙を送り、二月十一日の祝典に上京する地方三長官、裁判官、警察官、府県会議長らに大学募金を勧誘することを、大隈重信・井上馨に頼んでほしいと要請する。また旧彦根藩屋敷六千九百二十七坪を一千四百六十五円五十銭で買収したこと、費用は岩崎の寄付金をもってあてたいと考えている旨を知らせる。(全4:27, 29)

一月三十日

金森小寿よりこの日付で来信、安住百太郎の経歴を述べ、大学募金に尽力を求めるように勧める。安住の書簡(小寿宛)を同封する。(F1088)

一月三十一日

岩崎弥之助に手紙を送り、同家よりの寄付金八千円のうち三千円を大学設立予定地購入費に充当することの了解を求める。このことにつき渋沢栄一にも一書を差し出す。(全5:431)

一月

須田逸平に発信、伊香保静養中、世話になったことへの礼を述べる。(全4:30)

二月一日

福陵新報の頭山満に手紙を送り、募金への協力を依頼する。「設立の旨意」を頭山と川村に送る。(全4:31, 全5:431)

二月二日

東京の岡田松生よりこの日付で来信、昨年七月に大隈外相官邸で決定した寄付金の取りまとめが十分に行われず、渋沢氏もすこぶる配慮しているようだが、新島からも渋沢が催促しやすいように依頼状を送っては如何、と伝えてくる。(F1083)

中山光五郎に佐野・栃木伝道に関し手紙を出す。栃木出張の費用として十円を送る。(44:33)

山中百よりこの日付で来信、今治地方の大学募金のため金森通倫を派遣してほしい、それができないなら自分が先生の代理として出張したいと申し出る。(F1094)

二月三日

日曜日、金森通倫が諏訪山の寓居を訪問、校務・募金について協議する。(F1093)

奈須義質に代わり甘棠教会を引き継いだ河波荒次郎に伝道の心得と激励の手紙を出す。またその文中、大学計画のため「昨十一月以来数千通之書状ハ天下之人士ニ差出シ、此一月以来自身ニモ已ニ百余通之書面ハ相認申候」と記す。(44:37)

柳河の森信夫・風斗実に募金協力に対する礼状を出す。(45:32)

藤原直信よりこの日付で来信、再び伝道に従事する決心がついたこと、それにつき意見を求めてくる。(F1095)

森田久万人よりこの日付で来信、漢学教師の坂田丈平が生徒の作文添削に難色を示している旨を述べ、坂田の書簡を同封してくる。(F1096)

二月四日

金森通倫よりこの日付で来信、(一)「募金のため」東京へは行かない (二)個人名義になっている同志社の地所を同志社の名義に変更するよう教授会に提案したい (三)下村孝太郎に招聘状を早く出してほしい (四)習字の手本を書いてほしい、と求める。(F1098)

二月五日

住友の広瀬幸平に大学募金への協力を依頼する。(H45:432)

福島県の網島佳吉より県下有力者の一覽表を送ってくる。(H45:432)

二月六日

金森通倫より「住友、三千」の電報が来る。同家支配人の広瀬幸平・伊庭貞剛の英断によるもの、両氏に礼状を出す。(H45:434, F1103)

東京滞在中の北垣知事に大学募金につき手紙を出す。住友家よりの寄付についても報告する。また徳富に北垣知事、田中源太郎に「同志社設立の始末」ならびに「大学設立の旨意」を各三、四十部届けよう依頼する。(H4:39, 40)

吉田清太郎から来信、松山の大野侗吉より百円の寄付申し込みおよび三、四月ころ面会したいのこゝとを伝えてくる。(H45:434)

二月七日

松平容保より、同志社在学中の松平容大を学習院へ転校させる旨、この日付で通知してくる。(F13153)
茂木平三郎よりこの日付で来信、「秩父」大宮伝道が遅れている理由、経済的な困窮について述べる。(F1105)

二月八日

沢沢栄一よりこの日付で来簡、預かっている寄付金のうち岩崎弥之助の三千円支出の件は岩崎も承知しているので西京支店に送ること、および寄付申し込みのうち未収金額と氏名を通知してくる。また原六郎の分については新島より原宛に、払い込み方法につき照会するように依頼してくる。(F1109)

* 原は沢沢に対し、寄付金は沢沢を通さず、直接、新島に送る旨を通知していた。

この日の『東雲新聞』に新島と尾越京都府書記官が発起人となって「京都青年会と称するものを設立せんと目下協議」中であると報ずる。(Ib-e)

二月九日

東京の小田川全之より二十四円と同氏の著書一冊を寄贈される。(全5:434)
 小室・沢辺両氏の記念文庫および大学のことに関し、新井毫の勧めにより、大阪の松本誠直と岡崎高厚に手紙を出す。(全5:434)

徳富に発信、住友より三千円の寄付申し込みのあったことを知らせる。また伊東熊夫と新井毫を紹介する。(全4:43)

同志社憲法発布祝会委員宛に病気のため出席できないが、「爽快に御執行ありて益校中の愛国心を振起発達せしむる様」手紙を出す。(全4:41)

二月上旬

この頃、風邪をひく。(全4:66)

二月十一日

大日本帝国憲法の発布に際し新島とみ・山本さくに養老金として各五十銭を下賜される。(F1124)
 寺町の茶園千二百五十坪をかうよう大沢善助に指示する。(全5:435)

文部大臣森有礼、官邸玄関で山口県人西野文太郎に刺され、翌十二日に死亡する。このことにつき徳富から電報(十一、十二日の二回)が来る。(全4:46, 全6:350, J97:118)

奈須義質よりこの日付で来信、熊本に着き、伝道の準備をしている旨伝える。(F1115)

憲法制定祝賀のキリスト者集会が東京築地厚生館で開かれる。木村熊二司会、津田仙・横井時雄・井深梶之助・平岩愼保ら出席する。片岡健吉ら石川島監獄を出所。(F21:37)

二月十二日

不破唯次郎・杉田潮・杉山重義に教会合併、秩父・栃木伝道について手紙を出す。(全4:45)

京都基督青年会が組織され、木屋町三条上ル大坂町三番戸の宝錦舎において開会式が行われる。なお同会はこの年十二月に木屋町三条上ル中島町十七番戸へ移転した。(F31:15, 21, 36)

二月十三日

N・G・クラークに二通発信、一通には帝国憲法の中に宗教の自由が認められていることを述べ、他の一通には教会合併に対する意見——寡頭政治反対——を述べる。(H46:360)

徳富に発信、国粋保存家・慶応義塾・僧侶などが大学設立運動を起こし「大学が又々一時之流行物之如ク相成リ……自然吾人計画之邪魔ニも可相成候間、成丈吾人ハ長足を為し全天下之賛成家ヲ握取スルコソ必要ナリ」と記す。(H44:48)

西宮の五十田勇次郎が来訪する。三池集治監の大和博に募金協力の依頼状を出す。(H45:435)

小室・沢辺記念文庫設置の趣意書がこの日の『東雲新聞』三百二十三号に掲載される。(19-1)

東京より金三千円が届いた旨、第一銀行より大沢善助宛に通知してくる。(F1118)

三池集治監の大和博に手紙を出し、より一層の募金協力を依頼する。(H44:51)

二月十四日

洋行中の三好退蔵より大学設立のため三百円寄付することを、東京の森為国を通じてこの日付で知らせる。(H44:58, F1120)

二月十五日

洪沢栄一に宛て、原六郎の寄付金に関し説明の手紙を出す。(H44:54)

広津友信に宛て、同志社より憲法発布の祝文を奉ることに賛成の手紙を出す。(H44:52)

山中百、大学募金遊説のため今治に向かう。また県会開会中なのでさらに松山に向かう予定。(H45:35)

下村房より送金に対する礼状が来る。(F1123)

二月十六日

井上馨邸出火の報を聞き、見舞状を出す。また先日来大学用地として七千坪を買収したことを報告する。(H44:55)

永岡喜八よりこの日付で来信、書き替えの公債を落手したこと、「同志社大学設立の旨意」「同志社設

立の始末」を送付のこと、新島の母親は元氣であることを知らせる。(F1124)
 中村栄助、米国より帰航する。(全5: 435)

二月十七日

同志社大学創立事務所より神戸に静養中の新島に、「同志社大学設立の旨意」「同志社設立の始末」各

二百部、外国新聞・雑誌類を汽車便で発送する。(F1129)

山中百よりこの日付で、今治方面の募金について報告してくる。(F1131)

二月二十日

山中百、新島の代理として松山に赴き、県会議事堂の議員控所において大学設立の趣旨について演説す。(19—g)

二月二十一日

児島惟謙大阪控訴院長、高島鞆之助陸軍中將に神戸でそれぞれ面会し、大学募金への協力を依頼する。(全5: 436)

東京の小崎・湯浅・徳富に発信、最近、同志社教授会より社員に対し「吾人大学之企ニ付、今之本校ニハ一切力を添へさるとの苦情と相見申候、又御存之通教科等も一層高尚ならしむるにモニモなく教員も足らず、此上ハ社員ハ何ニを為し呉るゝや」との申し入れがあったので、近く社員会を開いて対策を協議したいと述べる。(全4: 59, 70)

森有礼の追悼式が洛東霊山で行われる。同志社よりJ・D・デイヴィス、森田久万人および生徒代表三名が出席する。(府下各校休校)(F1136)

永岡喜八よりこの日付で来信、憲法発布に際し新島の老母に養老金が下賜されたことを伝えてくる。(F1136)

二月二十二日

松山の長屋忠明に手紙を出し、松山地方の募金について協力を依頼する。(全5: 435)

二月二十三日 宮川経輝・金森通倫と大学設立につき相談する。(J71:101)

山中百よりこの日付で愛媛県会の模様を報告してくる。(T1139)

二月二十四日 湯浅治郎よりこの日付で来信、先日、渋沢栄一と面会したこと、その際、原六郎の寄付金について、渋沢より直接催促できかねるので、新島より直接掛け合って取り決めるよう言われた旨を伝えてくる。(T1141)

神学生加藤馨之助の紹介により、新潟の佐瀬精一に大学賛成を依頼する。(45:436)

二月二十五日 同志社社員会を山本宅で開く。新島欠席。金森通倫を社員に加えること、下村孝太郎を招聘(年俸七百二十円)することが決まる。(D1:1262)

福岡の頭山満に再び大学賛成の依頼状を出す。(45:436)

白石村治よりこの日付で、越後長岡方面の伝道につき意見を求めてくる。(T1143)

二月二十六日 大阪出張中の金森に第一銀行を通じ一千元を送り、大塚磨に託して株券を買わせる。(T1146)

不破唯次郎よりこの日付で来信、教会合併、上毛地方伝道の報告および経済的困難について述べる。

(T1145)

二月二十七日 原市教会の杉山重義よりこの日付で来信、上州諸教会の教勢を伝えたと共に、教会合併にかかわる憲法修正案につき意見を述べる。(T1152)

山中百、伊予遊説より帰り、その成果を報告する。(45:436)

新島公義より奈良漬けを贈られる。(44:66)

二月二十八日 D・W・ラーネッドよりこの日付で来信、ハリス寄付の五万ドルおよび下村孝太郎のことにつき書く。

(F2684)

金森通倫よりこの日付で来信、大阪方面の募金につき児島惟謙・高島鞆之助・建野大阪府知事の連名で有力者を招待し、会合を開くことになったと報告してくる。金森通倫はこの夜、和歌山に出張する。

(全5: 439, F1149)

本城安太郎よりこの日付で、結婚相手の紹介を頼まれる。(F1148)

古賀鶴次郎(快象)より憲法発布を賀す漢詩を贈られる。(F1153)

福島安部井磐根に大学募金協力を求める手紙を出す。(全4: 61)

三月一日

文学教師坂田文平が六月限りで退職すると申し出た旨を、森田久万人より知らせてくる。(F1155)

不破唯次郎に上州伝道と教会合併について手紙を出す。(全4: 63)

三月二日

山中百の勧めにより香川県の募金に着手することとし、森田武左衛門・三木始の両氏に書簡を送り、県会議長の松本貫四郎の協力を求めるよう依頼する。(全5: 439)

徳富猪一郎よりこの日付で来信、森有礼が刺殺されて以来、社会的風潮が保守的となり、人心が右に左に揺れ動いている状況なので、大学設立運動も遠慮なく堂々とその主義主張を展開するよりほかに良策がないこと、ついでには四月にも上京して運動にあたるよう勧めてくる。(F1158)

三月四日

D・W・ラーネッドよりこの日付で、理学部に寄付者ハリスの名前を付けるよう言ってくる。(F2686)

広津友信よりこの日付で来信、八重夫人が北垣知事のところへ出向く前に面会したいので、訪問の期日を問い合わせてくる。(F1160)

三月五日

徳富猪一郎に発信、教会合併問題にふれ、「吾人をして真之自由教会ト自由教育を得せしめよ、此二

件ハ車之両輪あるか如きは非トモナカラネハナラサル者と確信仕居候」。また阪神の募金状況を述べ、東京に行きたいと思うが「八重カ末タ不同意……小生ニ取り大警視を以而自任」、更に学内の状況は「教授会より何ニカブウ々々申立……眼前之事ノミを見る先生方ニハ大閉口」と書く。(44: 67)

愛媛の石原信樹・高須峰蔵(改進黨員)・河原田新に募金協力の書状を出す。(45: 437)

この日付で、森田武左衛門より大学設立に賛成のこと、印刷物を県会議員や有志家に配布したことを知らせてくる。(F1165)

松平容大の近況を知らせたことにつき中山甚之助より礼状が来る。(F1164)

愛媛県中郡長の二俣今朝松、小学校長の石原信文に募金協力に対する礼状を出す。(45: 436)

この日付で三通来信——森田武左衛門より病氣見舞い。(F1165)

中村栄助より鶴飼の人物および援助した関係につき問い合わせ。(F1166)

柴原宗助より、坂田丈平辞職の本当の理由は国会選挙への出馬であること、それを止めさせてくれるようにとの依頼、教会憲法修正案を見たが、それでもなお合併に反対である旨を伝える。(F1167)

不破唯次郎・茂木平三郎よりそれぞれこの日付で来信、早急に秩父大宮伝道に着手すべきことを述べる。(F1168, F1170)

山口県会議長の吉富簡一に面会する。(45: 439)

広津友信よりこの日付で来信、日本基督教会憲法の修正案にはまだまだ不満な点があること、中川虎一郎が永眠したことを伝える。(F1169)

* 中川は明治十九年三月、D・C・グリーンに反感を抱き連袂退学した九名中の一人。

三月六日

三月七日

三月八日

中山光五郎よりこの日付で来信、明確な理由のないまま伝道会社より若松へ転任するよう言ってきたが、佐野伝道もようやく見込みが立ちかけているので、後任の決まるまでこの地で伝道できるよう相談してほしいと頼んでくる。(F1171)

三月九日

下村孝太郎に発信、同志社よりの招聘に応じてほしいこと、ニューロンドンに住むラーネッドの友人より「一万弗スイヨンホール之為寄付致し呉、又統而五千弗寄付相成り、又殊ニより候ハ、サイ「エ」ンテフィクデイパルトメントノ為メニ五万弗ノ寄付アルトモ難計候……」と記す。(H4:71)神戸に滞在中の井上馨に手紙を送り、将来のことを依頼する。また森田武左衛門に手紙を送り、高松方面の募金について協力を依頼する。(H5:439)

波沢栄一より募金に関する通知が届く。二万二千六百円の寄付がすでに入り、原・大隈・青木はいまだ入金なし、益田より半金入ったことを知る。(H5:439)

アメリカより帰国した上野栄三郎より、この日付で来信、カナダ経由で新島に送った絹「織物」についての質問に答える。なお明後日、神戸に着くのでお目にかかりたいと記す。(F1137)

三月十日

八重夫人、神戸より一時帰宅する。(F1168)

金森通倫よりこの日付で来信、大阪の大学募金集会は二十日夜に児島院長宅で開くことが決まった旨、通知してくる。(F1174)

三月十一日

佐野の中山光五郎に発信、「後任の来らざる内は何卒他に御移転ナキ様」「貴君ノ働キハ種播ノ時代ナリ」と書き、激励する。(H4:72)

三月十二日

金森通倫を通じて大西祝の手紙を送られる。大西の意見は次の通り。(一)大西のドイツ留学につき校内

に異議を生じはしないかと心配している (二)自由にその説を述べて教えることを許されたいこと (三)一定のドグマをもって教授を檢束するよりも、むしろプラクチカルバイティーをもって前途のキリスト教を拡張したいこと。(45:440)

広津友信よりこの日付で來信、北垣確の熊本英学校入校について、熊本の海老名弾正に書簡を送ったこと、また自分の卒業後の進路についても書く。(F1176)

本城安太郎より、この日付で手紙が来る。(F1177)

三月十三日

北垣知事の子息を熊本英学校で教育することにつき、海老名に依頼の手紙を送る。(44:76)

近藤喜則が神戸の寓居に來訪する。(44:75, 45:440)

三月十四日

児島惟謙より、来る二十一日、堂島二丁目の同氏邸に大阪財界人二十七名を招待して募金の集会を開くことを通知してくる。(45:441)

兵庫県會議員の中井幹造・大江頼之助・岡精逸および田尻東一郎が來訪する。(45:443)

三月十四・五日

佐々城豊寿・潮田千勢らが發起人となって東京厚生館において、同志社大学設立義捐金募集のための音楽会が催される。(14-e)

三月十五日

児島惟謙より來信、来る二十一日の大阪の集会は建野大阪府知事の都合が悪く、二十五日に延期する旨を通知してくる。

また金森通倫より、名古屋の募金状況につき、来る十八日、愛知県議事堂に有力者を集め、募金演説を行うことを通知してくる。(45:443)

神戸明道館の目加田護法より、この日付で來簡、新島の意見を聞きたいので、前約の通り金森通倫を

三月十六日

遣すか、あるいは自分が出向くか、その回答を求めてくる。(註4:436)
 中村航造よりこの日付で来信、山岡の後任に東正義が会津若松へ着任したこと、および若松地方における大学募金や山本家の墓碑について知らせてくる。(F1183)

同志社入学を希望する「？」半谷高晴が来訪、新島より金子「兼子常五郎か」宛に下宿さがしの紹介状を与える。(F1185)

一致・組合両教会合同委員ら東京に会合し、憲法草案を修正、かつ合同教会の名称を日本連合基督教会と決定する。(F4:221)

三月十八日

東京青年会館において湯浅・小崎・宮川・松山らの社員が協議会を開く。三月二十八日の社員常議員会にその結果を報告する。(D1:183)

三月十九日

N・G・クラークに発信、次のように述べる。(一)教会合併についてアメリカン・ボードが態度をはっきりさせないと、組合教会は自由な制度を失い、寡頭政治に陥ってしまうだろう。合併の憲法は修正されているが、十分なものとは思えないこと (二)同志社の水準の向上のため教師を留学させたいこと (三)健康状態について、心臓の動悸はまだ不規則できつい仕事はできない……すぐに良くならないようなら、現在の地位を辞めなくてはならぬのではないかと思う。(註6:351)

この日付で三通来信。(一)金森通倫より、十八日に開かれた名古屋での大学集会は、勝間田知事・大塚控訴院長らの有力者は出席したが、資産家の出席が少なく、成功とは言えなかった。このため来月もう一度集会を開く予定である、と報告してくる。(F1188)

(二)不破唯次郎より、教会合併について上毛だけは統一意見で会議に臨みたいこと、関東地方の伝道状

況、経済的困窮を訴える。(F1187)

(三)河波荒次郎より、東京専門学校の青年会の隆盛を知らせてくる。(F1189)

三月二十日

兵庫県会議員十五名に面会する。そのうち内藤利八・鹿島秀麿を一力亭に招いて募金協力を依頼する。

石田・善積は欠席。(全5:443, 449)

杉山重義よりこの日付で来信、過日、不破唯次郎・茂木平三郎らと秩父大宮を視察、ずいぶん見込みのある土地だと思うが、伝道には十分適任の人物を得て定住せしめる必要がある、と報告してくる。

(F1180)

三月二十一日

数日前、渋沢栄一より原六郎の書状を同封して送ってくる。新島に不快の感情を示す内容であった。

この日、渋沢・原両氏に宛て弁明の手紙を書き送る。(全5:449)

東京の小室信夫、九州に赴く途中、来訪する。(全5:449)

三月二十四日

渋沢栄一よりこの日付で来簡、二十一日の新島の手紙を受け取ったこと、これにより「原六郎氏寄付金之儀ニ付行違云々ハ此度之尊書ニテ明了ニ帰シ原氏より厳格之来書も始めて了解致候」と述べ、今後の処置について記し、さらに神戸に立ち寄る井上馨に会って事情を説明し「同伯より弁解被成下候様いたし候方」が良いと記す。(F1194)

万国青年会幹事シ・D・ウィッシャーが来校、校内に数百の悔改者が起こり、この日、同志社教会での受洗者百三名に上る。(F1:102)

三月二十五日

同志社大学設立資金募集演説(稿)を起草する。(全1:18)

児島惟謙大阪控訴院長の自宅に高島綱之助大阪師団長・遠藤謹助造幣局長ら大阪の有力者十数名が出

席、新島より大学設立資金募集について挨拶をする。(金1:148, F1192)

村野正人(商法会議所長)・木場貞長(書記官)が来訪。宮本国丸(旧高松藩主の伯父の子息)が森田の書状を持参して来訪する。多聞教会より百円の寄付を受けたことを永岡より聞く。(金5:450)

北垣確の熊本英学校入学に関し、海老名よりこの日付で、学校の様子、厳格さ等について伝えてくる。(F1195)

三月二十六日 宮川経輝を招き、朝九時より午後二時すぎまで協議する。(J71:102)

三月二十八日 山本寛馬宅で社員会を開く。新島欠席。(D1:1263)

冬期休暇に入り、広津友信・松尾音次郎に但馬地方での募金遊説を依頼する。本間重慶は高松に出張し、有志賛成家数名を発起人として懇談会を開く。(金5:452)

三月二十九日 森田武左衛門より本間の高松来訪について通知してくる。(F1199)

徳富猪一郎が来訪する。(金4:82)

三月三十日 新島夫妻、午後に入り神戸より帰宅する。三条小橋西入ル萬屋に滞在中の徳富に、明日は何時に来訪

しても良い、と連絡する。(金4:82, 95, F1200)

神戸北長狭通の岡本イソより十円の寄付を受ける。(金5:450)

三枝光太郎よりこの日付で来信、三枝夫人が京阪方面へ行くので、ぜひ面会してほしいと連絡してくる。(F1201)

三月三十一日 森田武左衛門よりこの日付で来信、非常に多忙であること、仏教徒の運動が盛り上がっているので募金運動に苦しんでいることを報告してくる。(F1202)

三月

「日本聯合基督教會憲法并規則」が刊行される。(上474)

四月一日

原六郎の寄付金につき「渋沢氏ヨリ来書アリタルニヨリ、其意ニ任セ先勉テ弁解セサル事ニ致シ、井上伯婦京ヲ待チ」弁護を依頼することとする。(全5: 450)

福山の菊池純二郎より漆の植樹を勧められたことにつき礼状を出す。(全5: 450)

東京の武光正成の死去に際し遺された十円を大学のために寄付される。(全5: 450)

但馬の田尻東一郎よりこの日付で来信、広津・松尾の二名が養父郡・気多郡において大学設立資金の募金を行っていること、また美合・二方の二郡の状況について知らせてくる。(F1204)

北垣知事より子息の熊本英学校進学について手紙が来る。(F1203)

* 京都市制施行(知事が市長職を執行)。

四月二日

長屋忠明よりこの日付で来信、大学募金に協力すること、松山地方の募金に対する一般的な状況、大野侗吉が寄付納付かたがた神戸へ行くので、面会して彼に信仰を説いてほしい旨を書いてくる。(F1205)

同志社卒業生の村上小源太・直次郎より五円の寄付を受ける。高松の大学賛成有志家の土屋兼雄ら十四名に礼状を出す。福島の綱島佳吉より、同地方の有力者に募金依頼状を出すように勧めてくる。

(全5: 451, 452)

四月三日

花畑健起が来訪、新島は彼に卒業後の希望を聞く。(F1209)

田尻東一郎(但馬養父郡浅倉村)より広津・松尾のため周旋した旨の通知があり、これに答書を出す。高松の山岡より来状、大学募金を、将来、松本貫四郎に委託するよう忠告してくる。(全5: 453)

四月四日

* 新鴻の組合派・一致派が合併、新鴻基督教会となる。(F.26:23)
不破唯次郎よりこの日付で来信、秩父大宮伝道は近々着手することに部会で決定したこと、関東地方の伝道状況および伝道費用の送付確認について記す。(F.1207)

四月五日

京都の平瀬与一郎を通じ淡路島の印部俊平・泉甚五郎よりの寄付金各三円を受け取る。(A.5:453)
福島の綱島佳吉の勧めに従い、同地の田中孝七ら十名に大学募金依頼状を出す。安永稔の勧めにより西宮の五十田勇次郎・平井米介に手紙と寄付帳を送る。(A.5:452, 454)
北垣確のことにつき熊本の高老名に発信、四月一日付の北垣書簡(新島宛)を同封して送る。(H.4:92)

四月六日

東京英和学校〔現在の青山学院〕を辞任した元良勇次郎に手紙を送り、その進退について尋ねる。
(G.12:264)

兵庫県以西諸教会宛に大学募金協力を依頼する手紙を出す。(A.5:454)

宮川経輝に大阪での募金演説を依頼する。(A.5:453)

白石村治よりこの日付で、新潟地方の様子を知らせてくる。(F.1211)

この日、元備中松山藩主・板倉勝静死去。六十七歳。(J.52:278)

四月八日

神戸に来て中山手通六丁目のJ・E・ダッドレー方に滞在する。二十七日まで。(A.6:353)

綱島佳吉よりこの日付で来信、四、五日前、山田福島県知事に面会して大学計画について話したところ、同志社のためできるだけ尽力する旨の返事を得たことを報告してくる。(F.1213)

この頃、新潟の宣教師D・スカッター Doremus Scudderに教会合併につき手紙を書く。その翌日、

教会合併のための改正憲法 Revised Japanese Constitution for church union が新島の手元に届く。

(全6:354)

四月九日

夜七時よりラーネッド宅において教員会を開く。(F1214)

四月十日

大阪青年会館において同府下諸教会の会合が催される。新島は宮川経輝に託して各教会の募金を担当する松浦・安藤・新田・望月・増野・本間・亀山らに書簡を送り、その尽力奔走を依頼する。(全5:457)

四月十一日

金森通倫よりこの日付で来信、神戸周辺七教会の信者を集め、大学のため集会を開いたが、応募額百五、六十円にとどまる。(F1218)

不破唯次郎よりこの日付で来信、上州の教勢を伝えると共に、前橋女学校の発起人に加わってほしいと頼む。(F1217)

四月十二日

N・G・クラークに発信、ミッシュヨナリー・ヘラルドに新島の書いた“Plea for a Christian University”が掲載されたことに礼を述べる。前週、京都に帰ったが、気候不順のためベリー博士に勧告されて再び神戸に来ている(四月八日)ことを知らせる。上州方面の伝道・教会合併のこと、同志社教師の留学についても述べる。また二年前、ルイビル Louisville のブラウン氏 Mr. Browne よりもらった奨学金六十ドルがあやまってD・W・ラーネッドに送られ、“the station work”に使われてしまった。金を取り戻す方法はないだろうか、と相談する。(全6:352)

下村孝太郎に発信、(一)この秋に帰国するか (二)なお八〜九カ月ないし一年ほど滞米して大学募金に「御奔走可被下也、否之所御通報被下度候」。新島としては(一)を望むけれども、下村が(一)を望む場合

は帰国旅費として三百円送ると伝える。(全4: 95)

神戸布引の川崎正蔵よりこの日付で来信、井上馨の神戸帰航について何の連絡もないこと、もしわかれれば連絡すると伝えてくる。(F1221)

四月十五日

この日と五月一日に S. L. Gulick, *Church union in Japan* が刊行される。(E472)

井上馨に宛て一書を認め、大阪方面の募金につき姓名と金額を挙げて尽力を請う。この書簡は同月二十日、神戸に滞在中の井上に届けられたものと思われる。「今回大坂ニ於ケル企ノ成否ハ一ニ閣下之御承諾下サル、ト否トニ関スベシ……小生ハ最早河ヲ渡リ背水ノ陣ヲ為スノ感情ヲ以テ相認候」また「神戸之運動ハ甚覺束無ク存シ大ニ困却仕居候」と述べる。(全4: 96)

四月十六日

大阪の高島中将に書簡を送り、大阪有力者の氏名と希望金額を列記し、尽力を求める。(全5: 458)

新潟のドリーマス・スカッターに合併問題につき発信、教会憲法を完全に修正しなかったが、病気のためそれができなかったこと、新島が合併に反対するのは組合教会の自由な制度を守りたいからである、と記す。(全6: 354)

新島が国外脱出以前、江戸の川勝塾で同門だった松前藩の邸尾四郎・鈴木熊六は、維新の際、不幸にも死亡した旨、北海道福山の菊池純二郎より、この日付で返事が来る。(F1228)

四月十七日

中村栄助より、京都部会で寄付金の取り扱いを協議したこと、丹波地方の募金は村上・奥村郡長らと協議、依頼したことをこの日付で伝えてくる。(F1230)

佐々城豊寿・潮田千勢らは同志社大学設立資金を寄付するため音楽会を催し、その収益金を寄贈したが、それに対する礼状に再び返書を送ってくる。(F1231)

四月十八日

村上定よりこの日付で来信、関西地方の新聞社員の懇親会を四月二十一日に開く予定であると伝えてく。 (F1233)

古木虎三郎よりこの日付で来信、高梁教会の横田某はさきに大学設立のため二十銭の寄付をしたが、更に「生涯板ノ上ニ坐スルモ厭ワズ」として家中の金二円を集めて寄贈する旨、連絡してくる。 (F1234)

四月十九日

井上馨、九州旅行を終え、神戸着、二十六日まで常盤楼に滞在する。 (J23: 94)

四月二十日

新井毫に発信、その中で近況を述べる。「再び神戸ニ戻リ申、尚流寓之身と相成居、近頃降り続ける風雨之為に幽閉せられ戸外ニハ一步も踏ミ出さず、只日々禿筆を把り彼之大学之為諸方へ書面を出す事を以而小生之業務となし居候、殆花の散りなん春も知られすと迄申居候」と書く。 (全4: 101)

小室・沢辺文庫につき、この頃、大阪の松本誠直・岡崎高厚に問い合わせの手紙を出す。 (全4: 101)

北海道空知監獄署の看守長・原田正之助より大学設立に賛同して「衣食ニ難代之刀劔」一双を寄付すること、および郁春別村村民十七名の寄付者名簿を同封してくる。五十戸の村落で坑夫・鍛冶職・豆腐屋・風呂屋ら十七名、最高一円から最低十銭の寄付を受ける。 (F1235)

四月二十二日

神戸御影に休養中の井上馨に、前日に引き続き再び書簡を送り、大阪方面の募金について尽力を要請する。「……小生ハ最早河ヲ渡水ヲ背ニシテ陣セシ者ナリ今回ノ勝敗ハ偏ニ閣下之御助力アルト否トニ関スヘク幸ニシテ勝ヲ制セハ大勝利タルヘク不幸ニシテ敗ヲ執ラハ大敗北タルヘシト決心仕居……」 (全4: 103)

* 井上宛書簡に於いて、(J23: 94) は4月11・12日の二回、(全5: 453) は4月11日に二回発信した。

とになっている。

不破唯次郎に発信、女学校創立の発起人になることを承諾する。男子宣教師の招聘については「当分ハ見合セ置き相成……小生ニ御任セ被下間敷や」と書き送る。(44:102)

但馬地方の同志社賛成家十三名に礼状を出す。(45:459)

アメリカ駐日公使ハバード Richard B. Hubbard と児島惟謙が来校、チャペルで講演する。聴衆多数のため二階が落ち、十数名が負傷する。(45:459, F1238, F1239)

四月二十三日

同志社書記・永岡喜八が昨日のチャペル二階墜落事故について京都よりその顛末を報告に来る。(45:460)

但馬の同志社賛成家九名に手紙を出す。(45:459)

大阪の松本誠直・岡崎高厚からこの日付で来信、小室・沢辺文庫の整理が思いのほか遅れているが、金額は少なくとも七百元くらいになること、いづれ五月末には確定額を通知する、と連絡してくる。

(F1237)

* 小室・沢辺文庫のうち、すでに明治二十年十二月十五日、東京より長持ち四荷の書籍類が同志社に届けられており、ここに記されているのは関西の分と思われる。文庫がすべて同志社に入ったのは明治二十四年九月三十日で、同年十月三日、記念文庫の開庫式が行われた。和漢洋五千余冊。

四月二十四日

御影に井上馨を訪問するが不果。(45:460)

中山光五郎よりこの日付で来信、佐野の伝道報告と共に同地の信者のため能力のある後任者を得て転出したい旨を申し出る。(F1240)

中島幸三郎よりこの日付で来信、チャペル二階落下事故の負傷者の中に弟の坂田貞之助がいないかどうか、問い合わせてくる。(F1239)

四月二十五日

午前中、御影に井上馨を訪問、暫時面会する。更に西宮に行き五十田勇次郎を訪い、同所で二宮・平井にも会う。夕方、諏訪山の一力亭において村上定・矢野万宗と夕食を共にする。(45: 460)

海老名よりこの日付で来信、熊本英学校に入学した北垣確の模様について報告してくる。(F1241)

四月二十六日

永岡喜八を呼び、大阪の各新聞社に大学募金第二次募集の取り扱いを委嘱し、その広告を掲載するよう依頼させる。(45: 460)

田口卯吉・伴直之助より連名のチャペル二階墜落事故の見舞状(二十六日付)を受け取る。(F1242)

四月二十七日

神戸(ダッドレー方)より京都の自宅に帰る。(44: 105, 106, F1252)

和歌山の児玉仲兒よりこの日付で来信、臨時県会が来る五月七日より三、四日開かれるので大学設立に関し誰かを派遣しては如何と通知してくる。(F1244)

中村紅造よりこの日付で来信、山本家の墓碑のこと、若松地方伝道のこと、福島県下の大学募金について報告、また中学校設立の費用について問い合わせしてくる。(F1245)

四月二十九日

元良勇次郎より、将来の仕事についての新島の勧めを、この日付で断ってくる。(F1246)

新井毫よりこの日付で、備後庄原の田部香蔵より同地の英学校教師を同志社より招聘するにつきその斡旋を頼まれたこと、また小室・沢辺文庫について松本・岡崎を督促し、一日も早く文庫を設立するよう勧めてくる。(F1247)

四月三十日

朝、北垣知事を訪問する。のち西郷「海軍」大臣へ面会を希望する金森のため添書を依頼、明朝参上

して受け取りたい旨を手紙で頼む。「小生も本年申ニハ出京仕、黒田総理大臣殿ニも御依頼仕度胸算ニ罷在候」(全4:109)

東京および京阪神の有力新聞・雑誌社の同志社大学義捐金取り扱い(第一回)、この日をもって締め切る。翌五月一日より第二回取り扱いを始める。(15-1,2)

広瀬宰平よりこの日付で来信、広瀬の渡米にあたりお互いの健康を気遣い、再会を期する旨を述べる。(F1250)

四月

五月一日

茂木平三郎よりこの日付で来信、緑野教会が設立「四月十九日」されたこと、その結果、求道者や洗礼志願者が出てきたこと、長田と共に秩父大宮へ伝道に行ったことを報告してくる。(F1251)

この月十二、三日頃、鳥取に派遣した青木要三・古木虎三郎が帰京、同地方の報告を聞く。(全5:461)
京阪神の各新聞社、同志社大学第二回募金取り扱いを始める。(全4:120)

この日付で三通来信。(一)井深梶之助より、教会合併に関し英文憲法及規則ができたので、一冊送る、この手紙が来る。(F1253)

(二)小崎弘道より、カリフォルニア州にいる弟の成章を東部の学校へ入学させたいが、学費を得る方法はないものか、相談してくる。(F1254)

(三)佐々城豊寿より、大学募金のため東京厚生館で開かれた音楽会の出納表ならびに顚末書を郵送してくる。(F1255)

五月二日

静岡の三浦錠蔵・田邨武治(連名)より来信、大学募金賛成の印刷物を同封してくる。夜、徳富猪一郎来訪する。(全5:462)

佐賀の安住百太郎より金森夫人まで、大学募金賛成者として肥筑日報社長の村岡致遠、佐賀新聞社長の江副靖臣を紹介してくる。(全5:461)
名古屋の三枝光太郎が同志社を訪問する。(全5:464)

北海道市来知より小山義久が来訪し、同地の原田正之助より託された日本刀二振を持参、大学設立のため寄付する。この刀は同志社に今なお収蔵されている。(全5:464)

前夜より来京していた徳富猪一郎のほか浮田和民・金森通倫を加え、四人で将来の方策および学校運営について協議する。(全5:464)

和歌山県会議長・児玉仲児の勧めに従い中村栄助・新島公義を和歌山に派遣することとし、二人に依頼状を送る。(全4:112, 113, 114, 全5:465)

五月五日
朝、中村栄助が和歌山出張につき来訪する。演説の要旨を記した紙片を渡す。(全4:117, 118)

川本政之助よりこの日付で、中四国地方での大学募金旅行の詳細を報告してくる。(全5:465)

五月七日
徳富猪一郎に発信、「近来一致之事ニ関し諸方より小生之意見に問合せ参り……小生之同意賛成を得んとするか如し、小生も過日一寸申上候事を履行せんには、彼等ニ向ひ余り反対之鋒を顯すも決而得策ニ非らず、又去リトテ甲を脱し降伏ハ出来不申、先当分は局外之地置^{〔位〕}ニ立ツ」と記す。(全4:119)

五月八日
米国コネチカット州ニューロンドンのJ・N・ハリスより「芸術館」新築のため一万五千ドル、地代一千五百ドルのほか、更に五万ドルを寄付する旨の通知を受け取り、委員三名のサインの入った条約書を送られる。(全5:466)

神戸の鈴木清よりこの日付で来信、前年九月に新島公義で購入した神戸女学校前の土地五十二坪のう

五月九日

ち三坪を道路として寄付するため、名義変更の捺印を求めている。(F1261)
但馬の大江頼之助に一書を送る。東京の佐々城豊寿より先日開催した同志社音楽会の関係書類をこの日受け取る。(45: 466)

夕方、和歌山に出張した中村栄助・新島公義より「都合よくまとまった」との電報が来る。(45: 466)
神戸の川本泰年よりこの日付で来信、兵庫県庁に勤める浦木弘が県下を巡回する際、その余暇に大学設立趣意書を配布してもらいたいと思うので、同趣意書を三、四十枚送ってほしいと言ってくる。

(F1262)

五月十日

「三拾番教室」写真の裏面に墨書する。(D2: 17)

* 明治廿二年五月十日識ス 新島襄

(明治九年四十円を以テ之ヲ求ム

同二十二年三十円ヲ以テ之ヲ売却ス

此ノ写真ハ即チ 旧時同志社三十番ト称セシモノニシテ創立ノ三四年間ハ校内ニ於テ公然聖書ヲ教授スルヲ禁セラレタルヲ以テ不得止此家ヲ用ヒ校外ノ聖書教場ト為シタルナリ其後病室ト為シタルモ本年ニ至リ之ヲ売却スル事ニ決セリ

川上八三郎よりこの日付で、チャペル墜落事故の見舞状が来る。(F1263)

五月十一日

三池鉱山の団琢磨、三池集治監の神原富文ら同志社大学設立につき寄付する。(15—x)

五月十二日

日曜日、「本日ハ午前同志社之集りに出頭」「午後多分之来人有之大ニ疲労」する。

午前中、説教のち教会合併の相談がなされ、「闊議二時間之後」憲法修正四カ条を決定、神戸での総会に臨むこととなる。夕方にも合併問題について同志社で集会が開かれる。(新島の出欠?) (44: 1)

127, 129)

この日、徳富猪一郎に三通の手紙を書く。

(一) ハリスよりの寄付は六万五千ドルに上ること、三人の委員により運営されていること、留学中の下村孝太郎が設置予定の理化大学の教授に就任を承知したこと。(全4: 125)

(二) 教会合併に関し海老名は中央集権論者に変じた由、「我が党中已ニ此ノ傾向アルハ小生ノ此二兩年来看敗セシ所ナリ而シテ憲法ヲ以テ之ヲ決行スルニ至ラハ我カ教会ハ将来貴族的独断的政治ノ下ニ生息シ……吾人ノ当時甘受スル所ノ自由ハ何レヘカ消滅シ去ントスルハ本日ヨリ断言仕ルヘシ」

(全4: 129)

(三) 同志社教会が聯合憲法に対し四カ条の修正決議をし「此処四点ハ一点モ屈ゲズト断言被約候」「同志社之生徒全体ニ本日ノ如キ自由ヲ愛スル元氣ヲ示セシハ小生モ未ダ曾テ目撃セサル所」と述べる。

(全4: 127)

北垣知事へJ・N・ハリスの寄付が確定したことを報告し、さきの一万五千ドルに加え、更に維持費として五万二千ドル追加されたこと、この寄付金は三人の委員によって一兩年中に送金されるだろうと述べる。(全4: 130)

五月十三日

五月十四日

不破唯次郎よりこの日付で来信、新島およびベイカー夫人の手紙を受け取ったこと、教会合併について上毛各教会の意見がまとまっていないこと、関東の伝道状況を通知してくる。(F: 1264)

神戸の鈴木清よりこの日付で来信、山本久栄が、この朝京都を発ち、大阪で診察を受けたのち、午後、鈴木宅を訪ねてきたので留めおいている旨を連絡してくる。(F: 1267)

五月十五日

N・G・クラークに発信、教会合併に関するクラークの提案に感謝する。提案に従い可能ならばすべての福音主義の宗派まで含む“An Evangelical alliance”を提案したい。森田久万人の留学は同志社に現在ある Collegiate Course をより確固たるものにするためのものである。またハリスの寄付金についても感謝する。(全6:355)

五月十六日

和歌山の児玉仲児に礼状を出す。(全4:132)

五月十七日

J・N・ハリスに寄付金〔合計六万六千五百ドル〕への礼状を出す。(全5:467, F2292)

大阪朝日新聞社の上野理一に同社取り扱いの第一回大学義捐金五百六十三円三十二銭五厘につき、領収書と礼状を送る。(全4:133)

五月中旬

A・ハーディ夫人に手紙を出す。最近、京都で財政問題に関する会合が開かれ、ハリスの寄付がちょうど良い時にやってきて安心したことを知らせる。(全6:356)

五月十九日

奈良の正久巳之助よりこの日付で来信、化学の勉強をしたい、と相談の手紙が来る。(F1270)

五月二十二日

組合教会第四回総会が神戸教会で開かれ、教会合併問題を協議する。二十七日まで。

(一)憲法草案に十二カ所の「頗る根本的な」修正を加える。

(二)小崎弘道・金森通倫・湯浅治郎・宮川経輝・杉山重義を委員に選び、修正案をもって一致教会と交渉にあたらせる。

(三)一致教会との交渉が成立すれば、三カ月後に代員による聯合会議を開き、合併式を挙行する。(F1:104, J22-2:21)

この総会是小崎弘道によれば「最も喧騒を極めた会議」で、会議中議長が四回変わったという。(F

新島は病氣のため欠席。広津友信・花畑健起に発信、「小生ノ一身ハ天父之御手ニ任せ出席するも幸出席せざるも亦不幸と認不申、甘んじて天意之存する所ニ随のみ」……各会之意見を問合セ為ニ到底調和之見込なき時ハ聯合相談中止否停止スルニ如カスト申合置候」(44:135)

「同志社大学義捐金の第二回募集取扱広告」が『国民之友』第五十一号に掲載される。同様の広告が第一回と同じく報知新聞社はかの新聞・雑誌に掲載される。(15—1)

五月二十三日

一致教会第五回定期大会が東京新栄会堂で開かれる。組合教会の修正案の到着を待ってそれに対応する一致教会の修正案を作成、組合教会と協議するためイムブリー・植村正久・井深梶之助の三名を神戸で開催中の組合教会総会に派遣する。同大会は二十三、二十四日および二十七～三十一日の期間開かれる。(122—2:21)

五月二十四日

五月二十五日

海老名弾正よりこの日付で来信、熊本英学校に在学中の北垣確の近況を報告する。(F1273)

坂田丈平と柴原宗助を招き、午後五時より三本木の茨木屋で夕食をする。(全4:139, F788)

神戸に來ている広津友信よりこの日付で来信、教会合併につき「我儕青年之議論ハ老実徳望アル方々ト相協ハズ甚タ不満……我儕ハ自家ノ確信ニ立タント決定……議事ノ終決ノ上諸氏ト謀リ向後ノ処置ヲ相定申度候」と報告する。(F1274)

五月二十八日

同志社社員会が午後二時より新島宅で開かれ、次のことを決める。

(一) 暦年度に改める (二) 金森通倫を七月より三校校長に任命する (三) 同志社学院の名称を廃し、同志社某校と称する「明治二十一年六月八日の項参照」 (四) 中村栄助を阪神・名古屋、田中賢道を九州、島

五月二十九日

田二郎を東京方面の大学運動に従事させること (岡ハリスよりの寄付に対し礼状を出すこと。「礼状ハ日本字ニテ美麗ニ仕立差出ス 後段ハラルネッド氏ニ依頼」(D1: 1264) アメリカより手紙を受け取る。かねて理化教育のため六万七千ドルの寄付申し入れをしていたJ・N・ハリスが、またまた三万三千ドルを追加し、寄付総額十万ドルとする旨を通知してくる。(H4: 141, 144)

一致教会代表のイムブリー・井深・植村の三人は、この日夕方、神戸に到着するが、組合教会の総会解散した後であった。(L486, 122-2: 22)

五月三十日

夏井庄六より過日訪問したことへの礼状が来る。(F1278)

五月三十一日

安住百太郎に託し、佐賀新聞社長江副靖臣・肥筑日報新聞社長村岡致遠に義捐金募集取り扱いを委嘱する。(全5: 467)

宮川経輝よりこの日付で来信、広瀬源三郎が同志社書記に就職することを承諾した旨を知らせてくる。

(F1279)

五月

同志社大学義捐金第一回報告が新島の謝辞と共に新聞・雑誌十三社の紙上に掲載される。明治二十一年十一月より二十二年四月までの六カ月に全国より一万六百五十五円四十七銭の厚志が寄せられた。

(D1: 58, 15-1)

六月一日

徳富猪一郎より電報で、慶応義塾寄付一万三千余できた、同志社も奮発せねばならぬ、と知らせてくる。(全4: 144, F1280)

徳富猪一郎にこの日二通発信。(一)ハリスよりの寄付金は三万三千ドル追加され、十万ドルとなった。

(全4:144)

(二)組合教会總會の結果について所感を述べると共に、自分の立場は合併を促進する「老成人」と合併に反対する若手の両者を敵視せず、双方の仲裁人と思っていること、このことは「(当時教会外ニアレトモ)貴君一人ニ吐露シ得ルノミ」と記す。また文中「一二ノ教会を捨て、モ合併スルヤ否ノ問題ニ至リテハ李白ノ詩中ノ句ヲ以テ之ニ答フヘシト存候、曰ク 駒虞不折生草茎 此レハ真ニ小生ノ心情ヲ貫徹シタルモノナリ」という。(全4:144)

六月二日

徳富猪一郎に手紙を送り、その中に小崎弘道に送るべき書簡の草案を同封する。「此レハ小生ノ立前ヲ示シ度候……小生ハ新聞紙上厳正中ノ地位ヲ持ツト明言可申候」と述べる。また校内問題として金森通倫を七月より一年間校長とすることが社員会で決まったことを報告する。「総長代理ハ権カナイト申ス事承リ申候」「小生ヲ知ル者ハ天下只猪一郎君アルノミ」(全4:146)

小崎弘道に発信、過日の神戸總會につき「一二ノ教会カ不平ヲ鳴ラシテ同意セサレハ之ヲ打捨テ、モ合併ス云々ト御断言」したことを重視、これでは「遂ニハ合併スヘキモノスラモ分離セシムルニ至ラシムルノ御所為カト被察候又右様過激強迫然タル御所為ハ老成人ナル兄等ニシテ一ノ失敗ト見ナサ、ルヲ得ス」と述べ、「駒虞不折生草茎」と「心中如湧血涙潜々」の句を記して心情を吐露する。(全4:147)

六月四日

井上馨に書簡を送り、寄付金に関する原六郎の誤解につき説明、北垣知事にも依頼しているが、井上からも原を説得するように依頼する。またハリスから六万七千ドル寄付されていたが、更に三万三千ドル追加されそうなことを報告する。なお国内での「昨十一月より本年四月迄之寄付金ハ僅カニ百万

位ニ有之候得共、決而落胆不仕……」と記す。(註：148)

東京に滞在中の網島佳吉より、オルガンを購入して福島に帰りたいが、その資金の援助を仰ぎたいと、この日付で要請してくる。(F1281)

六月五日

下村房より十五円と月々の送金に対してこの日付で礼状が来る。(F1282)

六月六日

小崎弘道よりこの日付で来信、教会合併問題につき賛否いずれなるや、態度を鮮明にするよう糾してくる。(F1283)

原市の宮口二郎が病氣の子供を引き取って帰郷するのを停車場まで見送る。(F1284)

六月七日

同志社常議員会が、この朝、山本寛馬宅で開かれ、新島も出席する。

(一)「ハリス氏へノ礼状草案ヲ新島氏ヨリ提出アリ其文中へ日本人民永ク福祉ヲ受ケルト云文并ニハ
ルリス氏理学館ノ名称ヲ記シ学科ノ唱ヘヲ理学部ト称ス」

(二)「常議員中ニ常置議長ヲ置キ社長病氣其他事故アルトキハ社務総理セシムルコトニ決シ常議員会ニ
テ松山高吉君ヲ撰定ス」(D1: 1266, J40: 211)

宮口二郎より静岡から、この日付で、病氣の子供に対する世話や見送りの礼を述べ、帰途の平安を知らせてくる。(F1284)

六月八日

小崎弘道に発信、先便に記した「過激之所為」について誤解があるようだから、と説明を加え、総会の決議に不同意ではないと述べる。(註：151)

六月十一日

N・G・クラークに発信、新島の書いた“A Christian University for Japan”を掲載した *The Congregationalist* を送られた礼を述べ、ハリスの寄付と下村の帰国に関して書へ。

"I am so grateful to Mr. Harris for his generous gift." "Mr. Learned urged me to invite our friend Mr. Shimomura as soon as possible....." "Mr. Learned told me that \$500 salary offered to Mr. Shimomura by Mr. Harris will be limited for the coming one year." (全6:357)

六月十三日

新島より金森通倫に対し、校長（予備校・普通校・神学校）の職務を一年間委嘱する辞令を、午前七時半より開かれたチャペルでの朝礼の席上、渡す。(全4:152, D1:1266)

総長は旧により新島である。(全4:202)

小崎弘道よりこの日付で来信、教会合併につき「寂然たらざる」ことにつき新島に問い糾したいこと、「先生に望む所は公明正大堂堂に其の意見を吐露し……」と述べる。(F1286)

松村介石が北越学館に着任、この日付で学校の近況、宣教師のことなどを知らせてくる。(F1287)

六月十四日

病気の子供を引き取って群馬県に帰った宮口二郎に見舞いの手紙を送る。(全4:153)

予備校生徒委員より新島に宛て、明日、チャペル前で記念写真を撮るので「御病氣中如何と存候得共……御光来被成下候ハ、実に雀躍の至り……」と願い状を出す。(F1288)

三輪振次郎よりこの日付で来信、従弟の友人より預かった大学資金一円三十銭を従妹の永に託したと、彼女は働きながら高等科で修学のつもりであるから、その働き口を斡旋してほしいと頼んでくる。

(F1289)

六月十五日

小崎弘道に「一二ノ教会ヲ捨テ、モ合併スル」云々につき書簡で答える。(全4:154)

六月十六日

新島の教会に新たに四十人が洗礼を受けて加わる。六月十七日付のクランク宛の手紙の中でこのことを報告する。主の晩餐を受けたのは六百人——われわれの教会のメンバーが四百人、二百人は他教会

六月十七日

の者。参会者は全部で九百人くらいだった、今のチャペルでは狭くなりつつあると述べる。(H6: 358)
鈴木清よりこの日付で来信、新島名義になっている神戸の女学校前の土地の地目変換および貸借の約定書を作成したいので、書類に捺印してほしいと言ってくる。(F1291)

六月十八日

熊本^の田中賢道に九州一円の私立大学資金募集につき遊説を依頼する。また彼が担当している熊本女学校建築費として金十円の寄付申し込みをする。なお、この委嘱状は六月二十五日付で田中の断り状と共に返送されてくる。(全4: 157)

六月十九日

懇親会開催につき教員らに案内状を発送する。(全4: 158)

六月二十日

中山光五郎よりこの日付で来信、佐野の講義所を栃木に移したい、と伝えてくる。(F1293)

六月二十二日

中山光五郎に発信、移転に賛成すると共に伝道費用のこと、バプテスト派との関係につきあれこれと注意する。(全4: 160)

神戸の目加田護法よりこの日付で来信、同志社神学部の名で決闘を申し込んできたので応ずるつもりだったところ、二十一日夜十時半頃になって決闘取り消しの通知を受け取ったこと、自分としては了承できないので、主宰する雑誌『日本魂』に双方の意見を掲載すると共に、三日以内に返事のない場合には新島を訪問する旨を申し入れてくる。(F1294)

六月二十三日

東京第一基督教会の惣会が開かれ、教会合併を中止することを決議、その趣旨を各教会に配布する。(F1311)

六月二十四日

鈴木清よりこの日付で来信、神戸教会では、数日前、合併問題につき協議し、組合教会総会の決議に満足するものではないが、組合教会が残らず合併に賛成するならば神戸教会もこれに従う。もし二教

会以上が反対し独立分離するならば、神戸教会も分離派に同調することを決定した旨を伝えてくる。

(F1296)

杉山重義より来信、京都からの帰途、小崎弘道に会った際、彼が新島と伊勢・海老名・宮川らとの間に何か障壁があり意志疎通を欠いているようだと言っている、と伝えてくる。(F1295)

六月二十五日

英学校の卒業式が行われ、柏木義円・中瀬古六郎ら二十五名が卒業する。新島は彼らを前に「出エジプト記」十五章二十二～二十五節のメラの事は苦くて……を引用して告辞をする。(J165: 81)

田中賢道よりこの日付で、大学募金遊説の依頼を断ってくる。(F1299)

六月二十七日

京都看病婦学校の卒業式(七名)と女学校の卒業式(五名)が午後二時より行われ、北垣知事・大阪の菊池侃二も出席する。(全4: 156, 161)

また同日夕方より中村楼に京阪神の有力新聞社の記者を招いて平素の厚意を謝し、将来の賛成を求めろ。(全5: 467)

* (全6: 359) では二十六日に女学校、二十七日に英学校の卒業式が行われた、とN・G・クラークに書いてる。

目加田護法よりこの日付で来信、決闘取り消しについての財部某の書簡は新島の意見を体したものの可否や、回答を求めてくる。(F1300)

六月二十八日

徳富猪一郎に書簡二通を発信。

(一)「小生も多年平素多病之事なれば、今より活眼を開らき小生之後任に注目し置くは、余り杞憂にすぎたる事とは存し不申……」金森「氏カ弥後任者ト相成可申カハ自から別之問題ニ有之、此ノ一ヶ

年間之手ギワを篤と見届申度候小生固執来候主義ハ……自由宗教ト自由教育ニ有之候也、小生之一身上万一之事有之候節ハ、総長撰挙之義ハ只々僅々なる社員ト教授会之手ニ任かせず、卒業生全体之意見ヲ克々聞糺シ可然人物を御撰被下度候様仕度候」(全4:162)

(二)「近頃ハ小生一身上ニ関し……少しく不満ノ情モアル由……又愚妻一身上ノ事ニ付彼は無根ノ評ヲ為ス者モ有之ヤノ由……錚々タルモノト自信スル連中凡庸人ノ多キヲ占ムルニハ小生モ大ニ失望」
「小生之心に常ニ爽快之感情ヲ起さしむる者ハ貴兄と只二三之同志社学生アルノミ、主義之異なる所より異主義連中ハ何ニとなくソコニ懸隔し来るの感なき能ハす……見ぬふりや聞かぬ振りやら知らぬふり馬鹿のふりして世を渡るかな」(全4:164)

別科神学四年生の内田政雄・垣見敬男・竹内甚吉に写真を送る。(全4:166)
第一回基督教夏期学校が同志社で開かれ、全国より受講者四百六十七名が集まる。七月十日まで。

(J22-2:245)

この間に宮川経輝と教会合併問題について懇談する。(F4:227, J71:104)
中山光五郎よりこの日付で来信、講義所を佐野より栃木に移すことは、栃木の状況より見て時期尚早である、と伝えてくる。(F1304)

六月三十日
徳富猪一郎の紹介により、この日、八木・川上の両名に会う。(全4:168)

六月
同志社の生徒七百四十人中、四百九十五人がクリスチャンであり、過去一年間に二つの学校「男学校、女学校？」から百六十五人が受洗した。(E12:212)

七月一日
徳富猪一郎に宛て保高正起の紹介状を書く。(全4:168)

奈良の新島公義に発信、同志社で開催中の夏期学校に出席するよう勧める。(H4:169)

夕方六時より同志社常議員会を新島宅で開く。(H4:167)

東海道線東京～神戸開通。京都～東京、上等九円八十七銭。(H13:90)

不破唯次郎よりこの日付で来信、大宮伝道について大久保真次郎の上京を促すこと、教会合併について小崎弘道が新島に忠告したのは、新島が同志社教会の集会で意見を述べたためである、と言っている。(F1305)

村上定よりこの日付で来信、山中百の論文「社会の良心」を『神戸又新日報』に掲載したので送ってほしいこと、また慶応義塾と同志社と題する文章を新聞に掲載したことを伝えてくる。(F1306)

アーモスト大学理事会から L.L.D. の称号を贈られる。この日付で、同大学理事会書記 E・S・ドワイツより新島宛に通知される。(L1237)

七月二日

山路一三に徳富猪一郎宛の紹介状を書く。(H4:169)

不破唯次郎よりこの日付で来信、教会合併についての関東の状況、新島に対する風評、経済的困窮を訴え援助を要請する。(F1307)

目加田護法よりこの日付で来信、決闘問題につきこれまでの経緯を記し、回答を要求する。回答のない場合は直接の討論におよぶべき旨、最後通牒を送ってくる。(H4:136)

東京の岩沢光耀より、伝道者・寺沢精一の斡旋につき礼状が来る。(F1310)

第一回夏期学校に出席、全国から参集した青年たちに所感を述べる。なお、この演説はのちに『青年道標』『同志社文学会雑誌』等の雑誌および露無文治編『学生之大会』に掲載される。(H2:419)

七月三日

七月四日

七月五日

N・G・クラークに発信、卒業式など同志社の近況、第一回夏期学校のこと、教会合併問題では組合派の三教会が神戸総会の決定に反対し、事態がどのようになるか、今のところお知らせできないと記す。(46:353)

七月六日

下村孝太郎に発信、帰国の旅費三百ドルを関西貿易を通じて送ることを知らせる。(46:360)

原六郎の寄付金に関する誤解を解き、新島のところへ寄付を送ってくれるよう、上京中の北垣知事に依頼する。(44:171)

七月七日

午前中、夏期学校の聖餐式で星野光多と共に司式の予定であったが、病気のためJ・D・デイヴィスが代理を務める。(147C)

七月八日

広津友信を通じ安住百太郎に古墨一挺、風斗実・森信夫に同志社の写真三枚ずつを送る。(45:467)
夕方五時より常議員会を新島宅で開く。(44:172)

J・N・ハリスよりこの日付で二通来信。

(一)理化学校に寄付する動機については、アメリカに來る青年が立派であること、新島がボストンに來た話に打たれたこと、日本に神の國を建てることを信じること等。(F2714)

(二)理化学校設立計画につき理事會に一書を呈する。その學校のクリスチャン教師についてラーネッドに送った手紙を読んでほしい。(F2715)

七月十四日

夜、大久保真次郎・音羽夫妻を招いて送別宴を催す。大久保夫妻は翌十五日、秩父伝道に出発する。

(J29-2:271)

七月十六日

志垣要三より水戸地方で大學設立募金の遊説をしたい、との書狀が来る。(F1316)

七月十七日

水戸の志垣要三に、安田定則知事宛の添書を送る。佐賀の安住百太郎にも発信する。(全5:468)
不破唯次郎よりこの日付で来信、佐竹篤が中山光五郎を加勢するために佐野へ出発したことについて報告してくる。(F1317)

七月十八日

八重夫人が、夜、腸胃カタルにかかり「大病ニ有之候得共」二十日に至り回復する。(全4:175)
徳富一敬・久夫妻より、大久保真次郎が秩父大宮へ伝道するため東京を発ったこと、年来の厚宜に對して謝辞を述べてくる。(F1319, F1320)

七月十九日

不破唯次郎よりこの日付で来信、佐野伝道および自分の結婚にくぎ伝えてくる。(F1321)
元蘭学の師・杉田玄端、東京麻布永坂町で死去、七十二歳。(J52:284)

七月二十日

一年前の大隈邸における大学募金の相談会を思い、安中郊外の磯部に避暑中の井上馨に礼状を出す。
(J23:32)

伴直之助に発信、先夜の来訪を謝す。(全4:172)

不破唯次郎に発信、栃木伝道を中山光五郎・佐竹篤の兩名に担当させるよう勧める。(全4:173)

広津友信に発信、福岡県水害のため「御県下ニ而大学寄付金ハ好時機ニ非らず、長崎辺ニ其鋒を御転し被下候も得策カト存候」と書き送る。(全4:174)

水戸の志垣要三よりこの日付で来信、知事宛の添書ならびに趣意書を受け取ったこと、明後月曜日に知事に面会して大学募金につき十分依頼すること、更に広く配布したいので「同志社大学設立の旨意」を送ってほしいと伝えてくる。(F1323)

七月二十一日

新島公義の就職につき徳富猪一郎に相談の手紙を出す。また大学募金がかばかしく進まないことに

七月二十二日

つき「近頃ハ委員方カ大分大学ノ事件ニ立入り区々ノ小見ヲ以テ人物ヲ評シ、少シク活発ニ仕事ヲ為サントスル人物ハ何トカ申立之ヲ容レス、而シテ少シモ着手ノ途ハ立タ、ス……只今大坂ニ下リ金森ト小生兩人ニテ奔走のツモリニ候、大体ノ運動ニ当ルヘキ人ナク甚困リ居候」と述べる。(全4: 179)

佐竹篤に発信、中山光五郎と協力して栃木県下の伝道にあたるよう励ます。(全4: 180)

同志社大学設立のため福島県の福島・中村・若松・白川監獄の看守ら九十四名より十五円四十五銭の義捐金を投ぜられ、この日刊行された『国民之友』第五十七号に掲載される。(15-1)

京都に二二・三ミリの雨が降り、鴨川・桂川流域に水害発生。(H14: 173)

佐賀の安住百太郎よりこの日付で来信、大学義捐金の募集に努めているが、未曾有の水害のため筑後川の堤防が決壊し、被害が甚大であることを報じてくる。(F1324)

大久保真次郎よりこの日付で来信、埼玉県秩父に無事着任したことを報告する。(F1327)

不破唯次郎よりこの日付で来信、結婚のことについて書いてくる。(F1328)

七月二十三日

大阪に行き児島控訴院長、高島陸軍中將を訪問する。児島の意見に従い有力者を難波橋のナダマン楼に招いて寄付金額を定めることとし、さっそく西村・遠藤・犬塚・佐藤・高島の諸氏に会い承諾を求める。菊池侃二および大阪滞在中の土倉庄三郎を訪問する。(全5: 469)

七月二十四日

夕方六時、ナダマン楼に集まり、寄付金額を定める。

児島院長

二百円

高島中將

二百円

西村知事

二百円

遠藤造幣局長

百円

犬塚検事長

百円

佐藤書記官

五十円

(全5: 469)

不破唯次郎よりこの日付で来信、秩父大宮での大久保真次郎の働きぶりを伝え、伝道について何も心

七月二十五日

配はいらないと伝えてくる。(F1328)

伊庭貞剛を訪問し住友家の寄付金三千円の記帳を受ける。次いで磯野小右衛門・藤田鹿太郎・久原庄三郎・藤田伝三郎らに面会して寄付を頼む。とくに藤田伝三郎に必死の嘆願をするも千円以上の約束を得られず、失望する。夕方、荒木安吉・石原久之助・原新七を自由亭に招いて募金の協議をする。今橋の星岡で一泊する。天神祭で甚だ騒がしかった。(全5:469)

藤田伝三郎よりこの日付で来信、大学への寄付は一千円と決めたこと、これ以上変更できない、と伝えしる。(F1329)

七月二十六日

田中源太郎に発信、明後日夜の招待に応じがたい旨を伝える。(全4:181)

児島惟謙・西村知事に会い、先夜のナダマン樓の会合についての礼を述べる。その後、久原・菊池・岡崎・西村輔三・磯野・松本・土居・田中市郎兵衛・玉手・川上を訪問する。渋川忠二郎・奥繁三郎が来訪する。(全5:470)

七月二十七日

中村栄助に発信、ここ三、四日は大学のため奔走しているが、明日午後ひとまず帰宅するので、もし気分が良ければ田中源太郎の招きに応じたいと思う、差し支えないだろうか、と尋ねる。(全4:181)

今治教会より同教会十年期式および山中百牧師按手礼式への出席依頼状が来る。(F1332)

神戸教会の牧師招聘問題につき飯田勇紀に発信、海老名弾正を招聘することは結構だとは思いますが、熊本でも「可然代人カ見当ラサレハ……同君ヲ離サ、サルヘク、又同君モ該地ヲ去リ得サルヘシ」と述べしる。(全4:182)

徳富よりこの日付で来信、新島公義の就職のこと、佐々城豊寿より写真を預かっていること、および

新島の写真を所望していることを伝えてくる。(F1335)
不敷唯次郎よりこの日付で来信、伝道活動と子供の養育の板挟み状態について書き送ってくる。(F1334)

七月二十八日

ジャパン・ミッション第十七年会が比叡山で開かれる。八月三日まで。(E1)

七月三十日

浜岡光哲に同志社卒業生・白木是を紹介、工業方面への就職の世話を頼む。また明日、大阪へ行き土居〔通夫か〕に会うつもりである旨を記す。(H4:184)

香川県観音寺の萩森長五郎に発信、知人中に進学希望者がいるならば同志社への入学を勧めてほしいと書き送る。(H4:183)

広津友信よりこの日付で来信、二十八日に九州で起こった地震の詳報と七月上旬以来の大雨による被害のため同地方は疲弊していること、女学校建設などさまざまな募金活動が行われており、大学募金はいずれ見合わせた方が良いと伝えてくる。(F1333)

七月三十一日

大阪に行き磯野小右衛門に会う。安部彦太郎を訪うも不在。久原庄三郎に五百円の寄付を求める。鴻池の草間貞太郎に面会する。沢川忠二郎に面会を求め、八月一日朝会う約束を得る。(H552)

元同志社生徒・湊源平の就職に関し三枝光太郎・山鹿旗之助よりその人物と学力について問い合わせる。(F1342)

八月一日

沢川忠二郎・奥繁三郎が来訪する。児島惟謙より土居通夫への添書を得る。久原に面会。藤田伝三郎・西村輔三・土居通夫を訪問するが、不会。(H552)

八月二日

徳富・湯浅に発信、募金の金はなるべく多くの利子を生むようにしたいので、沢沢のところに預けて

いる一万九千円について相談するため、月曜日に大学事務所の広瀬源三郎を派遣する予定であるが、渋沢がすでに整理公債を購入しているならば上京の必要はないので、その旨電報で知らせてほしいと頼む。(全4:186)

八月三日

休養のため夫人同伴で神戸垂水の松下万亀方に行く。十九日まで滞在する。(全4:187)

市原盛宏、横浜を出帆して渡米留学する。(F1330)

八月五日

柴原宗助よりこの日付で、岡山の募金遊説を一時見合わせてはどうか、と言ってくる。(F1345)

不破唯次郎よりこの日付で、関東伝道にあたり財政難と人材の不足を訴え、あわせて各地の伝道状況を知らせてくる。(F1344)

八月六日

志垣要三よりこの日付で、大学資金募集について茨城県知事は「同志社大学は宗教を拡大する方法」と見なし、大変冷淡なので募金は見合わせた方が良く、趣意書は全部返却すると伝えてくる。(F1348)

八月九日

岡山県羽島の木村鎮太より、同志社での修業を一年間断念、地方で働くため就職の斡旋を依頼してくる。(F1349)

八月十日

広瀬源三郎よりこの日付で来信、「広瀬へ公債と証書類を渡されたし」と電報を打ってもらえば、それを受け取りとして証書類を京都へ持ち帰るとの連絡をしてくる。(F1350)

八月十一日

湯浅治郎に寄付金の取り扱いについて電報と手紙を出す。(全4:188)

八月十二日

徳富猪一郎に発信、垂水に休養中であるが、しばしば大阪に出かけている、「大坂之運動ハ此一挙ニ限らず、此より幾回も、否不絶出張を致し、広く賛成を得るは甚必要」と記す。またもし上毛に行くことになれば下毛・福島・新潟・信州へも出張したいと述べる。(全4:189)

八月十三日

八月十四日

八月十五日

広瀬よりの手紙を受け取り、夕方、大阪に出て彼の申し入れの通り、湯浅に電報を打つ。(全4: 190)
 「十二日か」垂水より大阪へ行く。「直ニ病ニカ、ル日新病院ノ高橋ノ来診ヲ求ム」(全5: 471)
 大阪より広瀬源三郎に発信、公債証書の取り扱いにつき指示する。(全4: 190)
 この日付で二通来信。

(一) 大久保真次郎より、大宮に監督教会の伝道師が来て、伝道を始めた。(全5: 475)

(二) 安住百太郎より、広津友信と共に有力者を訪問したこと、石井佐賀県知事が上京中なので、大隈伯に新島より手紙を送り協力を願うのが上策である、と通知してくる。(全5: 476)

八月十六日

大阪市会議事堂へ行き、休憩中、西村府知事の紹介で市会議員に大学の設立の趣旨について述べ、協力を求める。(全5: 471)

八月十七日

早朝より大阪の有力者を訪れるが、いずれも不在、西村輔三に会う。(全5: 471)
 垂水において始審裁判所の大島貞敏と懇意になる。大学に賛成する。(全5: 471)

岡山県の木村鎮太に、去る四月末、教師招聘の申し入れを受けていた広島県庄原の学校に一年間行くように頼む。(全4: 191)

八月十八日

柳河での募金を打ち切って上京する広津友信に手紙を出す。(全4: 192)

八月十九日

風雨強し。垂水より神戸に移る。(全4: 192, 全5: 471)

* 京都に一二八・七ミリの雨降り、山城・丹波に被害が出る。(全4: 173)

八月二十日

有馬佐野屋に行く。大塚磨の紹介により近江五箇庄の塚本老翁に会う。広津友信より佐賀・長崎行きについて来信。また佐賀の安住よりも来信、返事を出す。(全5: 472)

A・ハーディ夫人に手紙を出し、J.L.D.の称号の授与について通知を受け取った。最初は辞退するつもりだったが、友人たちの意見に従って受け取ることにした。二十年間の自分の能力を振り返ってみると暗澹たる思いになるが、同時に勇気づけられもする、と述べる。(全4:361)

本城安太郎よりこの日付で来信、フランスへ行くので暇乞いのため訪問したい、と伝えてくる。(全4:1363)

八月二十二日

大隈重信に書簡を送り、寄付金一千円についての礼を述べ、上京中の石井佐賀県知事に面会の際には、同県の大学募金について尽力するよう口添えを頼む。(全4:195)

病気のため鬱々としている松尾音次郎に発信、失望しないように励まし、明石に帰って養生するよう勧める。(全4:193)

この日付で三通来信。

(一)広瀬源三郎より、東京から持ち帰った証券類は第一国立銀行京都支店へ預けた。また住友吉左衛門より同銀行大阪支店に一千円入金があったことを報告してくる。(全4:1368)

(二)不破唯次郎より、関東地方の伝道状況を述べ、上州巡回を求める。(全4:1367)

(三)神戸滞在中の馬場種太郎より、故郷の美作に帰ったところ同地の落合教会は無牧であった。同地出身で同志社病院の医師である堀俊造は落合教会の柱石とも頼む人であり、人々は彼が帰郷することを望んでいる旨伝えてくる。(全4:1366)

松尾音次郎へ発信、「明石ニ返り御養生アルモ至極トハ存候へ共……暫時有馬ニ御遊びに御出ニ相成候而ハ如何」「病ノ為メニ決シテ御落胆ナシ賜フ勿レ」(全4:196)

八月二十三日

永岡喜八より、一昨日帰京したことを、この日付で知らせてくる。(F1370)
元備中松山藩士で旧友の加納「格太郎」の上京の計画を聞き吉田清太郎に手紙を送る。京都に来ても

「糊口之途を得事は随分困難」なので、上京を勧めないように伝える。(H4:198)

八月二十六日
同志社で働きたいという滝口可成に、来月早々帰京したのち面談すると返事を出す。(H4:197)
富永冬樹より、徴兵令に関し同志社に官立高等学校と同等の特権を得る方法について、この日付で

書こてくる。(F1374)

八月二十七日
徳富猪一郎に有馬より二通発信。

(一)広瀬源三郎が上京した際述べた「意見」を聞きたい、金森も聞きたがっている。(H4:199)

(二)アーモスト大学から贈られたI.L.D.の学位についてふれ、どの宣教師も「之を辞す勿レ同志社之
為ニ之を受ケ置ケト申呉候、小生ハ飽まで過分之学位と存シ大ニ困却致し候」「小生ハ兼而無位無
官之身を以て一生を畢へんと思ひ居候に……」と書く。(全4:200)

八月三十日
中村栄助より寄付金の即納分六十円を受け取る。(F1377)

北越学館の松村介石よりこの日付で来信、G・E・アルブレヒト、ミス M・L・グレイブスに次いで
スカッダー一家も帰国することになり大変困っている。H・ペッドレー、O・ケリー宣教師を招くこ
とを考えているが、それまで一、二カ月の間、同志社のワレット「？」を派遣してもらえないか、と
頼んでくる。(F1376)

八月下旬
ベイカー夫人宅に滞在中の伊勢時雄よりの手紙を受け取る。(H4:201)

八月
日本基督教伝道会社第十二年会を神戸教会で開く。教会合併に関する議論沸騰、年会の議事を開かない

九月一日

まま終わる。(F2:12)

在米の伊勢時雄に発信、家族・学校の近況を伝える。「華書ハ例ノボパールムニ於テ御認ノヨシ、実ニ小生ノ屢安眠セシ病室ニテ、小生帰国後モ病氣ノ節ニハ毎度其室トベーカル老夫人ノ深切ヲ思ヒ出申候」「此両三日小生ノ手が甚ノルヴォスニ有之、筆ヲ把リ候テモ筆意ノ如クニ動キ不申候」(F4:201)

加納喜三の人物についての問い合わせに対し、非常に有為の少年である旨、この日付で塩井健太郎より返事が来る。(F1380)

黛治邦(根岸松齡の実弟)よりこの日付で来信、子供の同志社入学と監督について依頼してくる。

(F1379)

九月三日

アーモスト大学のシーリー総長に手紙を出す。J.L.D.を授与されると聞いて驚いている。それに値するとは思わないが、友人たちの勧めに従って、懐かしい母校からの厚意を受け取ることにした。生きている限り母校の名に恥じないように努力するつもりである。大学資金の募集は困難である。現在までに六万円を越す金が集まった。ハリス氏より理化学学校の建設費として十万ドルの寄付があった。基金の一部を理化学館の建築費にあてるつもりである。また昨年十月には学生の信徒は三百七十名、非信徒五百七名だったが、今年六月末には信徒四百九十八名、非信徒二百四十二名である。同志社社員会の下に予備校・英学校・神学校・女学校・看病婦学校があると記す。(F6:361)

宮本園丸よりこの日付で、子供を入学させたいので校則などを詳しく知らせてほしいと言ってくる。

(F1384)

九月四日

この日付で三通来信。(一)不破唯次郎より、結婚式を予定している十月頃、新島が東京に来ているか否かを問い合わせる。(F1385)

(二)長崎県高島炭坑の松原藤兵衛・瀬尾武雄より、同炭坑で伝道にあたっていた本城安太郎が去る七月上京して以来、帰らないので代わりの伝道師を派遣してほしいと言ってくる。(F1386)

(三)湊源平より名古屋の女学校への就職につき協力を求めている。(F1387)

九月五日

不破唯次郎よりこの日付で来信、星野光多の後任として西群馬教会に赴いた松尾音次郎がすぐに東京に帰ったこと、佐竹・須田・太久保・高橋・寺沢ら関東各地の様子を知らせると共に、自分の結婚式日と新島の上京期日の調整にき述べる。(F1389)

九月六日

J・N・ハリスよりこの日付で来信、寄付金によりハリス理化学校が創設されることを神と同志社に感謝する。(F2727)

九月八日

広島県庄原の板倉正身よりこの日付で来信、かねて招聘を依頼していた教員は慶応の福沢の斡旋により採用した、と伝えてくる。(F1394)

九月九日

上京する梶原保人に徳富猪一郎宛の伝言を依頼する。(F1396)

大久保真次郎よりこの日付で来信、秩父大宮に講義所を作り、九月六日に開所式を挙げたことを報告してくる。(F1395)

九月十日

東京に滞在中の松尾音次郎に発信、東京が病気のために良くなければ、郷里の播州に帰って休養してはどうか、と勧める。(全4:203)

九月十三日

大阪基督教徒青年会の機関誌『基督教青年』創刊やれる。(F20:62)

九月十四日

札幌の大島正健に発信、遠縁の少年を送るので、安息日には必ず教会に出席するよう指導してほしい、と頼む。(全4:204)

徳富猪一郎に宛て同志社四年終了の高田寅次郎の紹介状を書く。(全4:205)

九月十六日

熊本の中賢道に宛て同志社社員会の決議に基づき同志社大学資金募集方を依頼する。(全4:205)

九月十七日

徳富猪一郎より新島の上京を促してくる。(F1402)

田中賢道に発信、大学募金を依頼したことにつき「貴兄之御都合ハ如何ナルヤ未ダ承知不仕、女学校募集之事も未タ決了セサルヤノ様ニ相心得候間、直ニ御承諾相叶候哉否ハ存し不申候得共、兎ニ角…:御依頼申上候間、何卒後日之為御預置被下候」と書き送る。(全4:206)

琵琶湖疏水事務所を訪れ、田辺朔郎・島田道正両技師の案内により疏水工事および電気水車「タービン」を見学する。(全4:207)

新島宅で常議員会を開く。アメリカン・ボードが普通学校・予備校校舎建築費の内金一千五百円の援助を不承知と伝えてきたことにつき、再び在日宣教師を通じて要請することを決める。(D1:1267)

不破唯次郎よりこの日付で長文の手紙が来る。送金が届かない、関東各地の教勢、女学校建築資金の不足、結婚式の場所等。(F1401)

九月十八日

「榎本大臣殿へ御談被下候趣重々難有奉拝謝候」と北垣知事に礼状を出す。(全4:207)

九月十九日

この頃、京都に來た広津友信の報告を聞き、この日、佐賀の安住百太郎ならびに始審裁判所長山本正巳に依頼状を出す。また長崎の有力者にも手紙を出す。会津の瀬高竜人・土屋重郎に募金依頼の手紙を出す。(全5:472)

N・G・クラークよりこの日付で来信、学校の運営について日本人理事を信用しないわけではないが、宣教師にも相談してほしい。理化学校の副校長はたとえばJ・D・デイヴィスかM・L・ゴードンにしては如何、と言ってくる。(F2731)

木村鎮太よりこの日付で、名古屋の女学校に就職することになった、と報告してくる。(F1403)

不破唯次郎よりこの日付で来信、十月十日に京都で結婚式を挙げるので新島が在京ならば司式を頼むと言ってくる。(F1404)

九月二十三日
第一高等中学校有志者(代表・松波仁一郎)より同志社大学設立義捐金として金八円九十銭を送ってくる。(F1406)

茂木平三郎よりこの日付で来信、秩父大宮の伝道は大久保真次郎の常駐でうまくいっている、と報告してくる。(F1407)

九月二十四日
画家タカノ氏を紹介する手紙をパシフィック新聞重役を書く。末尾に自分は日本人で、貴紙の読者であるDr. John C. Holbrookの知人であると記す。(全6:362)

『青年之光』第一号が京都基督青年会より発刊され、新島も祝辞を述べる。(全4:210, F31:23)

九月二十六日
新聞に「新島重病」の記事が出たため徳富猪一郎から問い合わせの電報が来る。折り返し新島から「重病に非ず、少しカッケの気味なり、もはやよろし」と電報を打つと共に、一書を送り、新聞記者のあやまりであること、先日来、脚気のため夜間のみ円山の正阿弥楼で休養していること、近日上京して上毛方面の募金をしたいと書く。(全4:208)

夜、同志社書籍館〔現在の有終館〕に第三高等中学校の教授を招待して懇親会を開く。(全4:210)

九月二十七日

N・G・クラークに発信、教会合併問題を相変わらず検討している。いずれ終決するだろうが内部の雰囲気は悪い。自分は合併派から反対派のリーダーと想われており、今や彼らは気兼ねなく相談に来ることはなくなった。自分は確かに合併反対論者 (Anti-unionist) であるが、穏健派であり、積極的な立場はとっていない。しかし彼らは自分が反対側についているため、合併は失敗であると考えている。ロス博士 Dr. Ross の "Church Kingdom" と "Union Effort" を注意深く読んだ。コングリゲーションナル・チャーチが彼を委員としてこの問題の調査に派遣し、彼の助言を得たいと望んでいる。合併しないことが最良であるならば、より以上の進歩を目指すには日本での教会組織 Church polity が必要になるだろう。ロス博士に日本人向きの教会組織に関する簡単な手引を書くように依頼した。彼の "会衆派主義" についてのポケット・マニュアルが自分たちの求めているものと思われるので、その本を六冊送ってほしい。自分が懸念しているのは、二つの教会が合併する前に最大の注意を払って検討すべきだ、ということである。(全6:323)

新島にアーモスト大学より I.J.D. の学位が贈られ、外務省→京都府庁を通じ本人まで伝達されたことが報道される。(19-h)

徳富猪一郎に発信、J・D・デイヴィス著『基督教ノ基本』の序文を書いたので添削するよう頼む。

(全1:463, 全4:209)

九月二十八日
植村保雄よりこの日付で、二十五日に札幌に着いた、届けものは渡したので安心するように伝えてくる。(F1408)

九月三十日

松本勘十郎よりこの日付で来信、西群馬教会は昨年以来無牧につき相当の人物を派遣するように要請

十月三日

しつゝ。(F1410)

寮の建築費につきJ・D・デイヴィス、C・ケディに発信、聞くとところによればアメリカン・ボードは新寮舎二棟の建築費千五百ドルの全額ではなく、その一部を負担するとのことである。われわれの最初の理解では日本側で一千五百円を調達すれば、ボードが総額の支払いを保証するというものであった。寮の建築は急ぐので借金をして着手し、ほとんど完成している。費用を払う時期にきているがボードに支払いができれば、どこを尋ねればよいのか、この苦境から抜け出せるよう考慮願いたい、と記す。(全6:364)

不破唯次郎よりこの日付で、九日に京都へ着く予定、と伝えてくる。(F1414)

十月四日

中旬ごろ京都に来る予定という徳富猪一郎に発信、J・D・デイヴィスの著書の序文への加筆に礼を述べると共に、十二日に神戸より上京するつもりなので、十日までに来京するように伝える。(全4:213)

田中賢道に発信、近来然るべき運動員がいないため募金が進まず、苦慮している。大学設立運動の成否はキリスト教社会全体の名譽にも関することなので是非協力願いたい。そのためにかく一度京都へ相談に来てほしい旨、懇々と依頼する。(全4:211)

加藤勝弥・松村介石連名でこの日付で来信、月刊雑誌『北光』の発行に際し、祝文を依頼してくる。(F1415)

十月五日

A・ハーディ夫人に手紙を書き、日本のキリスト教会、政界の動きについて述べる。この手紙が、新島存命中、最後のものとなる。(全6:365)

田中賢道に重ねて来京を促す手紙を出す。(全4: 216)

アメリカより帰国した下村孝太郎の歓迎会をチャペルで開く。(14—8)

十月六日

常議員会が円山中村楼において開かれ、新島も出席する。ハリス氏を社員とすること、下村孝太郎を同志社ハリス理化学校教授に招聘することを決める。(D1: 1268)

十月七日

イエール大学のポーター総長に発信、同志社の現状を訴え、前便で頼んだ十万ドルの寄付を再び頼む。(F2298)

下村孝太郎歓迎会を円山中村楼で午後四時より開く。(全4: 216)

十月八日

徳富猪一郎に打電。“君の発信、我が行くまで待つ”(全4: 218)

この日付で二通来信。(一)三宅荒穀より、フィッシャー博士の *Manual of Christian Evidences* の翻

訳を出版することになったが、その序文を書いてほしい。(F1420)

(二)新島の紹介状を持って渡米した広瀬「辻」孝次郎より、ニューヨークに無事到着したと伝えてくる。

広瀬は明治十九年十月花畑・広津らと連袂退学した学生の一人。この年九月八日アビシニア号で神

戸より渡米した。(F1421)

十月九日

今治の山中百に発信、来る十三日の十年祝会と貴兄の按手礼式、結婚式には都合をつけて出席するつもりだったが、社用のため上京するので出席できない。せめて八重夫人だけでも出席させたいが、一

昨日より老母の様子が悪く、これまた出席しがたいことを伝える。(全4: 218)

八日永眠した同志社教師・藤田愛治の葬式が礼拝堂で営まれ、出席して感話を述べる。会葬者八百人。

(14—8)

十月十日
十月初旬

不破唯次郎・北里ゆうの結婚式が京都で行われ、その司式をする。(全4: 214, F1414, F1434)
生徒が大学設立資金に寄付するため毎月抛金していることにつき、チャペルにおいて謝辭を述べ、もし自分が途中で倒れても大学設立の事業を引き継いで何代かかってでも完成してほしい旨、涙ながらに訴える。(J88: 10, J94: 32)

秋、医師より健康のため上京を見合わせるように言われる。(C4: 122)

京都を出発、東京に向かう。(全5: 473)

十月十二日
十月十三日

東京着、山下門外の対山館に泊まる。(全5: 473)

徳富、大学設立運動について同志社学生らに演説する。(F1432)

十月十七日

この日より元数寄屋町三丁目成瀬方に宿を移す。山口の原知事・大塚収税長も同宿する。(全5: 473)
徳富猪一郎に発信、同志社のこと、大学前途の運動に関し、在京社員会を開くように取り計らってほしいこと、かつ今午後、宿所の成瀬まで来訪を求める。(全4: 220)

十月十八日

大隈外相の遭難を聞き、見舞状を送る。徳富より外相の傷が軽微であったことを知らされる。また徳富に帰路宿舎に立ち寄ってほしいと伝える。(全4: 222)

アメリカン・ボード年会(ボストン)の最終日に伊勢・森田・市原・原田ら滞米中の同志社卒業生らが出席する。(F1428)

十月十九日

新島の福島来遊(遊説計画)を聞き、綱島佳吉よりこの日付で来信、福島県会が来月上旬に開かれるので、来月十四、五日の来福が望ましいと知らせる。(F1429)

広瀬源三郎よりこの日付で来信、金森の大阪募金の状況について報告し、二十一日に再び金森と大阪

に行つて募金すると述べる。(F1427)

十月二十日

夕方、徳富が宿所に来訪、青木周蔵に群馬県知事への紹介を求めるため相談する。(全4: 223)

十月二十一日

風邪のため外出を控える。徳富に発信、青木周蔵に面会の結果を知らせてほしいと頼む。(全4: 223)

新潟伝道に向かう広津友信に餞別と激励の手紙を送る。Goodbye, God be with you, henceforth & forever. Be strong in Him! (全4: 222)

この日付で二通来信。(一)宮崎県旅行中の田中賢道より、大学資金募集について依頼の件は、新島・広津の手紙によって事情が詳細にわかった。熟慮のうえ返事をする^{オオサタ}と返答してくる。(F1431)

(二)横田安止より校内の状況を伝えてくる。(F1432)

十月二十二日

大隈外相の負傷に対し、再び見舞状を出す。夕方、三縁亭に行く。(全4: 224)

十月二十三日

横田安止より来信、同志社での徳富の演説の模様、校内の模様について知る。(全4: 226)

大久保真次郎が秩父より来訪。新井毫も宿所に来る。上州方面の募金運動について相談する。(全4: 225)

十月二十四日

徳富にこの日二通発信、新井毫と湯浅治郎の確執「？」につき意見を聞きたいので、今夕五時に新島の宿に来て新井の話聞くように伝える。(全4: 225)

新井毫、午後来訪する。(全4: 226)

広津友信よりこの日付で、上州の様子を知らせてくる。(F1433)

十月二十五日

横田安止に発信、「余り天下之大事ニ対し無頓着ナルハ決シテ取ルヘキ所ニ非ラス、何卒書生之修学中ハ勉強ニ汲々タルヲ以テ他事ニ関スル能ハスト雖、常ニ眼ヲ開キテ天下之真想ヲ監察シ、志ヲ励マ

シ、鋭ヲ養ナイ、胆力ヲ練リ、勇氣ヲ蓄ヘ、他日雄飛スルノ策ナカルベカラス、我カ同志社ヲ以テ將來小玩器之製造場トナラサル様……」(全4：226)

在京の同志社社員会を開く。(全5：473)

伴直之助が宿所の成瀬に来訪するが、宿の不手際により会えず。(全4：228)

十月二十六日

児島惟謙に東京より手紙を出し、大阪の久原庄三郎・藤田鹿次郎より各一千円を得たことにつき礼を述べ、鴻池の寄付についても依頼する。また来月いっぱいには関東で募金にあたる旨を伝える。またこの手紙の末尾に「近頃国家之実況を見、時危思偉人の句を痛く感し時々吟誦仕居候」と記す。(全4：229)

伴直之助に発信、昨夜会えなかったことを詫げる。(全4：228)

不破唯次郎よりこの日付で来信、結婚式で世話になった礼を述べ、あわせて上州へ来遊の期日を尋ねる。(全1434)

十月二十七日

広津友信よりこの日付で、上州周遊のこと、明日、越後へ出発することを知らせてくる。(全1435)

十月二十八日

新潟の松村介石より、北越学館より出版する雑誌『北光』創刊への祝文を、この日、重ねて依頼してくる。(全1437)

十月二十九日

伴直之助来訪する。(全1438)

十月三十一日

東華学校の和田正幾に発信、近く上州へ出張を計画し、栃木・福島へも行くつもりをしているが、この五、六日来、胃病、脳病が起こり今なお臥床し、寒気も加わってストーブがなければ一日も耐えかねる状況なので、とても仙台まで行けそうにないことを告げる。(全4：230)

十月末

アメリカン・ボード〔?〕に手紙を書く。その中で帰国した下村孝太郎についての社員会の決定（一、下村をハリス理化学校の教授にする 二、月給七十円 三、科学を教える）および物理の有能な教師をさがしていること、下村の月給をハリスの基金より出してほしいこと、Mr. L.〔ラーネッド?〕宛に建築費三千ドルを送られたことへの礼を述べる。（F2299）

* この手紙（草稿）の宛名は N. G. Clark or some one at Am. Bd. となつてゐるが、あるときは J. N. Harris かも知れない。十一月二十五日の項参照。

十月

群馬県下募金につき古沢滋を介し山口県三田尻に静養中の井上馨に群馬県下の有力者に対する紹介を依頼する。（J23: 97）

十一月二日

この月、下村孝太郎に同志社ハリス理化学校教授の招聘状を渡す。年俸八百四十円。（H4: 231）
二、三日臥床のところこの日回復、同志社生徒・古賀鶴次郎に発信する。「今や満天下腐敗矣 之カ為ニ涙を灑く者幾人カある。君等宜しく改革家となりて此不潔輕薄兒之轍を踏ミ賜ふ勿れ」（H4: 232）

十一月四日

七日に面会したい、と新井毫より手紙が来る。（F1445）

十一月五日

会津人・佐藤重紀を徳富に紹介する。（H4: 234）

十一月六日

この夜、「芝高輪町五九の」大久保利和邸より出火、やゝそく見舞いに行く。（F3170）
この頃より「漫遊記事」を書き始める。（H5: 395）

白川町五丁目の河島醇を訪ねる。「時ヲ移ス二時ヨ。鵜毛氏〔蒲生仙か〕ニ面会ス」（H5: 396）
不破唯次郎よりこの日付で来信、上毛の様子を述べ、新島の来訪を待っている、と述べる。（F1447）

十一月七日

小野英二郎よりこの日付で来信、米国ミシガン大学を卒え、去る五日横浜に帰ったこと、帰郷する前、東京滞在中に面会したいと述べてくる。(F1449)

広津友信よりこの日付で、新潟伝道に着手したこと、長岡伝道と時岡恵吉について知らせてくる。

(F1448)

十一月八日

宮川経輝と懇談し、同志社の精神的改良について意見を交える。(J71: 107)

北甲賀町の西村寅四郎を訪問する。(全5: 474)

夜、竹崎一二・鎌田政経・根本弥一郎らが宿所に来訪する。朝比奈知泉・二階堂行文の二人が来訪するが、来客中のため会わず。(全5: 396)

この朝、徳富猪一郎は大学募金につき松方正義を訪問する。(全4: 234)

金森通倫よりこの日付で、熊本の中賢道が京都へ来たことを知らせてくる。(F1450)

風雨のため外出せず、依頼されていた額面に揮毫する。(全4: 235)

十一月九日
十一月十日

矢崎鎮四郎が来訪する。(F1454)

先輩の吉田賢輔より墨書と硯石を贈られ、礼状と写真を送る。(全4: 236)

十一月十一日

午前、土倉庄三郎が来る。またアメリカより帰国した小野英二郎も来訪、ドイツ留学について話をする。午後、大蔵大臣の松方正義を三田一丁目小山の私邸に訪い、大学募金についての尽力を求める。

徳富への書中「今夕福島より綱島氏も出京……此レハ福島ニ是非来レト申為ナラン」と記す。(全4: 237, 全5: 396, 474)

この日付で二通来信。(一)宮川経輝より、越後巡回を勧められたが、大阪での仕事が山積しているので

来春にしたい旨を伝えてくる。(F1453)

(二)広津友信より、教会の秩序を立てるためまず規約の制定から着手すること、白木正蔵と同居していること、長岡伝道のことを報告する。(F1452)

十一月十二日

午後、横浜に行き土倉庄三郎に面会、大学寄付金(五千元)の利子について相談し、承諾を得る。更に原六郎の約束した六千元について払い込みを促すよう依頼する。(全5:396)

十一月十三日

朝、渋沢栄一を訪問するが不在、午後、書簡により上京中の福島北村芳太郎宛の紹介状を依頼する。(全4:238)

* 投函は十四日と思われる。文末に佐野利八訪問のことを記述している。

十一月十四日

早朝より横浜浜町一丁目の生糸商・佐野利八を訪ねる。応分の尽力をするとの約束を得る。のち小室信夫を訪う。(全5:475)

十一月十五日

宣教師M・R・ゲインズが帰国するという通知を自宅より受け、見送りのため横浜に行く(十二時五分新橋発)。午後五時に東京丸が到着するもゲインズに会えず、ルーミスを訪ねて詳細を聞くが不明、夜七時四十五分横浜を発って帰京する。不在中、宿所の成瀬に徳富猪一郎が来訪する。咽喉に少々痛みを生じ、夜少し発汗する。(全4:239, 全5:397)

Now, the worst had happened; Neesima had come and gone on some mistaken information. Father immediately boarded a train to Tokyo to find him. With him, for some reason, he took me..... (E21:24)

群馬県福岡村の山岡藤十郎、大間々町の関口長次郎・野口与八に手紙を送り、新井毫と協議のうえ、

上州の募金に尽力を依頼する。(全5: 477)

広津友信よりこの日付で来信、長岡伝道は他派の伝道師が来ず、時岡の働きで順調に進みそうである。新潟伝道はH・B・ニューエルと相談して計画を立てるつもりである。教会合併問題で新島や広津らが誤解されているので憤慨に堪えず、松村介石に新島や自分の考えを明確に述べたことを知らせてくる。追伸に横井先生の書を三幅、京都に送ったことを記す。(F1455)

同志社ハリス理化学館の定礎式を行う。(F1457)

* (C4: 119) とは明治二十二年十月とならう。

十一月十六日

風邪をひき寝込む。熱気あり、食欲なし、小川医師にかかる。(全5: 397)

早朝、手紙を徳富まで届けさせる。カタルの気味でまだ床中にあるが、午前九時半ごろ綱島が来るので、その前に松方大臣のことについて相談したい、と来訪を求める。(全4: 239)

朝、徳富猪一郎より手紙が届き、福島方面への旅行は中止し、金森を代理に派遣すればよい、と進言する。徳富は言う「自今厳寒に向ふ此時ニ際して福島に向ふ恰も……赤手にして彈丸矢石の地ニ向ふか如し」(F1456)

徳富、新島の宿所に来訪、綱島を待つも、来ないので帰る。その後、綱島が来る。彼は榎坂「東京第一教会」の招聘に関する相談のため上京したものである。(全4: 240, F1456)

宮川経輝が来訪、将来の運動、ことにスピリチュアル上に同志社をインプルーブするの話等をする。

(全4: 241, 全5: 397)

十一月十八日

夕方、小崎弘道が来訪、同志社の計画および伝道会社の改革につき相談、「小崎」が十分意見を述べ

る。(全4:241)

十一月十九日 南鍛冶町四番地の茂林館(林又右衛門方)に宿を移す。下の八畳と六畳を借る。(全5:397)

「茂林館ニ転シタルハ他ノ義ニアラス、部屋ノ中ニストヴヲ置クト置カサルトノ問題ニヨリ成瀬ヲ去リ茂林館ニ移転セシナリ」(全4:293)

広津友信への手紙の中に「題富士越之竜」の漢詩を書く。

蛇蝎世評不介意 忍蟠大沢幾千年 君見一旦風雲裏 飛上芙蓉峰上天 (全4:241)

朝、佐野利八を横浜浜町の自宅に訪い、寄付を求める。また島田三郎を精養軒に招いて横浜での募金協力を依頼する。(全5:477)

The Board of Foreign Mission of the Presbyterian Church in the U. S. A. へ W. Dulles より、この日付で、六十ドルの寄付を伝えてくる。(全5:274)

十一月二十日 十九日に帰京した井上馨に手紙を出し、さっそく挨拶に行くべきところだが、二、三日前より風邪気味であり、行けない。近日、上州に行くので帰京の後伺いたい、と述べる。(全4:242)

また、この頃、井上馨より佐藤群馬県知事宛の紹介状を届けられる。(全4:272, J 23: 97)

十一月二十一日 長野の信濃銀行頭取・小坂善之助が茂林館主人の紹介により来訪する。また福井県第二部長・本部泰が来訪する。(全5:477)

新井毫に発信、風邪のため上州行きが遅れていたが、気分も良くなったので三、四日のうちに出発する、と知らせる。(全4:243)

十一月二十二日 M・R・ゲインズとH・ルーミスが来訪、氷上の霜と称する白菊二株、黄菊一株を買い求め、白黄各

一株をゲインズに、白一株をハリスへの贈り物としてゲインズに託す。(全5: 397)

The home in which Neesima was staying was Japanese, and he was dressed for comfort in Japanese robes. The skin over his high cheek bones was tautly drawn and his eyes were too bright even as he smiled in welcome. His handclasp, the long look into Father's face, the "Goodby"——these I remember. (E21: 24)

奈須義質よりこの日付で来信、熊本地方の伝道もようやく好況を呈しつつある。自分の将来のこと、日本伝道に關する憤慨等について述べる。(F1461)

十一月二十三日
松方正義に面会、横浜方面の募金について新島の腹案を説明、協力を求め、承諾を得る。河島醇を訪問する。(全4: 244, 全5: 478)

朝、「客之待合所」「宿の? 松方の?」において安場福岡県知事に会い、原善三郎・朝田又七・平沼專造ら横浜の有力者にも会う。(全4: 244, 全5: 398)

風邪が治らず小川医師の来診を求める。(全5: 397, 478)

横田安止に発信、近況を述べる。この書中に「政事上之実況ハ実ニ実着ナル真面目ナル男兒ノ乏シキヲ覺ヘ益良心之全身ニ充滿シタル丈夫ノ起リ来ラン事ヲ望テ止マルナリ」「小生畢生之目的ハ、自由教育自治教会 両者併行国家万歳」の語がある。(全4: 245)

十一月二十五日
朝、河島醇を訪い、京浜間の資産家の名簿を示して、とくに横浜方面の募金につき松方大臣の力を借り、至急に着手するように依頼する。その後、霞ヶ関〔外務省〕に行き、執事に面会して大隈外相の容態を聞く。(全4: 248, 全5: 398)

松方蔵相に書簡を送り、京浜の有力者名を列記した一覽表を添えて、重ねて募金協力を依頼、「内国

ヨリ募集候分漸ク六万ヨ円ニ相達候付尚四万ヨ円ヲ募リセメテハ拾万ヨ円ニ達〔セ〕シメ度……左スレハ米国人ヨリ寄送相成候十萬弗ヲ合セ二十三万ヨ円之金額ニ相達可申候間来明治二十三年ニハ国会開設祝賀之為先大学之手初メ丈ハ出来候事ト奉存候」と記す。(全4:247, 全5:478)

徳富・人見らに見送られて東京を出発、前橋に向かう(永岡喜八・福田和五郎同伴)。午後四時ごろ到着、関農夫雄方に泊まる。(全4:246, 249, 全5:398)

J・N・ハリスよりこの日付で来信、下村孝太郎の Regular professor of chemistry 任命を承認、そのサラリーに関することを記す。(F2747)

十一月二十六日

佐藤与三群馬県知事、曾我部道夫同県第二部長に面会、井上馨・青木周蔵の紹介状を渡し、大学の計画および募金につき協力を依頼する。また午後、前橋を訪れた島田三郎に面会、横浜方面の募金について協議する。(全4:249, 全5:398, 478)

徳富猪一郎に発信、佐藤知事・島田三郎に会ったことを記し、横浜方面の募金に関し島田の意見も紹介して相談、また川田日銀総裁にも働きかけることが必要だと述べる。(全4:250)

大久保真次郎よりこの日付で来信、教会合併問題の混乱に対応するには伝道に力を注ぐことが肝要だ。埼玉・群馬地方の伝道を活発にすること。広く伝道師を求めるため同志社の試験を地方で実施しては如何。合併推進派を窮地に追い込まないようにすべきだ、と提言してくる。(F1463)

十一月二十七日

曾我部第二部長に会い、第一部長・収税長・警部長ら庁内幹部および八木始郡長を紹介される。夕方、佐藤知事・曾我部部長の幹旋により第三十九銀行の安井醇一、第三十三銀行の笹尾精憲、松本真三町

長ら前橋の有力者を倶楽部に招いて小集会を開き、大学募金を訴える。(全4: 252, 全5: 398, 478)
 中山光五郎に発信、結婚の祝辞を述べると共に近況を問う。「此地之如キハ実ニ動サル山之如キ地カ
 モ知レ不申候得共、信アラバ山ヲモ動カスト申ス事モ主之教ヘ賜フ事ナレハ、何卒将来ヲ望ミ御働ラ
 キ有之度候也」(全4: 251)

十一月二十八日

第三十九銀行の安井醇一、第三十三銀行の笹尾精憲を訪問、午後二時より松本真三前橋町長の幹旋に
 より臨江閣において町役人六十人に演説をする。(全5: 399, 400)

また東京の徳富に昨夜の集会のことを伝えると共に、横浜の募金状況につき「身ハ上毛ニあるも只心
 にかかるハ横浜之戦場なり」と焦慮の念を示し、明日中に前橋を片付け、その後、高崎に行き、来月
 三日頃には帰京して横浜募金に取りかかりたいと述べる。また、島田三郎に松方蔵相の添書入手す
 るように依頼する。(全4: 252)

夜、前橋在住のアメリカン・ボード宣教師で共愛女学校教師のミス・シェン Miss Mary H. Shed
 の夕食に招待される。寒い部屋で過ごしたため、宿所の関農夫雄方に帰ってから腹痛を発す。後藤
 「源九郎」医院に永岡書記を走らせるが、説明不十分のため薬のみ持ち帰る。(全4: 253, 264, 全5:
 399, 480)

この日付で二通来信。(一)住友吉左衛門より、大学寄付金三千円のうち、第二回目として金一千円を第
 一銀行に振り込んだ旨を通知してくる。(T3180)

(二)『天道溯源』の著者W・A・P・マーチンより、明治十二年頃京都を訪問した際に、新島に案内さ
 れて見物したこと、同志社をも見学して深い感銘を受けたことにふれる。(T2749)

徳富猪一郎は大学募金に関し、この朝、河島醇を訪れ、松方正義にも協力を願うよう重ねて依頼する。

(F1469)

十一月二十九日

明け方になっても腹痛治らず、早朝、再び永岡喜八を後藤医師宅に行かせ往診を求める。手当ての結果、痛みは治まるが、胃腸カタルとなり苦しむ。寒さのため回復が遅れる。(F1470)

この日より十二月十三日まで、「一日トシテ痛ミノナキ日ハアラス 又夜毎二、三時頃スト「ীব」ノ火ノキユル比ニハ必ラス痛ミヲ起シ更ニ回復ノ見込」なし。また、この間、不破ゆうの看護を受ける。(F1471)

十一月三十日

島田三郎が民友社を訪れ、徳富と横浜方面の募金について相談する。(F1472)

十二月一日

中山光五郎よりこの日付で、佐野地方伝道の近況を報告してくる。(F1473)

十二月二日

新井毫の幹旋により、この日および五日に予定されていた大間々、桐生における大学募金の集会は、新島が病気のため中止となる。(F1474)

十二月四日

広瀬源三郎よりこの日付で来信、第三回大学募金の期日について問い合わせる。(F1475)

十二月五日

在ベルリンの伊勢時雄よりこの日付で、本年中ベルリンにいて、二十三年一月二十日イタリアを出航、三月初旬帰国予定と伝えてくる。(F1476)

十二月六日

この頃より、やや食欲が起こり、便通も良くなる。(F1477)

十二月八日

八重夫人に電報を打ち、更に病気の詳細を送る。「この間より少し病気だ、もはや大分よろし、近々

十二月九日

東京へ帰るから案じるな」「不破ノ奥様日々看病ニ御越し被下、食物一切之御世話致し被下候……」
(全4:257)

この日、徳富に前後二回にわたり発信する。

(一)前橋に来て間もなく病気にかかり、前橋・高崎での募金が俄に頓挫してしまった。一方、横浜の状況も気にかかるので、上州の募金は湯浅治郎に託して、早々に帰京したいと書く。「小生モ当時無益ニ床中ニ伏シオルハ実ニ一日千秋ノ思ナキ能ハス機ニ乗シ進マント欲シテ進ム能ハス又退ク事モナラス床中病魔ノ一囚人ト相成候」「上毛ニ於而テハ今回ハ先ッ敗軍之将ナリ」(全4:259)

(二)「寒氣之恐レモ有之帰京ハ得策カト存候得共松方大臣之横浜商人中ニ談判ヲ開カレサルナレハ小生モアナカチ帰京を急くに及ハざる哉とも存し候」と述べ、横浜の運動につき報告を求める。(全4:260)

広津友信よりこの日付で来信、十一月二十五日付で送った手紙の返事がないので心配している、と記す。(F1478, F1479)

十二月十日

新井毫に発信、東京にいつ出るかを尋ねたうえ、自分のことにふれ、「此度は敗軍之将と申て可然か、小生之心事御洞察被下度候」と述べ、一首を付す。

斃るれど其のこゝろ。根の枯れされはまた来る春に花そ咲らむ

「兎ニ角小生ハ死ニ至る迄も必ず為すの決心に有之候……」(全4:261)

十二月十一日

この日付で二通来信。(一)宮川経輝より、泰西学館への経済援助を依頼してくる。(F1482)

(二)大久保真次郎より、山を買収して木炭の製造販売をすることにより、秩父地方の人々に生業を与え

ると同時に、伝道・教育費を捻出する案に意見を求めてくる。(F1483)

十二月十二日

先月二十八日発病以来、回復が遅れ、募金運動の見込みも立たないので、「断然ト意ヲ決シテ東京ニ帰ル事ニ定メ」るが、この日雨のため、前橋出發を一日延ばす。(H4: 264, H5: 480)

中山光五郎よりこの日付で來信、佐野の篤信者兄弟について、および新島から送られた五円について記す。(F1484)

十二月十三日

上毛青年会中基督信徒の諸君に宛て次の語を贈る。これは翌二十三年一月十八日發行の『上毛之青年』第十三号に「新島襄氏の書翰」のタイトルで掲載された。

社会矯風之元氣基於基督教 人心改良之精神生於愛基督

天気快晴、寒氣も緩んだので、午後十一時五十分の列車に乗り、「道中湯タンボの用意致し候得共、少しも寒しとは思ひ申さず、又腹部之痛みも更になく」東京に帰る。新島公義宛の手紙の中で「奈翁モスコー敗軍之如ク志を得ずして空しく帰京」と書く。

午後三時、上野に到着、「たぶん徳富の手配によって」ストーブの入った茂林館に入る。夜、高橋少太郎医師の手当てを受け、病状も落ち着く。(H4: 264, 266, H5: 480)

* 前橋発の時刻について「午後十一時五十分」となっているが、(H4: 263)では十四日付で「本日無理ニモ該地ヲ発し午後三時過着京」とあり、「午前」の誤りかも知れないこの頃、前橋・東京間は汽車で三時間余であつた。(H5: 355, 374) 参照。

十二月十四日

八重夫人・新島公義はじめ各地へ手紙を書く。徳富も來訪する。(H4: 266, 273)

八重夫人に発信、病氣と東京に帰ったことを知らせたうえ「御母様の方ニハ……御部屋を成丈暖かニ為し、又食物も甘キヤワラカキ魚類を御さし上……」「書生か遊びに参り候はど何卒丁寧ニ御取扱被

十二月十五日
十二月十六日

下……彼等ハ実ニ大切之人物ニ候間大切ニ取扱申度候」等の心配りを見せる。(44: 266)
新島公義に宛て「組合、一致両会之合併ハ多分水泡ニ属スヘキトセハ、将来必ラス一致会ニハ非常ノ勢力ヲコメ我党ト競争セラルベキハ必然ノ事ニテ……」「去レハ関東ニハ上州、野州又信州ニ切り込ミ、越後ヲ固ムルハ生ノ多年経綸中ニアル所ナレハ……」と記して、新潟伝道へ向かう意志を聞く。

また「貴君細君の事は大失望の至甚御気の毒に存候」と慰める。(44: 267)

長岡の時岡恵吉に発信、一致教会からの伝道に対し「只々忠実ニ吾人ノ為ス可キ処ヲ為シ受持チノ所ヘハ充分手ヲ尽シ、手ノ出シ得ヘキ所ニモ充分手ヲ出シ我自由自治主義ヲ拡張仕度……他人ノ為ス事ニハ余リ防御然タル事ハ為サス、来ルモノハ拒マスニ為シ置キ……」と心構えを述べる。(44: 268)
徳富猪一郎より大磯でしばらく休養するように勧められる。(45: 400)

八重夫人に発信、京浜地方の募金は松方蔵相に依頼しているが、年内には決着しないかも知れず「御母様ニも御病氣又々お前様ニも如此永々御留守を為致候は実ニ御氣之毒千万ニ候得共、只今私カ京都ニ帰り折角東京ニ於而準備致し大骨折之仕事も又々立チギヘニ相成可申候間、此度は是非共何事を措いても関東ニ止まり、殊ニより候はゞ越年候而も仕方無之、氣候の暖かなる大磯ニ養生」するつもりである、と通知する。(44: 273)

井上馨に書簡を送り、上州での募金が病氣のため失敗したことを報告すると共に、来春再挙を計ることを記し、「小生も一回思立候事ハ飽迄も貫徹可仕覚悟ニ罷在候」と決意を披瀝する。(44: 272)

新潟の広津友信に発信、「伝道者雇入ノ為ニハモニナクテハナラズ新潟之ミツシヨナリー先生方ニハ新潟県下一円ニ伝道拡張之見込ハナキカ否……兎角独立自治ヲ論シモニラ出サヌ事ヲ手柄トナシ

少シモ拡張之事ニ着目セス実ニ無神經無経綸〔ノ〕アスピレーション事ト窃ニ痛歎……全県下一円拡張之為ニ惜シマスモニーヲ散スル覚悟アルヘキ旨小生ヨリ呉々彼先生方へ御勸申候ト御伝言被下度候」と述べる。(全4:271)

金森通倫に大磯での療養を通知する。(全5:400)

大阪朝日新聞取り扱いの第二回募集義捐金(金百三十九円八十銭、十一月三十日締切)を受け取り、社告としてその領収金額を公表する。(D1:222)

* 十二月十六日依頼、同十九日刊行。

十二月十七日

松方正義・河島醇の両氏に手紙を書き、大学のことを頼む。(全5:401, 480)

十二月十八日

河島醇、茂林館に来訪、横浜方面の募金について語る。また彼より横浜警部長を紹介される。(全5:480)

十二月十九日

秩父より大久保真次郎が松本女史・新井登三郎を連れて来る。(全5:401)

十二月二十日

この頃、五、六丁散歩できるようになる。(全4:276)

この朝、吉田賢輔が来訪する。更にこの日彼に手紙を送り、次の漢詩を送り、斧止を乞う。(全4:276)

看山高巍々 観海濶洋洋々 味得造化妙 小心少発揚

関農夫雄・杉山重義が来訪する。不破唯次郎・安井醇一・曾我部道夫・八木始に発信〔か〕。また広津友信に一書を送り、新潟伝道と広津の去就について尋ねる。(全5:410)

この頃、次の漢詩を賦すと共に、伝道のため栃木・長野方面の事情を調べる。(全4:275, 全5:401)

「有感」

徒仮公事逞私慾 忼慨誰先天下憂 廟議未定国歩退 英雄不起奈神州」(45: 404)

「廿二年之秋、予到上州前橋、欲募大学之資金、日未幾余発病、以故不果志空帰東京

秋風蕭颯渡刀川 欲去尚看両野天 新雁不知孤客意 声々鳴到赤峰辺」(45: 405)

十二月二十一日 河島醇に松方蔵相の年内の予定を尋ねた結果、横浜の募金が進まないことを知り、養生のため大磯に行くことを決める。(45: 481)

十二月二十二日 新島公義より新潟伝道を承知する手紙を受け取り、この日返事を送る。新潟地方の状況を説明すると共に、二十六、七日に大磯の百足屋へ行くことを知らせる。(44: 277, 279, 45: 411)

十二月二十三日 綱島佳吉来訪、福島白石村治が病氣であったことを聞き、この日さっそく見舞状を送り、あわせて福島県下の伝道について抱負を述べる。(44: 284)

松田順平来訪、伊勢時雄が帰国のうち郡山・福島伝道にあたるよう勧める。(44: 287, 45: 406)
佐々城豊寿、鍛冶町の茂林館に来訪する。新島は婦人の権利と義務について意見を述べる。写真を一枚贈る。(410: 361, C3: 326)

不破・杉田・杉山(連名)に一書を送り、長野伝道は上州部会で行うこととし、新島公義を伝道師として派遣することにつき了承を求める。更に群馬・栃木伝道について事細かな指示を与える。この頃より長文の手紙が多くなる。(44: 270)

広津友信よりこの日付で来信、新潟教会の規約が定まり、新たな活動が始まりつつあること、教会合併についての意見を伝えてくる。(F1491)

金森通倫宅で常議員会を開く。(一)原田助を神学教授に招く (二)十二寮建築費千五百ドルにつき外国よ

り寄付を求める。(三)二十四年度より理財学科を設ける。(D1:1268)

十二月二十四日 徳富猪一郎に発信、金森通倫がたぶん今日着京すると思うので、来る二十六日午後四時より宿所において在京社員会を開きたい。それにつき相談したいので今日か明日の午後、来訪するように求める。

(全4:289)

会津若松の東正義に病氣見舞いを兼ねて発信、同地出身で東京在住の松田順平を郡山に招き、福島白石とも協力して福島県下の伝道にあたるよう勧める。(全4:287)

河波荒次郎に発信。(全5:411)

金森通倫・下村孝太郎が上京し、来訪する。(全5:406)

十二月二十五日 新潟に伝道中の広津友信・原忠美にジョン・ブライトのスピーチ二冊をクリスマス・プレゼントとし

て贈る。(全4:297)

佐々城豊寿・潮田千勢が来訪する。(全10:362, C3:329, C4:140)

不破唯次郎よりこの日付で来信、長野伝道および桐生視察のこと、妻の病氣、二十八日ごろ伊勢老人を見舞う予定なので、それまで在京ならば会いたいと言ってくる。(F1494)

十二月二十六日 不破よりこの日付で来信、桐生のことは面談のうえ報告したい。(F1495)

広津友信よりこの日付で来信、教員は自分が按手礼を受けることを望んでいるが、なお迷っている。後任人事について依頼する。(F1496)

J・N・ハリスよりこの日付で来信、ハリス理化学館 Science Hall の礎石が置かれたことを喜ぶ。(F2752)

十二月二十七日

午前十時より茂林館において在京社員会を開く。出席は新島のほか小崎弘道・湯浅治郎・金森通倫・徳富猪一郎の五名。正午、東京を出発して大磯の百足屋に入る。離れ家で煙草の臭いもせず、温暖静寂であり、大いに気に入る。夜、珍しく八時間眠る。

初めて大磯の宿に浪の声をききて

いにしへの人も夢間に聞きしてん磯に砕たける波の声いへ

(全4: 295, 298, 304, 全5: 481)

* (全5: 406) では社員会を二十六日午前に開く、とある。

不渡よりこの日付で、桐生伝道について詳細に報告してくる。(T 1498)

この頃、熊本の中賢道が上京、九州方面の大学募金についての相談がまとまる。(全4: 292)

十二月二十八日

小野英二郎が柳河に帰郷したことにつき、同地の森信夫に手紙を送り、もし小野が身の振り方につき相談に行ったならば、同志社の教授に招聘したいと考えているので、今二、三年ドイツに留学して理財学を修めるよう勧めてほしいと頼む。(全4: 297)

広津友信に一書を送り、新潟県の地図を送られたことにつき礼を述べたうえ、洋行を望む広津と牧師として留まることを求める教会の間で取り扱いに苦慮していることを記す。更に新潟の伝道策を詳細に記して激励、福島・信州の伝道についてもその抱負を述べる。(全4: 290)

「廿二年之冬余在大磯艸 関東北越伝道策贈北越之一友人

不止月下併能越 連合八州是我分 壮途却促男児涙 滴々灑為縷々文」(全4: 302, 全5: 406)

十二月三十日

徳富猪一郎に発信、金森通倫と下村孝太郎が在京中、とくに金森に同志社将来の方針を十分に問いつけておくように依頼する。金森には「気骨のある人物を生かし、殺さぬ方針を取れと呉々も御忠告被

下度候、彼ハ予之取り来リタル茫漠然タル手段ハ暗々裏ニ反对之よし貴兄何卒同氏之意見を御惹出し、願クハ一ヒ御投与被下度候、又下村ニも……眼中恐クハサイヨンスアルノミならん、種々之魚ハ大沢之中ニ大切ニ養呉候様殊ニ御忠告被下候ハ、幸甚」と述べる。(全4:303)

横田安止に発信、同志社の将来につき「学校も機械的之製造場ニ漸々流レ行ハ、生徒の教も増したるより自然之勢ニして止む能ハざる所も可有之候得共」わが校をして深山大沢のごとくになし、大魚も小魚も生長發育させたいこと、「適応之人物」はなるだけ伝道者になるよう勧めたいこと、留守宅の夫人を慰めるため生徒に遊びに行つてほしいこと等を述べる。(全4:305)

新島公義に発信、「伊セ之山田、大和之奈良、信濃之善光寺とて如何ニも貴君之趣キ伝道さるゝの地神仏ニ因縁あり随而速ニ好果を見さるの恐も抱かれ候は実ニ御尤千万」「少し遅々躊躇シ賜フハ御尤之至ナレトモ、この長野行ハ前ノ二ヶ所トハ大ニ相違する場合有之、実ニ大胆愉快ナル運動ナリト存候」と激励する。(全4:300)

明石の松尾音次郎に発信、病氣の療養を兼ね、最近設立された鹿児島的女学校に行く旨を勧める。(全4:299)

この日付で広津友信より来信、按手札を受けないことを教会員が了解してくれた旨を知らせてくる。(F1501)

十二月三十一日 新島公義より信州行きを承諾してくる。(全5:407)

不破唯次郎よりこの日付で来信、新島が滞在したことのある関農夫雄宅が全焼したこと、不破・河波・井出の三人で上州伝道について相談したことを通知してくる。(F1502)

この年、『国民新聞』の創刊を計画して借金をする徳富猪一郎の保証人となる。(「76:256」)

明治二十三年（一八九〇）四十八歳

一月一日

「甚だ静にして来客一人もなく春の様にも被思不申候 本日ハ朝より詩などを作り書き初をなし大ニ
楽しみ申候」（全4：315）

「元旦之作

歳月如流不待人 鶏鳴早已報佳辰 劣才縦乏済民策 尚抱壮途迎此春

此ノ日ハ筆ヲ試ミ、多分之額面又自作等を書慰ミたり」（全5：407）

* ここでは「歳月如流……」とあるが、別に新島筆跡の「送歳休悲病羸身……」（全5：口叢如編）の詩も同志社に残されており、現在では後者の方がよく知られている。一月七日付の広津友信宛書簡に「……起句丈ヶ改候也」として「歳月如流……」を記している。したがって最初は「送歳休悲……」であったことが窺われる。

新島公義・大久保真次郎・広津友信らに書き初めを送る。（全4：314, 329, 全5：411, F1529）

杉山重義よりこの日付で賀状来る。その中で信州伝道にふれ、小崎弘道を説得して熱心な発起者とす
るのが得策であると進言する。（F1509）

一月二日

高田専門学校の木原勇三郎が河波の進退に関し相談のため来訪。続いて徳富猪一郎・小崎弘道・金森
通倫が来訪して「大ニギアヒ」一泊して帰る。（全4：321, 全5：407）

杉山重義に発信、さきに書き送った上州・信州伝道策は不破・杉田と「協議一決セサル内ハ余り他ニ
漏れざる様仕度」協議一決のうへは「非常ノ御奮発ト非常ノ果斷決行ヲ要セラレン事小生ノ切望スル

一月三日

所ニ御座候」と記す。(全4:316)

徳富・小崎・金森と同志社の将来の計画について相談する。政法理財部を東京に設置すること、文学・哲学・神学等を盛大にして同志社の特色を出すこと、教員の配置招聘について話し合う。「此ノ日ノ談判ハ実ニ奇々妙々、弥出弥快ナリ」(全5:408, D1:1274)

午後、この三人は帰京、「後トハ火のきくたるか如し」。(全4:321)

八重夫人に発信、先日は病気のため都合がつけば大磯に来るように言ったが、「八十四歳之御母をのこし私共兩人ニて東に在るは中々心もとなく何とも心配なしには暮らし得間敷……無理ニ御出ニ不成候とも私ニハしんぼう致し成丈け先きの短く被為在御母様へハ私ニ代リ御つかへ被下候而先当分御出之義見合セニなし被下度候」(全4:320)

吉田賢輔に発信、かねてより同志社のことに関し榎本文部大臣に紹介していただきたいと思っていたが、今度、同志社校長の金森通倫が上京し文部省の許可を受けたい事項につき、文部大臣に拝眉を得たいというので、自分に代わって金森通倫を紹介してやってほしいと頼む。(全4:321)

半田平次郎・松本勘十郎へ年賀状と書き初めの書を送る。(全4:318)

上州の杉田潮・杉山重義に発信。(全5:411)

この日付で森信夫より、小野英二郎のドイツ行きを勧めてくれたことへの礼状が来る。(F1515)
増田尚平よりこの日付で書き初め送付に対する礼状が来る。(F1513)

八重夫人に宛て「昨日も一筆申上候通、御前様之関東ニ御出之事ハ考ふれば考ふるほと上出来とは思へれ不申……日本人ニして日本に働きを為す身ニ有之候ハ、夫婦之間柄よりも親の御事ハ重んじ申度

一月四日

……御前様も関東ニ御越し被遊候ハ、義理と云ひ人情と云ひ何分申訳之立たぬ事共なり……先ツ関東御越しハ御見合被下度候」(全4:323)

一月五日

いしかねも透れかしとてひと筋に 射る矢にこむる大丈夫の意地 (全5:408)

* この和歌の仮名遣いは北垣国道宛書簡(一月十日付)に依った。青柳新米・時岡恵吉宛書簡では「いわかねも透れと放し真すらをの心の矢や神のまにまに」となっている。(全4:331, 338, 354)

この夜、横井の母堂の死去「一月四日」を聞き、京都にある老母の病体如何を思い、眠れず、

旅枕母の心を思ひやり 夜半にも夢の結はざりけり (全5:408)

キリスト教大学を作るといふ白日夢について長文の英文書簡を認める。(全6:366)

* 四日の発信記録に Allen, Browne の名が見える。(全5:411)

横井時雄母堂葬式により永岡喜八を代理として派遣する。(全4:324)

一月六日

鹿兒島行きに同意した松尾首次郎に発信、就職の条件および伝道の心得について記す。(全4:324)

一月七日

不破唯次郎夫妻が前橋より来訪する。八日帰る。(全5:413)

広津友信に発信、新潟県の地図を贈られたことへの礼を述べ、あわせて五月まで新潟に留まるという広津に対し「自治自由政治之実験専制的政治ニ優ルノ理由ヲ説キ彼等之脳裡ニ吹込ミオキ……全会員ニモ自治自任之精神ハ充分御入込ミ被下度……」と希望する。末尾に「歳月如流……」の漢詩をそえる。(全4:329)

横田よりこの日付で校内の状況を知らせてくる。「今日ハ我カ同志社も組織上革命セザル可カラザル

ノ時又タ教育法教師淘汰等ノ改良アラザル可カラザル時ト存セラレ候……」(F1527)
一月八日
広津友信に漢詩を贈る。

長江千里碧漫々 沃野饒田東北冠 地経一葉所君贈 展向南窗仔細看 (全5: 409)

大久保真次郎よりこの日付で来信、小北寅之助に関東伝道の重要性を説き、八代行きを止めるよう説得してほしいと要請してくる。(F1529)

一月九日
大久保真次郎・広津友信・岡部広・田中原太郎・遠藤能定・小北寅之助に手紙を書く。長文。(全5:

413)

金森通倫・下村孝太郎の両名、京都へ帰る途中、大磯に立ち寄り新島を見舞う。一泊する。(全4: 330)
二人の教員と新設の理化学学校の計画を論じてその晩を過ごしたが、新島はふだんと変わらぬように見えた。下村は宿での不便な生活を見て、京都に帰ることを勧めたが、新島は彼らしく「ここには二万ドルの借金があるのでね、それを支払うまでは出ていくわけにはいかないよ」と答える。(全10: 352)
* 二人の訪問を(全10: 352)では一月十日のこととしている。

八重夫人よりの手紙(一月七日付)をこの夜受け取る。(全4: 332)

小谷野敬三、横浜に帰国する。(F1537)

松田順平よりこの日付で来信、福島地方への伝道につき、小崎弘道・綱島佳吉の兩人とも東京に留まるよう勧めるけれども、自分としては断然東北伝道に従事する決心なので、早急に同地方の伝道計画を立ててほしいと要請してくる。(F1532)

一月十日
八重夫人より差し出しの荷物が到着する。夫人に手紙を出し、大磯滞在中の橋本綱常軍医総監の診察

を受けたこと、J・C・ベリーからの医薬も受け取ったことを知らせる。また生徒らが留守宅に遊びに来ることを知り、新年の和歌を書いて幾首かを送る。(全4:332)

北垣知事に手紙を送り、アメリカより帰国して理化学校の教授となる下村孝太郎を紹介する。また大磯に療養中のことを述べ、二十三年の春を迎えた感慨を「いしかねも透れかしとて……」の和歌に託す。(全4:330)

広瀬源三郎より二十二年十二月三十一日締切の会計報告を受ける。(D1:224)

北海道釧路標茶の原胤昭よりこの日付で来信、刑務所改善および出獄人保護事業につき近況を伝えてく。(F1533)

宮川経輝よりこの日付で来信、同志社のこと、信仰のことについて述べる。(F1535)

原忠美に発信、新潟県下の伝道策について述べると共に、教合合併が中止になれば組合・一致両派の間で伝道競争が始まるので、信者たちに自由自治主義の教会の基礎を固めておくように激励する。

(全4:334)

「嘆明治隆世之書生」次の漢詩を賦す。

令色巧言求玉紳 不慮天下只慮身 請看当代学才子 鍛練鉄腸有幾人 (全5:409)

熊本英学校へ「新学期の」開業を祝し電報を打つ。(全5:413)

「小生も十一日夜より又々胃カタル之為ニ悩まされ……」これが急速に悪化して腹膜炎となる。(全4:346, 全5:413, 全10:353, C7:2)

不破唯次郎よりこの日付で来信、関農夫雄への火事見舞金を渡したこと、信州へ伝道に出かけること、

上州の状況を報告し上ぐる。(F1536)
 発熱三十八度六分、医師の手当てを受け、モルヒネ皮下注射、塩酸キニーネの服用により痛みと熱を取り、午後三時ごろ痛みは鎮まる。(C7:2)

この日付で二通来信。(一)不破ゆうより、先日訪問したことについて挨拶。(F1538)

(二)新発田の原忠美より、クリスマス・プレゼント「演説全集」への礼と新潟地方の教勢を記す。(F1539)

一月十三日

便通あるも食欲なく、胃部に重苦しさを感じる。(C7:2)

小谷野敬三が帰国したことを知り、祝辞を送る。(全4:336)

浮田和民よりこの日付で来信、東京に政治法学部を置くことに反対する。同志社大学政治法学部を東京に設置するという案が東京在住の社員の間に多いようだが、同志社大学は独自一己の資質を持つべきであって、東京大学の寄生虫のごときものであっては世間の信用を失う。政治法学部を東京に置けば百般の便益はあるだろうが、同時に同志社に独立の力なきを表明することになりはしないか、と述べる。(F1541)

一月十四日

病状平康を保つが、食欲なく、牛乳二合、スープ一合くらいにとどまる。脈拍・体温・呼吸に異常はないが、盲腸のあたりに微痛を感じる。(C7:2)

この日、新島の誕生日というので八重夫人は横田安止・浜田正稲・波多野培根・古賀鶴次郎ら四名の学生を松蔭町の自宅に招待する。(全4:332, 340)

一月十五日

病状、前日と変わらず。(C7:2)

広津友信に発信、新潟のミッシヨナリーに目下の急務を説き、彼らの手元にある資金を出させることを勧め「分カラサル時ハ分カル迄御説キ被下……彼等之手ニ今自由ニ相成候モノハ尽ク使用仕度候、是迄新潟ミッシヨンハ全敗ト云トモ可ナリ」と述べると共に、三条には米国帰りの真霜廉を、五泉には岡山の福家氏を招くようにしては如何、と勧告する。(全4:339)

木原勇三郎に手紙を書き、河波荒次郎が新潟へ行き、他人の選挙のため奔走することを止めるよう忠告を求める。(全4:343)

富岡教会の河波荒次郎に発信、新潟で政治運動することを止め、主のために上毛地方の人民を導くよう要望する。(全4:346)

不破唯次郎を通じ依頼されていた漢詩および和歌を認め青柳新米に贈る。

「徒仮公事……」「令色巧言……」「歲月如流……」「いわかねも……」(全4:337)

松田順平が来訪、福島伝道について相談、小崎弘道の教会より派出の名目として月給を取り決め、郡山を中心として三春・須賀川等に伝道することを話し合う。(全5:409)

大阪の泰西学館の不足を補助するため二十五円を送る旨、宮川経輝に通知する。(全5:409)

十三日より長野方面の視察に向かった不破・杉田・杉山を思いやり、信州伝道に期待する。(全5:409)

午後三時頃より疼痛やや増し、夜に入っても治らず。(CT:3)

大磯に休養中の渋沢栄一に一書を送り、病氣見舞いを述べると共に、宿所付近の水は悪いので駅近くの井戸水を使う方が安全であると注意する。(全4:344)

横田安止に発信、同志社内の学生の風潮について意見と希望を述べる。(全4:345)

一月十六日

一月十七日

午前四時頃より盲腸部の疼痛甚だしくモルヒネの注射を打つ。その他異常なし。(C7:3)
山竜堂病院の榎村清徳医師が呼ばれ、急性腹膜炎と診断、甚だ重態である旨を告げられる。(C4:123)

「永岡喜八」書記は直ちに夫人を電招せんとせり、然れども先生之を制して肯ぜず」(C2:295)
この日次の三通の手紙を書く。これが絶筆となる。

八重夫人に「内々ニ而私之誕生日ニ御祝ひ被下、母上様ニも御機けんよろしきよし何ニより」と述べ、去る十一日に外に出て風邪をひき、夜、腹痛を起こしたが「今日はもうよろしく候」(C4:350)

新発田の原忠美に宛て、三条に真霜、五泉に福家を招いて伝道にあたらせることを勧め、「新潟県下ハ今カ固メ時なり、今速カに吾人之手を以而団結せしめされば他日種々の人物カ入来リ鹿ハ誰の手ニ落るかも知れざる程の惨状を呈するニ至らん夫レ伝道は尚戦争之如し、時機を見而進む甚肝要なり」「願くハ自由なる福音の活種を越後之原野ニ播き賜へ」と激励する。(C4:359)

長岡の時岡恵吉に宛て、教会建設の計画が始まったことを喜ぶと共に「乍不及小生も貴会堂建設之為にハ応分之力を尽し度候」と記す。(C4:352)

不破・杉山・杉田の連名によりこの日付で来信、十三・十七日の信州伝道の調査について詳細を寄せしむ。(F1546)

不破よりこの日付で来信、河波についての書状を受け取った。彼を富岡で働けるようにしたいこと、信州伝道について述べる。(F1545)

一月十八日

午前七時頃より左下腸部に微痛を覚え、次第に増加して下腹全部に波及する兆候が見える。夜間不眠

かく渴きあり。(CT:3)

八重夫人より浮田和民夫人の永眠を知らせてくる。(F1549)

甘樂教会の河波荒次郎より来信、利禄のため変心する人物のごとく誤解されているのは残念である、と述べる。(F1547)

一月十九日

新島に付き添う永岡喜八は、この朝ひそかに八重夫人に宛て新島の病状悪化の電報を打つ。疼痛少し増加、阿片剤を服用する。午前十時、発熱三十八度六分、腹部全体に氷罨法を施す。呼吸やや困難の状あり。午後七時、体温三十七・九度。午後十一時、体温三十八・五度、呼吸二十八。夜中一時間の睡眠を取る。(CT:3, 7)

一月二十日

午前九時、体温三十七・四度、呼吸二十九。終日疼痛去らず、灌腸、鎮痛剤を服用する。午後六時、佐々木医師の診察を受ける。(CT:4)

「先生、病危篤、スグ医者ヲ連レテ来イ」の電報を永岡より民友社の徳富猪一郎に打つ。小崎弘道・富田鉄之助・津田仙・木村熊二・人見一太郎ら東京の友人にも危篤報が打電される。(L133, F2214) 佐々木医師の診察の結果、夜に入り東京・京都その他各地に危篤の電報を打つ。(CT:6)

徳富・小崎の両名が新島に対し「医師診断の要領を話し、且つ病気危篤の旨を通じ、若し御遺言にてもあらば承り置かんことを告げしに、先生は泰然として之に答へて曰く、死ハ是迄余が幾回も覚悟を定めたる所なれば、今神の召を受くるも遺憾なし、幸ひに配心する勿れ、今も疲労も甚しく且今夜十一時ごろには家内も来る筈なれば遺言は明朝に譲るべしと、先生病床にある疼痛実に甚しく……間々呻の声を発せられし程なり」夜十一時ごろ八重夫人が大磯に到着する。(CT:6)

一月二十一日

火曜日、午前五時、八重夫人・徳富猪一郎・小崎弘道を枕もとに呼び、同志社のこと、日本伝道のこと、ハーディ夫人ら友人・知己に對し、二時間にわたり遺言を述べ、徳富がこれを筆記する。またとくに伝道に關しては日本地図を広げさせて計画を説明する。(全4: 403~419, 全10: 353, C4: 124, C7: 8)

午前六時、体温三十六・一度。午前八時五十分、体温三十八・二度。午前九時より樫村医師による診察、手当てを続け、午前十時頃より苦悶・疼痛なく、顔面より憔悴去る。諸種の手当てを加えるが、午後十一時頃より諸症増加する。(C7: 4)

湯浅治郎が一番列車で看護婦を連れて大磯に来る。(C7: 3)

渋沢栄一、病氣見舞いのため来訪する。この日、新島は渋沢宛に遺言をしたため、後事を託す。(44

4: 418, J61: 32)

木村熊二、見舞いのため正午大磯到着、同じく見舞いに来ていた富田鉄之助と共に午後三時大磯発、帰京。(J79-2: 36)

浮田夫人の葬式のため教員・生徒ら七百余名がチャペルに集まっているとき、新島の危篤報が入り、金森校長が大磯に向かったことを加藤勇次郎より知らされる。この夜より寮およびクラスにおいて連日連夜祈禱会が開かれる。(J1305)

「センセイビヤウキトク」の電報が同志社に届く。「金森氏は大磯に急行し、満校沈痛たり、三々五々校の内外各処に集りて熱禱のなかに余光を送る。日没して大祈禱会を礼拝堂に催す」(C2: 235) 朝、枕もとの徳富に「芳野の山花咲く頃の朝な／＼心に懸る峰の白雲」の和歌を筆記させ、「天ヲ怨

一月二十二日

ミス人ヲ咎めす」と言ひ。(全4:409, C7:9)

正午ごろ金森通倫・中村栄助・新島公義・横田安止ら同志社の教員・生徒らが到着する。また、東京・上州よりも陸統と見舞いに駆けつける。「先生は一々其手を握りて挨拶を為せり」「衰弱加わり、疼痛甚しからず。前日に比し腹部の鼓張増加」する。(C7:5, 10)

もはや見込みのないことを告げられる。(全10:353)

原六郎、見舞いのため大磯に来訪する。(C7:12, J95—卅:480)

長浜教会、平安教会、平岩愼保らより見舞状来る。(F1550, F1551)

木曜日、午前三時頃、見舞いの者を一室に集め、いちいちその手を握り、別れを告げる。午前十一時すぎ京都よりベリー博士が到着する。(C7:10)

この日は「衰弱の有様にて、脈搏なく、口の動けるのみ、十二時過に及で精神の感覚漸く去り」午後二時二十分永眠する。(C7:5)

午後二時二十分頃「平和、喜び、天国」という言をつぶやきながら眠りにつく。(C4:124)

榎村清徳山竜堂病院長のこの日付の「死亡証」によれば、病名は急性腹膜炎症、一月十六日発病、一月二十三日午後二時二十分虚脱に由て死亡、とある。(E1263)

午後四時四十五分、同志社で教授会を開催中、永眠の報伝わる。葬儀委員を任命し、葬儀の終わるまで授業を休止することを決めて会を終わる。(E1305, C4:124)

「夜十時、大磯新島氏ノ凶計電信来ル 嗚呼氏ハ吾カ十七八歳の頃より学友たり 今や溘焉として逝矣」と木村熊二はその日記に書く。(J79—2:36)

各地より見舞文、弔文相次ぐ。(E1237)

一月二十四日

新島の遺体、午前八時八分、大磯発の列車で京都に向かう。午後十一時二十分ごろ七条ステーションに到着する。これより先、八重夫人・金森通倫・中村栄助らは午前十時すぎ京都に帰着する。(E1263, C7:12)

同志社では全校休業、午後六時より祈禱会、七時半より予備校で記念感話があり、新島の遺骸を迎えるため七条駅に行く。駅頭に出迎えた人々は教職員・男女生徒・信者・友人らおよそ六百名。列車到着のち、遺骸は生徒らに担がれ、人々がその前後に従った。午前一時、松蔭町の自宅に帰る。新島邸に入る前に柏木義巳が祈禱を捧げる。(E1263, E1305, C4:128, C7:12, 14-h)

* 駅から新島邸までの順路は、駅→不明門通→万寿寺通→御幸町通→丸太町通→寺町通→新島邸であり、生徒らが七組に分かれて素足で担いだ。おりから氷雨が降り道路は泥濘のため歩行困難をきわめたという。

新島襄の永眠および葬儀の通知を中村栄助・金森通倫・小崎弘道・徳富猪一郎連名で発送する。(E1267)

一月二十五日

新島八重より死亡届、埋葬許可願が上京区長に提出される。(E1263)

葬式の準備をする。教職員・生徒が分担して受け持つことを決める。生徒ら誰一人として校外に出る者もなく、皆愁然として先生の死を惜しむ。(C7:13)

一月二十六日

日曜日、説教と安息日学校を休み、午前八時よりチャペルで感会を開く。小崎弘道より先生の病状、遺言等を聞き、横田安止・青木要吉・金森通倫・不破唯次郎・松山高吉ら大磯より帰った人々の話を

聞く。(E1305, C4:129, C7:13)

新島邸で柩が開けられ、全校生徒・教職員が別れを告げる。午前中三時間にわたる日本語の告別礼拝、午後には二時間にわたる英語の告別礼拝がチャペルで行われた。(C4:129)

この頃『毎日新聞』『時事新報』『基督教新聞』『東雲新聞』等に追悼記事が載る。(E1298, E1299, E1300, 19—1)

一月二十七日

午前十一時半、新島邸において出棺式が行われ、柩は社員・教員に担がれて告別式の執行される同志社に向かう。午後一時より告別式が松山高吉司式のもとにチャペル前のテント張りの会場で行われる。参列者四千人。この頃より雨が降る。式後、柩は同志社生徒に担がれて烏丸通→今出川通→寺町通→三条通→南禅寺→若王子山頂に向かい、同墓地に埋葬される。山上では中村栄助の司式により埋葬式が行われ、午後五時、式を終わる。(E10:357, E1263, E1305, C4:129)

* 墓地は初め南禅寺墓地を予定していたが、故障があり、若王子山墓地に改められた。(E1263, C7:17)

The Congregationalist (Jan. 30, 1890) は次のように述べている。

“When the American Board officials reached their desks last Monday morning, the brief but poignant message, ‘Neesima dead; peritonitis’ His wonderful career so well known to our readers as to need but brief recapitulation.” (E2)

新島襄記念式が明治学院礼拝堂で開かれる。(E1289, G11)

午前九時より万国大学の同盟祈禱会とあわせて新島先生の記念祈禱会を開く。金森通倫が司会、宮川経輝・小崎弘道・大西祝・J・D・デイヴィス・井手義久その他が話をする。(E1305, J71:110)

一月二十八日

午後四時から山本覺馬宅において社員会が開かれ、山本を臨時同志社総長に推挙する。(J71:110)
 午後は円山左阿弥楼において卒業生大会を開く。六十二名(うち婦人十名)が集まり、小崎弘道より先生臨終の模様を聞く。夜、書籍館で卒業生会を開く。(一)同好会の規則を定める (二)新島先生神学記念室の設立およびその費用を募集する (三)同志社普通科維持資本を募集するため委員をアメリカに派遣する。以上三点を社員会に「忠告する」ことを決議する。(D38:36)

一月三十一日

北垣知事、若王子に墓参する。(E1291, 14-1)

二月一日

同志社各学校生徒、若王子墓参。(14-1)

二月十九日

同志社校友会は新島永眠による後任について会合する。(E378)

二月二十一日

新島を追悼する集会が東京の厚生館で催され、東京大学の加藤弘之総理・基督教新聞主筆竹越三郎・小崎弘道・平岩愼保・美山貫一の五名が演説をする。(全10:366, C4:145, 191)

二月

新島記念神学館建設のため同志社校友会は資本金五千円の募集を訴える。(14-1)

三月二十三日

この頃、新島夫人、葬式後の疲労のためか病氣となる。(E1291)

三月三十一日

山本覺馬宅において同志社評定会を開き、次のことを決める。

(一)金森通倫は校長を辞任。

(二)総長は暫時欠員、社務は常議員が執り、常議員長を置いて事務を行う。

(三)役員選挙の結果、校長に小崎弘道、常議員長に金森通倫を選ぶ。

(四)神学・普通・予備校を総て校長一名を置き、校務を担当する。女学校長をも兼ねる。

(五)新島の旅費ならびに大磯・京都葬式等の諸経費五百円は従来の功勞により葬儀料として大学より金

額の四分の一、各学校より四分の二、社員より四分の一を拠出して同氏へ贈る。

(六)ハリスより請求された要件を受諾する。またハリスを名誉社員とする。(D1: 1268)

四月一日 井上馨・波多野培根ら個人宛の遺言を八重夫人・徳富猪一郎・小崎弘道の連名でこの日届ける。(中

4: 414)

四月八日 組合教会第五回総会の決議に従って、総会議長・本間重慶より一致教会大会議長・井深梶之助宛に教

会合併の中止を通知する。(J22-2: 23)

この年、新島の最初の伝記 Phebe Fuller McKeen, *A Sketch of the Early Life of Joseph Hardy Neesima*. がボストンで刊行される。(C8)

十一月十日

J. D. Davis, *A Sketch of the Life of Rev. Joseph Hardy Neesima*, LL. D. が丸善商社書店から出版される。なお J. D. Davis, *A Maker of New Japan*, Rev. Joseph Hardy Neesima. Fleming H. Revell Co., New York. [内容が *A Sketch of* ……と同じ] もこの頃アメリカで出版された。(C9, 10)

十二月十六日 勝海舟、新島の墓標を認め、金十円をそえて新島未亡人に贈る。(J31-21: 399)

明治二十四年（一八九一）一月二十三日

午前九時より同志社チャペルにおいて没後一周年記念会が催される。

同日、東京日吉町共存同衆館でも記念会が催される。（I11）

明治二十五年（一八九二）十二月二十八日

山本寛馬、永眠、六十五歳。（D10：230）

明治二十九年（一八九六）一月七日

新島登美子〔新島先生母堂〕永眠、九十歳。（E1735）

大正四年（一九一五）十一月十日

大正天皇御即位に際し、新島に従四位を賜る。（E1238）

大正六年（一九一七）一月十三日

山本唯三郎が同志社に図書館を寄贈するにあたり、田中親光に委嘱して新島の胸像を造り、この日現在のクラーク記念館において除幕式を挙行する。

（D36）

大正九年（一九二〇）八月二十九日

A. S. Hardyより新島の佩刀（大小二振）が、大森夫人を通じて同志社に寄贈される。（F2835）

昭和七年（一九三二）六月十四日

新島八重、京都市寺町丸太町上ルの自宅で永眠、八十八歳。（D39）

昭和十年（一九三五）

ワシントン・カテドラルに新島襄の立像が安置される。（全2：ロザ野真）

昭和二十五年（一九五〇）十一月二十九日

新島襄文化切手（八円）が郵政省より発行される。（E1566）

明治 23 年 (1890)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	1
2	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	2
3	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	3
4	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	4
5	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	5
6	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	6
7	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	7
8	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	8
9	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	9
10	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	10
11	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	11
12	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	12
13	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	13
14	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	14
15	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	15
16	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	16
17	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	17
18	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	18
19	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	19
20	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	20
21	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	21
22	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	22
23	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	23
24	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	24
25	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	25
26	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	26
27	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	27
28	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	28
29	水		土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	29
30	木		日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	30
31	金		月		土		木	日		金		水	31

明治 22 年 (1889)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	1
2	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	2
3	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	3
4	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	4
5	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	5
6	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	6
7	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	7
8	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	8
9	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	9
10	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	10
11	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	11
12	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	12
13	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	13
14	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	14
15	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	15
16	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	16
17	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	17
18	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	18
19	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	19
20	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	20
21	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	21
22	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	22
23	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	23
24	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	24
25	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	25
26	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	26
27	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	27
28	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	28
29	火	／	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	29
30	水	／	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	30
31	木	／	日	／	金	／	水	土	／	木	／	火	31

明治 21 年 (1888)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	1
2	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	2
3	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	3
4	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	4
5	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	5
6	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	6
7	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	7
8	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	8
9	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	9
10	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	10
11	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	11
12	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	12
13	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	13
14	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	14
15	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	15
16	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	16
17	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	17
18	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	18
19	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	19
20	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	20
21	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	21
22	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	22
23	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	23
24	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	24
25	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	25
26	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	26
27	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	27
28	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	28
29	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	29
30	月		金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	30
31	火		土		木		火	金		水		月	31

明治 20 年 (1887)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	1
2	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	2
3	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	3
4	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	4
5	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	5
6	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	6
7	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	7
8	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	8
9	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	9
10	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	10
11	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	11
12	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	12
13	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	13
14	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	14
15	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	15
16	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	16
17	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	17
18	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	18
19	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	19
20	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	20
21	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	21
22	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	22
23	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	23
24	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	24
25	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	25
26	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	26
27	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	27
28	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	28
29	土		火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	29
30	日		水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	30
31	月		木		火		日	水		月		土	31

明治 19 年 (1886)

日 \ 月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 \ 日
1	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	1
2	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	2
3	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	3
4	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	4
5	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	5
6	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	6
7	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	7
8	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	8
9	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	9
10	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	10
11	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	11
12	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	12
13	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	13
14	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	14
15	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	15
16	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	16
17	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	17
18	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	18
19	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	19
20	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	20
21	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	21
22	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	22
23	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	23
24	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	24
25	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	25
26	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	26
27	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	27
28	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	28
29	金		月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	29
30	土		火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	30
31	日		水		月		土	火		日		金	31

明治 18 年 (1885)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	1
2	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	2
3	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	3
4	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	4
5	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	5
6	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	6
7	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	7
8	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	8
9	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	9
10	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	10
11	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	11
12	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	12
13	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	13
14	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	14
15	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	15
16	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	16
17	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	17
18	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	18
19	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	19
20	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	20
21	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	21
22	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	22
23	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	23
24	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	24
25	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	25
26	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	26
27	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	27
28	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	28
29	木		日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	29
30	金		月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	30
31	土		火		日		金	月		土		木	31

明治 17 年 (1884)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	1
2	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	2
3	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	3
4	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	4
5	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	5
6	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	6
7	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	7
8	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	8
9	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	9
10	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	10
11	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	11
12	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	12
13	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	13
14	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	14
15	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	15
16	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	16
17	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	17
18	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	18
19	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	19
20	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	20
21	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	21
22	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	22
23	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	23
24	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	24
25	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	25
26	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	26
27	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	27
28	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	28
29	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	29
30	水		日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	30
31	木		月		土		木	日		金		水	31

明治 16 年 (1883)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	1
2	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	2
3	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	3
4	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	4
5	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	5
6	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	6
7	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	7
8	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	8
9	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	9
10	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	10
11	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	11
12	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	12
13	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	13
14	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	14
15	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	15
16	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	16
17	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	17
18	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	18
19	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	19
20	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	20
21	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	21
22	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	22
23	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	23
24	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	24
25	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	25
26	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	26
27	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	27
28	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	28
29	月		木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	29
30	火		金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	30
31	水		土		木		火	金		水		月	31

明治 15 年 (1882)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	1
2	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	2
3	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	3
4	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	4
5	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	5
6	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	6
7	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	7
8	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	8
9	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	9
10	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	10
11	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	11
12	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	12
13	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	13
14	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	14
15	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	15
16	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	16
17	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	17
18	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	18
19	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	19
20	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	20
21	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	21
22	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	22
23	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	23
24	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	24
25	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	25
26	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	26
27	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	27
28	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	28
29	日	/	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	29
30	月	/	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	30
31	火	/	金	/	水	/	月	木	/	火	/	日	31

明治 14 年 (1881)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	1
2	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	2
3	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	3
4	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	4
5	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	5
6	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	6
7	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	7
8	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	8
9	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	9
10	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	10
11	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	11
12	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	12
13	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	13
14	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	14
15	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	15
16	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	16
17	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	17
18	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	18
19	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	19
20	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	20
21	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	21
22	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	22
23	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	23
24	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	24
25	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	25
26	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	26
27	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	27
28	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	28
29	土		火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	29
30	日		水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	30
31	月		木		火		日	水		月		土	31

明治 13 年 (1880)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	1
2	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	2
3	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	3
4	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	4
5	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	5
6	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	6
7	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	7
8	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	8
9	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	9
10	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	10
11	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	11
12	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	12
13	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	13
14	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	14
15	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	15
16	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	16
17	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	17
18	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	18
19	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	19
20	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	20
21	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	21
22	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	22
23	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	23
24	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	24
25	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	25
26	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	26
27	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	27
28	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	28
29	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	29
30	金		火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	30
31	土		水		月		土	火		日		金	31

明治 12 年 (1879)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	1
2	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	2
3	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	3
4	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	4
5	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	5
6	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	6
7	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	7
8	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	8
9	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	9
10	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	10
11	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	11
12	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	12
13	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	13
14	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	14
15	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	15
16	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	16
17	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	17
18	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	18
19	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	19
20	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	20
21	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	21
22	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	22
23	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	23
24	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	24
25	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	25
26	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	26
27	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	27
28	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	28
29	水	／	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	29
30	木	／	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	30
31	金	／	月	／	土	／	木	日	／	金	／	水	31

明治 11 年 (1878)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	1
2	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	2
3	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	3
4	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	4
5	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	5
6	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	6
7	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	7
8	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	8
9	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	9
10	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	10
11	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	11
12	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	12
13	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	13
14	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	14
15	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	15
16	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	16
17	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	17
18	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	18
19	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	19
20	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	20
21	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	21
22	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	22
23	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	23
24	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	24
25	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	25
26	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	26
27	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	27
28	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	28
29	火		金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	29
30	水		土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	30
31	木		日		金		水	土		木		火	31

明治 10 年 (1877)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	1
2	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	2
3	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	3
4	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	4
5	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	5
6	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	6
7	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	7
8	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	8
9	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	9
10	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	10
11	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	11
12	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	12
13	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	13
14	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	14
15	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	15
16	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	16
17	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	17
18	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	18
19	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	19
20	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	20
21	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	21
22	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	22
23	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	23
24	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	24
25	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	25
26	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	26
27	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	27
28	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	28
29	月		木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	29
30	火		金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	30
31	水		土		木		火	金		水		月	31

明治 9 年 (1876)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	1
2	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	2
3	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	3
4	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	4
5	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	5
6	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	6
7	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	7
8	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	8
9	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	9
10	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	10
11	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	11
12	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	12
13	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	13
14	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	14
15	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	15
16	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	16
17	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	17
18	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	18
19	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	19
20	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	20
21	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	21
22	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	22
23	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	23
24	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	24
25	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	25
26	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	26
27	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	27
28	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	28
29	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	29
30	日		木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	30
31	月		金		水		月	木		火		日	31

明治 8 年 (1875)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	1
2	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	2
3	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	3
4	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	4
5	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	5
6	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	6
7	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	7
8	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	8
9	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	9
10	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	10
11	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	11
12	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	12
13	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	13
14	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	14
15	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	15
16	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	16
17	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	17
18	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	18
19	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	19
20	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	20
21	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	21
22	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	22
23	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	23
24	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	24
25	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	25
26	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	26
27	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	27
28	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	28
29	金	／	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	29
30	土	／	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	30
31	日	／	水	／	月	／	土	火	／	日	／	金	31

明治 7 年 (1874)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	1
2	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	2
3	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	3
4	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	4
5	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	5
6	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	6
7	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	7
8	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	8
9	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	9
10	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	10
11	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	11
12	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	12
13	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	13
14	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	14
15	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	15
16	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	16
17	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	17
18	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	18
19	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	19
20	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	20
21	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	21
22	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	22
23	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	23
24	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	24
25	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	25
26	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	26
27	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	27
28	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	28
29	木	／	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	29
30	金	／	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	30
31	土	／	火	／	日	／	金	月	／	土	／	木	31

明治 6 年 (1873)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	1
2	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	2
3	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	3
4	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	4
5	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	5
6	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	6
7	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	7
8	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	8
9	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	9
10	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	10
11	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	11
12	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	12
13	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	13
14	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	14
15	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	15
16	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	16
17	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	17
18	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	18
19	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	19
20	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	20
21	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	21
22	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	22
23	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	23
24	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	24
25	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	25
26	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	26
27	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	27
28	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	28
29	水		土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	29
30	木		日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	30
31	金		月		土		木	日		金		水	31

明治 5 年 (1872)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	1
2	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	2
3	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	3
4	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	4
5	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	5
6	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	6
7	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	7
8	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	8
9	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	9
10	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	10
11	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	11
12	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	12
13	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	13
14	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	14
15	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	15
16	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	16
17	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	17
18	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	18
19	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	19
20	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	20
21	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	21
22	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	22
23	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	23
24	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	24
25	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	25
26	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	26
27	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	27
28	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	28
29	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	29
30	火		土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	30
31	水		日		金		水	土		木		火	31

明治 4 年 (1871)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	1
2	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	2
3	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	3
4	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	4
5	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	5
6	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	6
7	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	7
8	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	8
9	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	9
10	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	10
11	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	11
12	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	12
13	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	13
14	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	14
15	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	15
16	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	16
17	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	17
18	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	18
19	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	19
20	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	20
21	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	21
22	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	22
23	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	23
24	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	24
25	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	25
26	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	26
27	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	27
28	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	28
29	日		水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	29
30	月		木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	30
31	火		金		水		月	木		火		日	31

明治 3 年 (1870)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	1
2	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	2
3	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	3
4	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	4
5	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	5
6	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	6
7	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	7
8	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	8
9	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	9
10	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	10
11	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	11
12	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	12
13	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	13
14	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	14
15	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	15
16	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	16
17	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	17
18	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	18
19	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	19
20	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	20
21	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	21
22	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	22
23	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	23
24	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	24
25	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	25
26	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	26
27	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	27
28	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	28
29	土		火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	29
30	日		水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	30
31	月		木		火		日	水		月		土	31

明治 2 年 (1869)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	1
2	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	2
3	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	3
4	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	4
5	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	5
6	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	6
7	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	7
8	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	8
9	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	9
10	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	10
11	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	11
12	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	12
13	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	13
14	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	14
15	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	15
16	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	16
17	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	17
18	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	18
19	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	19
20	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	20
21	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	21
22	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	22
23	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	23
24	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	24
25	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	25
26	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	26
27	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	27
28	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	28
29	金	／	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	29
30	土	／	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	30
31	日	／	水	／	月	／	土	火	／	日	／	金	31

明治 1 年 (1868)

日 \ 月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	日 \ 月
1	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	1
2	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	2
3	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	3
4	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	4
5	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	5
6	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	6
7	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	7
8	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	8
9	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	9
10	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	10
11	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	11
12	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	12
13	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	13
14	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	14
15	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	15
16	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	16
17	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	17
18	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	18
19	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	19
20	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	20
21	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	21
22	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	22
23	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	23
24	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	24
25	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	25
26	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	26
27	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	27
28	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	28
29	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	29
30	木		月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	30
31	金		火		日		金	月		土		木	31

慶 応 3 年 (1867)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	1
2	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	2
3	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	3
4	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	4
5	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	5
6	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	6
7	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	7
8	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	8
9	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	9
10	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	10
11	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	11
12	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	12
13	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	13
14	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	14
15	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	15
16	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	16
17	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	17
18	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	18
19	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	19
20	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	20
21	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	21
22	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	22
23	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	23
24	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	24
25	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	25
26	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	26
27	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	27
28	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	28
29	火	／	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	29
30	水	／	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	30
31	木	／	日	／	金	／	水	土	／	木	／	火	31

慶 應 2 年 (1866)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	1
2	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	2
3	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	3
4	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	4
5	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	5
6	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	6
7	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	7
8	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	8
9	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	9
10	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	10
11	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	11
12	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	12
13	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	13
14	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	14
15	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	15
16	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	16
17	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	17
18	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	18
19	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	19
20	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	20
21	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	21
22	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	22
23	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	23
24	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	24
25	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	25
26	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	26
27	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	27
28	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	28
29	月		木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	29
30	火		金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	30
31	水		土		木		火	金		水		月	31

慶 応 1 年 (1865)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	1
2	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	2
3	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	3
4	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	4
5	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	5
6	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	6
7	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	7
8	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	8
9	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	9
10	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	10
11	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	11
12	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	12
13	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	13
14	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	14
15	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	15
16	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	16
17	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	17
18	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	18
19	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	19
20	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	20
21	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	21
22	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	22
23	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	23
24	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	24
25	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	25
26	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	26
27	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	27
28	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	28
29	日		水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	29
30	月		木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	30
31	火		金		水		月	木		火		日	31

元 治 1 年 (1 8 6 4)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	1
2	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	2
3	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	3
4	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	4
5	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	5
6	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	6
7	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	7
8	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	8
9	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	9
10	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	10
11	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	11
12	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	12
13	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	13
14	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	14
15	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	15
16	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	16
17	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	17
18	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	18
19	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	19
20	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	20
21	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	21
22	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	22
23	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	23
24	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	24
25	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	25
26	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	26
27	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	27
28	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	28
29	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	29
30	土		水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	30
31	日		木		火		日	水		月		土	31

文久3年(1863)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	1
2	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	2
3	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	3
4	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	4
5	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	5
6	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	6
7	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	7
8	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	8
9	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	9
10	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	10
11	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	11
12	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	12
13	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	13
14	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	14
15	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	15
16	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	16
17	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	17
18	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	18
19	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	19
20	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	20
21	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	21
22	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	22
23	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	23
24	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	24
25	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	25
26	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	26
27	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	27
28	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	28
29	木	／	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	29
30	金	／	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	30
31	土	／	火	／	日	／	金	月	／	土	／	木	31

文久2年(1862)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	1
2	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	2
3	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	3
4	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	4
5	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	5
6	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	6
7	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	7
8	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	8
9	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	9
10	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	10
11	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	11
12	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	12
13	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	13
14	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	14
15	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	15
16	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	16
17	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	17
18	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	18
19	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	19
20	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	20
21	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	21
22	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	22
23	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	23
24	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	24
25	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	25
26	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	26
27	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	27
28	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	28
29	水		土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	29
30	木		日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	30
31	金		月		土		木	日		金		水	31

文久1年(1861)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	1
2	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	2
3	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	3
4	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	4
5	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	5
6	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	6
7	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	7
8	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	8
9	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	9
10	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	10
11	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	11
12	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	12
13	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	13
14	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	14
15	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	15
16	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	16
17	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	17
18	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	18
19	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	19
20	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	20
21	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	21
22	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	22
23	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	23
24	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	24
25	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	25
26	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	26
27	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	27
28	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	28
29	火	／	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	29
30	水	／	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	30
31	木	／	日	／	金	／	水	土	／	木	／	火	31

万 延 1 年 (1860)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	1
2	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	2
3	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	3
4	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	4
5	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	5
6	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	6
7	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	7
8	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	8
9	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	9
10	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	10
11	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	11
12	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	12
13	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	13
14	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	14
15	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	15
16	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	16
17	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	17
18	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	18
19	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	19
20	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	20
21	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	21
22	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	22
23	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	23
24	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	24
25	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	25
26	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	26
27	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	27
28	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	28
29	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	29
30	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	30
31	火	土	日	水	金	月	火	金	水	土	月	火	31

安政6年(1859)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	1
2	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	2
3	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	3
4	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	4
5	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	5
6	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	6
7	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	7
8	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	8
9	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	9
10	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	10
11	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	11
12	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	12
13	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	13
14	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	14
15	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	15
16	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	16
17	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	17
18	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	18
19	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	19
20	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	20
21	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	21
22	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	22
23	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	23
24	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	24
25	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	25
26	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	26
27	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	27
28	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	28
29	土		火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	29
30	日		水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	30
31	月		木		火		日	水		月		土	31

安政5年(1858)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	1
2	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	2
3	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	3
4	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	4
5	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	5
6	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	6
7	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	7
8	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	8
9	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	9
10	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	10
11	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	11
12	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	12
13	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	13
14	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	14
15	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	15
16	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	16
17	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	17
18	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	18
19	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	19
20	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	20
21	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	21
22	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	22
23	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	23
24	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	24
25	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	25
26	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	26
27	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	27
28	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	28
29	金		月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	29
30	土		火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	30
31	日		水		月		土	火		日		金	31

安 政 4 年 (1 8 5 7)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	1
2	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	2
3	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	3
4	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	4
5	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	5
6	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	6
7	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	7
8	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	8
9	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	9
10	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	10
11	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	11
12	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	12
13	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	13
14	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	14
15	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	15
16	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	16
17	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	17
18	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	18
19	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	19
20	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	20
21	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	21
22	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	22
23	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	23
24	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	24
25	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	25
26	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	26
27	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	27
28	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	28
29	木		日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	29
30	金		月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	30
31	土		火		日		金	月		土		木	31

安 政 3 年 (1 8 5 6)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	1
2	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	2
3	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	3
4	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	4
5	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	5
6	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	6
7	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	7
8	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	8
9	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	9
10	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	10
11	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	11
12	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	12
13	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	13
14	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	14
15	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	15
16	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	16
17	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	17
18	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	18
19	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	19
20	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	20
21	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	21
22	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	22
23	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	23
24	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	24
25	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	25
26	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	26
27	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	27
28	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	28
29	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	29
30	水		日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	30
31	木		月		土		木	日		金		水	31

安 政 2 年 (1 8 5 5)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	1
2	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	2
3	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	3
4	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	4
5	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	5
6	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	6
7	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	7
8	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	8
9	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	9
10	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	10
11	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	11
12	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	12
13	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	13
14	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	14
15	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	15
16	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	16
17	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	17
18	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	18
19	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	19
20	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	20
21	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	21
22	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	22
23	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	23
24	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	24
25	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	25
26	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	26
27	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	27
28	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	28
29	月		木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	29
30	火		金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	30
31	水		土		木		火	金		水		月	31

安 政 1 年 (1854)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	1
2	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	2
3	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	3
4	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	4
5	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	5
6	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	6
7	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	7
8	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	8
9	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	9
10	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	10
11	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	11
12	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	12
13	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	13
14	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	14
15	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	15
16	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	16
17	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	17
18	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	18
19	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	19
20	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	20
21	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	21
22	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	22
23	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	23
24	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	24
25	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	25
26	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	26
27	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	27
28	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	28
29	日		水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	29
30	月		木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	30
31	火		金		水		月	木		火		日	31

嘉 永 6 年 (1853)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	1
2	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	2
3	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	3
4	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	4
5	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	5
6	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	6
7	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	7
8	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	8
9	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	9
10	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	10
11	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	11
12	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	12
13	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	13
14	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	14
15	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	15
16	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	16
17	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	17
18	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	18
19	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	19
20	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	20
21	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	21
22	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	22
23	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	23
24	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	24
25	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	25
26	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	26
27	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	27
28	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	28
29	土		火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	29
30	日		水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	30
31	月		木		火		日	水		月		土	31

嘉 永 5 年 (1 8 5 2)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	1
2	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	2
3	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	3
4	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	4
5	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	5
6	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	6
7	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	7
8	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	8
9	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	9
10	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	10
11	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	11
12	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	12
13	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	13
14	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	14
15	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	15
16	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	16
17	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	17
18	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	18
19	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	19
20	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	20
21	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	21
22	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	22
23	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	23
24	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	24
25	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	25
26	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	26
27	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	27
28	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	28
29	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	29
30	金		火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	30
31	土		水		月		土	火		日		金	31

嘉 永 4 年 (1 8 5 1)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	1
2	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	2
3	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	3
4	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	4
5	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	5
6	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	6
7	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	7
8	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	8
9	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	9
10	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	10
11	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	11
12	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	12
13	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	13
14	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	14
15	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	15
16	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	16
17	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	17
18	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	18
19	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	19
20	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	20
21	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	21
22	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	22
23	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	23
24	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	24
25	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	25
26	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	26
27	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	27
28	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	28
29	水		土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	29
30	木		日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	30
31	金		月		土		木	日		金		水	31

嘉 永 3 年 (1850)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	1
2	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	2
3	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	3
4	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	4
5	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	5
6	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	6
7	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	7
8	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	8
9	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	9
10	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	10
11	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	11
12	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	12
13	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	13
14	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	14
15	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	15
16	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	16
17	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	17
18	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	18
19	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	19
20	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	20
21	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	21
22	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	22
23	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	23
24	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	24
25	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	25
26	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	26
27	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	27
28	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	28
29	火	/	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	29
30	水	/	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	30
31	木	/	日	/	金	/	水	土	/	木	/	火	31

嘉 永 2 年 (1 8 4 9)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	1
2	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	2
3	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	3
4	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	4
5	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	5
6	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	6
7	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	7
8	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	8
9	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	9
10	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	10
11	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	11
12	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	12
13	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	13
14	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	14
15	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	15
16	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	16
17	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	17
18	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	18
19	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	19
20	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	20
21	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	21
22	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	22
23	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	23
24	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	24
25	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	25
26	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	26
27	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	27
28	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	28
29	月		木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	29
30	火		金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	30
31	水		土		木		火	金		水		月	31

嘉 永 1 年 (1 8 4 8)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	1
2	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	2
3	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	3
4	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	4
5	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	5
6	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	6
7	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	7
8	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	8
9	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	9
10	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	10
11	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	11
12	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	12
13	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	13
14	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	14
15	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	15
16	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	16
17	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	17
18	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	18
19	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	19
20	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	20
21	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	21
22	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	22
23	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	23
24	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	24
25	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	25
26	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	26
27	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	27
28	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	28
29	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	29
30	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	30
31	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	31

弘化4年(1847)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	1
2	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	2
3	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	3
4	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	4
5	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	5
6	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	6
7	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	7
8	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	8
9	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	9
10	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	10
11	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	11
12	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	12
13	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	13
14	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	14
15	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	15
16	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	16
17	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	17
18	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	18
19	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	19
20	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	20
21	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	21
22	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	22
23	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	23
24	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	24
25	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	25
26	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	26
27	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	27
28	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	28
29	金		月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	29
30	土		火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	30
31	日		水		月		土	火		日		金	31

弘化 3 年 (1846)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	1
2	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	2
3	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	3
4	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	4
5	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	5
6	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	6
7	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	7
8	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	8
9	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	9
10	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	10
11	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	11
12	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	12
13	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	13
14	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	14
15	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	15
16	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	16
17	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	17
18	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	18
19	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	19
20	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	20
21	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	21
22	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	22
23	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	23
24	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	24
25	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	25
26	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	26
27	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	27
28	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	28
29	木		日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	29
30	金		月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	30
31	土		火		日		金	月		土		木	31

弘化 2 年 (1845)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	1
2	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	2
3	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	3
4	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	4
5	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	5
6	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	6
7	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	7
8	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	8
9	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	9
10	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	10
11	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	11
12	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	12
13	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	13
14	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	14
15	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	15
16	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	16
17	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	17
18	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	18
19	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	19
20	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	20
21	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	21
22	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	22
23	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	23
24	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	24
25	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	25
26	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	26
27	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	27
28	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	28
29	水		土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	29
30	木		日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	30
31	金		月		土		木	日		金		水	31

弘化 1 年(1844)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	1
2	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	2
3	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	3
4	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	4
5	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	5
6	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	6
7	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	7
8	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	8
9	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	9
10	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	10
11	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	11
12	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	12
13	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	13
14	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	14
15	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	15
16	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	16
17	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	17
18	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	18
19	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	19
20	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	20
21	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	21
22	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	22
23	火	金	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	23
24	水	土	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	24
25	木	日	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	25
26	金	月	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	26
27	土	火	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	27
28	日	水	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	28
29	月	木	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	29
30	火		土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	30
31	水		日		金		水	土		木		火	31

天保 14 年(1843)

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	月 日
1	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	1
2	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	2
3	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	3
4	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	4
5	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	5
6	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	6
7	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	7
8	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	8
9	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	9
10	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	10
11	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	11
12	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	12
13	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	13
14	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	14
15	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	15
16	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	16
17	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	17
18	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	18
19	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	19
20	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	20
21	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	21
22	日	水	水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	22
23	月	木	木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	23
24	火	金	金	月	水	土	月	木	日	火	金	日	24
25	水	土	土	火	木	日	火	金	月	水	土	月	25
26	木	日	日	水	金	月	水	土	火	木	日	火	26
27	金	月	月	木	土	火	木	日	水	金	月	水	27
28	土	火	火	金	日	水	金	月	木	土	火	木	28
29	日		水	土	月	木	土	火	金	日	水	金	29
30	月		木	日	火	金	日	水	土	月	木	土	30
31	火		金		水		月	木		火		日	31

新島襄在世中の七曜表

- 118 北沢正誠・今村亮・松尾耕三 『蘭学者傳記資料』 蘭学資料叢書
4 青史社 1980

- 99 若山晴子「イライザ・タルカット女史略年譜」 神戸女学院資料
室『学院資料』 1986. 3. Vol.4.
- 100 久布白落実『湯浅初子』東京市民教会出版部 S12
- 101 岡崎一興「南小柿洲吾日記」フェリス女学院資料室『あゆみ』
20号 1987
- 102 徳富健次郎『竹崎律子』福永書店 T12
- 103 末光力作『無不可一末光信三追悼文』啓文社 S47
- 104 高塚暁『小諸義塾の研究』三一書房 1989
- 105 重久篤太郎『日本近世英学史』教育図書株式会社 S16
- 106 石井洋「箕作阮甫の地理学」蘭学資料研究会編『箕作阮甫の研
究』思文閣出版 S53
- 107 生島吉造・松井全『同志社歳時記』上、下 同志社大学出版部
1975
- 108 犬塚孝明「仁礼景範航米日記」一、二『鹿児島県立短期大学地
域研究所研究年報』 13, 14号 S60, 61
- 109 杉井六郎「東京青年会の成立と『六合雑誌』」同志社大学人文科
学研究所編『「六合雑誌」の研究』 教文館 1984
- 110 同志社大学人文科学研究所『「六合雑誌」総目次』教文館 1984
- 111 牧野伸顕『回顧録』上（文庫判） 中央公論社 S52
- 112 杉井六郎「日本近代史における『七一雑報』」同志社大学人文
科学研究所『「七一雑報」の研究』 同朋舎出版 1986
- 113 岡崎久彦『陸奥宗光』上巻 PHP 研究所 1987
- 114 宮永孝『幕末オランダ留学生の研究』日本経済評論社 1990
- 115 杉山伸也「グラバー商会」近代日本研究会『幕末・維新の日
本』 山川出版社 1981
- 116 中島岑夫『幕臣 福沢諭吉』ティービーエス・ブリタニカ
1991
- 117 大浜徹也『明治キリスト教会史の研究』吉川弘文館 S54

- 77 徳富蘇峰『三代人物史』読売新聞社 S46
- 78 『芦花全集』第20巻 芦花全集刊行会 1930
- 79 東京女子大学付属比較文化研究所『紀要』第39・40巻別冊 資料「木村熊二日記」Ⅰ、Ⅱ 1978
- 80 網島佳吉「信念の人大沢善助翁」三浦豊治編『大沢善助翁』大沢善助翁功績記念会 S4
- 81 内田政雄『天上之友 第二編』日本組合基督教教会教師会 1933
- 82 『内村鑑三全集』第36巻 岩波書店 1983
- 83 内村鑑三「流竄録」『国民之友』233号所収 M27
- 84 『植木枝盛日記』高知新聞社 S30
- 85 早稲田大学史編集所『大隈重信叢書第一巻・大隈重信は語る——古今東西人物評論——』早稲田大学出版部 S44
- 86 渡瀬常吉『海老名弾正先生』龍吟社 1938
- 87 安岡章太郎『大世紀末サーカス』朝日新聞社 1984
- 88 『牧野虎次先生自叙伝』藪崎吉太郎 1955
- 89 吉村康『心眼の人 山本覚馬』恒文社 S61
- 90 吉野俊彦『忘れられた元日銀総裁——富田鉄之助伝——』東洋経済新報社 S49
- 91 湯浅三郎『湯浅治郎』 S2
- 92 杉井六郎「警醒社について」同志社大学人文科学研究所『キリスト教社会問題研究』30号 1982
- 93 『池袋清風日記』上、下 同志社社史資料室 1985
- 94 牧野虎次『針の穴から』牧野虎次先生米寿記念会 S33
- 95 原邦造編『原六郎翁伝』上・中・下巻 S12
- 96 波多野培根先生遺文集刊行会『勝山余籟——波多野培根先生遺文集』 S52
- 97 『近代日本総合年表』岩波書店 1968
- 98 小沢三郎『日本プロテスタント史研究』東海大学出版会 1964

- 56 斎藤月岑著、金子光晴校訂『増訂 武江年表』1, 2 平凡社 S43
- 57 斎藤国治『星の古記録』岩波書店 1982
- 58 阪田寛夫『花陵』文藝春秋社 1977
- 59 酒田正敏・坂野潤治他編『近代日本史料選書 7 徳富蘇峰関係文書』1〜3 山川出版社 1987
- 60 佐藤昌彦・大西直樹・関秀志『クラークの手紙——札幌農学校生徒との往復書簡』北海道出版企画センター S61
- 61 渋沢青淵記念財団竜門社編纂『渋沢栄一伝記資料第二十七巻』
渋沢栄一伝記資料刊行会 S34
- 62 茂義樹『明治初期神戸伝道とD. C. グリーン』新教出版社 1986
- 63 茂義樹『『七一雑報』における日本基督伝道会社』同志社大学人文科学研究所『七一雑報の研究』同朋社出版 1986
- 64 白山友正『武田斐三郎伝』北海道経済史研究所 S46
- 65 菅井吉郎『柏木義円伝』春秋社 S47
- 66 杉井六郎「謀者の見た初期教会形成過程」同志社大学人文科学研究所『日本におけるキリスト教と社会問題』みすず書房 S38
- 67 杉井六郎『徳富蘇峰の研究』法政大学出版局 1977
- 68 杉井六郎『遊行する牧者——辻密太郎の生涯』教文館 1985
- 69 住谷悦治『ラーネッド博士伝——人と思想』未来社 1973
- 70 鈴木俊郎『内村鑑三伝・米国留学まで』岩波書店 1986
- 71 高橋虔『宮川経輝』比叡書房 S32
- 72 田中啓介・上田稷一・牛島盛光『ジェーンズ熊本回想』熊本日々新聞社 S53
- 73 田中緑紅『明治文化と明石博高翁』明石博高翁顕彰会 S17
- 74 都田豊三郎『津田仙——明治の基督者——』 S47
- 75 徳富蘇峰『木戸松菊先生』民友社 S3
- 76 徳富猪一郎『蘇峰自伝』中央公論社 S10

- 35 京都府医師会医学史編纂室『京都の医学史』京都府医師会 S55
- 36 前田河広一郎『芦花伝』岩波書店 1938
- 37 ジョン・エム・マキ『クラーク——その栄光と挫折』高久真一
訳 北海道大学図書刊行会 S53
- 38 三浦豊治『大沢善助翁』大沢善助翁功績記念会 S4
- 39 宮岡謙二『異国遍路旅芸人始末書』中央公論社 S53
- 40 溝口靖夫『松山高吉』松山高吉記念刊行会 S44
- 41 溝口靖夫「近代日本におけるキリスト教の受容と神戸女学院」
神戸女学院百年史編集委員会『神戸女学院百年史・各論』神戸
女学院 S56
- 42 森博『資料集成による村上作夫伝』（試稿） S57
- 43 村上俊吉『回顧』警醒社書店 T1
- 44 『中江兆民全集』14 岩波書店 1985
- 45 日本キリスト教歴史大事典編集委員会『日本キリスト教歴史大
事典』教文館 1988
- 46 「日本の数学100年史」編集委員会『日本の数学100年史』上
岩波書店 1983
- 47 日本史籍協会編『木戸孝允日記』二、三（復刻）東京大学出版
会 S42
- 48 大鹿武『幕末・明治のホテルと旅券』築地書館 1987
- 49 大久保利謙編『森有礼全集』全3巻 宣文堂書店 S47
- 50 大久保利謙『岩倉使節の研究』宗高書房 S51
- 51 太田雄三『クラークの一年』昭和堂 1979
- 52 大植四郎『明治過去帳』東京美術 1971
- 53 小沢三郎『内村鑑三不敬事件』新教出版社 1961
- 54 立志社創立百年記念出版委員会『片岡健吉日記』高知市民図書
館 S49
- 55 佐波亘編『植村正久と其の時代』全八巻（復刻再版）教文館

企画センター 1983

- 17 早川喜代次『徳富蘇峰』徳富蘇峰伝記編集会 1968
- 18 平田守衛『黒田麴廬の業績と「漂荒記事」』 S62
- 19 本多貢『ピューリタン開拓 赤心社の百年』赤心株式会社 S54
- 20 堀博・小出石史郎訳『神戸外国人居留地』神戸新聞出版センター 1980
- 21 星野達雄『星野光多と群馬のキリスト教』キリスト新聞社 1987
- 22 井深梶之助とその時代刊行委員会『井深梶之助とその時代』明治学院 第1巻 S44, 第2巻 S45, 第3巻 S46
- 23 井上馨侯伝記編集会編『世外井上公伝』4 原書房 S43
- 24 井上琢智・西口忠「川口居留地外国人名簿」上・下 大阪市史編纂所『大阪の歴史』19・20号 大阪市史料調査会 S61・62
- 25 犬塚孝明「翻刻 杉浦弘蔵ノート」鹿児島県立短期大学地域研究所『研究年報』15号 1986
- 26 犬塚孝明『明治維新対外関係史研究』吉川弘文館 1987
- 27 金井之恭『校訂 明治史料頭要職務補任録』柏書房 1967
- 28 笠井秋生・佐野安仁・茂義樹『沢山保羅』日本基督教団出版局 1977
- 29 柏木義円編『上毛教界月報』復刻版 全12巻 不二出版 1984~85
- 30 加藤直士『宮川経輝伝』大阪教会 S27
- 31 勝部真長・松本三之助・大口勇次郎編『勝海舟全集』勁草書房
12・13巻 海軍歴史 1978, 1974
15・16・17巻 陸軍歴史 1976, 1977
19・20・21巻 日記 1973
- 32 小崎弘道『七十年の回顧』警醒社書店 S2
- 33 久米邦武編『特命全権大使米欧回覧実記』1~5 田中彰校注 岩波書店 1985
- 34 倉沢剛『幕末教育史の研究』I~III 吉川弘文館 S61

g M 22. 2. 23

i M 23. 1. 26

h M 22. 9. 27

10 『六合雑誌』 110号 M 23. 2. 15

11 『福音週報』 M 24. 1. 30・M 24. 2. 6

J 一般刊行物

1 安部磯雄『安部磯雄自叙伝・社会主義者となるまで』改造社 S7

2 青山学院『本多庸一』 S43

3 青山なお『明治女学校の研究』慶応通信 S45

4 近松文三郎『高田義甫』 S6

5 土肥昭夫『日本プロテスタント教会の成立と展開』日本基督教団出版局 1975

6 同志社大学人文科学研究所『熊本バンド研究』みすず書房 S40

7 同志社大学人文科学研究所『「七一雑報」の研究』同朋舎出版
19868 海老沢有道「末光信三牧師について」賀茂教会役員会『日本キ
リスト教団賀茂教会四十周年史』賀茂教会 S54

9 江南良三『近江八幡人物伝』近江八幡市郷土史会 1981

10 フェリス女学院資料整備委員会編訳『キダー書簡集 明治初期
女子教育と宣教の記録』フェリス女学院 1975

11 藤井哲博『小野友五郎の生涯』中央公論社 1960

12 福島恒雄『北海道キリスト教史』日本基督教団出版局 1982

13 福沢諭吉「時事小言」『福沢諭吉選集 第五巻』岩波書店 1981

14 花立三郎・杉井六郎・和田守『同志社大江義塾徳富蘇峰資料集』
三一書房 1978

15 原田健『原田助遺集』 S46

16 長谷川嗣『空知集治監初代典獄 渡辺惟精の日記』北海道出版

		10c	M	10. 11. 30		14c	M	14. 5. 17
		11a	M	11. 1. 4		14d	M	14. 6. 3
		11b	M	11. 3. 1		14e	M	14. 7. 8
		11c	M	11. 3. 22		14f	M	14. 7. 15
		11d	M	11. 6. 28		14g	M	14. 10. 28
		11e	M	11. 8. 9		14h	M	14. 11. 11
		11f	M	11. 11. 22		14i	M	14. 11. 25
		11g	M	11. 11. 29		14j	M	14. 12. 2
		11h	M	11. 12. 6		15a	M	15. 1. 13
		11i	M	11. 12. 20		15b	M	15. 3. 31
		12a	M	12. 2. 28		15c	M	15. 5. 26
		12b	M	12. 5. 16		15d	M	15. 6. 9
		12c	M	12. 6. 13		15e	M	15. 7. 14
		12d	M	12. 7. 18		15f	M	15. 7. 28
		12e	M	12. 8. 1		15g	M	15. 9. 26
		12f	M	12. 10. 10		15h	M	15. 10. 6
		12g	M	12. 11. 14		15i	M	15. 11. 3
		12h	M	12. 12. 26		15j	M	15. 12. 8
		13a	M	13. 1. 30		15k	M	15. 12. 29
		13b	M	13. 7. 16		16a	M	16. 2. 23
		13c	M	13. 7. 23		16b	M	16. 3. 23
		13d	M	13. 10. 22		16c	M	16. 4. 27
		13e	M	13. 11. 26		16d	M	16. 5. 4
		14a	M	14. 1. 28		16e	M	16. 5. 11
		14b	M	14. 5. 13		16f	M	16. 7. 3
9	『東雲新聞』	a	M	21. 2. 28		d	M	22. 1. 22
		b	M	21. 3. 10		e	M	22. 2. 8
		c	M	21. 4. 18		f	M	22. 2. 13

念誌』日本気象協会関西本部 S56

- 15 滋賀県日野町教育会『近江日野町志 巻下』
- 16 国立公文書館所蔵「公文録」
- 17 国立国会図書館所蔵資料
 - a 上野景範宛、新島書簡（明治十三年五月五日付）
 - b 牧野伸顯宛、新島書簡（明治二十一年十二月五日付）

I 新聞・雑誌

- | | | | | | |
|---|----------|-----|--------------|-----|--------------|
| 1 | 『函館新聞』 | a | M 20. 8. 31 | d | M 20. 9. 16 |
| | | b | M 20. 9. 1 | e | M 20. 9. 20 |
| | | c | M 20. 9. 15 | | |
| 2 | 『福音新報』 | a | M 16. 7. 3 | c | M 17. 10. 1 |
| | | b | M 17. 4. 2 | | |
| 3 | 『女学雑誌』 | M | 20. 4. 16 | | |
| 4 | 『基督教新聞』 | a | M 19. 12. 22 | f | M 22. 7. 17 |
| | | b | M 20. 1. 8 | g | M 22. 11. 20 |
| | | c | M 22. 1. 9 | h | M 23. 1. 31 |
| | | d | M 20. 10. 19 | i | M 23. 2. 7 |
| | | e | M 22. 3. 13 | j | M 23. 3. 28 |
| 5 | 『国民之友』 | a | M 21. 3. 2 | f | M 22. 4. 1 |
| | | b | M 21. 3. 16 | g | M 22. 5. 11 |
| | | c | M 21. 4. 6 | h | M 22. 5. 22 |
| | | d | M 21. 5. 18 | i | M 22. 6. 1 |
| | | e | M 21. 11. 16 | j | M 22. 7. 22 |
| 6 | 『京都絵入新聞』 | M | 16. 5. 15 | | |
| 7 | 『立憲自由新聞』 | M | 15. 5. 3 | | |
| 8 | 『七一雑報』 | 10a | M 10. 1. 25 | 10b | M 10. 9. 14 |

学 S53

11 『明治学院百年史』 学校法人明治学院 S52

12 『青山学院九十年史』 青山学院 S40

H 地方史・公文書資料

1 安中市誌編纂委員会『安中市誌』 安中市誌編纂委員会 S39

2 愛媛県史編纂委員会『愛媛県史 II 資料編 5-2〔文化〕学問・宗教』愛媛県 1983

3 群馬県史編纂委員会『群馬県史 資料編 19 近代現代 3 新聞記事集録』群馬県 1979

4 群馬県史編纂委員会『群馬県史 資料編 22 近代現代 6 教育・文化』群馬県 1983

5 函館区役所『函館区史・完』 名著出版 S48

6 函館市『函館市史 史料編第一巻』 S49

* 「文久三亥年從十一月 柴田日向守函館行御用留（抄）元治元年五月」

7 兵庫県史編集委員会『兵庫県百年史』 兵庫県 S42

8 京都府庁文書『M8-26 下令雜記 明治八年中』京都府立総合資料館所蔵

9 京都府庁文書『M8.24-2 官職進退 明治八年』京都府立総合資料館所蔵

10 京都府立総合資料館『京都府百年の年表 2 商工編』京都府 S45

11 京都府立総合資料館『京都府百年の年表 5 教育編』京都府 S45

12 京都府立総合資料館『京都府百年の年表 6 宗教編』京都府 S45

13 京都府立総合資料館『京都府百年の年表 7 建設・交通・通信編』京都府 S45

14 京都地方気象台『京都気象 100 年——京都地方気象台 100 周年記

日本キリスト教団新潟教会 1986

- 27 高橋虔「日本組合基督教会年表」同志社大学人文科学研究所『キリスト教社会問題研究』16・17号 1970；18号 1971；20号 1972
連載
- 28 山本秀煌『日本基督教会史』復刻版 改革社 1973
- 29 日本キリスト教婦人矯風会『日本キリスト教婦人矯風会百年史』
ドメス出版 1986
- 30 札幌独立キリスト教会教会史編纂委員会『札幌独立キリスト教百
年の歩み』上・下巻 1983
- 31 京都 YMCA『「青年之光」にみる100年前の「京都基督青年
会」』京都 YMCA 1990

G 学校史資料

- 1 梅花学園九十年小史編集委員会『梅花学園九十年小史』梅花学園
S43
- 2 梅花学園沢山保羅研究会『沢山保羅研究』5 梅花学園 1976
- 3 北海道大学『北大百年史・通説』ぎょうせい 1982
- 4 北海道大学『北大百年史・札幌農学校資料(一)』ぎょうせい 1981
- 5 北海道大学『北大百年史・札幌農学校資料(二)』ぎょうせい 1981
- 6 京都府立須知高校編『京都農牧学校創設百周年記念誌』 1976
- 7 神戸女学院百年史編集委員会『神戸女学院百年史 総説』神戸女
学院 1976
- 8 東京大学百年史編集委員会『東京大学百年史 通史一』東京大学
出版会 1984
- 9 東京大学百年史編集委員会『東京大学百年史 資料一』東京大学
出版会 1984
- 10 早稲田大学大学史編集所『早稲田大学百年史 第一巻』早稲田大

キリスト教団彦根教会 1979

- 10 『日本組合京都基督教会五十年史』 S6
- 11 日本基督教団京都教会百年史編纂委員会『京都教会百年史』日本基督教団京都教会 1985
- 12 浪花教会所蔵「浪華基督教会記録〈明治十二～廿一年〉」梅花学園沢山保羅研究会『沢山保羅研究』4 S49
- 13 『大阪基督教会沿革略史』大阪基督教会 T13
- 14 飯清・府上征三『靈南坂教会 100 年史』靈南坂教会創立 100 年記念事業実行委員会 1979
- 15 島之内教会百年史編集委員会『島之内教会百年史』日本基督教団島之内教会 1986
- 16 伊吹岩五郎『日本組合高梁基督教会五十年史』 T3
- 17 高梁基督教会80周年中央編集委員会『高梁教会八十年史』 S37
- 18 天満教会百年史刊行委員会『天満教会百年史』日本基督教団天満教会 S54
- 19 井上平三郎編「横浜海岸教会初期記録」フェリス女学院資料室委員会『あゆみ』第9号 1982
- 20 滝口敏行『大阪 YMCA 100年史』大阪キリスト教青年会 S57
- 21 斎藤実『東京キリスト教青年会百年史』東京キリスト教青年会 1980
- 22 大和久泰太郎『横浜 YMCA 百年史』横浜キリスト教青年会 1984
- 23 牛丸康夫『日本正教史』 S53
- 24 「日本基督伝道会社第九年会記事」同志社社史資料室『同志社談叢』3号 1983
- 25 「組合教会臨時総会記事」同志社社史資料室『同志社談叢』4号 1984
- 26 『創立 100 周年記念 写真で見る新潟教会の歩み 1886—1986』

- Half Century, 1821-1871.* Clark W. Bryan & Co., U. S. A., 1873
- 28 Henry K. Rowe, *History of Andover Theological Seminary.* Newton, Mass., 1933
- 29 *A Memorial of Samuel Harvey Taylor.* Warren F. Draper, Andover, 1871
- 30 F. G. Notehelfer, *American Samurai / Captain L. L. Janes and Japan.* Princeton Univ. Press., New Jersey, 1985
- 31 Kanda Memorial Committee, *Memorials of Naibu Kanda.* The Tokyo Shoin, 1927
- 32 J. L. Atkinson's report [1888. 8. 29] (アメリカン・ボード宣教師文書マイクロ・フィルム Roll 7. 同志社大学所蔵)

F 教会資料

- 1 小崎弘道『日本組合基督教会史（未定稿）』日本組合基督教本部 T 13
- 2 『日本基督伝道会社略史』日本基督伝道会社 M31
- 3 『組合教会独立始末』日本組合基督教会事務所 M39
- 4 湯浅与三『基督にある自由を求めて 日本組合基督教会史』S33
- 5 「安中基督教会録事」群馬県史編纂委員会『群馬県史 資料編22 近代現代6』S58
- 6 新島学園女子短期大学新島文化研究所『安中教会史——創立から100年まで』日本基督教団安中教会 1988
- 7 平安教会百年史編集委員会『平安教会百年史』日本基督教団平安教会 1976
- 8 『彦根基督教会略史』（創立六十年記念）彦根基督教会 S14
- 9 彦根教会創立百周年記念事業委員会『彦根教会創立百年誌』日本

- 21 Ruth Gaines, *City-Royal: A Memory of Kyoto*. Privately Printed. New York, 1953
- 22 Frances Benton Clapp, *Mery Florence Denton and the Doshisha*. Doshisha, 1955
- 23 L. L. Janes' Letter to J. D. Davis, Aug. 1st, 1876 (アメリカン・ボード宣教師文書マイクロ・フィルム Roll 6. 同志社大学所蔵)
- 24 Minutes of Annual Meeting of the Japan Mission (アメリカン・ボード宣教師文書マイクロ・フィルム Roll 6. 同志社大学所蔵)
 - a. Aug. 7th—20th, 1887. Hiyeizan
 - b. May 10th—16th, 1881. Kobe
 - c. May 9th—15th, 1882. Kobe
 - d. Dec. 23rd, 1884. Osaka
 - e. June 6th—14th, 1884. Osaka
 - f. March 24th, 1885. Osaka
 - g. June 12nd—17th, 1885. Kobe
 - h. July 29th—Aug. 4th, 1888
- 25 DeWitt C. Jencks' Letters (アメリカン・ボード宣教師文書マイクロ・フィルム Roll 4 & 5. 同志社大学所蔵)
 - a. Nov. 30th, 1877 to Rev. N. G. Clark
 - b. Aug. 10th, 1878 to Rev. N. G. Clark
 - c. July 22nd, 1879 to Rev. N. G. Clark
 - d. Jan. 23rd, 1879 to Rev. N. G. Clark
- 26 Kawanishi Susumu, *Teachers and friends of Niijima Jo during his early years*. KBS Bulletin on Japanese Culture/June-July 1871/108. Kokusai Bunka Shinkokai, Tokyo, 1971
- 27 W. S. Tylor, *History of Amherst College during its First*

- 14 Vaughan Dabney, *'The letters of Joseph Hardy Neesima to Mary E. Hidden'*. Andover Newton Quartary, Nov., 1961
(Newton Centre, Mass., Andover Newton Theological School)
- 15 Paul Val Griesy, *The Doshisha: 1875-1919: The Indigenization of an Institution*. Columbia University, 1973
- 16 Charles Lanman, *Leader of the Meiji Restroration in America*. THE HOKUSEIDO PRESS, TOKYO, 1931
(チャールズ ランマン『岩倉公一行訪米始末書』岡村喜之翻刻
北星書店 S6)
- 17 William J. Newlin, *Amherst College: Biographical Record of the Graduates and non-graduates*. The Trustees of Amherst College, 1939
- 18 Clara Whitney, *Clara's Diary: An American Girl in Meiji Japan*. Kodansha International. 1981
- 19 John C. Berry 書簡 (アメリカン・ボード宣教師文書マイクロ・フィルムより坂本鈴子・長門谷洋治氏が解読した資料による)
 - a. Nov. 19th, 1883 to N. G. Clark
 - b. Apr. 11th, 1885 to J. H. Neesima
 - c. Aug. 26th, 1886 to N. G. Clark
 - d. Aug. 21st, 1887 to N. G. Clark
 - e. May 10th, 1887 to N. G. Clark
 - f. Dec. 14th, 1888 to N. G. Clark
- 20 W. Taylor 書簡 1873. 6. 3—1884. 6. 23
(アメリカン・ボード宣教師文書マイクロ・フィルムより長門谷洋治氏が解読した資料による)
 - a. May 10th, 1876. Report of the Medical Work of Kiyoto Station.

- a. Oct. 1874
- b. Oct. 15, 1874
- 3 *The Missionary Herald*. A.B.C.F.M., Cambridge, Mass.
 - a. June 1874
 - b. Nov. 1874
 - c. Dec. 1874
 - d. Oct. 1875
 - e. Jan. 1876
 - f. March 1876
 - g. April 1877
 - h. Aug. 1877
 - i. Oct. 1877
- 4 *Rutland Weekly Herald*. Vol. 80, No. 42. Oct. 15, 1874. Rutland, Vt.
- 5 Fred Goodsell, *You shall be Witness*. A.B.C.F.M., Boston, 1959
- 6 Compiled by James H. Pettee, *A Chapter of Mission History in Japan, 1869-1895*. Japan Mission of A.B.C.F.M., 1873
- 7 Otis Cary, *A History of Christianity in Japan*. Charles E. Tuttle Company, Tokyo, Japan, 1976
- 8 *Fragment of Fifty Years / Some Lights and Shadows of the Work of the Japan Mission of the American Board / 1869-1919*
- 9 M. L. Gordon, *Thirty Eventful Years in Japan — The Story of the American Board's Mission in Japan, 1869-1899*. A.B.C.F.M., Boston, 1901
- 10 *The Christian Yearbook 1959*. The Christian Literature Society (Kyo Bun Kwan)
- 11 C. C. Carpenter, *Neesima in America*. (A scrapbook) 1915
- 12 J. Merle Davis, *Davis—Soldier Missionary*. The Pilgrim Press, Boston, Chicago, 1916
- 13 *Memorial of Rev. Ephraim Flint, D. D.*, 1882

志社アメリカ研究』13号 1977

- 29 「A. S. Hardy から新島の大小刀寄贈について」 同志社新島研究会『新島研究』49号 1977
- 30 「新島襄葬儀記録」 同志社社史資料室『同志社談叢』10号 1990
- 31 徳富蘇峰秘書室（草野茂松）写「新島先生参考資料」
- 32 森中章光「蘭学の発達及び新島先生の最初の蘭学研究について」 同志社新島研究会『新島研究』10号 1956
- 33 北垣宗治（研究発表）「新島、シアーズ、パーカー、ホランドをめぐる七つのコメント」 1986. 10. 4.
- 34 O. ケーリ「ラットランドと新島襄と同志社」 同志社大学文化学会『文化学年報』第二十五輯 S51
- 35 北垣宗治（研究発表）“P. H. McKeen と *A Sketch of the Early Life of Joseph Hardy Neesima.*” 1989. 9. 29
- 36 新島八重「新島先生逸話」 同志社新島研究会『新島研究』17号 1958
- 37 佐伯理一郎『京都看病婦学校五十年史』 S11
- 38 中瀬古六郎「八十九年前」 同志社新島研究会『新島研究』54号 1979
- 39 その他の同志社資料
- 40 坂本清音「米国伝道会社宣教師文書—A. J. Starkweather 書簡」『同志社女子大学総合文化研究所紀要』第8号 1991

E 英文資料

- 1 *The Doomsday Book of the Japan Mission of the American Board of Commissioners for Foreign Missions.*
- 2 *The Congregationalist.* A.B.C.F.M.

- 8号 1956
- 15 新島八重子「新島先生の日常」 同志社新島研究会『新島研究』
9号 1956
- 16 網島佳吉「教育者新島先生 潔白無私と親心」 同志社新島研究
会『新島研究』10号 1956
- 17 森中章光「板倉勝明・尾崎直紀・添川廉斎と新島先生の少年時代」
(上) 同志社新島研究会『新島研究』12号 1956
- 18 森中章光「榎本武揚麾下の 鬼艦長甲賀源吾と新島七五三太」 同
志社新島研究会『新島研究』16号 1958
- 19 「新島先生の帰国を報道した最初の新聞記事」 同志社新島研究
会『新島研究』19号 1959, 53号 1978
- 20 「快風丸の船士 塩田虎尾」 同志社新島研究会『新島研究』46
号 1976
- 21 井上勝也「アルフューズ・ハーディー 人と生涯」 同志社新島
研究会『新島研究』53号 1978
- 22 森中章光「新島襄と天誅組の猛士原田亀太郎」(上) 同志社新島
研究会『新島研究』54号 1979
- 23 新島民治「西京引移り日記／明治九年四月」 同志社新島研究会
『新島研究』61号 1981
- 24 原田久美子「山本覚馬——おぼえがき・人と思想」 同志社新島
研究会『新島研究』64号 1983
- 25 末光力作「新島襄と植物」 同志社新島研究会『新島研究』72号
1988
- 26 中村研「原六郎と同志社」 同志社社史資料室『同志社談叢』5
号 1985
- 27 北垣宗治「新島襄とホランド」 同志社社史資料室『同志社談叢』
8号 1988
- 28 杉井六郎「イェールの日本人」 同志社大学アメリカ研究所『同

- 9 J. D. Davis, *A sketch of the life of Rev. J. H. Neesima, LL.D.* Z. P. Maruya & Co., Ltd. 1890
- 10 J. D. Davis, *A maker of new Japan; Rev. Joseph Hardy Neesima, LL.D.* Fleming H. Revell Co. 1890
- 11 和田洋一『新島襄』 日本基督教団出版局 1973
- 12 湯浅与三『新島襄伝』 改造社 S11
- 13 井上勝也『新島襄——人と思想』 晃洋書房 1990

D 同志社関係資料

- 1 『同志社百年史 資料編』 学校法人 同志社 1979
- 2 同志社創立100周年記念写真集編集委員会『同志社 その100年の歩み』 学校法人 同志社 1975
- 3 同志社社史資料編集所『同志社年表（未定稿）』 1979
- 4 森中章光『改訂増補 新島襄先生詳年譜』 学校法人 同志社 同志社校友会 S34
- 5 同志社大学図書館整理課『新島旧邸文庫所蔵目録』 同志社大学 図書館 S33
- 6 『新島八重子回想録』 同志社大学出版部 S48
- 7 同志社女子部創立百周年記念誌編集委員会 『同志社女子部の百年』 1987
- 8 『同志社新聞』第11号 同志社新聞社 M38. 8. 8
- 9 青山霞村『同志社五十年裏面史』 博省堂 S6
- 10 青山霞村『山本覚馬』 同志社 S3
- 11 松浦政泰『同志社ローマンス』 警醒社書店 T7
- 12 新島公義「伯父洋行留守要記」 同志社資料 M17
- 13 松波仁一郎「同志社英学校 卒業五十年に際して」 同志社資料
- 14 新島八重子「逝きし夫を偲びて」 同志社新島研究会『新島研究』

- 下3182 田中不二麿書簡 1875. 8. 9
 下3184 田中不二麿書簡 1877. 3. 28
 下3186 田中不二麿書簡 1879. 5. 2
 下3187 田中不二麿書簡 — 2. 22
 下3202 内海忠勝書簡 — 2. 15
 下3210 新島襄：写真（ベルリン時代）
 下3252 新島襄：漢詩「男兒志願是功名……」
 下3284 川田剛書簡（新島民治宛） — 6. 1
 下3360 三拾番教室の写真と説明（新島襄筆跡） 1889. 5. 10
 下3566 江戸御在所諸士明細帳 1827・1839
 下3581 飯田逸之助書簡 小林□次郎宛 — 6. 21
 下追 1 新島襄 英文日記 1885. 9. 21起し

C 新島襄伝記

- 1 ゼ、デ、デビス『新島襄先生之伝』村田勤・松浦政泰訳 大阪福音社 M24
- 2 セー、デー、デビス『新島襄先生伝』山本美越乃訳補 警醒社書店 M36
- 3 ゼー、デー、デビス『補正 新島襄先生伝』山本美越乃訳補 警醒社 M44 第4版
- 4 J. D. デイヴィス『新島襄の生涯』北垣宗治訳 小学館 S52
- 5 根岸橘三郎『新島襄』 警醒社書店 T12
- 6 『わが人生』鍵田研一編 全国書房 S21
- 7 池本吉治編『新嶋先生就眠始末』 警醒社 M23
- 8 Phebe Fuller McKen, 'Upright against God' A sketch of the early life of Joseph Hardy Neesima. Boston, D. Lothrop Company, 1890

- 下2600 J. C. Berry's letter to J. H. Neesima 1888. 3. 5
- 下2630 内村鑑三書簡 新島宛 1888. 10. 20
- 下2651 加藤勝弥・電報 1888. 12. 30
- 下2684 D. W. Learned's letter to J. H. Neesima 1889. 2. 28
- 下2686 D. W. Learned's letter to J. H. Neesima 1889. 3. 4
- 下2714 J. N. Harris's letter to J. H. Neesima 1889. 7. 8
- 下2715 J. N. Harris's letter to J. H. Neesima 1889. 7. 8
- 下2727 J. N. Harris's letter to J. H. Neesima 1889. 9. 6
- 下2731 N. G. Clark's letter to J. H. Neesima 1889. 9. 19
- 下2744 W. Dulles's letter to J. H. Neesima 1889. 11. 19
- 下2747 J. N. Harris's letter to J. H. Neesima 1889. 11. 25
- 下2749 W. A. P. Martin's letter to J. H. Neesima 1889. 11. 28
- 下2752 J. N. Harris's letter to J. H. Neesima 1889. 12. 26
- 下2820 W. S. Clark's letter to Shosuke Sato 1877. 5. 14
- 下3138 飯田保書簡 (1867) 6. 17 (写真・新島宛=以下同)
- 下3143 岩崎弥之助書簡 1888. 9. 7
- 下3145 岩崎弥之助書簡 1888. 12. 19
- 下3153 松平容保書簡 1889. 2. 7
- 下3155 森有礼書簡 1871. 8. 22
- 下3156 陸奥宗光書簡 1888. 7. 23
- 下3158 陸奥宗光書簡 1888. 5. 19
- 下3159 中島信行書簡 1889. 1. 13
- 下3164 新島雙六書簡 1867. 6. 18
- 下3165 新島雙六書簡 1869. 7. 26
- 下3170 大久保利和書簡 1889. 11. 9
- 下3171 大西祝書簡 1881. 10. 29
- 下3179 渋沢栄一書簡 1888. 5. 2
- 下3180 住友吉左衛門書簡 1889. 11. 28

- 下2380 W. S. Clark's letter to J. H. Neesima 1878. 8. 6
- 下2385 W. S. Clark's letter to J. H. Neesima 1878. 12. 30
- 下2387 D. C. Greene's letter to J. H. Neesima 1879. 2. 10
- 下2388 W. S. Clark's letter to J. H. Neesima 1879. 2. 22
- 下2394 E. E. Barney's letter to J. H. Neesima 1880. 1. 8
- 下2396 W. S. Clark's letter to J. H. Neesima 1880. 2. 22
- 下2409 J. M. Sears's letter to J. H. Neesima 1882. 1. 13
- 下2419 J. C. Berry's letter to J. H. Neesima 1882. 10. 31
- 下2429 J. C. Berry's letter to J. H. Neesima 1883. 5. 30
- 下2436 N. G. Clark's letter to J. H. Neesima 1884. 1. 15
- 下2437 N. G. Clark's letter to J. H. Neesima 1884. 2. 15
- 下2440 H. G. Huller's letter to J. H. Neesima 1884. 6. 25
- 下2444 ブリュッセル駐在アメリカ公使書簡 1884. 9. 29
- 下2458 N. G. Clark's letter to J. H. Neesima 1885. 1. 23
- 下2465 W. Whittle's letter to J. H. Neesima 1885. 2. 28
- 下2470 S. F. Taylor's letter to J. H. Neesima 1885. 4. 18
- 下2480 N. G. Clark's letter to J. H. Neesima 1885. 6. 3
- 下2493 N. G. Clark's letter to J. H. Neesima 1885. 7. 31
- 下2496 J. S. Sewall's letter to J. H. Neesima 1885. 8. 11
- 下2499 J. S. Sewall's letter to J. H. Neesima 1885. 8. 24
- 下2515 C. F. P. Bancroft; W. L. Ropes' letter to J. H. Neesima
1885. 10. 23
- 下2517 E. J. Seelye's letter to J. H. Neesima 1885. 10. 23
- 下2518 J. V. Seedman's letter to J. H. Neesima 1885. 10. 23
- 下2534 J. V. Seedman's letter to J. H. Neesima 1885. 11. 6
- 下2535 S. W. Hardy's letter to J. H. Neesima 1885. 11. 9
- 下2575 (Hardy's) telegram to J. H. Neesima 1887. 7. 26
- 下2576 新島公義・電報 1887. 8. 12

- 下1580 尾越蕃輔書簡 — 3. 14
- 下1598 下村房書簡 1888. 10. 7
- 下1616 佐藤——書簡 ——
- 下1691 花岡山奉教趣意書
- 下1804 同志社女学校新島文庫之印
- 下1817 第一国立銀行支店書簡（明治専門学校発起人宛） 1884.
12. 16
- 下2214 危篤通知の電報（徳富猪一郎宛） 1890. 1. 20
- 下2235 J. Neesima's letter to Mr. A. Hardy 1875. 9. 6
- 下2241 J. H. Neesima's letter to Mrs. Poole 1880. 8. 13
- 下2246 J. H. Neesima's letter to Mr. A. Hardy 1883. 6.-
- 下2260 J. H. Neesima's letter to 内村鑑三宛 1885. 7. 21
- 下2264 J. H. Neesima's letter to Prof. J. H. Seelye 1885. 8. 8
- 下2268 J. H. Neesima's letter to Mrs. Morris 1885
- 下2279 J. H. Neesima's letter to Mrs. Hardy 1887. 11. 23
- 下2280 J. H. Neesima's letter to Mr. Sears 1887. 11. 27
- 下2292 J. H. Neesima's letter to Mr. J. N. Harris 1889. 5. 17
- 下2298 J. H. Neesima's letter to Mr. Porter 1889. 10. 7
- 下2299 J. H. Neesima's letter to Some one at Am. Bd. 1889 or
1890
- 下2302 J. H. Neesima's letter to Brethren of Japan circle 1886?
- 下2317 J. H. Seelye's letter to J. Neesima 1870. 12. 24
- 下2322 J. L. Taylor's letter to J. Neesima 1873. 9. 13
- 下2325 M. L. Gordon's letter to J. Neesima 1873. 12. 16
- 下2326 J. C. Berry and seven others' letter to J. Neesima 1874.
1. 1
- 下2363 W. S. Clark's letter to J. H. Neesima 1878. 2. 11
- 下2369 岡部長職書簡 新島宛 1878. 5. 7

下1495	不破唯次郎書簡	1889. 12. 26
下1496	広津友信書簡	1889. 12. 26
下1498	不破唯次郎書簡	1889. 12. 27
下1501	広津友信書簡	1889. 12. 30
下1502	不破唯次郎書簡	1889. 12. 31
下1509	杉山重義書簡	1890. 1. 1
下1513	増田尚平書簡	1890. 1. 3
下1515	森信夫書簡	1890. 1. 3
下1518	福土成豊書簡	1890. 1. 5
下1527	横田安止書簡	1890. 1. 7
下1529	大久保真二郎書簡	1890. 1. 8
下1532	松田順平書簡	1890. 1. 9
下1533	原胤昭書簡	1890. 1. 10
下1535	宮川経輝書簡	1890. 1. 10
下1536	不破唯次郎書簡	1890. 1. 11
下1537	小崎弘道書簡	1890. 1. 11
下1538	不破雄書簡	1890. 1. 12
下1539	原忠美書簡	1890. 1. 12
下1541	浮田和民書簡	1890. 1. 13
下1545	不破唯次郎書簡	1890. 1. 17
下1546	不破唯次郎・杉田潮・杉山重義書簡	1890. 1. 17
下1547	河波荒次郎書簡	1890. 1. 17
下1549	新島八重書簡	1890. 1. 18
下1550	平岩愷保書簡	1890. 1. 22
下1551	長浜教会執事書簡	1890. 1. 22
下1552	大久保真二郎書簡	1890. 1. 22
下1558	山中茂書簡	1889. 1. 5
下1560	河井淡書簡	1888. 1. 12

下1437	松村介石書簡	1889. 10. 28
下1438	伴直之助書簡	1889. 10. 29
下1445	新井毫書簡	1889. 11. 4
下1447	不破唯次郎書簡	1889. 11. 6
下1448	広津友信書簡	1889. 11. 7
下1449	小野英二郎書簡	1889. 11. 7
下1450	金森通倫書簡	1889. 11. 8
下1452	広津友信書簡	1889. 11. 11
下1453	宮川経輝書簡	1889. 11. 11
下1454	矢崎鎮四郎書簡	1889. 11. 11
下1455	広津友信書簡	1889. 11. 15
下1456	徳富猪一郎書簡	1889. 11. 16
下1457	横田安止書簡	1889. 11. 17
下1461	奈須義質書簡	1889. 11. 22
下1463	大久保真二郎書簡	1889. 11. 26
下1469	徳富猪一郎書簡	1889. 11. 28
下1471	中山光五郎書簡	1889. 11. 30
下1472	徳富猪一郎書簡	1889. 12. 1
下1474	徳富猪一郎書簡	1889. 12. 3
下1475	広瀬源三郎書簡	1889. 12. 4
下1477	伊勢時雄書簡	1889. 12. 5
下1478	広津友信書簡	1889. 12. 9
下1479	広津友信書簡	1889. 12. 9
下1482	宮川経輝書簡	1889. 12. 11
下1483	大久保真二郎書簡	1889. 12. 11
下1484	中山光五郎書簡	1889. 12. 12
下1491	広津友信書簡	1889. 12. 23
下1494	不破唯次郎書簡	1889. 12. 25

- | | | |
|-------|--------------|--------------|
| 下1384 | 宮本園丸書簡 | 1889. 9. 3 |
| 下1385 | 不破唯次郎書簡 | 1889. 9. 4 |
| 下1386 | 松原藤兵衛・瀬尾武雄書簡 | 1889. 9. 4 |
| 下1387 | 湊源平書簡 | 1889. 9. 4 |
| 下1389 | 不破唯次郎書簡 | 1889. 9. 5 |
| 下1394 | 板倉正身書簡 | 1889. 9. 8 |
| 下1395 | 大久保真二郎書簡 | 1889. 9. 9 |
| 下1396 | 梶原保人書簡 | 1889. 9. 12 |
| 下1401 | 不破唯次郎書簡 | 1889. 9. 17 |
| 下1402 | 徳富猪一郎書簡 | 1889. 9. 17 |
| 下1403 | 木村鎮太書簡 | 1889. 9. 19 |
| 下1404 | 不破唯次郎書簡 | 1889. 9. 21 |
| 下1406 | 松波仁一郎書簡 | 1889. 9. 23 |
| 下1407 | 茂木平三郎書簡 | 1889. 9. 23 |
| 下1408 | 植村保雄書簡 | 1889. 9. 28 |
| 下1410 | 松本勘十郎書簡 | 1889. 9. 30 |
| 下1414 | 不破唯次郎書簡 | 1889. 10. 3 |
| 下1415 | 加藤勝弥・松村介石書簡 | 1889. 10. 4 |
| 下1420 | 三宅荒毅書簡 | 1889. 10. 8 |
| 下1421 | 辻孝次郎書簡 | 1889. 10. 8 |
| 下1427 | 広瀬源三郎書簡 | 1889. 10. 19 |
| 下1428 | 伊勢時雄書簡 | 1889. 10. 19 |
| 下1429 | 網島佳吉書簡 | 1889. 10. 19 |
| 下1431 | 田中賢道書簡 | 1889. 10. 21 |
| 下1432 | 横田安止書簡 | 1889. 10. 21 |
| 下1433 | 広津友信書簡 | 1889. 10. 24 |
| 下1434 | 不破唯次郎書簡 | 1889. 10. 26 |
| 下1435 | 広津友信書簡 | 1889. 10. 27 |

- 下1327 大久保真二郎書簡 1889. 7. 22
- 下1328 不破唯次郎書簡 1889. 7. 24
- 下1329 藤田伝三郎書簡 1889. 7. 25
- 下1332 今治教会執事書簡 1889. 7. 26
- 下1334 不破唯次郎書簡 1889. 7. 27
- 下1335 徳富猪一郎書簡 1889. 7. 27
- 下1338 広津友信書簡 1889. 7. 30
- 下1339 市原盛宏書簡 1889. 7. 30
- 下1342 三枝光太郎・山鹿旗之助書簡 1889. 7. 31
- 下1344 不破唯次郎書簡 1889. 8. 5
- 下1345 柴原宗助書簡 1889. 8. 5
- 下1348 志垣要三書簡 1889. 8. 6
- 下1349 木村鎮太書簡 1889. 8. 8
- 下1350 広瀬源三郎書簡 1889. 8. 10
- 下1358 安住百太郎書簡 1889. 8. 15
- 下1359 大久保真二郎書簡 1889. 8. 15
- 下1363 本城安太郎書簡 1889. 8. 20
- 下1366 馬場種太郎書簡 1889. 8. 22
- 下1367 不破唯次郎書簡 1889. 8. 22
- 下1368 広瀬源三郎書簡 1889. 8. 22
- 下1370 永岡喜八書簡 1889. 8. 23
- 下1373 岳好道書簡 1889. 8. 26
- 下1374 富永冬樹書簡 1889. 8. 26
- 下1376 松村介石書簡 1889. 8. 30
- 下1377 中村栄助書簡 1889. 8. 30
- 下1378 三井誉音子書簡 1889. 8. 31
- 下1379 黛治邦書簡 1889. 9. 1
- 下1380 塩井健太郎書簡 1889. 9. 1

下1282	下村房書簡	1889. 6. 5
下1283	小崎弘道書簡	1889. 6. 6
下1284	宮川二郎書簡	1889. 6. 7
下1286	小崎弘道書簡	1889. 6. 13
下1287	松村介石書簡	1889. 6. 13
下1288	同志社予備校生徒委員書簡	1889. 6. 14
下1289	三輪振次郎書簡	1889. 6. 14
下1291	鈴木清書簡	1889. 6. 17
下1293	中山光五郎書簡	1889. 6. 20
下1294	目加田護法書簡	1889. 6. 22
下1295	杉山重義書簡	1889. 6. 24
下1296	鈴木清書簡	1889. 6. 24
下1299	田中賢道書簡	1889. 6. 25
下1300	目加田護法書簡	1889. 6. 27
下1304	中山光五郎書簡	1889. 6. 29
下1305	不破唯次郎書簡	1889. 7. 1
下1306	村上定書簡	1889. 7. 1
下1307	不破唯次郎書簡	1889. 7. 2
下1308	目加田護法書簡	1889. 7. 2
下1310	岩沢光耀書簡	1889. 7. 3
下1311	鶴田三郎書簡	1889. 7. 3
下1316	志垣要三書簡	1889. 7. 16
下1317	不破唯次郎書簡	1889. 7. 17
下1319	徳富久書簡	1889. 7. 18
下1320	徳富一敬書簡	1889. 7. 18
下1321	不破唯次郎書簡	1889. 7. 19
下1323	志垣要三書簡	1889. 7. 20
下1324	安住百太郎書簡	1889. 7. 22

下1242	伴直之助・田口卯吉書簡	1889. 4. 26
下1243	村上定書簡	1889. 4. 26
下1244	児玉仲児書簡	1889. 4. 27
下1245	中村缸造書簡	1889. 4. 27
下1247	新井毫書簡	1889. 4. 29
下1249	元良勇次郎書簡	1889. 4. 29
下1250	広瀬宰平書簡	1889. 4. 30
下1251	茂木平三郎書簡	1889. 4. 30
下1252	鈴木清書簡	1889. 4. 30
下1253	井深梶之助書簡	1889. 5. 1
下1254	小崎弘道書簡	1889. 5. 1
下1255	佐々城豊寿書簡	1889. 5. 1
下1256	峯彦郎書簡	1889. 5. 5
下1257	中村栄助書簡	1889. 5. 5
下1258	川本政之助書簡	1889. 5. 6
下1260	本城安太郎書簡	1889. 5. 8
下1261	鈴木清書簡	1889. 5. 8
下1262	川本泰年書簡	1889. 5. 9
下1263	川上八三郎書簡	1889. 5. 10
下1264	不破唯次郎書簡	1889. 5. 13
下1267	鈴木清書簡	1889. 5. 14
下1270	正久巳之吉書簡	1889. 5. 19
下1273	海老名弾正書簡	1889. 5. 24
下1274	広津友信書簡	1889. 5. 25
下1278	夏井庄六書簡	1889. 5. 30
下1279	宮川経輝書簡	1889. 5. 31
下1280	徳富猪一郎書簡	1889. 6. 1
下1281	網島佳吉書簡	1889. 6. 4

下1194	渋沢栄一書簡	1889. 3. 24
下1195	海老名弾正書簡	1889. 3. 25
下1199	森田武左衛門書簡	1889. 3. 29
下1200	金森通倫書簡	1889. 3. 30
下1201	三枝光太郎書簡	1889. 3. 30
下1202	森田武左衛門書簡	1889. 3. 31
下1203*	北垣国道書簡	1889. 4. 1
下1204	田尻東一郎書簡	1889. 4. 1
下1205	長屋忠明書簡	1889. 4. 2
下1207	不破唯次郎書簡	1889. 4. 4
下1209	花島健起書簡	1889. 4. 6
下1211	白石村治書簡	1889. 4. 6
下1213	綱島佳吉書簡	1889. 4. 8
下1214	金森通倫書簡	1889. 4. 9
下1217	不破唯次郎書簡	1889. 4. 11
下1218	金森通倫書簡	1889. 4. 11
下1221	川崎正蔵書簡	1889. 4. 12
下1228	菊池純二郎書簡	1889. 4. 16
下1230	中村栄助書簡	1889. 4. 17
下1231	佐々城豊寿・潮田千勢書簡	1889. 4. 17
下1233	村上定書簡	1889. 4. 18
下1234	古木寅三郎書簡	1889. 4. 18
下1235	原田正之助書簡	1889. 4. 20
下1237	松本誠直・岡崎高厚書簡	1889. 4. 23
下1238	金谷充書簡	1889. 4. 24
下1239	中島幸三郎書簡	1889. 4. 24
下1240	中山光五郎書簡	1889. 4. 24
下1241	海老名弾正書簡	1889. 4. 25

下1146	金森通倫書簡	1889. 2. 27
下1148	本城安太郎書簡	1889. 2. 28
下1149	金森通倫書簡	1889. 2. 28
下1152	杉山重義書簡	1889. 2. 28
下1153	古賀鶴次郎書簡	1889. 2. -
下1155	森田久万人書簡	1889. 3. 1
下1158	徳富猪一郎書簡	1889. 3. 2
下1160	広津友信書簡	1889. 3. 4
下1164	中山甚之助書簡	1889. 3. 5
下1165	森田武左衛門書簡	1889. 3. 6
下1166	中村栄助書簡	1889. 3. 6
下1167	柴原宗助書簡	1889. 3. 6
下1168	不破唯次郎書簡	1889. 3. 7
下1169	広津友信書簡	1889. 3. 7
下1170	茂木平三郎書簡	1889. 3. 7
下1171	中山光五郎書簡	1889. 3. 8
下1173	上野栄三郎書簡	1889. 3. 9
下1174	金森通倫書簡	1889. 3. 10
下1176	広津友信書簡	1889. 3. 12
下1177	本城安太郎書簡	1889. 3. 12
下1182	目加田護法書簡	1889. 3. 15
下1183	中村舩造書簡	1889. 3. 15
下1185	半谷高晴書簡	1889. 3. 17
下1187	不破唯次郎書簡	1889. 3. 19
下1188	金森通倫書簡	1889. 3. 19
下1189	河波荒次郎書簡	1889. 3. 19
下1190	杉山重義書簡	1889. 3. 20
下1192	児島惟謙書簡	1889. 3. 22

下1083	小崎弘道書簡	1889. 1. 24
下1084	大沢善助書簡	1889. 1. 25
下1085	本城安太郎書簡	1889. 1. 26
下1086	河波荒次郎書簡	1889. 1. 27
下1088	金森小春書簡	1889. 1. 30
下1089	金森通倫書簡	1889. 1. 30
下1091	奈須義質書簡	1889. 1. -
下1093	岡田松生書簡	1889. 2. 1
下1094	山中百書簡	1889. 2. 2
下1095	藤原直信書簡	1889. 2. 3
下1096	森田久万人書簡	1889. 2. 3
下1098	金森通倫書簡	1889. 2. 4
下1103	金森通倫書簡	1889. 2. 6
下1105	茂木平三郎書簡	1889. 2. 7
下1109	渋沢栄一書簡	1889. 2. 8
下1115	奈須義質書簡	1889. 2. 11
下1118	金森通倫書簡	1889. 2. 14
下1120	森为国書簡	1889. 2. 14
下1123	下村房書簡	1889. 2. 15
下1124	永岡喜八書簡	1889. 2. 16
下1129	同志社大学創立事務所書簡	1889. 2. 18
下1131	山中百書簡	1889. 2. 18
下1136	永岡喜八書簡	1889. 2. 21
下1138	中山甚之助書簡	1889. 2. 23
下1139	山中百書簡	1889. 2. 23
下1141	湯浅治郎書簡	1889. 2. 24
下1143	白石村治書簡	1889. 2. 25
下1145	不破唯次郎書簡	1889. 2. 26

下1017	下村房書簡	1888. 12. 17
下1019	金谷充書簡	1888. 12. 18
下1025	加藤勝弥書簡	1888. 12. 21
下1027	宮川経輝書簡	1888. 12. 21
下1028	植木枝盛書簡	1888. 12. 21
下1030	金森通倫書簡	1888. 12. 25
下1031	福井有志者書簡	1888. 12. 26
下1033	中村栄助書簡	1888. 12. 29
下1037	広津友信書簡	1889. 1. 1
下1039	加藤勝弥書簡	1889. 1. 1
下1041	奈須義質書簡	1889. 1. 2
下1042	加藤勝弥書簡	1889. 1. 4
下1044	菊池侃二書簡	1889. 1. 5
下1046	中山甚之助書簡	1889. 1. 6
下1052	富田鉄之助書簡	1889. 1. 8
下1053	不破唯次郎書簡	1889. 1. 9
下1055	前橋教会執事書簡	1889. 1. 9
下1057	安永稔書簡	1889. 1. 9
下1060	中山光五郎書簡	1889. 1. 10
下1064	伊勢時雄書簡	1889. 1. 11
下1065	加藤勝弥書簡	1889. 1. 11
下1067	押川方義書簡	1889. 1. 13
下1069	徳富猪一郎書簡	1889. 1. 16
下1070	新島公義書簡	1889. 1. 17
下1071	浮田和民書簡	1889. 1. 17
下1076	新井毫書簡	1889. 1. 22
下1078	村上定書簡	1889. 1. 22
下1079	金森通倫書簡	1889. 1. 23

下947	木村祐吉書簡	1888. 11. 14
下948	和田吉人書簡	1888. 11. 14
下950	原六郎書簡	1888. 11. 15
下952	清水袈裟雄書簡	1888. 11. 16
下953	竹越与三郎書簡	1888. 11. 16
下955	徳富猪一郎書簡	1888. 11. 17
下956	原田助書簡	1888. 11. 18
下957	加藤勝弥書簡	1888. 11. 19
下958	丸山福治書簡	1888. 11. 19
下961	馬場種太郎書簡	1888. 11. 21
下962	三好退蔵書簡	1888. 11. 22
下973	海老名弾正書簡	1888. 11. 25
下974	池本吉治書簡	1888. 11. 25
下979	松尾音治郎書簡	1888. 11. 26
下982	本城安太郎書簡	1888. 11. 27
下985	阿部政恒書簡	1888. 11. 29
下986	金森通倫書簡	1888. 11. 29
下991	本城安太郎書簡	1888. 12. 3
下992	予讃新報社書簡	1888. 12. 3
下994	村上俊吉書簡	1888. 12. 5
下1000	渡辺洪基書簡	1888. 12. 8
下1003	日下義雄書簡	1888. 12. 10
下1004	西群馬教会執事書簡	1888. 12. 10
下1005	伊勢時雄書簡	1888. 12. 11
下1006	不破唯次郎書簡	1888. 12. 12
下1011	市原盛宏書簡	1888. 12. 13
下1013	新井毫書簡	1888. 12. 16
下1016	奈須義質書簡	1888. 12. 17

下909	奈須義質書簡	1888. 10. 6	鎌倉市立中央図書館蔵	1888. 10. 6
下911	人見一太郎書簡	1888. 10. 9	鎌倉市立中央図書館蔵	1888. 10. 9
下912	人見一太郎書簡	1888. 10. 11	鎌倉市立中央図書館蔵	1888. 10. 11
下913	永井元書簡	1888. 10. 11	鎌倉市立中央図書館蔵	1888. 10. 11
下914	松本勘十郎書簡	1888. 10. 17	鎌倉市立中央図書館蔵	1888. 10. 17
下915	宮川経輝書簡	1888. 10. 18	鎌倉市立中央図書館蔵	1888. 10. 18
下917	人見一太郎書簡	1888. 10. 23	鎌倉市立中央図書館蔵	1888. 10. 23
下918	川本泰年書簡	1888. 10. 25	鎌倉市立中央図書館蔵	1888. 10. 25
下920	徳富猪一郎書簡	1888. 10. 26	鎌倉市立中央図書館蔵	1888. 10. 26
下921	望月興三郎書簡	1888. 10. 27	鎌倉市立中央図書館蔵	1888. 10. 27
下924	嶋田信太郎書簡	1888. 10. 29	鎌倉市立中央図書館蔵	1888. 10. 29
下925	徳富猪一郎書簡	1888. 10. 29	鎌倉市立中央図書館蔵	1888. 10. 29
下926	古荘三郎書簡	1888. 11. 1	鎌倉市立中央図書館蔵	1888. 11. 1
下929	古荘三郎書簡	1888. 11. 1	鎌倉市立中央図書館蔵	1888. 11. 1
下930	中島末治書簡	1888. 11. 1	鎌倉市立中央図書館蔵	1888. 11. 1
下931	古荘三郎書簡	1888. 11. 2	鎌倉市立中央図書館蔵	1888. 11. 2
下933	古荘三郎書簡	1888. 11. 3	鎌倉市立中央図書館蔵	1888. 11. 3
下934	藤原直信書簡	1888. 11. 4	鎌倉市立中央図書館蔵	1888. 11. 4
下935	人見一太郎書簡	1888. 11. 6	鎌倉市立中央図書館蔵	1888. 11. 6
下936	井深梶之助書簡	1888. 11. 6	鎌倉市立中央図書館蔵	1888. 11. 6
下937	茂里多寿三郎書簡	1888. 11. 7	鎌倉市立中央図書館蔵	1888. 11. 7
下939	古荘三郎書簡	1888. 11. 9	鎌倉市立中央図書館蔵	1888. 11. 9
下940	堀貞一書簡	1888. 11. 9	鎌倉市立中央図書館蔵	1888. 11. 9
下942	竹越与三郎書簡	1888. 11. 11	鎌倉市立中央図書館蔵	1888. 11. 11
下943	藤原直信書簡	1888. 11. 12	鎌倉市立中央図書館蔵	1888. 11. 12
下944	人見一太郎書簡	1888. 10. 13	鎌倉市立中央図書館蔵	1888. 10. 13
下945	古荘三郎書簡	1888. 11. 14	鎌倉市立中央図書館蔵	1888. 11. 14
下946	堀貞一書簡	1888. 11. 14	鎌倉市立中央図書館蔵	1888. 11. 14

下854	金森通倫書簡	1888. 3. 17
下858	福士成豊書簡	1888. 3. 21
下860	金森通倫書簡	1888. 3. 22
下861	宮川経輝書簡	1888. 3. 22
下862	徳富猪一郎書簡	1888. 3. 22
下863	不破唯次郎書簡	1888. 3. 24
下864	徳富猪一郎書簡	1888. 3. 24
下865	石黒務書簡	1888. 3. 26
下867	伊東熊夫書簡	1888. 4. 2
下868	徳富猪一郎書簡	1888. 4. 2
下870	徳富猪一郎書簡	1888. 4. 4
下872	新島公義書簡	1888. 4. 7
下873	新井毫書簡	1888. 4. 9
下874	望月興三郎書簡	1888. 4. 10
下880	三好退蔵書簡	1888. 5. 6
下881	徳富猪一郎書簡	1888. 5. 9
下882	徳富猪一郎書簡	1888. 5. 14
下883	三木正起書簡	1888. 5. 26
下884	高田義助書簡	1888. 5. 28
下885	上原権太郎書簡	1888. 5. 28
下888	三好退蔵書簡	1888. 6. 21
下892	三好退蔵書簡	1888. 7. 3
下895	矢野文雄書簡	1888. 7. 25
下897	勝安芳書簡	1888. 8. 19
下898	増野悦興書簡	1888. 8. 27
下902	金森通倫書簡	1888. 9. 18
下903	井上馨書簡	1888. 9. 20
下906	金森通倫書簡	1888. 9. 27

下794	徳富猪一郎書簡	1887. 11. 19	徳富猪一郎書簡	1887. 11. 19
下800	内藤兼備書簡	1888. 1. 2	内藤兼備書簡	1888. 1. 2
下801	松本勘十郎書簡	1888. 1. 3	松本勘十郎書簡	1888. 1. 3
下802	成瀬仁蔵書簡	1888. 1. 3	成瀬仁蔵書簡	1888. 1. 3
下803	中島末次治書簡	1888. 1. 6	中島末次治書簡	1888. 1. 6
下804	福士成豊書簡	1888. 1. 8	福士成豊書簡	1888. 1. 8
下805	不破唯次郎書簡	1888. 1. 9	不破唯次郎書簡	1888. 1. 9
下806	小崎弘道書簡	1888. 1. 14	小崎弘道書簡	1888. 1. 14
下808	不破唯次郎書簡	1888. 1. 16	不破唯次郎書簡	1888. 1. 16
下811	大沢善助書簡	1888. 1. 16	大沢善助書簡	1888. 1. 16
下813	橘仁書簡	1888. 1. 16	橘仁書簡	1888. 1. 16
下814	小崎弘道書簡	1888. 1. 17	小崎弘道書簡	1888. 1. 17
下815	不破唯次郎書簡	1888. 1. 19	不破唯次郎書簡	1888. 1. 19
下821	岡部広書簡	1888. 1. 24	岡部広書簡	1888. 1. 24
下826	沢茂吉書簡	1888. 2. 2	沢茂吉書簡	1888. 2. 2
下827	金森通倫書簡	1888. 2. 3	金森通倫書簡	1888. 2. 3
下828	中村缸造書簡	1888. 2. 3	中村缸造書簡	1888. 2. 3
下830	不破唯次郎書簡	1888. 2. 6	不破唯次郎書簡	1888. 2. 6
下831	川上八三郎書簡	1888. 2. 6	川上八三郎書簡	1888. 2. 6
下832	新井毫書簡	1888. 2. 7	新井毫書簡	1888. 2. 7
下835	福士成豊書簡	1888. 2. 12	福士成豊書簡	1888. 2. 12
下840	伊勢時雄書簡	1888. 2. 27	伊勢時雄書簡	1888. 2. 27
下842	兼子常五郎・望月興三郎書簡	1888. 2. 29	兼子常五郎・望月興三郎書簡	1888. 2. 29
下843	松平容太書簡	1888. 2. 29	松平容太書簡	1888. 2. 29
下847	三木正起書簡	1888. 3. 4	三木正起書簡	1888. 3. 4
下849	原六郎書簡	1888. 3. 7	原六郎書簡	1888. 3. 7
下850	徳富猪一郎書簡	1888. 3. 8	徳富猪一郎書簡	1888. 3. 8
下853	金森通倫書簡	1888. 3. 11	金森通倫書簡	1888. 3. 11

下747	山崎新太郎書簡	1886. 4. 12
下752	木場貞長書簡	1886. 6. 23
下755	富田鉄之助書簡	1886. 7. 12
下756	堀貞一書簡	1886. 7. 22
下757	山崎新太郎書簡	1886. 7. 26
下758	北垣国道書簡	1886. 8. 6
下759	富田鉄之助書簡	1886. 8. 14
下760	富田鉄之助書簡	1886. 8. 20
下766	富田鉄之助書簡	1886. 9. 26
下769	尺振八書簡	1886. 10. 4
下770	富田鉄之助書簡	1886. 10. 8
下771	辻密太郎書簡	1886. 10. 9
下772	牧野伸頤書簡	1886. 10. 12
下773	堀貞一書簡	1886. 10. 29
下775	市原盛宏書簡	1886. 12. 4
下776	岡部広書簡	1886. 12. 30
下777	中島宗達・西尾文禎書簡	1887. 1. 3
下778	岡部広書簡	1887. 1. 27
下780	岡部広書簡	1887. 4. 5
下781	大久保真二郎書簡	1887. 4. 12
下783	富田鉄之助書簡	1887. 5. 14
下784	大久保真二郎書簡	1887. 5. 19
下785	大久保音羽書簡	1887. 5. 19
下786	福土成豊書簡	1887. 5. 21
下787	大久保真二郎書簡	1887. 5. 23
下788	坂田丈平書簡	1889. 5. 25
下789	松平正直書簡	1887. 5. 29
下793	徳富猪一郎書簡	1887. 11. 3

下705	山本覺馬書簡	1885. 6. 29	山本覺馬書簡	1885. 6. 29
下706	大儀見元一郎書簡	1885. 6.	大儀見元一郎書簡	1885. 6.
下707	下村孝太郎書簡	1885. 7. 13	下村孝太郎書簡	1885. 7. 13
下710	大儀見元一郎書簡	1885. 7. 15	大儀見元一郎書簡	1885. 7. 15
下712	松山高吉書簡	1885. 7. 20	松山高吉書簡	1885. 7. 20
下715	半田宇平次書簡	1885. 12. 17	半田宇平次書簡	1885. 12. 17
下718	富田鉄之助書簡	1886. 1. 13	富田鉄之助書簡	1886. 1. 13
下719	小崎弘道書簡	1886. 1. 14	小崎弘道書簡	1886. 1. 14
下720	半田宇平次書簡	1886. 1. 21	半田宇平次書簡	1886. 1. 21
下721	下村孝太郎書簡	1886. 1. 25	下村孝太郎書簡	1886. 1. 25
下722	富田鉄之助書簡	1886. 2. 6	富田鉄之助書簡	1886. 2. 6
下724	山崎新太郎書簡	1886. 2. 10	山崎新太郎書簡	1886. 2. 10
下725	富田鉄之助書簡	1886. 2. 17	富田鉄之助書簡	1886. 2. 17
下727	山崎新太郎書簡	1886. 3. 2	山崎新太郎書簡	1886. 3. 2
下728	富田鉄之助書簡	1886. 3. 3	富田鉄之助書簡	1886. 3. 3
下729	同志社生徒書簡	1886. 3. 7	同志社生徒書簡	1886. 3. 7
下730	富田鉄之助書簡	1886. 3. 7	富田鉄之助書簡	1886. 3. 7
下735	小崎弘道書簡	1886. 3. 17	小崎弘道書簡	1886. 3. 17
下736	富田鉄之助書簡	1886. 3. 23	富田鉄之助書簡	1886. 3. 23
下737	山崎新太郎書簡	1886. 3. 23	山崎新太郎書簡	1886. 3. 23
下738	富田鉄之助書簡	1886. 3. 25	富田鉄之助書簡	1886. 3. 25
下739	松山高吉書簡	1886. 3. 26	松山高吉書簡	1886. 3. 26
下740	富田鉄之助書簡	1886. 3. 26	富田鉄之助書簡	1886. 3. 26
下741	富田鉄之助書簡	1886. 4. 3	富田鉄之助書簡	1886. 4. 3
下743	松山高吉書簡	1886. 4. 5	松山高吉書簡	1886. 4. 5
下744	中村栄助書簡	1886. 4. 6	中村栄助書簡	1886. 4. 6
下745	松山高吉書簡	1886. 4. 7	松山高吉書簡	1886. 4. 7
下746	富田鉄之助書簡	1886. 4. 12	富田鉄之助書簡	1886. 4. 12

- 下655 田中不二麿書簡 1875. 7. 9
- 下656 福土成豊書簡 1875. 10. 12
- 下658 津田仙書簡 1876. 4. 1
- 下659 福土成豊書簡 1876. 6. 9
- 下662 津田仙書簡 1878. 7. 9
- 下663 津田仙書簡 1878. 8. 12
- 下664 岡部長職書簡 1878. 9. 28
- 下665 中川横太郎書簡 1879. 2. 10
- 下666 津田仙書簡 1879. 9. 25
- 下669 津田仙書簡 1881. 2. 10
- 下670 中村正直書簡 1881. 2. 14
- 下678 浜岡光哲書簡 1882. 2. 25
- 下679 海老名喜三郎書簡 1882. 3. 7
- 下680 小崎弘道書簡 1883. 3. 23
- 下681 富田鉄之助書簡 1883. 5. 26
- 下682 湯浅治郎書簡 1883. 6. 1
- 下683 外山脩造書簡 1883. 7. 27
- 下684 田中源太郎書簡 1883. 10. 2
- 下685 古沢滋書簡 1884. 3. 10
- 下686 田中源太郎書簡 1884. 3. 22
- 下688 池袋清風書簡 1884. 6. 25
- 下692 森田久万人書簡 1885. 1. 10
- 下693 市原盛宏書簡 1885. 1. 12
- 下695 伊勢時雄書簡 1885. 2. 13
- 下696 小崎弘道書簡 1885. 3. 10
- 下697 松山高吉書簡 1885. 3. 21
- 下700 松山高吉書簡 1885. 4. 2
- 下701 小崎弘道書簡 1885. 4. 23

- 上1726 葛西貞考：新島公勤実名記
- 上1727 新島公勤：公勤家跡被仰付候一件
- 上1729 内国通運会社高崎出張所：荷物渡し済み証
- 上1732 安中郵便局：新島是水宛（新島襄より50円送付）
- 上1733 速水忠雄：新島是水宛書簡
- 上1739 中島浅五郎：新島是水・襄・公義宛年賀状
- 上1749 植栗義達：新島是水宛書簡
- 上1752 上原寛：新島是水宛書簡
- 上2006-48 写真：新島襄 1884. 3
- 上2006-55 写真：大久保利通
- 上2007-58 写真：新島襄（1866. 2. 28）
- 上2007-62 写真：Mr. Neesima's new home Kiyoto, Japan. Oct. 1878
- 上2007-132 写真：新島襄（Phillips Academy 時代）1866. 3
- 上2007-134 写真：新島襄 1872. 12. 20

B 新島先生遺品庫収蔵目録（下）

- 下635 新島民治書簡（新島襄宛＝以下同） 1867. 6. 18
- 下637 新島民治書簡 1868. 2. 7
- 下640 新島民治書簡 1869. 2. 9
- 下641 新島民治書簡 1869. 4. 12
- 下642 栗津鉦次郎書簡 1869. 10. 15
- 下643 新島民治書簡 1871. 2. 初旬
- 下644 川田剛書簡 1871. 5. 1
- 下645 新島民治書簡 1871. 5. 27
- 下648 田中不二磨書簡 1873. 4. 10
- 下649 田中不二磨書簡 1874. 5. 4
- 下651 川田剛書簡 1874. 12. 22

- 上1508 Fac simil of the original draught “Dec larat iomf Independ-
ence” .
- 上1520 小学校会社：新島襄預り金証書
- 上1557 湯浅吉郎：新島先生入浴之図
- 上1566 新島襄文化切手（郵政省） 1950. 11
- 上1578 「津田仙氏の信仰経歴談」（『護教』344号 1898. 2. 26）
- 上1604 丹羽鼎三 「菊栽培の歴史」『農耕と園芸』臨時増刊号 1961. 11
- 上1631 加藤小太郎：新島先生永眠25周年記念に際しての書簡 1915.
1. 22
- 上1677 新島公義記『新島家起源（家統記）』
- 上1678 新島民治『新島氏家統記』 森中章光写
- 上1679 新島民治写：新島家過去帳
- 上1680 新島家家族関係
- 上1681 森中章光写：新島家関係
- 上1682 新島家祝物到来覚帳
- 上1702 地租代金に関する文書
- 上1709 素行斎主人：掌中雜記
- 上1711 新島民治：弟子衆名前控
- 上1712 新島是水：西京江引移＝付跡万事相頼置……
- 上1714 新島民治：明治七年甲戌日記
- 上1715 新島民治：經濟簿・文久二年閏八月
- 上1716 新島民治：經濟簿 1878
- 上1717 新島民治：經濟簿 1881
- 上1719 新島家諸經費領収綴
- 上1721 新島是水：貰物控帳
- 上1722 新島民治：倅稽古修業一件
- 上1723 新島民治：帰朝＝付土産記
- 上1725 速水忠雄関係（寄留人転寓届三点）

- 上1230 卒業式次第 Andover Theological Seminary 1874. 7. 2
- 上1232 Mount Vernon Church: Order of Exercises for the ordination of Mr. J. H. Nee-Sima
- 上1235 新島民治「送籍願控」
- 上1236 新島襄：スイス、サンゴタールでの遺書 1884. 8. 6
- 上1237 アーモスト大学理事会 名誉学位贈与に関する通知
- 上1238 贈位記 1915. 11. 10
- 上1239 終身会員証 American Bible Society 1869. 1. 2
- 上1240 同 上 American Tract Society 1870. 1. 29
- 上1241 同 上 American Sunday School Union 1870. 12. 12
- 上1242 同 上 Woman's Union Missionary Society
- 上1250 新島襄：井上馨宛遺言
- 上1251 新島家病気見舞人名簿（八重夫人関係） 1890. 3. 23
- 上1257 新島先生永眠通知状（中村・金森・小崎・徳富連名） 1890. 1. 24
- 上1263 新島先生葬儀記録 1890. 1. 24
- 上1289 明治学院での記念式プログラム
- 上1291 北垣国道書簡 新島公義宛 1890. 1. 30
- 上1298 『時事新報』第2546号 1890. 1. 26
- 上1299 『毎日新聞』第5742号 1890. 1. 28
- 上1300 『基督教新聞』第340号 1890. 1. 31
- 上1301 「一月二十三日午後二時二十分」『国民之友』第72号 1890. 2. 3
- 上1302 葬儀概況『国民新聞』第4号 1890. 2. 4
- 上1305 露無文治『八日間の出来事』
- 上1337 津田仙：見舞状 1890. 1. 21
- 上1399 オープンバックシャツ型紙(John H. Dean 作成) 1874. 6. 17
- 上1445 小型サイン・ブック
- 上1477 聖書挿入物 6：コンサートのプログラム 1873. 4. 9
- 上1492 聖書挿入物 21：アラビア語紙片

- 上1101 新島襄 英文日記 1874. 10. 15 起シ
- 上1103 新島襄 日記 Round the world. 1884. 4. 6 より
- 上1106 新島襄 英文日記 1884. 9. 28—1885. 6. 5.
- 上1111 The Glass Factory at East Cambridge
- 上1114 Early History of Japan.
- 上1116 Appeal for the Christian Work in Japan. 1885?
- 上1117 Appeal for a Christian University in Japan. 1885. 9. 29.
- 上1118 An Appeal for Advanced Christian Education in Japan.
1885. 10. 29
- 上1122 A Plea for the Doshisha University.
- 上1131 医学校設立に関するメモ
- 上1133 Schemes of the Speedy Evangelization of Japan. 1886
- 上1150 Condition of Country about 20 yrs. ago.
- 上1185 Dr. Berry 宛書簡稿 1881. 12. 21
- 上1194 説教稿 Rom. 13:11—14 (1877)1. 4
- 上1195 説教稿 John 5:29 1878. 12. 15
- 上1196 説教稿 詩編より 1879. 6. 1
- 上1197 説教稿 基督弟子ノ足ヲアロフ
- 上1198 説教稿 John 7:14~17 1880? 3. 24
- 上1200 説教稿 新年説教 1881. 1. 2
- 上1214 祈禱文 1865. 10. 12
- 上1215 ベルチャータウンにおける基督集会に用いられた讃美歌
- 上1222 特命全権使節「文部理事官随行差許状」(新島七五三太宛)
- 上1223 特命全権大副使「文部理事官付通弁辞令」(同上)
- 上1224 田中文部理事官随行に際しての支給諸費書付
- 上1227 帰国直前某所における演説稿 1874. 5. 22
- 上1228 John L. Taylor: 新島襄に関する証明書
- 上1229 The Andover Association: Recommendation as a preacher.

- 上952 辱知姓名簿 1883
- 上972 破石葉獻納取次願（京都府知事宛）
- 上992 説教稿 Exod. 20:12 1875. 5. 23
- 上993 説教稿 真に恵まれた女 Luke 2:27, 28 1876. 9
- 上994 説教稿 John 19:39, 3:1, 7:50 1876. 10. 8
- 上995 説教メモ 愛 John 15:13 1876. 10. 15
- 上996 説教稿 Luke 11:49 1876. 10
- 上997 説教稿 Eph. 4:5—6 1877. 1. 14
- 上998 説教稿 Heb. 2:7—10 1877. 8. 19
- 上1000 説教稿 聖餐式の意義 Luke 22:19—20 1877. 9. 22
- 上1001 説教稿 John 15:15—16 1877. 12. 2
- 上1002 説教要項 Heb. 13:8—16 1877. 12. 29
- 上1003 説教稿 John 11:35 1878. 2. 3
- 上1004 説教稿 John 3:3 1878. 2. 10
- 上1005 説教稿 2 Cor.; Col. より 1878. 2. 17/1880. 10.
- 上1006 説教稿 Matt. 21:17 1878. 3. 3
- 上1007 説教稿 Matt. 9:12, 11:5 1878. 3. 10
- 上1008 説教稿 Matt. 4:19 1878. 7. 1
- 上1009 説教稿 Acts. 6:7 1878. 7. 10
- 上1010 説教稿 John 19:15 1878. 10. 13
- 上1011 説教稿 Mark 12:15 1878. 12. 8
- 上1012 説教稿 Matt. 13:45 1878. 12. 29
- 上1013 説教稿 Matt. 5:13, Mark 9:50 1879. 3. 16
- 上1014 説教稿 Luke 24:5 1879. 4. 13
- 上1015 説教稿 Mark 4:39 1879. 4. 27
- 上1016 説教稿 キリストの仕事 Matt. 3:12 1880. 1. 19
- 上1035 英文説教稿 John 8:2—12
- 上1099 新島襄 英文日記 1872. 3. 28—1872. 7. 11

- 上816 新島襄写：航海詳義
- 上817 新島襄写：数学ノート（計算・甲賀塾時代？）
- 上823 新島襄写：van de Logarithmen
- 上824 新島襄写：Stuurmankunst Navigator
- 上825 新島襄写：Algebra of Stel Kunst. 5 Augustus 1862
- 上841 新島襄写：英吉利文典直訳
- 上842 新島襄写：Elements of Algebra
- 上843 英語文法小引 (W. Lobscheid, *Chinese-English Grammer*)
1864
- 上865 分離術 Prof. Harris' Lecture on Chemistry.
- 上866 新島襄ノート：Eaton's Chemistry
- 上890 新島襄：単語帳 1884. 6. 19
- 上892 新島襄筆記：Historical Study of the Scripture
- 上903 英文ノート（シーリー教授、スミス教授の講義筆記、英国教会の調査報告、書籍貸出控、日記）
- 上929 Holy Bible (Mrs. Walter Baker 記念の聖書)
- 上931 英文ノート（阿蘭陀国について、安息日について、京都看病婦学校設立資金受取控）
- 上932 新島邸及第二公会建築費内訳控(英文宗教関係筆記等を含む)
- 上933 雑記帳 1877. 5
- 上934 雑記帳 1877. 8
- 上937 所蔵英書手控・預ケ金覚等
- 上938 雑記帳 1879. 1
- 上939 雑記帳 1880. 1
- 上940 雑記帳 1880. 9
- 上942 雑記帳 1882
- 上943 雑記帳（新島姓の由来に関する記述あり）1882
- 上944 諸経費手控（3）(1887)

- 上451 須田明忠・河辺鎬太郎の教会転会に関する推薦書
- 上472* Sydney L. Gulick, *Church Union in Japan*. 1889. 4. 12/5. 1
- 上474 日本聯合基督教会憲法並規則（新島の英文書込）1889. 3
- 上475 S. L. Gulick, O. H. Gulick, *Questions concerning the Proposed Union*. No. 1—7 (A.B.C.F.M. Missionaries, 組合教会の牧師と指導者宛)
- 上484 デビス、ラーネッド「組合・一致合併問題に就ての意見」
1889. 1. 25
- 上486 基督教新聞 第306号 M. 22. 6. 5.
- 上490 日本伝道会社神戸集会議事録（伝道者月手当増額ノ事）
- 上491 日本基督伝道会社第四年会記事
- 上494 日本基督伝道会社ノ臨時会議 1882. 1. 5.
- 上496 年会についてのメモ 1882
- 上498 伝道関係出納簿 1878—1880
- 上500 伝道報告会筆記
- 上505 今村謙吉：聖書売伝道受取報告
- 上583 ハーディ氏追悼記念説教（原本・東京恒春園内芦花文庫）
- 上667 新島襄：婦朝日誌（田口八郎訳）
- 上673 第二回外遊英文日記抄（田口八郎訳）
- 上674 新島公義『新島襄第二回外遊記（明治17年4月6日—10月31日）』
- 上682 J. H. Seelye 博士著，小崎弘道訳「途也，真理也，生命也」の序文
- 上693 新島襄：人間の罪について 1881. 5. 17
- 上710 英和女学校寮舎増築費寄付募集につき稿
- 上742 授業時刻表（同志社英学校）
- 上759 遺墨 自由・自治之基
- 上782 遺墨 埴輪見取図

- 上227 外国女教師入京御免状御下渡願及御催促願(パームレー関係)
- 上229 外国人各地旅行免状 アレス ジェー、スターク、ウエゾル氏
- 上230 私雇外国人居留地外僑寓証票 アレス ジェー、スターク、ウエゾル
- 上240 槇村正直：京都府雇入外国人明細簿
- 上249 同志社一銭講趣意書
- 上278 時報許可願及国旗米国旗掲揚伺書
- 上279 二人乗人力車廃車御届
- 上280 溝渠変換願及付図
- 上281 乳牛飼養許可願
- 上282 乳牛飼養許可願下書
- 上285 建家払下願書下戻願
- 上286 片岡六右衛門：永代売渡地所証書
- 上288 屋宇建築届
- 上289 新島公義：転宅御届
- 上294 寄留止宿洋行関係書類
- 上295 官地拝借御願下書
- 上296 比叡山借地関係書類
- 上298 藤尾村戸長役場：地租納金督促状
- 上308 自費郵便函建設願出に付回答
- 上309 京都府学務課：外国人教師調査通達(1877)
- 上310 京都府学務課：生徒員名調査通達
- 上311 京都府：女教師パーミリ氏のトランク盗難についての通達
- 上312 京都府学務課：外国人教師調査通達
- 上374 同志社「アルムニ」会設立趣意書稿
- 上375 同志社「アルムニ」会記事
- 上376 同志社「アルムニ」会第一回記事
- 上378 同志社校友会 新島先生永眠による後任者に関して 1890. 2. 19

第10巻 新島襄の生涯と手紙

本文	7
注解	379
解題	447

B 新島先生遺品庫収蔵目録(上)

上80	御伺書(新島先生打掌事件関係書類)
上81	同志社旧二年生嘆願書(同上)
上82	御届(同上)
上83	写真: 事件原因の二年生九名と杖破片と古歌(同上)
上85	松平容大校則違反処分につき嘆願書
上104	新島襄・山本覚馬『同志社規則』
上118	第一回卒業式(英学余科)プログラム
上154	医学校及病院設立参考資料(岐阜県医学校関係)
上155	洞酌医学校関係書類
上156	同志社医学校創立ノ件ニ関スル書類(Edinburgh Medical Missionary Society)
上171	The First Annual Report of the Doshisha Hospital and Training School for Nurses.
上200	新島襄: 同志社外国人教師一覧表
上201	パームレー氏条約書
上208	借家御届・デビス誓約書控
上209	スタークウェザー条約書控
上211	京都府とG. H. ボールドウィンとの契約書写他
上219	テラー関係渉外文書
上220	ゴルドン氏関係渉外文書
上221	スタークエゾル雇継願
上225	ラーネッド教師寄留届

To Shimomura Kōtarō [DA], <i>Kobe, Dec. 24th</i>	349
1889	
To Dr. N. G. Clark [AB], <i>Kobe, Feb. 13th</i>	350
To Dr. N. G. Clark [AB], <i>Kobe, Feb. 13th</i>	350
To Dr. N. G. Clark [AB], <i>Kobe, March 19th</i>	351
To Dr. N. G. Clark [AB], <i>Kobe, April 12th</i>	352
To the Reverend Doremus Scudder [DA—draft only] <i>Kobe, April 16th</i>	354
To Dr. N. G. Clark [AB], <i>Kioto, May 15th</i>	355
To Susan H. Hardy [L&L], <i>Kyoto, [c. mid-May]</i>	356
To Dr. N. G. Clark [AB], <i>Kioto, June 11th</i>	357
[To Dr. N. G. Clark] [AB], [<i>Kyoto</i>], <i>June 17th</i>	358
To Dr. N. G. Clark [AB], <i>Kioto, July 5th</i>	358
To Shimomura Kōtarō [DA], <i>Kioto, July 5th</i>	360
To Susan H. Hardy [L&L], [<i>Kyoto</i>], [<i>c. August 20</i>]	361
To President Julius H. Seelye [AC], <i>Kioto, Sept. 3d</i>	361
To the Directors of <i>The Pacific</i> [DA], <i>Kioto, Sept. 24th</i>	362
To Dr. N. G. Clark [DA], <i>Kioto, Sept. 27th</i>	363
To Dr. Jerome D. Davis and Professor Chauncey M. Cady [DA], <i>Kioto,</i> <i>Oct. 3d</i>	364
To Susan H. Hardy [L&L], <i>Kyoto, October 5</i>	365
1890	
[To] [JD, L&L], [<i>Oiso</i>], [<i>January 5</i>]	366
APPENDIX	
Paragraphs written for Captain Horace S. Taylor in 1865 en route to Boston [L&L]	370
To Uchimura Kanzō [DA—draft only][<i>West Goldsboro, Maine,</i> <i>July 21, 1885</i>]	371
序文 (訳)	375
解 題	389
INDEX	423

To Professor Morar [DA], <i>Kioto, Japan, Oct. 29th</i>	306
To President Julius H. Seelye [AC], <i>Kioto, Nov. 30th</i>	306
1887	
To Captain William T. Savory [DA], <i>Yokohama, March 4th</i>	307
To Dr. John C. Berry, Dr. Sara C. Buckley and Miss Linda A. J. Richards [DA—draft only], <i>Kioto, April 13th</i>	308
To J. T. Morton [DA—copy, Neesima's script], [<i>Kyoto</i>], [<i>April</i>]	309
To Dr. N. G. Clark [DA], <i>Kioto, May 11th</i>	311
[To Susan H. Hardy] [L&L], [<i>Sapporo</i>], <i>July 30</i>	313
To Dr. John C. Berry [DA], <i>Supporo, Aug. 1st</i>	313
[To Susan H. Hardy] [L&L], [<i>Sapporo</i>], <i>August 24</i>	315
[To Susan H. Hardy] [L&L], [<i>Sapporo</i>], <i>September 4</i>	315
To Dr. N. G. Clark [AB], <i>Kioto, Oct. 27th</i>	316
To Dr. N. G. Clark [AB], <i>Kioto, Nov. 16th</i>	318
1888	
To Dr. Jerome D. Davis [DA], [<i>Kyoto</i>], [<i>January 10</i>]	320
To Dr. N. G. Clark [AB], <i>Kyoto, March 3</i>	321
To Dr. N. G. Clark [AB], <i>Kioto, March 4th</i>	322
[To Susan H. Hardy] [L&L], [<i>Kyoto</i>], [<i>March 5</i>]	326
To Shimomura Kōtarō [DA], <i>Kamakura, June 4th (Monday)</i>	326
To Dr. N. G. Clark [AB], <i>Tokio, June 23d</i>	330
To Susan H. Hardy [L&L], <i>Tokyo, July 4</i>	333
To Susan H. Hardy [L&L], <i>Ikao, Joshu, August 13</i>	334
To Matsuo Otojirō [DA], <i>Ikao, Aug. 23d</i>	335
To Shimomura Kōtarō [DA], <i>Tokio, Oct. 12th</i>	335
To Dr. N. G. Clark [AB], <i>Tokio, Oct. 15th</i>	337
To Kashiwagi Gien [DA], [<i>Kyoto</i>], <i>Nov. 1st</i>	338
To Dr. N. G. Clark [AB], <i>Kioto, Nov. 10th</i>	339
To the Reverend John H. DeForest [DA], <i>Kioto, Nov. 28th</i>	342
To Shimomura Kōtarō [DA], <i>Kioto, Nov. 30th</i>	343
To Dr. N. G. Clark [AB], <i>Kioto, Dec. 11th</i>	345

To Dr. N. G. Clark [DA], <i>Boston, May 29th</i>	269
To Dr. N. G. Clark [DA], <i>Boston, June 10th</i>	270
To Kozaki Hiromichi [DA], <i>Dorchester, Mass., July 4th</i>	271
To the Reverend Joel Stone Ives [DA], <i>Bar Harbor, Me, July 21st</i>	272
[To Mr. & Mrs. Hardy][L&L], [<i>West Gouldsborough, Maine</i>], [<i>July</i> 28]	273
To Dr. N. G. Clark [DA], <i>West Gouldsborough Maine, July 29th</i>	273
To Dr. N. G. Clark [DA], <i>West Gouldsborough [Maine], July 30th</i>	275
To Uchimura Kanzō [DA—draft only], <i>West Gouldsborough, Maine,</i> <i>Aug. 7th</i>	277
To Alpheus Hardy [AB], <i>West Gouldsborough [Maine], Aug. 14th</i>	278
To Dr. N. G. Clark [DA], <i>West Gouldsborough [Maine], Aug. 25th</i>	278
To Mary E. Hidden [AN], <i>West Gouldsborough, Maine, Sept. 10th</i>	280
To Kurahara Korehiro [DA], <i>Boston, Oct. 18th</i>	281
To President Julius H. Seelye [AC], <i>Boston, Oct. 22d</i>	282
To Miss Bessie [Elizabeth] Seelye [AC], <i>Boston, Oct. 27th</i>	283
To Dr. N. G. Clark [DA], <i>Boston, Oct. 28th</i>	283
To David & Mary E. Hidden [AN], <i>Boston, Oct. 29th</i>	286
To Susan H. Hardy [L&L], [<i>Kyoto</i>], [<i>December 23</i>]	287
To President Julius H. Seelye [AC], <i>Kioto, Dec. 25th</i>	287
1886	
To Dr. N. G. Clark [DA], <i>Tokio, Jan. 26th</i>	288
To Mr. & Mrs. Hardy [DA], <i>Tokio, Jan. 29th</i>	292
To Dr. N. G. Clark [DA], <i>Tokio, Jan. 30th</i>	295
To Dr. N. G. Clark [DA], <i>Kioto, Feb. 17th</i>	296
To Dr. N. G. Clark [DA], <i>Kioto, April 6th</i>	299
To President Julius H. Seelye [AC], <i>Kioto, April 28th</i>	300
To Dr. N. G. Clark [DA], <i>Kioto, June 17th</i>	302
To Dr. N. G. Clark [DA], <i>Kioto, June 28th</i>	303
To Matsunami Jin-ichirō [DA], <i>Kyoto, July 4th</i>	305
To the Reverend John H. DeForest [DA], <i>Kioto, Sept. 17th</i>	305

To Mary E. Hidden [AN], <i>Danversport [Mass.], Oct. 30th</i>	236
To Dr. N. G. Clark [DA], <i>Boston, Nov. 18th</i>	237
To Dr. N. G. Clark [DA], <i>Boston, Nov. 25th</i>	239
To Dr. Judson Smith [AB], <i>Clifton Spring, N. Y., Dec. 12th</i>	241
Neesima's translation of a letter from Pastor Ise Tokio [AB]	242
To Alpheus Hardy [L&L], <i>[Clifton Springs, N. Y.], December 15</i>	244
To Dr. Judson Smith [AB], <i>Clifton Spring [N. Y.], Dec. 19th</i>	245
Explanation of the illustration sent to Dr. Judson Smith through Dr. N. G. Clark [AB]	245
To Kozaki Hiromichi [DA], <i>Clifton Spring N. Y., Dec. 29th</i>	246
1885	
To Dr. N.G. Clark [DA], <i>Clifton Spring [N. Y.], Jan. 9th</i>	247
To Dr. N. G. Clark [DA], <i>Clifton Spring [N. Y.], Jan. 10th</i>	248
To Dr. N. G. Clark [DA], <i>Clifton Spring [N. Y.], Jan. 12d</i>	250
"To the Foreign Committee and the Dendoquasha Yiyin" [DA], <i>Clifton Spring, N. Y., Jan. 15th</i>	251
To Dr. N. G. Clark [DA], <i>Clifton Spring [N. Y.], Jan. 20th</i>	254
To Kyoto Colleagues [JD], <i>[Clifton Springs, N. Y.], January</i>	255
To Dr. N. G. Clark [DA], <i>Clifton Spring [N. Y.], Jan. 28</i>	255
To Kurahara Korehiro [DA], <i>Clifton Spring N. Y., Feb. 10th</i>	257
Fragments [L&L], <i>Early 1885</i>	258
To Koyano Keizō [DA], <i>Dorchester Mass., March 22d</i>	258
To Kyoto Colleagues [JD], <i>[Dorchester, Mass.], [March 22]</i>	259
To Kyoto Colleagues [JD], <i>[Boston], [March 25]</i>	259
To Kyoto Colleagues [JD], <i>[Boston], [late March]</i>	260
To Dr. N. G. Clark [DA], <i>Boston, April 9th</i>	260
To Dr. Jerome D. Davis [JD, L&L], <i>[Milford, Delaware], [April 20]</i>	263
To Dr. N. G. Clark [DA], <i>Milford Del., April 21st</i>	264
To Dr. N. G. Clark [DA], <i>New York City, May 12th</i>	265
To Kozaki Hiromichi [DA], <i>New York city, May 13th</i>	267
[To Kyoto Colleagues?] [JD], <i>[Boston], [May 26]</i>	268

1880	
[To Alpheus Hardy] [L&L], <i>Okayama, February</i>	208
To Alpheus Hardy [AB], [<i>Kyoto</i>], [<i>Summer</i>]	209
To the Reverend Jerome D. Davis [L&L], [<i>Kyoto</i>], <i>August 12</i>	210
1881	
To Alpheus Hardy [L&L], [<i>Kyoto</i>], [<i>January</i>]	210
To President Julius H. Seelye [AC], <i>Kiyoto Japan, July 11st</i>	210
To Captain William T. Savory [DA], <i>Kiyoto Japan, Aug 1st</i>	212
1882	
To Alpheus Hardy [L&L], [<i>Kyoto</i>], [<i>Late Spring</i>]	214
1883	
To Dewitt Jencks [DA], <i>Kiyoto, Jan. 22d</i>	214
To Dr. John C. Berry [DA—draft only], <i>Kiyoto, May 5th</i>	215
To Kyoto Colleagues [JD], <i>Tokyo, May 11</i>	219
To Dr. John C. Berry [DA—draft only], <i>Kiyoto, June</i>	219
To John Eaton [DA—draft only], <i>Kiyoto Japan, July 16th</i>	220
To Mr. & Mrs. Hardy [DA], <i>Okayama, Nov. 9</i>	221
1884	
To Alpheus Hardy [L&L], <i>Kobe, March 9</i>	222
To Dr. N. G. Clark [DA], <i>Kiyoto Japan, March 25th</i>	223
[To Mr. & Mrs. Hardy] [L&L], [<i>Hongkong</i>], [<i>April 15</i>]	227
[To Mr. & Mrs. Hardy] [L&L], [<i>Ceylon</i>], [<i>April 27</i>]	227
To Susan H. Hardy [L&L], <i>Rome, May 29</i>	229
To Susan H. Hardy [L&L], <i>Turin, June 18</i>	229
To Alpheus Hardy [L&L], <i>Torre Pellice [Italy], July 1</i>	231
Memorandum [DA], <i>Lucerne, August 9th</i>	232
[To Mr. & Mrs. Hardy] [L&L], [<i>Lucerne</i>], [<i>August 17</i>]	233
To Dr. N. G. Clark [DA], <i>Bonn, Sept. 3d</i>	233
To Neesima Kōgi [DA], <i>London, Sept. 9th</i>	235
To Neesima Kōgi [DA], <i>London, Sept. 14th</i>	235
To Mary E. Hidden [AN], <i>Boston, Oct. 2d</i>	236

To Mr. & Mrs. Hardy [L&L, JD], [<i>Kyoto</i>], <i>September 6</i>	175
To President Julius H. Seelye [AC], <i>Kiyoto Japan, Dec. 24th</i>	177
To Elizabeth T. Seelye [AC], <i>Kiyoto Japan, Dec. 24th</i>	177
To Mary E. Hidden [AN], <i>Kiyoto Japan, Dec. 25th</i>	179
To the Reverend John A. Kaly [DA], <i>Kiyoto Japan, Dec. 26th</i>	181
1877	
[To Mr. & Mrs. Hardy] [L&L], [<i>Kyoto</i>], <i>March</i>	183
To Alpheus Hardy [L&L], [<i>Kyoto</i>], [<i>Spring</i>]	183
[To Mr. & Mrs. Hardy] [L&L], <i>Wakanoura, July 12</i>	184
To President & Mrs. Seelye [AC], <i>Wakanoura, Japan, July 18th</i>	184
[To Mr. & Mrs. Hardy] [L&L], [<i>Kyoto</i>], [<i>late</i>] 1877	187
[To Mr. & Mrs. Hardy?] [JD], [<i>Kyoto</i>], <i>December 23</i>	187
1878	
[To Mr. & Mrs. Hardy] [L&L], [<i>Kyoto</i>], [<i>February?</i>]	187
[To Mr. & Mrs. Hardy] [L&L], [<i>Kyoto</i>], [<i>March?</i>]	188
[To Mr. & Mrs. Hardy] [L&L], [<i>Annaka</i>], [<i>late April</i>]	188
To Mary E. Hidden [AN], <i>Kiyoto Japan, July 10th</i>	189
[To Mr. & Mrs. Hardy] [L&L], [<i>Kyoto outskirts</i>], <i>August 16</i>	190
To Okabe Nagamoto [L&L], [<i>Kyoto outskirts</i>], <i>August 16</i>	190
1879	
[To the Reverend Jerome D. Davis] [JD], <i>Tokyo, February 13</i>	192
For Ueno Eizaburō [DA—recommendation draft], [<i>Kyoto</i>], <i>April 13th</i>	192
[To the Reverend Jerome D. Davis?] [JD], <i>Kyoto, Monday morning, July 21</i>	193
To Alpheus Hardy [L&L], [<i>Kyoto Suburb</i>], [<i>Summer</i>]	193
To Alpheus Hardy [L&L], [<i>Kyoto?</i>], [<i>Summer</i>]	194
To Alpheus Hardy [L&L], <i>Hyūga, Kyūshū</i> , [<i>Summer</i>]	194
To Alpheus Hardy [AB, L&L], <i>Kiyoto, Sept. 4</i>	194
[To Mr. & Mrs. Hardy] [L&L], [<i>Kyoto</i>], <i>October 27</i>	201
To Dr. N. G. Clark [AB], <i>Kiyoto, Nov. 13th</i>	202
To Alpheus Hardy [L&L], [<i>Kyoto</i>], <i>December 27</i>	206
To Dr. N. G. Clark [AB], <i>Kiyoto Japan, Dec. 29th</i>	207

To Mary E. Hidden [AN], <i>Bar Harbor, Aug. 17th</i>	139
To William J. Seelye [DA], <i>Clinton Mass., Oct. 5th</i>	141
To Mary E. Hidden [AN], <i>Rutland Vt., Oct. 7th</i>	142
To Andover Friends [AN], <i>Boston, Oct. 13th</i>	143
To Mr. & Mrs. Hardy [L&L], <i>Green River, Wyoming, October 25</i>	145
To Alpheus Hardy [L&L], <i>San Francisco, October 29</i>	145
To Elizabeth T. Seelye [AC], <i>San Francisco, Oct. 29th</i>	146
To Mary E. Hidden [AN], <i>San Francisco, Oct. 29th</i>	147
[To Mr. & Mrs. Hardy] [L&L], <i>[San Francisco], October 30</i>	148
To Susan H. Hardy [L&L], <i>Lat. 30°6'N., Long. 158°25'E., November 21</i>	148
To Mr. & Mrs. Hardy [DA], <i>Annaka, Japan, December 22</i>	153
To Mr. & Mrs. Hardy from Neesima's father, translated by Neesima as noted [L&L], <i>Annaka, December 24</i>	156
To Mary E. Hidden [AN], <i>Tokio, (Yeddo) Japan, Dec. 31st</i>	157
1875	
To Professor Julius H. Seelye [AC], <i>Tokio, Japan, Jan. 10th</i>	158
To Dr. N. G. Clark [AB], <i>Osaka, Japan, January 25th</i>	161
[To Mr. & Mrs. Hardy] [L&L], <i>[Osaka] March</i>	163
To Professor Julius H. Seelye [AC], <i>Osaka, April 27th</i>	164
[To Mr. & Mrs. Hardy][L&L], <i>[Kyoto], July 7</i>	166
[To the Reverend Jerome D. Davis?][JD], <i>[Kyoto], August 2</i>	166
[To the Reverend Jerome D. Davis?] [JD], <i>[Kyoto], August 24</i>	167
To the Reverend Jerome D. Davis [JD], <i>[Kyoto], October 11</i>	167
To the Reverend Jerome D. Davis [JD], <i>[Kyoto], October 16</i>	167
To Susan H. Hardy [AC], <i>Kiyoto, Nov. 23rd</i>	168
1876	
To Mr. & Mrs. Hardy [L&L], <i>[Kyoto], January 6</i>	170
To Elizabeth T. Seelye [AC], <i>Kiyoto, Japan, March 27th</i>	171
To Mary E. Hidden [AN], <i>Kiyoto Japan, March 27th</i>	172
To Dr. N. G. Clark [AB], <i>Kiyoto Japan, May 8th</i>	174
To Alpheus Hardy [L&L], <i>[Kyoto], June 6</i>	175

To Alpheus Hardy [L&L], <i>Edinburgh, June 3</i>	112
To Alpheus Hardy [L&L], <i>London, June 8</i>	113
To Mary E. Hidden [AN], <i>London, June 16th</i>	114
To Mr. & Mrs. Hardy [L&L], <i>Macon, July 21</i>	116
To Mr. & Mrs. Hardy [L&L], <i>Berlin, August 6</i>	117
[To Mr. & Mrs. Hardy] [L&L], <i>St. Petersburg, August 10</i>	118
To Mr. & Mrs. Hardy [L&L], <i>Copenhagen, September 3</i>	118
To Susan H. Hardy [L&L], <i>Berlin, October 2</i>	121
To Mr. & Mrs. Hardy [L&L], <i>Berlin, October 20</i>	122
To Susan H. Hardy [L&L], <i>Berlin, December 16</i>	123
1873	
To Mr. & Mrs. Hardy [L&L], <i>Berlin, January 6</i>	124
To Mr. & Mrs. Hardy [L&L], <i>Berlin, January 15</i>	125
To Susan H. Hardy [L&L], <i>Wiesbaden, March 5</i>	126
To Professor Julius H. Seelye [AC], <i>Wiesbaden, March 10th</i>	127
[To Susan H. Hardy] [L&L], [<i>Wiesbaden</i>], <i>April 6</i>	128
To Mary E. Hidden [AN], <i>Wiesbaden, June 25th</i>	129
Diary entry	131
To Susan H. Hardy [L&L], <i>Elsingen [actually Usingen], August 6</i>	131
To Alpheus Hardy [L&L], <i>London, August 27</i>	133
To Mary E. Hidden [AN], <i>London, Aug. 29th</i>	133
To Professor Julius H. Seelye [AC], <i>Andover, Nov. 24th</i>	134
To Professor Julius H. Seelye [AC], <i>Andover, Nov. 26th</i>	134
To Mary E. Hidden [AN], [<i>Andover</i>], <i>Nov. 26th</i>	135
1874	
[To Mr. & Mrs. Hardy] [L&L], [<i>Andover</i>], <i>February</i>	135
[To Mr. & Mrs. Hardy] [L&L], [<i>Andover</i>], <i>March</i>	136
To the Secretaries of the A. B. C. F. M. [AB], <i>Andover, April 30th</i>	136
To the Secretaries of the A. B. C. F. M. [AB], <i>Andover, April 30th</i>	137
To the Secretaries of the A. B. C. F. M. [AB], <i>Andover, May 1st</i>	138
To Dr. N. G. Clark [AB], <i>Andover, June 29th</i>	138

[To Susan H. Hardy] [L&L], [<i>Andover</i>], <i>Jan. 10</i>	79
To Alpheus Hardy [L&L], <i>Andover, January 29</i>	79
To Mary E. Hidden [AN], <i>Boston, Feb. 10th</i>	80
To Orilla Flint [L&L], <i>Andover, March 21</i>	82
To Mary E. Hidden [AN], <i>Westboro, April 3d</i>	82
To Orilla Flint [L&L], <i>Andover, June 7</i>	84
To Susan H. Hardy [L&L], <i>Amherst [most probably Andover], June 13</i>	84
To Alpheus Hardy [L&L], <i>Andover, June 21</i>	85
To John Tefft Ward [DA], <i>Lockport [N. Y.], Aug. 7th</i>	86
To Susan H. Hardy [L&L], <i>Evans Mills, N. Y., August 18</i>	86
Diary entry at Hoosac Mountain [L&L], <i>July 15</i>	89
To Mary E. Hidden [AN], <i>Evan's Mills N. Y., Aug. 21</i>	90
To Susan H. Hardy [L&L], <i>Andover, September 17</i>	91
To Alpheus Hardy [L&L], <i>Andover, September 27</i>	92
To Susan H. Hardy [L&L], <i>Andover, November 7</i>	94
To Mary E. Hidden [AN], <i>Andover, Nov. 30th</i>	94
1872	
To Ephraim Flint [L&L], <i>Boston, February 16</i>	95
To Mary E. Hidden [AN], [<i>Andover</i>] <i>Theol. Semy., Feb. 22nd</i>	95
To Mr. & Mrs. Hardy [L&L], <i>Georgetown, D. C., March 8</i>	95
To Mr. & Mrs. Hardy [L&L], <i>Georgetown, D. C., March 10</i>	98
To Mary E. Hidden [AN], <i>Georgetown, D. C., March 12th</i>	99
To Mr. & Mrs. Hardy [L&L], <i>Georgetown, D. C., March 15</i>	100
To Mr. & Mrs. Hardy [L&L], <i>Georgetown, D. C., March 19</i>	102
To Alpheus Hardy [L&L], <i>Georgetown, D. C., March 20</i>	104
To Mr. & Mrs. Hardy [L&L], <i>Georgetown, D. C., March 22</i>	105
To Mr. & Mrs. Hardy [L&L], <i>Washington, D. C., March 28</i>	106
To Mr. & Mrs. Flint [L&L], <i>Aboard the Boston and Albany, April 10</i>	108
To Mary E. Hidden [AN], <i>Boston, April 18th</i>	108
To Mr. & Mrs. Hardy [L&L], <i>New Haven, April 30</i>	109
To Alpheus Hardy [L&L], <i>Steamship ALGERIA, May 20</i>	111

[To Susan H. Hardy] [L&L], [<i>Amherst</i>], <i>October 1</i>	43
To Susan H. Hardy [L&L], [<i>Amherst</i>], <i>November 8</i>	43
1869	
To Mary E. Hidden [AN], <i>Amherst, Nov. 14th</i>	43
To Mary E. Hidden [AN], <i>Amherst, Jan. 16th</i>	45
To Mary E. Hidden [AN], <i>Amherst, Feb. 11th</i>	46
To John Gardiner Smart [AC], <i>Amherst, March 17th</i>	47
To Mary E. Hidden [AN], <i>Amherst, May 12th</i>	50
To Susan H. Hardy [L&L], <i>Amherst, May 21</i>	51
To Mary E. Hidden [AN], <i>Amherst, June 2d</i>	52
To Mary E. Hidden [AN], <i>Amherst, June 23d</i>	53
Diary entries during walking trip [L&L], <i>Summer</i>	54
To Mary E. Hidden [AN], <i>North Chatham, Aug. 13th</i>	55
To Susan H. Hardy [L&L], <i>Amherst, September 3</i>	57
To Mary E. Hidden [AN], <i>Amherst, Sept. 12th</i>	57
To Susan H. Hardy [L&L], <i>Amherst, October 24</i>	58
To Mary E. Hidden [AN], <i>Amherst, Dec. 8th</i>	59
To Mary E. Hidden [AN], <i>Amherst, Dec. 28</i>	61
To Captain Horace S. Taylor's relatives [AN, DA], <i>Amherst, Dec. 21st</i>	61
Diary entry in journal at Amherst [L&L], <i>December</i>	64
1870	
To Mr. Henry Albert Stimson [AC], <i>Amherst, Feb. 6th</i>	65
To Mary E. Hidden [AN], <i>Amherst, Feb. 18th</i>	70
To Mary E. Hidden [AN], <i>Amherst, Mar. 25th</i>	71
To Susan H. Hardy [L&L], <i>Amherst, April 5</i>	71
To Mary E. Hidden [AN], <i>Amherst, April 12th</i>	72
To Elizabeth T. Seelye [AC], <i>Hinsdale [Mass.], April 19th</i>	73
To Prof. & Mrs. Seelye [AC], <i>Hinsdale [Mass.], July, 25th</i>	75
To Mary E. Hidden [AN], <i>Hinsdale [Mass.], Sept. 9th</i>	77
To Elizabeth T. Seelye [AC], <i>Andover, Dec. 27th</i>	78
1871	

To Hamada Hikozi [DA?], [Andover], [April 11]	12
To Susan H. Hardy [L&L], <i>Andover</i> , May 18	13
To Mary E. Hidden [AN], <i>North Chatham</i> , July 31st	13
To Susan H. Hardy [L&L], <i>North Chatham</i> , August 8	14
To Mary E. Hidden [AN], <i>North Chatham</i> , Aug. 15th	17
To Susan H. Hardy [L&L], <i>North Chatham</i> , August 26	18
Diary entry while at Chatham [L&L], <i>Summer</i>	19
To Mary E. Hidden [AN], <i>Amherst</i> , Sept. 8th	20
To Susan H. Hardy [L&L], <i>Amherst</i> , September 23	21
To Orilla Flint [L&L], <i>Amherst</i> , October 30	22
To Susan H. Hardy [L&L], <i>Amherst</i> , November 16	23
To Mary E. Hidden [AN], <i>Amherst</i> , Nov. 22d	24
To Orilla Flint [L&L], <i>Amherst</i> , December 1	25
1868	
To Mary E. Hidden [AN], <i>Amherst</i> , Jan. 8th	26
To Susan H. Hardy [L&L], [Amherst], January 10	29
To Susan H. Hardy [L&L], [Amherst], February 14	29
To Susan H. Hardy [L&L], [Amherst], February 21	29
To Mary E. Hidden [AN], <i>Amherst</i> , Feb. 21st	30
To the Reverend James Ballagh, <i>Amherst</i> , March 13th	31
To Susan H. Hardy [L&L], [Amherst], March 28	32
To Susan H. Hardy [L&L], [Amherst], March 30	33
To Dr. Edward Hitchcock [AC], [Amherst], April 15th	33
[To Susan H. Hardy] [L&L], <i>Amherst</i> , April 27	33
To Mary E. Hidden [AN], <i>Amherst</i> , April 29th	34
To Mary E. Hidden [AN], <i>Amherst</i> , May 18th	36
[To Susan H. Hardy] [L&L], <i>Amherst</i> , June 15	37
To Professor Julius H. Seelye [AC], <i>Wolfboro</i> [N. H.], July 28th	37
To Susan H. Hardy [L&L], <i>Amherst</i> , August 22	39
To Mary E. Hidden [AN], <i>Amherst</i> , Sept. 9th	41
To Susan H. Hardy [L&L], [Amherst], September 19	42

日誌	179
遊奥記事	206
出遊記	228
〔第二回外遊記 (A)〕	317
〔第二回外遊記 (B)〕	325
漫遊記	336
漫遊記事	395
〔同志社大学設立募金日誌〕	415
漢詩	485
和歌	498
俳句	507
注 解	511
解 題	529

第6卷 英文書簡編

1864	
[To Fukushi Unokichi] [DA], [<i>Shanghai</i>], [<i>August 9</i>]	3
[To Fukushi Unokichi] [DA], [<i>Shanghai</i>], [<i>August 10</i>]	3
1865	
To Alpheus Hardy [L&L], [<i>Boston</i>], [<i>c. October 14</i>]	4
1866	
To Alpheus Hardy [L&L], <i>Andover, January 1</i>	4
To Alpheus Hardy [L&L], <i>Andover, January 20</i>	5
To Fukushi Unokichi [JD, L&L], <i>Andover, February 23</i>	5
To Susan H. Hardy [L&L], <i>North Chatham, April 9</i>	7
To Susan H. Hardy [L&L], <i>Andover, July 24</i>	8
To Mary E. Hidden [AN], <i>Chatham, 1st August</i>	8
To Susan H. Hardy [L&L], <i>Andover, September 10</i>	10
To Susan H. Hardy [L&L], <i>Andover, October 27</i>	11
To Susan H. Hardy [L&L], <i>Andover, December 25</i>	12
1867	

	[年次未詳] 一月十九日 広瀬又治	396
	[年次未詳] 三月十七日 金子常五郎	397
	[年次未詳] 十二月二十二日 鈴木清	398
	[年月日未詳] 根岸〔某〕	399
遺 言	遺言（明治二十三年一月二十一日午前五時半 同志社社員）	403
	遺言（明治二十三年一月二十一日 陸奥宗光、 広津友信、人見一太郎、大久保真次郎、横 井時雄、横田安止・古賀鶴次郎・浜田正 稲・波多野培根、富田鉄之助、新井毫） （明治二十三年一月二十二日午前五時十五 分・二十五分、二十三日午前三時五十分）	405
	遺言（広津友信、横田安止、古賀鶴次郎、浜 田正稲、波多野培根、諸教会牧師、宣教 師、アメリカン・ボード、デイヴィス、信 州・福島東北伝道など）	411
	個人宛遺言（明治二十三年一月二十一日 波 多野培根、原六郎、井上馨、北垣国道、渋 沢栄一、横田安止）	414
注 解	421
解 題	507

第5巻 日記・紀行編

[玉島兵庫紀行]	3
[函館紀行]	8
[航海日記]	25
[函館脱出之記]	69
箱桶よりの略記	72
記行	80
日抄	90

八月 鎌田助	369
九月十二日 山口通	369
九月十三日 松山高吉	371
九月二十六日 堀俊三	372
十月九日 堀俊三	373
十月十日 中村栄助	373
十月十三日 小崎弘道	374
十月二十五日 中村栄助	375
十一月一日 北垣国道	376
十一月二十五日 藤谷為寛	377
十一月二十六日 北垣国道	378
〔十一月〕 徳富猪一郎	378
十二月三日 中村栄助	379
十二月十日 〔中村栄助〕	380
〔十二月二十五日 新島公義〕	380
年月日未詳 安藤嘉左衛門	382
年月日未詳 〔新島公義〕	383
年月日未詳 新島公義	383
年月日未詳 〔某〕	384
年月日未詳 〔某〕	385
追 加	
明治十三年五月十七日 広瀬又治	386
明治十四年四月十三日 広瀬又治	387
明治十四年十一月十七日 土倉庄三郎	387
明治十六年九月十二日 杉田定一	389
明治十七年一月一日 広瀬又治	390
明治十八年九月三十日 山田良斎	390
明治二十一年二月二十二日 内藤兼備	391
〔明治二十一年〕 四月二十九日 金森通倫	392
明治二十一年十月十五日 加藤寿	394
明治二十二年〔十一月〕 広津友信	394
明治二十二年〔月日未詳〕 大久保真次郎	395

一月十日	北垣国道	330
一月十日	新島八重	332
一月十一日	原忠美	334
一月十三日	小谷野敬三	336
一月十五日	青柳〔新米〕	337
一月十五日	広津友信	339
一月十五日	河波荒次郎	342
一月十五日	木原勇三郎	343
一月十六日	渋沢栄一	344
一月十六日	横田安止	345
一月十七日	原忠美	349
一月十七日	新島八重	350
一月十七日	時岡憲吉	352
〔一月〕	新島八重	354
〔一月〕	広津友信	356
年次未詳	一月四日 中村栄助	358
	一月十六日 河原林義雄	359
	一月十九日 十字六四文	359
	一月二十四日 鎌田助	360
	二月二十五日 三輪振次郎	361
	三月七日 伴直之助	361
	三月二十七日 北垣国道	362
	五月十四日 北垣国道	362
	五月三十日 北垣国道	363
	六月三日 同志社寮長	364
	六月五日 い葉らき也	364
	六月二十一日 同志社寮長	365
	七月七日 竹内雄四郎	366
	七月十四日 徳富猪一郎	366
	七月十九日 北垣国道	367
	八月二十四日 三輪振次郎	368

十二月二十日 広津友信	275
十二月二十日 吉田賢輔	276
十二月二十二日 新島公義	277
〔十二月二十二日 新島公義〕	278
十二月二十三日 不破唯次郎・杉田潮・杉山重 義	279
十二月二十三日 白石村治	284
十二月二十四日 東正義	287
〔十二月〕二十四日 徳富猪一郎	289
十二月二十八日 広津友信	290
十二月二十八日 森信夫	297
〔十二月二十八日 新島公義〕	298
十二月三十日 松尾音次郎	299
十二月三十日 新島公義	300
十二月三十日 徳富猪一郎	303
十二月三十日 横田安止	305
月未詳十五日 〔永岡〕喜八	310
月日未詳 〔大久保真次郎〕	311
月日未詳 〔吉田賢輔〕	312
明治二十三（一八九〇）年 一月一日 半田平次郎	313
一月一日 河原林義雄	314
一月一日 新島公義	314
〔一月一日 新島八重〕	315
一月二日 杉山重義	316
一月三日 半田平次郎	318
一月三日 松本勘十郎	318
一月三日 新島八重	319
一月三日 吉田賢輔	321
〔一月四日〕 新島八重	322
一月六日 松尾音次郎	324
一月七日 広津友信	326

十一月十日 吉田賢輔	236
十一月十一日 徳富猪一郎	237
十一月十三日 沢沢栄一	238
十一月十六日 徳富猪一郎	239
〔十一月十六日〕 徳富猪一郎	240
十一月十九日 〔広津友信〕	241
十一月二十日 井上馨	242
十一月二十一日 新井毫	243
十一月二十三日 徳富猪一郎	244
十一月二十三日 横田安止	245
十一月二十五日 松方正義	247
〔十一月〕 二十五日 徳富猪一郎	248
十一月二十六日 徳富猪一郎	249
十一月二十七日 中山光五郎	251
十一月二十八日 徳富猪一郎	252
十一月 〔広津友信〕	254
〔十一月 広津友信〕	255
〔十一月 徳富猪一郎〕	256
十二月八日 新島八重	257
〔十二月九日 新島八重〕	257
十二月九日 徳富猪一郎	259
十二月九日 徳富猪一郎	260
十二月十日 新井毫	261
十二月十二日 徳富猪一郎	263
〔十二月十四日 広津友信〕	263
十二月十四日 新島公義	264
十二月十四日 新島八重	266
十二月十四日 時岡恵吉	268
〔十二月十六日 広津友信〕	271
十二月十六日 井上馨	272
十二月十六日 新島八重	273

九月十七日 田中賢道	206
九月十八日 北垣国道	207
九月二十六日 徳富猪一郎	208
九月二十六日 徳富猪一郎	208
九月二十七日 徳富猪一郎	209
〔九月〕 青年之光記者	210
十月四日 田中賢道	211
十月四日 徳富猪一郎	213
十月五日 中村栄助	215
〔十月五日〕 中村栄助	216
十月五日 田中賢道	216
十月六日 〔大沢善助〕	217
十月八日 徳富猪一郎	218
十月九日 山中百	218
十月十七日 徳富猪一郎	220
十月十七日 徳富猪一郎	220
十月十八日 大隈重信	221
十月十八日 徳富猪一郎	222
十月二十一日 広津友信	222
十月二十一日 徳富猪一郎	223
十月二十二日 大隈重信	224
十月二十四日 徳富猪一郎	225
〔十月〕 二十四日 徳富猪一郎	226
十月二十五日 横田安止	226
十月二十六日 伴直之助	228
十月二十六日 児島惟謙	228
十月三十一日 和田正幾	230
十月 下村孝太郎	231
十一月二日 古賀鶴次郎	232
十一月五日 徳富猪一郎	234
十一月九日 徳富猪一郎	234

七月八日 中村栄助	172
七月二十日 伴直之助	172
七月二十日 不破唯次郎	173
七月二十日 広津友信	174
七月二十日 井上馨	176
七月二十一日 徳富猪一郎	177
七月二十二日 〔佐竹篤〕	180
七月二十六日 中村栄助	181
七月二十七日 飯田勇紀	182
七月三十日 萩森長五郎	183
七月三十日 浜岡光哲	184
七月 〔大阪における有志家〕	185
八月二日 徳富猪一郎・湯浅治郎	186
〔八月四日 新島公義〕	187
八月十一日 湯浅治郎	188
八月十二日 徳富猪一郎	189
八月十四日 広瀬源三郎	190
八月十七日 木村鎮太	191
八月十八日 広津友信	192
八月二十二日 松尾音次郎	193
八月二十二日 大隈重信	195
八月二十三日 松尾音次郎	196
八月二十五日 滝口可成	197
八月二十五日 吉田清太郎	198
八月二十七日 徳富猪一郎	199
八月二十七日 徳富猪一郎	200
九月一日 伊勢時雄	201
九月十日 松尾音次郎	203
九月十四日 大島正健	204
九月十四日 徳富猪一郎	205
九月十六日 田中賢道	205

五月二十七日 大和博	140
五月三十日 北垣国道	141
六月一日 徳富猪一郎	141
〔六月一日〕 徳富猪一郎	144
六月二日 徳富猪一郎	146
〔六月二日 小崎弘道〕	147
六月四日 井上馨	148
〔六月七日〕 ハリス	150
六月七日 中村栄助	151
六月八日 小崎弘道	151
六月十二日 中村栄助	152
六月十四日 宮口二郎	153
六月十五日 小崎弘道	154
六月十八日 北垣国道	156
六月十八日 田中賢道	157
六月十九日 金森通倫・加藤勇次郎・浮田和民・ 奥田吉次郎・山路一三・福島綱雄・ 藤田愛二・坂田丈平・南熊夫・清水 泰次郎・志垣要三・森田久万人 …	158
六月二十二日 中山光五郎	160
六月二十四日 堀俊造	161
六月二十八日 徳富猪一郎	162
六月二十八日 徳富猪一郎	164
六月二十八日 内田政雄・垣見敬男・竹内甚吉	166
〔六月〕 金森通倫	167
七月一日 中村栄助	167
七月一日 徳富猪一郎	168
〔七月一日 新島公義〕	169
七月二日 徳富猪一郎	169
七月六日 北垣国道	171

四月二十六日	五十田勇治郎	105
四月二十七日	井上馨	106
四月二十九日	徳富猪一郎	108
四月三十日	北垣国道	109
四月三十日	中山光五郎	110
五月三日	松山高吉	111
五月四日	海老名弾正	111
五月五日	中村栄助	112
五月五日	中村栄助	113
五月五日	新島公義	114
五月五日	徳富久子	116
五月六日	中村栄助	117
[五月六日]	中村栄助	118
五月七日	徳富猪一郎	119
五月九日	徳富猪一郎・湯浅治郎	120
五月十日	川本政之助	121
五月十日	野田卯太郎・永江純一	122
五月十日	奥村新之丞	123
五月十日	浦木弘	124
五月十二日	徳富猪一郎	125
五月十二日	徳富猪一郎	127
五月十二日	[徳富猪一郎]	129
五月十三日	北垣国道	130
五月十四日	[同志社幹事]	131
五月十六日	児玉仲児	132
五月十七日	上野理一(大阪朝日新聞社)	133
五月二十二日	広津友信・花畑健起	135
五月二十三日	海老名弾正	136
[五月] 二十三日	広津友信・花畑健起	137
五月二十四日	北垣国道	138
五月二十五日	柴原宗助	139

三月一日	不破唯次郎	63
三月二日	山岡邦三郎	65
〔三月二日	新島公義〕	66
三月五日	徳富猪一郎	66
三月七日	中村栄助	69
三月九日	下村孝太郎	70
三月十一日	中山光五郎	72
三月十三日	海老名弾正	74
三月十三日	近藤喜則	75
三月十六日	目賀田護法	76
三月十九日	徳富猪一郎	76
三月二十日	石田貫之助・内藤利八・鹿島秀麿・ 善積順蔵	78
〔三月二十一日	原六郎〕	79
三月二十六日	加藤寿	81
三月三十日	徳富猪一郎	83
三月三十一日	海老名弾正	83
三月三十一日	中村栄助	85
四月一日	白石村治	86
〔四月二日	高松における大学賛成有志家〕	89
四月三日	川西光三郎	89
四月五日	海老名弾正	91
四月六日	兵庫県以西諸教会兄弟	93
〔四月初旬	福島における有志家〕	94
四月十二日	下村孝太郎	95
四月十五日	井上馨	96
四月十七日	岩崎〔某〕	100
四月二十日	新井毫	100
四月二十二日	不破唯次郎	102
四月二十二日	井上馨	103
四月二十六日	阿部充家	104

一月二十八日	伊勢時雄	26
一月二十九日	徳富猪一郎	27
一月二十九日	湯浅治郎・徳富猪一郎	29
[一月]	須田逸平	30
二月一日	頭山満	31
二月二日	永岡喜八	33
二月二日	中山光五郎	33
二月三日	風斗実・森信夫	36
二月三日	河波荒次郎	37
二月六日	北垣国道	39
二月六日	徳富猪一郎	40
二月九日	[同志社憲法発布] 祝会委員	41
二月九日	九鬼隆一	42
二月九日	徳富猪一郎	43
二月十一日	小田川全之	44
二月十二日	不叡唯次郎・杉田潮・杉山重義	45
二月十三日	徳富猪一郎	48
二月十四日	永岡喜八	50
二月十四日	大和博	51
二月十五日	広津友信	52
二月十五日	永岡喜八	53
二月十五日	[渋沢栄一]	53
二月十六日	井上馨	54
二月十九日	片桐清治	55
二月十九日	永岡喜八	57
二月二十日	永岡喜八	58
二月二十一日	小崎弘道・湯浅治郎・徳富猪一郎	59
二月二十一日	杉田潮・杉山重義	60
二月	安部井磐根	61
[二月]	新島公義	62

十二月十七日 馬場種太郎	718
十二月十七日 海老名弾正	722
十二月二十日 永岡喜八	724
十二月二十一日 徳富猪一郎	724
十二月二十八日 海老名弾正	725
十二月二十八日 小崎弘道	728
十二月 県会議員	731
〔未詳〕 堀貞一	733
注 解	735

第4巻 書簡編Ⅱ 一八八九～一八九〇年

明治二十二（一八八九）年 一月一日 福土成豊	3
一月一日 半田平次郎	4
一月一日 堀内徹	4
一月一日 井上馨	5
〔一月一日〕 徳富猪一郎	6
一月四日 松尾音次郎	6
一月五日 松山高吉	7
〔一月七日 新島公義〕	9
一月八日 伊勢時雄	9
一月十日 新島公義	10
一月十一日 神山（阿部）充家	12
一月十一日 野田卯太郎・永江純	13
一月十五日 中山光五郎	15
一月十七日 〔浜岡光哲〕	16
一月十七日 北垣国道	17
一月十八日 陸奥宗光	18
一月十九日 明石教会	20
一月十九日 福岡教会	20
一月二十三日 加藤勝弥	23
一月二十六日 小崎弘道	25

十一月〔十九日〕 勝安芳	679
十一月十九日 松山高吉・大沢善助	680
十一月二十二日 大隈重信	681
十一月二十二日 徳富猪一郎	682
十一月二十二日 徳富猪一郎	683
十一月二十三日 宮川経輝・海老名弾正・小崎 弘道・伊勢時雄・金森通倫・ 湯浅治郎	684
十一月二十四日 徳富猪一郎	687
十一月二十六日 海老名弾正・伊勢時雄	689
十一月二十七日 新井毫	689
十一月二十七日 徳富猪一郎	691
十一月三十日 立川達吉	691
十一月〔有志者〕	692
十一月〔有志者〕	694
〔十一月下旬 松平正直〕	695
十二月一日 諸教会牧師・代議員	696
十二月 同志社・彦根・長浜諸教会牧師、代議 人并教会員	699
十二月二日 大島正健	700
十二月三日 押川方義	703
十二月五日 加藤勝弥	706
十二月五日 徳富猪一郎	707
十二月六日 徳富猪一郎	709
十二月七日 後藤源九郎	712
十二月七日 徳富猪一郎	713
十二月八日 徳富猪一郎	714
十二月十日 徳富猪一郎	715
十二月十三日 立石岐・河本茂四郎	716
十二月十四日 永岡喜八	717
十二月十五日 永岡喜八	718

十月一日	新井毫	641
十月一日	徳富猪一郎	642
十月五日	徳富猪一郎	643
十月六日	井上馨	645
十月七日	徳富猪一郎	645
十月十三日	徳富猪一郎	646
〔十月十三日	徳富猪一郎〕	647
十月十五日	大隈重信	650
十月十六日	井上馨	651
十月十九日	徳富猪一郎	652
十月二十日	加藤勝弥	653
十月二十日	奈須義質	654
十月二十一日	大隈重信	657
十月二十二日	不波唯次郎・杉田潮・杉山重 義・奈須義質・大谷執事	658
十月二十四日	徳富猪一郎	661
十月二十九日	新島公義	661
十月三十日	阿部政恒	663
十月三十日	新島公義	664
〔十月	新島公義〕	665
十一月一日	波多野培根	667
十一月三日	阿部政恒	668
十一月五日	徳富猪一郎	669
十一月六日	小崎弘道	670
十一月七日	須田明忠	671
十一月十日	小崎弘道・竹越与三郎	672
十一月十一日	織田純一郎	673
十一月十二日	井深掘之助	674
十一月十四日	阿部政恒	677
十一月十五日	堀貞一	678
十一月十六日	徳富猪一郎	678

〔七月二十一日 新島公義〕	606
七月二十四日 湯浅治郎	606
七月三十日 徳富猪一郎	607
八月一日 新井乙瓢	609
八月一日 永岡喜八	609
八月三日 松本勘十郎	610
八月四日 杉田潮	611
八月七日 新井毫	613
八月七日 新井乙瓢	614
八月九日 徳富猪一郎	616
八月九日 徳富猪一郎	616
八月十一日 下村孝太郎	619
八月十二日 新井乙瓢	623
八月十六日 中村栄助	623
八月二十日 広津友信	625
八月二十一日 新井乙瓢	626
八月二十二日 土倉庄三郎	627
九月一日 小崎弘道	628
〔九月四日 本城安太郎〕	629
九月五日 内村竹	632
九月八日 森田久万人	632
〔九月八日 新島公義〕	633
九月八日 徳富猪一郎	634
〔九月十六日 新島公義〕	635
〔九月二十日 新島公義〕	635
九月二十二日 徳富猪一郎	636
九月二十四日 上原春朔	637
九月二十五日 新島公義	638
九月二十七日 新井毫	639
九月二十八日 徳富猪一郎	640
〔九月 徳富猪一郎〕	641

五月十三日 新島公義	571
五月十三日 徳富猪一郎	573
〔五月〕十四日 徳富猪一郎	575
五月十六日 徳富猪一郎	575
五月十七日 土倉庄三郎	576
五月十九日 徳富猪一郎	577
五月二十一日 中村栄助	578
五月二十一日 徳富猪一郎	580
五月二十五日 徳富猪一郎	582
五月二十八日 北垣国道	583
五月二十八日 徳富猪一郎	584
〔五月三十一日 新島八重〕	585
〔五月末 新島八重〕	587
六月一日 徳富猪一郎	587
六月三日 徳富猪一郎	588
六月四日 同志社五年生	589
六月五日 徳富猪一郎	590
六月十五日 中村栄助	591
六月十五日 上原権太郎	593
六月二十二日 添川鉉之助	594
六月二十四日 添川鉉之助	595
六月二十五日 小谷野敬三	595
六月二十五日 永岡喜八	598
六月二十六日 中村栄助	599
〔六月二十六日 新島公義〕	599
六月二十九日 井上馨	600
六月三十日 徳富猪一郎	601
七月三日 中村栄助	602
七月十日 大隈重信	602
七月十日 大隈重信	604
七月十日 徳富猪一郎	605

三月二十三日	〔辻信二郎〕	541
三月二十五日	北垣国道	542
三月二十五日	徳富猪一郎	543
三月二十六日	徳富猪一郎	544
三月二十七日	海老名弾正	545
三月二十七日	北垣国道	546
三月二十九日	徳富猪一郎	547
三月三十日	田宮勇	548
〔四月三日	京都府下有志者〕	549
四月四日	中村栄助	550
四月五日	新島公義	550
四月八日	明治専門学校京都部有志者	551
〔四月八日	新島公義〕	554
四月十一日	坂田丈平・浮田和民・藤田愛二・ 金森通倫・森田久万人・加藤勇次 郎・清水泰二郎	554
四月十三日	阿部政恒	555
四月十四日	雨森菊太郎	556
四月十七日	加藤勝弥	557
四月十七日	中村栄助	558
四月十七日	徳富猪一郎	558
四月十八日	中村栄助	559
四月二十五日	中村栄助	559
四月二十九日	中村栄助	561
〔四月二十九日	新島公義〕	562
五月三日	井上馨	563
五月八日	土倉庄三郎	564
五月八日	徳富猪一郎	566
五月十日	徳富猪一郎	567
五月十一日	土倉庄三郎	568
五月十一日	中村栄助	570

一月六日	半田平次郎	509
一月六日	徳富猪一郎	509
一月九日	湯浅治郎	510
一月十一日	河原林義雄	511
一月十一日	新島公義	512
一月十七日	中村栄助	513
一月十七日	新島公義	514
一月二十二日	同志社五年生	515
一月二十三日	中村栄助	515
一月二十七日	中村栄助	516
一月二十八日	小崎弘道	517
二月二日	中村栄助	519
二月三日	新島公義	519
二月十日	中村栄助	521
二月十九日	森田久万人・加藤勇次郎	522
二月二十五日	中村栄助	522
二月	組合会両会聯合相談委員	523
三月一日	新島公義	529
三月一日	徳富猪一郎	530
三月四日	徳富猪一郎	531
三月七日	徳富猪一郎	533
三月十日	中村栄助	534
三月十二日	湯浅治郎	534
三月十三日	中村栄助	535
三月十六日	和田健三	536
三月十七日	田宮勇	537
三月二十日	中村栄助	537
三月二十一日	中村栄助	538
三月二十三日	中井三郎兵衛	538
三月二十三日	中村栄助	539
三月二十三日	竹村藤兵衛	540

〔八月 中村栄助〕	477
九月十九日 片桐清治	478
〔九月二十五日 新島公義〕	480
〔十月二日 新島公義〕	480
十月六日 中村栄助	481
十月七日 福士成豊	481
十月八日 中村栄助	483
〔十月上旬 大島正健〕	484
十月二十一日 中村栄助	485
十月二十九日 中村栄助	486
十一月六日 徳富猪一郎	486
十一月九日 中村栄助	489
十一月十二日 中村栄助	489
〔十一月十八日 新島公義〕	490
十一月二十日 中村栄助	490
十一月二十一日 福士成豊	491
十一月二十一日 橘 仁	492
十一月二十二日 徳富猪一郎	493
十一月二十五日 徳富猪一郎	495
十一月 大志万重晷	496
十二月五日 中村栄助	496
十二月六日 大江頼之助	497
十二月七日 中村栄助	498
十二月九日 小崎弘道	499
十二月十日 小崎弘道・湯浅治郎	502
十二月十二日 大江頼之助	503
十二月十七日 湯浅初子	503
十二月三十一日 増野悦興	505
〔月末詳〕十八日〔同志社生徒〕	506
明治二十一（一八八八）年 一月三日 福士成豊	507
〔一月六日 新島公義〕	508

二月十六日 新島公義	446
二月二十一日 新島公義	447
二月二十五日 北垣国道	448
二月二十五日 徳富猪一郎	449
三月一日 中村栄助	450
三月二日 新島公義	451
三月十四日 湯浅治郎・初子	452
三月十五日 伴直之助	453
〔三月十六日 中村栄助〕	454
三月十九日 新島公義	455
三月二十八日 亀山昇	456
〔四月一日 新島公義〕	457
四月十四日 中村栄助	458
五月九日 福士成豊	459
五月十日 福士成豊	460
五月二十八日 新島公義	461
五月二十九日 大久保真二郎	462
〔五月三十一日 新島公義〕	464
六月六日 中村栄助	464
〔六月十二日 新島公義〕	465
六月十二日 鈴木彦馬	466
六月十六日 鈴木彦馬	466
六月十九日 同志社五年卒業生	467
〔六月二十日 新島公義〕	469
六月二十四日 土倉庄三郎	470
〔七月八日 新島公義〕	472
七月九日 鈴木彦馬	472
七月十一日 〔宮川経輝〕	473
七月十二日 金森通倫	474
八月二十四日 鈴木彦馬	476
八月二十四日 柳内義之進	476

七月十六日	新島公義	415
八月十日	徳富猪一郎	417
八月十八日	中村栄助	418
八月三十一日	北垣国道	419
九月二日	小崎弘道	420
九月三十日	中村栄助	421
十月四日	宮口二郎・半田平次郎・上原春朔	422
十月十二日	同志社五年生	423
十月十七日	古沢滋	424
十月二十六日	北垣国道	425
十月二十九日	堀貞一	426
[十月]	中村栄助	427
十一月十五日	山田良斎	428
十一月十八日	中村栄助	429
十二月一日	堀貞一	430
十二月七日	徳富猪一郎	430
十二月十三日	中村栄助	431
十二月二十日	徳富猪一郎	432
[未詳 北垣国道]		433
明治二十(一八八七)年	一月一日 河原林義雄	435
	一月十日 中村栄助	436
	一月十二日 湯浅もよ	437
	一月十四日 井深梶之助	438
	一月二十四日 半田平次郎	439
	一月二十五日 新島公義	440
	[一月二十七日 新島公義]	441
	[一月 不破唯次郎]	441
	二月二日 徳富猪一郎	442
	二月四日 河原林義雄	443
	二月六日 中村栄助	444
	二月九日 増野悦興	444

一月二十六日 中村栄助	383
〔一月 半田宇平次〕	384
二月四日 北垣国道	384
二月九日 小崎弘道	385
二月九日 松山高吉・小崎弘道・湯浅治郎	386
二月十二日 松山高吉・小崎弘道・湯浅治郎	388
二月十六日 中村栄助	390
二月二十日 新島公義	390
二月二十三日 小崎弘道	392
二月二十五日 中村栄助	393
三月三日 半田平次郎	394
三月八日 川本政之助	396
三月九日 小崎弘道	397
三月九日 新島公義	399
三月二十八日 土倉庄三郎	400
四月二日 松山高吉	401
四月十六日 川本泰年・鎌田助	402
四月二十七日 浜岡光哲	403
四月二十七日 金森通倫	404
四月二十七日 北垣国道	405
四月二十九日 柁川武一・松山まつの	406
五月五日 新島公義	407
五月八日 浮田和民	408
〔五月十四日 増野悦興〕	409
六月十二日 村上太五平	409
六月二十三日 北垣国道	410
六月二十九日 下村孝太郎	411
七月三日 川本泰年	412
七月三日 北垣国道	413
七月四日 北垣国道	413
七月八日 川本泰年	414

	[五月十一日 新島八重]	345
	五月三十日 蔵原惟郭	347
	七月三日 蔵原惟郭	349
	七月四日 新島民治	351
	七月十四日 蔵原惟郭	352
	[七月十七日 新島八重]	352
	七月二十七日 蔵原惟郭	353
	[八月九日 新島八重]	355
	[八月九日 新島八重]	356
	[八月十九日 新島八重]	358
	八月二十五日 蔵原惟郭	359
	九月二十九日 蔵原惟郭	361
	十月九日 蔵原惟郭	362
	[十月九日 蔵原惟郭]	364
	十月十七日 小崎弘道	365
	十月二十二日 小崎弘道	366
	十一月二日 小崎弘道・松山高吉	368
	十二月十四日 中村正直	370
	十二月二十日 徳富猪一郎	371
	十二月二十三日 半田宇平次	372
	十二月二十六日 川本政之助	373
	十二月三十日 田中源太郎	374
明治十九(一八八六)年	一月一日 河原林義雄	375
	一月十一日 松本勘十郎	376
	一月十二日 安中教会兄姉	377
	一月十二日 半田宇平次	378
	一月十八日 松山高吉・湯浅治郎・小崎弘道・ 海老名弾正	379
	一月十八日 中村栄助	380
	[一月十九日 中村栄助]	381
	一月二十六日 市原盛宏	381

六月十五日	新島八重	285	
六月二十七日	同志社普通・神学兩課卒業生	286	
六月三十日	新島八重	290	
七月十三日	伊勢時雄・松山高吉	292	
七月二十七日	新島八重	294	
八月十三日	〔新島民治・公義〕	296	
八月十六日	新島八重	298	
〔八月二十五日〕	新島八重	300	
十月三十一日	新島八重	303	
十一月二十二日	新島八重	306	
十一月二十三日	中村栄助	307	
十二月十六日	市原盛宏・森田久万人・下村孝太郎	309	
十二月十六日	小崎弘道	312	
十二月十六日	松山高吉・小崎弘道	315	
十二月十八日	〔小崎弘道・松山高吉〕	318	
十二月十八日	小崎弘道・松山高吉	319	
十二月二十一日	新島八重	320	
〔十二月二十二日	新島八重〕	322	
十二月三十日	新島八重	323	
〔十二月	上原とも〕	324	
明治十八（一八八五）年	〔一月十二日	新島八重〕	326
	〔一月二十二日	新島八重〕	327
	二月一日	新島八重	328
	〔二月九日	新島八重〕	330
	二月二十日	蔵原惟郭	330
	三月二日	新島民治	331
	三月二日	〔新島八重〕	332
	三月九日	小崎弘道	334
	三月十八日	小崎弘道	338
	〔四月三日	新島八重〕	343
	四月四日	日本基督教大親睦会諸愛兄等	343

六月九日	長田時行	239
六月十一日	富田鉄之助	240
七月二十日	田中源太郎	240
七月二十四日	中村栄助	242
八月二十八日	山岡尹方	242
九月二十八日	井深梶之助	243
十月一日	田中源太郎	245
十月四日	田中源太郎	246
十月五日	徳富猪一郎	247
十月十六日	三輪振次郎	248
十月十六日	中村栄助	249
十月二十三日	福井信徒	250
十二月二十日	中村栄助	252
十二月三十一日	板垣退助	252
明治十七（一八八四）年	一月二十日 柏木義円	256
	一月二十三日 河原林義雄	257
	一月二十八日 中村栄助	258
	二月二十六日 中村栄助	258
	二月二十七日 土倉庄三郎	259
	三月七日 井深梶之助	260
	三月十二日 森本介石	262
	三月二十二日 陸奥宗光	263
	三月三十一日 中村栄助	264
	四月一日 北垣国道	265
	四月〔七・八日〕新島八重	266
	四月八日 新島公義	269
	四月十四日 新島八重	270
	四月二十日 新島八重	272
	四月二十八日 新島八重	275
	五月九日 新島民治・とみ・八重・公義	278
	六月六日 新島民治・とみ・八重・公義	281

	七月十一日	山岡尹方	205
	七月二十日	小崎成章・亀山昇	206
	七月二十日	中川壯・田中次郎・鈴木勉・山岡尹 方・本田勝二郎・山本清	208
	七月二十六日	川本政之助	209
	七月二十九日	下村孝太郎・坂井楨甫	210
	八月二十八日	徳富猪一郎	211
	九月十七日	徳富猪一郎	212
	十月五日	下村孝太郎	213
	十月十一日	川本政之助	214
	十月二十一日	山岡尹方	215
明治十五（一八八二）年	一月十九日	徳富猪一郎	216
	三月六日	蔵原惟郭	218
	五月二十日	三輪振次郎	219
	六月二十九日	中村栄助	220
	七月二十三日	堀金太郎	221
	七月二十八日	徳富猪一郎	222
	八月七日	小崎弘道	224
	九月二十八日	土倉庄三郎	225
	十月十八日	北垣国道	226
	十月二十五日	長田時行	227
	〔未詳〕	福井信徒	228
明治十六（一八八三）年	一月十日	徳富猪一郎	230
	三月二十四日	同志社一年生	231
	四月八日	中村栄助	231
	四月二十八日	志賀覚兵衛	232
	五月十七日	富田鉄之助	233
	五月十八日	中村正直	234
	五月二十一日	西京三教会	235
	五月二十五日	広瀬熊二	238
	五月三十日	中村栄助	239

	三月六日	千木良昌達	161
	三月十五日	中村正直	163
	四月十九日	内田澍	164
	五月二十三日	須田明忠	166
	〔七月〕	雜報社	166
明治十三（一八八〇）年	一月五日	小崎弘道	168
	二月二十五日	新島八重	169
	二月二十五日	小崎弘道	173
	三月二十一日	徳富猪一郎	175
	四月十二日	徳富猪一郎	176
	〔四月〕十六日	徳富猪一郎	177
	六月十二日	小崎弘道	178
	六月二十九日	徳富猪一郎・河辺鍋太郎	180
	七月二十一日	徳富猪一郎	182
	八月十日	徳富猪一郎	184
	九月一日	川本政之助	184
	九月二十一日	徳富猪一郎	185
明治十四（一八八一）年	一月四日	徳富初子	188
	一月四日	徳富猪一郎	189
	二月七日	蔵原惟郭	190
	二月七日	大阪教会諸愛兄姉	192
	三月七日	海老名喜三郎	193
	三月十二日	〔牧師・伝道師〕	194
	三月	〔速成神学科志願者〕	196
	四月七日	小崎弘道	197
	四月三十日	川本政之助	198
	六月十六日	堀金太郎	199
	〔六月〕	小崎弘道	199
	七月八日	小崎弘道	202
	七月十一日	鎌田助	203
	〔七月十一日〕	川本政之助	204

明治七（一八七四）年	一月十一日	新島民治	119
	十二月九日	高木玄真・大阪公会會員	121
	〔十二月〕	新島民治	122
明治八（一八七五）年	一月一日	新島民治	123
	一月六日	千木良昌庵	124
	一月九日	新島民治	125
	一月十一日	千木良昌庵	126
	三月七日	新島民治	129
	三月三十日	新島民治	131
	三月三十日	千木良昌庵	132
	四月四日	新島民治	133
	四月六日	〔新島民治〕	134
	五月五日	新島民治	135
	六月八日	新島民治	136
	六月三十日	新島民治	138
	七月二十一日	新島民治	139
	九月二日	高木玄真	140
	九月十五日	新島公義	141
明治九（一八七六）年	三月一日	山県昌隆	143
	五月一日	山県昌隆	144
	十二月十一日	中村正直	145
明治十（一八七七）年	六月九日	湯浅治郎	147
	六月十九日	湯浅治郎	148
	九月二十二日	根岸松齡	149
明治十一（一八七八）年	二月五日	新島公義	151
	〔二月二十八日〕	寺島宗則	152
	五月十日	広瀬又次	154
	〔八月〕	雜報社	155
	十一月二日	森有礼	156
	十二月二十三日	千木良昌庵	158
明治十二（一八七九）年	二月十日	安中教会・和田正幾	160

	二月二十八日 新島民治	30
慶応三（一八六七）年	三月二十九日 新島民治	31
	〔四月十一日〕 新島民治	39
	十二月二十四日 新島双六	39
	十二月二十四日 新島とみ	42
	十二月二十五日 新島民治	47
	十二月二十五日 飯田逸之助	51
慶応四（一八六八）年	三月十二日 新島民治	55
	〔九月一日〕 新島民治	59
	九月一日 新島民治	63
明治二（一八六九）年	五月十日 新島民治	68
	六月十五日 新島双六	74
	六月十六日 新島民治	75
	十二月二十五日 速水とき・新島みよ	78
明治三（一八七〇）年	四月二十二日 新島双六	80
明治四（一八七一）年	二月十一日 飯田逸之助	83
	二月十一日 新島双六	84
	二月二十五日 飯田逸之助	87
	九月五日 新島民治	90
明治五（一八七二）年	〔三月〕 吉田賢輔・尺振八	97
	四月一日 新島民治	98
	四月四日 新島民治	99
	四月七日 新島民治	100
	五月三日 新島民治	102
	五月三日 木戸孝允	104
	六月二十一日 新島民治	105
	九月二十九日 新島民治	106
明治六（一八七三）年	一月二十六日 新島民治	109
	三月十八日 新島民治	112
	八月三日 新島民治	115
	十一月二十三日 新島民治	116

〔一致・組合両教会合併問題に関する稿（十二）〕	519
〔一致・組合両教会合併問題に関する稿（十三）〕	521
〔一致・組合両教会合併問題に関する稿（十四）〕	525
〔一致・組合両教会合併問題に関する稿（十五）〕	527
〔一致・組合両教会合併問題に関する稿（十六）〕	530
〔一致・組合両教会合併問題に関する稿（十七）〕	532
〔一致・組合両教会合併問題に関する稿（十八）〕	534
〔日本基督教会憲法並細則附録（明治二十一年五月）〕	536
第二公会録事	559
公会記〔明治九年十一月～明治十一年十月〕	587
同志社教会仮牧師辞表	601
ホプキンス『脩身学』	605
注 解	645
解 題	661

第3巻 書簡編Ⅰ 一八五二～一八八八年

嘉永五（一八五二）年 十月六日 尾崎直紀	3
安政五（一八五八）年 七月上旬 尾崎直紀	4
〔未詳 某〕	5
文久二（一八六二）年 十二月五日 新島民治	7
元治元（一八六四）年 三月十一日 菅沼錠次郎	9
三月十一日〔某〕	10
四月二十五日 新島民治	11
四月二十五日 飯田逸之助	13
五月〔二十四日〕ニコライ	16
五月二十五日 新島民治	17
六月十四日 新島民治	19
〔未詳〕新島民治	20
慶応元（一八六五）年 〔未詳 新島双六〕	21
〔未詳〕新島双六	24
慶応二（一八六六）年 〔二月二十一日〕新島民治	27

〔信仰〕	452
〔信ト不信（A）〕	453
〔信ト不信（B）〕	454
〔神ノ愛〕	455
〔愛〕	457
愛ノ力	460
〔キリストノ愛（A）〕	463
〔キリストノ愛（B）〕	465
〔神ノ国ト其義ヲ求メヨ〕	466
〔罪ノ病〕	468
〔罪之市〕	471
〔安息日〕	473
〔使徒伝道者ノ資格〕	475
〔信者ノ義務〕	478
〔キリスト教ト文明〕	480
馬太伝	481
〔マタイ伝要目〕	486
〔聖書引用箇所控〕	489
〔エソウ・ヨセフノ生涯〕	491
〔山崎為徳略歴ト告別説教稿〕	494
〔一致・組合両教会合併問題に関する稿（一）〕	499
〔一致・組合両教会合併問題に関する稿（二）〕	502
〔一致・組合両教会合併問題に関する稿（三）〕	503
〔一致・組合両教会合併問題に関する稿（四）〕	504
〔一致・組合両教会合併問題に関する稿（五）〕	505
〔一致・組合両教会合併問題に関する稿（六）〕	506
〔一致・組合両教会合併問題に関する稿（七）〕	507
〔一致・組合両教会合併問題に関する稿（八）〕	512
〔一致・組合両教会合併問題に関する稿（九）〕	514
〔一致・組合両教会合併問題に関する稿（十）〕	516
〔一致・組合両教会合併問題に関する稿（十一）〕	517

〔キリスト真理ノ証ヲ為シ真理ノ国ヲ世ニ起セリ〕	324
〔キリストノ目的〕	328
十字架之上臍	336
〔伝道〕	341
〔人間ノ惡〕	345
〔真理ノ敵トナル勿レ〕	347
〔真ノ勇氣〕	351
三日間之大現象	356
病人ト医者	362
〔キリスト教ノ感化力〕	365
愛神愛人	368
安息日学校開業式ノ演説	377
靈ノ學問ナカルベカラス	385
〔靈魂ノ病〕	390
栗津教会ト小崎氏教会ノ合併式ノトキ教会員ヘノ勸メ	393
基督教皇張論	396
〔ハーディ氏ノ生涯ト人物〕	408
夏期学校に対する感情	419
安息日ト文明国ノ關係ノ論	421
道德論	427
〔宗教運動史〕	429
十字架ノ意	435
〔キリストノ十字架〕	436
〔キリストノ目的〕	438
神ノ榮ニ誇ル	438
〔新生〕	440
真〔A〕	441
真〔B〕	445
〔真理〕	447
〔真理ノ証〕	449
真理之囚人	451

衣服ヲ売リテ刀ヲ買ウベシ	167
〔目ヲ挙ゲテ見ヨ〕	173
〔愛トハ何ゾヤ〕	178
時ノ休徵ヲ知レ	181
〔信仰〕	188
真ノ力	192
御国ヲ来ラセ賜ヘ	195
爾寛我	201
我已勝世矣	209
〔無クテナラヌモノアリ〕	215
モーセノ一生涯〔A〕	220
〔モーセノ一生涯(B)〕	224
祈ヲ聞キ賜フ神ヨ、人々挙ゲテ来ラン	232
吾信ズ、我が不信ヲ助ケ賜ヘ	238
天父基督ヲ十字架ニ添テ世ニ賜ヘリ	243
〔伊勢峰告別説教〕	252
ナイン少年ノ復活	255
〔沢山保羅ノ告別式ニ臨ミテ〕	261
カインとアベル	267
〔ダニエルノ夢判断〕	275
神ノ実験話シ	281
〔罪トハ何カ〕	284
〔天国ハ芥子ノ種ノ如シ〕	288
上帝論	291
暫時休ムベシ	297
〔康強ナル者ハ医者ノ助ケヲ求メズ〕	301
〔神ニ従順ナレ〕	307
〔ヨハネ伝第三章十六節ノ句ニツイテ〕	309
〔伝道〕	310
盲視ル事ヲ得	315
〔我若シ地ヨリ挙ラレナバ万民ヲ引キ我ニ来ラセン〕	320

第2巻 宗教編

信する心の遅き愚なる者よ	3
安息日之説	7
〔晩餐ヲ守ルコト〕	10
初メハ大切、ヨリ終リガ大切	15
御意ノ天ニ成ル如ク地ニモ成ランメヨ	23
〔死ニ赴クハ安シ、心ノ戦ニ勝ツハ難シ〕	27
〔キリストノ御心ヲ察セヨ〕	29
十人ノ娘、用意ニ怠ル勿レ	32
信仰	36
〔肉ニ播ケバ肉、霊ニ播ケバ霊〕	39
義人之祈	44
〔人ヲ漁スルノ主意〕	50
〔真正ノ快樂〕	57
改新の説	60
ヤコブの一生	67
朋友之交義ハ天国ノ写真	78
〔真友ノ交リ〕	85
競走者	90
天国の鍵	96
〔基督弟子ノ足ヲ洗ヒ賜フ事〕	107
〔真理ノ証シ〕	112
古キ人新シキ人	119
悔改	122
宗教ハ万民ノ望ム所也	128
伝道	133
道理ト信仰ノ関係〔A〕	139
道理ト信仰ノ関係〔B〕	145
此ノ人ヲ見ヨ〔A〕	151
此ノ人ヲ見ヨ〔B〕	160
〔基督教ハ独一眞神ノ教ナリ〕	163

蟻之説	400
地方教育論	408
〔ノルマントン号事件について〕	410
〔教育論〕	415
〔梅花女学校ニ於ケル女子教育〕	419
〔南山義塾ニ望ム〕	423
学者解	425
〔理ニ叶フガ学者ノ目的〕	428
愛人論	429
愛国ノ主意	436
道心ノ発達	439
〔武夫〕	442
〔弱者ニツイテ〕	444
〔平民主義〕	447
条約改正ヲ促スノ策	450
〔我輩ハ敢テ政府ニ抗スルモノニアラズ〕	454
我如何ニ此ノ活動社会ニ処スベキヤ	455
『宗教要論』序	457
『将来之日本』序	459
『ジョージ・ミューラー氏説教集』序文	461
J. D. デイヴィス著『基督教之基本』序文	463
独乙国ノ公学校学則 第一	467
独乙国公学校ノ規則 第二編	490
独乙国公学校ノ規則 第三編	508
普魯士ノ公学校（小中共）の規則	538
ノールウェー国の学校	559
デネマルカ国、スウェーデン及ノルウェー	570
大ブリタン寺院ノリポルト	592
公学校生徒の規配	608
注 解	611
解 題	623

医学校規定	102
〔同志社創立十周年記念演説〕	105
〔看病婦学校設立の目的〕	110
〔看病婦学校設立の精神〕	115
同志社予備校設立之主意	121
私立大学ヲ設立スルノ旨意、京都府民ニ告グ	123
同志社大学設立の旨意	130
〔同志社大学設立募金演説稿〕	142
〔同志社大学の設立について〕	145
〔同志社大学設立資金募集に付〕	148
大学設立主旨	151
〔大学設立の必要〕	154
〔女学校卒業生への勧め〕	156
同志社英学校記事〔明治八年八月～十六年十二月〕	161
同志社英学校沿革〔明治八年八月二十三日～十七年一月〕	166
同志社大学創立記事〔明治十六年一月～十七年一月〕	175
同志社大学記事〔明治十四年～二十一年〕	185
同志社記事「社務第十八号」〔明治八年八月～二十一年五月〕	232
同志社記事〔明治八年十一月～十六年二月〕	302
同志社女学校録事〔明治十六年二月～十七年九月〕	333
感覚理説	339
脩身学問題	341
〔文明ノ基〕	345
学問之説	349
人種改良論	355
〔人種改良〕	365
隠君子ノ出顕	371
〔隠君子顕世〕	379
文明ヲ組成スルノ四大元素	387
文明ノ元素	389
勇気ノ説	393

出典資料索引

*刊行物発行年の略称は次の通り、M—明治、T—大正、S—昭和。

A 新島襄全集各巻目次

第1巻 教育編

私塾開業願	3
〔私学校開業、外国人教師雇入につき許可願〕	6
〔同志社経営に関して政府への弁明〕	9
〔同志社女学校〕 広告	11
〔デイヴィスの講義に関して府知事への弁明〕	13
〔修身学会読に付き〕 御届	15
〔邦語速成神学科開設関係 四篇〕	16
神学専門科設置御願	21
〔女学校〕 十五年卒業生へノ談シ	22
同志社大学設立之主意之骨案	24
同志社学校設立ノ由来	33
同志社大学設立之主意	36
同志社大学設立ヲ要スル主意	44
〔同志社大学設立の旨趣〕	52
同志社大学校設立旨趣	66
同志社設立の始末	72
〔徴兵適齡及徴兵免除者数調〕	76
〔改正徴兵令ニ関スル〕 請願ノ要旨	81
〔改正徴兵令ニ対スル意見書(A)〕	82
〔改正徴兵令ニ対スル意見書(B)〕	85
〔改正徴兵令ニ対スル意見書(C)〕	88
同志社英学校設立始末	90
明治専門学校設立旨趣	95

〔結婚〕植村鏡之進（佐竹藩）嘉永6年、同年死別？

佐藤種五郎（碓氷郡鷺ノ宮）明治6年～

みよ 天保9年4月28日～明治12年10月23日 42歳

新島の第三姉

〔受洗〕明治9年12月3日 京都第二教会

とき 天保11年6月16日～明治38年11月19日 60歳

新島の第四姉

〔結婚〕速水林次（忠雄）文久1年～

〔移転〕明治11年4月京都へ

〔受洗〕明治14年1月2日 M. L. Gordon より 京都第二教会

襄 天保14年1月14日～明治23年1月23日 47歳

〔通称〕七五三太 〔諱〕敬幹 〔字〕礼卿 〔号〕平涯・梶年

〔受洗〕1866（慶応2）年12月30日 Andover, Mass., U. S. A.

〔按手礼〕1874（明治7）年9月24日 Mount Vernon Church,
Boston, Mass., U. S. A.

八重 弘化2年11月3日～昭和7年6月14日 88歳

山本覚馬（会津藩士）の妹。明治9年1月 新島襄と結婚

〔受洗〕明治9年1月2日 J. D. Davis 邸で受洗 京都第二教会

雙六 弘化4年12月14日～明治4年2月7日 25歳

新島の弟 明治3年12月15日 家督相続（現米九石）

〔諱〕公錫 〔字〕文虎・哲

公義 文久1年10月24日～大正13年5月18日 63歳

植栗義達（の二男、明治4年2月新島雙六の養子となる

〔幼名〕炭三・棗弥

〔受洗〕明治13年1月4日 京都第二教会

新島家の人々

弁治 天明6年12月25日～明治3年7月14日 85歳

文化11年? 中島→新島に改姓

中島忠七・るいの長男 〔先妻〕のぶ 〔後妻〕ます

〔通称〕長意・秀八／弁治 〔諱〕公忠・敬忠 〔号〕曲江

安中藩 徒小姓 〔墓〕安中妙光院

のぶ ～文政1年7月30日

弁治の先妻・民治の実母 〔墓〕安中妙光院

ます ～嘉永4年12月19日 70歳

弁治の後妻・七五三太の記憶にある祖母

民治 文化4年2月14日～明治20年1月30日 81歳

弁治・のぶの子 〔妻〕とみ

〔通称〕金吉・弁喜／民治 〔諱〕敬徳・公勤 〔号〕是水

安中藩 中小姓・祐筆 山本流書道師範

〔受洗〕明治10年3月4日 京都第二教会

とみ 文化4年10月10日～明治29年1月7日 90歳

武州浦和中町 中田六之丞の女、天保2年2月20日結婚、二男四女を挙げる

〔受洗〕明治14年5月1日 M. L. Gordon より 京都第二教会

くわ 天保2年11月18日～万延1年7月11日 30歳

新島の第一姉

〔結婚〕加賀野加賀右衛門（美濃岩村）弘化2年～嘉永7年死別

木村三弥（佐竹藩）安政3年～

まき 天保5年10月12日～明治12年11月3日 46歳

新島の第二姉

Joseph H. Neesi ma Jan. 10th, 1875 to J. H. Seelye

- a 約瑟 1869年5月27日のノートのサインが初出である。書簡では明治5年5月3日の新島民治・木戸孝允宛の二通のみ、その後、七五三太にもどる。継続して使用されるのは明治6年3月18日～明治7年末頃まで。
- b 譲 千木良昌庵宛の一通のみ。
- c Joe ワイルド・ロウヴァー号での呼び名である。
- d Joseph A. Hardy は Joe の正しい呼名 Joseph と呼んだ。
- e 8～12 番号順に記名法が成長?している。いずれも初出である。ただし M. E. Hidden や Seelye のような親しい人々に対しては混用している。13がその例である。
- f 明治7年末帰国以後は、周知の綴りで、sは小文字、一綴となっている。

新島襄の名前の変遷

- 1 七五三太 〔通称〕明治6年1月26日付、新島民治宛書簡まで使用
- 2 敬幹 〔諱〕安政4年12月15日元服以後
- 3 約瑟 七五三太事新島約瑟 明治2（1869）年5月27日 分離
術ノート署名
新島約瑟 明治5年5月3日 木戸孝允宛書簡
- 4 譲 ^{ジョフ} ^{ジョフセフ} 新島譲 約瑟之略也 明治8年1月6日付 千木良昌
庵宛書簡
- 5 襄 新島襄 ジョフセフの略也 明治8年1月9日付 新島
民治宛書簡
- 6 Joe Capt. Taylor により名付けられる 元治1年7月11日
上海
- 7 753太 9^d July, ganti 1 year 福士成豊宛書簡
- 8 Joseph Nee Sima Oct. 14th, 1865 to Alpheus Hardy
- 9 Nee Sima Simata Feb. 23rd, 1866 to Munokite [Fukushi]
- 10 Joseph Nee-Sima Aug. 1st, 1866 to Mary E. Hidden
- 11 J. N. S. Jan. 8th, 1868 to M. E. Hidden
- 12 Joseph NeeSima Aug. 21st, 1871 to M. E. Hidden
March 10th, 1873 to Julius H. Seelye
- 13 Joseph H. Nee-Sima Oct. 13rd, 1874 to Andover Friends
Joseph H. NeeSima Oct. 29th, 1874 to Elizabeth T. Seelye
Joseph H. Nee-Sima Oct. 29th, 1874 to M. E. Hidden
- 14 J. H. N. Dec. 24th, 1874 to Mr. & Mrs. Hardy
- 15 J. H. Neesima Dec. 31st, 1874 to M. E. Hidden

新島襄の名前の変遷

新島家の人々

出典資料索引

編集後記

新島襄の年譜についてはすでに森中章光編『新島襄先生詳年譜』（昭和三十四年刊）がある。この『詳年譜』が新島研究に果たした貢献はきわめて大きく、いまなお多くの研究者がその恩恵に浴している。しかしながら同書が刊行されてすでに三十年、この間、学問の進歩は著しく、新島研究の分野においても多くの新資料の発見や研究発表が行われ、それらの成果を取り入れた新しい年譜が望まれてきた。新島襄全集編集委員会でもこの点を考慮して、第八巻の補遺・雑纂編の一部に年譜を掲載することを予定し、編纂作業の当初から年譜カードの作成を行ってきた。この作業に従ってきたのは新島資料の解説、下読み原稿の作成にあたっていた人々であり、上記の業務のかたわら年譜カードを作ってきたわけである。これらの人々は職員をのぞくと残りすべてが嘱託職員——当時、大部分が大学院の学生——であった。

年譜作成にあたって心掛けてきたことは (一)可能なかぎり新島襄の原資料にあたる (二)記録の空白を補い、新島資料の裏付け、傍証のためその他の資料を補助的に利用する (三)出典を明示する (四)過去の研究の誤りを正す (五)全体に疎密なく、バランスのとれた内容にする、というものであった。おおよそ目的は達せられたと思うが、一つ一つの資料につき適切に引用できたか、否か、気掛かりなことではある。また原資料のうちノート・教科書類、新島宛英文書簡および金銭出納帳についてはその一部しか参考にし得なかった。これらの資料を解説、整理して本年譜を充実してゆくのは、今後に残された課題であらう。

昭和五十五年に全集編纂の作業を始めて以来、カードの分量は予想外に増大し、それを整理すると優に全集の一冊

分を越えるほどになった。このため第八巻の「補遺・雜纂編」を改め、「年譜編」として刊行することとなった。ご諒承を乞う次第である。

全集編纂にあたって、言わば裏方とでもいうべき人々の氏名を表すことは異例と思うが、本巻の成り立ちを考慮して、あえて上記の嘱託職員の在職時の氏名を末尾に記載した。また全集編集委員のうち英文担当の二委員もこの作業に協力された。O・ケーリ委員はカードの作成と点検について、北垣宗治委員は年譜の第二稿を通読し、それぞれ貴重な助言をいただいた。本巻の原稿作成と編集全般の作業は松井全（職員）が行った。

新島襄全集編集協力者

中 良子

加茂正典

川本真美

松山佳美

吉藤京子

桑山典子

湊 史子

藤田恒春

古宮雅明

宇佐美英機

山田芳則

柴田 潔

本 田 妙

第八巻 整理・編集者

松井 全

新島襄全集編集委員

委員長

同志社前総長・理事長

同志社総長

委員

同志社大学名誉教授

同志社大学文学部教授

同志社大学文学部名誉教授

同志社大学前工学部教授

同志社大学名誉教授

同志社本部庶務部長

同志社社史資料室室長

上野直蔵

松山義則

高橋虔

オーテス・ケリー

北垣宗治

島尾永康

杉井六郎

大原正次

河野仁昭

新島襄全集 8 ■ 年譜編

1992年6月25日
1992年7月10日

初版第一刷印刷
初版第一刷発行

編集者——新島襄全集編集委員会

発行者——今田 達

発行所——同朋舎出版

〒600京都市下京区中堂寺鍵田町2 電 075-343-0680
振替京都5-22982

東京支社 〒101東京都千代田区神田駿河台2-11-1
電 03-3292-2021

印刷——図書印刷同朋舎
製本——大日本製本紙工

ISBN4-8104-1086-2C0321

*THE COMPLETE WORKS
OF
JOSEPH HARDY NEESIMA*

8

A chronological record

DOHOSHA
1992
KYOTO·JAPAN

分類	099.01	登録 番号	921004343
記号	N-9	所蔵 場所	学術情報センター (図書館) 同資
巻次	8		

返 却 期 日 票

返 却 期 日	返 却 期 日	返 却 期 日
		禁 帯 出

東國亞
北東
今
ハ
ニ
ハ
ラ

ア
ー
モ
ス
ト

大
學
後
援
所
ジ
ー
リ
ス
エ
リ
シ
ー

一
之
田
黒
丁
目

注
田
仙
跡

一
牛
込
魚
坂

川
田
荒
江

酒席中七言成章

一 茶室人

シーリエー

方、ア、ド、ハ、ハ

初らつたまゝ所

方、ア、ド、ハ、ハ

其後より中々

方、ア、ド、ハ、ハ

其後より中々

ライセル

一 茶室人

一 茶室人

下谷山御所茶室

同志社大学学術情報センター



9210043486